そうだ、先生になろう。

鳩胸な鴨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

水奈瀬コウに転生したので、死に物狂いで勉強して教師になりました。

衝動的に書いたので続きません。

９月６日…続かないと言ったな？あれは嘘だ。

９月７日…短編から連載に切り替えました

９月９日…タグを追加しました。

９月１３日…タグを追加しました

目次

設定集 ―――――――――――――― 1
水奈瀬コウは先生。異論は認めん。思いつきで先生やってます ―――― 17
僕は性格が悪いらしい。自覚はある。―――――――――――――― 28
悲報。僕が知らん間にチートが育ってた ―――――――――――― 43
東北きりたん（転生者）の疑問 55
先生の家を勝手に秘密基地にするんじゃありません！ ―――――――― 86
正義の秘密結社『一等星』の結成を先生の家で祝うんじゃありません！ ―― 105
こんにちは、未来人 未来人はポンコツ。これテストに出ますよ。―――――――――――――― 115
仙台でずんだは基本！ ―――――――――――――― 132
鎌倉山がダンジョンみたいになってんだけど、どゆこと？ ―――――――――――――― 152
紲星あかりって、こんな強かったっけ？ ―――――――――――――― 165
緑谷出久こそがヒーローなのである。―――――――――――――― 181
未来人が殺しに来た ―――――――――――――― 208

確実にニュースになるなコレ ―― 238
梅の精霊とクールド天然
先生の自宅でラブコメするんじゃありません！ ―――――― 250
緑谷出久、墜落（物理） ―――― 265
先生に出番がないって本当ですか？ 282
真夏に梅の花は咲きません ―― 297
きりたん「緑谷先輩の間抜けェ！」 307
性格が悪いって？それがどうした 319
万年開花に触れてはいけなかったのだ ―――――― 335
脅威が目覚める ―――――― 349
先生の語彙が死んだ ―――――― 362
緑谷「何回僕の背に地球が乗るんだよ…!!」 ―――――― 377
地球は梅色だった ―――――― 392
肝試しってお盆にやるモン？
爆豪「内臓全部飛び出るかと思ったわ!!」 ―――――― 413
公民館魔改造計画 ―――――― 427
轟くんと爆豪くんの悲鳴、聞いたことあります？ ―――――― 434
轟焦凍、ガチギレ ―――――― 448

ボンバーマン、アイドルに懐かれる
かっちゃんが子供を助ける（結果）　461
かっちゃんがお兄ちゃんと呼ばれる　471
緑谷くんと爆豪くんが一緒に帰宅してんの？ウソでしょ？　480
かっちゃん、デクのもう一つの顔を知る　491
爆豪「答え合わせの時間だ」　506
爆豪「いーから早よやれ俺が死ぬ!!」　519
爆豪「あばよ、爆豪勝己」　529
旅行は性癖暴露大会
新参者までクソガキってどういうことだ。　542
爆豪勝己がケツバットされるだけの話　556
絶対悪は滅びない　566
究極の自由人：茜ちゃん　584
事件名「かっちゃん性癖暴露事件」　598
緑谷出久の手加減練習　612
深夜のデートは蜜の味？　630
緑谷出久が雄英を目指さない理由　643

作文の朗読とかいう地獄 ―――― 659
緑谷「この国どうなってやがんだ!!」
673
僕たちの宣戦布告 ―――― 685
麗日お茶子、現実を知る ―――― 695
轟「人ってすげェな」 ―――― 715
現実はいつだって理想を砕く ―――― 730
爆豪勝己、絶対悪と対峙する ―――― 753
絶対悪対緑谷出久、開戦 ―――― 766
東北きりたんの説教、再び ―――― 779
女の子は、男の子よりもずっと強かである ―――― 794
あかり「いっぺん死ね」 ―――― 815
ヒーローの敗北 ―――― 832
先生の秘密
衝撃の事実 ―――― 845
馴れ初めからして薄い本 ―――― 859
サバイバルにクマは付き物 ―――― 876
轟「麗日、麗かじゃねーぞ麗日」麗日「だまらっしゃい!!!」 ―――― 890
先生・オールマイト「誰か助けて!!」
910
一週間の終わり ―――― 925
ガチハロウィン、開催
先生、青筋でメロンになる ―――― 934
緑谷「生首が商店街に飾られる行事っ

て……」 ―――――――――― 945
ハロウィン前日、それぞれの過ごし方 ―――――――――― 956
ハロウィンと恋バナ ―――――――――― 975
麗日「性格悪いわァアっっっっ!!!!」 997
道徳の授業の抜き打ちテスト ―――――――――― 1018
新婚旅行（結婚十年目）はエキスポに 1053
緑谷出久の手のひらはモーター式 1067
飛行機は自家用機で ―――――――――― 1083
遠距離攻撃は最強（ただし命中率は別）
緑谷出久が友人に頼みごとをすると大体忘れられる ―――――――――― 1113
ディナーは騒がしく混沌に ―――――――――― 1135
先生「出番なくて役目も取られた。キレそう」 ―――――――――― 1150
シールド博士「詰んでねコレ？」 1168
切島、恐怖する ―――――――――― 1179
戦いは数 ―――――――――― 1198
先生「君ら死ぬかもしれないのに呑気ですよね」葵「いや、お前も大概だからな？」 ―――――――――― 1212
爆豪勝己、片鱗目覚める ―――――――――― 1231

似たもの同士 ―――――
憤怒と憤怒 ―――――
意地と意地 ―――――
その生き様が、何かを救う ―――
登る朝日 ―――――
番外編
番外編：優雅？な朝食　その一 1315
外伝：クソ個性を慰めようの会 1323
正月明けの失楽園
ようこそ、東北家へ ―――――
神器と『個性特異点』 ―――――
ミタマの里の闇と小春六花の出撃 1358
暗い檻の中で ―――――
麗日お茶子は逞しさがあがった！恥じらいがゼロになった！ ―――――
邪悪なるもの ―――――
自慢のお姉ちゃん ―――――
お前の救済なんて、誰も求めない 1419
韋駄天、芸術に足を止める
春空は曇り ―――――
先生「普通なら過労死する」 ―
先生「こういう真面目なタイプがほし

い」 ―――― 1449
芸術に隠れた狂気 ―――― 1461
怒りの暴露 ―――― 1471
推理ものとか絶対に向いてないメンツ ―――― 1483
狂気の芸術 ―――― 1495
悪よ、退け。 ―――― 1510
止まる場所 ―――― 1523
バレンタインの阿鼻叫喚
小春六花、散る！ ―――― 1541
ヒーローたちのバレンタイン ―― 1553
センセーとキリシマはなかまを呼んだ！ ―――― 1564

愛と調和と宇宙人
運命的邂逅 ―――― 1576
身に覚えのない美少女 ―――― 1587
緑谷「試合に集中させてほしいんだけど」 ―――― 1597
地球の命運は、再び緑谷出久に託された ―――― 1608
フラグ回収してはいけない２４時 1620
今、瓦解する ―――― 1631
緑谷出久は救われなくていい ―― 1642
虚が語る
忘れられた島に ―――― 1653

真実を知るバケモノ ――――

真実 ――――

16741663

設定集

☆名前：水奈瀬コウ　♂
年齢…３２
職業…教師
備考…本作の主人公。とにかく性格が悪い。
転生者であり、ヒキニートだった前世の反省から、死に物狂いで勉強し、人脈を広げた。
そのため、性格の悪さに反して意外と人脈が広い。
割と多才。株投資（実態は企業全体に教育を施して株価を爆上げして株を売り捌いてる）をしており、死ぬほど贅沢できるだけの生活費を稼いでいる。
道徳の授業で生徒達に絶大な影響を与え、未来の有力者を多数育ててしまってどうしようと悩むことになる予定の人。
既婚者。

☆名前：東北きりたん　♀

年齢…１１
職業…小学生
備考…先生の生徒。転生者。前世はいろんな重圧に苦しんだ女子高生。
そのためか今世では自由に振る舞っている。というより振る舞いすぎてクソガキと化してる。クソガキ筆頭。
年上を何度か説教するが、そのどれもが最初にビンタするというもの。
寝相がめちゃくちゃ悪い。

☆名前：京町セイカ　♀
年齢…２３
職業…時空監視員→スーパーのパート
備考…ポンコツな未来人。とにかくポンコツ。最近は出番が少ないが、割と何かをやらかしている。
重要そうな情報ほど後になって吐く。
紆余曲折あって、先生の家に居候してる。

☆名前：紲星あかり　♀

年齢…戸籍上は１３
職業…生物兵器→中学生
備考…『人工個性』を用いた新生物。
未来から逃げ、紆余曲折あって緑谷家にお世話になっている。
緑谷出久にべったりな甘えん坊であり、大飯食らい。

☆名前：鳴花ヒメ　♀
年齢…戸籍上は１１
職業…梅の精霊→小学生
備考…『人工個性』の原型である『万年開花』という梅の木の頭脳部。
頭脳部とは言うが、ただ単に意識を切り離した、個別の生命体。
基本的にアホであり、テストも一桁台が当たり前と言う体たらく。
轟焦凍にべったりしてる甘えん坊。

☆名前：鳴花ミコト　♀
年齢…戸籍上は１１
職業…梅の精霊→小学生

備考…『人工個性』の原型である『万年開花』という梅の木の頭脳部。
頭脳部とはいうが、ただ単に意識を切り離した、個別の生命体。
人見知りであり、初対面の人間には必ずビビる。数少ない常識人。
轟焦凍にべったりしてる甘えん坊。

☆名前：音街ウナ　♀
年齢…11
職業…小学生　子役アイドル
備考…人気の子役アイドル。親の都合で折寺小学校に転校してきた。
テレビでは明るい女の子を演じてるが、本来は大人しい女の子。
富豪の娘だが、働かざるもの食うべからず精神でアイドルになった。
紆余曲折あって、爆豪勝己に猛烈アタックを仕掛けてる。かっちゃんの外堀は埋められつつある。

名前：如月ついな　♀
年齢…12
職業…小学生

個性…『鬼神』
備考…異能解放軍に利用されかけていた女の子。家族思い。
長年にわたる虐待生活で疲弊しきっていたが、現在は解放されて活き活きしてる。
現在は片鱗も見せてないが、本来は勝ち気な大阪のおばちゃんタイプの女の子。

名前…伊織弓鶴　♂
年齢…２５
職業…旅館の経営者
備考…子供思いのリアリスト。麗日お茶子の親戚であり、兄のような存在。
大阪で旅館を切り盛りしており、経営者としてはかなり優秀。

名前…東北イタコ　♀
年齢…１９
職業…イタコ（ガチ）
備考…実家の都合で折寺に引っ越してきた東北家の長女。割とポンコツ。
かっちゃんドストライクのドスケベボディ。

名前：東北純子　♀
年齢：１７
職業：高校生（雄英普通科）
備考：みんなお馴染みずん子さん。ずんだが絡むとアホになる。
弓道関連の才能か、手先が死ぬほど器用。

☆名前：琴葉葵　♀
年齢：３２
職業：生物工学者
備考：苦労人。部下が蒸発し、姉が世界に喧嘩を売りまくる脱獄囚というストレスでカリカリしまくってる。
姉をこんなにした元凶である先生を「バカコウ」と罵っている。
アメリカにて働いてるが、その苦労気質から彼女を知るすべての人々に同情の視線を向けられている。

☆名前：琴葉茜　♀
年齢：３２

職業…電子工学者　脱獄囚
備考…暇つぶしでタルタロスの脱獄を図り、幾度となく成功させてきた前科２００犯。
電子工学者としても優秀で、イズクメタルの原型とジェネレーターの論文を書いていた。しかし、技術不足により断念。
出久の師匠のようなポジション。
現在はアメリカでメリッサ・シールドと自由な研究ライフを送っている。

名前…鈴木つづみ　♀
年齢…２６
職業…傭兵→主婦
備考…先生の妻。十年で十を超える敵性国家を滅ぼした張本人。
戦闘から暗殺まで、なんでもござれな殺害特化型の人間。
その気になれば飛んでる航空機を、切った爪を投げるだけで墜落させることができる。
峰田…未登場…以上の性欲の権化。
三日以上お預けされると暴走する。

先生の先生にも、先生本人にもメロメロ。

☆名前：緑谷出久　♂
年齢…１３
職業…中学生　ヴィジランテ
ヴィジランテネーム…『ＳＡＶＥＲ』
備考…本作の主人公。
先生の言葉により、オールマイトから力を受け取るルートを外れに外れまくった。
頑張ろうと決めたら、脳がブッ壊れるんじゃないかってくらい頑張れる超人。
アホほど知識を詰め込んだだけあって、普通に永久機関とかを作っちゃった。
その出鱈目な科学技術で作ったスーツで、ヴィジランテをやっている。
ヴィジランテとしての名前は『ＳＡＶＥＲ』。
あかりへの返答は決まってるが、もう少し歳を食ってから言おうと決めている。

☆名前：爆豪勝己　♂
年齢…１３
職業…中学生　ヴィジランテ

個性『爆破』
備考…轟焦凍と東北きりたんのお叱りによって矯正されたクソ煮込み。
勝つことにも重きを置くが、なんのために戦うのかも心に刻んでいる綺麗な爆豪。
ただし口は悪い。
一等星の中でもいじられ役であり、事あるごとに黒歴史やらなんやらを晒される。
未来のトップヒーローを目指して、死にものぐるいで修行中の身。

☆名前：轟焦凍　♂
年齢…１３
職業…中学生　ヴィジランテ
個性『半冷半熱』
備考…優しいヒーローを目指す中学生。
プロヒーローのＮｏ．２である父親のことをまっっっっ…たく尊敬しておらず、めちゃくちゃ嫌っている。
地味な嫌がらせを毎日欠かさず続けるくらいには大嫌いである。
先生と出会ってから、潜在的な性格の悪さが目覚め、中学生組の中ではトップクラスに性格が悪い。

卑怯な手段も平気で使うくらいには。

☆名前：麗日お茶子　♀
年齢…13
職業…中学生　ヴィジランテ
個性『無重力』
備考…ヒーローを目指す女の子。天然。
現実に打ちのめされていたが、なんとか立ち上がって頑張っている。
どこか能天気な部分もあるが、目敏い部分もある発展途上な娘。
出久のことはあかりと付き合っていると思っており、早々に恋愛対象から外してる。

☆名前：メリッサ・シールド　♀
年齢…15
職業…中学生　電子工学者
備考…琴葉茜の助手であり、恋人。琴葉茜の影響でレズ趣味。
そのお膝元はあらゆる存在をバブらせ、そのおっぱいはあらゆる存在をおぎゃらせる。

ようするに、ママ属性を持ってる。

名前…八木　俊典　♂
年齢…不祥
職業…プロヒーロー
ヒーローネーム…オールマイト
個性『ワン・フォー・オール』
備考…本作の振り回され役。与えられる情報が少なすぎて、間違った答えしか導き出せない苦労人。
怪我が完治してるおかげで、更に体を鍛え始めた。彼のお眼鏡に叶う後継は現れるのだろうか…。
原作で惚れ込んだ緑谷くんは、確実に「結構です」と新聞勧誘を断るノリで拒否するくらい、オールマイト離れしてるぞ！
がんばれオールマイト！

名前…???
年齢…不祥　???

職業…ヴィラン
敵ネーム…『フィクサー』
備考…チート。チートを持っても勝てないくらいのドチート。
あらゆる技術を身につけており、ある目的のために奔放に暗躍してる。
座右の銘は「誰に対しても悪であれ」。

名前…???
　　???
年齢…不祥
職業…生物工学者　ヴィラン
敵ネーム…『ブラックボックス』
備考…フィクサーに振り回されてる人。
同一人物に近い存在らしい。人工個性の製作者でもある。

名前…ルーカス・ベル　♂
年齢…秘密だ！ＨＡＨＡＨＡＨＡ！
職業…アメリカ大統領
個性『毛根ステータス』

備考…自身の毛根の死滅具合がわかる個性という、なんとも微妙な個性で大統領にまで上り詰めた人。ツルッパゲ。
オールマイトほどではないが、犯罪率を５％も落とせるくらいには優秀。
本格的な登場はまだだが、本作屈指の自由人である琴葉茜が言うことを聞くくらいにはカリスマ性に溢れている。

名前…ローガン・サリバン　♂
年齢…４５
職業…アメリカ国防長官
備考…無個性でここまで上り詰めたやり手。
国連が設けた、各国トップ３のヒーローの集会でも、全く怖気付く事なく淡々と業務をこなしていた。

名前…マイケル・クラーク　♂
享年…３１
職業…生物工学者
個性『顕微鏡』

備考…葵ちゃんの元部下。フィクサーに散々振り回されて殺された人。殺したフィクサーですらも殺した理由をほぼ覚えてないほどの小物。登場予定はもうない。

登場ワード

『正義の秘密結社「一等星」』

備考…緑谷出久が立ち上げた秘密結社。
完全に趣味で人助けをする集団であり、報酬などは無論なし。
法を完全に無視していることを、全員がしっかりと自覚している。
先生が消費に困ったお金を消費するための集まりでもある。
本部は先生の自宅から、緑谷出久が作った浮遊大陸へと移動した。

『イズクナンバーズ』

備考…緑谷出久が作った機械の名称。現在はＮｏ．２０まで存在している。
緑谷出久のヒーロースーツも、これにカウントされている。
現在もまだまだ作り続けて、何処かで爆発が起きている。

『人工個性』

備考…ブラックボックスが作った、文字通りの存在。未来での名称は「セルフギフト」。

個性因子の作りを熟知していれば、思い通りの個性を作ることができる。

副作用として、細胞を食い潰され、結合が無くなることによって、液状化して死ぬ。

『万年開花』

備考…人工個性の原型である梅の木。それしか判明していない。

割と重要な謎を握っている。

『異能解放軍』

備考…原作でも出てきた敵集団。投獄されたので二度と出番はない。

先生曰く「個性を自由に使えるようにしろ、とアホみたいな主張するアホな集団」。

『敵性国家』

備考…読みは『ヴィランせいこっか』。通常の意味とは違い、世界に仇為す思想を持った国の総称。現時点では４０近い国家がこれにカウントされている。各国が対処して

るものの、殲滅したのは十前後が手一杯だった。尚、殲滅を成功させているのは鈴木つづみのみ。

『ノーギフト』

備考…個性を超越した無個性。

判明（異能解放軍調べ）してるだけで、琴葉茜、鈴木つづみ、フィクサーがこれに当てはまっている。

今作の緑谷出久も該当している。先生は人脈が武器なので対象外。

水奈瀬コウは先生。異論は認めん。思いつきで先生やってます

早速言おう。

僕…『水奈瀬コウ』は、所謂、『転生系主人公』というヤツらしい。

生まれ変わる前の僕は、自慢にもならないのだが、高学歴自宅警備員とフリーターの間をブラブラしてるような人間だった。

ただ一つ。ボイスロイドというソフトを使った動画が一時期バズった程度の、探せばそこらに居そうな凡人。

そんな僕が死んだ理由は、トラックに轢かれそうな子供やら猫を助けようとしたって訳じゃない。

ほんの偶然。
僕がバズった動画をエゴサして、これまた気持ち悪い顔でニヤニヤしていた所に、風で煽られた植木鉢が激突しただけだ。
であるからして、僕はこれといって徳は積んでいなかったと言える。
記憶が戻った…というより、何故か蘇ってしまったのは、幾年も前だ。
当時、僕は3歳児だった。
舌足らずな声を出すのがやっとな口で、両親へと駆けていた時だ。
たまたま転んで軽く頭をぶつけ、前世を思い出した。
我ながら、恥だらけの人生を思い出して、酷く辟易したのは、言うまでもない。
友人から引くほどに聞かされた、判を押したように決まった『チート転生主人公』なのでは、と思ったこともある。

だが、そんな期待は見事に打ち砕かれた。

僕が新たに生きることとなったのは、『個性』という特殊能力が人々に芽生え、『ヒー

ロー』と『敵』が戦う世界だった。
僕自身は、自他共に認める活字バカだったため、漫画のことはあまり明るくない。
確か、友人がよく語っていた『僕のヒーローアカデミア』という漫画の世界と酷似している。
話がそれた。
まぁ、僕も一般的な子供たちに漏れず、『個性』とやらが目覚めるのを楽しみにしていた。

結果は、お察しだ。
『無個性』と呼ばれる、障害児としての人生がスタートした。

そこからは苦労の連続だった。
前世であれほど「人種差別、良くないよ!」と語ってきた我が国の教育は、個性が世に出た瞬間に消え失せたらしい。

今や「強い個性？偉いね！弱い個性？がんばれ！無個性？どっかいけ！」の三拍子。

虐げられましたよ、ええ。

でも、この歳で大人として物事を考えられるというのは、大きなアドバンテージのようで。

不思議と僕は、挫けることなく、極めて真面目な生徒として小、中学校生活を送った。

♦？♦？♦？♦？

中学三年生の頃。

僕はふと、鏡の前に立ってみた。

前々から薄々思ってはいたが、こうやって鏡の前に立つことで、それは確信に変わる。

どうやら僕は、『水奈瀬コウ』として転生を果たしたようなのだ。

名前もそのまんま。
声だって、ボイスロイドの水奈瀬コウから機械音らしいノイズを抜いたものだ。
僕は歓喜した。そりゃもう、気持ち悪いくらいに喜んだ。
実は僕、愛用しているボイスロイドは、この水奈瀬コウだった。
琴葉姉妹も、東北姉妹も、結月ゆかりや弦巻マキも確かに好きだ。
でも、その中でも群を抜いて、水奈瀬コウというキャラクターに惹かれていた。

そんな喜びも束の間。
地獄の進路相談がやってきました。
以前は無茶な目標ばかり立てて、それをクリアしていって。
最後の最後で大きく躓いて、自宅警備員とフリーターの間を彷徨う毎日。
またそれを繰り返す気にもなれず、僕は無難な高校を受験しようとした。

…あれ？待てよ。

ふと。僕の脳裏に、ある設定が甦る。

ーーーー水奈瀬コウって、教師じゃん。

そう。

水奈瀬コウを水奈瀬コウたらしめる要素の一つとして、『教師』があった。

この世界に、ボイスロイドは存在しない。

であれば、僕が『水奈瀬コウ』としての人生を歩んでもいいはずだ。

寧ろ、歩んでみたい。

ボイスロイドを使った動画だって、僕が『こういう人生を送れたら』という願望が形

になったものなのだから。

だから、僕はこう言った。

「先生になりたいです」

目の前に座る教師は、さほど興味もなさそうにプリントに文字を走らせる。

記入要項に「理由」の欄があったのか、彼は面倒そうに「理由は?」と聞いてきた。

「僕が僕らしく在ることができるから、ですかね」

身の桁に合わない、キザな台詞で答える。

先生は「面倒くさっ」と言いたげな表情を隠そうともしなかった。

最後に、志望校は何処だと聞かれた。

だから、僕は無難にこう言った。

「近場で、それなりに偏差値ある所で」

まぁ、特に特筆することもなく、行事中だろうがなんだろうが、死に物狂いで勉学に励んだ高校、大学を経て。

僕はめでたく教師になった。

♦?♦?♦?♦?

「緑谷くん。君はどんな大人になりたいですか?」

僕が初めて受け持った生徒の一人。

緑谷出久という、僕と同じ無個性の少年に問いかける。

「僕は…ヒーローになりたいです」

彼は少し吃りながら、それでも断固として意思を曲げぬよう、真っ直ぐな瞳で言った。

「でしたら、これからのプランを、先生と考えていきましょう」

一見、無茶で無謀な夢。

それでも、僕が水奈瀬コウで在りたいと思うように。

緑谷くんにも、彼が「緑谷出久で在りたい」という要素として、「ヒーローになる」というのが根付いているのだろう。

教師としては、「叶わない夢は見るな」と言わなければならないのだろう。

でも、僕の思う水奈瀬コウならばきっと、こういうのだろう。

「嫌でしたか?」

「えっ、あの…。諦めろ、とかは…?」

「言いませんよ。君が君で在る理由が、ヒーローになることなのでしょう?であれば、僕は応援するだけです。

今のように、諦めきれないからではなく。

夢を掴むために、死に物狂いで足掻きましょう。死に物狂いで進みましょう。

足掻くことない人間に、道が拓けることなどありません。

それは、歴史が証明してます」

「っ…、う、うぁっ…」

「先生が『学歴』という武器を使ったように。

無個性というハンデを帳消しにするほどの武器を、その身さえも犠牲にして研ぎましょう。

結果を出すために、ただ前だけを見て、がむしゃらに。

君もまた、何か武器を見つけて磨きなさい」

ーーーーーーその武器で、その体で戦いましょう。君の夢を叶うことを是としない、この世界と。

僕が思い描いた水奈瀬コウのような、理想の教師になれているかはわからない。

でも、僕は。この個性社会で、教師として在り続けようと思う。

僕は性格が悪いらしい。自覚はある。

突然だが、言わせてほしい。

僕、緑谷出久は無個性だ。

全世界の内の二割。

全世界共通のいじめられっ子であり、夢を見ることでさえも奪われた、凡人以下の存在。

そのことを自覚したのは、齢４歳。

誰しもが平等ではないことを、僕は痛感した。

仲のいい友達がいた。

個性が無いだけで離れていった。

頼れる兄貴分がいた。

個性が無いだけで敵になった。
日々、叶わない夢を見続けることに押しつぶされそうになりながら、僕はひたすらに夢を追いかけていた。

小学校の一年目が終わり、二年目に向けた準備をしていたある日だった。
僕の住むマンションの隣に、新しい住人が越してきたのは。

「初めまして、隣に越してきた水奈瀬と申します。
今年から、折寺小学校の教師としてやってきました」

すらりとした、細くて長い体躯。
細い目つきを少しでも大きく見せるためのメガネ。
ニッコリと笑う口の隙間から見える、少しばかり鋭い歯。
そこから漏れ出す、美しい声色。
お母さんが引っ越しそばを受け取る後ろで、僕はその人のことを見つめていた。
「おや、初めまして。
この子は、小学生ですか？」

「ええ。折寺小の、二年生です」
「であれば、僕が担任として、彼の前に立つかも知れませんね」
その人は言うと、僕の前と目線を合わせた。
「初めまして、水奈瀬コウです。
君の通う小学校の先生をします」
「…み、緑谷、出久…です」
「緑谷くんですか。よろしく」
これが、僕が人生で最も尊敬する教師との出会いだった。
♦？♦？♦？♦？
道徳の授業は、あんまり好きじゃない。

小学校二年生ながらにして、僕は早速苦手教科という壁にブチ当たった。
特に成績には関係なさそうな、それこそ、授業のほとんどをすっぽかす生徒も出てくるつまらない教科。
それが、世間一般で言う道徳の授業。
でも、僕にとっては、「僕は差別される側なのだ」と酷く自覚させられる教科。
今日は、二年生初めての道徳の授業。
担任の先生は、水奈瀬先生。
先生は教壇に立つと、開口一番にこう言った。

「初めての道徳の授業ですが、僕は何もしません。
教室からも出ますので、自由に過ごしてください」

目が点になった。
他の授業は普通にこなしていたからこそ、僕を含めた全員の口が開いた。
生徒たちが引き止めるのを待たず、先生は本当に教室から出ていってしまった。

「自由にしろってことは、何してもいいんだよな！」

「ちょ、ちょっと…」

皆が困惑する中、一人が掃除用具入れに登って遊び始める。
「いぇーい！」
「や、やめなって…」
「むこせー菌がうつるぞー！にげろー！」
「いや、だから…！」
僕が止めようとするも、また一人、また一人と遊び始め、教室は混沌と化した。
「むこせー菌はあっちいけー！」
「いっ…!?」

そんな中、始まった遊び。
個性を使って、僕に攻撃を当てるゲーム。
無個性という、反撃される要素が皆無な的への、容赦ない攻撃。
結局、反抗する力もない僕は、こっ酷くボコボコにされた。

トドメに「チクったらころすぞ！」と言われ、授業の終わりが訪れる。
それと共に、今の今まで教室から出ていた先生が戻ってきた。

「…やはり、予想通りと言うべきですかね」

ぞくり。
入ってきた先生の瞳は、殺されるんじゃないかと思うほどに、怒りで満ちていた。
だと言うのに、いつものような口調で、ただ冷静に告げる。

「これからの道徳は…この教科書を使いません」

先生は言うと、教科書を放り捨てた。
「代わりに」と付け足すと、どこから引っ張り出してきたのか、旧式のテレビを教壇に置き、そこにパソコンを繋げた。

「毎時間、この映像を見てもらいます」

そこに映ったのは、先ほどの光景。
僕に爆破が直撃する傍ら、その姿を嘲笑う皆の姿が、そこにはあった。
『むこせー菌はおれがたおしたぞー！』
『すっげー！』
『かっけー！』
皆が気まずそうに目を逸らす。
その姿を確認した先生は、ばんっ、と机を叩いた。
「目を逸らすな」
静かな声。
背筋さえも凍りそうな冷たい声に、何人かが涙ぐむ声が聞こえた。
「自分のことをよく見ましょう。それが、今年一年の道徳です」
その日、先生の好感度は地に落ちた。

♦？♦？♦？♦？

うん。やりすぎた。

人の振り見て我が振りなおせってことわざがあるけど、録画でもイケるんだな。

そんなことを思いながら、僕は始末書を書いていた。

別に、生活に困窮するほどの減給を食らったわけではないけれど。

それでも、僕の道徳の授業は、モンスターペアレンツやら、モンスターティーチャーには理解不能だったらしい。

聞くに耐えない罵詈雑言を聞かされ、僕は始末書を書かされてる。

そういう甘い教育もどきが、ああいう差別を平気でする子供を量産してることに気づかないのだろうか。

個人の考えは確かに尊重されなくてはならないが、それで他人を虐げるのを是非とするのは違うだろう。

そういう理想論を正論のように振りかざしても、その子のためにはならないはずだ。

なんて反論できたら、どれだけ楽だろう。

でも、僕はあくまで雇われ。

もし下手に反論しようものなら、モンスターどもの逆鱗に触れて教員免許剥奪…なんてこともあり得る。

だからと言って、この教育を変える気は、さらさらないが。

理想を実現するというのは、いつだって現実との戦いだ。

そんな粋った思考にハマる自分に酔っていると、僕の住むマンションの玄関を、こんこん、と誰かがノックした。

「はい？」

がちゃり、とドアを開ける。

が。そこに人影はない。

一体なんだと思って辺りを見渡すと、「あの！」と下から声が聞こえた。

僕が目線を下に向けると、隣に住む緑谷くんが居た。

…うむ。私服がダサい。

イカツイおっさん…確か、オールマイトだったか…がプリントされたシャツを着てる。

街を歩くと5人に一人はイカツイおっさんシャツを着ていた。

僕の知らないうちに、世界は美的センスまで変わってしまったのだろうか。

「おや、緑谷くん。

ヒーローになるためのプラン、考えに来ましたか?」

「いや、そっちじゃなくて…。

その、今日の、道徳の授業について…」

へぇ。他の子ならまだしも、特に問題のないこの子が、あの授業について、ねぇ。

「入ってもいいよ」と許可を出し、彼を僕の家にあげる。

参考書やら学術誌くらいしか並んでいない、子供にとっては娯楽のカケラもない部屋に案内した。

「これっ、大学教授とプロヒーローの二足の草鞋、『Ｍｒ．インテリジェンス』が出した

唯一の論文集!!
今や超プレミア価格で、値段高騰しまくりの品!!先生、これどうやって…」

興奮気味に一冊の参考書を手に取って、僕に迫る緑谷くん。
彼、ヒーローが絡むと途端にオタク全開になるな。
小学生ながらにして、オタクとして完成されてる。
なぜ分かるって?…察して欲しい。

「出身大学の教授だったので、参考程度に一冊譲り受けました。
…前々から思ってましたけど、小学二年生にしては成熟してますね、君」
「た、たくさん、本を読みましたから…」

たくさん本を読んでそうなるもんなの?
僕、たくさん本を読んでても、そこらのクソガキと同じだったよ?
もしかしたら、本人の素養もあるのかもしれない。
無個性という劣悪環境にブチ込まれて、真っ先に覚える世渡りスキルは「謙る」って、論文でも書かれてたからなぁ。

…書いたの僕だけど。

勘違いしないで欲しい。

ちゃんと参考文献も参考資料も、データだって、被験者の許可をとってきちんと書いた。

マッドなことはしてない。してたら、教壇に立ってない。

え？評価されたのかって？むしろ学会から総バッシング受けましたけど？

ちょっと盛り上がり過ぎた。

ここいらで閑話休題とさせていただこう。

兎にも角にも、教師として、僕はこの子の疑問に応えなくてはならない。

「では、本題に入りましょうか。あの授業になにか疑問でも？」

「…その、どうして、あんなことしたのかなって…」

ただの思いつきなんですが。

そんなこと言えば、ただでさえ低い僕の好感度が埋もれてしまう。

ここはもっともらしい理由を述べよう。

僕を基準として言えばいいのかわからないけど、うまく誤魔化すのは文系の得意分野だ。

「自分がどんな人間か。それを知ってもらうためです」

「え？」

「『自由にしていい』は、魔法の言葉。

子供の本質を、簡単に見極めるために使うものです。

その醜い本質を幼い頃から見続けてこそ、人は大きく成長できる」

うむ。我ながら苦しい言い訳が出てきた。

正月から一ヶ月経った餅並みに硬い頭持ちの教育委員会のクソジジイどもなら、これで納得してくれるんだけど。

そんな心配も杞憂に終わったようで、緑谷くんは、子供が浮かべることのできない表情を作った。

「先生は、優しいとか言われませんよね。

むしろ、性格が悪いって言われてそう」

「君、この1週間で僕に遠慮しなくなりましたね」

うっわ、教え子に性格悪いって言われた。

事実だからなんにも言えねぇ。

「そりゃあ君の夢だって、教師という立場なら『絶対に殉職するからやめろ』って言う人が殆どでしょう。

僕が君に言ったことは、第三者から見れば、『せいぜい頑張って殉職しろ』ってのと同義かもしれません」

僕が言うと、緑谷くんは「そんなことありません！」と声を張り上げた。

「先生は、優しくないです。

でも、生徒に対して、すごく真剣な人です！」

「…別に、そんなことありませんよ。
僕は理想の教師であろうとしてる、性格の悪い凡人です」
生徒に対して真剣という評価は、僕には過ぎたものだ。
僕は僕の思う水奈瀬コウを、全力で演じてるに過ぎない。
「さて。先生は今、始末書とかいう反省文に、それっぽく長ったらしい大嘘書いてるんで、君はプランの続きを考えなさい。
それが出来たら、先生に提出。添削して後日返却します」
「大嘘って…。先生がそんなことしていいんですか？」
「いいんですよ。嘘は人間社会を生き抜くための、最大の武器です。
誰しもに与えられたソレを振るわないほうが愚かです」
プロヒーローとかはこぞってバカみたいに「嘘はダメ」と言いますが、と付け足した。
ソレを聞いた緑谷くんの顔は、少しばかりキラキラしてた。

悲報。僕が知らん間にチートが育ってた

僕が折寺小に赴任してきてから、早くも四年が経った。
僕が担当したクラスは、こぞって僕のことを酷く嫌っていたが、少なくとも、嫌がらせとかは無かった。
あのビデオ、効果あったんだな。
そんな、順風満帆…とは言い難くも、極々平穏な教師人生を送っていた僕に、少しばかり悩みができた。

「どうですか先生！
僕のヒーロースーツ第一号、『イズク1号』！
どんな個性にも対応できるオールマイティな装備に、すぐに現場に駆けつけることができる加速装置！
更には隕石をモロにくらってもビクともしない、超特殊合金『イズクメタル』使用のアーマーフレーム!!
極め付けに僕特製永久機関、『イズクジェネレーター』が無限にエネルギーを供給し続け

ます!!
コレで僕も最高のヒーローを目指せます!!」

「とりあえず没収ね、ソレ」

「なんでェ!?」

緑谷くんが、向こう見ず過ぎた。

遊び半分で渡した、僕と仲の良い同級生の科学論文。
片や柔軟性と硬度を兼ね備えた金属を人工的に生み出すという、夢物語。
片や小型でありながら、一文明を支えることのできるであろう永久機関。
僕にとってはちんぷんかんぷんだったそれを、この子は脳が燃え尽きるんじゃないかってほど考察して、三年。
トライアンドエラーを繰り返して、兵器として実現してしまった。

同級生に言うと、「ま？」と目を点にしていた。
証拠として、緑谷くんの作ったソレ…通称『イズクメタル』と『イズクジェネレーター』を見せた。
それを目の当たりにして、彼女は「ウチの大学、アメリカ！飛び級歓迎！小卒にして連れてきちゃって！」と興奮してた。
丁重にお断りしといたけど。
「…で。このパワードスーツ？どうするんです？
こんなモン世に出たら、大パニックですよ？」
現在、僕は彼を尋問していた。
文系の僕でも、流石にわかる。

目の前にあるこのパワードスーツは、オーバーテクノロジーの塊だ。

前世のＵＬＴＲＡＭＡＮという漫画…僕は小説版を読んだ程度だが…よりもサイバーファンタジーしてる。
こんなモンが世に出たらどうなるか。

怖くて想像もしたくない。

「せめてもう二、三段階グレードダウンしましょう？
誤魔化し効きますし…」
「だいぶ削ったんですよ、これでも」
「これで!?ウソでしょ君!?」

「先生の大声ってレアですね」

「大声にもなりますよ!!」

本当、どうしてこうなった。

体を鍛えても、無個性の普通の人間では、どうしても普通の人間を超えられない。
そのことを緑谷くんが痛感したのは、彼が鍛え始めて一年目だった。
「だったら、コスチュームとかサポートアイテムを充実させれば！」という結論に彼一人で行き着いた時は、生徒の成長に涙をこぼしたものだ。

そこからおかしくなり始めた。

いつのまにか、僕の頭のおかしい理系の知り合いと、片っ端から仲良くなり。
ガッツリ悪影響受けた彼は、開花して欲しくない才能を開花させ。
極め付けには、今回のこのパワードスーツ。
理系ども。お前ら僕の生徒になんちゅう悪影響もたらしとんじゃ。

「せめてグレードダウン。イズクメタルとジェネレーターは取っ替えなさい」
「いや、無理です。
イズクメタルは形状記憶合金でして、エネルギーさえあれば自己修復するんです。
イズクジェネレーターの供給速度のせいで、解体してる途中に元に戻っちゃいます」

チートじゃねーかァ!!

悲報。僕がチート主人公を育てる役だった。
意図してない。意図してないよ。
周りが勝手に知識植え付けてただけだよ。
なんだよ、このパワードスーツ！
アイアンマンでもここまでいかねーよ!!
…失敬。キャラがブレた。
兎にも角にも、彼は本気でこのパワードスーツを使ってヒーローになろうとしてるらしい。
取り敢えず、機能だけでも聞いておこう。

「で、機能は？」
「僕の脳内計算速度を遥かに超える人工知能、『ＭＥＳＳＩＡＨ』が搭載されてます！」
「救世主ですか。他ネーミングに割いて欲しいネーミングセンスですね」
「ＭＥＳＳＩＡＨに『僕の考えた名前は嫌だ』って言われました！」
「ＡＩが自我持つほどダサかったのか…」

この子の幼馴染みの爆豪くんと言い、この周辺はネーミングセンスのおかしい人間ばかりなのか？
まぁ、この人工知能程度ならまだ問題ない。

「他は？」
「アーマーには、至る所に『イズクサポーター』っていうナノマシンが詰まってます！この計８０億のナノマシンが集合することによって、どんな災害時でも人を助け出せます！」
「ふむ。それはいいですね」

おお。この子の本質はやっぱり変わってなかった。
そんな戦いにも…というより、戦闘に特化してるようにしか捉えることが出来ないだろう機能を、救助用に回すとは。

…ん？８０億？

どう考えてもそんな量入りそうに無いんだけど。
もしかしてだけど、四次元ポケット再現しちゃったの？

「他は？」
「『エレメンタルシステム』です！
この『エレメンタルカセット』をイズクジェネレーターに装填することによって、アーマーを変化させるシステムです！」
「…他には？」
「個性遮断プログラム！
個性による干渉を阻止する超音波と電磁波を同時に発してます！」

「オーバーテクノロジーにも程があるだろォ!!!」

結局。僕はこのアーマーを没収できなかった。
一応、弁明しておこう。
アレ、僕が見てる間はこれっぽっちも動かなかったけど、自立してんだもん。
緑谷くんと一緒に帰ったんだもん。後ろ姿見たもん。

♦？♦？♦？♦？

あれから数日。

僕、水奈瀬コウの悩みのタネは、卒業した教え子となった。

名前を緑谷出久。
普段はオドオドしてて、自己表現が下手で、卑屈そうな印象を受ける少年。
だが、そんな小動物の皮を一枚めくれば、狂人が居る。
卒業式のあの日、僕にアーマーを見せてから数日経つか経たないかくらいの日だった。
たまたま、ふとつけたテレビに、先日見たアーマーが映っていた。
『な、なんということでしょう！
謎の鎧が事件現場飛び込んだかと思いきや、一瞬で人質を助け出してしまいました！』
そんな、どっかの安っぽい小説の一幕を見せられているかのようなナレーション。
それをかき消すように、僕は飲んでた水を吹き出した。
ナノマシンで人々を助け出した彼…緑谷くんが、小学生時代に研鑽を積んだ中国拳法の構えを取る。

そこに現れたのは、これまた典型的な敵だった。
何やら罵詈雑言を吐き捨てる敵に対し、緑谷くんはアーマーを隠すように巻いていた外套を脱ぎ捨てた。

『我の拳が悪を砕く!!』

あっ、あの構え。
僕、漫画で読んだことあるなぁ。動画でも見たなぁ。
そんなことを考えながら、アーマー越しに敵の腹に拳を撃つ緑谷くんを、遠い目で見ていた。
『ひっさぁぁぁぁぁぁつっ!!
ジャスティィィィイスッ!!
ブゥゥロオオオオオオオオオオオッッッ!!!!
『がばぁっ!?!?』

形意拳って、あんな漫画みたいな威力ないんだけどなぁ…。

あっ、この世界、元は漫画か。

どこか遠い思考でそんなことを考えながら、僕は外科病院での診察を予約した。

東北きりたん（転生者）の疑問

「先生。最近噂のヴィジランテ、知ってます？」

何言ってんだこのクソガキ。

緑谷出久が卒業して早二ヶ月。

五年生の担任を任された僕は、目の前の同類に、軽くデコピンをかました。

同類…というのは、まぁ、勘の良い人ならば分かってるだろう。

僕の目の前に座る彼女は、その歳では着ることも難しそうな着物に身を包み。

どこで売ってるかも分からない包丁のアクセサリーを、角のように飾った少女。

そう。東北きりたんが、そこにいた。

一応、彼女について説明しておこう。
このクソガキ、あろうことか前世で僕と知り合いだった。
知り合い…と言っても、オフ会で数回顔を合わせた程度で、彼女のことをよく知っていたかと言えば、迷わずノーと答える。

踏み込んで語っておくと、彼女にも個性は無かった。
特段、それに興味も無かったらしいが。
僕の道徳の授業では、クラス中が騒ぎ、自分を虐める中で無表情だった。
前世も同じようだったらしく、もはや何も感じてないらしい。

闇深っ。
どっかの溺れ死にそうな子供が「ふっかい!!」と叫びそうだ。

おっと、話が盛大に逸れた。
彼女の人生なんて、僕の語る物語では不要なものだ。
何故か僕の家に入り浸り、菓子を貪り食うクソガキに、僕はカップに入れたアイス

ティーを渡す。

「いいから早く宿題しなさい。
君が提出遅れると、僕が困るんですよ」
「えぇー…。読書感想文とか、前世で散々やりましたよ。
金賞だって取ったし、今世はもう少しのんべんだらりと生きたいんですぅー」
「ただでさえ、無個性は生きにくいんです。
少しは生きやすくしようと努力した方が、幾分かマシになりますよ」

僕が言うと、そのクソガキは「ちぇーっ」と言って、原稿用紙に向き直った。

「先生って、夢も希望も見せてくれる代わりに、現実も直視させますよね」
「そう言う仕事ですよ、先生というのは」

僕が言うと、しばらく部屋に沈黙が漂う。
ちびちびとアイスティーを飲んでいた彼女が、悪戯っぽく笑った。

「…人生使った水奈瀬コウロールプレイ、楽しいですか？」
「人生使った東北きりたんロールプレイ、楽しいでしょう？」
「…まぁ」

ああ。やっぱり。
彼女は僕と同類だ。

僕が『水奈瀬コウ』であることに執着するように、彼女もまた『東北きりたん』であることに執着している。
となれば、今現在の彼女は、今が最高に楽しい時だろう。
小学五年生という、一度きりの一年。
『東北きりたん』を『東北きりたん』たらしめる要素を実現できる、唯一の1年間。
僕のように、年齢不詳のキャラクターでは味わえない高揚感。
彼女はその喜びを抑えきれず、僕にぶちまけるのだ。

「自分は今、こんなに楽しいぞ」と。

大好きなキャラクターが歩む人生を、なんの特徴も持たなかった凡人の僕たちが歩む。
楽しくないわけがない。

「とまぁ、おしゃべりはそこまでにして。
先生。最近噂のヴィジランテ、知ってるんですか？」

コイツ、意地でも宿題しない気だ。
そっちが本題のように語るな。
僕に「宿題分からないんで、見てください」って言ってきたのはなんだったんだ。

「いいから宿題しなさい。
そっちが本題のように語らない」
「気になって宿題出来ませーん」
「このクソガキ…」
「クソガキでーす」

ああ言えばこう言うの究極系だな。

全部知ってます、なんて言えるわけもなく。

僕は生徒に何度目かも分からない嘘をつくことにする。

「少なくとも、ニュースで見る程度しか知りませんよ。

ヴィジランテ、『ＳＡＶＥＲ』…一部地域で主への侮辱にあたるとして、救世主としてのスペルは使われていない。

世間の評価は『調子に乗ったヴィジランテ』。

個性、年齢、性別など、あらゆる情報が欠落した謎の存在。

決め台詞は『我の拳が悪を砕く』」

「…それだけ？」

「知ってるのはそれだけです」

あの決め台詞はどうかと思ったが、世間はノータッチだった。

アメリカだろうがアフリカだろうが、何処だろうと颯爽と空から現れ、人を助けて悪を挫くヴィジランテ。

組まれた特集には、『オールマイトに匹敵するパワー!?』と科学研究までされてた。
パワードスーツって凄い。

それでもやってることは違法行為だから、評価は最低なのだが。

「先生って、時事問題とか結構出す癖して、あんまり突っ込んだ内容教えませんよね。
あのヴィジランテについても、ご高説垂れると思ったんですけど」
「そういうのは大学教員とかの専門家の役目です。履いて捨てるほどいる小学校教員がやるモンじゃないですよ」

小学校教員になるのは、別に難しいことではない。
寧ろ、かなり敷居は低い方だ。
その代わりに、高校、中学の教員と比べ、死ぬほど忙しい。
そのくせして、子供たちが最も多感な時期に付き添わなければならない。
彼らの性格を作るのは、僕たちと言っても過言ではないのだ。
僕のひねくれた世間への反抗を、子供たちに教えたらどうなるだろうか。
少なくとも、マシな方向には向かわないだろう。

だから僕は、最低限を伝えるだけに留めてる。

「…先生って、本当の意味で自分の考えを押し付けませんよね。珍しいタイプです」

「押し付けたら、それが当たり前として育ちますから。

言われたことをやるだけの、自主性のない子供を育てるわけにはいきません」

「ありすぎるのも問題ですが」と付け足し、僕はアイスティーを飲み干した、そんな時だった。

「先生！新しい装備出来ました！」

最悪なタイミングで悩みのタネが来たのは。

♦？♦？♦？♦？

私、東北きりたんは転生者だ。

前世は冴えない女子高生。

特に可愛い見た目をしていたわけでもなく、特に優れた部分があったわけでもない凡人。

学校に良くいる、いじめられっ子が私だった。

死んだ理由だって、パッとしない。

何もないところで転んだ挙句、荷物の重さで坂道転がってって、そこを通りかかった電車によってフライアウェイ。

私はそんな不運の重なりで死んだ。

「タコ姉様！この子今、私のおてて、握ってくれました！」

「あらあら、先越されちゃいましたわね」

死から目覚めると、目の前には、フィクションのキャラクターであるはずの『東北ずん子』の顔があった。

オタク趣味だった私が『東北きりたん』として転生したことに気付くのに、そう時間

はかからなかった。
蝶よ花よと育てられ、3歳を迎えた。
そんなある日、テレビを見ている内に、新たな真実に気づいた。

ここ、ヒロアカの世界じゃん。

ずん子…いや、ずん姉様もタコ姉様も無個性だから知らなかったけど、どうやら私はヒロアカの世界に転生したっぽい。
あの画風が違うイカツイおっさんは、間違いなくオールマイトだった。
やった！チート無双だ！…なんて思った時期もあった。
まぁ、ずん姉様とタコ姉様が無個性の時点で薄々察してはいた。
ええそうですよ無個性ですよちくしょうめ。

タコ姉様は個性として霊能力を使ってるようだけど、「他の人にも出来る、なんてことない技術の一つですわ」と言われた。

どうやら、霊能力は個性とは関係ないらしい。
ならそれを鍛えればいいかな、なんて思ったけど、私のクソ雑魚メンタルでは悪霊に飲み込まれてお終いだとタコ姉様に止められた。
前世のクソ雑魚なめくじなメンタルが、ここに来て足を引っ張った。

結局、私はこの世界でも、ヒーローにも敵にもなれない凡人として暮らすことになった。

前世と変わらず、いじめられる小学校生活を送ること五年。
東北きりたんとして正しい年齢に至ったその年、私に驚くべき出会いがあった。

「今年一年、君たちの担任を務める水奈瀬コウです。よろしく」

猫背気味で、目つきが悪くて、いかにも不健康そうな『水奈瀬コウ』が、そこに居た。

「1時間目は道徳ですが、私は何もしません。
教室からも出ていくので、皆さんご自由に」

水奈瀬コウという先生は、一見普通のようで居て、普通の先生ではなかった。
国語などの授業は、すごく真面目に教えてくれる。
だけど、道徳の授業になった途端、彼はそう言って教室から出て行ってしまった。

「自由にしていいってことは…遊んでいいってことだな！」

子供特有の超理論を振りかざし、暴れ始める子供たち。
私にはあまり関係ないことだが、何にせよ、この状況は他の教室に迷惑だ。
私は追いかけっこをして遊ぶ同級生たちに、声を張り上げる。

「いや、違うでしょ。自習してなさいって意味なんじゃ…」
「むこせーは黙ってろ！」
「あでっ」

個性で飛ばされた消しゴムが、私のおでこに直撃した。
まぁ、そこからは割愛する。

いじめられっ子が虐められてる姿なんて、見てもつまらないだろうから。
何が言いたいのかと言うと、私はこれでもかとボッコボコにされた。
ご丁寧に、服の下にアザができるように。
他の子たちが嘲笑う最中、隣の子が「ちくったら分かってるな?」と凄んできた。
別に、言いつける気なんてさらさらないのだが。

その時だった。

「授業は終わりです」

がらっ。
扉が開くと共に、旧式のモニターとパソコンを抱えた先生が現れる。
先生はその二つを教壇に置くと、道徳の教科書を取り出した。

「道徳の授業で、この教科書は使いません」

先生は、それをこれ見よがしに投げ捨てた。

「代わりに」と付け足すと、パソコンをモニターに繋げ、ある映像を流す。

『ういらん、むこせーだ！』
『やっつけろー！』
『や、やめっ…うあっ!?』

それは、先ほどの光景だった。
生徒たちの目が点になる中で、先生は淡々と告げる。

「…なにか感想は？鞭崎くん」
「…そ、そのっ、ご、ごめっ…」
「謝罪じゃありません。感想を聞いてるんです」

先生の気迫に押され、隣に座る子供が泣き始める。
が。先生はそれを許さぬように、教壇をばんっ、と鳴らした。

「泣いてもダメですよ。感想は？」

「……」
「…言えませんか。では、鯨田さんは？」
「あっ、あのっ、ごめっ…」
「聞いてませんでしたか？感想を聞いてるんです」

そこから先は、同じ光景が続いた。
私を除く全員が、先生の質問に俯いて、泣き出す。

「では、最後の一人。東北さん。
感想を述べてください」

一人だけ残った私を、先生が指名する。
感想。別に、あの映像に対して、大したことは思わなかった。
私は口を開き、はっきりとそれを言葉にする。

「私は…当たり前の光景だと思いました。
無個性っていう抵抗する力のない的に、自分の武器を当てる的当てゲーム。

ニュースとかでも、よく見るものです。
私からすれば、何とも思いませんでした」

私が言うと、先生は首を傾げた。

「それだけですか？」
「…それだけです」
私が言うと、先生は教壇を離れ、私の席の前に立つ。
首が痛くなるほどに見上げなければ見えない位置に、先生の顔が来る。
先生はしゃがんで、私と目線を合わせた。

「もっと正直に述べてもらっても結構ですよ。
『痛かった』、『辛かった』、『許さない』、『お前らも同じ目に遭えばいい』、『お前らなんか死んじまえ』、何でも結構です」

おおよそ、教師のものとは思えない言葉。
皆が泣きべそかきながら首を傾げる中、先生は私の頭を撫でた。

「先生はそれを否定しません。さぁ、思いっきりぶちまけなさい。
無個性という、生まれながらにしてのいじめられっ子の心の叫びを。
例え誰に怒られようと、誰に蔑まれようと、先生はそれを認めましょう」

ぼろっ。

私の目から、熱い何かが溢れだす。
じんじんと、今になって傷痕が疼き始めた。
痛い。辛い。苦しい。悲しい。悔しい。許さない。絶対に許さない。
そんな暗い感情が、心の底から湧き上がってくる。

「…個性で炎を当てられた。
すごく熱かった。病院で診てもらったら、火傷はもう消えないって言われた」

びくり。誰かの肩が震える。

「個性で殴られた。
すごく痛くて、病院に行ったら『骨にひびがはいってますね。もう少しズレてたら、半身不随…二度と歩けなくなってたところですよ』って言われた」

びくり。
また数人、肩が震える。

「個性で溺れさせられた。
肺に水が入って、誤嚥性肺炎になった。
もう少しで死ぬとこだったって言われた」

また数人の肩が一気に震えた。
気づけば私は机の上に立ち、大声を上げていた。
「許すもんか…。
絶対に許すもんか!!

私が普段、死ぬほど苦しい思いして学校来てんのに、ヘラヘラヘラヘラ笑ってんじゃねーよ!!

そこのお前も、そこのお前も、そこのお前も、そこのお前も、そこのお前も!!!

お前らのせいで、私は死ぬとこだった!!!

私はいつ死んでもおかしくなかった!!!!

なのに皆、無個性無個性無個性無個性ってヘラヘラ笑って、誰も助けてなんかくれなかった!!!!

なにが『ヒーローになる』だ!!!!!

お前らなんか、敵以下の殺人犯になって刑務所ぶち込まれちまえばいいんだぁああっ

!!!!!!
」

全部ぶちまけた。

我慢してたもの、全部。

爽快感なんてこれっぽっちもない、ぐちゃぐちゃになった感覚が胸に巣食う。

「うぁぁああ……っ!!」

その感覚を吐き出すように、私はぼろぼろ泣いた。

「よく言ってくれました」

先生は私の頭を撫でると、教壇へと戻った。

「聞きましたか？コレが、無個性たちの本音です。

そのことを忘れないためにも、今年一年の道徳は、この映像を見続けましょう」

生徒たちが、絶望を顔に浮かべた。

「泣けばまた最初から見せます。目を逸らせば、教室中にモニターを用意します。目を覆ったり瞑ったりしたら、直視するまで授業を終わりません。親御さんに言っても結構ですよ。教育委員会からの許可はしっかり得てますので、親からのクレームなど痛くも痒くもない」

先生は言うと、「以上です。次の時間の用意をしてください」と教室を出て行った。

その日、先生はクラス中から嫌われた。

♦？♦？♦？♦？

そんな先生との関係が始まったのは、ゴールデンウィークの時。

ずん姉様が部活、タコ姉様がお仕事で暇を持て余し、近場のチェーン店に来た時だった。

「おや、東北さん。君も間食ですか？」
「あっ…」

仕事をしながら、間食を楽しんでいる先生を見つけたのは。
机の上には、デニッシュパンの上に飾り付けられたソフトクリームとさくらんぼ。
更にはそこにシロップをかけた、犯罪的な代物。
有名チェーン店名物のそれを見た途端、私のお腹が、くぅ、と鳴った。
財布を確認するも、入ってたのは２００円。
コーヒーくらいしか頼めない。

「…相席にしましょうか。
すみません、この子、僕の連れなんですが」
「はい。かしこまりました」

私の表情で全てを察したのだろう。
いつものような無表情で先生が言うと、空いた向かい側の席に私を招く。
私は、とてとてと小さな歩幅でその席へと近づき、少しばかり高い椅子に座った。

「これ。頼んでみたはいいものの、あまり甘いものが得意ではないことを忘れてて。
残り、食べてくれますか?」

先生は言うと、私にデザートを差し出した。
乙女心的には控えたいのだけれど、このうるさい小腹を鎮めるにはちょうど良さそうな品。
私は一瞬で迷いを切り捨て、ソフトクリームとデニッシュパンを頬張った。

「…先生。コーヒーが欲しいです」
「奢りましょう。どれですか?」
「あっ、スペシャルブレンドのブラックで。
これだけ甘いと、甘くする気になれません」

ことん。
数分後、頼まれたスペシャルブレンドが、空の皿と引き換えに置かれる。
私はその苦味で、口の中に残る甘みを洗い流した。

「……」
「……」

しばらくの間、沈黙が続く。
それを破ったのは、先生だった。

「東北さん。ボイスロイドは、知ってますか？」

ボイスロイド。

知らないわけがない。
私たちが今使っている体が、そのボイスロイドのものなのだから。
一瞬だけ頭が理解を放棄するも、すぐに私は頷いた。

「…ああ、僕と同類でしたか。
どうも、初めまして。ニートとフリーターの間をぶらぶらしてた、自称動画クリエイ

ターの前世持ちです」
「…それ、言っちゃうんですね。
…私は、なんの特徴もない女子高生でした」

互いに軽く自己紹介を済ませる。
暫く話し合うと、私と彼は知り合いだと言うことに気がついた。
私と彼はなんの偶然か、同じサークルのファンクラブに属していて、そのオフ会で何度か顔を合わせてたという。
…そう言えば居たなぁ。如何にも「冴えない男」ってタイプの人。
漫画のように実はイケメンってこともない、本当の凡人。
私と彼は、今世でもそんな凡人として生まれてしまったようだった。

「僕の場合は、生まれ変わったことに気付いて真っ先に、『教師になること』を目標にしましたね。
小、中、高の教員免許を取得してます」
「どうやったんですか?」
「一つ目の大学で馬鹿みたいに単位を取得して卒業後、二つ目の大学に通いました。

受験勉強やらレポートやらは地獄でしたが」

エグっ。

先生はやる気がなさそうに見えて、凄くアグレッシブに物事に取り組んでいるらしい。

持ってる教員免許は、小学校のものを除けば、国語関連のものなのだとか。

私は国語が大の苦手だったので、別世界の生物のように思えた。

「…先生は、ヒロアカの世界をどうこうしよう…なんて考えてませんよね？」

なんとなく、そう聞いてみた。

先生は誰かの宿題にペンを走らせながら、こくり、と頷いた。

「ええ。考えてません。というより、世界をどうこうする力なんて、僕にはありません。せいぜい、道徳教育のなってない子供を泣かすくらいですよ」

先生はそう自嘲すると、カフェオレを一口啜った。

「…先生。また、ちょくちょく会いに来てもいいですか？」

この先生は、私の描く『理想の教師』には程遠い。
でも、私はこの先生のことは、嫌いではなかった。
皆はこぞって嫌っているけれど、先生はそれでも、先生であろうとするんだろう。
私はまだ、先生のことを知らない。
だから、私はこの先生のことを、もっと知りたかった。

「構いませんよ。変な噂が流れそうですが」

先生の言葉に、私は笑みを返した。

「大丈夫です。先生だったら、なんとかするんでしょう？」

♦？♦？♦？♦？

そして、話は現在に戻る。

絶賛、すんごく遅れてゴールデンウィークの宿題をやっている途中。

先生と他愛ない会話を交わしていた時、それは突然訪れた。

「先生！見てください！

名付けて『イズク２号』!!

イズク１号と合体して、さらなるパワーとスピードを出せる、バイク型ガジェットです!!

エンジンには僕特性の『イズクエンジン』が搭載されていて、瞬間最高速度は、なんと驚きのマッハ５０!!

空も飛べるから、交通事故もなく!!

空を飛んでる間は、交通ルールなんて適用されません!!

更には粒子化させて、この小型デバイス、『イズクテレフォン』に収納できます!!

駐輪場を占拠することない、夢のマシンですよ!!!」

「うん。没収」

「なんでェ!?」

原作主人公をさらに残念にしたようなのが、そこに居た。

何気に凄いこと口走ってなかったか、この人、と思う傍ら、アングリと口を開けて驚く彼の体を見る。

原作ではお世辞にも、よく鍛えられてるとは言えなかった体だが、バランスよく鍛えられてるのが素人目でもわかる。

「…あれっ？先生、その子は？」

ふと、私は彼と目があった。

緑谷出久。

前世で「自己犠牲の擬人化」として認知していた、私が憧れていた主人公。

先生は私の肩に手を置いて、彼の前に私を出した。

「君のせいで宿題を滞納したクソガキです」

「えっ？なんで僕？」

「君のこと気になって仕方がないそうですよ、ヴィジランテ『ＳＡＶＥＲ』」

……は？

先生の部屋に、私の絶叫が響いた。

先生の家を勝手に秘密基地にするんじゃありません！

僕、緑谷出久には尊敬する恩師がいる。
名前を水奈瀬コウ。
僕が中学生になっても、小学校の教員である彼との関係は続いていた。

「先生！今、帰りですか？」
「おや、緑谷くん。そういう君も、随分と汗だくですね」
「はい！今日も『活動』したんで！」
僕が笑顔でそういうと、先生もぎこちない笑顔を返した。
「…僕は黙認したわけじゃないですよ。
黙ってるだけです。
できることなら、ルールの中で戦って欲しいのですが」
「やめませんよ、僕は！

そのルールで救えない命が沢山あるので！」

そう。

何を隠そう、僕は『ヴィジランテ』と呼ばれるイリーガルなヒーロー…つまりは、許可もないのにヒーロー活動をしている人間だ。

♦？♦？♦？♦？

少し、自分語りをさせて欲しい。

僕には、生まれつき備わっているはずの個性がなかった。

少し昔で言うならば、生まれつき手がないことと同じ意味を持っている。

要するに、僕は障害児として生まれてきたわけだ。

お母さんはそのことを酷く気に病んで、ストレス太りしてしまった。
僕自身も、昔ほど自分を出さなくなった。
無個性。それはまだ別に良かった。

僕が一番辛かったのは、『夢を見ることでさえも許されなかった』ことだった。

トップヒーロー。
誰もが憧れるその世界に、僕が同じように憧れを持つことでさえも許されない。
現実ばかりを見なければならない人生に、僕は酷く摩耗していた。

ーーーーーーその武器で、その体で戦いましょう。君の夢を叶うことを是としない、この世界と。

小学二年生の春。
水奈瀬先生に出会って、僕の人生は大きく変わった。

僕は死に物狂いで足掻き始めた。
個性に変わる、僕だけの武器を生み出すために。
体を鍛え始めた。一年で「個性を超えられない」と悟った。
勉強を始めた。「個性を超えられない」と悟るには、一ヶ月もかからなかった。

「個性を超える武器を作ればいい」という結論に至ったのは、小学三年生の時だった。

その日から、僕は先生のコネを使って、片っ端から理系のお偉いさんに話を聞きに行った。
現代の技術では、到底再現できないという永久機関と特殊金属に関する論文を貰った。
僕はそれを3年間、寝ることも食べることも忘れて考察し、研究した。
二日に一回、知恵熱でぶっ倒れた。それでもノートを書く手を止めなかった。
七孔墳血…目から、耳から、口から、鼻から血を吹き出すこと…を何回も起こした。
山奥で、とんでもない爆発を起こしたことだってある。
それでも諦めずに、僕は子供の脳に詰められない程の情報を、無理やりに詰め。

子供が出来ないだろう研究を、お小遣いでやりくりしながら進めた。
勉強したノートも、ヒーローを研究したノートも、永久機関と特殊金属を現実にするためのノートも、もはや数えきれない。
僕の部屋は、オールマイトグッズとノートに埋もれていた。

そして、去年。
僕だけの武器は、三年の時を経て完成した。

白色の金属を、金色の装飾が彩る、シンプルなパワードスーツ。
僕はそれに、『イズク1号』という名前を付けて、先生に見せた。

先生は「やめろ」とは言わなかった。
ただ、僕に降りかかるだろう不利益を懇切丁寧に説明して、僕の作ったイズク1号の持つ価値を説かれた。
だから、グレードダウンしたものを使えと言われた。

その約束は、その日のうちに破った。

弁明だけはさせて欲しい。
実は、先生に見せた段階では、イズク1号の機能テストがまだ不充分だった。
デッドコピーを作るにも、不確定要素は、出来るだけ早く無くした方がいい。
そう思った僕は、おばあちゃんの私有地である山…僕が数えきれないほど爆発起こしたせいで若干はげてる…に向かっていた。

そんな時だった。たまたま通りかかったデパートが、激しく燃え盛ったのは。

「っ…!?」
たちまち阿鼻叫喚の地獄絵図と化した日常の一幕に、僕は唾を飲み込む。
中からは、ひどい火傷を負いながらも、なんとか逃げてきた人々が出てきた。

「バックドラフト、現場到着!」

バックドラフト。

折寺に住むヒーローの一人が駆けつけ、消火活動に当たる。

救急車や消防車が来る音が聞こえる。

そんな中、ポケットサイズにして収納していたイズク1号から、声が響いた。

『あと二分で建造物が倒壊します』

「っ…!」

あと二分?

僕はバックドラフトを始めとしたヒーローに目を向ける。

だが、目に見える被害を抑える程度で、誰も中に入っての救助活動を行おうとする人は居ない。

あと二分。あと二分が刻一刻と迫る。

「…イズク1号。僕に力を貸して」
『力を貸して、と言う表現は不適切です。
私はあなたの物。あなたの力です』
「…そうだったね」

僕のナノマシンを打ち込んだ腕に、イズク1号をかざす。
瞬間、僕の体はイズク1号に覆われた。
大丈夫。大丈夫。
心臓が胸を強く叩く。

「ブーストユニット、展開」

背中に、足に、腕に。
イズク1号の体から、エネルギーを放出するためのマフラーが大量に突き出る。
まだ、足りない。

「空気抵抗削減装置、起動。
救助システム『ヘカトンケイル』、起動」

僕の体から、何千もの腕が形成される。
これで充分だ。

「行こう、ＭＥＳＳＩＡＨ」
『了解。ナビゲーションを開始します』

アスファルトを踏み砕き、僕は燃え盛るデパートへと侵入した。

これが、僕のオリジン。

ここからは、実によくある話なので、後日談だけをお送りさせていただく。

あの火事で、幸いにも死者は居なかった、と報道された。
僕が助けた人たちは、僕のことを視認できていなかったようで、『気づいたら助かってた』と発言。
結局、全てがバックドラフトのお手柄になったらしい。
次の日。僕の母校…と言うべきかは分からないけど、僕の通っていた幼稚園で立てこもりが発生。
たまたま通りかかった僕は、衝動的に人質になっていた人たちを助け、敵を倒してしまった。

まぁ、ここは皆も知っていると思うので、割愛させていただく。
兎にも角にも、僕はヴィジランテとして、世界中をイズク1号で飛び回っていると覚えてくれたらいい。

そんな僕にも、つい最近、この活動を支援する人が現れた。

「今日もウチに来ますか?」
「はい。あの子が待ってるので」

先生の問いに、僕は肯いた。

ああ、四話目にして言い忘れていた。

これは、僕が最高のヒーローになるまでの物語じゃない。
これは、僕が最高の恩師と出会い、最高の仲間たちに支えられ、僕の思う最高のヒーローを演じる物語だ。

♦?♦?♦?♦?

僕、水奈瀬コウの家は、「つまらない家」という評価が下されるような、そんな家だ。
存在する本といえば、学術誌やらビジネス書などの参考資料程度。
娯楽の類は一切なく、あるとすれば食事くらい。
そんな家に、毎日のように、二人の来客が訪れる。

「扉は開いてますよ。
東北さんが勝手に出入りしてるんで」
「では、お邪魔します！」

緑谷くんが扉を開けると、それなりに大きいゲーム音声が聞こえてきた。
奥へと進むと、勝手に僕のパソコンを開いて、勝手に作ったアカウントで、これまた勝手にダウンロードしたゲームを遊んでいる東北きりたんが、そこには居た。

「クソガキ。僕のパソコンで遊ぶんじゃありません」
「テスト問題と宿題とプリントと論文しか書かないだけのパソコンとか、存在意義あります？」
「大いにあります。っていうか、君が述べたのが本来の使い道です。
ゲーム用のパソコンなら、自分で小遣い貯めて買いなさい」
「先生のやつ、無駄にスペック良いですし、使ってあげないと可愛そうですよ」

このクソガキ、来るたびにクソガキ度合いが増してきてる。

一度、アポなし家庭訪問してやろうか。

「こらっ、勝手に人のパソコン使っちゃダメでしょ！」

と、緑谷くんが叱る。

おお、いいぞ。

努力が変な方向に行ってるけど、良識溢れる性格の緑谷くんのお叱り攻撃。

これはクソガキ相手にも効果が期待できる。

「あっ、緑谷先輩。新しいユニットの設計図できましたよ。

流石は無駄にスペック高いパソコン」

「勝手に使うことを許可してください！」

「手のひらモーター式なんですか、君？」

悲報。僕の教え子、僕の味方じゃなかった。

厄介なコンビが誕生してしまった。

そう心の中で愚痴りながら、僕は仕方なく、彼女が使っているパソコンとは別のパソ

コンを立ち上げた。
東北さんも東北さんで、あの頭のネジが全部吹き飛んだみたいな理系共に汚染された。
って言うか、緑谷くんに汚染された。
前世があっても、汚染されるときは汚染されるんだなぁ。

「緑谷先輩が作った粒子化システムを使って、大量に武器を収納。
状況にあった武器を自在に取り出せるように、斡旋プログラムまで付けてます」
「名前は？」
「『ヘーパイストスの武器庫』です。
武装の一つ一つにはまだ名称を設定してませんので、ご自由にどうぞ」

うっわ。僕の知らない間に、また超兵器が開発されてる。
この二人だけで、個性社会崩壊するんじゃないか？
その片棒担がされるとか、嫌だよ僕。
普通に教師として死にたい。

「イズク1号の名前も変えちゃいましょうか。
流石にこのままだと、名前で正体バレとかありそうですし」
「名残惜しいけど、変えるしかないか…」
「どうでもいいですが、ここ僕の自宅なんですけど」

一介の小学校教員の自宅を、自室のように扱うんじゃありません。
そんな願いも虚しく、二人の議論はヒートアップし始めた。

「イズク2号がバイクですから、『仮面ライダー』とかどうです？」
「それ、昔の特撮ヒーローでしょ？
参考にしたのは、昔ハリウッドで撮影された『アイアンマン』だからなぁ…。
ビブラニウムを再現したいんだけど、エネルギーはどうしても外付けになっちゃうんだよね…」
「別にいいじゃないですか。
イズクメタルとイズクジェネレーターで軽く超えられるんですから。
名前の件ですが、アイアンマン初期名称の『メタルマン』とかはどうです？」
「なんか、違うなぁ…。

なんていうか、こう、僕だけのオリジナリティが欲しい」
「君たち聞いてます？
ここ僕の自宅。マイホームなんですけど？」

僕が割と大きめな声で抗議するも、二人は完全に聞いてなかった。
ダメだこいつら、話にならない。
ぶぶ漬けでも作っておくべきだったか。

「先生はなにかいい案ありますか？
イズク1号の新しい名前」

…いや。作っても無駄だな、これは。
僕は来週の授業資料の整頓をこなしながら、イズク1号を指差す。

「ＭＥＳＳＩＡＨに聞けばいいでしょう。
本人のことは本人で決めさせなさい」
「あっ、そっか！ＭＥＳＳＩＡＨ！」

『なんでしょう、イズク様』

さてと。これで仕事に集中できる。

…あれっ？

なんで僕、作業効率向上のためにハイスペックＰＣ買ったのに、旧式ＰＣ使ってんだ？

「…そろそろ返してくれませんか？

来週の君のテスト作れないんですけど」

「一生作らないでください」

「それは僕に職を失えと言ってるんですか？」

「旧式ＰＣでもできるでしょ、そのくらい」

「出来ますけど、処理に時間がかかるんですよ。いい加減、僕の仕事道具返しなさい」

僕がそう要求するも、クソガキは心底ムカつく顔で首を横に振った。

「正義の秘密結社の仕事道具ですし、渡せませんねぇ」

「成績全部『もっと頑張りましょう』にしますよ」
「すみませんでした」

クソガキからハイスペＰＣを取り戻した。
正義の秘密結社の仕事道具に、小学校教員の自宅にあるハイスペＰＣを選ぶな。
僕は東北さんを退かし、ハイスペＰＣの自分のアカウントを開く。

「…そこで私たちのアカウントを消さないあたり、本当甘いですよね」
「君たちは消してもまた作るでしょう」

僕が言うと、二人は目を丸くした。

「緑谷くん。君の活動を僕は認めはしませんし、否定もしません。
僕が使わない時に限り、このパソコンを自由に使いなさい。
僕がやるのは、場所とパソコンの提供くらいです」

東北さんは教え子だが、緑谷くんは僕の手を離れた卒業生だ。

僕はあくまで、困った時に指針をだしたり、場所と物を提供するくらいの協力しかしない。
あとは自分で考えるべきだ。
僕は彼の保護者ではないのだから。

「ですが、東北さん。
君のその自主性と行動力は素晴らしいですが、そればかりを大事にして宿題の期日を守らないのは論外です。
次、期日に間に合わないのであれば、成績表が『もっと頑張りましょう』で埋め尽くされることになりますよ」

「そんな殺生なぁ!?」

正義の秘密結社『一等星』の結成を先生の家で祝うんじゃありません！

「というわけで！正義の秘密結社、『一等星』の結成を記念して、乾杯です！」
「かんぱーい！」
「宴会だったらよそでやってくれません？」

少し遅くなって帰ってきた僕の家が、何故かデコレーションされてた。
どこで買ってきたのだろうか、謎の垂れ幕やら星やらハートやらの形をした風船。
そして、無駄に達筆な『一等星』の三文字。
家主が知らない間にパーティ開かれてる家ってなんだ。
秘密結社、二人しかいないし。

「えー？好きに入っていいって言ったの、先生でしょう？」
「言いましたけども、限度覚えましょう？
もはや君らの自宅ですよ、コレ。

緑谷くんも、なんで止めなかったんです？」
「え？許可取ってなかったんですか？」
「…東北さん？」
「先生言ってましたよね？
『嘘は武器だ。振るわない方がおかしい』って。なら私が『許可を取った』という嘘を武器として振るっても…」
「成績」
「すみませんでした」

水奈瀬コウは、教え子相手にのみ使える魔法の呪文、「成績」を覚えた。
職権濫用になるから、実際にはやらないけれど。
まぁ、根がいい子のこの子には、この一言だけで十分だ。

「宴会はよそでやれって気持ちはありますが、ここまで準備してしまったなら仕方ありません。
ただし、暗くなる前には帰りなさい」
「ひゃっほう！先生太っ腹！」

「僕の体脂肪率は１０％以下です」

言うと、僕はこのどんちゃん騒ぎに参加することを表明するように、冷蔵庫に予め入れておいたジュースや菓子を持ってきた。

流石にいい大人だから、思いっきり羽目を外したりはしないが、一緒に楽しむくらいはやってやろう。

…お酒？強いけど、アルコールの風味が生理的に合わない。

「えっ…？こっ、これっ、超お高いブランドのチョコじゃあ…」

「このケーキ、こないだテレビでやってましたけど、１ホール数万はしますよね…？」

「余ったお金に使い道もないので、思い切って買っておいて良かったです」

人生が趣味な人間の貯蓄、なめないでいただきたい。

例えハイスペＰＣを二台購入しようが、ちょっとした贅沢ができるくらいにお金はある。

小学校教員の給料が高いってわけではない…むしろ安い。

ただ単に、僕が生活費以外で殆ど使ってなかっただけだ。

配偶者に使われることもないので、自由に使える。

「本当にいいんですか？
コレ、僕たちのお腹に入れても」
「ええ。買ったはいいですけど、口に合わなかったので」
「…先生って、損な味覚してますよね」
「貧乏舌なので」

この子たちは物の価値をよく分かりながら、味わって食べることのできる人間だ。
僕みたいな、「好みじゃない」ってだけで全てを決めるような人間より、よっぽど美味しく食べてくれるだろう。
菓子に舌鼓を打つ彼らに、少しばかり笑みを浮かべながら、僕はコーヒーを啜った。

「…秘密結社の名前は『一等星』ですか。
何か理由でも？」

僕が問うと、緑谷くんが立ち上がり、声を張り上げた。

「はいっ！暗闇に大きく輝く一等星のように、眩しいヒーローでありたいって意味を込めて名付けました！」
「おお。珍しく良いネーミングですね」
「原案はＭＥＳＳＩＡＨですけどね」
「…あぁ、やっぱり」

どうせ壊滅的な名前だったんだろうな。
東北さんの言葉にそう思いながら、僕は安物のクッキーを口に入れた。

「イズクいちご…いえっ、『シリウス』もグレードアップを重ね、遂にバージョン１０を超えましたよ！」
「魔改造っていうか、魔開発ですよね」

多分、気になっている人も多そうだから、語っておこう。
イズク1号…改め『シリウス』は、総合評価で言えば「オールマイト？とっくに超えてる」だ。

パワーはオールマイトを超え、月並み…大きさという意味で…の隕石すら、一撃で粉砕するという。

スピードは、同じく魔開発されたバイクと合体することにより、音速どころか光速にも迫る勢いだ。

救助機能も充実しており、例え僕らの住む星が粉々に粉砕されようが、九割の生物を助け出せるという。

更には治療用ナノマシン。よほどの重症、もとい重傷じゃなければ、大抵は数分もしないうちに治せるらしい。

盗難防止のために、彼は自分に埋め込んだナノマシンの信号がなければ絶対に起動できない、ただの重いスーツと化すプログラムまで積み込んだ。

評価すべきは、彼の努力。

個性も、それに代わる不思議パワーもなく、ずば抜けて優秀でもない、更には経済力でさえも月並みな家庭に生まれた彼が、ただの努力だけでここまでやってのけたのだ。

その努力が積み重なってできた山は、僕が死に物狂いになったって、麓から抜け出せ

ないほどに高い。
科学ってすごい。努力ってすごい。

「惜しむらくは、この素晴らしさを理解しないし、更には緑谷先輩のことを『弾圧されるべき犯罪者』っていう輩が多くいるってことですね」
「え？そうなの？」
「…君、本当にニュース見ませんよね。
本当、なんで評価を気にしてないんだか」

緑谷くんがヴィジランテとして活動する報酬は、ないに等しい。
例え災害時に人を助けたとしても、その手柄と向けられる感謝は全てプロヒーローの物になり。
敵を倒せば、『ヒーロー気取りの犯罪者と犯罪者同士が潰し合った結果』と報道される。
まさに孤独なヒーロー。
にも関わらず、彼はそのことに全く動じてなかった。

「いりませんよ、そんなの。
僕は僕の思う最高のヒーローを、全力で演じてるだけです」
「…うぅっ…」

やばい。涙が滲んできた。
卒業生とは言え、教え子の成長ってのは、なんでこんなに涙腺に響くんだ。

「僕が赴任してきた頃は、周りの目ばっかり気にして…。
自己否定の塊だった君が、ここまで…」
「水奈瀬先生の泣き顔！レアですよコレ！」
「成績下げますよ」
「すみませんでした」

僕の泣き顔を撮ろうとするクソガキを制し、僕は涙と共にコーヒーを飲み干した。

「志望校は決めてるんですか？」
「アメリカに渡って飛び級しようかなって思ってます。

幸い、琴葉博士のお誘いもあるので」

「うーわ、原作崩壊した」と呟く東北さん。
東北さんから、原作のあらかたは聞いてる。
本来であれば、「雄英高校」と呼ばれる国立校にあるヒーロー科で、彼がヒーローを目指す物語だと言うことを。

だが、目の前の彼は、『オールマイトと出会い、力を渡される』という幸運を『与えられた』人間ではない。
何も持たない状態から死に物狂いで学び、死に物狂いで探し、死に物狂いで作り上げてきた、『この世界一の努力家』だ。

彼と『原作の彼』は、全くもって別の存在である。

「博士に伝えておきましょうか？
なんなら、来年から通えますが」
「いえ！中学校はちゃんと通うって、お母さんと約束してるので！」

本来あるはずの未来を変えてしまったのは、間違いなく僕だ。
でも、それを後悔しているかと問われれば、否と答えよう。

「緑谷くん」
「なんですか?」
「成長しましたね」
僕は、彼の歩んできた道を見てきたのだから。

こんにちは、未来人
未来人はポンコツ。これテストに出ますよ。

夏休み。
教師にとっても一幕の休養期間。
僕は太陽が照りつける中、いつもの二人と散歩していた。

「梅雨の時期って、土砂災害多いですよね。
取り敢えず、行方不明者とか、助けた人に漏れがなくてよかった」

ようやく梅雨があけ、緑谷くんはスーツで動き回った身体をほぐすように伸びをする。
この間は、歴史的な大雨が降り注ぎ、大勢の人が死にかけた。
だが、ヒーローの尽力で死者や行方不明者はゼロだと報道された。

「緑谷先輩の活躍ですよ！もっと誇って！」

その報道は虚偽である。
真実は、今僕の隣に居る緑谷くんが、シリウスを駆使して救助活動に励んだのだ。
８０億から２５兆に増えたナノマシンのおかげだ、と彼は語っていた。

「世間的には、プロヒーローたちのお手柄ですがね」

兎にも角にも、僕らが談笑していたその時。
僕は足元に違和感を感じた。

「…ん？」

僕はその違和感を確かめるべく、視線を下に向ける。
そこには、黄緑の服にヘッドホンを付けた、一度見たら忘れなさそうな見た目の女性がぶっ倒れてた。

「熱中症かもしれませんね。

日陰に運びましょうか？」
「ええ、そうしてください。
生憎と僕、君ほど腕力があるわけではないので」
緑谷くんは慣れた手つきで女性の体を起こし、背中に背負う。
その果実が背中に押しつけられようが、彼は眉一つ動かさなかった。
『…イズク様。背中に背負う彼女は、熱中症ではありません』
「え？そうなの？」
緑谷くんが使う携帯…バイクやらパワードスーツやらを仕舞ってる『イズクテレフォン』…から、ＭＥＳＳＩＡＨの声が響く。
瞬間。イズクテレフォンは、液晶画面から立体映像を映し出した。
緑谷くんはまじまじと、その内容を確認する。
「……は？」
「深刻な病気でもありましたか？」

緑谷くんが、目を丸くする。
僕がその理由を問うたその時だった。

ぐぎゅるるるるるる

女性の腹から、とんでもない音量の腹の虫が鳴ったのは。

「お腹すいた…」
「…テンプレきたこれ」
「思ってても言わないの」

♦?♦?♦?♦?

「いやぁ、助かりましたぁ!!」
「飯食った途端、露骨に元気ですね」
近場のファミレスにて。

声を張り上げることで、生を喜ぶ女性。
他の客が何事だと、公共の場で騒ぐ彼女を見ていた。
彼女の目の前には漫画のように、コレでもかというほどに皿が重なってる。
燃費の悪そうな身体だ。
「この時代に来て早一年…。
目的の特異生命体は見つからないし、この時代の金は尽きるし、連絡機器が風に飛ばされてどっか行くし、その罰で元の時代に帰れなくなるしで散々でしたが、あなたたちみたいないい人に出会えて、私は幸せ者ですね！」
「うっわ、ヤバい人だ」
「ヤバい人だ」
「ヤバい人ですね」

助けた彼女は、頭のネジをどっかに全力投球したような設定を垂れ流す。
ごくごくとお冷やを飲み干し、彼女はかなりヘンテコなポーズを決める。

「自己紹介が遅れましたね！
私、時空監視員をしてます！

西暦３０２０年からやってきました、京町セイカです！」

ヤバい人だ。

それが第一印象だったが、すぐにそれは掻き消えることになる。

京町セイカ。ボイスロイドの中の一人。

設定としては、自称未来人で時空監視員をしているという。

この子も転生者なのだろうかと思ったが、緑谷くんの存在に興味を示さないあたり、転生したという可能性は低そうだ。

東北さんの姉二人も、転生者ではなかった訳だし。

「…え？嘘だろ…？」

そんなことを考えてると、緑谷くんが声を漏らす。

僕が「どうしました？」と聞くと、彼は神妙な面持ちで答えた。

ーーーーーー彼女のヘッドホン、イズクメタル製です。

緑谷くんの言葉に、僕と東北さんが大きく目を剥く。

イズクメタル。

エネルギーさえ注ぎ込めば自己修復し、雨風にさらされても永劫に劣化することなく、人の手で曲げられるほどに柔軟性抜群で、隕石が直撃しても傷一つつかない硬度を誇る、史上最強の人工金属。

地球上でその金属を所有しているのは、緑谷くんと東北さんの二人のみ。

そもそも製法を知っていて、それを実行できるのが緑谷くんしか居ないのだ。

第三者の手に渡るわけがない。

「…そのヘッドホン、何処で？」

「コレですか？コレは未来で一般販売してる安物ヘッドホンです！」

確信した。

この子は本当に未来人だ。

僕たちがそう戦慄した、まさにその時だった。

「こんにちは」

形容し難いバケモノが、ファミレスの窓を破壊したのは。

「っ、逃げて!!」

それを視認するや否や、緑谷くんはバケモノにタックルをかまし、外へと飛び出す。
バケモノの重量でアスファルトが削れ、土埃が舞う。
それによって緑谷くんの姿が隠された。
僕は東北さんと京町セイカを引き連れ、閉鎖空間であった店を出る。
と共に、シリウスを装着した緑谷くんが、ヒーロー着地を決めたようなポージングをすることで、『今ここにきた』と通行人たちに誤認させる。
「我の拳が悪を砕く」
緑谷くんが呟くように言うと、目の前のバケモノは、うぞうぞと蠢き、その顎門を開いた。

「時空監視員、見つけましたよ。死ね」

バケモノが咆哮すると共に、その口腔に眩い光を溜め込む。
どう考えても口からビームを放つ気だ。
対する緑谷くんは、拳を握り、いつものように構えをとった。

「ジャスティスカノン」

放たれた二つの光線がぶつかり合う。
否、ぶつかり合いと言うのは正しくない。
緑谷くんの放ったエネルギーの膨大さに耐えきれなかったのか、バケモノの口腔から放たれた光線は、一瞬で消えた。
が。緑谷くんはバケモノの頭を吹き飛ばすことなく、そのエネルギーを霧散させる。

「…？手加減ですか？」
「……」

彼は答えない。
ただ真っ直ぐに目の前の敵を睨み、近づく。
「ちょっ、ちょっとあの人！
危ないですって！アレ、特異生命体っていって、島国なんてすぐ消し飛ばせるくらいの、すんごいヤバいバケモンですよ!?」
「君の言う『あの人』は、とっくの昔にそれを超えてます」
「ジャスティスブロウ」
僕が言うと共に、轟音が響く。
バケモノの頭が地に減り込み、アスファルトに亀裂を走らせる。
数秒遅れて、凄まじい風が、僕たちの頬を撫でた。
「…やっぱ強すぎません？」
「私の悪ふざけと、緑谷先輩のひらめきのせいですね」
「半分君じゃないですかクソガキ」

僕たちが言葉を交わしたその時。

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアＡＡＡＡＡＡＡ!!!」

バケモノが天を衝くほどの咆哮で、街を揺らした。
肉片と血液を巻き散らし、おぞましい体が削ぎ落ちていく。
僕たちはその光景の異様さに目を剥き、唾を飲み込む。
肉が根こそぎ削ぎ落とされて残ったのは、人型のバケモノだった。

「……」
「……」

緑谷くんが再び戦闘態勢に入る。
が、バケモノはそれから目を逸らした。
軽く膝を曲げると、バケモノは何処かへと跳躍する。
あっという間にビル街の奥に消えたバケモノに、僕は小さく呟いた。

「……こりゃあ、面倒な夏休みになりそうですね」
「ですね」

♦？♦？♦？♦？

『本日未明、ヴィジランテ「ＳＡＶＥＲ」と、謎の敵との戦闘がありました。
謎の敵はＳＡＶＥＲに敗れ、逃走。
ＳＡＶＥＲもすぐさま姿を消し、現在警察及びプロヒーローがその行方を…』

そんなニュースが、安物のテレビのスピーカーから響く。
僕はこの直視したくない現実と向き合うために、普段は決して飲まないエナジードリンクを呷った。

「…で。さっきの…特異生命体？について、教えていただけますか？
未来人、京町セイカさん」

えぷっ、と溢れそうになるゲップを抑え、目の前の未来人に問い詰める。
僕の家には今現在、僕と緑谷くんと東北さん、そして京町セイカがいる。
京町セイカはというと、その能天気なツラのまま、つらつらと話し始めた。

「特異生命体というのは文字通り、同種の生命体とは違う細胞を持つ生命体の総称です！
個性社会で最も初めに産まれた『光る赤子』が、人間初の『特異生命体』として知られてます！」
「要するに、突然変異のキッカケとなった生物のことですか？」
「ざっくりいうと！」

すっごい元気に、すっごいとんでもないこと口走ってるぞ、この人。
つまり、さっきのバケモノは、なにかが突然変異した個体だった？
あんなバイオハザードワールドに住んでそうなバケモノが自然発生するのか？
人工でもなければ、皮膚と筋繊維が剥き出しなんて、生物として不完全すぎやしないだろうか。
…まぁ、それよりも驚いたのは…。

「マジで未来人なんですね…。
うっわ。スマホもアクセサリーも、ぜーんぶイズクメタルで構成されてますよ」
「こ、こんなに使われてると、なんか照れる…」
「そこ。真面目な話の方を聞きなさい」

彼女が本当に未来人だったという点だ。

先程、原作にこのような展開があったのかと東北さんに問うと、「あるわけないでしょ」と呆れられた。
そもそも、「緑谷出久が個性を使わず、不思議な力も使わず、科学で戦うこと」自体が想定外だという。
東北さん曰く、原作知識を使って無双する…という二次創作も多くあるらしいが、この世界ではまず通用しないと思った方がいいとのことだ。

「で。アレはなんの突然変異なんですか？
戦闘能力はどのようなものなのですか？」

「知りません！私、全然勉強してこなかったので！」
「悲報。この未来人、思ったより役立たずでポンコツだった」
「「同感」」
「過去の人たちって辛辣ゥ!!」

緑谷くんが他人の罵倒に同意するなんて、相当ダメな証だぞ。
京町セイカは半泣きで言うも、すぐさま涙を拭い、頭を下げた。

「約束通り、情報は話しましたよ！
私のお願い、聞いてくれるんですよね!?」
「まぁ、出来る限りのことは聞きましょう」

実は、この情報と引き換えに、彼女の言うことを一つ聞くという約束を交わしていた。
どんなことであれ、情報は大きなアドバンテージになる。
相手の脅威を知っておくに越したことはない…と思ったのだが、情報を引き出せる相手が悪かった。
僕が担当してきた生徒の中でも、こういう見るからに残念な子は居なかったぞ。

…まぁ、約束してしまったものは仕方ない。
約束を反故する不義理を、生徒の前でするわけにはいかない。

「私の『特異生命体捕獲任務』、手伝ってください！」
「僕じゃ無理です」
「そんなぁ!!」

一介の教師になんちゅう要求しとんじゃ、このポンコツ未来人。

「代わりに、一ヶ月の食費くらいなら賄ってあげますよ。それで十分でしょう？」
「それも魅力的ではありますけど、任務終わらせないと帰れないんですぅ!!
見てるドラマ、新シリーズ始まっちゃいますぅ!!」
「仕事に私情を持ち込むな」

まぁ、人生を趣味って言ってる僕が言えた口じゃないけれど。

「僕が手伝いましょうか？その任務」

「本当ですかぁ!?」

緑谷くんの言葉に素早く反応した彼女は、情けない体勢で彼に縋る。
ダメな大人の典型だ。
僕の前世もこれだったかと思うと、ちょっとショックだ。

『速報です！
先ほどの謎の敵が、プロヒーロー…ヒーロービルボードチャートＪＰ１８位のクライシスオーガを一撃で倒しました!!
クライシスオーガは全身粉砕骨折の重傷!!今は集中治療室で手術を…』

「…協力しないと危険なのも事実ですか」
「ですね」

全く、面倒なことになったものだ。
普通に教師をしていただけなのに、どうしてこうなった。
僕は心底、そう思わずにはいられなかった。

仙台でずんだは基本!

「オーガくん、大丈夫か!?」

ばぁん。

スライディングがてら、私は慌てて病室に駆け込む。

ベッドに眠る彼の姿は、いつものような頼もしさなどこれっぽっちもない。

私と何度かチームアップを組んだ時も、持ち前のタフネスで、幾度となく私をサポートしてくれた。

人々に寄り添い、敵を倒すのではなく、ただサンドバッグになりながらも説得する、新しい形のヒーロー。

若手の中で、私が最も期待していたと言っても過言ではないヒーローが、たった一撃で負けた。

そのことが信じられなかった。

「鬼山くん!!」

「…オール、マイ、ト…?」

術後二日目。

息をも絶え絶えに、彼は掠れた声で私の名前を呼んだ。

「…ははっ。すみません…。あなたとの、チームアップ…。俺のおっかさんも…楽しみに、してたのに…」

「いいんだ…。無理するな…。

今は、ゆっくり休んでくれ…」

彼の手を取って、いつものように笑みを浮かべる。

ちくしょう。

彼が倒れた時、私がそばに居なかったことを、酷く呪った。

いくらあの戦いの傷が癒えないとはいえ、それを理由に、目の前の素晴らしき若人の未来を奪いかけたのだ。

悔やんでも、悔やみきれなかった。

「君を倒した敵は、どんな敵だった…?」
「…皮膚が、有りませんでした。
筋繊維の塊で出来たような、人間かどうかもわからない敵…。
少なくとも、貴方のＳＭＡＳＨを、超える一撃を…ノーモーションで撃ってくる…。
俺が出会った…いや、世界中のどの敵よりも…強い…」

その言葉に、私は血の気が引いていくのを感じた。
自惚れではないが、絶対的な事実として、私のＳＭＡＳＨは、たった一撃でも上昇気流を起こし、雨を降らせる程の超パワーがある。
それを超える一撃を、ノーモーションで撃ってくる敵がいるなど、考えたくもなかった。

「…そいつは、なんと名乗っていた?」
「…たしか、『キズナ』と…」

私はそれを聞くと、彼の手を握った。

「必ずや、そのキズナを倒して見せる。
そしてまた、ヒーローとしての君を、私に見せてくれ」
「…勿論です。まだ、ヒーロー、やりきってないんで…！
あなたも、平和の象徴として、ブレないでくださいよぉ…!!」

オーガくんの激励を受け、私は力強く頷く。
あの時よりも、激しい戦いになるかも知れない。
私は無いはずの胃が縮こまるような感覚を覚えた。

「…ああ。私は負けんよ」

♦？♦？♦？♦？

「というわけで、目撃情報のあった仙台にやってきました―！」
「いぇーい！」
「…女は元気ですね」
「ですね」

中古で買った軽自動車で、高速を走らせること数時間。
僕たちは仙台に訪れていた。

「おお!牛タン!牛タンですよ!
一度は食べなきゃ損ですよ!」
「伊達政宗!伊達政宗観にいきましょう!」
「観光じゃ無いって、真剣な顔して言ってたクソガキとポンコツ未来人は、どこの誰ですかね」

卒業生と生徒と未来人に、足として使われる日が来るとは。
この自称未来人は、免許も無かった。無い無い尽くしで意地もない。
じゃあ何があるんだというと、プライドを捨てる速さだと言われた。
なんだこの悲しい生き物は。
イズク2号…改名して『ペルセウス』で向かえば、速攻職質されるので、僕の軽自動車に白羽の矢が立ったわけだ。
…こうして考えると、僕が参加していないつもりなだけで、彼らの中では僕も『一等

星』のメンバーなのだろう。
悪い気はしないが。
「…にしても、人少ないですね」
「まぁ、プロヒーローがぶっ飛ばされて、アレの目撃情報が頻発した街ですしねぇ」
テレビで見るような華やかさはなく、仙台は現在、閑散としていた。
それでもちらほら人はいるので、情報収集はできるかも知れない。
…いや、待てよ。
僕が情報収集について考えてると、東北さんと京町セイカが僕に問うた。
「どうします？早速、情報集めますか？」
「聞き込みでもします？」
「一人、不安要素がいるので却下です」
「え？そうなんですか？」
「「お前だよポンコツ未来人」」
僕たち3人のツッコミに、未来人は「はへ？」と素っ頓狂な声を出した。
「わ、私のどこが不安要素なんですか!?」

「見ず知らずの人間に、機密情報ベラベラ喋った挙句、秘密の任務に他人を巻き込むあたり割と」
「反論できなぁーいっ!!」
緑谷くんの言葉に、京町セイカは涙目になりながら、両手を上げた。
これを監視しながら聞き込みなんぞしてたら、黄色い救急車を呼ばれてしまうだろう。
「じゃあ、張り込み!」
「却下。コレが大人しくできるとでも?」
「「思いません!!」」
「うぅっ、やっぱ辛辣ゥウ!!」

まずい。思ったよりも未来人がお荷物すぎるぞ。
さっさと終わらせて、こんな危険地帯から帰りたいのに、一番情報を持ってそうな京町セイカは使い物にならない。
僕がこの未来人を連れ回して観光する間、二人に情報収集を任せようかと思ったその時。
緑谷くんがイズクテレフォンを取り出し、そこからボールを生み出した。

「そんな時のために！
てってれてってててーてって～!!
『イズク６号・ガニメデ』～!!」
「その言い方はやめなさい」

僕の忠告も聞かず、緑谷くんは興奮気味にそのボールを僕たちに見せる。

「僕特製の魚眼レンズ！撮影可能範囲は宮城がすっぽりハマっちゃうほど！
動力、容量ともにイズクジェネレーターを使用したことで、何億年間も撮影できちゃう！
更には欲しい情報を、十分にまとめて斡旋してくれる編集機能付き！」
「世の動画クリエイターに喧嘩売ってますね、ソレ」

僕がツッコミを入れるのを気にせず、緑谷くんはイズクテレフォンを操作する。
すると、ガニメデはふよふよと浮遊し、仙台の上空へと飛んでいった。

「あとは情報が入るまで待つだけです!
さ、牛タン食べましょう!」
「笹かまー!タンシチューー!」
「あっ、ビールいいですか?」
「君ら完全に旅行気分ですよね」

僕らはそんな談笑を交わしながら、牛タンが最も旨いと評判の店へと向かった。

「くそっ、全然見つからない…。
いったい何処に…?」

僕らの背後には、骸骨のような細身の男が、ぶつぶつと何事かを呟いていた。

♦?♦?♦?♦?

「…せめて、遊んでる間は、忘れさせて欲しかった」
「仙台なんだから、仕方ないでしょう」

東北さんがうんざりした顔で呟く。
僕たちの目の前には、空になったずんだシェイクのボトル。
仙台名物といえば、ずんだは欠かせない。
緑谷くんたちは美味しく完食していたが、東北さんは格闘でもしてるのかってくらい険しい表情で飲んでいた。

「たまに飲むくらいならいいんですよ…。
でも、ウチは毎日出るんですよ…」
「文句垂れるくらいなら、自分でお菓子作ればいいでしょうに」
「気づいたら量産されてんですよ…。
タコ姉様なんて、この間ずんだの悪夢見てましたからね」
「「ずんだの悪夢」」

なんだそのパワーワード。
聞いたこともないような言葉に、僕たちは愚か未来人までもが目を点にする。

「美味しいから別にいいんです。
　でも、たまにはもっと、こう、別のものが食べたいです」
「わかる。
　僕とかっちゃんも、母さんたちがずん子さんに影響されて、一時期すっごい量のずんだ来たもん」
「あ、あの性格最悪ヒーロー志望とまだ付き合いあったんですね」
「例え腐れてても縁は縁。その縁は大事にすべき…って、先生の受け売り。
　僕が考えて、かっちゃんと向き合うことも正しいなって思ったから。
　かっちゃんは、『こっちくんなデク』って逃げてくけど」

　なんでこの子は、こうも僕の涙腺に響くこと言うんだ!!

「うっわ…。珍し…。
　水奈瀬先生、すっごい泣いてる…」
「すみません。緑谷くんがあまりに立派に育ったので、ちょっと泣いてしまいました」
「『ちょっと』とはいったい…」

僕は溢れ出す涙を乱暴に拭う。
この子はもう、誰に何を言われても立派に自分の道を歩んでいくんだろうなぁ。
いや、まぁ、ヴィジランテ活動は褒められたことじゃないけど。

「水奈瀬さんは教師なんですか？」
「ええ。小学校の教員をやってます。
この子たち除く子供たちにこぞって嫌われてるので、あそこら辺じゃ有名ですよ」

無論、悪い意味で。
僕がそう付け足すと、京町セイカは首を傾げた。

「…虚しくないんですか？
嫌われてる教師って」
「嫌われる覚悟なしに何かを成し遂げることなど、到底できませんよ。
それが人を育てることであれば、尚更ね」

「母親からの受け売りです」とだけ言うと、僕は空になったボトル四つを抱え、ゴミ箱

へと向かう。
踵を返して数秒もしないうちに、僕は柔らかくも硬い壁にぶつかった。
「あっ…!?」
「…うわっ、マジですか」
緑谷くんと東北さんの少し狼狽した声が聞こえる。
まさか、敵だろうか。
僕が恐る恐る顔を上げると、そこには。
「おっと、すまないね!追っている敵っぽい影を見かけて、ちょっとよそ見しちゃってたよ!!」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!」と、白い歯を見せて笑う彼。
テレビでも、緑谷くんが昔着ていたシャツでもよく見た顔が、僕の頭上にあった。
「…あー…。緑谷くん、ここ代わります?」

「是非!!」

特段、彼の熱烈なファンというわけでもないため、ヒーローオタクの緑谷くんに譲る。

目の前の彼は「おっ!元気の良さそうな少年だなぁ!」とカムバック姿勢を見せていた。

緑谷くんが今現在、力強い握手を交わす男。

僕はその名を知っている。

「…先生。超有名なアイドルグループのトップとぶつかったようなもんですよ」

「イカツイおっさんに興奮する趣味はないので」

僕とぶつかったその男は、別名『平和の象徴』。

オールマイトが、そこにいた。

♦?♦?♦?♦?

「ふひ、ふひひひ……」
「うっわ。緑谷先輩のこのモード、久々に見た気がする」
「気持ち悪いですねぇ」
「同感です」

トップヒーローのファンサービスを存分に受け取った緑谷くんが、これまた気持ち悪い笑顔を浮かべる。
持ち歩いてたグッズへのサイン、色紙五十枚分のサインなどに頬擦りするその姿は、気持ち悪いオタクそのものだ。
前世の僕はここまでひどく無かったが、似たようなものだったので、なんか恥ずかしい。
あの後、オールマイトは騒ぎになる前に、とっとと去ってしまった。
走るだけで風圧が巻き起こり、緑谷くんの癖毛がすんごいことになってた。
その後、「ＨＯＬＹ　ＳＨＩＴ!!ネコだったー!!!」と聞こえた。
それでいいのか、Ｎｏ．　１ヒーロー。
まぁ、あんなバケモノ相手に神経過敏になるなと言う方が難しいか。
取り敢えず、本題に入るとしよう。

「緑谷くん。サインを喜ぶのはいいですが、今は偵察結果を見ましょう。
目的を忘れてはいけませんよ」
「あっ、すみません！
今出しますね。ちょっと、運転席開けてもらえます？」
緑谷くんに言われるがままに、僕は車から降り、彼に運転席を渡す。
イズクテレフォンからコードを伸ばした彼は、そのコードを車に差し込んだ。
「まず、偵察結果を確認する前に、ちょっと車いじってます。
すぐに元に戻しますので、ご安心を」
緑谷くんがそう断りを入れた瞬間。
僕の軽自動車の中は、異世界と化した。
事前に聞いてはいたが、やっぱりオーバーテクノロジーだよなぁ。
スタークインダストリーとかでも、ここまで行かないだろ。
それに慣れてきてる自分が一番怖い。

「緑谷さんって何者ですか…!?
　このプロジェクター技術といい、あのアーマーと言い、未来でも最先端技術とされてるものばかりですよ…!?
　この生体スキャニング装置で見ても、極々平凡な普通の無個性の人間ですよ!?」
「世界一の努力家…ですかね?」

　作り変わっていく車の内装に、京町セイカが困惑気味に問うた。
　東北さんの評価は、的を射ている。
　天才というものは存在しない。ただの幻想。
　知恵熱で倒れ、顔中から血を吹き出し、何度も何度も爆発…実験の失敗によるもの…をモロにくらって。
　でも、しっかりと前を見据えて、一歩一歩着実に、それでいて駆け足で。
「天才」という頂きが存在する山を、緑谷くんが全力で登った結果だ。

「出ました。映像数…２８件。
　全てに特異生命体が映ってます。

そこから行動パターンを推測して、現時点での居場所を突き止めます。
先生、ノートパソコンお借りしても？」
「ほぼ君らの物でしょう。
好きに使いなさい」

緑谷くんに言うと、彼は僕のバッグからノートパソコンを取り出し、自分のバッグからも同型のパソコンを取り出す。
彼はその二つのキーボードを両手で弾き、車の中に作り出される異世界を、凄まじい速度で編集した。

「…？あれっ？どういうことだ…？」
「どうかしました？」

緑谷くんの声に、東北さんが後部座席から身を乗り出して問う。
緑谷くんは困惑気味にエンターキーを押し、車の中の異世界を作り替える。

「クライシスオーガを倒した後からずっと…なんでしょうか？

鎌倉山付近をウロウロしてます」

映し出されたのは、鎌倉山。
通称『ゴリラ山』とも呼ばれている。

「…仕草からして、なにかが来るのを今か今かと待ってるように見えます」
「じゃあ、そこに行けば…!」
「確実に遭遇できるかと」
「ここからだと遠いですね…。よし。
戦闘が控えてる緑谷くんは、ゆっくり休んで。あとは先生の仕事です」

僕は運転席に戻ると、パーキングブレーキを解除し、ギアを入れ、ハンドルを握った。

「日付が変わる頃に着きますので、その間、護衛を」
「わかりました! 防衛用小型ドローン『イズク4号・カロン』を起動します!」

こういうのはガラじゃないんだけどなぁ。

でも、やらなきゃ盛り上がらない。

「秘密結社『一等星』の初陣です。
覚悟は出来てますか？」
「勿論です！」
「小学五年生に聞くことじゃないですよね。
ま、出来てますよ」
「私も役に立てるかはわかりませんが、頑張らせていただきます！」

一介の教師であるはずが、とんでもないことに首を突っ込んだものだ。
僕は笑みを浮かべると、アクセルを踏んだ。

鎌倉山がダンジョンみたいになってんだけど、どゆこと?

午後１１：４５。
駐車場に車を置き、僕たちは特異生命体の居る鎌倉山へと向かう。
…ああ、ごめん。僕っていうのは、緑谷出久の方だ。
先生と東北さんは、車の中でお留守番だ。
彼らは個性があるわけでも、僕みたいにシリウスのような武器があるわけでもない。
最悪死んでしまうかもしれない場所に、可愛い後輩と恩師を連れていくほど、僕は愚かじゃない。
シリウスが使えない時の代わり…高速機動特化型のイズク３号・カノープス、潜入捜査特化型のイズク５号・アルデバランが先生たちを守っている。
「京町さん、別について来なくても良かったんですよ?」
「いえ!流石にお仕事を任せっきりにはしませんよ!」

言うと、彼女はバッグから小型のデバイスを取り出し、ボタンを押す。
すると、そのデバイスから、映画の中でしか見たことのないような重火器が飛び出した。

「この『セイカキャノン』を装備してる間、私はほぼ無敵ですから！」
「…なんだろう。すごく心配だ」
「なんでェ!?」

言っちゃ悪いけど、彼女が戦力として機能するかと問われれば、僕は答えを濁す。
彼女の底が見えてないからこそ言うのだけれど。
相手は加減したとはいえ、シリウスの攻撃を耐えうるような存在だ。
しかもまだ、本気を出してない。
最悪、シリウスが破壊されるかも知れない。
たとえ粉々になっても時間をかけて自己修復するからいいけれど、それに変わる武装は、今はない。
僕自身は極々普通の人間だ。
ヒーロー界の中でもトップクラスのタフさを誇るクライシスオーガを、たった一撃で

倒した存在相手に敵うわけがない。
なんにせよ、気を引き締めておかなくては。
『…イズク様。前方、生体反応が二つあります。警戒を』
「わかった」
あれ?二つ…?
僕がそれを疑問に思っていると、その存在が全貌を表す。
そこに居たのは、熊と狼だった。
それだけなら、まだ「野生の生物か」と納得できた。
だが、目の前にいた熊と狼は、どう考えても歪だった。
「特異細胞に侵食されてますね。ああいう生命体は、超強いですよ」
肉塊やら筋繊維が剥き出しになり、骨が歪に蠢く動物。
直視すれば吐き気を催すような存在が、僕たちの目の前に立っていた。
どのくらいの強さかは分からないが、とにかく殺さないようにしないと。

僕の力は、倒すためじゃない。救うためにあるのだから。

「妙なことは、考えない方が良いですよ。
狼と熊に超ヤバいネームドヴィランとか、Ｎｏ．１０くらいのヒーローの個性と技術がくっついたと思ってください」
「…なるほど。ありがとう」

まずはジェネレーターを温める傍ら、この子たちを助けよう。
さっさと気絶させて、特異細胞とやらを引き剥がしてあげないと。

「京町さんは手を出さないで。
僕がなんとかするから」
「え？」

そういえば、ヘーパイストスの武器庫を試したことがなかった。
相手が獣だから、弓矢とかでいいかな。

「ＭＥＳＳＩＡＨ、弓矢はある?」
『はい。麻酔用兵器「アルテミス」を起動します』

僕が言うと、手のひらから粒子が放たれ、それが弓矢の形となった。
僕がそれを構えると共に、二匹の獣が僕へと迫ってきた。

「ちょっ、危ないですよ!!」
「大丈夫だよ。
僕はヒーローだ」

僕の中の、だけどね。
心の中でそう呟くと、僕は二匹の獣の顎を蹴り、脳を揺らす。
身体中に巡らせておいて良かった、治療用ナノマシン。
体が固いせいで、確実に股関節外れたけど、すぐに治った。
気を失いそうになりながらも向かってくる獣に、僕は手に持った弓からエネルギーを放つ。

「ごめんね」
「キャウン!?」

僕が放ったエネルギーが、狼に着弾する。
貫きはしない。
ただ、神経電流を一時的にイカレさせる信号を電気信号にして打ち込んだ。
僕が治療しない限り、1日は動けない。

「グァァァっ!!」
「君も、寝ててくれ」

その爪を僕に振り下ろそうとする熊に、零距離でエネルギーを放つ。
熊と狼が同時に地面に崩れ落ちる。
僕は手のひらから治療用ナノマシンを出すと、二匹の獣に侵入させた。

「何してんですか?」

「変異した原因の細胞とかを根こそぎ取り除いて、侵食された部分を元の細胞そっくりのものに置き換えてるんだ。
あと三十秒くらいで元に戻るよ」

このナノマシン、量産を簡単にするための設備を揃えるのに随分と苦労した。
ジャンク品からどんどん発展させた僕のラボは、自慢になってしまうが、世界一の研究施設なのではないだろうか。

「よし。治った。…っとと、焼却っと。
さぁ、行っといで!」

剥がれ落ちた肉片をレーザーで焼き、元に戻った熊と狼をそれぞれ別の方向に逃す。

「強く生きるんだよーー!」
「……すごっ」

よし。気を引き締めて、特異生命体の居るであろう奥へと進もう。

狼と熊を見送った僕たちは、舗装された道を通り、山頂を目指す。

「し、ＳＨＩＴ…！もうあとは、ここだけ…！

ここに居なければ、また明日、１から探し直しだ…!!」

僕もＭＥＳＳＩＡＨも、麓から離れていたから気づかなかった。

あるヒーローが、間の悪いことにこの山に訪れていたことに。

♦？♦？♦？♦？

「先生、先生」

「んむ…。どうかしましたか、東北さん」

東北さんの声に、仮眠を取っていた僕はアイマスクをあげる。

何か緊急事態が起きたのか、それとも下らない話なのか。

寝起きのせいで霞む視界で見える彼女の顔は、よくわからなかった。

「ヤバいです。
ガイコツみたいな不審者…ってか、オールマイトが今さっき、この山に入りました」
「はぁっ!?」

投下された爆弾に、僕は一気に目が覚めるのを感じた。
寝耳に水というより、熱湯かけられたみたいだ。

「いや、あの人確か、大怪我してて力衰えてんでしょう?
計算上では、軽く大陸を砕くくらい強いアレ相手に勝てるんですか?」
「いや。全盛期のオールマイトどころか、ラスボス枠のオールフォーワンだろうと、負けると思います」

…厄介な状況になった。
いくらプロヒーローのトップとはいえ、拳の風圧で上昇気流を起こし、雨を降らせるだけのパワーしか持たない怪我人。
それだけでも十分だと思うが、流石に相手が悪すぎる。
止めようにも、僕たちは無個性。

さらに言えば、緑谷くんのシリウスのような、大した力を持っていない。

「どうします？カノープスとアルデバランを向かわせますか？」

「緑谷先輩の命令しか聞きませんよ。

私はフレームの開発に携わった程度で、大部分は緑谷先輩の管轄でしたから」

「…ですよね」

全く、僕も見通しが甘かった。

トップヒーローが、トップヒーローに近い若人を潰した相手を、虱潰しに探し回らない筈がなかったのだ。

…いや、待てよ。

「そもそも、なんでアイツはクライシスオーガと京町セイカを襲っただけで、この山に引き篭もったんでしょう？」

「え？」

緑谷くんとの戦いの時に見せた、一瞬でビルの奥へと消えた、あの機動力。

計算が苦手な僕でも、流石にわかる。

アレはその気になれば、日本中を駆け回り、大量殺戮を為し得ていたに違いない。
だというのに、アレがやったことと言えば、京町セイカを守った緑谷くんとの交戦と、クライシスオーガの撃破のみ。
それに…。

ーーーーーー見つけましたよ、時空監視員。

あれは最初、京町セイカを狙っていたはずだ。
だと言うのに、京町セイカを探し回るという行為すらしていない。
傷を癒す必要があるかもと考えた。
しかし、シリウスに殴られて、あれだけ動けるのだ。
緑谷くんに対して再戦を臨むわけでもないのなら、その必要もないだろう。

「…アレにも、何か別の目的が存在するのかもしれません。
東北さん、緑谷くんに連絡は出来ますか?」
「はい。私専用のイズクテレフォンでなんとか…」
「では、二つ。『相手にはその場所に目的がある』、『あなたたちの後ろにオールマイトが

居る』と伝えて…」

その時だった。

鎌倉山の頂点付近の雲が、一気に吹き飛んだのは。

♦？♦？♦？♦？

「……来ましたか。

ここで待っていて正解でした。侵入者も、思ったより少なかったですし」

山の頂上。

『私』はようやく出来た肌を馴染ませるように、ぐっ、と拳を握る。

「待ち焦がれていましたよ。

我ながら、恋する乙女のようです」

あの肉壁は便利だが、壊されるか抜け落ちるまで皮膚が戻らないのがネックだ。

ーーーーーーーー死ねよ、バケモノ。

ーーーーーーーこいよ、バケモノ！

くくっ、と声を漏らし、私は溢れる感情を溢すかのように笑う。

「早く来てくださいね。ヒーロー」

ああ。楽しみだ。

漸く私は救われる。

紲星あかりって、こんな強かったっけ？

頂上に着いた。
ここに来るまで、幾度か戦闘を繰り返したが、消耗する必要のない相手で良かった。
「京町さん、お疲れ様。
結構、戦えたんだね」
僕は京町さんに労いの言葉をかける。
彼女は褒め言葉に反応してか、その恵まれた体で胸を張り、えっへんと口に出す。
「そりゃそうですよ！
時空監視員の募集要項には『戦闘技術』の項目もあって、私、トップだったんですから！
筆記は最下位でしたけど！」
「……」

それ、なんの自慢にもならないんじゃ?
聞けば、戦闘能力の高さだけで、今の職に就いてるらしい。
残念な人だとは思ってたけど、ここまで残念だとは…。

『イズク様。防御を』

ＭＥＳＳＩＡＨの指示に従い、ナノマシンを集結させて防壁を作る。
その間わずかコンマ１秒。
１秒後には、その防壁が轟音と共に凹んでいた。

「きゃあ!?」
『イズク様、狙いはあなたです。
京町セイカを、あなたのそばから離れさせることを推奨します』
「京町さん、ごめん!」
「ちょっ、なぁああっ!?」

ナノマシンを放出し、彼女を先生のいる麓へと戻す。
と同時に、防壁が粉々に砕け散った。
イズクメタル製のそれを砕いた影を見て、僕は目を見開く。

「先日ぶりですね、ヒーロー」

この間の、皮膚が全て無かったはずのバケモノは、そこにはいなかった。
シワひとつないきめ細かでいて、しっとりとした麗しい肌。
活発そうな印象を受ける、淡麗な顔立ち。
腰まで伸びた白い髪を二つ結びの三つ編みにして、ぷらぷらと遊ばせている。
だが、放つ気配はこの間のものと全く同じ少女が、そこにはいた。

何故か全裸で。

「…とりあえず、服着たら？」
「…？ああ、そうでした。
肉壁は難しいんですよね…。

まだ調整が荒っぽいせいで、皮膚ごと服が弾け飛ぶ」

全く不便な、と愚痴を零しながら、彼女は目を瞑る。
瞬間。彼女の髪の毛の一部が解け、彼女の体を彩る服と化した。
そういう個性かとも思ったが、違う。

シリウスが示すこの結果は、個性ではない。

個性因子の働きを無効化する超音波と電磁波の最中、個性が使える訳がないのだ。
彼女のソレは、ただの『生態』だ。
抜け落ちた体の一部を別の形で再構築するという、僕たちとは根本的に違う生物。

「どうです、ヒーロー?
中々に良いデザインでしょう?」
「ごめん。僕、女の子の服の趣味とか分からないんだ」
「うーわ。モテないタイプでした…か!!」

彼女の拳が、僕に迫る。
威力は計算して、オールマイトのフルパワーの1．５倍。
全くの予備動作無しで放たれたソレに、僕は驚く暇もなかった。

「っ、ジャスティスブロウ!!」

それを迎え撃つべく、僕はその拳を打ち消すように、拳を放った。
瞬間。轟音と共に、空の雲が吹き飛んだ。

♦？♦？♦？♦？

「…コレ、紲星あかりですよね？」
「…ですね」

ノートパソコンに映る、シリウスのメインカメラの映像。
緑谷くんと戦うその存在は、僕と東北さんにとっては既知の存在だった。

６人目のボイスロイド。
それが、僕たちの追っていた特異生命体の正体だった。
東北三姉妹はまだだが、水奈瀬コウ、京町セイカ、そして紲星あかり。
ここまで重なれば、いやでも悟ってしまう。

僕たちボイスロイドは、望む望まないに関わらず、この世界を大きく変えてしまう存在だ。

「…紲星あかりに、こんな設定ありましたっけ? 精々、大食いくらいでしたよね?
なんでこんなアイアンマンの三作目みたいなことになってんですか?」
「なんにせよ、この世界で、とんでもないことが起きてるのは確かですね」
未来含めて。
僕が言うと、東北さんは「あ」と声を漏らした。
「どうかしましたか?」
「戦いと考察に夢中になって、完全に忘れてました。

オールマイト、どうするんですか？」

「あ」

♦？♦？♦？♦？

「……ＯＨ、ＭＹ…ＧＯＤ…」

私は今、信じられないものを見ている。

世間を騒がせているヴィジランテの一人、『ＳＡＶＥＲ』。

あの無機質な存在が、ただの少女と戦っている姿。

側から見れば、ヴィジランテの一人が、女の子に襲いかかってるようにしか見えない。

だが、長年培ってきた勘は、ひどく煩く私に叫ぶ。

彼女が、彼女こそが、オーガの仇なのだと。

「凄い！凄いですよ、ヒーロー！

私の攻撃で倒れないって、初めてです！」

「そりゃ、どう…も!!」

一撃一撃が、私の全力を超えている。
私の伸びた髪が、彼らの放つ拳が激突したことにより発生した風で揺れる。
目の前に広がる光景は、世界の終わりかと見まごうほどの破壊の嵐。

「ジャスティスラッシュ!!」
「おお!連打ですか!なら私も!!」

私が真っ先に感じたのは、危険。
ＳＡＶＥＲも少女も、この社会を簡単に崩壊させることの出来る力を持っている。
今、ここで止めなくては危険だ。
だが、あの拳の嵐に私が入ってどうなる?
久しく感じていなかった命の危機に、心臓がバクバクと動く。

…ん?待てよ?

ふと、私は違和感を感じ、周りを見る。
そこには、私が先ほど通ってきた道が、そのまま変わらず佇んでいる。

周りを見ると、景色が全く変わっていないことに気づいた。

「…どういう、ことだ…？

あれだけ激しく戦っているにもかかわらず、破壊の跡が一切ないぞ…!?」

私は思わず、彼らの戦いに目を向け、そして見た。

彼らの攻撃が、「互角の力」によって打ち消されることで、風圧のみを発する結果になっていることに。

私に迫るタフさを誇るクライシスオーガを、一撃で倒した少女の拳。

その攻撃を、彼は打ち返すのではなく、ただ打ち消していたのだ。

「とっくに気づいてますよ。手加減なんてしてたら、すぐ死んじゃいます…よ!!」

「ぐぅっ…!?」

びしり。

彼の拳に亀裂が走った。

少女の拳が…それもノーモーションではない、本気で踏み込んだ拳が、彼へと迫る。

「ＭＥＳＳＩＡＨ！エネルギーの供給速度と計算速度を３倍に上昇！
エレメンタルカセット『ＢＵＲＳＴ』を装填！
全力でぇ…、迎えぇ、撃ううつっ!!」
『了解』

瞬間。彼の拳の亀裂が瞬く間に消え、拳と拳が激突する。
凄まじい風圧が私に襲いかかる最中、ＳＡＶＥＲの体が変化していくのを見た。
人としての形は保っている。
だが、丸みを帯びていたスマートなボディは何処へやら、やけに刺々しい装い。
「シリウス…ＢＵＲＳＴ　ＳＴＹＬＥ…！」
身体中にある噴出口から、凄まじい蒸気が溢れ出す。
いや、蒸気だけではない。
何かのエネルギーなのか、緑の炎がゆらゆらと彼の体に纏わりついていた。

「ジャスティスゥ、バーストォ…ブゥウロォォォォォォォォォォォォッッッ!!!」
「きゃはっ！その調子ですよぉ、ヒーローォオ!!」

一瞬の静寂。
数秒遅れてやってきた衝撃波は、痩せ細った私の状態では耐えられない。
「ぐ、ぬぅ…!?」

踏ん張る暇も無いほどの、凄まじい風の暴力。
風圧で目蓋が落ちそうになる中、私は必死に彼らの隙を窺っていた。
「よっと…。おー、痛い痛い。
流石だ…と褒めておきましょう。

人工的に生み出された個性因子と、人工的に生み出された自己修復細胞の結合によって生まれた私ですらも超えますか」

「「……は?」」

♦?♦?♦?♦?

「京町セイカ。聞いた情報と全く違うんですが、どういうことですか?」

ナノマシンで麓に帰ってきた京町セイカに、先ほどの映像を見せる。

何が突然変異だ。

彼女の言葉から察するに、紲星あかりは、『人工的に作られた生命体』だ。

虚偽の情報を教えたのか、と問うと、京町セイカはぶんぶんと首を横に振った。

「いや、私も知りませんでしたよ!?

ただ、『ヤバい特異生命体が居るから捕獲しろ』って言われただけで!!」

「…所詮は組織の末端。ロクな情報を持ってるとは限りませんでしたか」

僕は言うと、シリウスのメインカメラに映る彼女の顔に向き直る。

「彼女は君と同じ時代から来た。
それは間違いありませんね？」
「は、はい。私が通ったタイムゲートは、アレが装置で起動したヤツだったんで、同じ時代出身ですよ。
あっ、でもっ、人工的に個性を作るとか、そういう技術なんてないですよ!?」
「君が知らないだけで、存在するんでしょう。
こちとら、世間に隠したオーバーテクノロジーには慣れっこなんでね」

慣れたくなかったけど。
あれだけの超兵器を、極々平凡な家庭に生まれ、死に物狂いで学んだだけの中学生が作れるような世界だ。
未来であれば、電子工学系専門の彼とは別分野のオーバーテクノロジーが存在していても、なんら不思議じゃ無い。

「…あれ？」
「東北さん、どうかしましたか？」

ーーーーーーなんで、個性を人工的に作る必要があったんでしょう?

僕が首を傾げると、東北さんは続けた。

「いや、今の時代で強個性持ちって、出生率が増えてますよね?」

「…まぁ、超常黎明期から結構経ってますからね」

「逆に、無個性の出生率って、年々減ってきてますよね?

私の代で、全体の僅か８%。

セイカさんの生きてる時代じゃ、淘汰されてる可能性が高いです。

逆に、強個性は出生率が増えていて、尚且つより強大になってきている…。

それこそ、あるだけで世界が崩壊するような個性があってもおかしくない。

だというのに、人工的に個性を作る必要がある…?」

はて、妙だ。

東北さんの言う通り、年々無個性の出生率は減ってきている。

無個性同士の親から生まれた子供でさえも、個性を持って生まれるような時代だ。

それから数百年経ち、文明が衰えていない京町セイカの時代に、個性を求める必要は

ないはず。

「セイカさん。あえて聴きます。
あなた、個性ありますか？」

「あ、はい。ありましたよ。発現して、すぐ消されましたけど」

消された？
一体どう言うことだ…？
僕たちが首を傾げると、彼女は不確かな記憶を探るように、ポツポツと語り始める。

「ある英雄が『個性は危険物だ』と世に知らしめたのが、五百年前でして。
それから、人間全員に『個性因子を消す』ことが義務付けられたんです。
因子を消す機械…ナノマシンでしたっけ？なんか、ソレがかなり昔の遺跡から見つかって、普及して。
その詳細は、私の生きる時代でも不明だっていう話は有名ですよ」

……あ。

ふと、先ほどの光景が甦る。

…成る程。そういうことか。

「……緑谷くんにメッセージを送信してください」

おそらくだが、緑谷くんも結論にたどり着いたことだろう。

僕のこの言葉が、彼に届きますように。

そう願いながら、東北さんが送信ボタンを押す音を聞いていた。

緑谷出久こそがヒーローなのである。

人工的に個性を作る。
僕が思いつかなかった道であり、僕が選ばなかった道。
その道の成れの果てが、僕の目の前に立つ女の子。

「西暦３０１５年。人工的に、尚且つ科学的に作り出された個性因子…『セルフギフト』。
それを医療用の自己修復細胞に結合させ、生まれたのが私です」
「セルフ、ギフト…？」

彼女がそう語ると共に、僕の腹に蹴りを繰り出す。
ナノマシンを密集させ、使い捨ての防壁を作り出し、それを受け止める。
彼女は僕の追撃を嫌ってか、すぐに距離を取った。

「つまり、私の存在自体が『個性』であり、『生物』なのです。
個性因子の働きを打ち消しても無駄ですよ。

私の細胞ひとつひとつが、個性因子が結合し、性質が変化した特殊細胞ですから」

瞬間。彼女の指から、熱線が放たれた。

まずい。避ければ麓の街が消し飛ぶ。

ナノマシンで防壁を作り、その熱線の軌道を空へと逸らす。

防壁が消えた先には、融解したアスファルトがあった。

「…っ!?いったい、どういう…!?」

「セルフギフトは、自然発生した個性の規定には当てはまりません。

セルフギフトは『個性因子そのものに置き換わる存在』。

要するに、『想像した個性を自由に扱える』んですよ」

「っ、ンなデタラメな…っ!?」

個性の強大さは、無個性の僕が一番よく知っている。

世間一般で言う、弱個性の一つでも厄介だというのに。

未来の人間は、どういう意図でこんな物騒な物を作ったんだ!?

「こんなのは、どうですか？
『国ひとつ焼き尽くせる炎の個性』と、『火がそばにあるだけで、核爆発並みの大爆発を起こす個性』」

いくらなんでも、デタラメが過ぎるだろ!!

まずい。
シリウスの耐久度なら痛くも痒くもないけど、このままじゃここら一帯が消し飛ぶ。
彼女の放つ炎と光が合わさる前に、僕は声を張り上げた。

「ＭＥＳＳＩＡＨ!!隔離フィールド展開!!」
『了解。範囲設定は？』
「半径十メートル!!他の生物を押し出す形で展開して!!」

大規模な被害を阻止するためのフィールド。

遮断性のバリアによって構築されたそれが、僕と彼女を覆う。
瞬間。メインカメラが爆炎に覆われた。
「…おぉ。すごい。これで融解してないとは、流石は隕石もへっちゃらな特殊合金。
じゃ、この『想像した破壊兵器を生み出す個性』でお相手しましょう」
「っ、フィールド拡大プラス硬度最大まで強化!!半径五百メートル!!」
フィールドを最大まで拡大し、迎え撃つ準備をする。
何か「どわぁ!?」って悲鳴と激突音が聞こえた気もするが、気にしてる余裕がない。
彼女が武装を生み出すと共に、僕もヘーパイストスの武器庫から武器を召喚する。
さらにイズク２号…ペルセウスを分解し、シリウスに装着させた。
…正直、これを出す事態にはなって欲しくなかった。
「武装、『オーディン』…。
…ＢＵＲＳＴ　ＳＴＹＬＥと、ペルセウスが合わさった状態でのこの武装…。
使う機会なんて無いと思ってたけど…」
「へぇ…。これなら、イケそうですね」

彼女が言うと、禍々しい装飾の鎌が、手のひらから形成される。
ＭＥＳＳＩＡＨの計算によれば、一振りで大地に亀裂が走るほどのエネルギーを秘めている。
あの馬鹿力で振り下ろされたソレをモロにくらえば、最悪シリウスが破壊される。
イズクジェネレーターのエネルギー供給速度をさらに引き上げ、槍を構える。

「行きますよ、ヒーロー!!」
「……来い。僕が、ヒーローだ!!」

鎌と槍が激突する。
エネルギーとエネルギーのぶつかり合いで放たれた雷が、地面を抉りとる。
力のぶつかり合いを制したのは、僕だった。

「ジャスティス…グン…グニル!!」
「そのダサい技名、なんとかなりません?」

が。僕の刺突は、空ぶった。

「この時代の週刊誌なら、『噂のヴィジランテ、謎の生命体に敗れる』…とでも書かれそうですね」

「かっ……!?」

彼女の蹴りが、防壁なしの僕の腹に突き刺さる。

僕が吹き飛ぶのを待たず、地面が融解するほどのエネルギーを放出しながら、彼女が僕に迫る。

「これで、救われる」

彼女がそう言って、鎌を振り下ろそうとしたその時。

「勉強、不足だったね…。

グングニル、はァ…、相手をォ…っ、必ずゥ…、射抜ううううくっ!!!」

「なっ!?」

僕の手が、勝手に動いた。
槍が彼女の掌を貫く。
これが武装『オーディン』の機能の一つ、『グングニルシステム』。
相手に確実に当たる時に、骨が折れていようが、無理やり僕の体を動かすシステム。
怪我はナノマシンで即座に治せる。

「…ちっ。素直に死んでくださいよ…。
でないと、私は…」
「…さっきから、何を言ってる…?」

ポタポタと滴が滴り落ちる。
彼女の掌が、不快な音を立てて元に戻った。

「ああ、言ってませんでした?
私、この時代で救われに来たんです」

救われに…？
僕が疑問に思ったのを悟ったのか、彼女はにっこりと笑って答える。
ーーーーーー私、死にに来たんです。
……は？
彼女の言葉に、目を丸くする。
言葉すら出ず、僕の舌がちろちろと前歯を舐めているのがわかった。
彼女は鎌をその場で振り下ろし、斬撃をエネルギーとして飛ばす。
僕は咄嗟に、槍でそのエネルギーを打ち消した。
「最初は、死ぬつもりなんてありませんでした」
僕のその隙を突き、鎌を振りかぶる。
僕は咄嗟にヘカトンケイルを起動させ、その柄を掴み、投げ飛ばした。
『強個性』も、『弱個性』も、『無個性』もありふれていて、平穏に生きている。

そんな歪な時代で、『普通』に生きてみたかった」

先ほどよりも高威力の熱線が、僕へと迫る。

バリアを生み出すことでなんとか逸らすも、ガラ空きになった脇腹に蹴りが放たれた。

「個性そのものである私を、『普通』として扱ってくれる世界。

この時代はそういう時代だと思って、脱走してきたんです。

最初にあなたを襲ったのも、あの京町セイカとかいう時空監視員を追い帰すためでした。

まぁ、あなたに肉壁をぶっ壊されて逃げたわけですが」

彼女の言葉に区切りが付くとともに、僕の体に衝撃が走る。

「『個性撤廃社会』の負の遺産…。

個性型軍事生体兵器『紲星あかり』が、普通に生きられる世界…だと思ったのに。

あのクライシスオーガ…でしたっけ？

アイツ、私とばったり遭遇した時、なんて言ったと思います？」

ーーーーーーバケモノって言ったんですよ。

ぞっ。

あの目。先生が道徳の授業で怒った時と似ている。

個性…セルフギフトとやらを使ってるわけじゃない。

ただの殺意だけで、こんなにも大きく感じてしまうのか。

「怒りで前がぐちゃぐちゃになって。もう、どうでも良くなって。

自殺しようかなって思ってた、その時でした」

ーーーーーーヴィジランテ『ＳＡＶＥＲ』のニュースを見たのは。

濃密な殺意が、僕に襲い掛かった。

「いやぁ、最初に会ったときは、京町セイカに夢中で気付きませんでしたよ。
まさか、この時代に『個性撤廃社会の礎を築いた人間』が居たなんて…。
あなたにまた会いたくて、私はこの分かりやすくて、尚且つ人を払いやすい場所で、あなたを待つことにしたんです」
「なんの話だ?」
「惚けないでください。
治療用ナノマシン…これを知らないなんて言わせませんよ」

イズクメタルと同じパターンか。
なんにせよ、僕が築いたもの全てが、彼女の時代においては普及しているのだろう。
でも、なぜここで治療用のナノマシンが出てくるのだろうか。

「あのナノマシン…細胞の一つ一つの除去が可能なそうですね?
その気になれば、『個性因子の切除』も可能だとか。
実はそのマシン、未来じゃ超重要になってるんですよ」
「……まさか」

いや、待て。

考えるな。僕がやってたことが、こんな…。

「未来では、個性因子の切除が義務付けられています。

でも、個性の強大さを知った人類が素直に従うでしょうか？」

こんな…。こんな…！

ーーーーーーあなたのせいなんですよ。私が生まれたの。

こんな、残酷な未来に繋がってるなんて…！

♦？♦？♦？♦？

「…バイタルから見て、緑谷先輩の心が折れました。
折れることはないって思ってましたけど…」

東北さんが、絞り出すように言う。
彼の心は強靭だ。それこそ、ちょっとやそっとじゃビクともしない。
だが、自分が「悪を生み出した」という事実を目の前にすれば、話は別。
ヒーローである彼にとっては、辛い事実だったろう。

「…彼はまだ中学一年生。折れることだってあります」
「だ、大丈夫なんですか…？助けに行った方がいいんじゃ…」

京町セイカがおろおろとした調子で、僕に問いかける。
東北さんも同じ思いなのか、僕をただ、じっと見つめていた。

「先ほど送ったメッセージを、強制的に開かせるだけで十分です」
「…それだけ？」
「大丈夫ですよ」

ーーーーーー彼は君たちが心配するような、立ち上がれない人間じゃない。

♦？♦？♦？♦？

絶望のあまり、全身から力が抜ける。

僕がヒーローを目指すことが、彼女を生み出した。

しかも、生体兵器？

冗談じゃない。僕の科学は、僕の努力は、そんなことのために積み重ねたわけじゃない。

「だから、あなたを殺して歴史を変えます。

個性という兵器に生まれ、なにもかもに縛られた私が生まれない…そんな素晴らしい未来に」

そうか。
彼女もまた、自分らしく在ることが許されなかった人間なのか。
彼女が鎌を振りかぶる。

ーーーーーーーぼ、僕だってヒーローを目指してもっ…！

ーーーーーーーあぁん!?クソデク!!いい加減夢見るのやめろよ、むこせーが!!そういう態度が一番ムカつくんだよ!!

僕が、僕のような人間を生み出していたなんて、笑えてくる。

ーーーーーーーこの力で、僕も最高のヒーローを目指せます！

なにが、なにが「最高のヒーロー」だ。
彼女が鎌を振り下ろそうとする。
そうだ。抵抗するな。僕がやってたことの責任は、ちゃんと…。

『君は誰ですか？』

ふと。シリウスのディスプレイにメッセージが浮かぶ。
届いた時間からして、僕が戦いにＭＥＳＳＩＡＨの機能を回していたから、見る暇もなかった。
僕が誰かって…？

「…しっかりしろよ、僕…!!」

ああ、そうだ。忘れちゃいけない。
言ってたじゃないか。

「さようなら、偉大なる男」

彼女の鎌を、右手で受け止める。

ざくり。
シリウスの防壁を抜けて、僕の右手が切り裂かれる。
まだ千切れてないだけマシだ。
痛みで泣くな。未来の絶望に屈するな。
自分に言い聞かせるように、僕は口を開く。

「前をっ、見ろォ！緑谷出久ゥウっ!!」
「…諦めると思ってたんですがね」

しっかり、彼女の顔を見ろ。
あの悲しそうな顔。あの苦しそうな顔。あの悔しそうな顔。あの辛そうな顔。あの絶望し切った顔。
良く見ろ。彼女を、しっかりと。

「目を、逸らすっ、なァ…!!
僕が助けるっ、人間をォ…しっかりとォ…、見ぃ、ろォォオ…!!」

「……は？」

彼女がぽかん、と口を開ける。

その隙を突き、僕はその鎌を握りつぶした。

「…っ、一体、どういう…？」

「もう、我慢しなくていい」

カセットを『ＢＵＲＳＴ』から、『ＴＡＮＫ』に。

『オーディン』の槍を分解して、僕の全身に纏わせる。

攻撃は捨てろ。今は、彼女を受け止めろ…！

「存分に泣いていい。存分に怒っていい。

大丈夫。僕が、全て受け止める…！」

ーーーーーー僕がヒーローだ。

♦？♦？♦？♦？

なんだ、コイツは。
目の前に立つ、私を生み出した原因とも言える男の姿が変化していく。
なにがヒーローだ。
怒りが膨れ上がるのがわかる。
お前のその遊びが、私を生み出したんだぞ。
その反省もせず、なにがヒーローだ!!
私の考えうる限り、最大最強の個性を作り出す。

「…『宇宙創生並みの爆炎を起こす個性』」

もういい。この星ごと焼き尽くして、歴史を終わらせる。
私の掌で、炎が燃え盛る。
これを放てば、この世界が終わる。

私は怒りのままに、その炎をヒーローを名乗るクソ野郎に向けて放った。

「最終防衛プログラム、起動!!」

無駄だ。私のこの炎は、この星を塵一つ残さず焼き尽くす。
すぐに消炭になるだろう。そう思っていた、その時だった。

「……は?」

私の炎が消えたのは。
あまりの驚きに、私は目を擦り、もう一度ヤツを見る。
ゴツゴツとした無骨な鎧に、背から形成された、幾千もの腕。
その掌の一つ一つには、彼の胸にある物と同じ光が宿っている。

「イズクジェネレーター最大出力を一万個。
どれほど大きな怒りだろうと、受け止めてみせる」
「…っ、どこまでも私をイラつかせますね、貴方はァ!!」

叫ぶと共に、拳を握る。

『拳だけで全てを破壊する個性』!!」

殺す。この人間だけは、この男だけは、私が殺さないといけない。

ーーーーーーーやった!勝ったぞ!流石は個性兵器!!彼女は我らのヒーローだ!!

ーーーーーーーうるさいなぁ。頭がお花畑な君にも分かりやすいように言ってやる。

要するに、君は用済みなんだ。安心して死ねよ、バケモノ。

あんな悲しい世界を作り出したコイツは、絶対に殺さなきゃ。

私が拳を振るう。彼の腕の一つがそれを受け止める。

「…出せよ、声。

僕が全部受け止めるって言ってるんだ」

がちゃり。

彼の仮面が脱げる。そこには、そばかすが目立つ地味目の男の子が居た。

「辛いとか、苦しいとか、全部を受け止めて、認めてやる…！

だから…っ、全力で叫べよ…!!」

「なにも、何も知らないくせに!!」

くそっ。なんで。なんで笑ってるんだ。

「こんな体に生まれたくなかった…!!

普通に可愛いお洋服やお化粧で、目一杯お洒落して!!

普通に美味しいご飯をお腹いっぱい食べて!!

普通にぐっすり寝て、普通に起きて!!

普通に好きな人と恋して、結婚して、子供産んで!!

普通にお母さんになって、普通に孫の顔を見て!!

普通な人生を送って死にたかった!!」

許さない。許さない!!
私を普通に産まなかった世界を作ったお前を、私は絶対に許さない!!

「なにがヒーローだ!!
私を拒絶する奴らが、そう言われて称賛されてるのが心底ムカつく!!
お前もそうだ!!私をこんな体に産んだ世界を作ったのに、なにがヒーローだ!!」

拳を何度も振り下ろす。
もう個性なんて関係ない、ただの私の拳。
それだけでもバケモノと言われた私の拳を、彼はただ受け止めた。

「…君。本当は生きたいんだろ」

……は?
拳が止まる。
コイツ、今、なんと言った?

体が震える。じわじわとヤツの言葉を理解するたび、気持ち悪い感覚が、私の胸をざわめかせた。

「君は、死ににきたんじゃない。
受け止めてくれる人を探しにきたんだろ。
ヒーロー飽和社会のこの時代に」

「……うるさい」
黙れ。それ以上言うな。

「僕のスーツ…シリウスを、個性でハッキングすることもできたはずだ。
そうしないってことは、期待してたんだろ」

「……うるさい」
もう、何も言わないで。

「でも、君は兵器という境遇から、こう思ってたんじゃないのかい？

『私を助けてくれるわけがない』って」

「……うるさい」

うるさい。くそっ。なんで。なんで…。

「だから、歴史を変えて死ぬことを『救い』だと思った」

「……もう、やめて」

なんで、コイツは…。

「大きな声で言ってみてよ。

『助けて』って。

僕が、君の全部を受け止める」

この人は、私の渇望したものが分かるんだ。

「…助けてよ…。
助けてよぉ!!

人殺ししかさせてもらえなかった世界から、私を連れ出してよ!!
私に、普通を教えてよぉ!!!
なんで、なんで誰も助けてくれないの!!!
こんなに苦しいのに、こんなに悲しいのに、こんなに辛いのに!!!!
誰も私を助けてくれなかったぁ!!!!」

ぼろぼろと、熱いものが流れる。
人生でただの一度も流したことのなかったそれが、涙であることに気づかなかった。
彼はしゃがみ込むと、スーツを脱ぎ、その小さな体で私を抱きしめた。

「大丈夫だよ。僕が、助けに来たから」

「……っ、うあ、ぁぁあ……っ!!」

私は大声で泣いた。

私を抱きしめる彼は、私に今まで居なかった存在。

ーーーーーーあかり。辛いときは、大きな声で助けを呼べ。

きっと、ヒーローが来てくれるさ。

この人が、私のヒーロー。

未来人が殺しに来た

戦いは終わった。
泣き疲れて眠った彼女をおぶり、僕は踵を返す。
「……今日…あ、もう日付変わってるのか。
昨日は疲れたなぁ」
僕が世界を大きく変えてしまうなんて、思いもしなかった。
個性を作り出さなきゃいけない世界。
そんな未来になるなんて、これっぽっちも思わなかった。
「……ま。僕が変わる必要はないか」
それでも、苦しいって言っていたこの子を救えた。
僕が変わることで、世界は大きく変わってしまうのかも知れない。

だけど、僕はそれでも、最高のヒーローであることをやめないだろう。

「…あ、そうだ。ちゃんとお礼言わなきゃ」

先生にありがとうって言わなきゃ。

あの短い言葉で、僕は立ち上がることができて、彼女を救えた。

……あれ？いや、待てよ？

彼女を京町さんに引き渡すと、また彼女は辛い世界で生きなきゃいけなくなる。

そうなれば、彼女はもっと苛烈な方法で、歴史を変えようとするかも知れない。

このまま彼女を取り逃したという体で、どこか遠くへ逃すのも…。

「緑谷せんぱーい!!」

…あれ？これ詰んでない？

きりちゃんの声を聞いた時、僕はだらだら冷や汗を流していた。

♦？♦？♦？♦？

「お、おおっ、お、おおおおおおおオールマイトお!?
このガリガリガイコツが!?」

「仮にも憧れの人にだいぶ失礼ですね、君」

現在、鎌倉山頂上にて。

車の問題と社会的な問題で、倒れた人間をホテルにも、戸籍のない人間を病院に連れ

て行くことも出来ない状態。

軽自動車の中はぎゅうぎゅう詰めで、ガリガリのオッサンが後部座席を。

目元が腫れた、胸が…ああ、まぁ、隠さず言うと「おっぱい」が大きい女の子が、前の座席を占拠していた。

「…いや、マジだ。生体スキャニングでようやくわかったけど、この人マジにオールマイトだ。この姿とこの腹の傷は一体なんだ？確認すると三年前くらいについた傷だ。毒毒チェーンソーの戦闘でついたものとは思えない。じゃあ何か強大な存在がオールマイトを襲ったんだろうか。報道されていない敵のパターンは大きく分けて二つ。一つは取るに足らないやつ、もう一つはマジでヤバい敵…。取るに足らない敵にオールマイトがこんな傷をつけられるわけが…」

「緑谷くん。そこまで」

このぶつぶつ、久々に聞いた。

緑谷くんの持つデバイスを覗き込む京町セイカが、感嘆の声を漏らす。

「はへぇ…。呼吸器傷ついて胃袋無くて、よくここまで活動してますね。
未来でも珍しいですよ、こんなの」

一応、オールマイトの事の顛末を語っておこう。

彼は緑谷くんが展開したフィールドにはじき飛ばされ、さらには運の悪い事に、木の束に後頭部をぶつけ、脳震盪で気絶。
いつものような筋骨隆々とした状態に変身する前に弾き飛ばされたようで、完全にのびてた。

今はナノマシンで、損壊した呼吸器やら胃袋やらと共に治療中だ。
万が一にも起きないように、後遺症も副作用もない象用の麻酔薬まで打ってるらしい。

「…にしても、未来はどういう世界なんでしょうね。
個性による兵器を必要とするってことは、戦争でも起こってるんでしょうか」

「あ、はい。第三次世界大戦勃発中です」
「「は？」」

今、なんと言った？
第三次世界大戦。アインシュタインが「人の文明の終わり」とまで暗喩した戦争。
３０００年代にもなって勃発してるのか。

「そんな中、京町さんはなんで徴兵されてないんですか？
あれだけ戦えるのに？」
「大事な兵器にコーヒー溢しちゃって大爆発起こしたからです！」
「「ポンコツにも程があるでしょ」」

戦時中にそんな大惨事を起こすな。
下手すりゃ死刑だぞ、それ。

「よくそれで無事でしたね」
「はい！尻拭いとして、『時空監視員になって、過去の世界に行った特異生命体を捕まえ

てこい』と言われたので！
試験は難しかったけど、なんとか合格しましたよ！」
「……ん？」

思考の海に潜り、状況を考える。
その特異生命体という存在の本当の正体は、個性を再現した生体兵器。
ということは…。

「脱走兵だと思います。
『脱走した』と自己申告したので、間違い無いかと…」
「あー…。強すぎて追うに追えなくて、『捕まえられればいーや』みたいな感じで、厄介払いメインで送られてきた可能性ありますね、コレ」

ただの人間に制御し切れる兵器じゃなかったんだな、この子。
それこそ、緑谷くんのチートの代名詞とも呼べる永久機関を1万個も用意しなければ、防げないほどの攻撃。
それをなんの副作用もなしで放てるブッ壊れ人間を抑えろ、というのも無理な話か。

「厄介払い!?私がですか!?」
「「妥当な判断でしょ」」

この未来人、どこまで自惚れれば気が済むんだ。
そんな「青天の霹靂!」とばかりに驚くな。
晴天の太陽並みに普通の判断だろ。
僕が心の中でツッコミを入れていると、東北さんが、ふと声を上げた。
「そういえば、捕まえた時のことって聞いてます?」
「すぐにこの時代に駆けつけるって!」

……あれ?これ、ピンチなのでは?

と、僕が思ったその時。
空から赤い一条の光が落ちてくるのが分かった。

「緑谷先輩!!今すぐオールマイトとその子を外に!!
それでいて、なるべく遠くに!!」
「ペルセウス!!」

僕たちの体が浮遊感と共に、流れる景色の中へと突入する。
瞬間。落ちてきた光が車に着弾し、爆発を起こした。

「あァァァーーーーッッ!!
なけなしの給料で初めて買った僕の車ァァァァァァーーーーッッッ!!!」
「先生の大声珍しっ」

爆散する車に、思わず絶叫をかます僕。
貴重品は持ち出しておいて良かったが、泣きそうになる。
車自体が貴重品だから。

「あー…。厄介払いってのはマジみたいです。アレ、私ごと殺す気ですね」

「僕ただの教師なのに、なんでこんな目にあってんのマジで!!」

爆風が僕たちの頬を撫でる中、緑谷くんはターンをかけ、無理やりにバイクを止める。

「シリウスは処理落ちで、三日間のクールダウンが必要……。

なら、カノープス!」

緑谷くんがデバイスに軽く触れると共に、ほっそりとした印象を受けるスーツに身を包む。

彼は運転席を離れると、僕の肩を軽く突いた。

「先生、バイクの運転できますよね。

ペルセウスで逃げて…」

「いや、もう遅いみたいですよ」

僕が言うと共に、鎌倉山が緑谷くんが張ったものと同じフィールドに覆われる。

ピンチとは、こうも続くものなのだろうか。

爆炎の中、一つの人影が姿を表す。
いかにも「未来人」と主張したような、パツパツスーツに謎のマスク。
手には、京町セイカが使っていたものと似通った兵器が握られている。

「京町セイカ他諸君。よくぞ制御装置を壊して脱走した個性兵器プロトタイプ『紲星あかり』を捕らえてくれた。
だが、過去の人間が知るには、個性兵器は強大すぎる。
運が悪かったと思って、潔く死んでほしい」
「うっわ…。ベタなの来ましたよ」
「そのベタなのに殺されかけてんですよ、僕らは」

まずい。足手まといが二人、戦力にはなるが肝心なところでミスるポンコツが一人。
起きれば戦力にはなるが、後始末が面倒そうなのが一人。
起きれば確実に戦力にはなってくれるが、その後どうなるか分からないのが一人。
この合計5人を側にして、緑谷くんは戦わなくてはならない。
救助と戦闘を同時にこなしていた彼にとって『防衛』は、初めての形だ。

「京町セイカ。君の武装は凍結させてもらった。君は戦闘力だけで言えば、なまじ優秀だからね」

悲報。ポンコツがマジに役立たずになった。

「あ、あれっ？あれれ？なんでです？展開できませんよ!?」

「…話を聞かないのは相変わらずか。そのポンコツ具合も、もう見飽きたァ!!」

彼が引き金を引くとともに、レーザーが僕たちに殺到する。

一つの銃口で、なぜここまでの量のレーザーが出せるんだ。

「きゃあっ!?」

「京町さん!!」

そのレーザーに対し、緑谷くんは高速でそれらを弾き飛ばす。

「きゃん!?」

「あっ、京町さんごめん!!」

風圧で、京町セイカが吹き飛ばされ、運の悪いことに木にぶち当たって気絶する。
緑谷くんは慌てて彼女を抱えると、僕の方へと投げる。

「先生、頼みます!」
「任されました」
「させるか!!」

未来人が銃口を、宙を舞う京町セイカへと向ける。
ヤツが引き金を引く前に、緑谷くんは未来人に蹴りを入れた。
が。それを受けた未来人は一切動じず、緑谷くんの足を掴む。

「イズクメタル製…!?」
「イズクメタルのことを知っているのか。
どうせ京町が漏らしたん…だろっ!!」

がっ。
未来人の拳が、緑谷くんの脇腹に突き刺さる。
同じ金属同士がかち合う音と共に、緑谷くんは勢いよく吹き飛ばされた。

「くっ…!?」
「今のうちに、雑魚を殺す！」

緑谷くんが体勢を立て直すのを待たず、未来人は僕たちに向けてレーザーを放った。
やばい。ペルセウスのエンジンを入れても間に合わない。
僕が焦ったその時、緑谷くんが無理やりにエネルギーを噴出し、肉壁となった。

「させ、るか…!!そんな、こと…!!」
「しつこいな、お前!!」

未来人の拳が、緑谷くんの顔面に突き刺さる。
吹き飛ばされた緑谷くんが、僕の前にまで転がった。

「ぐうっ……!?」

これは、まずいな。

シリウスのような超火力を積んだスーツは、今現在この場にはない。

同じイズクメタル同士、打ち合えば必ず綻ぶ。

だが、以前聞いた性能では…。

「機動力に極振りしてるんで、装甲は他と比べてかなり薄いです。

下手すりゃ、自己修復が追いつかない。

アルデバランなんて、装甲はカノープス以下だし、なんなら戦闘用の装備なんて微々たるものです。

最もアレ相手の防衛に向いてない装備しか、この場にはありません。

最悪全滅エンドもあり得るかも…」

「……東北さん、彼女たちをよろしくお願いします」

淡々と語る東北さんの頭を軽く撫で、ペルセウスの前に立つ。

「せ、先生…？なにを…？」
「ガキボコるのって、楽しいですかね」

全く。前世も今世も保身的な僕は、絶対にやらないと思ってたのに。

「…なんだ、お前は？」
「この子の先生です」

どうやら僕は、先生になり切るあまり、気が狂ってしまったらしい。

♦？♦？♦？♦？

先生が、僕の前に立つ。
だめだ。先生は極々普通の人間。
彼曰く、格闘技術を鍛えたわけでも、個性があるわけでもない、学歴しか取り柄がない本当の凡人。

「先生?じゃあ言ってやれよ。
『さっさと諦めろ』って。お前たちが死ぬことで、我が国の未来は救われる。個性兵器のことを知る人間も過去からいなくなり、世界が守られる。ハッピーエンドだ」
「おかしいですねぇ。
歴史の教科書に、『ガキ殺したおかげで国が救えた』なんて書かれてませんけど?」

先生が煽る。
ダメだ。先生、逃げてくれ。
声を出そうとするも、先生があらかじめ決めておいた、『一等星』専用のハンドサインを出す。

「それはこの時代の教科書だろう?」
「歴史の教科書は紀元前までも書かれてんですよ。国によっては、全然違う内容が書かれてる。
青春投げ捨てて５０近い国の歴史の教科書全部覚えた僕に、歴史の言い合いで勝てると思うなよ、低脳未来人」

『時間稼ぐ。なんとかしろ』。
先生が言うと、未来人はその銃器を先生に向けた。
「この先の時代、何が起きるかもわかっていない過去の人間が、歴史を語るのはやめたほうがいい。
この兵器は我々のもので、本来ならば秘匿すべきもの。
それに関わった君たちは、今ここで死ぬべきなんだ」
「こんな子供を兵器呼ばわりとは、未来人はモラルのかけらも無いようだ」
「正確には兵器ではないよ。そのプロトタイプだ」
プロトタイプ…？
僕らが疑問に思ったことがわかったのか、未来人が「中途半端に知ってるのも未練だろう。冥土の土産だ」と言葉を続けた。
「紲星あかりは、個性因子に代わる働きを持つ特殊細胞の『工場』として作り出された。
どんな個性でも作り出せることが確認でき次第、脳の自我を司る部分を修復不可能な

ほどに破壊して思考を排除。
要するに、『生きたまま死んでもらう』。
彼女の体を掻っ捌き、細胞を軍人に移植することで、我々は世界唯一の『個性軍隊』として、世界に君臨するのだ!!」

今、なんと言った？

僕たちが驚愕に目を剥く暇もなく、未来人の持つ銃器から、レーザーが先生に向けて放たれる。
先生は咄嗟に身を翻して避け、愛用のパーカーの一部が焦げた。
「ちっ…。車といい服といい、慰謝料請求モンですよ、これ！
道徳教育もなってないヤツが軍人なんかすんな!!胎児からやり直せ!!」
「すまないなぁ。私達の時代の通貨は、この世界では無価値なんだよ。
あと、言っておく。私はお前のような口の悪い人間が大嫌いだ!!」

レーザーが先生に向けられっぱなしだ。

かっちゃん並みに煽り耐性ゼロだったんだな、あの未来人。
でも、このままじゃ先生が…。

「緑谷先輩、ちょっと」
「きりちゃん…?」

先生が攻撃を避けてる最中、きりちゃんが僕に駆け寄る。
……って、おい。ちょっと。

「なんでその子引きずってんの!?」
「この子に協力してもらうんですよ。
イズクメタルを砕けない以上、オールマイトはハッキリ言って役立たず。
さらにいうなら麻酔が効き過ぎて、叩き起こせません。
セイカさんはのびてて、起こしても戦力にならない。
となると、フツツーに寝てるだけの超人起こした方がいいでしょ」

平和の象徴を役立たず呼ばわりする小学生が、目の前にいた。

いや、まぁアンチってわけじゃなくて、本当にそう言う状況だから仕方ないけど。
でも、戦いたくなくて逃げてきたこの子を、また戦わせてしまうのは…。
「いや、でもこの子はもう戦いたくないわけで…」
「誰が戦わせるって言いました？」
彼女は言うと、何処からか何かの実を取り出す。
その実を彼女の口の中に突っ込むと、即座に耳を塞いだ。
「みっっっっっ、ぎゃあああああああ!?!?!?
辛っ、なにこっ、かっらぁぁぁぁぁぁあああああああアアアアア!?!?!?」
「ジョロキアです。先生の目覚ましドッキリ用に買っといて良かった」
「先生がきりちゃんのことクソガキって言い続けるの、なんとなく分かった気がする」
辛さに悶え、げほげほと咳き込む少女。
彼女は涙目できりちゃんの胸ぐらを掴み、迫った。

「なにすんですかいきなりいいい……！」
「アレ見なさい」

きりちゃんが指を向ける方向には、ほうほうの体でレーザーを避ける先生の姿。
そもそも体育の授業でも、生徒たちより先にバテるような人だ。

「クソエイムにも程がありませんか!?え？なに？素人!?まだＦＰＳゲームプレイヤーの方がマシなんじゃないんですかねぇ!?それで軍人やってるなら、即座にやめて転職サイトでも覗いたらどうですかー!?」
「くそっ…！無駄に素早い!!」
「あとさっきからボイチェン通して話してるんでしょうけど、隠し切れないほどに不細工な声ですね!!スーツ越しにも分かるくらい腹はでっぷりしてるし、股間についてるソレもお粗末だ!!デベソで短足！しかもパツパツスーツだからスネ毛の処理もしてないこと丸わかり!!身嗜み最底辺の自覚ありますか!?わかったらとっとと未来帰って、無駄毛処理とダイエットと整形と、その短小治すのに勤しみやがれぶわァァァァァァああああああああーーーーーーーーかァァァァァァーーーーーーッッッッッッ!!!」

「うごァァァァァァあああっ!!!!!」

めちゃくちゃ必死に煽ってる。

僕たちの方に、注意を寄せ付けないようにしてるのか。

もう体力も切れてるはずなのに。

「アンタとそこののびてる未来人助けるために、パワードスーツも個性も持たない凡人が身体はってんですよ。

戦えとは言いません。力貸せ」

きりちゃんが気迫を纏って、少女に迫る。

無個性で筋力もない、ただ頭がいいだけの女の子。

そんなきりちゃんが、僕が苦戦した相手を、ただ睨むだけで圧倒していた。

彼女は暫し沈黙し、きりちゃんの手を掴んだ。

「……何すればいいですか?」

「最高のヒーローの再臨を、ちょっとばかし早めてください」

♦？♦？♦？♦？

僕の罵倒ボキャブラリーが枯渇する…！

やべっ、喉潰れそう…！

もう嫌だ走るのやめたい…！

いや、やめるな!!やめたら死ぬし、生徒も死ぬぞ水奈瀬コウ!!

全力で生徒を守るため、全力で煽れ!!

「その短小なら付き合った女も『あ、うん。す、すごいね…？』って反応だったんだろうなァ!!

あらぁごっめんなさぁーい!!

それとも童貞でしたかぁぁあ!?!?」

「あァァァァァァっ!!!てめっ、俺の禁句を連発しやがってェェェェェ!!!」

クソったれ!!もう下ネタしか思い浮かばんぞ、ちくしょう!!
足がもつれそうになる。
だめだ、転ぶな。レーザーを避けることに集中しろ。
あの子たちの準備が終わるまで、僕が耐える必要がある。

「避けんな、このクソ教師!!」
「この程度煽られただけで癇癪起こすあたり、ガキっぽさが抜けてませんねェ軍人！」

あー、くそっ。
なんで僕がこんな目にあってんだ。
ただ、フッツーに教師するだけの人生送る気だったのに。

「いい加減死ねぇ!!」

流石に煽りすぎたのか、避けようのない極太レーザーが僕へと迫る。
よし。間に合った。

「ジャスティィィィィィィイイイイス!!!
カっ…ノォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッッッ!!!」

緑谷くんが、裂帛の気合いと共にレーザーをレーザーで吹き飛ばす。
僕の前には、刺々しいデザインのシリウスが立っていた。

「…は?」
「先生、時間稼ぎ、お疲れ様です。
彼女のセルフギフトで、クールダウンの時間をスキップしてもらいました」
「だーっ!!相手の煽り耐性がなさ過ぎて、逆に苦労したぁ!!」

勝ちが確定した。
筋繊維がズタボロになった影響か、ガックガクの足が崩れ落ちるように、僕は尻餅をつく。

「くそったれっ、未来にゃロクな人間いねーのかパソコンの右クリックのし過ぎでくた

ばりやがれ死ねっ!!」
「先生…。かっちゃん並みに口悪くなってますよ。あと、パソコンの右クリックのし過ぎじゃ人は死にません」
「死にかけりゃ口も悪くなりますよ」

呆然としている未来人に、緑谷くんが歩み寄る。
背後からでは見えないが、付き合いが長いため、歩き方一つでだいたいわかる。
小股でいて、それでいてゆらゆらと揺れている。
怒り過ぎて、逆に頭が冷えているのだ。

「僕は戦いが大嫌いだけど、やらなきゃ助けられない命があることも知ってる。
僕は先生も、きりちゃんも、京町さんも、オールマイトも、あの子も助ける。
そのために、お前を殴る」

緑谷くんは言うと、拳を握る。
いつものような、技名を言う前の息を吸う音は、聞こえない。
未来人はというと、更に大きな兵器を作動させ、緑谷くんに向けていた。

「この兵器は、海の向こうにある大陸さえも粉々にできる…!!
お前らが死んでも、個性兵器が生きられるギリギリの威力だ!!」
「……」

緑谷くんが、軽く息を吸う。
未来人が兵器の引き金を引こうとした、その時だった。

「正義の拳ィッ!!」

兵器が、その銃口に放たれた拳の風圧によって、あっけなく破壊されたのは。

「へ?」

いや、待て。
風圧だけで、あんなに威力高いの?

「ば、バカな…。イズクメタル製の、最先端兵器だぞ…？ロストテクノロジーを復活させた、最強の兵器が…」

あれだけ硬度を自慢してたイズクメタルを、ただの風圧で吹っ飛ばしたのか。

からん、からん。

吹っ飛ばされた兵器の破片が、雨のように降り注ぐ。

緑谷くんはその中を歩き、未来人の前に立った。

「お前が最強の兵器を使うなら、僕はそれすらも超える」

「なっ、なんだよっ…!?

なんなんだ、コイツは…!?過去に、こんな威力のある兵器が…!?」

ーーーーーー僕は『最高のヒーロー』だ。

狼狽を露わにする未来人の顔に、拳が突き刺さった。

緑谷くんは、そのまま拳を地面に向けて振り下ろし、未来人を地面に叩きつける。

瞬間。鎌倉山に大きな亀裂が走った。

「……や、やっちゃった」

最高のヒーローを名乗った男の、情けない声が響いた。

確実にニュースになるなコレ

結論から言おう。
鎌倉山頂点付近が、ものの見事に割れた。
幸いにも人的被害は無かったが、初めて活動による周囲への被害が発生したことにより、緑谷くんはひどく落ち込んでいた。
まぁ、すぐに立ち直ったが。
…状況が状況なだけに、今回ばっかりは怒る気にもなれない。

「……」
「京町セイカ、大丈夫ですか？」
「あっ、水奈瀬さん…」

そんな彼らを放って、僕は京町セイカの肩を叩く。
流石に、厄介払いで追い出された挙句、殺されかけたのだ。
心が磨耗しているのは、見て取れた。

「…その。本当にごめんなさい。
私のために、緑谷さんたちと体を張ってくださったんですね」
「自惚れも大概にしたらどうです？
『緑谷くんが負ける＝僕ら死ぬ』でしたので、自分のためにやったんですよ」

僕が言うと、京町セイカは笑みを浮かべた。

「…やっぱりあなた、きりたんが言ってたみたいに、性格悪いですね」
「自覚はあります。治す気はないですが」

よっこらせ、と呟きながら、彼女のすぐ側に腰掛ける。
目の前に広がるのは、修復していく破壊の痕跡。
緑谷くんのナノマシンと、紲星あかりのセルフギフトとやらで、山を癒しているのだ。
気絶した未来人は、起きて暴れないように『重力を強化する個性』で縛り付けているため、問題はないという。

「…自分が厄介者扱いされてるのなんて、とっくに知ってたんです」
「ええ。まぁ、あれで自覚して無かったら、流石に馬鹿が過ぎてます」
「前々から思ってましたけど、そんなはっきり言います!?」
「僕は嘘つきですが、他人への評価に関しては嘘をつきませんので」

評価というのは、薬だ。
人や種類によって効果は違うし、劇薬にも良薬にも変わる。
小学生の人格を形成する上で、重要な部分だと言える。
だから僕は、頭ごなしに褒めることも、貶すこともしない。
無論、度が過ぎれば批判するし、ちゃんと成果を出せば褒める。

「…でも、緑谷さんが倒した…私の上司は、凄く良い人だったんです。
私のミスを、いつだって笑って、『お前はミスから立ち上がれるヤツだ』って褒めてくれるんです」
「そうは見えませんでしたが」
「…多分、ずっと我慢してたんだと思います。そうですよね…。
こんなポンコツの尻拭いばっかさせられて、殺したくないわけないですよね…」

言うと、彼女はぽろぽろと涙をこぼす。
それなりに年齢を重ねてる影響か、緑谷くんや東北さんのように、大声で泣き叫ぶことはない。
…教え子にはあまり言わないようにしているが、彼女の年齢であれば大丈夫か。

「これは先生やってる人間からのアドバイスです。
受け入れる評価は、選んだ方が良いですよ。
中には、評価という名の薬に紛れて、毒物がありますからね」

子供の中には、この言葉を曲解する奴が必ず現れる。
だから僕は、この言葉を生徒に送ったことはない。

「…ちゃんと、付け足した方がいいですよ。
『称賛ばかりを受け入れろって意味じゃない』って」

ポンコツのくせに、こう言うところは鋭いのか。

「なんでも答えを出し示す職じゃないんですよ、先生というのは。
痛い目を見ずに育った人間なんて居ません。
間違いに気づかずに生きてきた人間なんて居ません。
誰にも批判されずに生きてきた人間なんて居ません。
そういうことを学ばない輩を、『バカ』って言うんですよ」

ま、限度がありますが、とだけ付け加え、僕はぼりぼりと頭を掻いた。

「…車、紲星さんのセルフギフトでなんとかなりますかねぇ」
「いい話の余韻台無しですよ!?」

♦?♦?♦?♦?

「車は、これでいいですか？
『直す個性』で手当たり次第の破片から、車を作り出しました！」
「違う違う違う違う!!

車の種類も…なんなら道具の用途までも、なにもかもが違う!!」

直った車を前に、僕…緑谷出久である…は、ツッコミを入れた。
彼女、紲星あかり…本人の希望であかりさんと呼ぶ…の隣にある、謎のオブジェ。
どう見ても、マリオカートで出てきそうなモンスターマシンだ。

「先生のは普通の軽自動車!!
使い古されたフツツーの中古車なの!!
イズクメタル使用してないの!!」
「…?このくらいの装甲がないと、生き残れませんよ?」
「それは!!君の時代が戦時中だからでしょ!?
この時代は少なくとも、そんな物騒…いや、物騒か…?
とにかく!!未来に比べりゃ平穏な時代なの!!」

この子、抜けてる。
兵器として暮らしていた彼女に、僕らの普通は難しそうだ。
こてんと首を傾げる彼女に、「とりあえず、破片に戻して」と指示する。

が。その指示の仕方が悪かったのか、彼女は車をぶん殴ってスクラップにした。

「……あれ？もしかして、普通じゃありませんでした？」

「あ、うん。ハッキリ言うと、だいぶズレてる」

僕が指摘すると、彼女は少しばかり落ち込んだ様子を見せた。

やばい。

普通に固執してた彼女に『普通じゃない』という言葉は、もうちょっとオブラートに包むべきだったかも。

「あ、あのっ！その、仕方ないことだから！

カルチャーショック！日本から見た食虫文化とか、そう言う類と同じだから！」

慌てて僕が励ますと、あかりさんは笑みを浮かべた。

「大丈夫ですよ。そういう人じゃないって、ちゃんと分かってますから」

良かった。ちゃんと伝わってた。
…それはそうとして。

「ちゃんと車は直してね。
バッラバラになった状態じゃ、僕も直しようがないから」
「分かってますよ。えい！」

彼女が声をあげるとともに、バラバラになった破片が元に戻っていく。
そこには、僕らのよく知る車…ではなく。
ドラマの中でしか見たことがないような戦車が完成した。

「違う!!これ戦車じゃん!!!」
「普通の車って言ってませんでした？」
「だから戦闘機能要らないんだって!!」

彼女に普通を教えるのは、ちょっと骨が折れそうだ。

♦？♦？♦？♦？

未来人の目が覚める。
彼を威嚇するように、シリウスを纏った緑谷くんと紲星あかりが彼の目の前に立った。

「ようやく起きたか」
「ひっ、ひいいいいいいいい!?!?」

未来人は屁っ放り腰で、彼らから離れようとする。
が。その背後に回った京町セイカが、緑谷くんがチューニングした銃器を構えた。

「逃げないでくださいよ。
戦闘に関しては、ポンコツじゃない。
それは、あなたがよく分かってますよね？」
「き、京町セイカぁぁぁぁぁぁ……!!」

囲まれた未来人に、緑谷くんがその胸ぐらを掴み、顔を寄せる。

「元の時代に帰れ。
お前たちの時代の地球がこうなって欲しくないなら、二度と僕たちに手を出すな…!!」

緑谷くんは言うと、月に向けて手を向ける。
瞬間。一条の光とともに、月が爆散した。

「ひっ…、ひぁっ……。ひゃあああああああ!?!?!」

未来人が謎の穴を作り出し、その奥へと消える。
謎の穴が消えて無くなるのを確認し、緑谷くんが指を鳴らす。
瞬間、爆散したはずの月が元に戻った。

「うーわっ。今の完全に敵ロールプレイでしたよ…。
僕がやってんの、最高のヒーローのロールプレイじゃなかったですかね?」

「アイアンマンもキャプテン・アメリカも通った道ですよ」

タネを明かせば、なんてことはない。

車の中を異世界に変えたプロジェクタープログラムをイズク6号・ガニメデに搭載。

空に月が爆散するという映像を映し出しただけだ。

……山での戦いといい、割れた山が戻ったことといい、確実にニュースになるな、コレ。

「緑谷先輩。うだうだ言うのはやめなさい。

この子とセイカさん、助けられなくても良かったんですか？」

「よくない。良くないけども…」

「どのみち、ああいうインパクトあって『確実にヤバい』って思わせるような方法を取らなきゃ、効果はないんです。

機密情報ベラベラ話すあたり、それなりに地位はありそうですから、『あかりさんに手ェ出したらヤバいセコムが来る』ってことが分かってる分、管理に血眼になると思いますよ」

東北さんのお叱りを受けながら、緑谷くんが恐縮する。
僕は、地面に寝転がった一人の男の側に立っていた。
「……で。この人マジでどうします？
麻酔効きすぎて起きませんよ？」
「「「あ」」」
こうして、僕たちの未来人と謎の生命体を追う物語は終わった。
後日、同居人が僕の家に一人増え、緑谷くんの家に一人増えた。

梅の精霊とクールド天然
先生の自宅でラブコメするんじゃありません！

母さんがまだ普通で、元気だった頃。
俺…轟焦凍が思い出せる、朧げでいて、それでいて「楽しかった」と思い出せる光景。
そこに至るまでの経緯を語っておこう。
冬姉と夏兄が友人と遊びに行って、クソ親父は仕事。
母さんとテレビを見ていた俺は、酷く退屈していた。

「焦凍。お母さんとお出かけしましょうか」
「…うん」

そのことを悟った母さんが、俺を助手席の子供用シートに乗せて、車を運転した。
暫くの間、母さんと話しながら、目的地への到着を待つ。

「着いたわ。ここからちょっと歩くけど、大丈夫？」

「…うん」

着いた場所は、梅の花が綺麗な場所だった。
舞い散る花弁は、桜の花びらに勝るとも劣らない美しさがある。
幼い俺の心は、すっかり梅の花に釘付けになっていた。
梅の花に見惚れながら、歩くこと十分。
途中でお母さんに抱っこしてもらった俺が見たのは、二本の梅の木だった。

「母さん、この木なに？」
「この木はね、『万年開花』っていう、不思議な梅の木なのよ」

曰く、超常黎明期以前からここにあった。
曰く、双子の梅の精霊がいる。
曰く、一度も枯れたことがない。
曰く、万年、花を咲かせている。

聞けば鼻で笑うような、そんな与太話。

俺はその話を夢中で聞いていた。

「この梅の木はね、お母さんのお友達なの」

お父さんは知らないけれど、と付け足し、母さんは梅に目を向けた。

「焦凍。あなたも、この子たちの友達になってくれる？」

「…うん」

その日の母さんの顔は、忘れられなかった。

♦？♦？♦？♦？

未来人を撃退した後の話を、少ししておこう。

平和の象徴は、ぐっすりと寝てたので、貧血で倒れた病人として病院に押し付けてきた。

緑谷くん曰く、「治ったらまた筋肉ムキムキになるかと」らしい。
治った途端にマッスルになった気がしたけど、無視した。
有り体に言えば、面倒そうだから逃げた。

結局、僕の車は直らなかった。
『巻き戻す個性』で戻せ、と提案はしたものの、あかりさん曰く、時間関連の個性は細かい調整が難しいらしい。
ただ高火力をブッパする個性は、構成が楽でいいとのこと。
それでビッグバン並みの爆炎を生み出すあたり、個性ってのは本当にデタラメだ。

「…で。この消し炭、なんですか？」
「フレンチトーストです！」
「白米炊いてんのにフレンチトースト作るバカがここに居た」
「罵倒が直球!!!」

最後に。
彼女らの戸籍を東北さんのハッキングやらクラッキングやらでなんとかでっち上げ、

京町セイカは僕の親戚、そして同居人となった。
あかりさんは「イズクくんの側じゃなきゃ嫌です」と駄々を捏ね、緑谷家で暮らしている。
彼と同じクラスに編入するそうだ。

「…で。受かりましたか？」
「はい！水奈瀬さん考案のドジっ子の矯正、やって良かったです！」

流石に無職を養う気はなかったので、京町セイカ…セイカさんは、スーパーのパートに入ってもらうことになった。
ポンコツ故にとんでもない失敗をしないよう、一週間をかけ、寝る間も惜しんで彼女のポンコツ具合を緩和させた。
何故、夏休みにこんなに疲れなければいけないんだ。
明けたら、「読書感想文地獄」が待ち受けているというのに。

「ほんっと…。なんで僕はコレとの同居を許可したんでしょう…」
「水奈瀬さんって、内弁慶ですよね」

「パワハラとかセクハラとか殺伐要素が無いだけマシでしょ」
「まぁ、確かに」

僕が言うと、セイカさんは消し炭になったフレンチトーストをばりぼりとむさぼる。
柔らかい食べ物のはずのフレンチトーストが、バリボリ言ってる時点でもう異常だ。
コレに家事はさせないでおこう。
戦時中に兵器一つをおシャカにしたポンコツだ。
家の物が破壊されそうだ。

「…なんか壊したりしました？」
「いえ、まだ！」
「まだってことは、壊すことは確定してんですね」

ほんっと、なんでコレ引き取ったんだろう。
そんなことを思いながら、何気なしにテレビをつけてみる。

『鎌倉山の超常現象から1週間が経ちました。

痕跡を調べるも、いまだに原因は不明。
宮城県知事は「新しい観光地として展開することを計画している」と…』

うっわ。まだやってた。

あの時の光景やら、あかりさん…ただし皮膚なしバージョン…の出現は、「超常現象」として片付けられた。
超常社会で「超常現象」ってのもおかしな話だ。
だが、あかりさんを倒しに行ったオールマイトが、いつのまにか、病院前でぐっすり寝てたこと。
それに相まって、鎌倉山に火柱が上がり、亀裂が走り、放たれた光によって一度月が消し飛び復活し、あっという間に元どおりになったこと。

個性のせいだと片付けるには、少し無理がありすぎる光景。
それを理由として、そう言う現象として片付けられたらしい。

『オールマイトさん、この超常現象を実際に体験した身として、どう思いますか？』

『うーむ、狐に摘まれた気分だよ！
クライシスオーガも、粉砕骨折が数日寝ただけで完治したらしいからね！
まぁ、怪我がないのが一番なんだけどさ！』

クライシスオーガの怪我は、あかりさんが治した。
彼女が彼に襲い掛かった理由は、彼の煽り言葉である『こいよ、バケモノ』が琴線に触れたから。
自分の見た目がどれだけおそろしかったか、人にとって見た目がどれだけ重要かを僕が必死に説き、渋々ながら納得してもらった。
その結果、彼女はこっそりと、クライシスオーガの傷を治したのだ。

「まさか、未来人とただの中学生が戦ってたー…なーんて、誰も信じませんね」
「ターミネーターもびっくりですね」

僕らのあの戦い、藤子作品でありそう。
そんなことを思っていると、インターホンが鳴り響いた。

「あ、僕が出ますんで、余計なことしないように」
「わかりましたー！」

一抹の不安を抱えながら、僕は玄関へと向かい、その扉を開く。
そこには、黒こげになったあかりさんと緑谷くんがいた。

「失敗作の爆発で汚れて、お風呂入ろうと思ったら壊れてたんで、貸してください」
「同じくです」
「…そこで銭湯って選択肢出さないあたり、だいぶ馴染んできましたよね」

取り敢えず、彼らを家に上げ、「好きに使え」と許可を出す。
彼らは元気よく返事すると、共に風呂場へと歩いていった。

「…ん!?」

いや、ちょっと待て。今、なんかおかしかったぞ。

慌てて更衣室の扉を開くと、そこには人は居なかった。
代わりに、地面に服が散乱している。
おそらく、脱ぎ捨てられたのであろう服は二人分。
片方は緑谷くん愛用のツナギ、もう片方は女の子用の可愛いらしいフリルのワンピース。
風呂場には二人分の人影。

「君ら何やってんですか!?」

「え? 一緒にお風呂に入ってるんですよ?」
「何かおかしいですか?」

緑谷くんが毒されてる!!
ってか、慣れてる!!
扉一枚隔て、僕は声を張り上げてツッコミを入れる。

「いや、中学生同士が混浴ってまずいでしょう!!君ら絶対余計な知識ついたときに、歯止めが効きませんよ!?」
「セッ〇スのことですか？
私は、イズクくんが相手だったら、いつでもばっちこいですよ？」
「世間はばっちこいじゃないんですよ!!」

既に余計な知識ひっついてた。
なんだこのラブコメの一幕。

僕が心の中でそう叫ぶ最中、向こうの影が一つに重なる。
シルエットから見るに、緑谷くんの背中に、あかりさんが抱きついているのだろう。
ごめん。なんてエロ漫画？

「あかりさん。そういうのは、もう少し待ってほしいな。
君に普通の恋を知ってもらいたいから」
「…？イズクくんに持ってるこの気持ちが、普通の恋なんじゃないですか？」

緑谷くんはその問いに、楽しそうにこう答えた。

「僕も、恋なんて経験がないからわかんないや。
でも、一つアドバイス。
普通の恋が知りたいんだったら、そんなに急がなくてもいいんだよ。
告白とか、デートとか。そういうのを目一杯楽しんでからでも、遅くはないと思う」
「……わかりました」

緑谷くん、大人!!
大人よりも大人な対応してる!!

結局、それ以降何事もなく、彼らは普通に風呂から出てきた。
一応確認したが、それっぽい匂いは無かった。
なんだ?僕がおかしかったりするのか?

「先生って大変ですねぇ。…あ」
「そんな『これもどうぞ!』っておまけ感覚で皿割るんじゃありません」

これだけは言っておきたい。
僕の日常は、以前にも増して混沌度合いが増し、プライベートなど無くなった。

♦？♦？♦？♦？

「だ、大丈夫ですか、サー？」
珍しく仕事をオフにした日。
私…こと、『サー・ナイトアイ』は、椅子から転げ落ちていた。
別に座り損ねた…という、よくありそうな間抜けな話ではない。
椅子から転げ落ちるほど、驚きの光景が見えたのだ。

「バブルガール…！今すぐ！政府に連絡を取れ…！」
「さ、サー？政府に連絡って、一体…」
「くそっ…。こんな形で、私が見ていた未来が変わるとは…」
「えっ!?サーの見た未来が、変わったんですか!?」

良かったじゃないですか！、と私に詰め寄るバブルガールを、私は睨みつけた。

「良いものか…。寧ろ、最悪な方向に変わったぞ…!!」

「へ？」

私がモットーとするユーモアをかなぐり捨て、バブルガールの顔に目線を近づけた。

「政府に連絡しろ…！

『この世界は、保ってあと二、三年の間だ』と!!」

私が見た未来。

それは、以前見た、オールマイトが殺される未来ではなかった。

だが、確実に悪い方向には向かっている。

予知の感覚で言えば、二、三年…下手すれば今年に訪れてもおかしくない光景。

予知が外れる…ないし、予知が変わることは、私がひどく望んでいたことだ。

だが、こんな形で変わるなど、私は望んではない。

「さ、サー!?一体何を見たんですか!?」

「私の考え得る限り…いや。

私の想像力など足元にも及ばないほどの、最悪の未来だ…!!」

緑谷出久、墜落（物理）

じりじりと日が照りつける。
クソ親父は仕事で留守、夏兄は彼女さんとデート、冬姉は教員資格を取るための勉強。
暇を持て余していた俺は、とある場所に来ていた。

「…ヒメ、ミコト。いるか？」

目の前には、真夏日だというのに満開の、二本の梅の樹木。
俺が口を開くと共に、その梅の木の上から、二人の女の子…本当は性別が分からないのだが、スカートを履いてるので女の子ってことにしておく…が降りてきた。

「ショートおぉぉぉぉぉぉ!!
おっひさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ぐっふぅっ!?」

女の子の一人が、俺の腹に弾丸のように頭突きをかます。
それを受け止め切れるほど鍛えられていない俺の体は、無様に仰向けに倒れた。

「こらっ、ヒメ。ごめんね、ショート。
ヒメ、『ショートまだかな?·まだかな!?』って毎日楽しみにしてて…」

ハゲるんじゃないかってくらい、俺の腹に頭を擦り付ける女の子。
その女の子に半目を向ける女の子が、俺に申し訳なさそうに頭を下げた。

「ミコトだって、楽しみにしてたじゃん!」
「今日は目一杯遊んでやるから、喧嘩はやめろ」
「「はーい!」」

元気に返事する彼女たちについて、少し語っておこう。

彼女たち…『鳴花ヒメ』と『鳴花ミコト』は、『万年開花』と呼ばれる二本の梅の精霊…らしい。

底抜けに明るく、活発で元気で、それこそ彼女から元気という要素が無くなることは無いんじゃないかという女の子がヒメ。
ヒメとは対照的に、クールで大人びていて、たまに子供らしさを見せるのがミコト。

俺と彼女らの付き合いは、もう五年になる。

クソ親父に嫌気がさして、逃げ出したのが小学二年生の時。
母さんが家から居なくなって、辛さの吐口がなくなって、疲弊していた時。
ふと、母さんと撮った写真が目に映った。
『万年開花』。母さんとの、1番の思い出。
俺は写真を握りしめ、記憶を頼りに、必死でその梅の木を探した。
探さないといけないと思った。
梅の木が、俺を呼んでいる気がした。

そんな理由をつけて、俺は親父から逃げた。

たどり着いたときには、2回も日が登った。

腹がすいて、喉もカラカラで。
母さんのご飯が食べたい、と心から思って、ボロボロ泣いていた。

「大丈夫？お腹すいてない？」
「よかったら、これ食べて」

そんな俺に、木の実…種類は分からない…と、木製のコップに注がれた水をくれたのが、彼女らだった。
酸っぱいだけの木の実を貪り、雨水が溜まっただろうその水を勢いよく飲み干した。
酸っぱい上に、どっちもしょっぱかった。

彼女たちと仲良くなるのに、時間はかからなかった。
たくさん遊んだ。
初めて出来た友達に、俺は久々に、心から笑えた気がした。

俺が此処まで来る経緯を語ると、彼女らに「家族は心配してないの？」と聞かれた。

「あんなクソ親父が、俺を本当の意味で心配するもんか…」

俺が言うと、彼女らは俺に問いかけた。

「君の家族って、お父さんだけなの？」

「…っ」

「君のお父さんがどうかは分からないけど、帰った方がいいんじゃない？

本当に心配してる家族の人が、かわいそうだよ」

ヒメとミコトに言われ、俺は三日ぶりに家に帰った。

捜索届を出されてたらしく、帰ってきて冬姉に引っ叩かれ、抱きしめられた。

そのビンタは痛くて、冬姉の体は、温かった。

それから、俺は暇が見つかれば、彼女らのもとに訪れた。

同年代が遊ぶような、ゲームとか漫画とかは互いに一切持ってなかったけれど、それでも彼女らと遊ぶのは楽しかった。

俺が異常に気づいたのは、彼女らと会って二年だった。
その頃は男子と女子とに発育の差が出ていて、女子の方が背が高いなんてザラだった。
だと言うのに、彼女らは二年も経っているのに、全然成長していなかった。
俺はふと、彼女らに「歳取らねーよな」と聞いたことがある。
彼女らは「そりゃ、梅の精霊だし？」と何気ないように答えた。
まぁ、兎に角。
彼女らは梅の精霊であって、俺たちの理解を超えてる存在って思ってくれたらいい。
そんなのは彼女らを構成する要素の一つ。
特段、彼女らの人格に作用しているものは一つもない。
「ショート！今日はなにするの？」
「暑いからな。かき氷機と皿持ってきた」

鞄から、手動のかき氷機と小さめの皿を取り出す。
電動のかき氷機は、安めのものでも中学生には高かった。
氷は自前で用意できるので、持ってきていない。
早速作ろうとかき氷機を箱から取り出し、組み立てようとしたその時。
ミコトがふと、声をあげた。

「……ショート。シロップは？」
「あ」

やべっ。普通に忘れた。

「珍しい。ショートが忘れ物するなんて」
「すまねぇ。すぐ買いに…行こうにも、ちょっと離れてるな…」

と、俺が腰を上げたその時だった。

「……ぁぁぁ」

「ヒメ、ミコト。なんか言ったか？」

「ううん」

「なんにも…」

空耳だろうか。

謎の声が聞こえ、きょろきょろと辺りを見渡す。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁ」

声が近づいてくる。

一体なんだ、と発生源…空を見上げた時、俺たちは大きく口を開けた。

「ぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ!?!?!?!?!?」

ずがぁん!!

昔見た、アイアンマンみたいなスーツが、俺たちの目の前に落下してきた。

♦?♦?♦?♦?

「じゃあ、イズクメタルって、発見されたのはかなり昔なんですねぇ。
いや、未来…?まぁ、どっちでもいいか」
「どうでもいいですけど、先生のパソコン爆破しといてなんか申し開きないんですか?」

けほっ、と煙を吹くように咳き込む僕。
家具はめちゃくちゃ、持ってた本も散乱し、足の踏み場も無いほどだ。
その原因は、目の前のクソガキと未来人。
「情報を自動で抜き取るＵＳＢメモリ作ってみました!」と、あろうことか僕のパソコンで実践。
それだけでも叱るつもりでいたが、クソガキと談笑していた未来人が、転んで麦茶をパソコンとＵＳＢにぶっかけ、結果ドカン。
火薬なんて入ってないのに、爆発するパソコンとＵＳＢってなんだ。

それを爆発させるポンコツ具合もなんだ。

「……科学に犠牲はつきものです！」

「おーし、クソガキ。お前のこれから成績全部『死ぬほど頑張れ』にするわ」

「なんですかその評価!?」

「中学生で言うマイナス５と同義です」

「マイナス!?そんなのあるの!?」

「作ります。教育委員会の弱みは、なんでも言うこと聞いてもらえるほど握ってるんで」

「この人あくどっ!!本当に教師!?」

「教師ですよ」

撃沈するクソガキを尻目に、今度は吹っ飛ばされて気絶してる未来人をスリッパで引っ叩く。

ぱこぉん、と破裂音が響き、ギャグみたいなタンコブが出来た。

流石は漫画の世界。

「なにすんですか!?」

「こっちのセリフです。
　これ、今すぐ直せ。でないとほっぽり出しますよ」
「そんな殺生なぁ!?」

　撃沈する二人を背に、僕は玄関へと向かう。

「今から昼飯買ってくるんで、僕が帰るまでにもとに戻しておきなさい」
「「ふぁぁぁあっ!?
　いやっ、無理無理無理無理絶対無理確実に無理かたつむり!!」」
「無理じゃありません。
　やったことの責任は取れ」

　僕は二人の断末魔を背に、空を見上げた。

「…管理人さんになんて説明しよう」

♦？♦？♦？♦？

「……なんのギャグだい、こりゃあ…？」
私の恩師の一人…リカバリーガールが、驚嘆の声と共に、私のカルテに釘付けになる。
普通ならば『呼吸器を損傷し、胃袋を摘出し、本来であれば、病院で寝るべき体である』という結果が書かれているべきもの。
だというのに、そのカルテには、『私がいたって健康体である』という結果が映っていた。

「オールマイト…。
あんた、そういう個性を持った子に治してもらった…なんてことはないかい？」
「間違ってもありません。
それに、医療系個性で最も強力とされている貴女の個性…。
それですらも治せなかった怪我です。
私を治せる人間がいるなど、到底考えられない」

私の痩身形態…私がトゥルーフォームと呼んでいた姿は、既にない。
多少老いてはいるが、全盛期に近い状態の、呼吸も苦しいことはなく、空腹感を感じ取れる、筋骨隆々とした体。
もう二度と味わうことはないと思っていた、健康な体。

「手術したにせよ、縫合の痕がないってのも奇妙だよ…。
本当に、『超常現象』としか言えない」
「…ええ。本当に」

私の腹にあったはずの傷痕は、綺麗さっぱり消えていた。
…思い当たるのは、一つだけ。
あの日、気を失う前。
私が最後に見て、私が知ったとある存在。

「…リカバリーガール。
『未来人』が居る…といえば、貴女は信じますか?」
「何バカなこと言ってんだい。

頭ぶつけておかしくなったのかい？」

リカバリーガールがその目を開き、私を睨む。

確かに、聞くだけならばおかしな話だ。

だが、私はあの時聞いたのだ。

ーーーーーー西暦３０１５年。

未来で人工的に作られたという、あの少女の言葉。

私も夢物語かと思ったが、実際に見てしまえば信じざるを得ない。

「いえ。私は本気です。

人工的に個性を作ることも、それこそ自己修復する細胞を医学で生み出せる…卓越した科学力を持つ未来人…。

私は、その存在と邂逅している」

「……アンタがそこまで言うんなら、本当なんだろうね」

おそらくだが、ヴィジランテ『ＳＡＶＥＲ』も、同じ未来人なのだろう。

私を超える技術が生み出されていても、なんら不思議ではない。

「その未来人とやらを、アンタは知ってるのかい？」

「…はい。クライシスオーガから聴いた話では、名前は『キズナ』。実際に見た姿は、白い髪を三つ編みにした、青い目の少女です」

彼女の存在が幻だった…と世間では報道されているが、私はそうは思わない。あの時感じた風圧と殺気は、思い出すだけで肌を焦がすように感じる。

「クライシスオーガの名前が出る…ということは、先日の？」

「ええ。世間は鎌倉山の異変を『超常現象』などと報道しています。

…私は最終局面までは見ていません。

しかし、未来人『キズナ』と、『ＳＡＶＥＲ』のぶつかり合いの結果だということは、私が最も理解しています。

それが露見することを恐れた、どちらかの隠蔽工作かと。

『ＳＡＶＥＲ』の力の源はいまだに不明ですが、少なくとも、未来人は卓越した科学力を持っています。

それこそ、人の認識を変えてしまう力があっても不思議では…むぐっ!?」

私が話を続けようとすると、リカバリーガールは私の口に、一掴み分のハリボーを突っ込んだ。

「未来人なんて、底の知れない相手の底を考えるのはやめときな。水面ばかり見たって、海の深さは分かんないだろうに」

ごくり、と味が混ざったせいで、甘ったるいだけのハリボーを飲み込む。リカバリーガールに反論しようとした、その時だった。

「オールマイト!やっぱりここにいた!!」

私の居る…雄英高校の保健室の扉を、知り合いが勢いよく開けたのは。

「ようやく見つけたよ、オールマイト…!」

「つ、塚内くん、どうしたんだい？」

友人である警察官…塚内くんが息を切らしながら、私へと近づく。
私が何事かと問うと、彼は一枚の紙を私に見せた。

「各国トップ3のヒーローに向けた、国連第一委員会からの通達…招集命令書だ!!
急いでそこに着陸してる飛行機に乗れ、オールマイト!!
だいぶ遅刻してるんだぞ!?
メールも見ずに何やってたんだ!?」

「……へっ?」

塚内くんの剣幕に、私は間抜けな声を出した。

「こ、ここここ、こここっ、こ、国連んんッッッッ!?!?!?!?」

先生に出番がないって本当ですか?

墜落したことの弁明をさせて欲しい。

僕、緑谷出久は、新型のスーツ…記念すべきイズク１０号『リゲル』のテストをしていた。

先日のことを考えて、防衛戦特化の装備。

最終防衛プログラムに匹敵する防御力と、小型防衛衛星…イズク９号『テティス』を搭載している。

コンセプトは『動く要塞』。イズクメタルを使用した敵が大軍で来ようとも、この防御は破れないだろう。

今日は、その飛行テスト。

もう何度も作った飛行機巧を失敗するわけがない。そう思っていた。

が。その自惚れは木っ端微塵に打ち砕かれた。

そう。調子に乗って、展開したテティスの数をアホほど増やした結果、そっちに演算処理機能が割かれ、飛ぶ余裕が無くなったのだ。
要するに、僕自身のポカである。
結果、僕は盛大に落下した。
そんなわけで現在、犬神家っぽいことになってるわけだ。

「…てなわけで、引っ張ってくれる？」
「いや、引っ張ってんだけど、重すぎなのとすっぽりハマってるせいで、びくともしねーぞ」
「ショート！これ、前に言ってたあいあんまん？」
「いや、アイアンマンは…少なくとも犬神家にはならねーな」

墜落はするけど、と付け足したショートくん…顔は見えない…が、再び僕の足を持って踏ん張る。
ちょっと隙間が出来るだけで、後はなんとかなるんだけど、どうにもスーツが重すぎたらしい。
イズクメタルの軽量化も視野に入れないと。

「ショート、ちょっとどいてー」
「ヒメ、お前じゃ無理だと思うぞ」
「大丈夫だよ。ショートは、僕らをなんだと思ってるんだい?」
「え?なに?なにするの?」

瞬間。
僕の足に何かが巻きつき、僕の体が引っこ抜かれた。

「抜けた!って、梅?」

逆さになった視界には、二本の梅の木が映る。
こんな真夏日だというのに、満開の状態で薄桃色の花びらが散っている。
よく見ると、そのうちの一本から僕の足に向けて、ツタが伸びていた。
植物を操る系統の個性なんだろうか。

「おお。流石は梅の精霊」

「えっへん！ショート、もっと褒めてー！」
「ちょっ、ヒメっ……！力緩めたら…」
「へぶっ!?」
「あー…。言わんこっちゃない…」

瞬間。僕の体は地に叩きつけられた。

「おい。大丈夫か、お前」
「ああ。うん。大丈夫。
勢いでびっくりしただけだから」

差し伸べられた手を掴み、立ち上がる。
僕に手を差し伸べた彼が、先ほどのショートくんなのだろう。
僕と同じ歳くらいの男の子だ。
後ろにいるのが、先ほど話していたヒメちゃんとミコトちゃんだろうか。
きりちゃんより少し歳上くらいの女の子…双子なのか、かなり似ている…だ。

「お空から降ってきたお兄さん…なのかな?
お兄さんは天使さん?」
「いや、少なくとも普通の人間だけど…」
「普通の人間はンなスーツ着て空飛ばねーだろ」

反論できない。
天使ではないことを伝えると、ヒメちゃんは「でも、お空から来たよ?」と首を傾げた。

「お空にいるのは鳥さんとか、飛行機も一緒だろ」
「あ、そっか!じゃ、ヒコーキさん?」
「飛行機がこんな小さいわけないでしょ、ヒメ」
「そっか。人をたくさん乗せれるくらい大きいんだもんね」

この子、今まで見たことのないタイプだ。
…まぁ、僕が知っている年下の子って、どうしてもきりちゃんしか思い浮かばないけど。

きりちゃんが大人ぶった…先生曰く「マセたクソガキ」…子供なら、この子は子供らしい子供と言うべきだろうか。

…なんで一番ありそうなパターンを知らないんだ僕。

交友関係が特殊すぎる自覚はある。

先生…教育委員会の弱みを握るほど性格が悪いし、思いつきで行動する悪い方向でのアグレッシブ。普通の教師とは言えない。

きりちゃん…僕の技術を少し受け継いだ。シンプルに性格が悪い。普通の小学生とは言えない。

セイカさん…未来人。超がつくポンコツ。普通とは言えない。

あかりさん…個性そのものと言える存在。普通を学んでる最中。かなりの大飯食らい。かなりズレてる。

かっちゃん…幼馴染み。口を開けば暴言ばかりだが、僕が近づくと決まって「来んな」と避ける。上記の四人に比べれば…まぁ、普通寄りではある。微々たる物ではあるが。

お母さん…僕のやってることは知らない。普通の人。

どうしよう。普通の人、お母さんくらいしかいない。

「どうした、ンなボーッとして」

「いや、なんでもない…」

涙を拭い…スーツ内では分泌された体液を拭いてくれる。痒いところもケアしてくれる…なんとか取り繕った。

「…そういやそのスーツ、お前アレだろ。

最近話題のヴィジランテ」

やばっ。

「さ、さよーならー!!助けてくれてありがとー!!」

「うっわ、反応が露骨!!」

ここでバレるわけにはいかない。

機動性をかなぐり捨てたリゲルの背に、無理やり取っ付けたブースターで空を飛ぶ。

思えば、この奇妙な出会いが始まりだったのかもしれない。

まさか中学生の青春を全てかけた、大きな戦いが幕を開くなんて、この時の僕は考えもしなかった。

♦?♦?♦?♦?

「日本代表、オールマイト、エンデヴァー、ベストジーニスト。半日遅刻だ」

国連第一委員会が用意した会場にて。

アメリカのとある会議室に連れられた私は、白い目を向けられる中、用意された席に座った。

「すまない。オールマイトが音信不通だったものでね」

「こいつが所在を明らかにしなかったからだ。俺とベストジーニストは、離陸時間の1時間前に飛行機に乗っていた」

「……ごめんなさい」

ぐうの音も出ない。

言い訳するつもりはないが、事実として言っておこう。

未来人について考えていたせいで、メールに気づかなかった。

無論、そんなことをこの場で言えばどうなるか、分かったもんじゃないので黙っておくが。

「その追求は、今はやめておこう。

事は一刻を争う。

今回、この会議を仕切らせていただく。

国防長官のローガン・サリバンだ。

皆も知っての通り、無個性の政治家だが、平和を望む気持ちは、各国トップ3ヒーローの君たちと同じだと思っている」

ローガンと名乗った彼…私もテレビで見たことがある程度の認識…が、英語で軽く自己紹介を済ませた。

「早速だが本題だ。
世界には、どんな形であれ、『予知』する個性がある。
実際、アメリカで予知系の個性を使って商売してるヤツは、万を超えている」

予知。
ふと、私のサイドキックを務めていた彼を思い出した。
ある理由から疎遠になっていたが、こうして健康体になったのだから、一度会いに行くのもいいかもしれない。
私が頭の片隅でそんなことを思っていると、ローガンが一枚の資料を、プロジェクター用の機械に乗せた。

「この資料を見てもらうと分かるように、予知の個性を持つ人間が、同時に小さいながらも怪我を負っている。
調べたところ、我が国のみではなく、世界各地で…しかも、同時に起きていたことが判明した」

ざわめきは起こらない。
ただし、皆が気を引き締め、戦慄していた。
無論、私もその一人だ。
その中で、カナダのトップヒーローが同じく英語で声をあげる。

「話を遮るようで失礼。
つまりは、『予知系の個性を同時に襲った組織が居る』とでも言いたいのか?」

彼女が問うと、ローガンは淡々と続けた。

「怪我の理由は襲われたとか、そういう物騒なものではない。
非常にアホらしい話だが、椅子から転げ落ちたというのがほとんどだ。
中には階段から転げ落ちた者もいるが」
「馬鹿馬鹿しい!!そんなことのために我々を呼んだのか!?」

と、イギリスのＮｏ．２が声を張り上げた。
が。ローガンは動じることなく、続けた。

「転げ落ちた理由が重要なんだ。
彼らが転げ落ちた理由。それは、今年含む3年間を予知した結果、皆が驚きと恐怖のあまりに気が動転したからだ。
百戦錬磨のプロヒーローでさえも、な」

プロヒーローでさえも。
ローガンは確かに、私に視線を向けてそう言った。
まさか、彼が…？
私の死を予知し、驚きこそすれ、椅子から転げ落ちることもなかった彼が？
私が思考の海に潜るのを待たずに、ローガンが別の資料をプロジェクター用の機械に乗せた。

「これが、彼らが一律に予知した未来。
あの中で、最も信用に足る予知の個性を持った人間が書いたメモだ。
…彼は筆談しか出来ないシャイでネガティブな性格のため、その時に書いていたメモを写真に撮ってきた」

ーーーーーー『いイやアアアアアぁぁぁぁぁぁぁぁツツツ!!!!!!!
誰か助けてエエエエエぇぇぇぇぇぇぇぇぇツツツ!!!!!
世界滅ぶウゥウゥウゥウゥうぅうぅうぅうぅうぅうぅうぅうぅツツツツツツ!!!!!』

英語で書かれたその言葉は、現実味に欠けるものだった。
ひどく焦って書いたのだろう、その文字はガタガタで、とても筆談に慣れている人間のものとは思えない。
メモ用紙には汗が滲んだのか、どことなく湿っているのがわかった。
「常任理事国はこれを重く捉え、世界中の手だれ…各国のプロヒーロートップ3に、正式に命令を下すことにした。
トップ3未満は、実力が不足しているとして、勝手ながら切らせてもらった。
協力を仰いでもいいが、自分が殺したという事実を背負いたくなければ、やめることをオススメする」

異常事態。

一言にするならば、それに尽きた。
先程「馬鹿馬鹿しい」と声を上げたヒーローでさえも、さらに戦慄する。
トップ3以下が弱いとは、決して言わない。
だが、それでも「実力不足」扱いされる。
それ程までに切羽詰まった事態なのだ。

「…具体的な内容は？」
「中心となるのは、日本。
早ければ明日にでも、それ程の事件が起きるらしいが、一律して詳しい内容は不明。
ただ、焼け野原になった大地が見えたというだけで、十分に異常だと判断した」

マジかよ。

帰ったら久々に、グラントリノとサー・ナイトアイに会おう。
お師匠の墓にもお参りしておこう。
あ、そうだ。アメリカにいるんだから、デイブにも挨拶しておこうかな。

私はどこか遠い思考でそんなことを考えながら、会議の締めの挨拶を聞いていた。

真夏に梅の花は咲きません

「真夏に咲いてる梅の木？」

ちゅるん。

皆で素麺を啜る中、緑谷くんから出た情報に、僕は首を傾げた。

「違う品種の木を見間違えたんじゃないんですか？

品種にもよりますが、梅の木が花を咲かせるのは、大体２月ごろです」

「いやっ、それは知ってるんですけど…。

アレは確かに、梅です。品種は南高です」

ふむ…。南高か。

それこそ、そこらへんにありそうな品種だ。

南高も一般的には２月に花を咲かせる。

８月初めの今の時期に花が咲くなど、本来ならばあり得ないのだが…。

「『梅の精霊』とか呼ばれてた、ヒメとミコトって子の個性じゃないですか？」

普通に考えれば、あかりさんが言う、その線が濃厚だろう。

……ん？ヒメとミコト？

僕がそのことを疑問に思っていると、東北さんがこっそりとメッセージを僕の携帯に送る。

『確実にボイスロイドです。正確には、ガイノイドｔａｌｋですけど』

『細かい区分は、僕は知りません』

『出してる会社の違いです。用途は一緒なので、気にしなくていいです』

ボイスロイドに加えて、ガイノイドか。

まぁ、あんまり重要そうな情報ではないので、そこは追求しないでおこう。

「そう考えたんだけど、個性遮断フィールドを展開してたし…」

「あー…。じゃあ、即散ってなきゃおかしいですね」

東北さんが言うと、「いただき!」と僕の分のトマトを奪う。
魔法の呪文『成績』でそれを奪い返し、僕は甘酸っぱいというには味が薄く、みずみずしいという表現が多用される割には砂っぽい食感のソレを咀嚼した。

「むむぅ…。麺類は『あーん』が難しいです。断固改善を要求します」
「それだけ勢いよく食ってほかに分け与える精神があることに先生びっくりしてます」
「殴りますよ」

やめてくれ、普通に死ぬ。
子供の癇癪で殺されるのはごめんだ、と語ると、「冗談ですよ」と返された。

冗談なのは分かってるが、仮にも戦時中に猛威を振るった兵器が「殴る」なんて言わないでほしい。
心臓がダイヤモンド製の緑谷くんたちと比べると、炭くらいの強度の僕の心臓は脅されただけでも止まる自信がある。

にしてもまぁ、よく食べること。
あかりさんが食べてる素麺の量は、僕たちの合計量の１０倍。
しかもまだ余裕そうだ。
食費に関しては、緑谷くんのお母さんは「出久はそんなに食べないから、作りがいがある」と笑っていた。
この親在ってこの子在りの家庭だなぁ。

「イズクくん、トマトです。あーん」
「んっ。ありがとう、あかりさん」

字面だけ見れば、誤解されそうな光景だ。
だが断っておく。
紲星あかりは、恋を知らない。
緑谷くんに抱いている感情は、愛情というよりは『安心』とでも言うべきものだ。
依存しているわけではないが、彼以外に心を開けるかと問われれば、否であろう。

「…アレですよね。

カップルっていうか、子供がお母さんに『あーん』してるみたいなモンですよね」

関係としては、セイカさんの言う通り、親子に近い。
緑谷くんもあかりさんも、そもそも互いを異性として見ていない。
相手を庇護対象として見ている緑谷くんと、相手を自身を背中から撃たない者と安心しているあかりさん。
歪ではあるが、相性だけ見れば良好だと言える。

「見た目はカップルですけどね。
ほんと、見た目と中身って伴いませんよね」
「にべもなく爆発しろって言わないあたり、君も人を見る目は育ったようですね」

二ヶ月前であれば、街行くカップルに「爆発すりゃいいのに」と、聞こえないように、小さく罵声を浴びせていたクソガキとは思えない。
僕が成長を褒めると、彼女はその小さな体で精一杯胸を張った。

「えっへん。成長期ブーストですよ」

「その他が問題過ぎてマイナス評価は拭えてませんよ」
「うぐっ」

あの爆発今でも覚えてるからな。

科学に犠牲がつきものなのは知ってるが、だからと言って無断で使ってる他人のパソコンを壊すな。
このクソガキのクソガキぶりは、僕にしか向けられないってのも問題だ。
僕以上の内弁慶だぞ。

そんなことを考えていると、皆が一斉に「ごちそうさま」と手を合わせる。
昼食を食べたとは言え、流石は育ち盛りというべきか、セイカさん以外はまだ少し物足りなさそうだった。

「…デザートです。実家からスイカが送られてきたんで、取ってきますよ」
「先生の実家って農家なんですか？」
「ええ。家の収入全てそれに依存できるくらいには、大きいトコです」

テレビで取り上げられるような場所ではありませんが、と付け足し、冷蔵庫から切って冷やしておいたスイカを出す。
お好みで塩も用意しておいた。

「…夏ですねぇ」
「それ食べたら、宿題しなさいよ。
次忘れたら成績最低評価ってのは、卒業まで有効ですからね」
「そんな殺生なぁ!?」

♦?♦?♦?♦?

「Ｍｓ．コトノハ！どうしてこの研究の素晴らしさが分からないんだ!!」
「…だから言ってるじゃないか。
人工的に個性を作るのは不可能だ」

ある有名大学の一室。

生体工学を専門とする私が、大学から「好きに使ってもいい」と許可が出てる部屋に、私…琴葉葵の助手の怒鳴り声が響く。
彼が私に見せたのは、「個性因子を人工的に作るプラン」。
はっきり言って、夢物語だ。
現代の生体工学では、どの研究機関でも「個性因子を作り出す」のは不可能だ。
今月に私が学術誌の記事として証明したばかりだと言うのに。
「時代は1秒毎に進歩する…！
そう言ったのは貴女たちではないか！」
「そこで私と姉さんの教えを持ち出すあたり、君はダメなんだ」
私は言うと、彼の資料を押し付けようとする手を振り払った。
「いいか。適切な速度での進歩というのが重要なんだ。
じっくりと、その時代に合った研究をする。
でなければ、世界は崩壊する。
それは個性発現時に証明されているだろう。

功を成したい、名声が欲しいなどと言った私利私欲のために、時代を無理に進めるな」

…その分別もつかない子供が、時代を揺るがすほどの発明をしてしまったのだが。

秘匿している真実を胸にしまい、私は助手に「それはやめておけ」とだけ言って、部屋を出ようとする。

「…っ、貴女はいつもそうだ！

時代を進めるような研究を進んでやらない！

貴女ほどの頭脳と技術があれば、人工個性程度…」

「黙れ。研究生命を断たれたくなければ、それ以上、私を怒らせないほうがいいぞ」

帰ったらチョコミントアイスを食べよう。

カー〇ルの、おっきいヤツ。

私は苛立ちを抑え込むように、ミント味のガムをひと粒噛んだ。

「人工個性…か」

個性は、時代を終わらせる。
それが人の手によるものならば尚更だ。
そんなことを考えながら、私は研究室を後にした。

きりたん「緑谷先輩の間抜けェ！」

「世界の危機…ですか」

「ああ。次期Ｎｏ．３に最も近いとされている君には、先に話しておこうと思ってね」

１９にもならない坊やに何言ってんですかね、この人。

そんなことを思いながら、俺…ヒーロー名で言えばホークス。自慢じゃないが、十代でＮｏ．１０の座が約束されてる…はベストジーニストの話に耳を傾ける。

「国連からの依頼だが…恐らく、私では力不足だ。相手は大地を焦がす程の強敵。

戦闘能力の高いオールマイトとエンデヴァーならばいざ知らず。

拘束力に優れてはいるが、こと単純な戦闘に関しては、どうしても他に劣ってしまう私では、力不足だと判断した」

「…まぁ、妥当な判断じゃないですかね」

大地を焦がすってンな馬鹿な。

そう言おうとしたが、やめた。

ベストジーニストの目が、「これは冗談ではない」と、俺に語りかけてくるようだった。

「俺も速さが取り柄なだけで、そこまで戦闘能力高いわけじゃないですよ?

むしろ、ベテランのベストジーニストさんのほうが優れてる可能性だってある。

別にルーキーに頼むことじゃ…」

「頼む」

…マジか。面倒なことになったな。

いつもの「何もなかった!今日も平和だなぁ」と床に着く日常が崩れ去るのを感じていた。

♦?♦?♦?♦?

「で。これが、その梅の木ですか。

確かに南高ですね」

「でしょう？」

驚いた。

こんな真夏日に、満開の梅が観れるとは。

周りの景色は、夏の青の葉で埋め尽くされているというのに。

「あー。万年開花ですか。こんな時代からあったんですねぇ」

「「は？」」

この未来人、今なんと言った？

「万年開花ってなんですか？」

「その名の通り、何万年も咲いたままの梅ですよ。

第三次世界大戦が起きる…そうですねぇ。

大体十年くらい前に、遺跡から見つかったそうで、未だにその詳細が明らかにされてない梅の木なんですよ」

「そういう情報は先に言いなさいポンコツ」

成る程。未来でも、手に余すほどのオーバーテクノロジーが搭載されてるのだろうか。

…いや、目の前に居るな。そのオバテク使いこなしてるのが二人。

「私も初めて見ました。

イズクくんときりちゃんは、何か知らないんですか?」

「んー…。僕、電子工学は兎に角、生体工学は専門外だからなぁ…。

昔、琴葉博士の妹さんの論文で齧った程度で…」

「私に至っては、完全に専門外です。これっぽっちも分かりません」

…現代文学研究者に古代文学のこと聞いてるようなモンか。

「おい。ここ私有地だぞ」

と。そこへ一人の少年が訪れた。

…何故か夏全開の格好で。

「…中学生ですよね、アレ。虫網虫かご麦わら半袖短パン…。スタイル古っ」
「少年誌でしか見たことないですね」

あかりさんと東北さんの言うように、漫画から飛び出たみたいな格好してる。
今日日見ない、いかにも「夏休み満喫してるぜ！」って格好だ。
僕たちがそんな視線を向けるも、彼はどこ吹く風で告げた。

「夏って言ったら虫取りだろ。
私有地でやるのはよくないが、よかったら、ばあちゃんに掛け合ってやるぞ。
虫かごとか虫網…女も居るし、日焼け止めとかも用意してやろうか？」
「「「菩薩？」」」

何この子、めっちゃいい子なんだけど。
クソガキと交換してほしい。

「顔に出てますよ、クソ教師」

「こりゃ失礼。わざと出しました」
「だから性格悪いって言われんですよ」
「大丈夫ですよ。ここの所有者に予め了承は得てます」
「うわっ、話逸らした」

僕が少年に向けて言うと、彼は「そっか」とだけ返し、踵を返した。
流石に公務員が不法侵入をやらかすわけにはいかないので、一応許可を取っておいて良かった。
あのおばあさんの孫か、と一人頷いていると、緑谷くんがだらだらと冷や汗を流していた。
「…もしかして、さっきの子が犬神家してた君を引っ張り出した?」
「あ、はい。苗字はわかりませんけど、ショート君です。
ボイチェン無しの声聞かれてるんで、黙ってました」

よかったー、バレてなかったー、と汗を拭う緑谷くん。

「聞いちゃったー！あの時のお兄ぃさん！
ミドリヤイズクっていうんだね！」

が。なんとも間の悪いことに、僕たちの背後には少女が二人いた。
双子なのだろうか、二人とも似たような容姿で、片方が興味深そうに緑谷くんを見つめ、もう片方が警戒心をマックスにして僕たちを睨んでいた。

「ヒメ、その人危ないって、ショート言ってたでしょ。ショート呼んでこないと…」
「緑谷先輩の間抜けェ!!」
「ごめんなさい」

東北さんの罵倒に思わず頷いてしまった。

♦？♦？♦？♦？

「俊典。珍しいじゃないか、お前さんから儂らに連絡するなんて」
「……」

私の目の前には、ここ数年顔も合わせなかった顔ぶれが揃っている。
サイドキックだったナイトアイ、教師として私をしごいてくれた…もとい拷問してた…グラントリノ。
グラントリノは再会を喜んでくれているが、ナイトアイの顔はいつものような嬉しそうな顔…ただし表情筋は動かない…ではなく、神妙な面持ちだった。

「今回のこと。国連から正式に命令が下されたよ、ナイトアイ」
「でしょうね」
「…ほんと、大丈夫？驚きすぎて転げ落ちた挙句、顎外れたって聞いたけど…」
「顎は治りました」

治ったんだ。良かった。
世界の終わりを予知してそれだけで済んでいるあたり、本当打たれ強いなぁ。
中には階段から転げ落ちて、全治半年の大怪我を負った人も居るってのに。
老婆心の如くそんなことを思っていると、グラントリノが口を開く。

「…で。儂はまだ何も聞かされとらんのだが、何かあったのか？」
「はい。実は…」
未来人云々を抜きにして、世界の危機への対処を国連から依頼されたこと、何故か私の傷が完治していたことを話す。
グラントリノは少しばかり目を細め、私を睨みつけた。
「世界の終わり…か。
オール・フォー・ワンなら、簡単にできるやも知れんかったが…倒しちまったからな」
実際にトドメを刺してはいないが、少なくとも後数年のうちは大人しくせざるを得ない怪我を負わせた。
まず、ヤツは候補から外れると考えた方がいい。
「有力候補は、ヤツ以外にも居ます」
「…聴かせろ」

私が言うと、グラントリノ、ナイトアイの両名の目が細まる。
私自身、あまりに馬鹿馬鹿しいとは思う。
だが、候補ではあることを話しておかなければ。

「今回の件…。私が先日体験した、超常現象…いや。とある事件に関係しています」
「…お前さんが『キズナ』という敵を倒しに向かったが、気づけば病院の前でがーすか寝てて、怪我が完治してたっつーアレか?
会ったら言おうと思ってたが、情けないにも程があるぞ」

うぐぅっ。
事実だから反論できない…!

「寝ていた理由は…我ながら情けないことではありますが、凄まじい風圧に吹き飛ばされ、後頭部に木が激突し、脳震盪を起こしてしまい…」
「もっぺん鍛え直すか、俊典?」
「けけけけっ、結構です!!」

おっそろしいっ!!

あの地獄のしごきが脳裏をよぎり、必死で首を振る。

アレで吹き飛ばされるなというのが無理だ。

「…その風圧が起きた原因は?」

「『ＳＡＶＥＲ』と『キズナ』の戦闘だ」

ナイトアイの質問に答えると、２人は目を剥いた。

「ただのヴィジランテと敵の戦闘で、お前さんが吹っ飛ばされたってのか?」

「…その時、キズナはこう言っていました」

ーーーーーー西暦３０１５年。人工的に、尚且つ科学的に作り出された個性因子…

『セルフギフト』。

それを医療用の自己修復細胞に結合させ、生まれたのが私です。

その言葉に、２人が訝しげな表情を作る。
本当に意味がわからない、というような表情ではない。
むしろ、言葉の意味がわかっているからこそ、疑問に思っているのだろう。

「…つまり、なんだってんだ?
あろうことか未来から、ヤバい存在が訪れてるってのか?」
「…通りで、私の予知が変わるはずだ」

反応は似たようなものだった。
私はグラントリノに頷くと、いつもの笑顔を消した。

「ええ。恐らく、『ＳＡＶＥＲ』も同様の存在かと。
個性社会全体を揺るがすほどの存在が、この世界に牙を剥く時が来る…ということです」

性格が悪いって？それがどうした

「……つまりは、こうか？

『無個性が科学で個性超えた』っつー事実が世に出たら、とんでもねーことになる。

でも人助けはしたい。

じゃあ、正体不明のヴィジランテやろう！……っつーことか？」

「まぁ、大雑把にいうと…」

バレた。よりにもよって、初対面の緑谷くんの同級生に。

融通が効かなさそうな相手だから、下手に隠せば普通に通報されて終わりだろう。

なら、巻き込んじまおう。

僕の胃痛を味わうがいい。僕クラスになると慣れすぎて最早穴も開かないけどな!!

「…アンタ、教師のくせに相当性格悪いな。

こんなん聞かされて、誰にも言えるわけねーだろ」
「性格が悪いヤツ世界ランキングがあったら、トップ5には入ってると自負してる」
「ンなことで胸を張るな」

知らない子にまで性格が悪いと言われた。
生憎と直す気はない。

「…こんなのが小学生教師してるなんて、冬姉が知ったらどうなるか…」
「おや、ご親族に教師がいましたか?」
「いや、教育学部受かって、9月に教育実習受けるって」
「あー…。うちの学校でも募集してましたね」

そんな会話を交わしながら、ふと目線を緑谷くんの方に向ける。
シリウスに身を包み、ポージングする緑谷くんの姿は、どう見てもトニー・スタークだ。
カラーリングが白と金で、中身がもじゃもじゃ頭の中学生っていう点を除けば。

「おー、あいあんまんっぽい！
略してあっぽい！」
「あ、あっぽい？」
「アホっぽいって聞こえますね」
「アホっぽい!?ヒメちゃんそんなにアホっぽいの!?」
「言ってないけど、自覚あるんですねぇ」
「うん。自覚はあるんだよ。全然治そうとしないけど」
「これがヒメちゃんスタイルなのだ！」

言っちゃ悪いが言わせてくれ。アホが1人増えてた。
京町セイカという飛びっきりのポンコツがいるんだから、アホの子枠は要らんって思ってた自分がバカだったパターンだこれ。

「…あのヒメって子、いつもあんなのなんですか？」
「まぁ、概ね」
「担任の先生に同情します」
「担任？あの子たち、学校行ってねーぞ」

「え?」

学校に行ってない?不登校なのか?

僕がそう思っていたことが伝わったのか、彼は首を横に振った。

「いや、不登校ってわけじゃなくて。

…言っても笑わねーか?」

「梅の精霊ってヤツですかね?」

先日聞いた情報を出すと、轟くんは無表情を崩し、少しばかり目を剥いた。

「知ってたのか?」

「緑谷くんが言ってました」

話半分に聞いた程度ですが、と付け足し、梅の木に目を向ける。

花を咲かせている以外は、至って普通の南高。

こうしてマジマジと木を見るのは、大学の時に、論文を書くための題材を探していた

時以来だろうか。

「こんな、どこにでもありそうな木に精霊…ねぇ」
「いや、年中花が咲いてる木とか、珍しいにも程があるだろ」
「それ以外が普通だって言ってんですよ」

流石に細胞単位ではわからないが、特段変わったところはない。
同級生にこの木の花弁を送って、研究してもらおうか。

「しかし…失礼ではありますが、こうして見ると風情もクソもありませんね。
季節が合っていないから、至極当たり前なんですが」
「そういうモンか?」
「そういうモンです」

本来、自然というのは流れ行くままが最も美しいとされている物だ。
花に美しさを見出すのも、たった数日で散ってしまう儚さを嘆いた物が殆ど。
自然に逆らった物に美しさを見出せ、と言われれば、文系の僕には厳しいものがある。

「ねぇねぇ！難しい顔してどーしたの?」
「いだぁあっ!?!?!」

ぶすり。

考え事をして無防備だった僕の腰に、突起物が激突した。

めっちゃ痛い。

痛む腰をさすりながらそちらの方を見ると、僕に抱きつくヒメさんがいた。

「…ヒメさん。その頭のモン、結構痛いんで、頭突きはやめてくれます?」
「へ?」
「ダメだこれ分かってなさそう」

本気で「何言ってんのか分かんない」って顔してる。

「で、何してたのー?」
「…轟くんと世間話をしてただけですよ」

「世間話ってか、脅しだろ」
「人聞きの悪い。誰にも話さなければ、ただの世間話です」

…詐欺師とかできるかも。
いや、やらないけど。
無職のゴミ屑だった前世だったら考えたかもだけど、今世は教師だから絶対にやらない。
清いまま教師をしたい。
教育委員会の弱み握ってる時点で、清いもクソもないけど。

「んー…。分かんないからいーや！
ねぇねぇ、あなたって先生なんでしょ？」
「話の飛び方エグいですね」
「意味がわからん話はさっさと飛ばすからな、コイツ」
「詐欺に絶対引っかからないタイプですね」

グイグイ来るヒメさんに、「小学校の先生やってますよ」と答える。

すると彼女は、とてとてとミコトさんの方に駆け寄り、その手を引っ張って僕の前に連れてきた。

「私たちにべんきょー教えて!」

「…その、勉強…やってみたいなって…」

「…君たちのような学ぶ意欲のある子供は好きですよ。

意欲がありすぎて、僕に迷惑かけるクソガキと、向こう見ずすぎてオバテク作り出す中学生は微妙なラインですが」

「え!?」

好かれてると思ってたのか、コイツら。

実際、嫌いではないし、むしろ好ましくは思ってるが、その被害が僕に向けられるなら話は別だ。

「で。どんな勉強がしたいんですか?」

「その、ボク達…。ずーっと昔…何万年も前から、何も知らなくて。

ショートに足し算とかを教えてもらったり、絵本を読んでもらったくらいで、漢字な

んて全然読めなくて…」
「とにかく、いろんなことが知りたいの！
先生だったら、いろんなことを知ってるんでしょ？
どんなことが起きてるとか、どんなものがあるとか！」

…ん？何万年？

……えっ？万!?

その膨大な年月に気づき、慄いたのは、数秒経った後だった。
人の文明が始まったのは、せいぜい1万年ほど前だ。
個性が世に出て、百数年経つか経たないかくらいの時代。
個性という不思議パワー無しに、万単位の年月を生きている…？

「…教える前に一つ、質問します。
生まれた経緯とかは、覚えてますか？」
「んー…。わかんない。

気付いたら、この梅と、ミコトと一緒に居て、何万年も経ってたから」
「ボクも同じかな」

……こんないかにも「謎ありますよ！解いて！」って言いたげな地雷満載な子を前にして、生徒達がギラギラと目つき変えてる。
「よっしゃ！今からお前らの謎、すっ裸にしてやるぜ！覚悟しなァ！」って言いたげな目で見てる。
頼むから、世界は巻き込んでも、僕だけは巻き込まないでくれ。
「…すげぇ目つきだな」
「気にしないでください。ああいう子達なので」

轟くん。出来れば、純粋なままの君で居て。

正義の秘密結社『一等星』が疫病神ではないこと、轟くんたちがそれに毒されないことを祈らずには居られなかった。

♦？♦？♦？♦？

「くそっ…。どうして彼女は分かってくれないんだ…！」

ばんっ。

アメリカのとある酒屋にて、１人の男が自棄になって酒を呷る。
その男は、先日「人工的に個性を作る」という論文を上司に見せ、酷評どころか「手を出すな」と言われた研究員だった。
向かい側に座るのは、同じく研究員の１人。

「あの人は『時代を無理に進めるような研究をしない』がモットーの、前時代的な頭固いクソアマだからな。
なんで人工個性なんてモンが通ると思ったんだ、マイケル」
「彼女は…彼女達は、無個性だろう？

その弱みにつけ込めると思って…」
「そういう思考がもうダメだ。
アレらの人を見る目は、そこらの精神系の個性持ちよりも優れてる。
そういう下心も丸見えだったと思うぞ」

どっかの誰かの受け売りらしいが、と付け足し、酒を呷る研究員。
マイケルと呼ばれた彼もまた、ツマミのチーズを口に放り込み、その量に見合わぬ酒をがぶがぶ飲んだ。

「ぶはっ…。
そのどっかの誰か、本気で恨もうか…」
「やめとけやめとけ。顔も知らねーヤツを恨んでも仕方ねーだろ。
また別の研究を考えようぜ」

と、２人して笑ったその時だった。

「やぁ、こんにちは」

全てが機械で覆われた、歪な存在が彼らの隣に座ったのは。

「あんた、酒飲む気があんのか？そのマスクとか外しなよ」

研究員が言うと、その存在は「くくっ」と喉を鳴らす。
声質からして男なのだろうか。いや、それとも女なのだろうか。
どちらとも判別のつかない声が、より一層、その存在の不気味さを際立たせる。

「すまない。今日はプライベートで楽しみに来たんじゃないんだ」
「じゃあ、なんだってんだ？」

ーーーーーー『人工個性』のことについて興味があってね。

ぞくり。
機械の中から覗く目が、彼らを見つめる。

それだけで、全身の神経に針が通されるような、不気味な感覚が襲った。

「マイケル・クラーク…。個性『顕微鏡』。
ミクロン単位の物も肉眼で視認できる…」
「なっ…」
「ボブ・ジョンソン…。個性『精密操作』。
細かい作業も超感覚で正確にこなすことができる…」
「っ…!?」

自らの本名、個性を暴かれた2人は、全身の毛穴が閉じるのを感じた。
その様子を知ってか知らずか、その存在は「心配しなくていい」と、無害な存在であると示すように、大袈裟に振る舞う。

「大丈夫。ボクは敵ではなく、科学者だ。
『ブラックボックス』…。そう言えば分かるかい?」
「……!?個性研究の、第一人者…!?」

ブラックボックス。
その名を知らぬ者は、この世界に居ない。
個性因子を発見した研究者の元助手であり、個性関係の医学の基盤を作った人間。
この時代における個性研究において、右に出る者の居ない研究者。

「マイケルくん。私は君と同じことを考えているんだ」
「えっ…？」
「個性を人工的に作る…。
なんと素晴らしい研究だろうか！
その研究は確実に、人類の立つステージを上げる…。
それこそ、ただの人が神の如き力を作り出せるのだよ!!
それだけ大きいんだ、君の研究は!!」

引き込まれそうな感覚が、マイケルの心を掴む。
機械の奥にある瞳が、笑っていた。

「だが、あの生体工学のホープ…、Ｍｓ．コトノハはそれを良しとしない。

なんと愚かしいことだろうか。

人は神になれる…。その証明を、私としてみないかい?」

マイケルは、彼の手を取った。

万年開花に触れてはいけなかったのだ

「…なーんで僕、夏休みにもなって授業やってんですかね」
「水奈瀬先生、意外と面倒見いいな。
面倒くさがりなクセして」

三日後。
ふと、僕は持ち運び可能な黒板を前に、疑問を口にした。
担当している五年生のものじゃなくて、三年生に行うような簡単な授業。
それ自体は別にいい。いいんだ。
本気で何もかもを知らない生徒に、知識とその使い方を教えるというのは、先生の仕事の一つだ。
極たまーに、「答えだけ教えろよ！」とか吐かすクソガキも居るが。
問題なのは、今は夏休みということだ。
本来ならば休みの時期に、僕は何故一銭にもならない仕事をしているんだ。

「せんせー、この漢字分かんなーい」
「『れいめい』です。夜明けとか、物事の始まりなどを指す言葉です」
「せんせー、黎明期の個性についての記述は…」
「僕は専門外です。専門家に知り合いがいるので、今度連れてきましょう」

…楽しいからか。
クソみたいな自問自答を繰り返す僕に、ひそひそと轟くんが緑谷くんに話しかける。
「どういう人脈持ってんだ…？
アメリカの生体工学のホープ、電子工学の天才、歴史学者、エトセトラ、エトセトラ…」
「少なくとも、学問関連ならかなりの人脈持ってるよ。
青春を…っていうか、大学卒業までの人生を学問に極振りしたような人だし」
失礼な…と言いたいところだが、全く持って反論できない。
友人なんて、他の学問をかじる、もしくはその学問に精通してる人間と繋がりを持っていたいがために関わりを持ったのが殆どだ。

ゲーセンとかカラオケとかの娯楽施設なんて、中学生以来行ったことがない。

それだけ人生を削っても、僕の価値は、個性持ち一人分の価値にも届かないのだけれど。

「せんせー、できた！」

「ぼ、ボクも…」

「じゃあ採点して明日渡すんで、今日はもう東北さんと遊んできなさい。

彼女、運動不足気味なので、容赦なく」

彼女らからノートを受け取り、梅の木の下でゲームを満喫する東北さんを指差す。

寝耳に水とばかりに目を見開く彼女に、２人が元気よく駆けていく。

「「きりちゃーん！あーそーぼー！」」

「ちょっ、まっ、このクソ教師ィ!!」

「僕を恨まないでくださいよ。

ずん子さんから『リングフィットもしないレベルの運動嫌いなので、運動させてくだ

さい』って頼まれてますんで」
「ずん姉様アァァァァーーーーッッッ!?」

体育の授業でもほぼ動かないんだ。
せめて、今だけは筋繊維がブッチブチになるまで動くと良い。
僕はノートをリュックにしまうと、カタカタとタイピングを続ける緑谷くんに近づく。

「で、なんか分かりました？」
「万年開花と彼女たちの遺伝子情報を解析したんですが…全く同じ存在なんですよね…。
今、琴葉博士…ああ、妹さんの方と並行して解析してます」
緑谷くんは言うと、僕にパソコンのディスプレイを見せる。
…僕が専門的なことを理解できるわけないだろうに。
「…この時点で俺にはさっぱり分からん」

「中学一年生が学ぶ範囲超えてますからね。
習いたいっていうなら教えますが、習ってもまずコレは分からないですよ」

つくづく、科学者というのは僕の理解を超えている。
まぁ、僕と積み上げてきた知識の種類が違うから、当たり前なのだが。
そんなことを考えていると、僕の携帯から着信音が響く。
液晶画面に映る名前は、僕の同級生のものだった。

「ああ、失礼。…もしもし?」
『おい、バカコウ。今すぐ緑谷くん出せ』
「…葵さん、開口一番にバカはないでしょ。
緑谷くん。お呼びですよ」

僕が携帯を緑谷くんに放り投げると、彼は危なげなくそれを受け取った。

「もしもし、緑谷です。
…あ、はい…。…はい、すみません。

え？何処だって…？僕の地元の近くです。
…はい。……はいぃ!?
えっ、いや…っ、絶対に公にしちゃダメでしょそんなの!!
…はい。はい…。わかりました」

「何故でしょう。すんごく嫌な予感がする」
「奇遇だな、先生。俺もだ」

僕たち2人がそう呟くと、緑谷くんが震える声で告げた。

ーーーーーーこの木とあの子たち、人工個性の原型らしいです。

知りたくなかった事実が判明した。

♦？♦？♦？♦？

「へっぷし」
「あら、あかりちゃん。風邪？」

その頃、緑谷家にて。
山盛りの炒飯を平らげたあかりが、可愛らしいくしゃみを漏らした。

「いや、なんかムズムズして。
おかあさん、おかわり！」
「はいはい。本当によく食べるわねぇ。
作るのも上手で、好き嫌いもなくて、残さず食べる！食べ物に関しては言う事なしね！」

♦？♦？♦？♦？

「…なんで、こんなものが」

携帯の通話を切り、私は再びディスプレイに映し出されるソレに向き直る。

緑谷くんが作った転送装置で送られてきた、梅の花弁と、２人の少女の髪。
夢物語だと否定したのは、他でもない私自身。
だが、こうして現実に存在している以上、認めざるを得ない。

「私たちより以前に、個性を備えた知的生命体が存在した…？」

そう考えるのが自然だろう。
緑谷くんの友達…轟くんと言ったか。
彼が持っていた、「母方の家族のみが、万年開花を知っている証拠」と渡してきた資料。
万年開花のある森は、厳重に立ち入りが禁止されている私有地。
それこそ、万年開花のことを予め知っていないと、出入りが禁止されている程だ。
空中写真からでも、木々が邪魔をして映らないようになっている。
知られていないのも無理はない。
今回、情報を手に入れられたのも、轟くんがこの情報の重大さを知らなかったという部分が大きいだろう。

「…何がなんでも、マイケルには知られるわけにはいかないな」

この時、私はすぐにでもこのデータを破棄しておくべきだった。
…いや、もしかしたら、もう遅かったのかもしれない。
この時には、とっくの昔に取り返しがつかないところまで来ていたのだから。

♦?♦?♦?♦?

「焦凍は毎日、何処へ行っている?」

資格取得のための勉強を終え、食事の用意をしていた時のことだった。
先日、国連に呼ばれたとかでアメリカに渡り、帰国したお父さんが口を開いた。
私相手には、滅多に口を聞かないお父さんが、だ。

「…友達の所…としか、聞いてない」
「…ちっ」

聞こえるように舌打ちをされた。

恥ずかしい話ではあるが、私は焦凍の友人に会ったことがない。
というより、私は焦凍のことを、あまり知らない。
知ってることといえば、五年前に一度、行方不明になってから。
「友達のところに行く」と、楽しそうに語るようになったことだけ。
好物も趣味も、これっぽっちも知らない。
そんな私が、焦凍がどこに行っているのかなんて、知るはずもない。

「焦凍め…。自らの鍛錬すら忘れ、遊び呆けているだと…？
より厳しく鍛える必要があるな…!!」

お父さんの眉間のシワが、五百円硬貨を潰せそうなほどに深くなる。
帰ってきた焦凍がどうなるか。
そんなことは、簡単に想像できた。
私がお父さんを落ち着かせる言葉を出そうとしても、口から出るのは空気だけ。
何もできない自分が、恨めしかった。

「いや、それでは反省しないか。

明日は留守を頼む。
俺は明日、焦凍の友人とやらと話してくる」
「っ、それはっ…!!」

まずい。
初めてできた焦凍の友達の身になにがあるか、分かったものじゃない。
ただ、これだけは言える。
焦凍は、確実に友人を失う。
私がお父さんを止めようと声をあげると、お父さんはその鋭い目を私に向けた。
「焦凍とお前は住む世界が違う。軽々しく口を出さないでもらおうか…!!」

私は、屈服した。

♦？♦？♦？♦？

「人工個性が、こんな昔から存在していたなんて…」
「言っただろう？『君は間違ってない』。
世に在るということは、『公にしてください』って言ってるのと同義なんだよ」

琴葉葵の知らぬ場所にて。
先程、彼女が秘匿することを決めた資料を前に、マイケルの口から感嘆の息が漏れる。
どうやって手に入れたのか。
そのような疑問はすぐに消え、マイケルの脳は、「自分は正しかった」という言葉だけが埋め尽くす。

「私は、正しい」
「そう、正しいんだ。個性は人の手に余る？
違う。今の世界は、正しい管理ができていないだけなんだ。
僕たちがその管理者になろうじゃないか。
人工個性という、新たな方法で」

女とも男とも判別つかない声が、気持ち悪く聞こえることはない。
まるで、スポンジが水を吸い込むように、脳に言葉が染みつく。

「すべての個性は、人々が望むままのものに置き換わる。
君が目指すべき未来が、そこに在るんだ」

「私の、未来…」

譫言のように、マイケルが呟く。
機械から放たれる吐息が、彼の耳を撫でた。

「そう。君がすべての基準となるんだ」

脳髄…否。全身の血液に染み込むような言葉が、マイケルを蝕む。
その瞳に、ブラックボックスの顔が映る。
変わりもしない機械の顔が、笑っていた。

「さあ、行こうじゃないか。

始まりの人工個性…『万年開花』を拝みに」

世界を揺るがす大事件の幕開けは、近い。

脅威が目覚める

「…株ってやってみるもんですね」

翌日。

車の代金稼ぎを目的として、株投資を始めて数日が経った。

ゲームソフトどころか、弁当すら買えない料金だった株価が、馬鹿みたいに上がってた。

ちょっと焚きつけただけなのに、ここまで利益が上がると怖くなってくる。

誤解のないように言っておく。

株投資は、規定で禁止されている副業には含まれない。

だから、後ろめたいことなど何もない。

え？洗脳教育？

洗脳はしてない。ただ、やる気をそれとなく刺激しただけだ。

「先生って、黒幕みたいな人ですよね」

「緑谷くん、卒業してから失礼度合いが増してきてません？」

字面だけ見ると悪の帝王じゃないか。

そんなことを思いながら、即座に株の売却を決める。

家が建つくらいの金が手に入った。

…どうしようコレ。正直、軽自動車一台買えたら十分なんだが。

散歩に出てるポンコツと、緑谷家、東北家…あと轟くんたちに夕飯でもご馳走しようか。

「…ファミリーカーでも買います？」

「なんで東北さんが決めてるんですか」

「いや、法的でいて足がつきにくい移動手段としては、先生の車が一番ですし」

「確かに」

「僕が足ってことは共通認識なんですね」

運転免許なんて取るんじゃなかった。

そんなことを思いながら、金の使い方を思案していると、携帯が鳴った。
画面に映るのは、つい先日、番号を交換した轟くんの名前。
僕は通話ボタンをタッチし、携帯を耳にあてる。

「もしもし？」
『先生!!今どこだ!?』

いつものような平坦な声ではなく、焦り散らした声が響く。
彼の声に混ざって、爆発音やら何かが崩れる轟音が響いた。

「っ、そっちで何が？」
『落ち着け、ヒメ、ミコト!!
どうしちまったんだ、くそっ!!説明してる余裕がねぇ!!
早くこっちに来てくれ!!万年開花の前!!早』

ぶつっ。
音声が途切れる。

どう考えても、異常なことが起きているとしか思えなかった。

「…と、轟くんは、なんて？」

「今すぐ万年開花の前に来いと。

恐らく、戦闘が起きてます。

緑谷くんだけでも、急いだほうがいいかと」

「分かりました！」

緑谷くんは即座に、僕の家を飛び出して行った。

暫くして、轟音が響いたあたり、スーツを纏って飛び立ったのだろう。

残された僕は、東北さんをハイスペＰＣの前に座らせた。

「パソコンを貸します」

「えっと、マジで何が起きてんですか？」

「とにかく、万年開花に向けて、ドローンを飛ばしてください。

葵さんに中継も頼みます」

願わくば、敵をぶっ倒せばいいというような、単純な状況であって欲しいものだ。

♦？♦？♦？♦？

時は少し遡る。

今日は妙に親父の機嫌が良かった。

自分じゃ隠してるみたいだが、アレは分かりやすい。

ちょっと視線を外すだけで、かなり苛立った様子を見せた。

俺が修行から逃げて、ヒメとミコトの相手をしてることに腹が立っているようだ。

俺の携帯にＧＰＳが付いてることも分かっていたため、緊急時の連絡用にと電源を落とし、今日もまた万年開花へと向かっていた。

「……なんだ、ありゃあ？」

森に入る前。

唯一の入り口と呼べる、電子型のセキュリティロックがかかった扉の前で、怪しい人影が見えた。

1人はアメリカ人。
本当にインタビューの映像でしか見ないような、パッとしない特徴の顔。
それは別にいい。問題は、その隣。
緑谷のスーツのようなシンプルさなど、かけらもない無骨な機械が、人の形を取って、そこに立っていた。
遠目で見ても、機械の塊が放つ気配は、神経に針が通されるような、ゾッとするものだった。

「ここに、始まりの人工個性があるんだ。
法の壁など関係ないよ。
君が新たな法になるのだから」
「…私が、新たな法…」

英語だが、断片的に理解できた。
親父曰く「英才教育」として、普通の勉強も人並み以上にやって良かったと始めて思った。
その言動は、完全に『敵』のソレだ。

しかも、人工個性…？
まさか、万年開花とヒメたちを狙っているのだろうか。
なんにせよ、緑谷たちに連絡を入れなければ。
そう思い、携帯の電源を入れようとして、やめた。
ここでスーツを着た緑谷と、あのクソ親父が鉢合わせたらどうなるか。
想像には難くなかった。

「頼む、ヒメ、ミコト…！ヤツらに見つからないでくれよ…！」

いつも使っている入り口とは違い、注意しなくては気づかない秘密口の戸を開ける。
先回りして、ヒメとミコトに知らせなければ。
彼女らの身に危険が迫っていることに、俺の胸は焦燥感で張り裂けそうだった。

この時、俺は緑谷たちを呼んでおくべきだった。
後悔したが、もう遅い。
こんな状況になってしまってから、俺は自身の短慮を酷く呪った。

何があったのかも、今、語っておこう。

俺は途中で転げながらも、必死で森の中を走った。
クマにも出会した。
軽く氷漬けにして、そのまま通り過ぎた。
走ってる最中で、蜂の巣を壊してしまい、雀蜂に襲われかけた。
襲われる前に氷漬けにした。
そうやって何度も何度もつまづき、俺は一直線に万年開花へと向かった。

ようやく着く頃には、着ていた服はボロボロで穴が空いていて。
身体中には擦り傷と打撲が出来ていた。
二人の姿が見えると同時に、俺は声を張り上げた。

「ヒメぇ！ミコトぉ！」
「ショート…っ、どうしたのその怪我!?」
「と、取り敢えず、治癒しなきゃ…！」

二人が慌てふためきながら、俺に駆け寄る。
違う。何とかすべきなのは俺じゃない。
お前たちを狙う奴がいるんだ。
今すぐに逃げないと、ダメなんだ。
そのことを伝えようと、俺は肺いっぱいに空気を吸い込んだ。

「俺のことはどうでもいい！お前らと万年開花を狙ってるヤツらが…」

が。それを吐き終わる前に、俺の声は途切れた。
最短ルートを駆け抜けたはずなのに、俺たちの目の前に、あの機械の塊が立っていた。
目の前にして感じる、圧倒的なまでの恐怖。
全ての神経を引っこ抜かれるような感覚に、ごくり、と生唾を飲んだ。

「おや、見つかってしまったね。
キミたちは、ここの所有者の関係者かい？」

男でも女でもない、不快な音が言葉の形を為して、俺の鼓膜を揺さぶる。

だらだらと嫌な汗と共に血液が滴るのを感じ取りながら、俺は声を絞り出した。

「…それを答えて、どうなる？」

ぎゅっ、とヒメとミコトを強く抱き寄せる。
目の前のコイツと、まともに取り合うな。
脳の奥から、恐怖と戦慄が湧き出てくる。
吐く息を出来るだけ整えて、ヤツの機械の目を見据えた。

「答えない、か。別にいいよ。
…轟焦凍。エンデヴァーの息子。
個性は『半冷半熱』。エンデヴァーが望んだ『自分の完全なる上位互換』」

ぞっ。

本名どころか、俺の家族でしか知り得ない情報まで、目の前の機械はベラベラと話す。
なんだ、コイツは。

恐怖が俺の心臓を強く叩き、戦慄が俺の肺から空気を絞り出す。
手が彼女らから離れようとするのを抑えるだけで、俺はその場から動けなかった。

「ああ、警戒しなくてもいい。
君たちには手を出さない…。
ボクはただ、人工個性の力を、彼に見せにきただけなんだ」

機械は言うと、手から二本の管を伸ばし、万年開花に突き刺す。
そこから怪しい色の液体が注がれると、管は機械の体へと戻った。

「個性強制発動薬。
なかなか個性が発現しない子供に投与するための検査薬だが…。
人工個性でも効果があるのだろうかね？」

瞬間。

「くぁ、い、や、ぁあああぁあああアアアアアアアッッッ!?!?!?」

「や、ぁ、ぁああ、ぁああぁぁああああアアアアアアアッッッ!?!?!?!?」
ヒメとミコトが、もがき苦しみ出した。
その綺麗な声を濁らせ、喉奥から絞り出すような声が、天を衝く。
それと共に、万年開花がうぞうぞと蠢き、ヒメとミコトへと根を伸ばしていた。

「な、なにが…、起きてる…?」
「し…ょぅ…、と…。おね、がっ…」
「と、めっ…、た、す…」

ヒメとミコトが、息も絶え絶えに俺に言う。
彼女らの言葉に答える直前になって、その体からだらりと力が抜ける。
万年開花の根が、彼女らに触れたその時。
彼女らの目が開く。
その瞳は、いつも見るような、可愛らしさなどかけらもない。
光沢がなく、どこまでも深い、闇の色が彼女らの目に沈殿していた。

「『防衛システム・鳴花』、起動シークエンス…完了」

「ひ、ヒメ…？ミコト…？」

抑揚のない声が、彼女らの口腔から吐き出される。

万年開花の花弁が、生き物のように蠢き、彼女らの周りを漂った。

「リミッターを解除。個性生成…『殲滅』」

瞬間。

花弁が森を崩した。

これが、俺が先生に連絡するまでに見た、全ての出来事。

そして、世界を巻き込んだ「人工個性事件」の幕開けであった。

先生の語彙が死んだ

森が崩れた。
あまりに馬鹿げた光景に、パソコンに映った映像を前に、僕たちは口を開ける。
ところどころに梅の花弁が確認され、その一枚一枚からビームやら炎やら電撃やらｅｔｃ…まぁ、とにかくいろいろ放たれている。
何も知らぬ者も、ひと目見ただけで、その光景のデタラメさが理解できるだろう。

「…いやいやいやいやあり得ないでしょ!?
これ、花弁一枚ずつに『個性』があるってのと同義ですよ!?
古代人は一体何考えてこんなモン作ったんですかァ!?」

東北さんが、僕の考えていたことを代弁してくれた。
あかりさん以上のデタラメが、あの梅の精霊だったのか。
なんてバトル漫画だ。ドラゴンボール並みのインフレじゃないか、コレ。

「行かなくてよかったですね。
まず、戦闘技能どころか自己防衛手段もない僕たちが行けば、確実に死んでますよ」
「バリア用のドローン使ったところで、展開前に吹っ飛ばされるのが関の山ですね…」

普段であれば、現場にいないからこそ、他人事のように見ているのだが…。
あそこには、轟くんが居る。
それだけで焦り散らすのには十分だ。

「おぅふ…っ！」

僕が東北さんに指示を出そうとした、まさにその時。
彼女は天を仰ぎ見て、その目元を思いっきり掌で叩くように覆った。

「どうかしました？」

僕は東北さんを押し退け、パソコンの画面に向かう。
と同時に、同じく天を仰ぎ見て、目元を勢いよく覆った。

「…うっわ、マジヤバ」

「事のヤバさのあまりに国語教師の語彙が死んだァァァァァーーーーッッッ!!!」

パソコンの画面には、空を飛ぶＮｏ．２ヒーロー、『エンデヴァー』の背中と、シリウスを纏う緑谷くんの姿があった。

♦？♦？♦？♦？

「ヴィジランテ『ＳＡＶＥＲ』…。

こんなところでお目にかかれるとは、俺もつくづく幸運だな」

どうしてこうなった。

目の前にした憧れの一人、エンデヴァーを前に、僕の背中から冷や汗が吹き出るのがわかる。

取り敢えず、バレないように、音声変換も兼ねて読み上げ用ソフトを起動。

先生ときりちゃんの声を複合した声で、僕はエンデヴァーに言葉を返す。

『助けを求めている人が、すぐそこに居るんだ。構わないでもらえるだろうか』
「そうはいかん。
貴様は個性を振るい、ヒーロー活動を邪魔し、その役目を横から掠め取っている…！
その所業、敵となんら変わりない！
ヒーローの面目を潰す気か、敵!!」

敵呼ばわりされた。
過激派ヒーローってのは知ってたけど、ヴィジランテ＝敵って、ちょっと傷つく。
横から掠め取って…って言うけど、僕のやった活動の手柄はだいたいその場にいたヒーローのものになってるんだから、実質プラマイゼロじゃないか。
ヒーローの面目を潰す気かって？
そんなつもり、微塵もない。
ただ、人助けをするのに知識と力は必要でも、資格は要らないだろ。
そんな反論をしたとして、エンデヴァーが聞く耳を持たないことはわかっているが。

『我よりも、下の方に行った方がいいんじゃないか？森一つが消し飛んでるんだ』

「心配無用。サイドキックを向かわせている。あの程度を解決できないほど、俺の部下はヤワじゃない」
『…成る程』

知らないってのは、逆に厄介だな…。
もちろん、エンデヴァーとその部下が弱いとは、口が裂けても言わない。
Ｎｏ．２に上り詰めるまで、どれだけ険しい道を登ってきたか。
また、その男に信頼されるべく、どれだけの汗を飲んできたか。
それは想像に難くない。
ただ、今回は相手が悪すぎる。
きりちゃんから届いた情報に合わせて、偵察用のドローンから得た情報から推測するに、あの梅の木は「細胞の一つ一つが意志を持ち、個性を持っている」。
その意志を統合して切り離したのが、あの二人だったのだろう。
通りで、全く同じ遺伝子情報が出てくるわけだ。

『悪いことは言わない。今すぐ引き上げさせた方がいい』
「他人の心配より、まずは自分の心配をしたらどうなんだ？

この俺に叩きのめされる覚悟は出来てるんだろうなァ…!!」

どうしよう。言っても聞かない。

どんな形であれ、応戦すれば、まず確実に敵認定される。

…詰んでないか、コレ？

僕がそう思う最中、エンデヴァーが必殺技の『プロミネンスバーン』を僕に放とうとした、まさにその時だった。

「がはぁ!?」

エンデヴァーを、梅の花弁があっさりと吹き飛ばしたのは。

『あー…。結構飛ぶなぁ。よっと』

あまりのデタラメさに、もうあんまり驚かなくなった。

ヘカトンケイルで腕を二本だけ作り出し、ノックアウトしたエンデヴァーをキャッチする。

…ロストテクノロジーで、あのエンデヴァーが一撃で気絶って…。

未来人よりもデタラメな古代人ってなんだ。僕はエンデヴァーを、森から離れた病院の方へと腕を伸ばして運ぶ。

今思うと、先生の家で見た新劇場版エヴァンゲリオンに出てきた、第九の使徒みたいだ。

デザイン、もうちょい改良しとくかなぁ。

そんなことを考えることで、僕は軽く現実から目を背けた。

『っとと…。もうボイチェンも必要ないか』

そっちに演算処理機能が割かれても困る。

まずは轟くんとヒメちゃん、ミコトちゃんの救出。

そのためにはまず、万年開花に向かう必要がある。

「ＭＥＳＳＩＡＨ、リゲルに着替えさせて」

『了解しました』

早着替えプログラムは上手く作動するか？

一抹の不安とともにＭＥＳＳＩＡＨに指示を出す。

瞬間、ナノテクで装着していたシリウスが分解され、新たにリゲルが僕の体を覆った。

「おお、上手く行った！

あとは…テティスを十機展開して、落下、ァァァァァぁぁぁぁぁっ!?!?!?」

僕は二度目の墜落を味わうこととなった。

心的に余裕あったろ。

焦り散らしてもないのに、なんであんな雑な指示出したんだ、僕のバカ。

♦？♦？♦？♦？

「っ…、ヒメぇ！ミコトぉ！

聞こえてねーのか、なァ!?」

轟々と破壊の音が、森だった土地に響く。
ばあちゃんたちは、コレを知ってて隠していたのだろうか。
梅の花弁が、全てを壊していく。
あのアメリカ人と機械は、いつのまにか姿を消していた。
残されたのは、俺と、暴走するヒメとミコトだけ。

「「座標数、膨大。脅威レベル、測定不能。
全生命のリセット…不可能。
最終手段…星の破壊を実行する！」」

「っ、ヒメ!!ミコト!!」

その言葉を理解する前に、俺は崩れゆく地面を踏みしめ、彼女らへと手を伸ばす。
が。それは花弁によって阻まれ、俺は無様にも吹き飛ばされた。

「うあっ…、ああ!?」

彼女らに手を伸ばすも、もう遅い。
その姿が、花弁に隠れる。
地面に落下する衝撃を受け止めるべく、親父から無理やり学ばされた受け身を取る。
泥だらけになったが、気にしてられない。
今は、ヒメとミコトをなんとかして止めなければ。

「先生には連絡した…。
連絡手段はぶっ壊された…。
緑谷がどれだけ頼りになるか…果てはいつ来るかも分かんねー以上、俺がなんとかするしかねーか」

こんだけ騒ぎになれば、あのクソ親父も動くはず。
親父に限らず、プロヒーローがここに駆けつければ、ヒメとミコトを敵として、最悪殺してしまうかもしれない。
焦る時こそ頭を冷やせ。
迅速に、かつ的確に。慌てず、冷静に。

…クソ親父の教えも、結構役に立つな。

「花弁が散弾銃の如く、いろいろ放ってきやがる…。ああもバラけりゃ、一気に全部凍らすのは無理だ。

やってるうちに炎とレーザーに溶かされる。

燃やすのも無理。燃やしてる間にレーザーに貫かれてお陀仏…」

ダメだ。普通の中学生の頭じゃ、わかり切った結果だけしか思い浮かばない。

生憎、俺はちょっと地頭と血筋と個性がいいだけの凡人。

考えろ…。そのシワの少ねェ脳みそ搾り出す勢いで回せ…！

ブッ壊れるくらい考えろ、轟焦凍!!

「こんなところになんで焦凍くん…って、怪我だらけじゃん!?」

つぅ、と使い慣れない脳みそを回したことで、鼻血が垂れるのが分かる。

何が聞こえるが、それどころじゃない。

考えろ。今、俺に何ができる？

「避難するよ、焦凍くん！聞いてる!?」
「うっせぇ!!
今、考えてんだよ…！
ヒメとミコトを助けんだ…!!」

目が霞んで誰かは見えなかったが、邪魔だったから怒鳴った。
俺を揺さぶる手を振り払い、梅の花弁舞い散る竜巻を見上げる。
あそこに少しでも穴を作れば、ヒメとミコトに…。
いや、それでも花弁で攻撃され…。

「……ん?」

いや、待て。妙だ。
ここにも花弁が舞っているのに、俺の周りになにも飛んでこない。
…まさか。

「…どんだけ俺大好きなんだよ、アイツら」

なんだ。

考える必要なんて無かったじゃないか。

いつものように、ヒメとミコトを遊びに誘うような感覚で、俺は一歩を踏み出す。

「ちょっ、焦凍くん!?

危ないって、ちょっと!?」

今になって、はっきりと周りの状況が見えてきた。

焼け野原になった森に、吹っ飛ばされる見覚えのある…というより、見覚えしかないプロヒーロー。

地面へと突き刺さる花弁の波に、俺の腕を掴むバーニン。

…バーニンに「うっせぇ!!」って言ってしまった。

やったことはないし、成功率も皆無と分かるが、「あれ？居たんですか？」作戦でいこう。

「…あっ、居たんですか？」
「居たよ!!えっ、なに!?エンデヴァーさんに比べて、そんな影薄いのわたし!?」
そう叫ぶ彼女の手が緩んだ隙に、氷でダミーを精製して、拘束を抜け出す。
「焦凍くん!!」
「悪ぃ。友だちが、あそこで待ってるんだ」
これで俺も犯罪者、か。
どう叱られるか分かったモンじゃないが、アイツらに手を差し伸べられないよりかは、断然いい。
大丈夫。俺ならできる。
人生全てを賭けて、アイツらを助ける。
「…ったく。終わったら、二人とも全力高い高いの刑だ」
氷の道を作り、炎をブースターとして超スピードを生み出す。

瞬間。景色が線となった。

緑谷「何回僕の背に地球が乗るんだよ…!!」

「…やっぱいですよ。
あの子たち…ってか、あの梅の木、地球をマジでぶっ壊す気です」

東北さんがだらだらと冷や汗を流し、今にも泣きそうな声で、僕と帰ってきた二人に告げる。

セイカさんはその意味が分からず呆けており、あかりさんは価値観の違いか、「ふぅん」程度の反応だった。

「ええ!?未来でもそんな超兵器ありませんでしたよ!?」
「セイカさんみたいな下っ端に知らされてないだけで、星が壊れる可能性がある兵器は大量にありましたよ」
「そんな時代で兵器爆発させたのこのポンコツ!?」

本当、よく極刑にならなかったな!?

いや。今は、全貌のわからない未来に同情してる暇はない。
梅の花弁がドリルのように、地面を掘削していく光景。
コレでなにをしようというのかを、東北さんに聞かなくては。

「彼女らは一体なにを?」
「今さっき、私特製ドローン『見えるくん』で地球をスキャンしました。
地面に埋め込まれた梅の花弁たちが、凄まじい勢いで地球からエネルギーを吸い取ってます。
あと三十分で地球の寿命が尽きて、超新星爆発が起きます…!」

最早、ため息しか出なかった。
前回よりも小規模ではあるが、確実に地球は吹っ飛ぶ。
下手な敵よりも脅威だ。
…いや、最早脅威というより、天災だ。
古代人が作ったのだから、人災にカウントされるのだろうけど。

「…で、どうします？
唯一思い浮かぶ作戦としては、地球にエネルギーを供給するってことくらいですが…」
「私どころか、緑谷先輩でも無理ですね。
そういうアイテムを作ってません。あかりさんは？」
「私も無理です。
ただ放出するだけなら兎に角、注ぎ込む個性を作るってなると…1時間はかかりますよ」

僕たちが思考を巡らせていると、携帯から着信音が響く。
画面を見ると、そこには「琴葉葵」の三文字があった。
中継を繋いでからかなり経つが、今の今までなにをしていたんだと思いつつ、通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」
『おい、バカコウ!!
一体全体なんなんだあの世界の終わりみたいな光景は!?』

僕の鼓膜を突き破るような、つんざく声。
それが葵さんのものだと分かるのに、数秒もかからなかった。
焦り散らす彼女をさらに狼狽させてしまうが、隠していても仕方ない。

「僕らにもわかりません。
ただ、アレをなんとかしないと、あと三十分で超新星爆発が起きて地球がドォン!!…らしいです」
『…うそ、だろ…?』

葵さんの到底信じられないとでも言いたげな、弱々しい声。
僕の性格を理解する人間としては、嘘を言っていないこともわかり切っているはず。
そういう前情報を込みにしても、この光景をひと目見れば、まず「ありえない」が口から飛び出すだろう。
『っ、どうするんだ、バカコウ!
緑谷くんたちが動いてるのか!?

というより、彼らでなんとかなるのか!?』
「…わかりませんよ。
僕らにできるのは、せいぜい祈ることと、ちょっぴり背中を押すくらいです」

なんの力もない外野がなにを考えても、何かができるわけではない。
僕がなにを考えても、あの場での助けにはならないだろう。
であれば、助けになる人間に代理を頼むだけだ。

「あかりさんにセイカさん。
一つ、頼みがあります」

♦?♦?♦?♦?

落下はしたが、逆噴射機能で犬神家にはならずに済んだ。
しかし、いかんせん状況は良くない。
いや、むしろ最悪と言えるだろう。
あかりさんの時よりも激しい波状攻撃を捌くのに手一杯で、全然彼女たちに近づけな

い。

「…っ、きりちゃんから、メッセージ…？」

攻撃を捌く最中、メッセージが視界の端に開かれる。

集中力を少し割いて断片的に読む。

『あと三十分』、『地球の寿命』、『吸い取』、『超新』、『発が起き』…。

…マジか。

あと三十分で止めないと超新星爆発？

あかりさんの時といい、個性ってのはほんっとうにデタラメだな!!

「何回僕の背に地球が乗るんだよ…!!」

この波状攻撃の中では、最高火力を誇るシリウスの再生が追いつかない。

硬めに作ったリゲルでさえも、数秒の間欠けてしまうのだ。

シリウスに換装した瞬間、僕は蜂の巣になる。

とてもじゃないが、難しい。

「…難しいってだけで、出来ないって訳じゃない。ＭＥＳＳＩＡＨ、リゲルを『タンクモード』に移行」

『了解。変形シークエンスを開始します』

念には念を入れて、より硬く、より重く、リゲルの形が変化する。

テティスを展開する余裕がないため、その分のエネルギーをバリアによる装甲強化にまわす。

タンクモード。

地盤のゆるい場所だと、自重で沈むが、ここ最近雨が降ってなかったから好都合だ。

「難点は、進むスピードが遅くなることだけど…今の状況じゃ、こっちのが速い」

散弾銃のように放たれる攻撃を、腕を薙ぐことで弾く。

ヒメちゃんとミコトちゃんがいる場所まで、あと五百メートル。

このペースで行けば、５分後には着くだろう。

「頼むから来ないでよ、プロヒーロー…!」

人生で初めて、そんな願いを口にした。

♦？♦？♦？♦？

花弁の織りなすトンネルを駆け抜け、竜巻の中へと入る。
やはりというべきか、俺は攻撃の対象外として扱われている。
竜巻の中は混沌としているのにも関わらず、俺の半径五メートル以内は穴が空いたようになっていた。

「バーニン、ついてきてねーよな…？
来てたら死ぬぞ、コレ…」

ぴったりひっつきでもしない限りは、花弁に容赦なく蜂の巣にされて終わりだ。
親父のサイドキックがあの場にいたのだ。
最悪、親父が来ている可能性もある。

というより、絶対に来ている。
容赦のなさ『だけ』は日本トップのあの親父と、そのサイドキックだ。
ヒメとミコトを止められたとして、事情を知らない親父たちは容赦しないだろう。

「いや、そういうのは、後で考えろ…。
今、決心を鈍らせんな…！」

俺が心配したところで、今なにか出来るわけでもない。
竜巻の範囲はザッと見て、半径2キロ。
普通に走っていたら、プロヒーローに犠牲者が出るかも知れない。
先ほどと同じように、氷の道と炎のブースターで進む。
暫くすると、電撃やレーザー、その他諸々が織りなすトンネルの向こうに、二人の姿が見えて来る。
満開だった花弁は全て散り、果ては木そのものがボロボロと樹皮を崩壊させている。
その中で、彼女たちはただ無表情で、そこに佇んでいた。

「ヒメぇ!!ミコトお!!」

声を張り上げ、二人の名を呼ぶ。
表情は、ぴくりとも動かない。
返事がわりにと、凄まじい風圧が俺を阻む。
氷で体を地面に縫い付け、意識ごと吹き飛ばされそうな中、なんとか踏ん張る。
攻撃されないだけ、まだマシだ。
風圧で、目蓋が閉じそうになったが、気合で無理やりにこじ開けた。

「…っ、そぉ…!」

氷で重石を作り、無理やりに暴風の中を進む。
あの細い手に向けて、手を伸ばす。

「…よ、と……?」
「……し……」

微かだが、声が聞こえた。

さっきのような、無機質に放たれた、あの声じゃない。
俺の声が届いているのだろうか。
そんなこと、分かりはしない。

「来い…！」

手を伸ばす。届かない。
前に進む。風に押されて、全然進まない。
それでも、俺はひたすらに手を伸ばした。

「いつもみたいに、ヒメがバカなこと言って、ミコトが呆れて、俺も頓珍漢なこと言って、皆で笑って…！」

口から言葉が溢れ出す。
この手が、この声が、二人に届けと願う。

「しょ…と…」

「しょう……」
「っ、つかめ!」

二人の目に、光が戻っていく。
必死に手を伸ばす。
彼女の掌に、俺の指先が触れようとしたその時。

「「あ、くぅ!?」」

二人の悲鳴が響く。
びくん、と強く痙攣したかと思うと、つぅ、と二人の口の端から唾液が垂れる。
彼女らはそれを拭くこともせず、淡々と告げた。

「「防衛システムに異常発生。
原因検索…発見。個体名『半冷半熱』。
脅威レベル１０。対象の抹殺を優先する」」

気づいてしまった。
俺の声が、必死に戦っていた彼女らの気をそらしてしまったことに。

気づいてしまった。
闇に支配された瞳が、彼女らの意識がないことを物語っていることに。

気づいてしまった。
俺の伸ばした手が、彼女たちを闇に突き落としたことに。

気づいてしまった。
周りから、俺に目掛けて、人工個性が向けられていたことに。

「……ごめんな、二人とも」

口からこぼれたのは、後悔だった。
迫りくる死に抗う術を持たない俺は、せめてもの抵抗として、氷と炎を全力で放つ。
やはりというべきか、それは一瞬にしてかき消され、弾幕が俺へと襲い掛かる。

反射的に目を瞑り、来るべき衝撃に身構えた。

「……ん？」

おかしい。数秒経っても、俺の体に駆け巡るべき痛覚が来ない。
ゆっくりと、目を開ける。

「『フォートレスモード』！」

俺を守るように、謎の『膜』が、ドーム状に張られていた。
その前には、傷だらけのスーツの後ろ姿。

「漸く着いたァ!!
タイミングドンピシャ!?」

テレビで見るような、プロヒーローみたいなカッコ良さなど、これっぽっちも無い。
ヤケ気味の声が、俺の鼓膜を揺らす。

その声が友達のものだと気づくとともに、俺の口角が上がっていくのを感じた。

「…それ、ヒーローのセリフかよ。
カッコ悪ィ」

吹き荒れる暴力の嵐の中、緑谷がサムズアップを俺に向けた。

地球は梅色だった

残り二十分。
刻一刻とその時が迫る中、僕は轟音をかき消すように声を張り上げた。
「なるほどー!!つまり、二人の意識は押さえ込まれてるってわけー!?」
「ああ!!攻撃が激し過ぎて、情報交換に五分かかったが、大丈夫なのか!?」
連絡手段を作っておくべきだったか。
攻撃が激しいあまり、音が声をかき消す。
リゲルの装甲の再生が追いついていない。
演算処理的にも物理的にも、フォートレスモードはあと十分が限界。
轟くんが持ってた情報は、不確かな情報ばかり。
…まぁ、あかりさんと初めて会った時みたいに、なにも無いよりはマシだ。

「で、作戦は!?」
「確実に超新星爆発を止められる策は二つ！
二人を正気に戻して、梅の木をコントロールしてもらう!!
あるいは、梅の木を細胞の一片すら残らないくらいに破壊する!!」
「できんのか!?」
「後者は無理！地球の表面が消し飛ぶ!!」

地面に潜った花弁が広がり過ぎて、地球を表面ごと焼き尽くす必要がある。
正直、このまま超新星爆発を待つのも、解決しようと動いても結果は変わらない。
せいぜい、地球丸ごと吹っ飛ぶか、僕たちが全生命を殺した業を背負いながらディストピアを生きるかくらいの違いだ。

「じゃあダメだ!!
二人を正気に戻すぞ!!」

消去法で、この方法しかないわけだ。
だが、その方法になるとかなり問題がある。

「正気に戻すって、僕は無理だよ!?
　脳波を操る周波数とかは熟知してるけど、この状況じゃ確実に無理!!」
「大丈夫!!俺とアイツらをこの膜に閉じ込めろ!!俺がなんとかする!!」

　…説得となると、轟くんが一番効果がありそうだ。
　でも、それでも問題がある。

「切り替え時に轟くんが蜂の巣になるよ!?いいの!?」
「さっきからこっちだけ心配しやがって!!
　あんまなめんじゃねぇぞ!!
こちとら不本意ながら!!
ひっっっ…じょぉぉぉぉぉぉ～…にィっ!!不本意ながらァ!!
幼少期からトップヒーローになるべく英才教育受けてるプロヒーローの実子だぞ!!」
「不本意すぎない!?」

　プロヒーローの実子？

炎を使うプロヒーローはかなり居るけど、いったい誰のことだろう。
一瞬だけそんなことを考えたが、今はどうでもいい。
見たところ、二人の体は人間並みの強度しかないのか、攻撃があまり飛んできていない。
これなら、轟くんの個性でもなんとか対応できるかもしれない。
「轟くん！地球を救う覚悟、出来た!?」
「アイツらを助ける覚悟なら!!」
充分。
フォートレスモードで作ったバリアを浮かせ、彼女らへと走る。
正面の装甲がかなり剥がされたが、エネルギーの供給速度を引き上げ、再生を早める。
その間、三十秒。
『イズク様。五秒後が、最も安全に切り替えることが可能なタイミングです』
バリアを展開できる範囲内に来て、尚且つ比較的安全に切り替えることができるタイ

ミングを、ＭＥＳＳＩＡＨが支持する。
あと四秒。三、二、一…。
「轟くん!!攻撃は防いで!!」
「応!!」
バリアを切り替え、３人を閉じ込める。
少しばかりレーザーと電撃が侵入したが、轟くんの氷によって阻まれた。
「成功ォ!!」
「緑谷!!今すぐ竜巻ン中から離れろ!!」
轟くんに言われた通り、竜巻の中から脱出すべく、ブースターを展開する。
願わくば、プロヒーローが全員気絶してますように!!
♦？♦？♦？♦？

『…おい、バカコウ』
「なんですか？」
『気のせいか？オールマイトがエンデヴァー連れて現場に居たんだが』
「はははは現実ですよちきしょうめ」

今日ほど胃痛がひどい日を、僕は知らない。
明日になったら穴空いてそうだ。
明日が来るかどうかすら、まず怪しい状況なんだが。
リゲルのメインカメラで、緑谷くんたちの作戦が上手く行ったのは分かった。
あの場からの脱出も成功するだろう。
だが、一つだけ問題があった。

「あかりさんたちもまだ現場に着いてないってのに、どうしてこう面倒なのばっか集まるんですかねぇ…」
「トップヒーローとＮｏ．２…あとその他諸々なサイドキックさんたちを『面倒なの』呼ばわりするの、私らだけですよ」

竜巻をプロヒーローが囲んでる。
一方で緑谷くんは現在、竜巻から出ようとしている。
東北さんから得た位置情報によれば、進行方向には気絶から復活したエンデヴァーと、オールマイトがいる。

「…あかりさんに『全力で急げ』って連絡してくれません？」
『あと十秒で着くから黙ってろクソ教師』…って来てましたよ」

素麺の時といい、僕、嫌われすぎてない？
そんなことを考えながら、僕はアイスコーヒーを啜った。

「汚れ役は彼女らに任せました。
あとは、君たちがなんとかしなさい」

♦？♦？♦？♦？

「ありがとう、エンデヴァー。

おかげで早く着いた」
「…これで起こされた借りは返したぞ」

このチームアップが実現するとは、私自身思ってもなかった。
鈍ってた分をしっかりと『しごかれ』、調子の戻った体。
老いの分は流石に衰えたが、全盛期と比較してもあまり遜色はないだろう。
そこにエンデヴァーの事務所が全員加わるとなれば、鬼に金棒だ。
…流石に自惚れが過ぎるか。

「で、作戦は？」
「バーニンによれば、あの花弁、どうやら耐火性は皆無のようだ。
…焦凍…俺の子が、その友人を助けにあの中に入ったと聞いた。
ならば、俺が休んではいられん…!!」

ごう、と炎が燃え盛る。
エンデヴァーの眉間のシワが、さらに深くなっているのが分かった。

「オールマイト。少し離れていろ。
…プロミネンスゥゥ…、バァァァァァアアアンッッッ!!!」

太陽のような光があたりを包み込む。
放たれた炎が、氷、炎、レーザーさえも、あらゆるものを薙ぎ払い、花弁を焼く。
軈てその放出が終わると、竜巻の勢いが少し弱まっていた。

「…ちっ。しぶとい。最大火力でも焼き切れんとは…」
「では、私がいこう」

あの程度なら、今の私が放つＤＥＴＲＯＩＴ・ＳＭＡＳＨ一発で吹き飛ばせる。
私が拳を振りかぶった、その時だった。

『邪魔です、雑魚』

謎の二つの人影が、私たちの目の前に現れたのは。

『うっわ、めっちゃ睨まれてますよ？
あ…キズナさん。これ、マジに大丈夫なんですか？』
『落ち着いてください。私たちは言われたことをやるだけです。
あと、余計なことを話さないようにマイクは遮断しときなさい』
『りょーかい！』

若い男と幼い子供が混じったような声で、会話を交わす二人。
片方が少し喉元をいじる最中、もう片方が丁寧にお辞儀をした。
『どうもはじめまして、キズナです。
プロヒーローを前にするのは、クライシスオーガ以来ですかね？』

その瞬間。
私は彼女に殴りかかっていた。

♦？♦？♦？♦？

「ようやく会えたな、キズナァ!!」
『やれやれ。血の気が多いトップですねぇ。
まぁ、名誉に思ってくださいよ。
私が本来の姿で遊ぶなんて、そうそうないんですから』

オールマイトの拳を片手で受け止め、仮面の下で笑う。
本来の姿っていうのは嘘っぱちだ。
あの時、恐らくだが私とイズクくんの戦いを見られていた。
このままでは、私の描いた『普通の生活』が送れなくなってしまう。
そのため、この姿を『本来の姿』と称すことにしたのだ。

「それが、本来の姿だと?」
『ええ。あなたが見た少女の姿は、そこらの女の子をコピーしただけです。
ああ、向こうのは私を元にしたデザインのスーツです。イカすでしょ?』

ンなわけないでしょ。

ついた嘘にツッコミを入れながら、個性を作り出す。
この場で、十分に時間稼ぎが出来そうな個性は…『超速思考』。
私自身、あまり頭が良くないけれど、これで複数人の対処が出来るようになる。

『来なさい、トップにＮｏ．２。無様に地べた這わせてやりますよ』

時間稼ぎはやっときます。
あとは頼みましたよ、イズクくん。

『あ、すみません。マイク切るのってどうやればいいですか？』
『あアアアアアあああもおおぉオオオオオおおおおッッッ!!!!
せっかくカッコつけたのに台無しですよセっ…あなたアアアアアあああッッッ!!!!
私がやりますから、出来るだけ黙ってなさアアアアアアいッッッ!!!!』

…かなり相方に不安が残るけど、私頑張りますから！
泣きそうなのを堪えながら、私はオールマイトに殴りかかった。
ポンコツのお守りって、辛い。

帰ったら、たくさんたこ焼き食べよう。
お母さん、今日タコパするって言ってたし。

♦？♦？♦？♦？

「…まっさらになっちまったな。
大好きなカブトムシ、捕れなくなっちまったぞ、ヒメ」
「……」
「あそこのアケビ、もう少しで実んじゃなかったっけか、ミコト。
皆で食べようって言ってたじゃねーか」
「……」

…やっぱり、ダメか。
かれこれ十分間、絶えず話しかけているが、反応がない。
ただ、さっきみたいな無機質な声も、もう発していない。
多分、必死に争ってるんだろう。
俺には、そう願って、話し続けることしか出来ない。

「…なぁ。ヒメ、ミコト。お前らに、俺の夢の話、したことなかったよな」
「……ゆ…？」
「……め…？」

微かだが、声が聞こえた。
まだだ。ぬか喜びするな。
声をかけ続けろ。手を伸ばせ。
救い切るまで、絶対に気を緩ませるな。

「覚えてるか？初めて会った日のこと」

ぴくり。
俺が握った二人の手が動く。まだだ。
喜ぶな。やり終わるまで、その喜びを取っとけ。

「腹ペコで、喉もカラカラで、母さんがいない寂しさと、あのクソ親父への怨恨でぐちゃ

ぐちゃになってた俺に、『大丈夫？』って手を差し伸べてくれて…。
果物と水をくれて、俺の話を親身になって聞いてくれて…。
あんとき、凄い気が楽になったんだ」

あの日、あの木の下で助けられたように。
誰かを助けるなら、ちゃんと助けろ。

「俺をあの苦しい怨嗟と孤独の海から救い上げてくれたのは、お前らなんだ」

それが、俺のなりたいヒーローだろうが。

「俺は、お前らみたいな…優しいヒーローになりたいんだ」

♦？♦？♦？♦？

インクをぶちまけたような、黒の中。
ヒメとミコトは、焦凍の言うように、抗っていた。

自分が塗り潰されように、もがき、手を払い、まとわりつく黒を払っていた。

『…あーあ。やっぱり、強制起動したのが失敗だったか』

男とも、女とも聞き取れない声。
けれど、聞き覚えのある声が、黒の海に波打つように響く。
その波が二人を飲み込み、意識を飲み込もうとする。

「…っ、ショートぉ…!!」
「ショート…、ごめん、ショート…!!」

口から出る名前は、家族も同然の友の名。
黒が侵食する最中、彼女らは幾度となく声を上げ続けた。

『風前の灯火が、意外にしつこい。
…一時のくだらない感情で自我を持たせたのは失敗だった!!』

声が強くなる。
膨大な黒が、彼女らを容赦なく塗り潰す。
小さく残った自我さえも、砕け散ろうとしたその時だった。

『ヒメ!!ミコト!!大丈夫!!
俺がここに居る!!』

待ち望んでいた声が。手が。
彼女らの鼓膜を揺らす。手を握る。
瞬間。炎と氷が、黒を吹き飛ばした。

『…くくくっ…。あー、そうだったァ。
ボクが一番理解していたじゃないか』

全ての黒が、氷で、炎で消されていく。
不快な笑い声が、黒と共にかき消される。

「助けに来た。遅くなっちまって、ごめんな」

氷と炎に包まれて、影すら見えない。
それでも、ヒメとミコトはその姿を見たと言うだろう。

自らの、最高のヒーローを。

♦？♦？♦？♦？

「……んっ…、ショート？」
「…んぅ…、ショート…？」
「っ、緑谷!!二人が起きた!!」

轟くんの声が響く。
僕たちは現在、光のない地中に居た。
なんてことはない。竜巻から抜け出す直前、きりちゃんから「今、竜巻から出たら確実に攻撃される」と連絡を受けた。

であれば、出なければいいと判断し、轟くんを覆うバリアごと地中に潜ったのだ。

「ショート。ありがとう」

「カッコよかったよ。ヒーロー」

彼女らのヒーローは、紛れもなく轟くんだ。

僕の目に映る轟くんは、オールマイトのようにキラキラはしていないと言える。

だが、それは決して嫌な意味じゃない。

泥臭くて、ひたむきで、必死に救おうとする姿は、オールマイトよりもかっこいいと思える。

…人の好みが、先生に似てきたかも。

「轟くん。あと二分で地球の寿命が尽きる」

「褒め言葉に笑ってる場合じゃねーな」

時間がないことを轟くんに告げる。

轟くんは彼女らの肩に手を置き、その目を見つめた。

「次は、お前らがヒーローになる番だ」

♦?♦?♦?♦?

「な、なんだあれ!?」

プロヒーローの一人が、声を張り上げる。

私たちがそちらを見ると、枯れきった梅の木が浮かび上がっていた。

それを彩るように、地中に埋め込まれていた花弁が凄まじい勢いで飛び出し、梅の木を包み込む。

『…成功したみたいですね』

『流石は、最高のヒーロー…ですね!』

私たちが言葉を交わすと共に、花弁が空一杯に広がる。

梅色の空が、梅色の雨を降らせる。
太陽のように、満開の梅の木が空を照らす。
吸い取られた分のエネルギーが、カラカラになった地球に注がれているのだろう。
たった数秒で草木が芽吹き、樹木へと変貌を遂げる。
森が元どおりどころではなく、更に青く、美しい生態系を作り出す。

「…綺麗」

プロヒーローの一人が、声を溢す。

その日、世界の空が梅色に染まった。

肝試しってお盆にやるモン？
爆豪「内臓全部飛び出るかと思ったわ!!」

「お盆に肝試し？」
「町内会が開催する出し物です。
うちの学校からは、見た目が病人っぽい僕が参加することになりました」

あの戦いから2週間。
夏休みもいよいよお終いとなる時期にやってくる『お盆』に、僕らは全員が僕の家に集まっていた。

「肝試しって？」
「ひ、ヒメは…嫌いなんじゃないかな…？」
「ミコトの方がダメだろ。ホラーマンで泡吹くくらいなんだから」

ホラーマンって、あのアンパンマンのホラーマン!?

アレで泡吹くとか、どれだけホラーに耐性が無いんだろうか。
皆でアイスキャンディを舐める中、東北さんが「そういえば」と声を上げる。
「タコ姉様も参加するって言ってました。
オバケ役で」
「オバケ!?オバケに会えるの!?」
「ヒメちゃん、近いしうるさいです」
むぎゅう、と擬音が聞こえそうなほどに密着するヒメちゃんを、東北さんが押し退ける。
手に持ったゲーム機からは、謎の呻き声と悲鳴が響き渡っていた。
湿っぽい音も聞こえるし、英語も聞き取れる。
「ソレ、さっきから何してんだ?」
「百年くらい前に流行った海外のホラゲーです。轟先輩、やってみます?」
「…まぁ、参考程度に」

差し出されたゲーム機を手に取り、轟くんが東北さんの隣に座る。
その膝に吸い寄せられるように、ヒメちゃんがちょこんと座り、ミコトちゃんが恐る恐るソファの奥から覗き込む。

「ショート、ホントに大丈夫…？」
「大丈夫だっての。ミコトみたいに怖がりじゃねえし」
「あ、そこは…」

瞬間。ミコトちゃんが悲鳴もあげず、その場でぶっ倒れた。

「うぉっ。…なんだこのドロドロの怪物」
「腹パンマンです。捕まったら腹パンされて死ぬんで、そこ右に逃げてください」
「お口は可愛いよ？」

三人が仲睦まじくゲームに熱中する最中、ミコトちゃんを抱え、セイカさんが布団に寝かせる。
腹パンマン…腹パンされて死ぬ…ホラーゲーム　…って、アレか。

携帯ゲーム機版は海外限定じゃなかったか。
だから勝手に僕名義の通販使ったのか、このクソガキ。
アイアンマンやらの有名作品といい、前世の産物は結構在るんだな。

「で、緑谷くん。自由研究終わりました？」
「はい！『ナノテクの可能性』という、数万字の論文ができました！
琴葉博士から『ノーベル賞イケるで！』ってお墨付きの、会心の出来ですよ！」
「宿題用の自由研究ですよこのバカ!!」

小学校の頃よりも悪化してる。
天才とバカは紙一重と言うけれど、ただ単に基準が自分だと思ってるだけだと思う。
ひたむきに頑張ってきた弊害が、ここに来て出てしまったか。

「こういうのは、そこらの生態調査をソレっぽくやるだけでいいんですよ。
見つけた動物の写真貼って、『こういう生態ですよー』的なの書けばいいんです。
いいですか？」
「え？それじゃ学会で通用しないですよ？」

「学会に出すモンじゃないんですよ自由研究ってのは!!」

これだから科学者脳は!!

一応説明しておこう。

何故、僕が緑谷くんの自由研究の添削をしているかというと…これで分からない方がおかしいか。

どう考えても、中学生の自由研究の域を超越してるのだ。

小学校時代からひしひしと「おかしいな」とは感じていた。

中学生になってからは、よりそれが顕著に現れているように思える。

どこで教育を間違ったんだろう。

「で。その肝試しって何をするんですか?」

三本目のアイスキャンディを舐めながら、あかりさんが問うた。

僕は緑谷くんに「やり直し」と告げ、彼の「なんでェ!?」という断末魔を背に、彼女に答える。

「そこのホラゲーみたいに、心霊現象舐め腐った輩を死ぬほど驚かせる遊びです」
「言い方悪ィし趣旨違うぞ先生」
「わざとです」
「余計タチ悪ィわ」

僕以外にツッコミがいると楽だ。
将来、エンタメ番組に引っ張りだこなヒーローになりそうだ。

「水奈瀬さんはオバケ役ですか？」
「いえ、設定とセッティング係です。
あと恐怖を煽るアナウンス係。
大体のこと押し付けられたんで、思いっきりやってやろうと」

町内会の老害どもめ。
実家への墓参りは済ませたから別にいいが、あと四日とかいう土壇場で僕に押し付けやがって。

それでいて「なんもできてないから頼んだ」だって？
ふざけるのも大概にしろよ、腰抜かすほどビビらせてやるからな。

「轟くんたちも参加してみます？」
「ヒメはこういうの強い…ってか、アホだからなにが起きてんのかさっぱり理解しねーんだが、ミコトはなぁ…」
「ショート酷い!!」

確かに、ゲームを覗き込むだけでアレなら、ミコトちゃんは驚かす側でもキツそうだ。

「緑谷くんたちはどうします？」
「僕はセッティングのお手伝いと機材の提供だけして、あかりさんと普通に回ってみようと思います」
「私はずん姉様と驚かす側やりますね。
頼まれた衣装はずん姉様が作ってます」
「私は水奈瀬先生のお手伝い…はさせてもらえないので、普通に回ります！」

セイカさんには僕が「頼むから仕掛け側に参加するな」と念押ししたため、普通に回ることにしたようだ。

機材は、普通に売ってそうなものを用意してもらった。…それでも若干オバテクだが。

その代わり、手先が器用なずん子さんに無理を頼み、とびっきり恐ろしい衣装を作ってもらっている。

たとえ日中で出会しても、腰を抜かすくらいには怖い見た目だ。

「ショートー!おーねーがーいーー!」

「…ヒメと回る。ミコトは…緑谷のお母さんと留守番で」

…言い忘れていた。

結局、あの事件は以前と同じように「超常現象」として片付けられた。

あかりさんに「犯人は私ですよー」的な振る舞いをしてもらったが、報道されていないあたり、機密情報扱いされたらしい。

梅の雨が降り注いだ後、梅の木は緑谷くんのラボへと運び込まれた。
緑谷くん曰く、「細胞単位で分解して、ラボの中で再構築しました」とのこと。
ヒメちゃんとミコトちゃんは、戸籍をでっち上げ、僕が養子として引き取った。
無個性として登録したため、「面倒な爆弾は嫌だ」という理由で、親族は担任できないという規定を破ってまで僕のクラスに押し付けられた。

株投資がやめられなくなってしまった。
中毒じゃなくて、生活費が枯渇するという意味で。

轟くんは、個性の不正使用で前科がつくかと思いきや、状況が状況だったため見逃されたらしい。
その後、エンデヴァーに「勝手な外出を禁ずる」と監視がつけられることになりかけた。
が。轟くんはそのエンデヴァーに対し、「家族への仕打ちを俺の名前と身分証付きでメディアに垂れ流すぞ？いいのか？」と脅し、ことなきを得たという。
表に出たらまずい、という自覚はあったらしい。
…生徒たちが僕の性格の悪さを引き継いでる気がする。

とまぁ、それはさておき。
本題に入るとしよう。

「さてと…。クソガキ。夏休みの宿題の進捗どうですか？」
「……な、なんのことでしょう？」
「言っときますけど、成績の件、本気の本気ですからね」
「そんな殺生なァ!?」

♦？♦？♦？♦？

「勝己ーー！町内会の出し物、興味ない？」
「ああ？」

ぼりぼりと頭をかきながら、寝起きで霞む目でババアを睨む。
町内会の出し物っつーと、毎年やってる肝試し。

メンバーがやる気が最底辺のクソジジイどもしか居ないから、出し物の一つ一つが退屈なんだが。
その中でも群を抜いて、この肝試しは退屈だと記憶している。

「ほざけ」と参加しない旨を伝え、朝食のコーンフレークをがっついた。
…おかしい。いつもはスパスパ俺の頭をぶっ叩くババアが、手を出さねェ。
訝しげに眉を潜めていると、ババアは何処からか衣装を取り出した。

「今年の肝試し、結構本格的なのよ！」
「うぎゃァァァァあああァァァァァァァァァァァッッッ!?!!?!?」

その衣装を見た途端、俺は無様に悲鳴を上げ、椅子とコーンフレークごとすっ転んだ。
言葉にするのも憚られる、あらゆるものを冒涜的するような見た目の化け物。
ネームドヴィランでもチビって逃げそうな程に恐ろしい見た目のソレが、衣装を着た俺の母親だと気づくのに、数秒かかった。

「ばっ…、バッッッバァ!!ふっっっざけんじゃねェぞォ!!実の息子殺す気か!?」

「あーはっはっはっはっ!!
ひー、ひーっ…。あ、アンタ、そんな声出るんだ…、あはははっっ!!」
「笑うなァ!!」

内臓全部飛び出るかと思ったわ!!

衣装を脱がせ、笑うババアに詰め寄る。
が。ババアは腹がねじ切れるんじゃねーかって程、爆笑したままだった。

「ひーっ…。ひー…っ。水奈瀬先生凄いわねェ。こんな怖いの、町内会の出し物でデザインするなんて」
「は?」

水奈瀬先生…?

俺が一番嫌いな人間の名前が、ババアの口から出た。
水奈瀬コウ。俺が人生で出会った人間の中で、これからも出会わないであろうレベル

の性格の悪い教師。

すぐにクビになると思っていたのに、もう六年近くもこの街に住んで、教師をしてやがる。

それが、肝試しに関わってる…？

俺は怒鳴りたい気持ちを押さえつけ、ババアに問うた。

「一体どういうこった？」

「あれ？聞いてない？

今年の肝試し、水奈瀬先生が計画してくれてるんだって！

出久くんも協力してて、ポスターには『オムツを着用の上、ご参加ください』って書いてるほどの怖さらしいよ～？」

デクと、あのクソ教師が…？

ババアの答えに、ふつふつと怒りが湧き上がるのがわかる。

次の瞬間、俺は声を張り上げていた。

「上等ォだゴラァァァァァアアッッッ!!
誰がテメェらのくだらねェ出し物にビビるかッッッソがァァァァァァアアッッッ!!!!
逆にテメェらの心臓握り潰して殺したるわクソどもがァァァァァァァァァァああああッッッ!!!!」
「うっさい!!」
二日後、俺はこの時の宣言を死ぬほど後悔した。

公民館魔改造計画

「…本格的過ぎません？
公民館貸し切りはわかりますけど、ここまで魔改造します？」
「照明はセピア色で。…そうそう。ちょっと明るいくらいが一番怖いですからね」
「先生、聞いてます？」

キーボードを叩きながら、私はハッスルする先生に声をかける。
ここまで生き生きしてる先生、初めて見た。
肝試しの前日、午前十一時。
公民館は、異様な雰囲気に包まれていた。
外壁は緑谷先輩が開発した特殊な塗料で、何年も放置されたようなボロボロの物に。
中身は公民館というよりは、最早タダのボロ屋敷。
セットされた電線からは、特殊な効果を使って火花が散っているように見せかけている。
生活感が存在したように、乱雑にゴミが撒かれ、壁にはあまり口に出したくない言葉

が羅列していた。

「そこ、木の板が落ちてくる仕組みにしてください。…そうそう。

あと、匂い付けした血糊と、肉片っぽく作った紙粘土も…違います、もう少し後のタイミングで…はい」

この肝試し…というより、お化け屋敷の設定を、僭越ながらこの私、東北きりたんから語っておこう。

名前は「コＳＥえ、ＴＩようｄｉｅ？」。

タイトルから分かる通り、無個性であることを呪って自殺した少年の亡霊が、参加者に迫るという内容になっている。

この街の無個性の人は、ほぼ全員が驚かせる側に参加、ないし協力している。

というより、私たち以外に無個性の人間がいないため、驚かせる側の人数はかなり少ない。

「ちゅわっ!?

私、驚かす側じゃないんですの!?」
「前半の受付を頼みたいんですよ。
ずん子さんと交代です」

タコ姉様とずん姉様は、見た目の可憐さと優しい雰囲気からか、受付嬢に抜擢された。
タコ姉様に至っては完全に本職の人だし、いい感じに演出してくれると思う。

「勝己ねぇ、衣装見ただけでコーンフレークぶちまけてすっ転んだのよ!
出久くんは動じてないのにねぇ!」
「きりちゃんの家でマジモン見てから、大体のことに驚かなくなっただけですよ」
「あははっ!冗談も言えるようになったんだねぇ!」

ボンバーマンのお母さんと緑谷先輩の話の内容に、ビクッ、と肩が震える。
ボンバーマンのお母さん…長いんでボンママと呼ぶ…は冗談だと思ってるらしいが、本当なんですよねぇ。
あの時は二人揃って抱きついて、叫び散らかしましたっけ。
タコ姉様が除霊も修得してるイタコで良かった。

「個性持ちっぽい見た目の死体って、こんな感じですかー?」

道中で落ちているという設定のレコードの音声を、私が編集していた時のことだった。

ずん姉様の声が、物騒な言葉を発してることに気づいたのは。

「おお…。注文通り、磔にして、内臓掻っ捌いてるみたいですね。

照明の光加減で、詳細が見えないような位置に設置しましょう。

バミテは既に貼ってあるんで」

「ずん姉様!?気づいて!?

ソレは肝試しのセッティングにしてはおかしいことに気付いて!?」

私がそちらを見ると、ずん姉様と先生の隣に、夥しい数のオブジェが見えた。

その一つ一つが見た目の違う磔死体…勿論偽物…で、どれも共通して、バラバラに分解されたような痕跡があった。

道中にどんだけ置くつもりなんだ。

ざっと二十はあるぞ。

「きりちゃん、レコードの音声は出来た？」
「はい。既に小道具と予備も作ってますし、レコードの音声自体は、放送で流れるようにしてます」

…にしても、エグい台本考えたなぁ。
新学期。クラスがお通夜みたいな雰囲気になる光景が、ありありと目に浮かぶ。
なんでこんな、ホラゲー作れそうな台本を書いた。
…まぁ、最近ストレスが酷そうだったから、丁度いい発散なのかも。

「とりあえず、デモとして流してみます？」
「うん。放送で流してみて、反応見ようか」

正直、恥ずかしいんだが。

声の仕事は、東北きりたん本来の役目だ。

それは理解してるが、自分の声が放送で流れるとなると流石に恥ずかしい。
まぁ、古い録音っぽく加工してるから、正確には私の声じゃないんだが。
そんなことを考えながら、私は放送を流した。

『…お母さん。苦しいよ…。なんで、なんで僕は無個性なの…?なんで?あの子は、凄い個性を持ってるよ…?なんで?ねぇ?人は平等だって、皆言ってたよ?ねぇ?なんで?なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん』

ぶつっ。
放送のミスとかじゃなく、意図的に音声を途切れさせた。
我ながら会心の出来。
緑谷先輩は苦笑いを浮かべ、ボンママ含む大人のほとんどがなんとも言えない表情を浮かべていた。

「…先生の性格の悪さが滲み出てますね」

「ノリノリでやってる君も君です。
この肝試しで、思う存分伝えてやろうじゃないですか。
持たない奴の苦しみってヤツをね」

…果たしてそれは、肝試しで思い知らせる物なんだろうか。

轟くんと爆豪くんの悲鳴、聞いたことあります?

「ぎゃあああああああァァァァァァァァァァッッッッッ!?!?!?」
「たすっ、たすたすっ、助けて、っぇぇぇぇぇぇああああァァァァァァァァァァッッッッッ!?!?!?」

阿鼻叫喚。
今の状況を一言で表すならば、その一言に尽きた。
その元凶は、並ぶ行列にアトラクションの世界観説明をこなす教師。
そう。私…東北きりたんの担任、水奈瀬コウである。
あのあかりさんの悲鳴までも響き渡り、その中の恐ろしさを物語っている。

「…凄い悲鳴ですね、ずん姉様」
「作った甲斐がありました。きりたんも、お手伝いありがとう」
「まぁ、やることないんで」

嘘だ。
本当は、中に入るのが恐ろしすぎて、受付の手伝いをしてるだけである。
異形系の個性が溢れている世界で、「めっちゃ怖い」って珍しいんだぞ。
それでも大盛況なのには、訳がある。
最初に実験台として入ったプロヒーロー、「シンリンカムイ」が泣きながら「蛆虫でごめんなさい」と凹んだ様子で出てきたのだ。
無個性たちの訴えかけは、辛い過去を送ったとされるシンリンカムイの涙腺でさえも打ち砕いたようだ。

「それでも、怖いのは何とかして欲しいような気もする…」
「きりたん、どうかした?」
「いえ、なんでも」

どうして肝試しで道徳教育をしようとしてるんだ、あの教師は。
…多分、ただの思いつきなんだろうなぁ。
そんなことを考えていると、見覚えのある爆発頭が参加券を机に叩きつけた。

「一名ェ」
「あっ、勝己くん!大っきくなったねぇ!
挑戦するの?」
「もォ中学生だわ。テメェなんざとっくの昔に超えてるわ枝豆」
「枝豆じゃなくてずんだね。
はい、懐中電灯」

ずん姉様からひったくるように懐中電灯を受け取り、ずんずんと歩いていく爆発頭。
ボンママによると、衣装を見た時点で盛大にすっ転んでるらしいが、大丈夫なんだろうか。

「ひぎゃぁあああああァァァァァァァァァァァァァァァァァっっっっ」
「おわァァァァァああァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっっっっ!?!?!?!?」

…にしても、断末魔みたいな悲鳴だ。
プロヒーローまで腰抜かす怖さって、どんだけですか。
近隣のマスコミまで集まってきたし。

「…途中で気絶した場合、どうなるんでしょうかねぇ」
「詳しい仕組みはわからないけど、出久くんがなんとかしてくれてるみたいだよ。
懐中電灯に超音波？か何かを使って、気絶しないようになってるんだって。
その代わり、出口まで行かないと帰れない仕組みになってるらしいけど！」

…リアルホラーゲーム？

そんなことを思いながら、私はボンバーマンの後ろ姿を見送った。
声にならない悲鳴が聞こえたような気がするけど、気のせいだろう。多分。

♦？♦？♦？♦？

「…凝りすぎだろ」

渡された懐中電灯を着け、薄暗い…というには少し明るいセピア色の照明の中を進む。

一寸先も見えない、ということはなく、精々廊下の奥が見えないくらいで、あとはただの汚ねェ廊下だった。

「当て付けかよ、クソが」

先ほど聞いた放送によると、設定としては『無個性であることを呪って自殺した少年の亡霊がそこに居る』…だったか。

枝豆をはじめ、デク、クソ教師など、主催側に無個性どもが集まってやがる。

個性持ち相手に勝てねェからって、こんな出し物用意しやがって。

「…あン?」

かつん。

爪先に何かがぶつかった音が響く。

一体なんだとそちらを見ると、古いタイプのレコーダーがあった。

第二次世界大戦後ぐらいに使われてた、かなり古いヤツだったか。

雑学系の番組で見たソレを拾い上げると、カチッ、と音が響いた。

『お母さん！僕、どんな個性出るかなぁ？
お母さんみたいに、空飛べるかなぁ？
それとも、お父さんみたいに筋肉ムキムキになるカッコイイのかなぁ？』

その声に、神経が逆撫でされるのがわかる。
昔のデクみてェなこと言いやがって。
今すぐにでも爆破で破壊したいが、ここでデカい音出してアレに追われるのは避けたい。
俺は当て付けにとばかりにレコーダーを投げ捨て、順路を進む。
と。廊下の奥に進もうとしたその時だった。
貼り付けになった死体が、吊るされるような形で落下してきたのは。
「うぉっ」
こっ…、この程度でビビるかよ…！

昨日、ウォーミングアップとしてホラー映画を見まくった俺に、死角はない。
あらゆるありきたりを網羅した俺は、次に何も起きないことを知っている。
俺はそのセットを押し退けようとして、その手が止まった。

「ひっ」

小さく声が漏れる。
腹を掻っ捌かされたソレが、ぼたぼたと血液…多分血糊だろう…を流し、肉片…作り物なんだろうが、やけに柔らかい…を地面にぶちまけていた。

「ぎっ……!!」

悲鳴をあげようとして、無理やりに口を押さえた。
どんだけ凝ってんだよ…!!
俺がそんなことを思っていると、すぐ隣の壁に文字があるのが分かった。

ーーーーーー個性、ちょうだい?

瞬間。俺の足を誰かが掴み、勢いよく引っ張った。

「なん」

引っ張られる感触と、流れる風景。

足を見ると、ババアが着てたのとは違う形のバケモノが、その手で俺を掴んでいた。

「は、はなっ、離せクソが!!死ねっ!!」

爆破しようとすると、バケモノの手が俺を掴む。

一つや二つじゃない。

異形系の個性でもありえないほどの数の手が、俺の体を抑え込むように引っ張った。

「もががっ!!もがぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーっっ!!!」

得体の知れない恐ろしさに叫ぼうとするも、口を押さえられ、思うように叫べない。

その先にある無数の目玉に、俺は心に恐怖が刻まれるのが分かった。

行くなんて言うんじゃなかった。

♦?♦?♦?♦?

「ショート、大丈夫?」

「いっつつ…。先生も緑谷も、本気で怖がらせに来てるな…」

咄嗟にヒメを庇った判断が功を成した。

さっきの『個性、ちょうだい』という文字もそうだが、あの作り物の死体にはビビった。

東北の家でマジモン見てなかったら、普通に叫んでた自信がある。

ヒメはというと、特に怖いとは感じてないらしい。

なぜかと聞くと、「ショートが居るから!」と答えられた。

…なんか照れる。

「にしても、教育熱心だな。
ここ、無個性差別の矯正施設みてェなモンだろ」

引っ張られた先にあった部屋を見渡す。
さっきの通路は塞がっていて使えない。
あたりには、さっきぶら下がっていた磔死体がそこら中に飾られている。
磔台のプレートには、個性の名前と内容が書かれていた。
…実在しそうな個性ばかり書かれてる。
というより、十中八九実在してたのを書いてるな、コレ。

「しっかし、実際に切ったみてェな傷口として完成されてるな…。
東北の姉さん、手先が器用だってのは聞いたが、1日でコレ全部作ったのか…？」

個性持ちでも、こんなに早く作ることは出来なさそうだ。
そんなことを考えられるあたり、結構心に余裕あるな。
そんなことを考えていると、俺たちが出てきた場所から、俺たちと同い年くらいの少年が出てきた。

「よっと」

勢いよく地面に打ち付けられる前に受け止める。

…この爆発したみてぇな頭、緑谷が言ってた「かっちゃん」ってヤツか。

傍若無人の権化でプライドが無駄に高い…東北談…って言われてたわりに、泣きそうな顔してる。

「大丈夫か?」

「離せやクソが!!テメェの助けなんかいらねーわ半分野郎!!」

「轟焦凍だ。半分じゃねー」

「知らねーわ!!」

耳痛ェ。

ぎゃーぎゃーと耳元で騒がれたので、言われた通りにその場に立たせる。

にしても、緑谷が言ってた通りの人相だな。

ボンバーヘッドに、人を2、3人殺してそうな目つき。

東北によれば、口を開けば怒鳴り声が響き、常時不機嫌。
ヒメにまで怒鳴り散らされたら堪んねーな。

そんなことを思っていると、ザザ、とノイズ音が響いた。

『無個性…。僕、無個性なんだ…。
お母さん…。僕ね、ヒーローになりたい…。
なりたいけど、個性がないんだよ…。
ねぇ、お母さん…』

ーーーーーーどオして、無個性に産ンだノ？

瞬間。
ばんっ、と音が響いたかと思うと、ぼたぼたと水滴が落ちる音が響く。
俺たちがそちらを見ると、形容し難い容貌のバケモノが、俺たちを涙を流す目で見つめていた。

『み、ツツ、けけたたたたァァァ…。
おか、さン、コせぇ、みツけけけけけけけっ、けけたたたぁぁぁあはははははは!!』
「「うぎゃあああァァァァァァァァァァァァァァァァッッ!?!?!?」」

瞬間。俺たちは出会って間もないというのに、互いに抱きついて叫んでいた。

目の前に居るのは、どう考えても人知を超えた謎のバケモン。
しかも、所々髪の毛とか鼻とか、人の一部があるあたり、元が人間だってわかる。
挙動もなんかガタガタしてておかしい。
それをリアルで目の前にして、叫ばない自信があるか?
俺はない。気を失わないだけまだマシだ。
気づけば、俺はヒメを脇に抱え、ボンバーマンと走り出していた。

「っ、てめっ、俺の前走ってンじゃねぇぞ半分野郎ォ!!」
「お前がわざと後ろ走ってんだろーがボンバーヘッドォ!!」
「イヤアアアアアアアアアアッッ!?!?」
今、おしりっ、おしりに息がァァァァァァァァァァァァァッッ!?!?」

「言うなクソガキィ!!」

「ヒメ!!絶対振り向くなよ!?フリじゃないからな!?」

『こセE、ちょうdie?』

「「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッッ!?!?!?」」

過去最高速度と言っても過言ではない速さで、部屋を抜け出す。

落とし物は後で届けてくれるらしいから、何を落としてもいい。

今はただ、逃げることだけ考えていた。

「…ちゅわぁ…。ずんちゃん、怖く作り過ぎですの…」

轟焦凍、ガチギレ

「かっちゃんと轟くんから、あんな悲鳴出るんだ…」
「二人とも、悲鳴あげる性格じゃないですからね。
シチュエーションとセリフ、更には衣装までもこだわった甲斐がありました」
「こだわりすぎて、あかりさんがさっきから離れないんですけど」
「ふぐぅ…。ひぐぅ…。怖かったぁぁぁ…」

兵器やってた女の子までもが「怖い」って言うレベルか。

すごく生き生きしてる先生に、僕…緑谷出久は半目を向ける。
まぁ、この評判のおかげで、シンリンカムイを始めとして、ここいらで活動してるプロヒーローのサインをもらえた。
それだけは感謝する。

けれど、どう考えてもやり過ぎだ。

一緒に回ったセイカさんなんて、出て来れた安堵で気絶してる。
あかりさんは完全に腰が抜けて、僕に抱きつくことで漸く立ち上がっているような状態だった。

アニマトロニクス…ジュラシック・パークなど、動物の表現で使われるロボット…とか、ただの町内会の出し物で使うのか…？
それをノリノリで作ってた僕も僕だけど。

「マジモン見たことのある僕でもキツかったですよ、アレ」
「デザインはイタコさんに協力していただきました」

だからか!!

脳髄にまで恐怖を植え付けるような見た目してる、とは思っていた。
まさか、マジモンをよく知っている人にデザインを頼んでたとは。
通りで、プログラミングの時、ああも細かい動きまでも要求してくるわけだ。
そんなことを考えていると、轟くんとかっちゃんの悲鳴が聞こえてきた。

「半分野郎ォォォォォオオオッッッ!!
てめこらっ、気づいたんなら先言えやァァァァァアアアアアッッッ!!!」
「無茶言うなボンバーヘッドォ!!
いきなり来たんだから、ァァァァァアアアア無理無理無理無理無理近い近い近い近い近いィィィイイイッッッ!?!?」
「あんぎゃあァァァァァァァァァアアアアアアアアアアアアアアッッッ!?!?」
耳元っ、声っ、声ェェェェェェェェェエエエエエッッッ!?!?」
…あの二人がこんなに大声出すって、やっぱり怖かったんだな、ここ。
本職の人と手を組んだお化け屋敷って、絶対注目集まるよなぁ。
そんなことを思いながら、僕はコーラを飲み干した。

◆?◆?◆?◆?

「…見つけたぞ。レコーダー…。これで、先っ、進める…」

「声小せェぞ…」
「あんだけ叫べば枯れるっての…」

エンカウントし、逃げ回るのを繰り返して、どれだけ時間が経ったかは、もうわからない。
東北がやってたホラーゲームの主人公も、こんな気分だったんだろうか。
ガラガラになった声で、レコーダーの発見を報告する。
ボンバーヘッドも疲労困憊で、互いに大の字に寝転びたい気持ちで一杯だった。

「ショート、ここは大丈夫そう。レコーダー流そ！」
「…元気だな、あのガキ」
「元気だけが取り柄のアホだ…。俺らより怖がってねェ…。
怖い理由を理解してねーからな…」
「酷い！」

暫く腰掛けて体力を回復し、覚悟を決めてレコーダーのボタンを押す。
カメラで確認したのだろう。

何処からか流れた放送が、聞き慣れたノイズ音を発した。

『この個性もいいなぁ…。あの個性もいいなぁ…。みんないらないいらないって言うけど、僕にないんだよ？

いらないなら僕にくれよ。くれよ。くれよ。

くれって！よこせ！よこせェェェェぁあハハハはは』

ぶつっ。

東北の声だってのに、アニメでしか聞かねーような狂気に満ち溢れてやがる…。

ノリノリで録音したんだろうな、コレ。

「…個性がないって、こんなに辛いの？」

ふと、ヒメが俺の裾を引っ張りながら問いかける。

…俺は良くも悪くも個性を持って生まれたから、その苦しみはわからない。

それでも、緑谷たちが味わってきた苦しみは、少しだけ理解しているつもりだ。

「けっ。くだらねェ逆恨みでこんなモン作りやがって…。
あンのクソナード、ぜってェ殺す…！」

このボンバーヘッド、先生とは別ベクトルで性格悪ィな。
先生と緑谷が、逆恨みでこんな大がかりなものを作るわけがない。
作るとしたら、思いつき程度のものだろう。
…にしても、口が悪い。
ヒメにその口調がうつったら、どうするつもりだ。

「おい。子供の前だぞ」
「うっせェ」

俺が注意すると、ボンバーヘッドは施錠の外れた扉を開く。
磔死体が並ぶ通路の奥には、「死」と書かれた扉があった。

「…Ｂｅｎｄｙのパクリじゃねーか」

「あ？ンだソレ？」
「百年くらい前の海外のホラゲー」

まぁ、俺は他のホラゲーを知らないから、アレが普通なのかも分からないが。
…「死」の文字の最後あたりが、とんでもなく変な方向に伸びてるのが不穏だ。

「…ここで待ってても仕方ないな」

俺たちは嫌々ながら、一歩を踏み出した。

♦？♦？♦？♦？

最後の部屋に足を踏み入れる。
手術室のような部屋に、乾いた血液の跡。
中心には、古いタイプの映写機が、壁に映像を映し出していた。

「…なんかいるのかと思ったが、なんも居ねェな」

「出口を探そう。構図的に見て、そろそろ公民館の裏口あたりだ」
「命令すんな」

半分野郎に怒鳴り散らす元気もない今、俺は部屋を見渡そうとする。

『むこせー菌は、おれがやっつけたぞー！』

……は？

聞こえた声。
思い出したくない過去が、何処からか聞こえてくる。
反射的に、視線を映写機が映し出すソレに向ける。

『やめっ、やめてよっ…、かっちゃん…！』

そこには、俺の忘れたい過去があった。

Ｎｏ．１ヒーローになるためには、大きすぎる障害となる映像。
それが、俺の目の前に流れていた。

「…っっっ、ぁンの、クソナードどもがァァァァァアアアアアッッッッッ!!!!!」

ボンッ!!
衝動が任せるままに、叩きつけるように、爆破で映写機をブッ壊す。

さっきから俺への当て付けか？
陰湿なことばっかしやがって…!!

壊れた映写機を蹴り飛ばす。
がしゃん、と壁に激突し、完全に壊れても、映像は壁に流れたままだった。

「どれだけ俺の足を引っ張ったら気が済むんだ、クソどもが!!
俺のオールマイトを超えるヒーローへの道の邪魔ばっかしやがってェ!!!」

感情のままに怒鳴り散らし、暴れた。
アイツらはこう言いたいんだろう。
俺の将来なんて、自分たちの掌の上だと。
ふざけるな。ふざけるな!!
俺の輝かしい未来が、テメェらの匙加減で潰されてたまるか!!

「…おい」
「触んなァ!!」

半分野郎が、俺を止めようと手を掴む。
ばっ、と手を振り払う。
すると、半分野郎は凄まじい形相で俺の胸ぐらを掴んだ。

「んの、馬鹿野郎がァ!!」
「がっ!?」

ごちん。

頭骨同士がぶつかる音が響く。
つぅ、と肉が裂けて血が流れる中、それを拭くことも許さず、半分野郎が続ける。
「テメェ、さっきから気に入らねーからって暴れて、恥ずかしくねェのか!!
嫌いなモンだから、自分より下のヤツだからって怒鳴り散らして!!
小さな子に、『大丈夫?』って聞くこともしねェで、なにがヒーローだ!?」
「…、ヒーローは、勝つモンだろォが…!
一番上って称号だろォが…!!」
「っの野郎ォ…!!歯ァ食いしばれェ!!」
俺が言うと、半分野郎は俺の頬に拳を突き刺した。
「テメェも、あのクソ親父みてェなこと言いやがって!!
いいか!?テメェのその超絶めでてぇお花畑頭に教えてやる!!
勝つだけなら…一番上になるだけなら、敵でもできる!!

アメリカのヴィラン史どころか、世界さえも震撼させたＮｏ．１ヴィラン…『世界最強の天才肌』と呼ばれた『フィクサー』は、誰にも討ち取られることはなかった!!
若き日のオールマイトも、傷一つ負わせることも出来ず、見逃されたって話だ!!
最後にはテレビをジャックして、生中継で自分より下だったヤツらを嘲笑いながら寿命で死んだ!!
フランスの最大級敵の『ディアブロ』に勝てたヒーローは、いまだに一人も居ねェ!!
それどころか、フランストップでさえ赤子扱いされるレベルだ!!
ソイツも、ヴィジランテの『ＳＡＶＥＲ』に国際中継の真っ只中、一撃でブチのめされた!!
そいつらがヒーローって呼ばれねェのはなんでだ!?」

半分野郎の言葉に、俺は言葉を詰まらせた。
その態度に、半分野郎は更に声を張り上げる。

「答えろォオオッッ!!!!!
勝ってるやつが…一番上のヤツがヒーローって呼ばれねェのはなんでだァアアアアアアアアアアアッッッ!!!!?」

俺は、その答えがわからなかった。

呆然とする最中、どうして良いかわからないのだろう、バケモノがオロオロと半分野郎の肩を叩く。

「ちょっ、君！やめなさい！」

「離せ!!お前が答えるまで、俺はお前を殴り続けるぞバカ野郎ォ!!」

半分野郎が喚く最中、この施設から連れ出される。

俺とガキも同じように、外へと案内された。

意地張って、行かなきゃよかったんだ。

半分野郎と出会ったせいで、俺はこの答えに悩むことになってしまった。

ボンバーマン、アイドルに懐かれるかっちゃんが子供を助ける（結果）

「かっちゃん。おはよう」
「……来んな、デク」

あの色濃い夏休みが明けた。
願わくば、暫くは大きな事件が起きませんように。
そんなことを思いながら、かっちゃんにいつもの挨拶を交わす。
おばさんによると、肝試しからずっと大人しいらしい。
轟くんが「喧嘩した」って言ってたし、それが理由なのだろうか。
そんなことを考えていると、やる気のなさそうな担任教師が入ってくる。

「えー、お前ら。新学期早々だが、転校生を紹介する。入ってこい」

がらっ、と、扉が開く。

そこに居たのは、毎日顔を合わせる彼女…紲星あかりだった。

「お名前は…どう読むの、コレ？」

「キズナです。紲だけ読んで、星は読まないんです。灯は、あかり。初めまして、皆さん。紲星灯です。緑谷出久くんの親戚で、ちょっとした都合で一緒に暮らしてます」

ぺこり、と頭を下げ、愛想笑いを浮かべるあかりさん。

先生が、愛想笑いを練習させた甲斐があったなぁ。

させてなかったら、ほぼ１００％の確率で「お前らと仲良くする気ありません」って言いそうだったし。

「緑谷の親戚…？」

「あんな可愛い子が親戚…？」

…なんか、不穏な空気が。

予想通りというべきか、休み時間に、僕とあかりさんの周りに人が殺到した。
街に一つのテレビが来たみたいな反応だな。
無個性…そう言うことにしてる…でも、見た目がいいと便利なんだなぁ。

♦？♦？♦？♦？

「今日は転校生を『三人』、紹介します」

宿題の回収、始業式を終え、先生が教壇に立つ。
三人…？二人は知ってるけれど、もう一人は誰だろう。
私…東北きりたんが首を傾げていると、教室の扉が開いた。
そこから現れたのは、三人の女の子。
二人は、私もよく知る鳴花の双子。
もう一人は、初対面。だけど、知っているかどうかと問われれば、首を縦に振るだろう。

「では、自己紹介をどうぞ」

「鳴花ヒメです！よろしくお願いします！」
「鳴花ミコト…です。よ、よろしく…」

チョークに名前と…少し読みが特殊なため、振り仮名を書く二人。
ミコトちゃんは綺麗な字だけど、ヒメちゃんはガッタガタの汚い字だった。
その隣に、最後の一人がチョークで黒板にサインじみた名前を書く。

「お…、音街、ウナ…です。よ、よろしく…」

引っ込み思案そうな態度だ。
もじもじしながら自己紹介をこなす彼女に、私や先生、鳴花の双子を除く全員が雄叫びを上げる。

音街ウナ。
前世で言えば、ボーカロイドとボイスロイドの二足の草鞋を履いていた存在。
今世で言えば、現在休業に入ったばかりの、有名子役アイドル。

無個性というマイナス点を、同情票として上手く扱えた人間。
叫ぶな、という方が難しいか。

「東北さんの左隣…あの包丁の髪飾りの子です。そちらの方が空いてるので、音街さんはその席に。
二人は…あそこの席に座ってください」

…こりゃあ、一波乱ありそうだ。
そんなことを思いながら、隣に座る音街さんに「よろしく」と手を差し伸べた。

♦？♦？♦？♦？

「あ、勝己。おかえりー」
「ん」

デクから逃げるように帰った俺は、ババアに軽く会釈して、自分の部屋へと向かう。
カバンを無造作に放り投げ、ベッドに背から飛び込む。

じん、と響く頬の痛み、その熱さが、まだ消えていなかった。

「…勝ったやつが、ヒーローって呼ばれねェ理由…」

わからねェ。

俺はずっと、「ヒーローになる＝敵をブチのめして勝つ」ことだと思ってきた。

アイツの言ってたことは、デタラメだったんじゃないか。

そう思って、ネットで検索したこともある。

半分野郎の言ってたことは真実だ、と自分で証明しただけだった。

足元が全部、崩されたみたいだった。

ここ最近、まともに寝られない。

夜更かししてる、とかじゃない。

ただ、この答えを出さなきゃ、俺はあの野郎に殴り返すこともできないと思ったからだ。

…癪だが、デクなら、なんか知ってるのかも知れない。
そう思ってアイツの家に行こうとして、やめた。

ーーーーーーなんでもかんでも、誰かが教えてくれる、助けてくれると思ってたら大間違いです。
時には、自分自身で答えを見つけ、自分自身で助からないといけません。
ーーーーーー助けなんざ要らねェよ!!

あのクソ教師の言葉が、脳裏にフラッシュバックした。
助けなんざいらない。
そう言って、デクに答えを求めるっていうのはどうなんだ?

「…あぁ、クソっ」

本当にイライラする。
財布と携帯をポーチに突っ込み、ラフな格好で外に出る。
あのまま家に居れば、苛立ちでおかしくなりそうだった。

「あン？」

家から出ると、道に人が集まってるのが見えた。中には、マスコミまで混じってる。
プロヒーローでも来てるんだろうか。
遠巻きにそれを見ていると、枝豆が人混みをかき分けるのが見えた。
「こんな子供に寄ってたかって、良い大人が何してるんですか!?
いくらアイドルとは言っても、プライベートは尊重されるべきでしょう!?」
「報道の自由を行使してるだけだ!!
君に何かを言われる筋合いはない!!」

枝豆の怒鳴り声が響く。
だが、マスコミどもはそれを意に介さず、野次馬どももヒートアップする。
胸糞悪イ。
…あのクソ教師の真似をするわけじゃねーが、その一部始終をスマホで撮影する。
数秒程度で十分だろ。
録画を止め、声を張り上げた。

「人ン家の前でぎゃーぎゃーぎゃーぎゃーうっせェぞォ!!
映像ォ撮ったからなァ!!ネットに晒されたくなかったらさっさと失せろォ!!」

さっきの映像を流しながら脅すだけで、蜘蛛の子を散らしたみたいに逃げていく。
残されたのは、枝豆と妹のきりたんぽ、やけに見覚えのあるガキの三人だった。

「ちっ…。苛立ってんのに騒いでんじゃねーぞクソが…。ぶっ殺してやろうか…」
「…ぁ、あのっ!」

とっととその場から去ろうとした時、俺の服の裾をガキが掴む。

「あ、ぁりがとう…ござい、ます…」
「離せ。歩けねェだろ」

ぺこり、と頭を下げるガキが、俺の言葉に反応し、手を離す。
すると、枝豆が俺の元へと駆け寄った。

「ありがとう、勝己くん！
私じゃどうしようもなかったから…」
「礼とかいいから退けや枝豆。
今から散歩すンだよ」

枝豆を押し退け、このイライラを抑えるために、バッティングセンターへと向かう。
引き留めようとする枝豆を振り切るように、俺は走り出した。
…くそっ。枝豆を見ると、あの時のこと、半分野郎の言葉を思い出しちまった。

結局、バッティングセンターでも俺の気は紛れることはなかった。

かっちゃんがお兄ちゃんと呼ばれる

新学期が始まって、最初の一週間が過ぎた。
俺は、あいも変わらず苛立ちが消えない日常を送っていた。

「…っソが。休みの日に買いモン頼むなや」

商店街を回りながら、口から愚痴を溢す。
いつもなら「自分で行けやクソババア！」、と怒鳴り散らしていただろう。
嫌でも外に出てねェと、あのことばかり考えてしまう。
結局、答えはまだ見つからない。
腐るほどヒーローのインタビュー動画を見たが、どれもこれも抽象的で、全然分からなかった。
オールマイトのインタビューでさえも、俺にはいまいちピンと来なかった。
…また考えちまった。
苛立ちを鎮めるように、かつん、と転がった空き缶を蹴り飛ばし、ゴミ箱へ入れた。

周りのヤツらは「すげぇ」と言うが、俺にとっては普通のことだった。
そんなことを考えてると、足に何かが勢いよくぶつかる感触がした。

「お兄ちゃん！」
「あァ？」

疑問に思い、足元を見る。
そこには、昨日のガキが泣きそうな目でこちらを見ていた。
俺がガキの延長線上を見ると、クソ怪しいガリガリが、鼻息荒くして俺に近づいた。
…ンのガキ。面倒なことばっか持ってきやがって。

「あ、おぉ、お兄さん…。ウナちゃんを、僕に、僕にくださ…」
「唾飛んだキメェしクセェし不審者全開だクソガリポリ公呼ぶぞテメェエ!!」
「ひっ、ひいぃいっっ!?!?!」
デクとは違う気持ち悪さに、嫌悪感を丸出しにして怒鳴りつける。
慌てて逃げ出すガリガリを写真に収め、次突っかかって来たらポリ公に突き出せるようにする。

…ちっ。あのクソ教師の真似事しか出来ねェのか、俺は。
「ンで、クソガキィ…！
テメェ何が『お兄ちゃん』だゴラァ!!俺にンなデケェ妹なんざいねェんだよクソが!!
面倒ごとを体良く押し付けやがって!!」
「ご、ごめんなさい…。こないだ、助けて、もらったから…。
でも、助けてくれて、ありがとう…、ござい、ます…！」

…なんだ、コイツ。

「離せ」とだけ言って、買い物の続きに戻ろうとする。
が。何故か、ガキが雛鳥みたいに、俺の後ろを歩いていた。

「…離れろテメェ。邪魔だクソガキ」
「その、お兄さんと一緒にいないと、いろんな人が寄ってくるから…」
「そのいろんな人っつーのが面倒だっつってんだボケェ!!」
「ひぅっ」

掌を爆発させながら、ガキを威嚇する。
が、ガキは怯えながらも、俺の裾を掴んでいた。

「今日、東北さん…あ、お友達の、包丁の髪飾りの子なんだけど、ちょっと用事があるらしくて…。
一人で帰ってたら、あの人が…『お家に来ない？』って、しつこくて…。
今までは、東北さんが…、なんとか、してくれてたんだけど…。私じゃ、どうしようもできなくて…」
「もっとハキハキ喋れやだから襲われんだろがクソガキィ!!」
「ひぅっ」

俺が怒鳴るも、ガキは俺の裾を掴んで離さなかった。
離せと言っても、効果がなさそうだ。
バリバリと頭をかき、「しゃーなしだ」とだけ付け足す。

「離れたらぶっ殺すぞ、クソガキ」
「…う、うんっ！」

♦？♦？♦？♦？

「アイドルやってる友達が、性格クソ煮込みなボンバーマンに懐いてた件について」
「「ぶっふぅ?!」」

僕、轟くん、緑谷くんが三人揃って、口に含んだお茶を吹き出した。
げほっ、げほっ、と僕と緑谷くんがむせる最中、轟くんが声を出す。

「一体どーいう経緯で、ンなことになってんだ…？」
「あの先生よりも嫌な方向に性格がクソ悪いかっちゃんが子供に!?」
「それ、爆豪くんに言ってませんよね？」

緑谷くん、日が経つ度に口が悪くなる。
性格も僕に似て来たような気がするし、僕が悪影響与えてるんだろうか。

「六年生の時、『かっちゃん、その水奈瀬先生よりもクソ悪い性格どうにかしたほうがい

いよ』って言ったら、とんでもない顔と声量で怒鳴られました！」
「見えてる地雷踏んでどうするんですか」

とっくの昔に指摘してたかぁ。
あの子の他を見下す性格の矯正は、僕では出来なかった。
二人きりの進路相談の時も、「あの映像消せ」としか言わなかったし。
…ちなみに言うと、映像を消す気はない。
卒業後になって「自分を見つめ直すために欲しい」という子が続出しているのだ。
肝試しの時の映像も、かなりぼかしていたため、当人でもほぼほぼ分からないようになっていた。
爆豪くん以外の子は、ただの演出として見ていた。
だが、よりによって爆豪くんは、これっぽっちも反省することなく、この肝試しを「無個性の逆恨み」と捉えていたみたいだ。
その態度を何度も目の当たりにした轟くんが、心の底からブチ切れて、頭突きと拳のコンボを決めた…というわけである。
「…あんな怒鳴り声がデフォの子に、引っ込み思案な音街さんが懐くなんて、到底考えら

れませんけどねぇ」
「結果的に、あの態度がウナちゃんを助けてますからね。
あの子、立場的な問題で、妙な輩につけ狙われることが多いそうです」

成る程。
確かに、あの近づき難いオーラの庇護下に居れば、面倒なのは近づいてこないだろう。
懐いている、というよりは、避難場所にしていると言った方が正しいかも知れない。

「…にしても、アイドルって大変ですね。
プライベートも関係なしだなんて」
「他人事のように言ってますが、ヒーローも同じですよ。
超が付くほどのアングラ系のイレイザーヘッドでさえも、私生活を一部メディアに無許可で取り上げられてます。
アイドルなんて、ヒーローよりも風通しがいいんですから。
そりゃあこぞって集まるでしょうよ」

僕は言うと、コンビニのどら焼きを頬張った。

「願わくば、面倒ごとが起きないことを祈りたいですね」
「先生のそれ、でっかいフラグなんですから、言わない方がいいと思いますよ」
「確かに…」
「フラグってのは分かんねーが、漫才でいうフリみてェ」
「…そんなに？」

♦？♦？♦？♦？

「か、完成した…！こんな、こんなに簡単に出来てしまうなんて…！
古代人の技術とは、素晴らしいものだな！」

マイケルの声が震える。
手の中には、小さなカプセル型の注射器。
赤い液体の中に、ぷかぷかと浮かぶ小さな細胞。
夢にまでみた『人工個性』の完成に、マイケルは震えていた。

『喜ぶのは早いよ』

かつん。

機械の足が、床を叩く音が響いた。

『まずは実験といこうじゃないか。

安全性を確認してから、世界に公表しよう』

彼は言うと、マイケルからサンプルを取り上げる。

それを厳重に箱にしまうと、彼は踵を返した。

『丁度、それが欲しいって言う人が連絡をくれてね。実験がてら、試してみようか』

緑谷くんと爆豪くんが一緒に帰宅してんの?ウソでしょ?

「バクゴーさーん!」
「学校、終わったか」
飛びついてくるガキ…音松だか、音街だか…を受け止め、隣を歩かせる。
コイツの面倒を見るようになって、二週間が過ぎた。
どーいうわけだか、コイツは面倒ごとが起きると真っ先に俺のトコに来やがる。
最近じゃコイツの親にまで感謝され、ババア共にまで「これからも面倒みてやれ」と言われた。
面倒ごとが起きてから来られるのも面倒なので、俺は嫌々ながら、コイツの帰宅に付き添うことにした。
…ったく。まだ答えも見つかってねェってのに。
未だに俺の体を縛りつけるような、あの言葉の感触がする。

勝っても…一番でも、ヒーローって呼ばれねェ理由。
法的資格がないと言えば、話はそれで終わるだろう。

だが、それで行けば、ヒーローのくせに負けてる奴らはどうなる？

ヒーローの敗北なんざ、ネットを調べれば腐るほど出てくる。
あの若き日のオールマイトでさえ、『フィクサー』に傷一つ負わせることも叶わず、勝ち逃げされたことも知った。
「あの敗北があったから、平和の象徴になれた」ってインタビューも聞いた。

ヒーローは必ずしも、最後に勝つわけじゃない。
敵に勝ち逃げされることだってある。
敵に殺されることだってある。
そのことを知った俺の頭の中では、あの時の問いが思考の全てを支配していた。

「バクゴーさん、どうかした？」
「…なんでもねーよ」

そう悪態をつくと、ガキは面白そうに笑った。
…なんか、調子狂う。
最初に会ったときに比べれば、かなりまともに話すようになった。
警戒する必要がないって思われてるらしい。
最近は、手を繋ぐことを要求されるようになった。
断ればぎゃあぎゃあ泣いて面倒だから、仕方なく許可してる。
ガキの手は、ちょっと力を入れれば握り潰せそうなほど、細く小さかった。

ーーーーーーかっちゃん、大丈夫?

…嫌なことを思い出した。
虐めてたデクは、ある日から変わった。
あの教師がやって来てから、おかしくなったと言えばいいだろうか。
休み時間だろうが、授業中だろうが、どう考えても異常な勢いでノートに何かを書き殴っていた。
たまに意識無くして机に頭ぶつけても、数秒もすれば起きて。

顔中の穴から血を出そうが、その手を止めなかった。
無駄な努力だって何度言おうが、アイツはノートに釘付けで、俺のことなんか眼中に無いって言いたげだった。
なんでかは分からない。
机に向かってるデクを見てると、胸にざわめきが走るようになった。
だから俺は、アイツを…デクを避けた。
それは、今でも続いてる。
だと言うのに、今日はタイミングが悪かった。

「あ、きりちゃん！」
「ウナちゃんも帰りですか」
「かっちゃん、奇遇だね。そっちも帰り？」

デクが、きりたんぽを連れて駆け寄る。
そうだった。
デクと枝豆ンとこは、家族ぐるみで仲がいいんだった。
枝豆の妹は、このガキと仲がいい。

校門前に突っ立ってたら近寄ってくるのは、当然の帰結だろう。
「関係ねェ」とだけ返し、ガキに「行くぞ」と手を引いた。
「一緒に帰った方が楽しいよ?」
「俺は楽しくねェ」
そう返すと、ガキは泣きそうな顔で俺を見つめる。
泣かれたら面倒だ。
親衛隊とか言う訳わからん不審者どもが、寄ってたかって襲いかかってくるのだから。
コイツはそれを自覚してないから、怖かったり、嫌だったりするととにかく泣く。
ワガママが強い方じゃないだけ、まだマシか。
「…話しかけんなよ、デク」
「僕のこと避けてるのなんで?意地?」
「知るか」

ズバズバ要らねェこと言うのも腹立つ。
俺は苛立ちを抑えるように、拳を握りしめた。

♦？♦？♦？♦？

「…緑谷すげェな」

学校が終わり、先生の家にて。
緑谷が用意した検査キットのディスプレイに映し出された結果に、感嘆の声を漏らす。

俺が持っているタブレットは、単純に言うと、『個性の原理』を調べる検査キットだ。
個性に関する部位を写真に移すだけで、粒子単位までスキャンをかけてくれるらしく、その原理を解明してくれるという。
世に出たら、個性研究してる研究者が揃ってひっくり返りそうだ。

「…分子運動を操作して、炎と氷を作り出す個性。

体から放出しているのではなく、肌に触れた空気中の分子運動を操ってるだけ…か。
…こう考えると、俺も十分デタラメなのか」

炎も氷も、『生み出す』って感覚だったが、実際には違ったのか。
先生に化学の教授を紹介してもらおうか。
東北の持ってた漫画で読んだ、『メドローア』。
炎と氷をぶつけても熱膨張が起きる程度だったが、個性の仕組みを知ってしまえば再現できるかも知れない。
知るってすげェな。出来ることが増えてくって、こういう感じか。
緑谷はこういう感覚がクセになって、科学にのめり込んでるんだろうな。

「ショート、何してるのー?」
「分子運動…?操作…?」
「おお。ヒメ、ミコト。
帰って来たんなら手ェ洗っとけ」

帰って来た…俺の自宅じゃないが…二人に言うと、その奥から現れた先生に声をかけ

る。

「…いや、まぁ…、面倒だから合鍵渡しましたけども。

けれども、そんなプライベートルームみたいな散らかりようになります？」

「高そうな羊羹あったんで、一人でいただいといた」

「君も馴染みましたね。悪い方向に」

自宅のように使えって言ったのはそっちじゃないか。

申し訳なさ…ただしミクロン単位…で謝り、羊羹を頬張る俺と二人。

先生は「慣れたからいいですけど」と言い、インスタントコーヒーを淹れた。

「先生、化学者の知り合いっているか？」

「居ますよ。三十年前くらいにノーベル賞取った教授が、大学の夏休み期間で暇そうにしてます。

超絶飲兵衛で飲みの誘いがしつこいので、君を当て馬にしますね」

そりゃ、都合がいい。

「ぜひ頼む。いつになる?」
「明後日の夜です。金曜なんで、僕の付き添いで相手しなさい」
「おう。冬姉に連絡しとく」

…こうして見ると、俺って結構先生たちに毒されてるのかも知れない。

最近、夏兄と久しぶりに話した。
親父を脅して好き勝手してることを言うと、「あの親父のせいで性格歪んだのか!?」と心配された。
それは親父というより、先生の影響だ。
ちなみに言うと、親父には私生活に何も言わせないように脅しまくった。
でっち上げの証拠さえも、先生経由で脚本家やら写真家やらの技術の学んで作った。
「ネットにばら撒くぞ。消しても増えるぞ」と言うと、効果覿面だった。
アイツは俺のことを「最高傑作」って言ってるから、脅迫罪で訴えることもしないだろ。

…そう考えると、俺たちって正義の秘密結社って言う割には、メンバーは悪の秘密結社っぽいよな。

そんなことを考えていると、パートから戻ったセイカさんがソファに寝転んだ。

「だぁあ…。疲れたぁあ…」
「生活費の調達、ご苦労様です」
「今日、お給料日なんで…。家賃、払いますぅう…」
「２万。確かに受け取りましたよ」

社会の摂理を見た。
子供の前で現金のやり取りをするな。
複雑な気分になる。

「セイカさんは、お家に住むのにお金を払わないといけないのー？」
「ぼ、ボクたち、払ってないよ…!?払ってないと、追い出されるの…!?」
「そうですね。

君たちも働けるようになったら、お家に住むためにお金を入れなきゃいけません。
今はまだ働ける年齢ではないので、今のうちに死ぬ気で頑張って、学歴積み重ねて、稼げて楽しい職業に就くといいですよ」

ヒメとミコトが「じゃあ頑張る!」と、ランドセルからノートやら教科書を取り出して机に向かう。
言ってることは正しいんだが、いかんせん言い方が悪い。

「言い方どうにかなんねーのか?」
「キツめの言葉の方が、記憶に残ります。
現実を早めに見た人間だけが、好きなことできるんですよ」

やり過ぎるのも問題ですが、と遠い目をする先生。

その「好きなことをやり過ぎた奴」が、俺たちに牙を剥くとは、この時は思ってもいなかった。

かっちゃん、デクのもう一つの顔を知る

ガキの家にて。
ガキの両親に「あがってゆっくりしてけ」と言われ、よりによってデク共々客室に連れてかれた。
よほどの金持ちなのか、客室一つがアホほど広い。
メイドやら執事やら、空想だけのモンかと思ってたが、実在してたことに驚いた。

「珍しい。かっちゃんが机に足乗っけてない。明日、天変地異でも起きるの？」
「そりゃどう言う意味だクソナードォ!!
アホでも分かるくれェに高価なモンだから、損害賠償請求されねェよォにしてるだけだわボケ!!」
「不良ぶるなら、その世界トップクラスのみみっちさ捨てた方がいいですよ、ボンバーマン。略してボンマン」
「ンだときりたんぽォ!!ボンマンってなんだゴラ死ねや!!」
「『ぽ』はいりませんし、あと百年は死ぬ予定ないです」

コイツら、マジでぶっ殺す…!!

怒りを抑えるように掌を爆破させるも、右隣に座るコイツらはこれっぽっちも動じない。

特にデク。昔はビビり散らしてたのに。

小学４年あたりから「チラチラ光ってウザい」としか言わなくなった。

…石っコロが、調子に乗るんじゃねェよ…!

そんなことを思っていると、ランドセルを片付けたガキが、俺に飛びついてきた。

「バクゴーさーん!」

「ぐぶっ!?」

重さ約４０キロが俺の腹に突き刺さる。

鍛えてはいるが、圧縮された内臓と衝撃の痛みから、情けない声が出た。

「魚雷みてェに突っ込んでくんな痛ェだろクソガキィ!!」
「バクゴーさんは避けないでしょ？」
「避けるかアホ!!
テメェなんざあと5倍デカくなっても簡単に受け止めたるわクソが!!」
「痛いのに？」
「痛くねェ!!」
「言うことの統一くらいしたらどうですかね。アホっぽく見えます」
「ンだとクソガきりたんぽォォォォォォォォォォォォォォッッッ!!!!!」

俺が怒鳴ると、ガキが笑う。
くそっ。今日は厄日だ。
…久々に、デクとマトモ…かはどうか分かんねーが、会話をした気がする。
逃げてたということを突きつけられたようで、また腹が立った。

その時だった。

「ウナちゃぁぁああん!!迎えに来たよぉお、おおおお!!」
「っ、緑谷ァ!!ソイツら守れェ!!」

半分野郎とこないだのガリガリが、ぶっ壊れた壁の瓦礫とともに部屋に入ってきたのは。

♦？♦？♦？♦？

「…俺専用スーツ…ねぇ」

時は数分前に遡る。
先生の家に寄った帰りで、緑谷から貰った『轟焦凍専用スーツ1号』の入ったカプセルを手で遊ばせる。
要らねェ、って断ろうとも思った。
だが、これがないと、あの機械野郎に勝てる確率がないことも事実だった。
あの梅色事件。俺は戦闘面で役に立ったとは言えない。
むしろ、ただのお荷物だった。

緑谷から聞いた話じゃ、「人工個性は既存の個性とは一線を画すどころじゃない差がある」らしい。
ソレは俺も目の当たりにしてる。
腐っても。腐ってもＮｏ．２の男を、軽々しく吹き飛ばす個性さえも作り出せるのだ。
俺が生身で相手した所で、ものの数秒で殺されるのがオチだ。
「…俺の個性も…応用しねェ限りは、通用しねェ確率が高い、か」
右指でマッチ一本ほどの火を、左指で爪くらいの大きさの氷を同時に生み出す。
あの時、ヒメとミコトを助けるために、がむしゃらになってやった同時発動。
このくらいだったら大丈夫だが、より大きい力になると、脳を酷使し過ぎて鼻血が出るんだよな。
それでただぶっ放す、もしくは熱膨張で吹き飛ばすくらいしか出来ないんじゃ、割りに合わない。
「メドローア習得しねェと」

現実であれだけ威力が出るかは分からないが、やってみる価値はある。
少なくとも、ただ氷と炎を放つよりはマシだろう。
そんなことを考えていると、豪華な家の前で何事かぶつぶつ言ってる男を見つける。
「くそっ…。あのガキ、僕のウナちゃんから離れろよ…。ウナちゃんは僕のなんだぞ…」
…通報するか。
逃げられても見つけられるように写真を撮り、警察に連絡を入れようとする。
その時。男は首筋に何かを打ち込んだ。
「お、おお?おおお!
わかる!わかるぞ!ぼ、僕にも、強い個性ががががあ、ぁぁ…!!」
挙動がおかしい。
カラカラと転がってきた筒が、俺の爪先に当たる。

俺がそちらの方をちらり、と見ると、『人工個性試作品』と書かれたラベルがあった。

人工個性を量産する準備をしている…？

ぞっ、と首筋に冷たいものが走るのがわかる。

あんな危険なモンが、あんないかにも危険そうなヤツの手に渡ってる。

「っ、アンタ！」

「ウナちゃぁぁああん!!今、会いに行くからねぇぇぇぇぇぇ!!」

俺が男の前に飛び出した時には、すでに遅かった。

拳から放たれた風圧で、俺は無様に吹き飛ばされた。

豪華絢爛な家の壁にぶつかるも、氷でなんとか受け身をとる。

が。続け様に衝撃が走ると、壁が砕けた。

砕けた壁の奥を見ると、目を開く緑谷が真っ先に目に入る。

「ウナちゃぁぁああん!!迎えに来たよぉお、おおおお!!」

「っ、緑谷ァ!!ソイツら守れェ!!」

俺が声を張り上げると共に、緑谷がシリウスを纏い、デカイ盾を作り出す。
人工個性相手に、出し惜しみはしてられない。
カプセルのボタンを押し、貫った腕輪に認証させる。
瞬間。俺の体は、水色がかった白と赤の鎧に包まれた。

「状況は!?」
「人工個性の試作品!!ウナって子を狙ってる!!以上!!」

がしゃん。
高級そうな机が、俺の足で砕け散る。
仮面越しに映る男の姿が、ボコボコと音を立てて変わる。

「ウナちゃんから離れろよぉおお、爆発頭のクソガキぃぃぃぃぃぃ、いい、イイイイィィィィッッッ!!!」

アンバランスな体型のソイツは、怪しい光を灯した瞳をボンバーヘッドと、音街ウナ

へと向ける。
さっきの言動と言い、個性社会のアイドルの追っかけって過激だなァ!!

「…デクに、半分野郎…？
テメェ、そのカッコ…ＳＡＶＥＲ…？」
「かっちゃん、説明は後！早くこの場から離れて！」

東北が小さな機械を取り出し、この間、俺を守っていたあの膜を張る。
振り下ろされた拳が膜に激突するとともに、凄まじい風圧が、家の一角をめちゃくちゃに破壊する。

「緑谷先輩、時間稼ぎ頼みます！
私は自立リゲルと救助に向かいます！」
「分かった！気をつけて！」
「むーーーっ!!むぅーーーーーっ!!!」
「ウナちゃんんん!!ソイツらはダメだよぉおお!!ボクと一緒にいきよよよぉおお、よぉおお!!」

何か言いたげなボンバーヘッドを、縄でぐるぐる巻きにして引きずってく東北と音街。

彼女らが部屋から去るのを待たず、男がそれを追いかけようとする。

「ジャスティスゥウ…」

「ヘルズスキル…」

分子の遠隔操作をスーツの機能によって可能とし、停止させる。

触れてなきゃ強く、瞬時に冷却出来ないという弱点を消した、このスーツありきの技。

「ブロォォォオオオオオォォォオオオオオオオオッツッ!!!」

「コキュートスバインド!!!」

本当だったら漢字のほうが良いんだが、正体バレは防ぎたい。

緑谷作のスーツはなんでもありだし、個性の特定はされないだろう。

氷によって磔にされた男に、緑谷の拳が叩き込まれる。

不純物ゼロの純氷だ。そう簡単にヒビは入らないし、身動きも取れないだろう。
人工個性相手だ。手加減も油断もしてられない。

「僕とウナちゃんの邪魔するなぁぁあ!!」
「いっ…!?」
「んなっ…!?」

これっぽっちも効いてない…!?
冗談だろ…!!隕石砕く拳だぞ!?
純氷をあっさりと破壊し、男は緑谷に殴りかかる。
緑谷はそれを咄嗟に避けることなく、両腕でそれを受け止めた。

「轟くぅうん!!今のっ…ぎぎっ…、うちにぃ……、攻撃をぉ!!」

緑谷の余裕の無さそうな声が響く。
左側の炎でジェネレーターから放出されるエネルギーを燃やし、更に威力を増大させたものを指先に集中させる。

「ヘルズスキル・インフェルノレイ!!」

指先から放たれた熱線が、男に襲いかかる。

だが、その一撃は謎のバリアによって阻まれてしまった。

「…は?」

「流石は人工個性いい!!僕の思った通りに変わってくれるうぅう!!

この力があれば、ウナちゃんとあんなことも、こんなこともおおぉおふふふふ!!」

その笑い方、あの肝試しを思い出すから今すぐやめろ!!

口から出ようとした言葉を飲み込み、緑谷を投げ飛ばした男を氷結と全身で食い止める。

それでも、東北が逃げた方向へと無理に進もうとする男に、俺は声を張り上げた。

「っ、テメェ、あの子の何が目的だ!?」

「そんなのぉ、体に決まってるじゃないかぁぁあ!!」

「あァ!?あんな子の体に、人工個性に関するモンがあるってのか!?」
「関係ないよぉ!あの子を僕のお嫁さんにするんだからぁぁあ!!」

イカれてやがる!!
あの子がまだ結婚できる歳じゃないって、正常な判断も出来ねェのかよコイツ!!
火に油を注ぐことはせず、純氷の壁を幾重にも重ねた箱で閉じ込める。
飛ばされた緑谷が駆け寄り、その箱にバリアを張った。

「これで閉じ込めた!出る前に催眠音波を流すから、耳栓を…」
「っ、緑谷!!すぐに離れろ!!」

びしり。
氷に、バリアに、ヒビが走る。
俺は咄嗟に氷を緑谷の前に作り、彼を傍に抱えて一歩下がる。
次の瞬間には、そこには大きな穴が開いていた。

「邪魔だぁぁぁあ!!僕とウナちゃんの邪魔をををォォォォォォォ!!」

奇声を上げながら、竜巻を発生させる男。
スーツに切り傷がついたあたり、触れたものを斬る竜巻を起こしてるんだろう。
人工個性ってのは、本当にデタラメだ。
攻撃は兎に角、アホみたいにタフな相手だ。
なら、そのタフさを捻じ伏せる攻撃でブチのめすしかない。

「コイツ、慣れてねェし興奮してっからバカみてェな火力の個性しか作らねェ!!
緑谷!!紲星ン時に使ったっつー装備に替えろ!!」
「え!?下手したら殺しちゃうかも…」

緑谷はそう躊躇うが、相手をただの人間と見ない方がいい。
梅の一件と、紲星の存在で、そのデタラメさはよく知ってるだろ。
俺は緑谷に語りかけるように言うと、声を張り上げ、熱線と氷の散弾銃を放った。

「いいから早く替えろ!!街一つ簡単に吹っ飛ばす奴が相手なんだぞ!!
安心しろ!!相手はこんだけ殺す気で攻撃しても死んでねェんだ!!

簡単にはくたばらねェ…がぁっ!?」
「うるさぁぁぁあああい!!」

俺の腹に拳が突き刺さる。
俺がそれを言い終わる前に、景色が線になる。
拳によって吹き飛ばされたと悟るのに、数秒にかからなかった。

「緑谷ァあああっっ!!!
後で戻る!!それまで絶対ェ音街ンとこ行かすんじゃねェぞ!!」

遠のいていく緑谷に、声を張り上げる。
通信で拾っていたのだろう。
緑谷は少し頭を抑えるそぶりを見せながら、サムズアップしていた。

爆豪「答え合わせの時間だ」

「ンだとォ!?アイツが、クソデクが俺より上だとォォォ!?!?」
「そりゃそうでしょ、ボンマン。
　アンタ、オールマイトを一撃で倒せて、地球一つ簡単に吹っ飛ばすヤツ相手に、何もさせずに勝つ自信ありますか?」
「……ぬがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっっっ!!っそが、あるわけねェだろ!!」

　告げられた真実は、俺にとって受け入れがたいものだった。
　デクが、あの何も出来なかった木偶の坊が。
　世界中を騒がせ、プロヒーローでさえも手を焼いたヴィランを鎧袖一触でブチのめすヴィジランテ。
　過去に二度、人知れず世界を救った英雄。
　一度目は、鎌倉山の超常現象。
　未来から来たっつー個性兵器…あの転校生を、未来人から救った話を聞いた。
　二度目は、梅ノ空事件。

古代に存在したっつー梅の木が、星をぶっ壊そうとしたのを、半分野郎と食い止めた話を聞いた。

認めたくない。たが、認めざるを得ない。

俺は、デクよりも下だ。

世界を救うなんて偉業を成し遂げたこともないし、成し遂げられるとも思わない。

今、デクと顔を合わせるたびに感じる胸のざわめきの理由がわかった。

アイツが死ぬ気で頑張ってるのに、焦っていたんだ。

それを見ねェフリして、絶対に超えられることは無いってあぐらをかいて。

気づけば、俺とデクの間には、埋められない差が出来ていた。

それを、「もし俺より上だったら怖ェから」って理由で、避けていた。

そんなの、認められるか。認められるか!!

認めたくない。認めたくないが、認めるしかない。

俺じゃ、今のあのガリガリに勝てる気がしねェ。

「……っっ、ソがァぁぁあ!!!!!!」

くそっ。くそっ…。
なんで、なんで。
悔しさのあまり、声が漏れる。
ボロボロと、いつぶりかに涙を流す。
その涙の意味は、悔しさなんかじゃない。
自分でも訳がわからない感情が、ぐちゃぐちゃになっていた。

「なんで、なんでアイツらは、俺より先に行ってんだよ…!
なんで、俺の分かんねェ答えが、あのデクに分かンだよォおっっ!!!
俺の…俺の憧れ方が間違いだってか…!?
くそっ、くそぉ…!!なんで、なんで俺は、分かんねェんだよ…。
なんで、俺は、勝てねェんだよ…!!」

俺がそう溢すと、きりたんぽが俺の胸ぐらを掴む。

オロオロするガキに「目を瞑ってください」と言うと、俺の頬を引っ叩いた。

「何もしてないし何も知ろうとしないアンタより先に行ってるのは当然でしょ!!
緑谷先輩は無個性に生まれて、この世の不利益全部その小さな体に受けて!!
それでも『やってやる』って歯ァ食いしばって、限界を超え続けた結果がアレですよ!!
アンタは一度でも知恵熱でぶっ倒れたことはありますか!?集中しすぎて顔中から血ィ吹き出したことは!?正しいって思ってた式が間違ってて、山の一部ハゲさせる大爆発に巻き込まれたことは!?」

きりたんぽの言葉に、頷くことが出来なかった。
そんな苦労、今まで一度もしたことがない。
何でもやればできた。
周りがすごいって言うから、俺はすごいって思ってた。
出来ない奴らの気持ちが、これっぽっちも分からなかった。

「緑谷先輩に勝てないだなんだと宣うのは、あの人よりもぶっ壊れるほど全力でやってからにしなさいよ!!

分からねェって喚くなら、しっかりと周りを…、分かってる人間を見なさいよ!!
本気で頑張ったことのない人間が…。
本気で他人の気持ちになったことのない人間が……!
本気で罵倒されたことない人間が!!
本気でつまづいたことのない人間が!!
そうやって悩んでるフリをしてることに心っっ底腹が立つ!!!!
だからっ!!私はァ!!アンタがっ!!心のっ!!底からっ!!世界でェっっ!!一番ンっっっ!!
大っ、大っ、大っ、大っ、大っっっっっ嫌いなんですよォ!!!!!!」

…くそっ。クソっ。
悩んだフリしてた?他人の気持ちになったことがねェ?
俺の考えも、悩みも、悔しさも、なんも分からねェくせに…!
そう反論しようとしたが、口から言葉が出ない。
俺の胸ぐらを掴むコイツの目に、背筋がゾッとするのを感じた。

「き、きりちゃん…。なにも、そこまで言わなくても…」
「コレの今までのツケです。

死ぬ気で頑張って、アイドルという称号を手に入れたウナちゃんとは違うんです」

きりたんぽは吐き捨てるように言うと、「逃げますよ」と俺を引っ張る。

抵抗する気も起きなかった俺は、流されるようにきりたんぽの後ろに立つ。

その時だった。半分野郎とデクが吹き飛ばされてきたのは。

「がぁっ!?」

「うぐぅ…!?」

「っ、轟先輩に緑谷先輩!?」

「僕らはいい！早くここから離れ…」

瞬間。俺の体に衝撃が走った。

「ごぼっ…!?」

「死死死死ねねねねぇぇへへへへっ!!」

「かっちゃあぁんッッッ!!」

あばらがへし折れ、口から血の塊が吐き出される。
無様に吹っ飛ばされた俺を、デクが受け止めた。

「っ…」
「かっちゃん、大丈夫?」
「…ッソがぁ…!」

どこで差がついた、とは言わない。
わかり切っている。
俺は、コイツがノートに向き合って、何度もぶっ倒れてるのを実際に見た。
それで分からねェって方がアホだ。

「ウナちゃぁあああん…。待っててねぇえ…。今、悪い奴をぶっ殺すからぁぁあ、ァァァァァァァァ!!!」
「ヘルズスキルゥゥ…!!
インフェルノォォォッ!!アァァァァァァァァアックスッッッ!!!」

炎を纏い、高速回転の勢いを乗せたかかと落としが、ガリガリ男の脳天に叩き込まれる。
ネームドヴィラン相手なら、「決まった」と思える一撃。
だと言うのに、そのガリガリは半分野郎の足を掴み、地面に叩きつけた。
「ぐふぅっ!?」
「お前は邪魔だよぉぉおおっっ!!」
コレが、デクの戦ってきた相手。
誰が見ても分かる。
俺どころか、プロヒーローですら怖気付いてしまうであろう程の、圧倒的存在感。
人工個性という、どんな個性にも変化するというデタラメを手に入れた人間相手に、俺が勝てるなんて自惚れはない。
デクに何かを注射され、痛みが消えていく。
だというのに、俺の胸は未だに痛みを訴えていた。

「がはっ…!?」
「ぐぅぅう…っ、容赦、ない…!!」

俺から離れ、デクが応戦する。
頬を撫でる風が、鼓膜を揺らす音が、目に映る光景が語る。
俺じゃ、敵わない。
見せられた現実と理想のギャップに、胃酸が逆流するのを感じた。

「もう…。もう、やめてよぉおっっ!!」

それを吐き出そうとした時。
ガキが声を張り上げ、デクたちの前に出る。
ガタガタ足が震えて、目尻に溢れんばかりに涙を溜めてるのに。
アイツの目は、しっかりと現実を見据えていた。

「私が目的なんでしょ…?だったら、私を連れてっていいからぁ!!

だから、もうやめてよ…！

バクゴーさんを殺そうとするのも、デクさんを殴るのも、ショートさんを蹴るのも、もうやめてよ…っ!!」

ーーーーーー勝つ理由がそこにある。負けてしまえばどうなるか、痛いほどわかっている。

だから、私は褌締めて、敵に向けてもこう言ってやるんです。

『私が来た』ってね！

ヒーローでもねェのに。個性もねェのに。

怖くて怖くて堪らねェって、アレだけ言ってたのに。

「やっと正気になったんだねぇぇぇ！

さぁ、お家に帰ろろろぉぉおおおっ!!」

ガリガリの手が、ガキに迫る。

ーーーーーーかっちゃん、大丈夫？

ーーーーーーやめろよ、かっちゃん…！

ーーーーーー屈するのも、負けるのも簡単だ。だが、それで失われてしまうものがある。だから、私は平和の象徴として立ち上がってこれたのです。

ーーーーーーおれはいっちゃんすげぇ！だから、なんもなくさねぇくれぇ、いっちゃんすげぇヒーローになる！

薄れに薄れた記憶が甦る。

気づけば、俺の体が弾かれるように、ガキの体を抱き寄せていた。

「かっちゃ…!?」

「最ッッ大ッッ、火力ゥゥゥウウウウウゥゥゥウウウウウッッッッ!!!」

ボオンッ！
爆炎が掌から放たれる。
掌の汗からニトロのようなモンを分泌し、爆破する個性。
咄嗟とはいえ、今まで出したこともない爆破に汗腺と皮膚が耐えきれなかった。
熱で皮がデロデロに溶け、剥き出しになった真皮から血が滲み出す。

「…半分野郎ォ。答え合わせの時間だ」

情けねェ。
俺よりも弱ェガキが、ビビりながら立ち上がってんのに、俺が泣いてんじゃねェ。
目尻に流れる涙を拭う。
腫れた目元で、口の端の切り傷が開くのも構わず、口角を上げる。
格好良くなんて、決してない。そんなの、自分でもわかってる。
だけど、憧れのトップヒーローのように。
俺は、その顔に笑みを浮かべた。

「『誰かのために立ち上がる』のが、ヒーローだろ」

焼け爛れた掌をもう一度、影に向ける。

勝てる気はこれっぽっちもない。

それでも、負けてやる気もない。

爆豪「いーから早よやれ俺が死ぬ!!」

「かっちゃん…」
「ボサッとすんなデク!!
テメェらと違って、俺は障子紙程度の強度があればいいところだ!!
とっととソイツぶっ殺せ!!
俺が死んでガキ連れてかれたら、あの世から這い上がってきてブッ殺すからなァ!!」
「言ってること無茶苦茶なんだけど!?」
「いーから早よやれ俺が死ぬ!!」
「かっちゃんから一生出ないような台詞出た!!」
「いちいち驚いてんじゃねェぞあとでぶっ殺すから覚えてろォ!!」

かっちゃんと久々に大声で会話した。

いつもならすんごい顔つきで怒るのに、今は少し笑ってるように見える。
口の悪さは相変わらずだけど。

拳を握り、かっちゃんに迫る男の腹に叩き込む。
あかりさんの時に使った装備は、火力が高すぎて使い難い。
そう思っていたが、相手が硬すぎる場合はこれが丁度いいらしい。
隕石より硬い個性ってなんだ。もう何度も言ってるが言わせて欲しい。
人工個性デタラメすぎだろ!!

「さっきからららぁ…、ウナちゃんと僕の邪魔するなって、言っててるるるだろろろぉぉぉぉぉっっ!!」
「するだろ!!子供泣いてんだから!!」
「一般常識も身についてねェ大人に子供がホイホイついてくかそのシワの少ねェ脳みそに知識詰めてこい馬鹿野郎!!」
「理想と現実の区別つかないロリコン中年とか、惚れる要素ゼロじゃないですか。
女性全員が恋愛対象外って言いますよ」
「テメェみてェなアブねェ妄想男にこのガキ懐くか!!俺が言うのもなんだがなァ、現実見つめ直してから来いやクソガリィ!!」
「後半三人、火に油注いでどうするんですか!?」

音街さんのツッコミが響く。
でも、その甲斐あってか相手のこめかみがピクピクしてる。
年中キレて高血圧で死にそうなかっちゃんみたいに、キレてても冷静さを失わないタイプじゃない。
キレて冷静さを失うタイプだ。

「おお前らぁぁああっ!!ぶっ殺ぉぉおおすっっ!!」
「「やってみろォ!!こっちがお前をブッ飛ばァすッッッ!!!」」

僕たち三人の声が響いた。

♦?♦?♦?♦?

『ポンコツゥゥゥ……っ!!
私の食べ歩きを邪魔するとは、万死に値するぅぅぅぅ…!!』
『あ…キズナさん、まだソレ根に持ってるんですか…』

あかりさんが地獄の底から響くような声で、私への恨み節を放つ。
最近はここいらの商店街を回って、おばちゃんからコロッケを買うのが日課とか言ってたっけ。
現在、私たちはというと。
専用機となったカノープスとアルデバランを身に纏い、プロヒーローと交戦していた。
理由は…察して欲しい。
緑谷くんたちが交戦してる＝私たちは囮役ってことになってるんですから。
「キズナー・オールマイトから逃げ切れたその実力、確かに認めよう!!
だが！俺は力を持たない人を守るために、ここに立っている!!
お前がここに現れるだけで、どれだけの人が恐れてしまうと思っている!?
このシンリンカムイ、例え貴様の足元にも及ばずとも、貴様を死ぬ気で食い止める!!」
あの肝試しからカッコよくなりましたよね、シンリンカムイ。
実力も少しは向上したのか、テレビで見るよりも樹木の伸びが早く、複雑だ。

しかも、まだまだ余力を残してそうである。
手加減してるとは言え、あかりさんが釘付けになっている。
私はその他のプロヒーローを相手にしているが、全体的に実力が向上している気がする。
エンデヴァーの事務所の人たちよりは流石に厳しくないが、それに迫る勢いで、波状攻撃が放たれる。
『むぅぅぅ…。タイミングバラバラだから、予測立てるのが難しいですぅ…』
「キズナの協力者はこちらに任せろ!!
カムイ、キズナに何もさせるなァ!!」
「有難い…!」

私には、息もつかせぬ波状攻撃。
あかりさんには、下手に身動きが取れない樹木の牢獄。
あくまで緑谷くんたちのサポートの私たちは、攻撃を捌くことくらいしかできない。
あかりさんはその気になれば、樹木の牢獄程度、一撃で吹っ飛ばせる。
しかし、シンリンカムイの腕からそれが伸びているとなると、話は別。

腕丸ごと吹っ飛ばす可能性がある。

『こういうタイプの時間稼ぎが、一番大変なんですねぇ…』

私がそう呟いたその時だった。

「ウナちゃんはァああっ!!
僕のお嫁さんなんだぞオオオオオオおおおおオオオオオオオオオオッッッッ!!!!」

街に影を落とす、巨大な化物が現れたのは。

♦？♦？♦？♦？

「閃光弾って知ってるかァ!?
スタングレネードォ!!」

かっちゃんの目眩しで敵が怯む。

轟くんがその隙に敵を凍らせ、氷を壊される前に熱線を放った。

「ナイスだボンバーヘッド!!」
「爆豪勝己だ半分や…轟ィ!!」
「そりゃ悪かったな、爆豪ォ!!」

かっちゃんと轟くん、実は結構相性が良かったりするのだろうか。
そんなことを考えるが、首を横に振って要らない思考を霧散させる。

「くそぉ…!炎が邪魔で…!」

爆炎、熱線による2連目眩しで敵が怯む。
僕は地面がひび割れるほどに踏みしめ、拳を強く握った。

「正義のォっ!!昇オッ!竜ゥウッ!!けエェぇぇぇぇんッッッ!!!」
「がべっ!?」

要するに、ただのアッパーだ。
僕のアッパーカットが、敵の顎を捉える。
ずずぅん、とその体が沈むのを確認し、僕は手の埃を払った。
昇竜拳という名称にしたのは、正確ではなかったかも。
アッパーカットを日本語に訳すと、如何してもダサくなるから、きりちゃんの案を取り入れたんだけど。

「アッパーにしたのは、鎌倉山割った時の反省ですか?」
「あ、うん。街、割っちゃうし…」
「話半分に聞いてたんですけど、本当だったんだ…」
「ンなモン作れるくらい頭いいなら加減しろや」
「いや、あの時は頭に血が昇ってて…」
「爆豪みてェな状態だったわけか」
「ソレ俺が年中キレてるってことかァ!?」
「「「うん」」」」
「…ツソがァ!!反論できねェェ!!」

こうやって、かっちゃんと楽しく会話ができる日が来るなんて。
かっちゃんと協力して、敵に立ち向かう日が来るなんて、思いもしなかった。
そう考えると、おかしくなって。
かっちゃんからは見えてないけれど、僕は笑みを浮かべた。

「…バクゴーさん。カッコ良かったです」
「……そうかよ」

音街さんの言葉に、かっちゃんが少し笑って、彼女の頭を撫でた。

その時だった。

「ダメだよぉ…。だめなんだよよよぉおおおおっっ!!その男は、ダメなんだァァァァァァァァァァァァァッッッ!!!!」

敵が奇声と共に起き上がる。
僕らが戦闘態勢を取ったその瞬間。

彼の体が、一瞬にして膨張した。

僕らは知っていたはずなんだ。

人工個性が、人の手に余るものだって。

僕らは知っていたはずなんだ。

『人工個性が人間に埋め込まれていた例がない』ことに。

「ウナちゃんはァああっ!!

僕のお嫁さんなんだぞオオオオオおおおおオオオオオオオオッッッ!!!!」

人工個性に飲み込まれた敵…いや。

細胞単位で人とは呼べない怪物が、そのアギトを開いた。

爆豪「あばよ、爆豪勝己」

「…何やらかしたらあんなバケモン呼び出せんですか、あの子たちは」

近所が大騒ぎになる中、夕陽を背にたたずむ巨影を見上げる。
さっきから音街さんの屋敷がある街の外れで、敵が出たと騒がれていた。
プロヒーローが現行すると、それを阻むようにキズナが現れたという。

…ああ、面倒ごとが始まった。

あの子がプロヒーローと交戦するということは、人工個性関連の事件が起きているということ。
最初は東北さんもいないし、足手まといの僕がなにを指示しても意味を為さないと放っていた。
僕の家に被害が出なきゃいいけれど、なーんて思っていたらコレだ。
まったく。あの子たちと居ると、悪い意味で退屈する暇がない。

「…ま、僕にできるのは、避難誘導の手伝いくらいですかね」

僕はいうと、印鑑と通帳だけ持って、家の外に出た。

と。そこへ緑谷くんのお母さんが、僕とまったく同じタイミングで扉を開けた。

「…先生」

「緑谷くんのお母さん。早く逃げましょう。

あのデカさなら、ここも戦闘区域になりますよ」

「はい。…少し待ってください」

彼女は言うと、廊下の手すりにつかまって、声を張り上げた。

「ヒーローォォォォォおおおっっ!!頑張ってぇぇぇぇぇっっ!!!」

そのメッセージを誰に向けたかは、すぐにわかった。

彼女は既に、全てを知って、黙認してるのだから。

「こんな時にしか、応援できませんからね。
先生。私も避難誘導、手伝います」
「ありがとうございます。僕以外の教師は、すごくやる気がないもので」
理解のある母親に恵まれるって、そうそうないですよ、緑谷くん。

♦？♦？♦？♦？

「ウナちゃァああァああんっっ!!」
「超火力ッ、炸裂っ、だァんッッッ!!」

うぞうぞと蠢く触手に、デクのナノマシンで回復した掌を向け、限界を超えて二発爆破を放つ。
掌の真皮がデロデロに溶けるが、ナノマシンで回復する。
それと同じように、爆炎で燃える触手と肉壁が即座に再生した。

「かなり興奮して、だんだんと個性が攻撃一辺倒になってきてる…！
さっきより倒すのは楽だろうけど、いかんせん攻撃が激しっ…！」
「爆豪!!お前ンとこに流れ弾行かないようにするだけで手一杯だ！
お前がなんとかしろ!!」

簡単に言うな。こっちももう汗腺と皮膚が限界なんだ。
ずきずき、じんじんと痛みを主張してくる掌を再びバケモノに向け、爆破を放つ。
触手の表面が焼け爛れるが、数秒もしないうちに再生した。
攻撃一辺倒って言ったやつ誰だ。厄介な個性作られてンじゃねェか!!

「ば、バクゴー…さん…」
「ンな目で見んな…!!」

声を絞り出す。
あの人はいつだって、笑顔と背中で安心させてきただろォが…!!

「死んでも負けねェ…。死んでも音街を渡さねェ…!!

第一、あんなキモいのが初戦で負けて死んだら、死んでも死に切れねェわ!!」
「トップヒーローになる男、爆豪勝己!!
享年13歳!!死因、重度の妄想癖を患った中年に殺される!!」
「うっわっ!!たいそうな前置とのギャップすごいね!!」
「まだ死んでねェわテメェらコイツの後でブッ殺すぞ!!」

テメェらまだ余裕あンだろォ!!

声を張り上げながら、爆破で迫りくる触手から音街を守る。
軽口を叩いて、無理やりに余裕を保ったんだろう。
俺の頭上では、俺めがけて降り注ぐ攻撃をデクと轟が防いでいた。

「三人とも、五分…とは言いません!せめて三分!時間稼いでください!
コイツの弱点を暴きます!!」

きりたんぽが叫ぶと、スカートの下から何やら妙な球体を大量に出した。
すると、その一つ一つが浮遊し、デカブツの周りを飛び交った。

「解析用ドローンです！イズクメタル使ってるんで、簡単には壊れません!!
ただ、操作範囲の都合上、ここから動けません!!
意地は一級品でしょ!!
死ぬ気で私ら守ってみせなさいよ!!」

その言葉は、デクたちには向けられてねェことは、すぐに分かった。
少し視線を移すだけで、アイツが俺の背中を見てることがわかる。
迫りくる触手に、より大きな爆発を起こし、声を張り上げた。

「テメェら、よく聞けェ!!」

もう、口だけじゃねェ。
心の底に、この言葉を刻め。
俺が、ヒーローであるために。

「テメェら追い越してやる!!

俺はァ!!全部助けて!!全部守ってェ!!なにも失わねェ!!完膚なきまでに勝ち続ける、俺ン中で一番すげェヒーローになってやる!!」

まだ、俺はその域にはいない。
だから、叫べ。俺の心に焼き付けるために、言葉を重ねろ。

「俺がァっ!!最高のォっ、ヒーローだァァァァァァァァァッッッ!!!!」

デクの真似だが、それでいい。
俺が思い描くソレは、アイツとは違う。
だから、俺が俺の思うヒーローを演じてやろう。
アイツを超える、最高のヒーローを。

「良い啖呵ですよ、ヒーロー!!」

再生が追いつかないほどに爆破を繰り返し、再生しようとする細胞を炭化させる。
こちらの再生も追いつかず、最早指先からしか爆破が行えない。

一分も待てば、すぐに再生するだろう。
だが、そんなに待ってたら、すぐに殺される。
指先に集中しろ。最大火力の爆破を、十連続で放て。

「十壊滅殺ゥ…!!獄ッ!!爆砕イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッッッ!!!」

放たれた十連続の爆炎が、触手を肉壁ごと吹っ飛ばす。
咄嗟に名前を付けたが、爆破の細かいコントロールを取得するまで、二度とやれねェ。
大きな風穴の空いたバケモンは、その口から声を発した。

「やっぱりお前ぇぇぇ…!!
僕とウナちゃんを引き裂く悪魔だなァァァアアアアッッッ!!」

…心の底から認めたくないが、認める。
目の前のバケモンは、さっきまでの俺だ。
自分の思いどおりにことが進む世界が正しいって思い続けた、哀れな自分。

俺は、きりたんぽに現実を突きつけられて、一度は折れた。
だったら、同じように現実をぶつけてやれば良い。

「音街、言ってやれ。
変わりようのねェ、飛びっ切り残酷な現実を、な」
「…っ、はいっ！」

穴は塞がらず、そことは別の箇所から触手が襲いかかる。
完全に壊死したんだろう。
痛むそぶりをみせてないあたり、体がそのまま膨張した訳じゃなさそうだ。
指が再生するたびに、先程の「十壊滅殺・獄爆砕」を放つ。
その背後で、音街が声を張り上げた。

「私はてめーのお嫁さんじゃねェェェェェェェエエエエエェェェェェエエエッッッッ!!!!
てめーなんか全ツッツ然タイプじゃねェんだからアアアアアアアアアアッッッ!!!!!」
「……ぽへっ？」

「ぶっっ…はははははっっ!!
良いぞ音街ィ!そっちの方が、なめられねェぞ!!」

音街の声を聞きながら、笑い声を上げる。
あの言い方、完全に俺を真似てたな。
デク。テメェの訳のわからんかった部分、全部分かった気がする。

ああ。今日はなんで、こんな笑いが止まらねェんだろう。
こんなん、らしくもねェ。

「はははははっ!ぶぁっはっはっはっ!
あー…。今日は、よく寝れそうだ」

「……うそだ。うぞだぁあ…。ウナちゃんが、こんな、こんなぁあ…」

バケモンが現実を受け止めきれず、棒立ちになってる。

今がチャンスだ。

「東北ゥ!!弱点分かったか!?」
「はい!!口の中に本体がいます!!
そいつを引きずり出せば、このデカブツは機能を停止します!!」
「ソレ以外はぶっ飛ばしても大丈夫なんだなァ!?」
「はい!!初の大仕事ですよ、爆豪先輩!!
邪魔する触手、全部ぶっ殺せェ!!」
「上等ォ!!」

焼け爛れて真っ黒な手を、奴の頭部を除く全てに向ける。

「あばよ、爆豪勝己。
妄想ばっかの中学生」

限界を超えて、指の先から何度も、何度も、「十壊滅殺・獄爆砕」を繰り出す。
いや。この技の名前は正しくない。

「十ノ惨状ォ…!!千壊滅殺ゥゥ!!
地獄ッ、爆粉砕ィィィィィイイイィイイイイイイイッッッ!!!!」
　爆炎が、奴の体を焼き尽くす。
　ぶすぶすと煙を上げる指を動かし、俺は拳を空に突き上げた。
「デクゥ!!轟ィ!!しくじったらぶっ殺すからなァ!!」
「「言われなくても!!」」
　轟が頭部を凍らせ、デクがソレを砕く。
　気を失った男を、デクが受け止めた。
　爆煙が止んだ空から差し込む夕日が、俺たちを照らす。
　ナノマシンで手が回復するのを待たず、音街が俺に飛びついた。
　はじめての戦いは、終わった。
　チュートリアルにしちゃキツかったが、その結果は判を押したように決まってる。

「俺たちのォ!!完全勝利だアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!!!」

旅行は性癖暴露大会
新参者までクソガキってどういうことだ。

「デクって呼び方、変えないんですね」
「それがね、きりちゃん。
　変えたら『気持ち悪いからやめろ』って真顔で言われてたの」
「緑谷の気持ちも分かる。
　お前が緑谷のこと普通に『出久』って言ってるとこ見て吐きそうになった」
「ボクも、初めて会ったけど、ちょっと気持ち悪かった…」
「私もー」
「当人の僕なんかトイレに二十分篭ったからね？ほんっと気持ち悪かったァ…」
「確かに。吐き気しましたね」
「私は外でリバースしちゃいました！拭くのに時間かかりました！」
「テメェら人が真剣に悩んだ時間返せやァ!!あとポンコツ!!テメェはただ単に飲み過ぎで吐いたんだろォがなに俺のせいにしとんじゃゴラァ!!!」

「どうでも良いですけど、君ら僕が取り寄せた焼肉用高級肉で勝手に焼肉するのはどうなんですか？」

家の中の人口密度がかってないほどに高い。

焼肉の煙が充満する中、換気扇がガンガン回ってる音すらも聞こえない喧騒に、僕がツッコミを入れる。

あの後のことを語っておこう。

正義の秘密結社『一等星』に、入るとは微塵も考えてなかった爆豪くんと、音街さんが加入した。

正確に言うと、「音街家」がバックについた。

かなりの資産家で、「娘を命懸けで助けてくれた爆豪くんに恩返しをしたい！」ということで、爆豪くんが「俺らのサポートしろや」と要求したのだ。

サポートと言っても、場所の提供、警察が秘匿してる情報の横流しくらいである。

秘匿情報は法的に大丈夫か、と聞くと、「秘匿される前に手に入れてる」らしい。

元々がやり手の実業家なだけあって、僕よりも多芸だ。

場所の提供の方は、緑谷くんが「ちょっと大きい施設が欲しい」と要求した。
何を作るのかと聞くと、「秘密です！」と返された。
かなり大掛かりなものを作っているようだ。
先日までは、何徹したか分からないくらいに疲弊していた。
学校でも、半分寝て半分ノートに何かを書き殴ってる状態が続いていたらしい。
あの爆豪くんが心配するくらいだった。
いや、結構性格が矯正されたから、普通に他人の心配もするようになったんだが。

爆豪くんはと言うと、少し前の仁侠みたいなことになった。
まずは自分の母親に自分のやってきたことを、馬鹿正直に話した。
その上で「殴られてくる」と今まで迷惑をかけてきた人間一人一人に、頭を下げに行ったという。
謝り終わる…僕で最後だった…頃には、体はアザだらけでボロボロだった。
ナノマシンで緑谷くんが慌てて治したけど。

残していた過去の映像も、最後の一つを爆豪くんは受け取った。

曰く、「間違ってた過去は消せねェ。だから、引きずって歩いてく」とのこと。
その一環で、緑谷くんの蔑称をやめようとしたところ、本人に「気持ち悪いからやめろ」と言われてしまったのだとか。
結果、蔑称ではなく、愛称として呼ぶこととなった。

あの時のバケモノはというと、倒したのはＳＡＶＥＲということになった。
本当は装備もない爆豪くんが倒したらしいのだが、バレたら個性の無断使用で捕まってしまう。
「なら隠そう！」と満場一致で決め、あかりさんと協力して「キズナがまたなんかやらかした！だけどＳＡＶＥＲが食い止めたぞ！」的な茶番を演じたという。

バケモノとなった男は、音街さんのストーカーだったらしく、所有していたノートパソコンと携帯に、彼女のあられもない写真が多く保存されていた。
緑谷くんたちが帰りに、警察署の前にふんじばってパソコンと携帯共々放置してきた。
ひっそりと新聞記事で「元政界のドンの息子、アイドルのストーカー容疑で逮捕！」と書かれてた。

街に大した被害は出ず、爆豪くんのカッターシャツが消し飛んだくらいだった。
あかりさんが逃げると、プロヒーローは後を追うグループと安全確認のグループに分かれ、テキパキと動いていた。
前までの「敵が出たら動こう!」という風潮はなく、毎日毎日パトロール、ゴミ拾い、迷子案内、ｅｔｃ…と、何かに励む姿が見られているあたり、あの肝試しで何かが変わったのだろう。

…モノローグはここまでにして。
現在、焼肉の煙で真っ白に染まったメガネを拭きながら、僕は情け程度に用意された僕の席に座る。

「…美味っ。コレ、結構するヤツだろ」
「小学校教員が、ンな贅沢できンのか…?」

どうだ。一頭丸々で新車よりも高い肉だぞ。
ただの牛一頭だけでも、百万から二百万くらいする中で、最高級だぞ。

…株投資で儲けすぎて、浪費したかったから買ったんだけど。

「先生、株投資もやってるから、結構お金持ちだよ」
「株投資って言い方は正しくない気がします。だって、すんごい安い株買って、その会社の社員のやる気を刺激して、結果的にすんごい高くしたのを売ってますからね」
「やってること敵の親玉みてェ」
「コレまでの関係がウソみたいに仲良いですよね君ら!!」

前までの関係は、爆豪くんが徹底的に緑谷くんを拒絶していたから起こった歪みとでも言うべきなんだろうか。
それがなくなった今、口は悪いが、仲は良好と言った関係を築けているのだろう。
…外向きの面を覚えさせる必要はあるが。

「…にしても、せんせー。コレはちょっと買いすぎなんじゃ…」
「牛一頭分です」
「牛さんってこんなにお肉あるの!?」
「あと一頭分は欲しいです」

「あかりさん、それ本気で言ってます…？」

約一人、焼く量も食う量も異次元なのがいる。

爆豪くんが肉の値段に気付いて食べるスピードが落ちてるのに、他は変わらずガッツリ食べてる。

みみっちさは治らなかったのか。

「おい、大食い女。もうちょい味わえや肉もったいねェだろ」

「どうせなら、たくさん食べたいじゃないですか」

「だったら一枚ずつ食えや白米と一緒に。

無駄に高ェ水で炊いた無駄に高ェコ〇ヒカリあるぞ」

「家主の僕になんの相談もなく炊くあたり、君らだいぶ仲良いでしょ」

新参者までクソガキってどういうことだ。

僕にのみ向けられるクソガキっぷりに、最早ため息も出てこなかった。

「出世払いだ。未来のトップヒーローへの投資って思えば安いだろ」

「君が出世するには、外向けの面を習得する他ないと思いますけど」
「ンだとォ!?普段の俺に問題があったわクソがァ!!」
「怒鳴った後で自分で気づけるあたり、この一週間で成長しましたよね」

爆豪くんが面白いことになってる。
もう完全にボケとツッコミを両立できる人材になってる。
我ら一等星に足りなかったピースが揃った気がする。

「僕の高校時代の友人に、君みたいに口悪いのがデフォの生物工学者居るんで、外面の作り方学びます?」
「……ッソが頼むわァ!!」

すごい嫌そうな顔で頼まれた。
前々から僕のこと嫌ってたし、誰かに頼ることも嫌ってたような子だから、だいぶ考えて折れたんだろう。
顔中がしわくちゃになる程嫌か。

「かっちゃんって、表現豊かだよね。
　顔と頼み方から『嫌だ』って気持ちが伝わってくる」
「オッサンみてェな顔して、ブルブル震えながら頭下げてたな」
「テメェら後で殺す…っ!!」

　まずはその「殺す」とか「死ね」とかを直す必要があるな。
　戯れ合いなら、いくら言ってもいいだろう。
　だが、流石に公共の場でその暴言はまずい。
　ヒーローなんて、嫌でも子供の目に留まる職業だ。
　その職についてる人間が、「死ね」はまずいだろう。

「…どうやってあの『死ね』とか『殺す』を直しましょう…？」
「無理だと思うよ？
　バクゴーさんの殺すとか死ねとかって、ワンちゃんでいう『ワンワン』だから」
「ンだと音街ブッ殺すぞォ!!」
「ほら。バクゴーさん、反論できる？」
「…ッソがァ!!できねェェェ!!」

確かに今のは反論の余地がない。
あの事件で一皮剥けてから、罵倒したのちに悪い癖を突かれて「反論できねェ」と叫ぶのが黄金パターンになってるなぁ。

「ヒーローとかアイドルとかに関わらず、社会に出る以上、外面って大事だよ？
私だって、打ち合わせとかでも積極的な子を演じてるし…」
「ほら。私たちよりも説得力のあるアイドルのお言葉ですよ、爆豪先輩」

音街さんのいうことに乗っかって、1番のクソガキがニマニマとウザったらしい笑みを浮かべる。
無論、そんな顔が爆豪くんの琴線に触れないわけもなく。
爆豪くんは凄まじい顔つきで怒鳴った。

「うるせェわ東北ソガキイ!!
誰にでも好かれるよォな外面身につけたるわ待ってろやクソガァ!!」
「やる気はすごいけど、この時点で好かれなさそう」

「今のツラ、誰からも嫌われる嫌われ役の方が似合ってたぞ」

空気が凍りついた。

プルプルと震えたのち、爆豪くんが更にとんでもない顔つきで、緑谷くんと轟くんを怒鳴りつけた。

「デクゥ!!半分野郎ォ!!テメェら毎度毎度一言余計だァ!!」

「なんで君らはそう、見え透いた地雷踏むんですかねェ…」

食卓が混沌とする中、ピリリ、と携帯が鳴り響く。

僕は「ちょっと失礼」と部屋から出て、携帯を取り出す。

その画面には、現在投資している会社の「麗日建設」の文字があった。

「もしもし?」

『麗日建設株式会社社長の麗日です。

筆頭株主の水奈瀬さんで間違い無いでしょうか?』

「はい。間違い無いですよ」

標準語だが、ちょっと関西なまりが入っている。
三重や滋賀のあたりの近畿と中部の中間あたりは、方言が入り乱れているからなぁ。
前世はその辺りの出身の僕は、イントネーションに若干の懐かしさを感じながら、要件を問うた。

「要件はなんでしょうか？」
『いえ、その…。会社の業績が上がったことのお礼を言おうと…。
言葉だけというのも失礼かと思い、皆で相談して、水奈瀬さんの家に、あるものを送らせてもらったんです。
郵送会社に知り合いがいて、ご友人が多いと聞いてたので、大人数でも大丈夫なものを』

…友人が多いってのは嘘なんだがなぁ。
そんなことを思っていると、ぴんぽん、とインターホンの音が鳴った。

「すみません、来客が…」

『ああ、こちらこそすみません。
では、今後ともよろしくお願いします』

ぽろん、と通話が切れる効果音が響く。
僕はインターホンが二度押される前に、玄関を開けた。
扉の奥には、ガタイのいい配達員が立っていた。

「水奈瀬さんのお宅でしょうか？」
「はい」
「お届け物です。印鑑かサインを」

僕はポケットに入れていたボールペンで、綺麗とは言えない文字でサインを書く。
配達員はそれを受け取ると、薄く大きいプレート状の物を僕に渡した。

「それでは」
「お疲れ様です」

配達員が去っていくのを確認し、僕は包装紙を少し破り、中身を見る。

「……マジですか」

そこには、『二泊三日！大阪温泉旅行券！』と書かれたプレートがあった。

爆豪勝己がケツバットされるだけの話

「弓鶴兄ちゃん、ほんま大丈夫？
此処入ったらあかん場所ちゃうん？」

感受性溢れる小学校三年生の頃。
私…こと、麗日お茶子が思い出せる、鮮明な記憶。
その日は、祝日。夏の熱気も抜けきらない、うだるほど暑い日だった。
大阪に住む親戚のお兄さんに連れられ、彼の家の向かいにある神社…その本殿の裏に来ていた。
確か、追儺…だっけか。
そういう行事を行なっていた人が、その儀式の普及に向けて作った、真新しい神社。
祀られてるのも、あまりいい神様じゃないってことも聞いた。
こんなところに、何の用なんだろうか。

「大丈夫だよ。…そろそろかな？」

「おとんのあほーーーーっっっ!!」

親戚のお兄さんが言うと、大泣きした女の子がこちらに走ってきた。

丸まった石ころが敷き詰められた足場のせいで、途中でつまづき、勢いよく転ぶ。

その痛みでまた涙をこぼし、その場で泣き叫ぶ女の子。

お兄さんは彼女に近づくと、何のために持ってきたのかと思っていた救急箱を開けた。

「よく我慢したね、ついなちゃん」

「伊織のあんちゃぁあああん……!

おとんが、おとんがぁぁあ……!!」

「よしよし」

ボロボロと泣く彼女の頭を撫で、慣れた手つきで怪我の治療をするお兄さん。

その日が、私と『如月ついな』…もとい『役ついな』ちゃんとの出会いだった。

♦?♦?♦?♦?

「というわけで。連休を利用して温泉旅行に行こうかと」
「それはいいですね。是非いきましょう」

爆豪勝己は呪文『外面』を覚えた。

ハッキリいうと気持ち悪い。
普段とのギャップで、口角を上げないように耐えるのがやっとだ。
表情筋トレーニングやってて良かった。
葵さんと爆豪くんの相性は、割と良かった。
葵さんの「口が悪かったから損した話」を聞かされて、更に意欲が湧いたらしい。
あの焼肉から3日経っただけで、ここまで外面を良くできたことに驚いた。

「ぶっ…。くくくっ…。だめ、笑っちゃだめなのは分かるけど、かっちゃんが…」
「愛想笑い似合わなっ…。くくっ…」

緑谷くんにクソガキ。笑うんじゃない。
ついに耐えきれず、二人が思いっきり吹き出し、床に転がり落ちる。
横隔膜ネジ切れるんじゃないかってほど笑う二人に、爆豪くんのこめかみに青筋が走った。

「おいテメェたちあとで可及的速やかにぶっ殺して差し上げやがるから覚悟しろやクソどもがァ!!!」
「はいアウトー」
「あ」

年末お馴染みのあの音と共に、轟くんが軟質バットで爆豪くんのケツをぶっ叩く。
ずぱぁん、という乾いた音が、部屋中に響いた。

「轟ィい…!!てめっ、ちったあ加減しろやァ…!!ケツ吹っ飛ばす気かァ…!!」
「思いっきりやれっつったのお前だろ。
あと、今のでまたアウトな」
「あ」

悲鳴と共に、二度目の破裂音が響く。
ただでさえ我慢が出来ない性格なのに、何故こんな罰ゲームをつけたんだ。
現在、爆豪くんは「外面が剥がれたら罰ゲーム」という名目で、長い間愛想笑いと敬語で過ごすという訓練をしている。
尚、家でも同じように訓練してるらしく、ケツバット役の母親に「アンタが大人しくて敬語で愛想笑いとか、気持ち悪いの擬人化だね」と言われたらしい。
全くもって同感だ。

「わっ！お尻真っ赤！」
「爆豪さん、大丈夫…？お尻痛くない…？」
「ひん剥かないで欲しいですゥゥゥゥゥゥウウウ……ッッッ!!!!!!」

ウチの双子にズボン下ろされて、鬼みたいな顔してる。
血涙流しそうな勢いだ。
ミコトちゃんが氷のうを患部に押し当て、爆豪くんのケツを冷やす。
「無難にケツバットで」って罰ゲームを決めたことを後悔してる顔だ、アレ。

「お前、普段どんだけ口悪かったんだ？
三時間だけでもう二百いってるぞ？」
「あまり喋らせっ、ないっ、でェ、欲しいっ、いい、ですゥゥゥ……!!」
「アウトー」
「判断基準どォなってんだ罰ゲームのキツさに対して厳しすぎるわぶっ殺すぞォ!!!」
「二連続アウトー」
「死ねッッッ!!!」
「三連続アウトー。３回やるの面倒なんで、このめちゃくちゃ痛ェと評判の巨大ハリセンでしばきまーす」
「ーーーーーーーーーーッッッ!!!!!」

体を張ったボケ役かぁ。
声にならない怒声を響かせる爆豪くんのケツに、何度目かもわからないスイングが叩き込まれた。
「お邪魔しまーす。爆豪くん、相変わらずストレスでハゲそうなことしてますね」

「あかりさん、いらっしゃい」

爆豪くんがストレスでハゲそうなのは、昔からだろう。
年がら年中キレてるような子なんだから。

「おぉ…紲星さん、こんにちは…。
本日はお日柄もよく…」
「ぶっふぉ!!」
「こっちは必死にやっとんのじゃテメェら毎度毎度笑うなァ!!」
「アウトー」
「……っ、……っ…!!
!!」

…まぁ、コレだけしないと治らないっことも、本人も分かってるんだろう。
自分のことを客観的に見る目をこの時期に持てるというのは、大きな一歩になる。
一ヶ月もすれば、外面も良くなって、ケツの皮も分厚くなっていることだろう。

聞けば、轟くんと一緒に個性の訓練もしているらしい。

以前、街を覆う巨大な化物を吹き飛ばした、指先からの連続爆破。
今後同じ規模の敵が出て来ないとも限らないため、毎日調節の練習をしているとのこと。

緑谷くん作のスーツは、「俺が弱ェのはわかってるから、貰っとく」とすんなり受け取ったらしい。
スーツでできることを生身でも出来る様に、と轟くんと切磋琢磨しているようだ。

ライバルの出来た緑谷くんはというと、新しいスーツ…初の『超攻撃特化型』、イズク２０号を作ったという。
例の如く僕に見せにきたが、あまりの物騒さに「出来る限り使うな」と指示しておいた。
久々に椅子からひっくり返ったぞ。

「ところで、大阪の旅館ってどこだ？
有名なトコか？」

ケツを叩かれすぎて撃沈している爆豪くんに腰掛け、轟くんが問うた。
痛みでそれどころじゃないのか、爆豪くんはケツを押さえるばかりで、「降りろ」とも言わなかった。
気のせいだろうか、ケツから湯気が出ている気がする。

「会員制の温泉旅館ですから、有名とはあまり言えませんね。
ですが、一度は泊まるべき旅館として、テレビで二度紹介されたことがあって、中々に評判はいいようですよ。
立地的にも、大阪観光が十分に出来ますし、食い倒れの街を回るのもいいですね」
「食い倒れの街!?」

約一名、めっちゃ食いついた。
三度の飯より飯が好きとでも言いそうな…いや、実際に言っていた子だ。
大阪に行けば、桃源郷に来たみたいな反応をしそうだ。

「昔から着倒れの京都、食い倒れの大阪と言って、京都は衣服によって、大阪は食べ物によって、気がつけば財を失ってしまうほどの魅力があるんですよ」

「行きましょう!!」
「連休にね」

今までにないくらいに喜ぶあかりさんに、皆が微笑む。
痛みが落ち着いたのだろう。
爆豪くんは、絞り出すような声で「降りてほしいのですがァァァァァ…!!」と轟くんを睨んでいた。

「ただいまー…って、なんですかこのカオス」

帰ってきたセイカさんにつっこまれてしまった。

絶対悪は滅びない

「ええっ!?旅行経験ないの!?」
「おう。今回が初めて」

行きの新幹線の中にて。
ガチガチに固まったアイスを、無理やりスプーンで削りながら食べていると、緑谷くんの素っ頓狂な声が響く。
当人である轟くんは、ヒメちゃんとミコトちゃんに囲まれ、同じようにアイスに悪戦苦闘していた。

「親父が変に厳しかったからな。
修学旅行とかも行ったことねェ。
今回のことも、めちゃくちゃキレて『許さんぞ焦凍ォ!!』…つって。
いつもみてェに脅しても聞かねェし、家にある鍛錬場連れてかれて」
「……で?」

「ボコボコにされて倒れると、いつも俺の顔面掴んで『こんなものかァ!!』って腹パンしてくる。
俺がマジで立てねェって分かってる分、油断してやがったからな。
目潰しに粉末カプサイシンぶちまけて、悶えたところで金玉殴って顎蹴り砕く勢いで蹴って勝った」
「君、先生に似てきたよね。容赦のなさと性格の悪さとずぶとさが」

だからこの間、僕の家で粉末カプサイシンなんて取り寄せたのか。
下手したら失明だぞ、それ。
あと緑谷くん。それ、僕が性格悪くてずぶとくて容赦ないって言ってます？
その通りですがなにか？

「ってか、エンデヴァーに目潰しって効いたの？Ｎｏ．２でしょ？」
「効くわけねェって分かってるっての。
年中目元燃やしてるアホだぞ」

自分の親のことを『アホ』っていうあたり、本当に嫌ってるんだなぁ。

アイスを掬って、ヒメちゃんとミコトちゃんに食べさせる轟くん。
以前会ったようないい子さはなく、何故か中学生三人組の中で、ダントツで性格が悪くなってしまった。
勝つために手段を選ばないあたり、本当に。

「テメェ、目潰しとか言っときながら、顔面にぶっかけたろ。
しかも息吸うタイミングで」
「爆豪、正解」

音街さんとトランプをしている爆豪くんが、予想を語る。
すると、轟くんは指を鳴らして笑みを浮かべた。
うっわ。性格悪そうな笑み。

「俺らン中でダントツで性格悪ィなテメェ。
先公に近ェわ」
「流石にアレとお前よりはマシだろ」
「ンだとゴラァ!!俺も流石にアレよりはマシだわ!!」

「君ら本当に失礼ですよね」

何気に僕が一番性格悪いことにされてる。

失礼な。その通りだ、生徒たち。

「イズクくん！見えてきましたよ！」

そんなことを思っていると、あかりさんが興奮気味に窓にへばりつく。

緑谷くんはその隙間を覗き込むように、窓の外を見た。

「食い倒れの街、大阪が！」

♦？♦？♦？♦？

今回の旅行での保護者は、僕とセイカさんということになっている。

緑谷くんたちのお母さんも誘ったのだが、断られた。

爆豪くんの両親は「こっちは二人組の北海道旅行当たって、勝己も居るし、誰かにあ

げようかなって思ってたところだったので、ちょうど良かったです」とのこと。
緑谷くんのお母さんは、「旦那が心配なので、そちらの方に様子を見に行く予定をたてていたんですが、予算の都合で一人が限界でして。今回のことはちょうど良かったです」と断られた。
轟くんのところは論外で、東北さんの所は、「大会が近いので」、「イタコ協会で旅行があるので」と。
音街さんのところは「行き飽きてるからいい」…などなど。
様々な理由で断られた。
結局のところ、僕は連休中の子供たちの面倒を体良く押し付けられた、ということになる。
保護者は僕とセイカさんだと言ったが、セイカさんは多少はマシになったとはいえ、かなりのポンコツ。
任せられるとは微塵も思わない。
「旅館でっけェな…」
「大部屋貸切だろ…？会社の人、すげェ無理したんじゃねェのか？」

爆豪くんが他人の心配してる。
金銭面になると余計にだ。
みみっちさが先行して、金銭面の心配を優先してするようになったんだろうなぁ。
誰かを心配するようになったと言うだけでも、大きな進歩か。

「いえ。だいぶ業績が伸びてるので、そこまで無理はしていないそうです。
あと、娘さんがお手伝いに行っているらしいので、仲良くしてくれと」
「あの、早く荷物置きに行きませんか？
か弱い私の腕が限界迎えてるんですけど…」

東北さんの荷物を持つ手がプルプルしてる。
小学生で運動不足なら、無理もないか。

「テメェをか弱いっつったら誰をか弱いって言えばいいんだクソガキ」
「なんですってボンバーマンもう一度泣かせてやりましょうか？あ？」
「上等だ今度こそテメェを泣かしてやるから覚悟しろや」

なんでそんな喧嘩腰なんだ。
爆豪くんと東北さんは、良いとも悪いとも言えない、微妙な関係だ。
どちらかが喧嘩を売り、どちらかがそれを買って馬鹿騒ぎする。
暴力沙汰ではなく、必ずゲームなどを設けて、東北さんが勝つ。
それがお決まり。
爆豪くんにとって数少ない出来事だったはずの「敗北」が、山のように積み上がっていくというのに。
爆豪くんはそれでも「次は勝つぞ」と笑っている。
つまづいた時の立ち上がり方を習得するのに、そう時間はかからなかったようだ。
相変わらず、口は悪いけれど。

「とにかく、一度荷物を置きに行きましょう。そこから大阪をまわりましょうか」

僕は二人の喧嘩を無理やり止め、旅館の入り口を開ける。
そこには、見覚えのある男性が着物姿で立っていた。

「いらっしゃいませ。ご予約の水奈瀬様ご一行でしょうか？」

ネームプレートに並ぶ『伊織　弓鶴』の文字。
こんなところにも、ボイスロイドが居たのか。
昔見た絵では、ちょっと女っぽい印象だったけれど、目の前にいる彼はまごうことなき男だ。
どこか儚げな雰囲気を纏う青年。
僕が見た彼は、そのような印象だった。
僕は鞄から旅券と免許証を取り出し、彼に渡した。

「はい。これ、旅券と身分証です」
「確認します…はい。確認させていただきました。では、お部屋にご案内します」

彼に案内され、僕らは通路を進む。
その途中、着物を着た女の子がどたどたと伊織さんに駆け寄った。

「弓鶴兄ちゃん！向こうで酔いすぎて倒れたお客さんおるんや！介抱してくれん？
お客さんの案内はウチがやるから！」

「いいけど、お茶子ちゃん部屋わかる？
大部屋の虎の部屋だからね？」
「わかっとるって！ウチ、もう中一やで？」

…このノリ、なんか聞いたことあるなぁ。
チラッ、と皆がセイカさんに目を向ける。
当人はまったくもって察していないのか、こてん、と首を傾げていた。

♦？♦？♦？♦？

「オールマイト、こちらです」
「案内ありがとう」

静岡にある、通常刑務所の一つ。
私はそこに訪れ、一人の男との面会に臨んでいた。
私とソイツには、なんの関係もない。
だが、私の追っている、「愉快犯敵…『キズナ』に迫る情報を握っている可能性がある」

と聞いて、無理やりにこの面会を許可してもらったのだ。

用意された椅子に腰掛け、ガラス越しにぶつぶつと何事かを呟く男に話しかける。

「はじめまして、甥影　回くん。私のことは知っているかな？」
「…オールマイト」
「そう！今日は君に聞きたいことがあって、君に会いに来たんだ！」
「…もう、どうでもいい…。ウナちゃん…。ウナちゃああん…」

…やはりか。

精神的にかなり問題のある人間だとは聞いていたが、これほどまでとは。
ウナというと、以前バラエティ番組で共演した、音街ウナ少女のことだろう。
聞けば、罪状は彼女へのストーカー容疑。
逮捕された後は、訳のわからないことを繰り返すばかりだそうだ。
この状態では、情報を引き出すのは難しいだろう。
しかし、諦めるわけにはいかない。

世界の未来がかかっているのだから。

「人工個性、という言葉に覚えはないか？」

私が問うと、ぴくり、と肩を震わせた。

「……っ。そうだ。なにが『神になれる細胞』だ!!全然思い通りの個性にならないじゃないか!!」

「っ、知っているのか!?」

知識の有無を問うも、彼は私の言うことなど聞かず、激情のままに喚き散らす。

「ウナちゃんは全然言うこと聞かないし！あのクソガキは殺せないし！一番強い個性を作っても、クソガキとＳＡＶＥＲに吹っ飛ばされたぁ!!ちくしょう!!『フィクサー』め!!金返せぇ!!!」

……は？

フィクサー。アメリカを根城として活動していた、過去最強の敵。
寿命で死んだはずの存在の名前が、なぜ、今になって出てくるんだ…？
ーーーーーーオールマイト。未来の平和の象徴。僕はあなたを殺さない。あなたは平和の象徴となるのだから。
あの時。地べたを這いつくばり、自分の最後を覚悟したことを思い出した。
耳元で、ヤツが囁く。
ーーーーーー言ったでしょう？僕は『絶対悪』だって。
ぞくり。
冷や汗を噴き出しながら、背後を振り返る。
視線の先には、鉄の扉があるだけで、誰もいなかった。
「今のは…？」

疑問に思いながらも、ガラスの奥にいる男に向き直ろうとしたその時だった。

「もっと だ！もっと強い個性をつくって、こんなところ抜け出して、ウナちゃんを僕のおよよよょよょよよよよよぉおおおおぉぉおお」

でろり。

まるでアイスが溶けるように、男の体の皮膚が、骨が溶けていく。

液状化の個性化と思ったが、違う。

男が苦しんでいるのだ。

「…………は？

なんでっ、どうしてっ!!やだっ!!やだよぉ!!死にたくない!!!いやだアアアアあああああっっ!!!

助けてっ!!オールマイトっ!!助けてよぉっっ!!!まだ死にたくないっっっ!!
死にたくあばぁあ。
あひゃひゃひゃひゃひゃうなちゃっ、うなち、うぅうううううひはふへへへへへへ」

デロデロに溶けていく男の姿に、戻ってきた胃から、胃酸が込み上げてくるのがわかる。
こんなにも凄惨な死を、私は見たことがなかった。
全ての命を冒涜するかのような、こんな死に様を、私は知らなかった。
オール・フォー・ワンですらも凌駕する恐怖が、そこにはあった。

「ぽひゅっ」

男の最後の言葉は、なんの意味も持たない、ただの音だった。
こんな、こんな死が、この世にあってたまるものか。
怒りと無力感に苛まれる中、私の耳元に声が響く。

ーーーーーーありゃ。食われちゃったか。まぁいいや。狙い通り。

「…っ、フィクサー!!貴様っ、どこにいる!?」

私が声を張り上げると、その声の主人はクスクスと笑った。

ーーーーーーさぁ?僕でもわかんないです。何故なら、『絶対悪』だから。

「…っ」

また、その言葉か。

私は臨戦態勢を取りながら、フィクサーに問うた。

「さっきのは貴様の仕業か!!」

ーーーーーー心外だなぁ。違いますよ。彼自身が望んだことです。『人工個性が欲しい。自分はどうなってもいい』って。

その言葉の恐ろしさも理解しないまま、彼自身が選んだ。だから、食われた。

『食われた』とはなんだ!?どういう意味だ!?」

ーーーーーーそのままの意味ですよ。人工個性は『人を食べる』んです。

その言葉の意味を理解した途端、私の脳はフリーズした。
私の反応を待たず、フィクサーは言葉を続ける。

ーーーーーー正確にいうと、細胞を食い潰してくんですよ。
それを言うなら、本来ないはずの細胞になってしまう、または元ある細胞の居場所を奪う個性も一緒なんですがねぇ。

デイブですら解明できていない個性の謎を知っている…？
驚愕と恐怖に、体が震えるのを感じた。

ーーーーーーでも、人工個性はその傾向が強すぎて、今みたいなことになっちゃうんですよ。
だから、それに耐え得る細胞と結合させて新しい生命体を生み出して、その細胞を移植するくらいしか安全に使えない…ってワケです。
使えても、バカには高火力をブッパしたり、デッカくなるだけの単純個性しか作れないんですけどね。

「あ、これ言っちゃダメなんだった」、と付け足すフィクサー。
私は息を整え、震える体を奮い立たせる。
以前は、手も足も出なかった存在。
だが、今なら勝てる。大丈夫。平和の象徴なのだから。
それを心の支えにし、私は口を開いた。

「貴様の目的はなんだ？キズナとの関係は!?」
ーーーーーーキズナぁ？…ああ、プロトタイプの中で一番出来の良かった子か。
本当はもっと複雑ですけど、生みの親ってだけですよ。
もっとも、切り刻んで人工個性の完成品として体を売り出す前に、逃げ出されたんですけどね。
あの無能ども…ああ、部下なんですけどね。散々あの子をバカにして、ショージキに何もかも話しちゃって、それが原因で泣きながら逃げたそうなんですよ。
責任とって死んでもらいました。今みたいな感じで。

生みの親…？
切り刻んで、体を売り出す…？

理解するには、到底無理のある言葉が耳に入ってくる。
私は声を絞り出すように、彼に問うた。

「……貴様は、未来人なのか……？」

ーーーーーーさぁ？お答えできかねます。

ただ言えるとしたら、僕は時間さえも凌駕する『絶対悪』ってことだけです。

彼はそう言うと、「では、良い休日を」と言葉を残す。

次の瞬間には、威圧感は消え失せていた。

「…ならば、私はその『絶対悪』を捻じ伏せてやろう…!!

私は、『平和の象徴』なのだから……!!」

究極の自由人：茜ちゃん

「フィクサーが生きていただと!?トシ、それは本当か!?」

『……信じ難いが、真実だ』

私…デヴィット・シールドは、電話の向こうに居る相手に告げられた言葉に、地面が崩れ落ちていくような感覚を覚えた。

フィクサー。アメリカどころか、世界のヴィラン史に残る、世界最悪の敵。

彼のことは、あまり思い出したくない。

だが、その恐ろしさの一片も知らなくては、この脅威を理解はできないだろう。

フィクサー。本名不明、年齢不詳、出身地不明、ｅｔｃ…と、何もかもが判明していない敵。

常に仮面で素顔を隠し、露出した口元はいつも笑っていた。まるで、トシ…オールマイトのように。

セリフもトシの「もう大丈夫！何故かって？私が来た！」に限りなく近い。

ーーーーーー恐れ慄け。僕が来た。

彼の恐ろしさは、『無個性』であること。

なんの異能も持たずに、一国を一夜にして崩壊させたのが始まりだった。

発展途上国で、穏やかで、『平和の国』とまで呼ばれた国を、たった一夜で壊滅させたのだ。

その方法は、物理的なものではない。

ただの、なんの変哲もない『話術』。

ただ一人の人間と話しただけで、国の思想を変え、一国まるごと『敵』として加工する。

最初は誰しもが『洗脳系の個性を持っているのだ』と思った。

そう思わなければ、理解できなかった。

だが、その期待は木っ端微塵に粉砕された。

ーーーーーー未来の平和の象徴も、科学の前には無力ですね。

私が作った中で、今までも…そしてこれからも作れるとは思えない、最高傑作とも呼べるスーツ。

そのスーツを、ただ一つ、工具を取り出してその場で作り上げた小さな機械で粉砕した。

ーーーーーー僕は無個性なので、あらゆる知識とスキルを磨きました。

どうです？オールマイト。親友が扱う科学が、僕が積み上げてきた圧倒的な科学力に粉砕される気分は？

スーツなど付属品に過ぎないトシが、破れたスーツで奮戦した。

だが、拳は尽く逸らされ、風圧で吹き飛ばそうとしてもかわされ、ただただ殴られるだけのサンドバッグと化していた。

ーーーーーー人の話聞いてましたか？
古今東西、あらゆるスキルを取得したんですって。
拳の予測と行動パターン。あなたのあらゆる全てが、僕の掌の上ってことです。

どう倒せばいいんだ。
トシですらも足元にも届かなかった規格外。
合計五十ケ国を崩壊させた敵。
無個性たちの暴動を恐れ、国連はフィクサーの個性情報を無理やりにでっち上げた。
そうでなくては、フィクサーが存在するだけで、抑圧された無個性たちの不満、怒りが爆発する危険性があったのだ。
陳腐な表現ではあるが、彼が生きている間、世界は絶望に包まれた。

彼が寿命で死ぬまで、私とトシは、オール・フォー・ワンよりもフィクサーの打倒を優先して見据えていた。
と同時に、彼を酷く恐れていた。

そのフィクサーが、生きていた…？

「冗談は…言ってなさそうだな」
『私がこんなことを冗談や酔狂で語ると思うかい？』
「…いや。そういう不謹慎なやつじゃないことは、十分に知っている」

悪夢ならば醒めてくれ。
私がそう思っていると、仕事用のパソコンにノイズが走った。
それを訝しげに思っていると、ばつん、とパソコンの画面が変化する。
そこに映っていたのは、見たくもない、茜色の髪だった。

『やっほー！しーちゃん、お元気ー？』

「はぁぁぁああ……。アカネ。しーちゃんはやめろとアレ程言ってるだろう。
私の娘はメリちゃんと呼ぶくせに…」
『そりゃそうやろー。
あないなめんこい子に「しーちゃん」なんちゅうあだ名つけたら、普通に可愛いだけやんけ！

せやからな、ちょうどダンディな魅力が溢れて色気ムンムンのしーちゃんを、親しみ込めてしーちゃんって呼んどるんやで』

なまりのひどい英語で軽口を叩く少女。

彼女は、私が唯一と言っていいほどに苦手意識を持っている電子工学者…『琴葉茜』。『形状記憶合金アカネメタルの発見、普及』、『新エネルギー「アカネルギー」の開発』と、齢２０にして、多大な功績を残している。

ただ、一つだけ問題がある。

とにかく。とにかく『自由』なのだ。

興味のあることしかしない、大統領の絶滅頭…おっといけない…お世辞にも豊かとは言えない頭をペチペチ叩いて「おとんの頭みたいや！」とスピーチ中に壇上に上がって宣う、ｅｔｃ…と。

よく極刑に処されないな、と思えるほどに自由なのだ。いや、例外的に許されている、と言った方が正しい。

無論、そんな彼女に「他人を敬う」などという常識が身についている訳がない。

何より嫌なのは、その無茶に大抵私の娘を巻き込むのだ。
娘が同じように育たないか、親としてはすごく心配だ。

「で、なぜ私のパソコンをわざわざこのクソ忙しいタイミングでハッキングした…？
答えようによってはポリスに突き出すぞ」

『いや、メリちゃんが話したい言うて電話したんやけど、繋がらんくてな。
監視カメラ見たら、誰かと電話してんの見えてん。
やから、ちょいちょいーっ…て』

監視カメラまでハッキングされてた。
タルタロス並みの防犯セキュリティは一体どうした。
ちょいちょいってなんだ。
これでもかって用意したファイアーウォールを突破したのか？
声を大にしてツッコミを入れたいが、ツッコミたいことが多すぎて、言葉にならない。

『その声…茜少女か？』

『おお、オールマイトさんおひさー。

怪我治ったんやってな。良かったなー』
「…トシ。彼女にバレたら面倒だと言っていたろう」

私はトシに向けて半目を向ける。
が。トシは「話したことないんだが」と冷や汗をかいていた。

『そりゃそうやろ。定期検診覗いとっただけやしな。
すんごい怪我やなぁ、移植とかで治さんのかなぁ思うとったし』
『普通に犯罪な、ソレ！』
『ウチは許されとるもーん』

トシが叱るのに対して、アカネは悪びれる様子もなくカラカラと笑う。
許されている、という言い方には語弊がある。

「君の場合、功績と脱獄経歴が異常すぎるから監視に留まってるだけだろ」
『タルタロスやっけ？あれも大したことなかったなぁ』
「そんなことを言えるのは君だけだ」

そう。彼女は研究者であると同時に、受刑者でもあるのだ。

犯した犯罪はどれも軽犯罪。その数は２００。

どれも興味本位でのハッキングという、個性を用いたものではない。

というより、そもそも彼女は個性を持っていない。

だが、その件数の多さから再犯の可能性が高く、史上初、無個性で…且つ、十代でタルタロスに送り込まれた。

収監されて三十分後には、友達の家から帰るみたいなノリで脱獄して、チェーン店でチーズバーガーを食べていた。

彼女の趣味は、『電子工学』と『脱獄』。

いくらセキュリティを強化しようが、三十分以内には必ず脱獄してしまう。

メイデンに押し込めて海中に投げ捨てようが、地中に埋めようが、物理法則を無視したんじゃないかって早さで脱出する。

そして小馬鹿にするように、監視カメラのあるチェーン店で変装もせず、普通に買い

物をする。
「もうこいつ罰しても意味ないし、害もないからほっとけ」と、各国の法務大臣が盛大にサジを投げた程だ。

付いた名が、『自由の権化』。
敵に近い生き方をしているというのにもかかわらず、そのデタラメさから、無理やりに自分を世に認めさせた無個性。
幸いなことに、最低限の倫理観は備わっているらしく、大きな犯罪を起こすような危険思想が無いことも判明している。
国連の命令に対して、最低限…ほんっっっっ…とうに最低限、渋々、嫌々従うことを条件に、元いた大学にこれまた普通に在籍している状態だ。

娘よ。なぜそんな彼女に憧れた？
なぜ、「彼女のラボで助手をしたい」って言い出した？
パパに憧れてるって言ってたじゃないか。
パパの方で学んだ方が安全じゃないか？

『パパー！久しぶりー！
そちらは元気ー!?』
「元気だよ、メリッサ…。大丈夫かい？毒されてないかい？」
『しーちゃんウチをフグかなんかやと思っとるん？』
「フグより酷いだろ君は」

フグどころじゃないだろ。劇毒だろ。
心の中でそう付け足すと、彼女は目を隠し、メソメソと泣き始めた。
十中八九、いや、確実に嘘泣きだ。

『ひっっど!!ウチ傷ついたわぁ…。メリちゃんその歳でたわわでぽよんぽよんなおっぱいで慰めて～…』
「君よくもまあ私の前で堂々とメリッサにセクハラ出来たな!?」

15歳にセクハラするな、二十代!!
そうツッコミを入れるのを待たず、メリッサがぽん、と手で膝を叩いた。

『ママのお膝でおねんねもしますか？』
『するぅ～…』
「メリッサ!?」
ダメだ、遅かった。結構毒されてた。
熱くなった目を抑え、天を仰ぐ。
１５になったばかりの可愛い愛娘に何吹き込んでやがるんだ、この自由人は。
妻に託された子供だというのに、このザマでは合わせる顔がない。

『……なんというか、意外な方向に育ったな、メリッサは…』
「それ以上なにか言うなよトシ…！
それ以上言ったら今度送るプレゼントがドクター〇ッパー５００箱になるぞ…!!」
『なんで!?普通に嫌なチョイスだソレ！』

トシを無理やり黙らせ、私は娘の膝枕を堪能する変態に声を張り上げた。
「で、結局のところ、本当の用件はなんだ？
こんなくだらない茶番劇を見せるためではないだろう？

君がそんなにユーモア溢れる性格じゃないことは、私がよく知っている」
『あ。バレた？』
彼女はあっけらかんと言うと、メリッサの膝枕から頭を離した。
『…人工個性と最近の変死事件。知っとるやろな？』
人工個性。変死事件。
どちらも記憶に新しい言葉だ。
前者はトシが追っている『未来人』…本当かどうかは分からない…とやらの産物。
後者は最近多発している、人が液状化して死ぬという事件。
私たちがその言葉に「ああ」と答えると、彼女は神妙な面持ちとなった。
『悪いことは言わん。手ェ引いとけ』
「『断る』」
彼女の要求を聞いた瞬間、私たちはそれを蹴っていた。

『ようやく掴んだ尻尾だ。平和の象徴が、悪の尻尾を離すと思うかい？』
『オールマイト。あんたがなんかを掴んでも意味はないで』

彼女は言うと、飴の包み紙を開け、口に放り込んだ。

『闇を照らすんは、いつだって「星々」だけや。あの底なしの闇に、ウチら人間が敵うわけないやろ』

事件名「かっちゃん性癖暴露事件」

「…おい、丸顔」
「は、はひっ…」
「どォいうこった案内に三十分もかけてんじゃねェぞこんなホテルぐれェ広くもねェ旅館でェェ!!!」
「申し訳ありませぇぇーーーーんっっ!!」

旅館の一室にて。
爆豪くんの怒号…というより、ツッコミが部屋を揺らす。
掌を爆発させないし、最後に「死ね」とか「殺す」とか言わないあたり、本当に成長したなぁ。
あのケツバットの成果をしみじみと感じながら、頭が取れるんじゃないかってほど頭を下げる少女に目を向ける。
「あなたが、麗日建設社長さんの娘さんですかね？」

「あ、はい。ウチ…あ、いやっ、私です」
「方言で結構ですよ」

気を遣ってくれたのだろう。
方言が飛び出そうになるが、すぐに標準語に戻した彼女に、優しく語りかける。
国語が得意な教師をなめるな。
前世は古文大っ嫌いで苦労したけどな!!

「不安な仕事は、誰かに頼むことを覚えた方がいいですよ。
無論、ただ頼むのではなく、自分でもできるように学びましょう。それが仕事です」
「…先生っぽい言い回し…。全然先生っぽくないチャラチャラしたカッコなのに」

うぐぅっ。
教壇に立たないからって、普段着で来たのがまずかったのだろうか。
泣きそう。水奈瀬コウとしての正装なのに。
これだから、このチャラチャラした格好の良さがわからない子供は…。

「お茶子ちゃーん。そろそろ昼休憩だよー。そこらへんで食べてきてー」
「あ、ほんま？じゃあ、お言葉に甘えとくわーー！」

そんなことを話していると、伊織さんがひょこっ、と顔を出し、麗日さんに話しかける。

確かに、そろそろ本格的に空腹を感じる時間帯だ。

失礼します、と頭を下げ、彼女は慌ただしく去ってしまった。

僕たちは荷物をひとまとめにし、財布等の軽い荷物だけをまとめたポーチを身につけた。

「それじゃ、決めた班通りに回りましょう。

集合は5時で。トラブルが起きたら…法に触れない程度で解決しなさい」

『今更だろ』

総ツッコミを喰らった。僕もそう思う。

♦？♦？♦？♦？

現在、俺は湧き上がる複雑な感情に、肩を震わせていた。
原因は、目の前に突きつけられた現実。
お好み焼きを一人で四人分も作らされてる俺は、その感情を口に吐き出した。

一班…緑谷、紲星、ヒメ
二班…轟、ミコト、水奈瀬
三班…爆豪、音街、東北、京町

俺の班のメンバー世紀末じゃねェか!!

「ツッッッ……ソがァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ!!!!」

二人はほっといたら危ないガキ。
一人はほっといたらさらに危ないポンコツ。
自分のくじ運をこれ程に呪ったことはない。
このお好み焼き屋に来るまでも、三十分はかかった。

コイツら、揃いも揃って容姿だけはいいから、めちゃくちゃナンパされた。
音街は変装してるが、それでも容姿がいいのは変わらないため、気持ち半分少なめだった。
まあ、ガキ二人は気の小さい変態か、老婆心で話しかけてくる奴ばっかだったから楽だ。

だがポンコツ。テメェは別だマジでぶっ殺すぞ。

二秒目を離しただけでナンパとか詐欺師とかにポンポン引っかかりやがって。
尚、詐欺師やらナンパやらは、俺の顔面を見ただけで逃げてった。
クソガキに聞くと、「明王みたいな顔してました」と言われた。

…自分で言うのもなんだが、俺の表情筋どうなってんだ。

話を戻す。
兎に角ポンコツが、いかにもなヤツらに引っかかりまくって、あまりにもそこらをフラフラするから、襟首掴んで引きずってきた。

既に精神が限界を迎えてんのに、お好み焼きを四人分も作らされる俺の身になれ。

「…爆豪先輩が一番保護者してるってどう言うことですかねぇ…」

「セイカさん、お世辞にもしっかりしてるって言えないし…」

したくてやってるわけじゃねぇわ。

あの教師のもとに住んでて、なんでこんなポンコツになった。

聞けば、「前よりはマシ」と言われた。

…これは俺の感覚を疑えばいいのか？

「わぁ、爆豪くん上手ですね！」

「上手もクソもあるか慣れりゃ誰でも出来るわってことで手伝えって言いてェけどテメェは絶対ェ手ェ出すなよ!?食うことだけ考えとけや!!」

先日の焼肉のこと、絶対忘れないからな。

焼いた肉を普通に箸で摘んだだけなのに、油で滑って落ち、奇跡的な角度で弾かれまくって、挙句俺の顔面にぶち当たったこと、俺は忘れないからな。

コイツにお好み焼きを焼かせたら、半生のお好み焼きが俺の顔面にぶち当たる可能性がある。
そういう理由で、俺は四人分のお好み焼きを焼いているわけだ。

「出来たぞさっさと食え！次の焼くぞ！」
「…爆豪先輩、全然好きじゃない…ってよりむしろ大ッッッッ嫌いですけど、将来的に結婚して養ってください」
「お断りじゃクソガキィ!!!!」

テメェと結婚するくらいなら独身貫くわ!!
色気もムードのかけらもねェプロポーズにツッコミを入れ、ソース、マヨネーズ、鰹節、青のりを塗す。
一切れを皿に移し、箸で削って口に入れる。

「はふっ、はつっ…。焼き加減もちょうど良いです。美味いですよ、爆豪先輩。養ってください」
「養う必要ねェだろテメェ」

「はっきり言うと働きたくないです」

全国の労働者たちに唾を吐き捨てるような宣言に、俺は手刀を振り下ろした。

「あでっ!?」

「隣に座るダチは、その歳できちんと働いて、立派な功績残してンだろォが。テメェもソイツに恥ねェくれェ、立派な職に就きやがれ」

ま、俺にゃ負けることになるがな、と付け足し、次の一切れを皿に移す。

東北はぽかん、と口を開けて、俺のことを見つめていた。

「…なんですか、他人を褒めるなんて。気持ち悪い」

「ンだとゴラぶっ殺すぞォ!!」

「バクゴーさん…。そんなこと言われても、ウナ、準備できてない…♡」

「なんて声出してんだテメェは!?

人をロリコンみてェに言うんじゃねェぞ俺のストライクゾーンは十六から四十だ!!」

「「え?」」

「あ」

やっぱ厄日だ。

思わぬところで自爆した俺は、クソガキにネタにされることになった。

熟女寄りだってこともバレた。死にたい。

♦？♦？♦？♦？

「これとこれ、あと二つくれます？」

「…イズク。私、お山みたいなお皿初めて見たなぁ」

「うん。僕も初めて見た」

二軒目の料理店にて。

一軒目のたこ焼き屋で、1日の売り上げの半分以上の量を全て平らげたあかりさんの勢いは、その程度では止まらなかった。

串カツ屋で凄まじい勢いで皿を空にし、その山を積み上げていくあかりさんに、僕たちは冷や汗を流していた。

「…ウチ、夢見とるんかな…？あの子、ほんな食うん…？嘘やろ…？」
「底知らずです」

たまたま同じ店に入っていたさっきの女の子…麗日お茶子さんも、目を丸くしてあかりさんの食事風景を見る。
信じられる？これでまだ腹八分も行ってないんだよ…？
本人曰く、「今まで人工個性を使った分のエネルギーを補給してるだけ。満タンになると食欲は通常になる」らしい。
そんなところ見たことないんだけど。
…多分、未来で散々戦った影響なんだろうなぁ。

「イズクが持ってきた漫画でしか見たことないや。砂糖水１４リットル渡さないとダメなんだよね？」
「弱った範馬刃牙じゃないんだから…」

こんな気持ち１００倍くらい大食らいの範馬刃牙だったら、烈海王あの時点で過労死

するぞ。
慌ただしい厨房に目を向け、合掌する。
多分、あの冷蔵庫に入ってる分は食べ尽くしただろうなぁ。
やる気のない琴葉博士に頼まれて、論文のゴーストライターしといて良かった。
今年の夏の臨時収入が吹っ飛んだけど。

「お、お会計…百三万二千十八円です…」
「……はい」

死んだ目でカードを渡し、僕の口座から引き落とす。
飲食店で百三万とか初めて見たぞ。
トリコの世界じゃないんだから。
…視線が痛い。ボンボンだとか思われてるんだろうなぁ…。
くじで班を決めるべきじゃなかった気がする。
あかりさんは先生とセットで良かったんじゃないんだろうか。
麗日さんの方を見ると、目に見えて戦慄してる。
夜は旅館で食べるつもりをしている、と言ったため、自分もあの仕事量をこなさなけ

ればいけないと思っているようだ。

「次、海鮮が食べたいです！」

「まだ食うん!?嘘やろ!?」

麗日さんの素っ頓狂な声に、その場にいた皆が「よく言った」とばかりに頷いた。

♦？♦？♦？♦？

「へーわってすばらしい」

「…この表情はなんていうんだ？」

「えーっと…顔面が溶けてる？」

「溶けてはねぇけど…そうとしか言えないな」

先生が見たことない顔してた。

人類で出来るのか、その顔。

そう思う程に蕩けに蕩け、腑抜けに腑抜け切った表情だ。

表情筋の力抜きすぎだろ。
悩みのタネ…特に紲星とセイカさん…のお守りをしなくてもいいという解放感が、こんな顔を作ってるのだろうか。

「おい。その顔なんとかしろよ」
「…おっと。すみません。比較的問題児ではない君たちの世話が非常に楽だったので」
「その問題児の世話を中学生に押し付けたのどなたですか？」
「僕ですが？」

悪びれる様子もない先生に半目を向ける。
と。その時。何処からか叫び声が響いた。

「なんやいったい？」
「なんや知らんけど、えらいべっぴんな子ぉが、とんでもない量食っとんのやと」
「向こうは？」
「えらいべっぴんさん連れた明王がナンパやら詐欺師やら追い返しとんのやと」

…すみません、多分それ俺たちの連れです。
明王って、爆豪か。アイツの班は、ナンパされやすい見た目のやつばかり集まってるから仕方なくはあるが…。
一体全体、どんな表情してたら明王なんて呼ばれるんだ。
紲星は…牛一頭分の肉を大半平らげて、「もう二頭は欲しい」なんて宣ったブラックホールだ。
騒ぎになるのも無理はないか。

「ミコト。まんまんちゃん、あんしような」
「お墓ないよ?」

俺は問題児のお守りをしてる同級生に向けて合掌した。
ミコトは首を傾げながらも、俺の真似をして合掌した。
短い付き合いだったが、いい奴らだった。

緑谷出久の手加減練習

「…あそこであしたのジョーみたいなことになってるの、緑谷と爆豪だよな…？」
「顔の彫りが違いすぎて一瞬分かりませんけど、本人ですね」

互いに寄りかかって真っ白に燃え尽きてる。
画風違うぞ。ちばて〇や先生の描いた顔みたいになってる。
僕の苦労の一割でも伝わったのだろうか、蚊の鳴くような声で「今まですんませんでした」と謝ってきた。

「爆豪先輩は特に大変でしたよ。表情筋が明王で固定されるくらいに。
ウナちゃんがやった表情筋マッサージで、ようやく元に戻ったくらいですし」
「イズクはお金持ちって思われて、詐欺師とか不良とかにすごい狙われてた」

どうやら、かなり苦労したらしい。
東北さんはとにかく、ヒメちゃんの顔にも、少しばかり疲弊した様子が見て取れた。

爆豪くんは近寄りがたい見た目と顔してるからまだいいが、緑谷くんは完全に小動物だからなぁ。

小動物って言っても、ラーテルくらい危険だけど。

「爆豪はわかるが、緑谷はどうやって対応してたんだ?」

「ショート…。聞かないほうがいい…」

「何したんだマジで!?」

底抜けに明るくアホなヒメちゃんが、真顔で首を横に振ってる。

何したんだ、本当に。

あかりさんの方を見ると、満足そうにお腹をさすっている。

セイカさんたちも、大阪を満喫できたようで、満足しているようだ。

満足してない…というより、満喫できなかったのは緑谷くんと爆豪くんだけらしい。

「…明日は自由に回りなさい。僕が問題児二人の面倒見ますんで」

「お願いします…。死ぬ…」

「最初からやれや…。死ね…」

かつてないほどに元気がない。

悪いことしたなぁ。くじに細工した分、余計に罪悪感ある。

誰も気付いていないし、正直に言ったら本当に殺されそうだ。

「あかりさん、晩ご飯は入りそうですか？」

「余裕です！」

「余裕ですかぁ…」

「ンなアホなァ!?」

極端に燃費が悪い体してるなぁ、と思っていると、素っ頓狂な声と共に激突音が響く。

一体なんだと扉を開けると、ずっこけた状態の麗日さんがいた。

盛大にコケてるせいで、乙女のパンツ…柄は言わない。失礼だから…を大公開してる。

彼女の名誉のために、ここはミコトちゃんに対応してもらおう。

「…せ、せんせー？なんでボクを盾にするんですか？」

「下見りゃわかるでしょ」
「あっ」
察しのいい子で良かった。
不可抗力だってこともわかってくれてるようで、僕に同情を込めた視線を向けてくれた。
え？パンツに対してなんも思わないのか？欲情してるんじゃないのかって？
僕のストライクゾーンは前世も今世も二十代後半から三十代後半未婚だ。
ぶっちゃけるが、僕はガキや経産婦に欲情するような性癖は持ってない。
茜さんからは「弄りがいのない性癖」とバカにされた。なんでだ。
「大丈夫ですか？」
「ああ、うん、ごめん…。ちょっと、ビックリして…」
昼間の惨劇…飲食店の方から見て…を見てるんだ。ひっくり返るのも無理はない。

よろよろと立ち上がった彼女は、青い顔して「失礼しましたぁ…」と消えそうな声で去っていった。

これから嫌々死地に行く兵士のような儚さと悲しみが、そこにあった。

「…あかりさん。ちなみに、どれくらい腹膨れてます？」

「腹一部ですね！

今までの消費エネルギーが膨大過ぎたので、たっくさん食べれますよ！」

……いや、マジ？

かつてないほど生き生きしたあかりさんを前に、全員の表情筋が死んだ。

♦？♦？♦？♦？

凄まじい光景だった。

僕…緑谷出久は、旅館の外にて、先ほどの食卓でたった一人の少女が作り出した地獄絵図を思い出し、頭を抱えた。

あれでようやく小腹が膨れたくらいなの…？
今までどれだけ空腹だったんだ、あの子は。
…未来では扱い悪かったらしいし、そもそもろくに食事を摂ってなかったんだろうなぁ。

「…水飲もう。胸焼けする…」

見てるだけで胸焼けした。
胸の違和感を腹の奥に飲み込むようなイメージで、僕は自販機からペットボトルを取り出し、中身を呷る。
頭痛を抑えるために外に出たはいいが、流石は大阪と言うべきか。
夜中でも、電気の光で街は明るくて、目がチカチカする。
余計に頭痛が酷くなった。

「さっさと部屋に戻ろ…」

僕が踵を返そうとすると、イズクテレフォンから通知音が響いた。

『イズク様。半径５０ｍ以内に敵を発見しました。狙いは貴方の持つ金銭です』

「あー…。さっきからつけてきてるなぁとは思ったけど」

丁度いい。新しい装備のテストをしようか。

かっちゃんに言われたっけ。

ーーーーーー加減がヘタ!!やられ慣れてるバイキンマンも真顔で『殺す気か』ってキレるレベルで加減がヘタ!!いつになりゃ覚えンだ覚える前に殺す気か!?さっさっと覚えやがれさもないと今ここでテメェをブッ殺すぞォ!!

ーーーーーーアホかァ!!力加減をしろって言ってんだ格闘面で加減すんなやボケェ!!さっきまでできてたこと1ミリもできてねェぞクソが!!だから前みたいなキモガリにいいようにボコられたんだろォがいっぺん殺すから死んで覚えろクソデクゥ!!

腰が引けてるせいで、ガンガン攻めてくタイプのかっちゃん…スーツを着てる…に、いいようにボコボコにされたっけ。

尚、スーツを着てる状態じゃ、普通の格闘術でも普通にボコボコにされた。

着てないと勝てるのに…。

そもそも、僕の作ってきた装備は、リゲル以外は戦闘を前提としてない。
戦闘というよりは、対象の無力化がオマケ程度についてるくらいで、救助にその機能を使うことを前提にしてる。
マトモに戦闘に特化させてるのは、轟くんの装備くらいだ。
だから、今回は攻撃をメインとした装備を作った。

「フォーマルハウトで」
『了解。モードは？』
「格闘特化」

僕が指示を出すとともに、デバイスから粒子が放たれ、僕の体を覆う。
四肢のみの装甲を超強化し、それ以外を薄く作った格闘特化。
相手によって様々な戦闘スタイルを形成できる『超攻撃特化型スーツ』…イズク２０号『フォーマルハウト』。

「あ、あーあー…。よし』

ボイチェンもちゃんと起動する。
ちゃんと手加減…。力を抜くだけで、格闘術は容赦なく…。

「そこのお兄さん。しがない貧乏人の俺ちゃんに金くれぺいっ」

『金』あたりで顎を弾いて脳を揺らす。
人差し指を軽く当てるだけで、軽い脳震盪程度は起こせるだろう。
狙い通り、気絶した。顎は砕いてない…。
よしっ。力加減成功。

あとは処置をして、所有品チェック。
少し気は引けるが、携帯のパスワードを入力し、その中身を確認する。
個人情報がこうも簡単に手に入れられる時代って、恐ろしい。
やはりと言うべきか、目覆いたくなる写真や連絡のやり取りが散見できた。
きりちゃんやセイカさんの写真とか、あかりさんの写真…旅館で働く麗日さんの写真まである。写真にメモまであるけど、これは読まなくていい。

麻薬売買にまで手を出してて、指定敵団体、違法風俗、人身売買組織に繋がり…データ上の友人とのやりとりを見る限り、天性だったっぽい。

テンプレやられ役の要素を一人で網羅してる。ここまで来るといっそ清々しい。

パスワードロックをオフにして、あとはふんじばって警察署前に置いて行こう。

加減の練習と活動を兼ねて、繋がってた団体も潰しておこうかな。

この後、指定敵団体と違法風俗、そして人身売買組織の構成員全員が揃って警察署前に放置されていたため、逮捕された。

手柄は、その日に潜入調査をしていたファットガムのものになった。

取材で複雑そうな顔して、質疑応答に答えていた。

ところどころカンペ見てたあたり、多分、メディア部門のサポートしてる人に「正直に言うなよ!?絶対だぞ!?」と念押しされたんだろうなぁ。

因みに、僕は出迎えてくれたかっちゃんに「旅館閉まる時間考えろや!!」とゲンコツをかまされた。

普通に痛かった。

♦？♦？♦？♦？

「ブラックボックス。注文入ったよ」

「…フィクサー」

かつん。

革靴がタイルを叩く音が響く。

ブラックボックスがそちらを見ると、見覚えのある仮面が宙に浮かんでいた。

いや。宙に浮かぶ、という言い方は正しくないだろう。

明かりが仮面のみを照らし出しているのだ。

フィクサーが一歩、ブラックボックスに歩み寄ると、その全貌が明らかになる。

黒一色で統一された軍服に、裏面のみが赤地のマント。

赤の手袋と、唯一露出した笑みを浮かべる口。

彼を構成する全てが、同性であるブラックボックスさえも飲み込むような、妖艶な魅

力を発していた。

「数」

「一つ。子供の教育に使うんだって」

「用途は聞いてない」

ブラックボックスは言うと、カプセルを一つ取り出し、フィクサーへと投げる。

彼はそれを受け取ると、口元の笑みをより歪ませた。

「全く。『僕』は僕に厳しいね」

「…それは、君が一番分かってることじゃないか？『ボク』」

ブラックボックスが問うと、フィクサーはゲラゲラと笑い声をあげた。

「あはははははっ！いやぁ、全くもってその通りだよ!!」

「…毎度言ってるけど、受け取ったらさっさと帰ってくれるかな？

ボクは君と違って忙しいんだ」

邪険な態度を隠そうともしないブラックボックスの肩にもたれかかる形で、フィクサーが顔を近づける。
甘い香りのする吐息が、機械の肌にかかった。
「そんな言い方ないだろ。こう見えて、僕も忙しいんだよ？えーっと…い…、いぎ……んんぅ……。なんていったっけ？」
「異形排斥主義集団のことか？」
「ああ、それだ！印象うッすい名前だなぁ！
もうちょいなんかあっただろうに！」

異形排斥主義集団。通称ＣＲＣ。
巨大でいて、ヒーローが手を焼いている敵集団の一つ。
在り方としては宗教のようなもので、結成当初はデモ活動が主であったが、近年テロ活動に手を出した集団『だった』。
ただ、一人の人間…否。『絶対悪』に目をつけられたのが、まずかった。

「素体的にはかなり粒揃いだったから、『改造』してんだよね。
ほら、そこにも一人改造中なのが」

フィクサーが人差し指を闇へと向ける。
同時に照明が点灯し、そこに在る存在を映し出す。
そこに居たのは、普通に見たのならば、見目麗しい女性だった。

だが、今は違う。

身体中からあらゆる体液を吹き出し、ぎゅるぎゅると目玉を動かす。
口はだらしなく開き、舌先が何かを探すように、ちろちろと動く。
手入れを怠っていなかったのだろう。
美しく、さらさらと絹のように流れる髪が覆う頭には、いくつかの異物が突き刺さっている。
よく見れば、それはなんの変哲もない針だった。
フィクサーはその一つを持って、ぐちゅぐちゅと穴をほじくる。

「どうだい？じわじわと自分が掻き消されてく感覚。誕生日は思い出せる？両親の顔は？君、結婚して子供いるんだよね？子供の顔はわかる？夫との出会いは？初体験は？ときめいた時とか、その他もろもろ。

僕に君の人生を聞かせてよ？」

「あっ、あうっ、やっ、きっ、ぇ、やだっ、おっ、ね…、あなっ、たっ、たすっ…きぇっ、りゅっ、ぅ」

嬌声とも、悲鳴とも呼べない声が、部屋中に響く。

彼女は、異形排斥主義集団の若き指導者。

その若さでトップに立ち、着実に主義者を増やしていった、やり手の思想家。

しかし、それも過去の話。

彼女と言う存在は、フィクサーという『絶対悪』の前に、消えようとしていた。

「答えろって言ったよね？と言うわけで罰ゲーム♪消ぃ～えろっ♪」

「ごぽっ」

彼女の最後の言葉は、口から溢れ出た水音だった。

だらり、と彼女の全身から力が抜ける。

「さーてと。どんな人格作ろっかなー？
超サイコ？指導者？どっちにしても、僕の『絶対悪思想』は確定だけどね。
個性はなんだっけか…」

フィクサーが楽しそうにブラックボックスに視線を向ける。
そう。彼女はフィクサーの言う通り、死んだと言うわけではない。
ただ、『記憶含むすべてがリセットされた』のだ。
個性ではなく、ただの技術で。

『拒絶』…。干渉を拒絶できる個性かぁ。
よし決めた！超メンヘラな偏愛家！
それも、理想のヒーローしか認めないし欲情しないタイプ！
愛する家族もこれで殺しちゃうかもだけど、関係ないよね？君はもう居ないんだから。
せいぜい頑張って僕の思想を広めてくれよ、新たな『悪役』さん」

「…ボクのラボで好き勝手するんじゃない。
マイケルも、結局君のおもちゃになったじゃないか。
彼は僕の助手の予定だったんだぞ」

それを目の当たりにしても、ブラックボックスは特に動揺することなく、フィクサーに注意する。
マイケル。
元は琴葉葵の助手で、退職届を叩きつけ、ブラックボックスの助手となった男。
彼は現在、ブラックボックスの手を離れ、人工個性を売りまわっていた。
その原因は他でもない、目の前にいる『絶対悪』である。

「廃人も同然だったろ？君が唆したヤツは総じてそうじゃないか。
だったら、ああいう積極的な売人の方が有効活用出来るだろ？」
「あっちの方がなんでも言うこと聞いてくれるし、余計なこともしないし、楽なんだよ。
ただでさえ、君のせいで余計な仕事量増えてんだから」

ブラックボックスは言うと、深いため息を吐いた。

機械の下にある目元は、フィクサーからは見えないが、クマが幾重にも重なっていた。
フィクサーが散々振り回し、五徹しているのだから当たり前なのだが。

「万年開花の時もそうだ。
やめた方が良いって言ってんのに、ボクに変装してマイケル唆して…。
寿命で死んだフリなんて真似も…。
今回だって、完成された人工個性なら、いつでも作れるだろ？
なんで未完成品ばかりを売り歩くんだ？
そもそも、星を壊すような真似を平然とする理由はなんだ？
君の行動には無意味なものが多すぎる。理由を聞いて良いかい？」

ブラックボックスの問いに、フィクサーはその笑みを歪ませた。

ーーーーーー闇が深ければ、星はより強く輝くだろう？

深夜のデートは蜜の味?

深夜0時。
僕…緑谷出久は、全く寝付くことが出来なかった。
その理由は、僕のすぐ横で寝息を立てる少女にある。

「きりちゃん、寝相悪っ…」

なんでそう的確にレバーを入れてくるんだ。
寝てるんだよな?寝てるんだよなコレ?
どうしよう。きりちゃんの寝相が悪過ぎて、これっぽっちも寝れる気がしない。

痛い。痛いって。痛いから、レバーに拳叩き込むのはやめてほしい。

そう言いたいけれど、信じられないことに完全に寝てる。
布団から離れたいけど、あかりさんが僕の腕を抱き枕にしてるし、どうしようか。

そんなことを思っていると、誰かに肩を叩かれた。

「えっ…？」

「イズクくん。やっぱり起きてた」

僕がそちらを見ると、あかりさんが目を爛々とさせて僕を見ていた。

寝たフリをしていたんだろうか。それとも、今起床したのだろうか。

僕が疑問に思っていると、彼女は少しばかり笑みを浮かべた。

「正義の味方に頼むのもどうかと思いますけど…。ちょっと、悪いことしませんか？」

♦？♦？♦？♦？

「夜中の散歩かぁ。確かに悪いことだね」

「でも、とっても楽しいでしょう？」

僕たちはアルデバランの機能を駆使して旅館を抜け出し、その周辺を歩いていた。

夜中の散歩なんて、初めての経験だ。
いつもはラボに篭るか、ノートやらパソコンやらに向き合って朝まで過ごすか、普通に寝るかの三択だったのに。

「否定しきれないのが歯痒い」
「イズクくん、ヴィジランテですもんね。
悪いことは許せなくても、自分も悪いってわかってるでしょう?」

痛いところ突くなぁ。
僕がやってることは、例え誰かにとって正しくても、違法であることには変わらない。
それが間違ってるとは、口が裂けても言わない。
僕自身、間違ったことをしているという自覚はあるから。

「…まぁ、ね。
でも、ルールで救えない命があるなら、僕は躊躇いなくそのルールを破る。
今までそうしてきた。多分、これからも」
「だから大好きですよ、私のヒーロー」

あかりさんは言うと、ニッコリと笑って僕の腕を握った。
…好意を向けられて、それに答えないのはどうかとは思う。
だけど、僕はまだ中学一年生。
恋愛や性に対して相応な知識もないのに、軽率に発言するのはやめた方が良いだろう。

「そういう言葉は、もうちょっと僕が歳食ってからにしてよ。
ちゃんと君のことを考えて、ちゃんと君の好意に答えたいから」

僕が言うと、彼女は少しばかり残念そうに、「わかりました」と呟く。
その代わりにとばかりに、僕の腕に抱きついた。

「ちゃんと答えてくださいよ?」
「…うん。…少ししたら戻ろう。この時間帯は、よくない輩も多そうだし」
「そうですね」

その時だった。

「逃げるなついなァァァァ!!!

そんなことで方相氏が務まるんかぁぁぁぁアアアアッッッッ!!!!?

「何が方相氏や!!時代錯誤にも程があるわ!!!おとんのあほっ!!ばかっ!!!

ウチは、ウチはっ…!!家出するからなぁぁぁぁーーーーーーっっっ!!!!」

「待てコラついなぁぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ!!!!」

巨大な扉の奥から、怒鳴り声が響いたのは。

僕らがポカンとしていると、着物を着た女の子が、扉を開く。

そのままの勢いでボロボロと涙を流しながら、僕らの横を走り抜けていった。

足速いなぁ。個性無しの記録なら、新記録レベルじゃないか?

呆けた頭でそんなことを思っていると、ガタイのいい男性が続けてこちらにやってくる。

「そこの君ら!!こんな夜中に出歩いとるのはなんでじゃ!?

さっさとウチに帰らんか!!」

めっちゃ怒られた。
いや、まぁ、悪いことしてるから当たり前なんだけど。

「おっと、こんなことしとる場合やない！
さっさとお家帰りやーっ!!」

男性は言うと、そのまま去って行った。
思えば、この向かい側にある旅館は、至るところに防音材が使用されてたし、日常茶飯事なんだろうか。
…あれ？待てよ？

「この扉…、塀も壁も、結構良質な防音素材が使われてる…」

なるほど。たまたま僕らが近くを通ったから、二人の会話が聞こえただけなのか。
方相氏ってなんだろうか。
僕は科学方面に知識は長けているけど、歴史とか文系関連は高校までの知識までしか

詰めてないからなぁ。
先生だったら詳しく知っているのだろうか。
「…あの子、逃げるの上手いですね。
角曲がった直後に、ゴミ箱を踏み台にして、旅館の塀越えていきました」
「え?見えたの?」
「夜目が効かないと、死ぬ環境でしたから」
…やっぱり、隠してても、戦場にいた時のことを思い出すんだろうな。
どこか遠くを見つめるあかりさんは、「さ、旅館に戻りましょう」と手を引く。
「…あの子と鉢合わせない?」
「その時はその時です。上手い言い訳、考えてくださいね?」
「……この旅行で、とことんあかりさんに振り回されてるなぁ」
「イズクくんと何かするのが楽しいんですよ。私はいつも囮役ですから」
♦?♦?♦?♦?

僕らはこっそりと旅館の中へと戻り、廊下を歩く。
言い訳は、喉が乾いたから自販機を探してる、と言う名目でいいだろう。
見つかった時の言い訳にしては些か弱い気もするが、中学生が思いつく精一杯の言い訳として、笑って許してくれることを祈ろう。

が。そんな祈りは神には届かなかったようで。

「ついなちゃん、今日はここに泊まってき?
弓鶴兄ちゃんから許可貰っとるし…」
「お茶子の姉ちゃん…。いつもほんまごめんな…」
「ええのええの!変に遠慮することあらへんから、ゆっくりしてき」

向こう側から、麗日さんとさっきの女の子が歩いてきた。
どうしてよりによってこのタイミングで鉢合わせる!?
まずい。麗日さん一人ならまだいいけど、さっき外ですれ違った彼女は話は別だ。
無断で外に出たことがバレてしまう。

僕の祈りも、先生の願いと同じ効果を持っているのだろうか。
アルデバランの装備…間に合いそうにない。
光学迷彩…いや、ぶつかって終わる。
……ここは、彼女が僕らの姿を見ていないことに賭けるしかない。

「あれ?お客さん?
ついなちゃん、ちょっと待ってぇな…。
すみませんけど、この時間帯で、廊下を歩くのはご遠慮ください」

良かった。外に抜け出したことはバレていないようだ。
僕は以前習ったように、愛想笑いを浮かべ、なんでもないように嘘をつく。
…皆は僕が嘘をつけない性格だって言うけれど、それは違う。
必要のない嘘をつかないだけだ。

「あ、いや…。喉が渇いちゃって。部屋に飲み物がないから、二人して自販機探してたんです」
「…自販機でしたら案内しますので、早めに戻ってくださいね」

「ありがとうございます」

嘘は使いどころさえしっかりしていれば、人間社会において比類なき強さを持つ。
先生が嘘、真実、理想、現実、ｅｔｃ…と、あらゆる『言葉』を巧みに使って、僕たちを教育してきたのを知っている。
この場合も、僕はその武器であっさりとこの状況を打破できた。
かに思えた。

「…見間違いやないんなら…。兄ちゃんら、さっき、外おらんかったか？」

ふぁーーーっっっっっ
!?!?!?

口から飛び出そうになる声を抑え、必死に口を閉じる。
麗日さんも、会話の内容から、それなりに付き合いのある彼女の言葉に耳を傾けてる。

ーーーーーー君は嘘の使い方が下手ですね。

東北さんは元々捻くれてるので上手ですけど、元が純朴な君は、慣れないうちは自分のついた嘘に振り回されますね。

なんで今になって思い出すんだ僕は!

「確実に騙せる」って分かってる時に嘘を使えって学んだろ、僕のバカァ!!

自分を軽く呪いながら、これ以上ボロを出さないように、なんでもないように笑みを浮かべた。

「気のせいじゃない?僕が部屋から出たのって数分前だ…」

「クソデク。テメェ、クソガキ押し付けて1時間も何処行ってやがった?三十分も歩かせやがって…」

びくっ。

声の圧に恐る恐る後ろを振り返る。

そこには、明王顔のかっちゃんが、パキパキと手を鳴らして僕を睨んでいた。

なんとタイミングの悪い。

「え、えーっとですね、あかりさんが…」
「デートです♡」
「ほォ…？そいつァたのしそうなこって…」

顔面がとんでもないことになってる。
あかりさんが火に油を注いだせいで、下手なネームドヴィランが裸足で逃げ出すくらいには怖い顔してる。
いつもなら怒鳴り散らしてるのに、静かな分余計に怖い。

「か、かっちゃん…？君が怒鳴らないと怖いんだけど…」
「今何時だと思ってんだ怒鳴るわけねェだろクソデク。あのクソガキ、俺の肝臓を的確に殴ってきやがるし起こしても起きねェんだなんとかしやがれ」
「いや、僕もそれが嫌で逃げてきたフシあるんだけど…」
「あ？」
「……はい。なんとかします」

かっちゃん、静かだとめっちゃ怖い。

怒鳴り声がデフォだから、余計に。
かっちゃんが怒り終わると、フリーズしていた麗日さんが僕の肩を叩いた。
「……あの、外出てた件について話があるんですけど」
「……はい」
「そ、それじゃあ私はお先に失礼して…」
「そこの大食いちゃんもやで」
「はにゃっ!?」
「おオ、こってり絞って…」
「出歩いたらあかんって張り紙見んかった?アンタもやで」
「はァ!?いやっ、俺は…」
「問答無用」
かっちゃん風に言うなら、厄日だ。
いや、まだ1日が始まって1時間くらいしか経ってないけど。

緑谷出久が雄英を目指さない理由

「お叱りは以上っ。もう部屋に戻りなさい」

結局。僕たちは、旅館の人…伊織さんに、しこたま叱られた。
あかりさんは慣れてるのか、終始無表情だったけど、僕としては結構効いた。
かっちゃんはとんでもない顔を、更にとんでもないことにして僕を睨んでる。
悪いことは考えるモンじゃないな。
ヴィジランテやってる僕が言うのも、なんだけど。

「クソデクテメェ覚えてやがれ絶対ェに殺すゥゥウウゥ…ッッッ……!!!!!」
「だから、ごめんって…」
「ごめんで済ますワケあるか組み手5時間じゃボケェ……!!」

いつものに戻った。
怒鳴り声を抑えてんだろうけど、割と声が大きい。

組み手5時間って、本気で怒ってるなコレ。
前みたいに、時間関係なく怒鳴り散らしたりしないあたり、ケツバットの効果はあったらしい。

「…伊織の兄ちゃん、終わった…?」

かっちゃんをなんとか落ち着かせていると、ひょこり、と先ほどの女の子が姿を現す。
長い髪を下ろし、泣きすぎて腫れた目元で伊織さんを見つめていた。
伊織さんはその姿を確認すると、優しい笑みを浮かべて彼女に歩み寄る。

「ついなちゃん、ごめんね。どうかした?」
「あ、あの…お昼も晩も、出来るまで飯無し言われて、水だけで、朝ご飯食べただけで…なんも食ってへんくて…」
「お茶子ちゃんは?」

伊織さんがそう問いかけた時。
どんがらがっしゃん、と破壊音が鳴り響いた。

「料理なんて慣れへんことするから…」
「……今の時間で業者呼べないよ…」

何が起きたのかを察したのだろう。
伊織さんが頭痛を抑えるように、頭を抱える。
その様子を見ていると、かっちゃんが僕を肘でついた。

「テメェなら台所程度、粉微塵になろォが直せるだろォが。
夜中に抜け出した罰と思ってやれ」
「言われなくても」

僕は伊織さんに何か言われる前に、破壊音の発生源へと向かい、その扉を開く。
案の定と言うべきか、コンロが悲惨なことになっていた。
幸いなことに火事にはなってないけど、もう二度と使えない程度には壊れてる。
ＩＨに換えてないあたり、前時代的だなぁ。

「びっくりしたぁ…。
あっ!?あかんわァ!!コンロが世紀末になっとる!!」

吹っ飛ばされた麗日さんも無事そうだ。
このまま直すのも簡単だけど、ガス漏れとかしてないだろうか。
イズクテレフォンで、部屋全体をスキャンして、ガス漏れがないか確認する。
…良かった。ガス管は無事だったらしい。
どうやら鍋やら調理器具やらが激突して、コンロのみが壊れたみたいだ。
経年劣化も激しかったみたいだし、しかたないのかも。
…それにしても、すごい清潔だ。
チリ一つないって、僕も見習わないと。
僕のラボは、失敗作の残骸とノートで埋まってるからなぁ…。
僕がそんなことを思っていると、伊織さんが部屋に入り、目を覆った。

「かつてないほどに壊れてる…。
やっぱり、ＩＨに換えとくんだった…」
「換えましょうか?」

「うん、頼むよ…って、え？」

お風呂は温泉だし、ガスを使ってるのはキッチンだけってのは、旅館を歩き回ってれば嫌でもわかる。

なら、改装も楽だ。

勝手に人の家を改装するのもアレかと思ったけど、かっちゃんがきちんと言質を録音してる。

大義名分は得た。ストレス発散だ。

「交換条件です。夜中に出てたこと、先生に言わないでくださいよ？」

僕は言うと、簡易型のヘカトンケイルを起動し、改装に取り掛かる。

素手よりも手早く動いてくれるし、僕の脳波で動いてるから、正確に組み立てられる。

結構重宝してるんだよね、コレ。

数分もすれば、あら不思議。

ボロボロになったガスコンロが、あっという間にＩＨコンロに早変わり。

ガス関連の契約解除はしてないので、ガス管関連は手はつけてない。

ただ、ガス管としての意味はもはや為さないけれど。
僕はヘカトンケイルを仕舞うと、呆然としてる伊織さんに声をかけた。
「ガス管もう必要ないんで、契約解除して業者に廃棄を頼んでください。
僕は契約関連の権限持ってないんで。
使い方の説明書とやるべきこととか、いろいろまとめておきますので」
「「……え？」」
鳩が豆鉄砲食らった顔とはよく言うけど、こう言う顔のことを言うんだろうなぁ。
そんなことを思っていると、かっちゃんが引きつった顔で口を開く。
「ウチの洗濯機もそオだが、バケモンみてェな速さで組み立てんな、テメェ」
「いや、この背中のやつ無かったら余裕で朝までかかってるから」
僕自身の組み立てるスピードは、なめくじ並みに遅い。
人の手だから当たり前なんだけど。

つい最近、音街さんの家に場所を提供してもらって完成した『アレ』も、ヘカトンケイルがなかったら余裕で一生かかってたからなぁ。
イズクテレフォンをポッケに入れると、伊織さんが恐る恐ると言ったように僕に問うた。

「…あの、そう言う個性の子？」
「いや、僕はむっ」
「そんなとこです！」

無個性です、と答えようとしたその時。
僕の口を抑え、かっちゃんが誤魔化した。

「おいコラデクゥゥ…!!
簡単にホイホイ喋ってんじゃねェぞテメェがこの世界簡単にブッ壊せるっつーこともっと自覚しろや殺すぞ……？」

目が据わってらっしゃる…。

つい、いつもの癖で話そうとしてしまったが、個性のせいにしないと面倒か。
…それにしても、息が苦しい。
かっちゃん。口を抑える力、強すぎない？

「わかった…！わかったから、手ェ離してよ…！」

僕が小声で言うと、かっちゃんは「余計なこと言ったら殺す」と言いたげな目を向けた。

「本当は、大人としては個性の無断使用を怒らなきゃいけないんだけど…。
助かったよ。この時間じゃ、どこの業者も空いてないし…。
お客さんの朝ごはんも作れなかったから」
「元々劣化が酷かったので、近いうちに換えておいた方が良かったですよ」

僕が言うと、彼は目をぱちくりと丸くした。
…あっ、やばっ。
「ただの中学生が、一目でガスコンロの状態を把握出来た」と知らせてどうする。

個性はヘカトンケイルってことになってんのに。
うぅむ…。『普通の中学生』って難しい。

「さっきの個性、ただ腕が多く出せるくらいでしょ？」
「……ま、まぁ」

案の定バレた。
まぁ、ヘカトンケイルの方がよっぽど個性っぽいよな。
頭がいい個性…なんて個性は、この世界にいくらでも溢れてる。
が。いくら個性が複合するとは言っても、増強系と頭脳系は合わさることは、基本ないって論文出てるからなぁ。
そういう個性でも、下地となる知識がないと、無個性も同然だけれど。
そうなると、僕も個性持ちも変わらない…という結論に至る。
アレだけ必死に詰め込んで、僕はようやく人並みになれたってことだ。
…もう何度目になるかは忘れたけど、言わせてほしい。
個性ってのはつくづくデタラメだ。

「君、頭良いね。お茶子ちゃんと同い年くらいなのに」
「それ、ウチが頭悪い言うてへん？」

麗日さんが半目で伊織さんを睨む。
伊織さんは悪びれる様子もなく、続けた。

「雄英目指してるんなら、もう少しがんばった方がいいよ？
国語と数学はすごく良いのに、英語が１５点で、社会なんて６点…」
「あーあー聞こえなーい…。現実なんて見えてませーん…」

……『悲惨』って言葉をそのまま形にしたような結果だなぁ。
麗日さんは僕と同い年らしいし、この時点での英語はそこまで難しくない。
普通に授業受けてたら、勉強してなくても５０はとれる。
英語圏で言えば、喃語の域なのに。
社会なんて、中学生のは提出物だけやってても、それなりに点数を稼げる程度のはず。
なのに、どうやったらそんな悲惨なことになるんだ。

「ん…？雄英…？」

国立雄英高等学校。
平均偏差値は７０を超える、超名門校。
ヒーローの育成に力を入れており、トップ３のヒーローがその学校で青春を過ごしたという、輝かしい功績を残してる高校。
…ヒーローの育成するなら、日本よりも、犯罪率の高い海外にブチ込むだけで、バリバリ育つと思うけど。
ヒーローとしてのスキルを死ぬ気で磨かないと死ぬ…って、現地のヒーローたちは語ってるくらいだし。

「い、一応…ヒーロー科志望…です」

その功績にあやかりたい、という人は少なくはない。
国立である分、私立よりも手厚いサポートを受けれるし、なにより学費も安い。
普通科に入るだけでも、ヒーロー科への転科も、体育祭の成績によっては可能。
そうでなくとも、普通科を卒業すれば、有名企業への就職は勿論のこと、進学にも良

い方向に働くという。

…目指さない理由はないかぁ。毎年毎年、倍率がおかしなことになってるけど。

「雄英のヒーロー科志望かぁ。轟くんとかっちゃんのライバルってことだね」

「そうなんや！よろしく、爆発頭くん！」

「誰が爆発頭じゃゴラァァァァァァァァ……!!爆豪勝己だ丸顔ォ…!!」

「丸顔やなくて、麗日お茶子！よろしく！」

グイグイいくなぁ、麗日さん。

…かっちゃんも轟くんも、雄英志望ではあるけれど、在学中にアメリカに留学する予定らしい。

オールマイトがいなくなった反動で、犯罪率が３０％超えてるからなぁ。

……琴葉博士も要因の一つだけど。

とにかく、ヒーローとして成長したいのなら、海外留学は最適な道なのかも。

「兄ちゃんらも、ヒーロー目指しとるん？」

僕がしみじみとそんなことを思っていると、先ほどの女の子が僕たちに問うた。
かっちゃんたちは目指しているが、僕に対しては、「目指している」という言い方は正しくない。
最高のヒーローを演じてるのだ。
…まぁ、口が裂けても言えないけど。

「目指してるけど、僕の進路は違うかな…？
かっちゃんと、もう一人の友達は、麗日さんと同じ雄英のヒーロー科志望だよ」

僕は言うと、必死に微妙な表情を浮かべそうになる表情筋を抑えつける。
僕が雄英を選択肢から外したのには、理由がある。
端的に言おう。

確実にサポート科にブチ込まれる。
そこで一生をスーツ量産機として過ごすなんて、死んでも嫌だ。

先生曰く、「十中八九、特待生とか言う響きの良い言葉で言いくるめようとしてきま

す。国立ってことは、国の刺客みたいなモンですからね。『お国のためだけに働く奴隷になれ』ってのと同義ですよ」と言われた。

それなら、琴葉博士のラボに行った方が遥かにマシだ。

…別に、雄英に憧れてないとか、雄英が嫌いだと言うわけではない。

寧ろすごく憧れたし、出来ることなら通いたいとも思ってる。

ただ、僕の望まない現実になってしまうのが理解できただけだ。

実際にあった過去の出来事を話そう。

十年前。無個性で普通科に居た少女は、あの雄英体育祭で圧倒的な実力差を見せつけ、優勝を収めた。

だが、その力を危惧した何処ぞのお偉いさん…当時は誰も逆らえないほどの権力者…が、アレやこれやと画策し、退学処分にしたという。

…なんでこんな醜聞を知ってるかって？

音街さんの家で調べた。

その少女が今はどうなってるのかは分からないが…まぁ、気分の良い結果ではないことは確かだろう。

「兄ちゃん、難しい顔してどうしたん？」

顔に出てしまった。

雄英と聞くと、どうしても複雑な心境を隠せなくなる。

「…いや。なんでもない。

君…ええっと、お名前は…」

「如月ついな。…おとんは『役ついな』って名乗れってうるさいねんけど…」

「じゃあ、ついなちゃん。君は何になりたいの？」

僕が彼女に問うと、彼女はぱぁ、と明るい表情を浮かべた。

「あ、あんな。ウチ、お菓子屋さんになりたいねん。

ここら辺、お菓子のお店少ないやろ？

やから、ここらへんにお菓子の店出して、甘いモンも楽しんでほしいな～思うてるん」

…きりちゃんじゃ、今後絶対見られないあどけなさだ。

僕が一種の感動を覚えてると、彼女の表情がふと暗くなる。

それを見かねてか、伊織さんが口を開いた。

「ついなちゃんはいつもの席で待ってて。

君たちはもう遅いし、今日は部屋に帰りなさい。水奈瀬さんには黙っておくから。

お茶子ちゃん。もう部屋の場所は教えたよね？案内よろしく」

ついなちゃんは少し名残惜しそうに、「ほな、また今度」と僕から離れていく。

その背中は、何処か寂しそうだった。

作文の朗読とかいう地獄

「おい、麗日」
「どしたん？」

部屋に戻っている途中。
ある程度ついなちゃんの居る部屋から離れると、かっちゃんが麗日さんに声をかける。

「あのガキ、身体中怪我してるだろ。歩き方も動き方も妙だった」

かっちゃんは、怪我に対して異常なほどに反応するようになった。
いや、何処に傷があるかを判断できる技術が身についていた、と言った方が正しい。
…そのルーツは、かっちゃんが主犯となってやってた幼少期のイジメっていう、微妙な物だけど。
本人もそのことは自覚してるらしい。

たまに、過去のことを思い出しては、僕に謝る時があった。
「胃袋ごと出てきそうなくらい気持ち悪いからやめろ」と真顔で言ってしまったが。
…まぁ、かっちゃんでなくても分かるくらい、彼女の挙動はおかしかった。
傷を庇うような動き方をしない限りは、あんな動き方にならないのも事実だ。

「…分かるん?」
「早く治療した方がいいと思いますよ。
結構アザが残ってます。消えないのもありますね」
「そんなに詳しく分かるん!?」
「…そういう個性ってだけです」

あかりさんは言うと、目を逸らした。
個性作ってないな、アレ。
あかりさん、僕が勉強の面倒を見てるけど、人並み程度の知識しか有してないからなぁ。
怪我のことは、経験から語ってるんだろう。

「そこの大飯食らいが言うよォに、ただの怪我にしちゃ酷すぎだ。
夜中に家抜け出してこんなトコ来てるくれェだ。
ドラマやらネットやら見ただけで世間知ってるような気になってる歳の中学生が言うのもなんだが、予想はつく。
確認も深入りもしねェが、このままだとアイツ、確実に潰れるぞ」

少し前のかっちゃんじゃ考えられないセリフが飛び出た。
流石に笑うところではないので、笑いはしないが。
転んだだけで消えないアザが出来るなんて、確かに考えにくい。

「テメェといい、あの旅館のニイちゃんといい、少しは気付かなかったか？」
「……ついなちゃんが、『やめて』って言ったから…」
「そォいう無駄な気遣いはやめろ。
あのガキを崖から突き飛ばすのと同義だ」

一皮剥けた今のかっちゃんだから、こういうことが言えるんだろうな。
前だったら「自分でなんとかしろや」って怒鳴ってたんだろうけど。

「今からでも遅くはねェ。救急車呼ぶぞ。
警察もだ。児童虐待防止法違反で、あのガキの親、社会的にブッ殺す」
「そ、それはだめっ！」

かっちゃんが慣れた手つきで携帯に番号を打ち込み、通話ボタンを押そうとする。
が。麗日さんが慌ててかっちゃんの携帯を弾き飛ばし、それを防いだ。
時間帯のせいで怒鳴りはしなかったが、かっちゃんは目つきを鋭くして、麗日さんに詰め寄った。
以前だったら確実にどこかを引っ掴んでるから、マシにはなった。

「随分とまァ薄情なヒーロー志望がいたモンだ。俺が轟じゃなくてよかったな。
アイツだったら女だろォが夜中だろォが、テメェを怒鳴りながら殴ってたぞ」

ま、昼だったら俺も殴ってたが、と付け足すかっちゃん。
…個性無しの組み手の時、男女関係なく顔面狙ったりするもんなぁ、僕ら。
イズクメタルで作ったファールカップなかったら、僕ら男は種無しになってるだろう

な。

それ程までに、スーツを着た僕を除いた全員が容赦ない。

「…薄情なのは、わかっとる。でも、あかんのや…。訴えても、無意味なんや…。病院に運んでも、危ないんや…」

「…どーいうこった？」

かっちゃんが訝しげな表情を浮かべる。

こういうところの予測が出来ないあたり、まだまだ新参者だなぁ。

「爆豪くんは経験が足りませんね。

訴えても無意味且つ、こちらが不利。

尚且つ病院も危険ってことは、私たちの想像もつかないほど地位のある主犯格が居て、其奴にもメリットがあるわけですよ」

「おーし出番だデク。

捏造するも良し、真実を暴くも良し、今すぐに全員仲良く失脚させろォ」

すごく簡単に言ってくれる。
やろうと思えば出来るけれど、僕はそういうのにノリノリにならないタイプだ。
轟くんとかは嬉々としてやるんだろうけど。
個人的な理由だけど、かっちゃんの要望には答えられない。
他の人だったら喜んでやってくれるだろう。

「証拠捏造は轟くんが自然な写真を作れて、ハッキングやらはきりちゃんの方がバレずに出来る。
シナリオは先生が一番それっぽく書ける」
「今すぐ叩き起こしに行くぞ」

かっちゃんは言うと、僕らの手を取って部屋へと向かう。
『僕は出来ない』なんて、これっぽっちも言ってない。
先生たちも巻き込んじゃうけど、いつものことだから別に良いか。
そんなことを思いながら、僕らはかっちゃんのなすがままに部屋へと引っ張られた。

♦？♦？♦？♦？

「深夜二時に叩き起こしたことの制裁は、この程度にしましょうか」

撃沈した二人を前に、僕はこほん、と咳払いする。

制裁と言っても物理的なことではない。

ただ少し、彼らの「じゅぎょうさんかんびのさくぶん」の録音を流しただけだ。

三十分くらい、みっちりと。

爆豪くんは羞恥のあまり、一人ジャーマンスープレックスみたいな体勢になってるし、緑谷くんは中学生とは思えない哀愁を漂わせている。

「…爆豪。普通に考えろよ。この程度なら緑谷一人でどうにか出来ただろ。気が乗らねェって理由で、寝てた俺らに押し付けたって丸わかりだろ」

「……俺がアホだったわ。コイツのクソ教師譲りの性格の悪さナメてた」

「あだぁっ!?」

轟くんの言葉に、爆豪くんが息も絶え絶えに呟き、緑谷くんをハリセンでしばく。
確かに、僕であっても他人に押し付けるな。
例え、なんとか出来るスキルがあったとしても、だ。
…緑谷くんは何故、そんなショックを受けた顔をしてるんだ。

「嘘でしょ…？性格の悪さまでも先生に似てきたの…？」
「次はこの『一週間の終わりに書く作文』を朗読しましょう。二年生の初めのですね」
「やめてくださいおねがいします」

水奈瀬コウは呪文『作文の朗読』を覚えた。
小学校の作文は、黒歴史がたっぷりだ。
二人とも、バリエーションが「オールマイトすげぇ！」くらいしかなかったなぁ。
褒め言葉も、爆豪くんは覚えたての言葉を間違って使ってたなぁ。
緑谷くんは、褒め言葉が陳腐で、他人に読まれるのは恥ずかしいらしい。

「ふぁああ……。クソ眠いんで、緑谷先輩に投げていいですか…？」
「ごめん…。今、恥ずかしさでしょーもないポカしそう…」

「ゲームソフト五つ分」

こら、そこ。

夢と希望あふれる小学生と中学生が、汚いやりとりするんじゃない。

…そうだった。現実見せたの僕か。

眉間を抑えながら、僕は万札４枚を東北さんに渡す緑谷くんを放置した。

もうツッコミを入れる気力もない。

それに、夜中に叩き起こされたせいか、思考がちょっとおかしくなってる。

吸血鬼が夜行性なのって、こういう不健康テンションが作用してるんだろうか。

「…協力はします。東北さん、関係者は洗い出せましたか？」

「政治家が多くて…あと、警察とメディア関連の結構なお偉いさんが。共通して、皇室とかなり密着してますね」

「……児童虐待の隠蔽に、そんな大物が大それたことしますかね？」

東北さんに告げられた真実は、不可解極まりないものだった。

皇室と密着してる政治家とか、警察、メディア関係者って、大物にも程があるだろ。

ただのスキャンダル程度なら、世間への印象操作でどうにか出来てしまうぞ。
半沢直樹並みのことやらないと、失脚なんて無理だろ。

「国絡みでの虐待…ですか」
「しかも、ご丁寧に割と重要そうな情報は書いてません。
暗号か、それとも隠してるのか…。
なんにせよ、経験の浅い私じゃ、バレずに抜き取るのも魚拓取るのも無理です」
「…次は国が敵…か」

世界を一人で滅ぼせる存在の相手ならしてきたが、まさか暮らす国そのものが敵だなんて思いもしなかった。
おかしいなぁ。この世界のヒーローって公務員なんだよね？
その公務員が守るべき存在が悪に染まってるってどういうことだ。
…そういや僕も公務員だったわ。前世ニートだったから完全に忘れてた。
国に牙剥いてるわけか、僕。バレたらクビで済むかなぁ？
…まぁ、この無敵の布陣でバレる可能性は万に一つもないか。
五秒にわたる自分への心配終了。

「……ほな、助けられんやん…」

どさり。

自分への心配を終えるのとほぼ同時に、麗日さんが膝から崩れ落ちる。

僕らが救おうとしてる人間が、僕らでは救えないことが分かってしまったから。

それどころか、誰にも救えないことを悟ってしまったから。

「ついなちゃん……っ。ごめんっ…。

ごめんなぁっ…!ごめんっ、ほんま、ごめんなぁ…っ!」

ボロボロとその目から涙を零す彼女。

崖っぷちに落ちそうなところを、一回手を掴まれて、その直後に突き落とされたらそうなるか。

一回喝を入れるか、と僕が動こうとしたその時だった。

緑谷くんが、彼女の頭に軽く手刀を振り下ろしたのは。

「な、なに…？」
「勝手に諦めないでよ。僕たちはまだ、動いてすらないんだから」
緑谷くんは言うと、イズクテレフォンを取り出した。
瞬間。そのポケットサイズのデバイスが、想像もつかないほどに広がり、幾つもの画面とキーボードを作り出す。
「…その携帯、そんなベイ○ックスの冒頭みたいな拡張機能ありましたっけ？」
「一昨日付け足した。
ＭＥＳＳＩＡＨ。ヘカトンケイル起動と『マルチプルダイブ』の開始準備」
あかりさんの質問に端的に答えるとともに、緑谷くんが謎のヘッドギアと、幾つもの腕を作り出す。
次の瞬間には、凄まじい勢いでキーボードを叩いていた。
「マルチプルダイブ…って、珍しい。
こっち方面で緑谷先輩が本気出すって」

「そのマルチプルダイブってなんだ?」

キーボードを叩く音が響く最中、証拠集めを終えた…収穫はあれど使えない…東北さんが、目を丸くする。

緑谷くんのあんな状態、僕でも見たことないぞ。

…いや。緑谷くんのラボ自体、見たことがないんだが。

「文字のまんまです。思考力を外付けの人工知能のサポート付きで底上げしてんですよ。

緑谷先輩の脳味噌は、スパコンが何台重なろうが足元にも及ばないバケモンですから、それがざっと数億倍」

…つくづく思う。生き急ぎ過ぎた人間って、恐ろしい。

彼の場合、師事する人間…僕じゃない方…が滅茶苦茶だっただけあって、余計に。

「…コンロの時といい、あり得へんやろ……。

個性は、その手なんやろ…?」

「おかしなこと言いますね。
緑谷先輩は正真正銘、なーんの個性もない無個性ですよ？」
「は？」
麗日さんの疑問に、東北さんがあっけらかんと答える。
同時に、タイピングを終えた腕と画面、キーボードが収束し、一つの携帯に戻った。
「ただし。その頭に、『世界一の努力家』が付け足されますけどね」

緑谷「この国どうなってやがんだ!!」

「この国どうなってやがんだァァァァァァァァァァァァァァッッッ!!!!
何が『異能解放軍』じゃブッ殺すぞミーハーキチ野蛮人どもォォォオオォォォォォォォォォォォオオオオオッッッ!!!!
やってることまるっきり敵じゃねェかクソがァァァァァァァァァァァッッッ!!!!」
「爆豪先輩みたいな怒鳴り方だ…」

午前五時。
空が白みを帯びる時間帯に、緑谷くんの怒号が部屋の一部に響く。
緑谷くんが無言で設置した音声遮断バリアによって、声は外に響かないが、うるさいことには変わりない。
…緑谷くんの気遣いで、寝ているメンバーの耳に届いてないことも幸いした。
一通り叫びたいことを叫んだのか、彼は一呼吸おくと、僕たちに向き直った。
「相手は異能解放軍。１０万近い勢力ですね。

プロヒーロー、政治家、報道会社、出版社、有名企業、その他大勢の一般市民サマ。
日本の街一つ乗っ取ってますねコレ」
「声帯どうなってんですか?」

あれだけ叫んだ後に、そんな普通に喋れるものなのか?
声がガラガラにならないのだろうか。
…にしても、異能解放軍とは、これまた懐かしい名前が出たものだ。
僕は生まれてなかったが、デストロとかいうほっそいオッサンが主軸となって、暴動起こしてたっていうのだけは覚えてる。
詳しいことは学んだが、忘れた。
そもそも、小学校の教師が犯罪史を善悪の区別もつかないガキに教えてどうする。
洗脳教育もいいところだ。

「ついなちゃんの虐待は洗脳教育の一環ですね。頻繁に逃げ出せる精神を保ってるということは、汚染されてないようです」
「…その洗脳教育、理由あんですか?」

東北さんが呆れ気味に問うと、緑谷くんも同じように、呆れ気味に返した。

「『追儺』の復活を目的とした活動だって」

「……なんだそれ？」

馴染み薄い名前に、轟くんが首を傾げる。

追儺。個性社会になると同時に、風化していった祭典の一つ。

悪い存在に『鬼』という名前を与え、それを『神』という良き存在が排他する。

如何にも人間が考えそうな、シンプルな内容の催し。

だが、それも以前の話。

そういう「異形の者を払う儀式」は、個性が社会に浸透するに連れて、軒並み排斥。

理由なんて、もはや分かり切ってるだろう。

同じ理由で、宗教なんてほとんどが廃れた。

なんとか形を保ているのは、信者の多かった三大宗教くらいなものだ。

話が逸れた。

でも、そうなると妙だ。

「個性の使用を良しとする集団が、個性を否定するような催しを良しとしてるって、おかしくねーか？」

僕に変わって、爆豪くんが疑問を口にした。

実にその通りだ。破綻している。

個性の使用を禁じている法を撤廃したいのならば、そのメリットを見せるべきだ。

だというのに、今回のコレは無意味にも程があるのではないだろうか。

「催しとしての在り方を変えて、法の象徴たる皇室さえも取り込もうとしてる…とか？」

あかりさんが言うと、緑谷くんはうなだれるように頷いた。

「正解…。追儺自体を復活させるんじゃなくて、似たような儀式にすり替えるだけ…。『神や人々が鬼の在り方を肯定して、共に歩んでく』…っていう安いハートフルストーリーに変えるんだって。

その実態はまぁ酷いモンだね。
脳医学とかそういう個性とか…とにかく諸々取り寄せて、軽い洗脳映像をその場で作り出す気満々。
そして、じわじわと『個性はいいんだ』って思考に変えてく…。
その基盤を担うのが、洗脳に誂え向きな個性を持ってるついなちゃん…」
「方向性真逆ですね」

僕でもわかるくらいストーリーの作りが甘いし、やり方が爆豪くんよりみみっちい。
この子たちであれば、躊躇いなく全国ネット乗っ取って洗脳電波垂れ流すんだろうなぁ。
まぁ、「人道に背くことはしない」って決めてるし、絶対にやらないが。

…そう考えると僕の教え子、総じて物騒すぎやしないか？

それはいいとして。伝統行事にその退廃的な洗脳を持ち込むのはどうなのだ？
個性社会になった影響で、追儺が廃れに廃れたからまだいいが、前世の時代であれば確実にキレる人間が出てくるぞ。

「個性の在り方を肯定すると同時に、『良くないもの』まで肯定してるっつーのは、この社会特有の皮肉…ってわけか」

…轟くんの言う通りだな。

本当、この世界は僕に退屈する暇を与えてくれない。

それ程までに良くないものが多いのと、教え子たちがそれを見つけて潰すことに全力を出し過ぎている。

「で、どォすんだ?その『異能解放軍』とやら、ブッ殺すか?」

「いや。今まで通り倒しても、しょっ引かれはしないと思う。

文章の端々にある癖からして、変にポジティブ思考だから反省もしない。

奴ら、証拠の処分だけは完璧だから、揉み消して被害者としてアピールするだろうね」

「捏造しても消される可能性がある…か」

…さっきから当事者と信頼関係を持ってる麗日さんが完全に置いてかれてる。

「えっ?えっ?……えっ?」と話が進むごとに、授業の途中まで寝てた学生みたいな反応

をしてた。
…事情の説明面倒だなぁ。

「先生は例の通り、基本的に役に立たないので、麗日先輩への説明に回ってくださいね」
「…そこまでハッキリ言われると傷つきますね。事実ですが」

未来永劫、そういう方面で役に立つ気もないが。
そんなことを思いながら、僕は麗日さんへの説明を始めた。
終わる頃には、日は上りきっていた。
…僕が起こされた意味なかったのでは？

♦？♦？♦？♦？

夢を見ていた。
私がそう自覚することは、頻繁だった。
死んだはずの母親が、自分を抱きしめてくれているのだ。
夢だと気づかないほど、私は現実が見えていないとは言わない。

私の母親は、女の私から見ても綺麗だと言えるほどに、容姿に恵まれた人だった。
性格もおおらかで、優しくて、厳しくて。
私は多分、母親をひどく神聖視していたに違いない…と思う。
今の今まで、私は個性を使ったことがないのだから。

「ええか?絶対に個性は使ったらあかんで。
…この個性は、使わんほうが幸せや」

母親に言われた、たった一度の言いつけを、私は今でも守っている。
私の個性。…正確には、私と母親の個性。
使えば修羅の如き力を得、見たものを畏怖させ、屈服させ、自身を崇拝させる個性。
お医者さんは、私たちの個性を「鬼神」と名付けたらしい。
父親は母親が生きていた頃はまともだった。
神社に婿入りした、普通の男性。
普通に働いて、普通に稼いで、普通に私たちを愛してくれた、何処にでもいるような、普通の優しいお父さん。

だけど、それは母親が死んでから変わってしまった。

母親が死んだ理由は、分からない。
いつものように家に帰ったら、凄惨な死体になって、部屋に転がってた。
思い出の部屋が、真っ赤に染まってた。
真っ赤な箱の中身みたいだ、と、間抜けな感想しか出てこなかった。
父親に聞いても、「知らなくていい」と聞かされ続けた。

「ついな!さっさと立て!
そんなことで、この間違った世界が変えられると思うなァ!!」

おかしくなった父親に耐えきれず、逃げ出したのは、母親が死んで3日後だった。
向かい側に住んでいた弓鶴の兄ちゃんに助けられて、警察に行った。

でも、私を助けてはくれなかった。

後で弓鶴の兄ちゃんに聞いたら、「揉み消された」と聞かされた。
世界が崩れたような気がした。
その日、家に帰ったら、父親が男の人と話していた。
何故かは分からなかった。
ただ、その男の人が、とてつもなく気持ち悪く思えた。
「リ・デストロ…。申し訳ありません、あの子はまだ我々の思想を理解せず…」
「いいですよ、そう焦らずとも。
彼女は我々にとって、大きな存在だ。
何年かかろうが、焦らず、ゆっくりと、その考え方を染み込ませればいい…。
この街の病院も、我々の傘下。あまりにも従わないのであれば、薬漬けにしてもいい。
そうそう。彼女、誕生日がもうすぐだったでしょう?これ、プレゼントに」

怖かった。
その日から、『練習』の日以外は、父が恐ろしいほど優しくなった。
夜も寝れないほどに怖かった。
逃げて、逃げて。必死で逃げた。
プレゼントは、全て本やビデオだった。

一度だけ、父親に強制的に見させられたことがある。

『解放』。『解放』。『解放』。

その言葉が、他の何よりも怖かった。

お茶子の姉ちゃんが優しく抱きしめてくれたから、弓鶴の兄ちゃんが、温かいご飯を作ってくれたから、私は正気を保てた。

世界そのものが敵に回っていることを知ったのは、これより少し後だった。

父が時折連れてくる大人たちは、『異能解放軍』と呼ばれる集団のリーダー格らしい。

綺麗な女の人が居た。

出版社のお偉いさんだと名乗った。

頭がおかしくなりそうな話ばかりしてきた。

サラサラな髪の男の人がいた。

ＩＴ会社のお偉いさんだと名乗った。

私のことを馬鹿にしながら、頭をぐちゃぐちゃにかき混ぜるような話をしてきた。

テレビでよく見る政治家さんも居た。

大きな声でハキハキと、心を釘で固定するような話をされた。

今日は、あの細い男の人が来る予定だった。

だから、私は練習の途中で、全力で逃げ出した。

今までの鬱憤を吐き出すように、罵詈雑言と一緒に。

家に帰りたい、とは思わない。

帰れば必ず、あの細い男が笑っているから。

だけど、帰らなければ、弓鶴の兄ちゃんにどんな迷惑が降りかかるかわからない。

相手は、法すらも味方につけている存在。

ただの小学生が立ち向かうには、強大すぎる存在。

夢ですらも、変わりようのない現実を見せてくる。

逃げ場などどこにもないのに、私は夢から逃げ出した。

僕たちの宣戦布告

「いや、日本崩壊待った無しちゃうん!?」

説明を終え、全ての事情…多分ちょっとくらいしか理解してない…を知った麗日さんが、素っ頓狂な声をあげる。

告げられた作戦は、下手すれば日本という国の信用が地に落ちるものだった。

…いや、下手しなくても落ちるんだが。

「芯まで腐りかけてる時点で、いつかは崩壊する。敵性国家って言われないだけマシだ」

轟くんが麗日さんに言い聞かせるも、彼女はあまり乗り気ではないようだ。

…まぁ、自分たちが国の信用を地に落とすって言われたら、躊躇うのも無理はない。

だが、ここで放置すれば、事態はより深刻になっていくだろう。

ここでの『敵性国家』は、意味合いが違う。

世界に害を振りまくような思想が、国中に蔓延した国家の総称である。

現在、５０近い国がこの『敵性国家』にカウントされており、世界に牙を剥いている。
この一つにカウントされるということは、『国が丸ごとヴィランである』と宣告されるようなものだ。
どんな国であろうが、絶対に避けなければならない事態である。

「せやけど…。うううう……」
「良くも悪くも、平和の象徴がいるからな。
日本は平和ボケにボケを重ねまくってる。
『この国に敵が癒着してる』…なーんて、一昔前の子供でも考えそうなことすら考えねェだろうよ。
能天気でいて無能でいて無駄に腰の重いアホ政府なら尚更だ」

以前はオールマイトを理想像として絶対視してたのに、緑谷くんも爆豪くんも、今や一人のヒーローとして見ている。
子供たちはこうやって成長していくのか。
いけない。三十路になるとどうしても涙腺が脆くなる。

「とにかく。国に問題があることを、一般市民である僕たちがどう知らせるかが重要になってくる」

ーーーーーーということで、世界中のネットをちょっとの間だけ乗っ取ります。

…どうしよう。

『テロ起こします』にしか聞こえない。

やってることがもう完全に、悪の秘密結社みたいなことになってる。

僕がそんなことを思っていると、緑谷くんが続けた。

「世界レベルでそんな大痴態の証拠を晒せば、いやでも排除する。

敵に癒着されかけてる時点で、敵性国家予備軍入ってるし」

「基本的に他国に頼りに頼りまくってるお国サマだァ。そのレッテルを貼られるのだけは勘弁だろォな」

その末路を知らないほど、日本の政府はバカで揃ってるとは考えにくい。

皮肉なものだ。

オールマイトという絶対的な正義の膝下で、隠れて悪が育っていたなどと、笑い話にもならないだろう。

…そもそも、異能解放戦線などという本の出版を検閲しなかったのが悪いだろ。

癒着されてるから仕方ないのかもしれないが、古本屋で普通に犯罪思想本を見かけるってどういうことだ。

あの本、デストロだかネギトロだかが被害者ヅラしてつらつらと「皆好き勝手していいんだ！」って言ってるだけだぞ。

ミーハーやら十代やらが影響されやすいような言葉を選んではいたが。

「証拠を垂れ流すにしても、日本政府の腰は想像の５００倍は重いですよ？

対処されない可能性が高い。

どうやってケツ蹴り上げるんですか？」

「おかしなこと言いますね。別に、日本政府を動かす必要はないですよ？」

ーーーーーー敵って認めさせればいいだけですから。

♦？♦？♦？♦？

「ついなちゃん、おはよう。
ゆっくり寝れ…るわけないか」

寝ぼけ眼を擦りながら、ついなちゃんが用意された席に着く。
不眠症…というべきか。
刻み込まれたトラウマのせいで、彼女がぐっすり寝たのを、僕は見たことがない。
今日も、彼女は僕の部屋にある布団で、ひどくうなされていた。
ついなちゃんは朝食を前に手を合わせ、小さく「いただきます」と呟く。
と。違和感を感じたのか、きょろきょろとあたりを見渡した。

「お茶子の姉ちゃん、今日は仕事ないん?」
「今日は最終日だから、お休みだよ」

どこで寝たのかはわからないが、夜中に叱ったあの子たちの部屋に行っているんだろう。
同じヒーロー志望だ。
悩みを共有したりもしているのだろうか。

そんなことを考えながら、僕はなんとなく、テレビをつけた。

『世界の人々よ。皆の時間を奪うことを、心より詫びる』

テレビには、世間を騒がせるヴィジランテが映し出されていた。

チャンネルを変えようが、テレビの画面は変わることなく、そのヴィジランテを映し出す。

『我は貴殿らが「ＳＡＶＥＲ」と呼ぶ存在。

今日は訳あって、このような形で貴殿らの前に姿を現した』

ヴィジランテ…ＳＡＶＥＲは言うと、画面にある表を映し出す。

『嘆かわしいことに、日本という平和の象徴が守る国に、悪の芽が根付いていることがわかった。

彼らは「異能解放軍」と名乗り、日本の中枢たる政府にまでその勢力を侵食させている』

異能解放軍。
ついなちゃんを長い間苦しめてきた、すべての元凶。
その勢力が日本を侵食していることを、彼はアッサリと言い放った。

『隠そうとしても無駄だ。
この放送は現在、世界各地にて配信中だ。
貴様らが散々揉み消した罪。
貴様らのせいで狂わされた人生。
貴様らの身勝手で流れた血と涙の数々…。
その全てを今、ここで我が白日の下に晒す』

そこからは、ダイジェスト方式だった。
延々と、吐き気のする内容の映像やら文章やらが流れる。
そんな中、僕はただ、呆然とそれを眺めていた。

『これはほんの一部だ。

貴様らの犯してきた罪のデータは、全てが世界中のコンピュータ内に保存されている。
今更もみ消せると思うなよ…？』

映像を遮ったＳＡＶＥＲの瞳が、強く煌めく。
あまりの出来事に放心してるのか、ついなちゃんの手から、箸が落ちた。

『今回、すぐにヤツらを倒さなかったのには訳がある。
この悪行の数々…。我としては看過できぬ事態だ。許せない、悪を砕かねば。
そう思い、この拳が何度震えたことか…』

仰々しく語る彼の拳が震える。
本来ならば仕事をこなさなければいけないはずの僕の体は、完全にフリーズしていた。
ついなちゃんの苦しみは、痛みは、よく知っていた。
ここいらの病院や警察に、異能解放軍の息がかかっていることも。
彼女を縛っていた鎖がすべて、千切れていくのを感じた。

『だが。敵と認知されていないものを打倒し、敵と呼ばれるのも腹立たしい。
…つまり、何が言いたいのかというと』

ーーーーーー我は、正義を為す大義名分を得るために、この放送を計画した。

ついなちゃんが崩れ落ちるように、脱力する。
彼女は無表情のまま、ぼろぼろと涙を流していた。

『我の拳が、悪を砕く。
もう嘆くことはない。もう枕を濡らす必要はない！もう理不尽に怒り、咽び、叫ぶ必要は、ない!!』

瞬間。ＳＡＶＥＲの背後にあった映像…正確にはプロジェクターだったのだろう…が燃え盛り、奥にいた人物たちが姿を表す。
人間というには無骨でいて、無機質なシルエット。
その瞳がずらりと並ぶと、ＳＡＶＥＲが声を張り上げた。

『我々こそが、ヒーローだ!!!』

麗日お茶子、現実を知る

「やぁ。お買い上げどうも。
早速使いどころ来ちゃったね」
「……っ、フィクサー……!!」

かつん。
革靴が床を叩く音が響く。
『敵性都市』愛知県泥花市に聳え立つタワーにて、異能解放軍最高指導者たる『四ツ橋力也』が、苦虫を噛み潰したような顔を見せた。

「おぉ、怖っ。メンタルコントロール出来るんじゃなかったっけ?」
「君はもう少し利口だと思ったよ…。
こんな状況で上手く出来るわけがないだろう…?」

歪に膨れ上がる四ツ橋…リ・デストロに、フィクサーはケラケラと笑い声を上げる。

異能解放軍において、フィクサーは恐怖の象徴と言えた。

世界に数える程度だけ存在する『異能を持たぬ異能者』。
抑圧された環境に抗った結果生まれた、『歪な人間の進化』。

判明しているのは、ほんの四人。

世界を翻弄し、卓越した脱獄技術と電子工学技術を持つ『脱獄者』…琴葉茜。
十年で十を超える敵性国家を、一人残らず殺し尽くした戦場の英雄…『殺戮者』。
その格闘技術で、ネームドヴィラン数百人を、たったの3日で倒した『格闘王』。
そして、あらゆる技術を極め、世界に君臨した『絶対悪』…フィクサー。

異能解放軍は、彼らのことを『ノーギフト』と呼び、恐怖の象徴として恐れた。
その最たる例であるフィクサーは、手に持った注射器を遊ばせる。

「いやぁ、遅れてごめんよ。
マイケルくん、ポカやらかしてさ。

あまりにも腹が立って、『分解』してきちゃったんだよね。
数は一つで良かったよね？間違って追加分も持ってきちゃったけど！」
「貴様っ…!!こうなることがわかって、我々の人数分用意したのだな……!!」

フィクサーの背後には、夥しい数の注射器が転がっていた。
その数、ざっと十万。
ちょうど、異能解放軍の人数に当てはまる数が、床に乱雑にばら撒かれていたのだ。
どう考えても、異能解放軍の悪事が日の下に晒されることが分かっていたとしか考えられないタイミングだ。
四ツ橋が彼につかみかかるも、その手は虚しく空を切る。

「えーっと…ブリトロだっけ？」
「デストロだァ!!!」
「そうそう。あのほっそいオッサンといい、なぁんで個性に脳みそ喰われたヤツは、揃ってこうも単細胞なんだよ」

フィクサーは馬鹿にするように言うと、襲いかかる四ツ橋の手を軽く弾く。

四ツ橋としては、本気で殺す気で放った拳。
彼はそれを、ただ指で弾いただけで軌道を逸らした。

「君たちの持つ『異能』は、ＳＡＶＥＲ相手には役に立たないんだから。
その君たちに『異能を超える異能』…いや、『神の力』を与えようって言ってのに、つれないねぇ」

フィクサーが肩を竦めると、四ツ橋はさらに怒り狂った。

「異能は生まれもってこそだ!!
人に与えられた異能など要らん!!!」
「の割には、ひとつ買ってるじゃないか」
「それはヤツが独断で買ったものだろう!!」

四ツ橋は言うと、これ見よがしに注射器のいくつかを破壊した。
その光景を見て、フィクサーは仮面の奥にある目を細める。
ここで、これから起きる現象についての前知識をおさらいをしておく。

注射器に入ってるのは言わずもがな、人工個性である。
人工個性は細胞単位で自立しているが、そこまで優れた知能を有していない。
また、細胞を食いつぶし、人間を液状化するほどまで食い尽くす習性がある。

ここで二つ、新たな知識を出そう。
ひとつ。人工個性は、空気中では短い時間しか生息できない。
二つ。空気中にでた瞬間、最も乗っ取りやすい生命体を狙う。

人工個性が選んだのは、フィクサーだった。
赤の流動体が、フィクサーへと向かう。
が。フィクサーはそれに対して一歩も動かず、ただ睨みつけた。

「あ？」

びたっ。
赤の流動体が止まる。
なんてことはない。

彼の発した声の周波数が、人工個性が恐怖を覚えるものだっただけである。

「売り物が勝手するなよ」

フィクサーが瞬時に割れた注射器を戻すと、赤の流動体を全てその中へと入れる。

何をしたのか、四ツ橋には見えなかった。

ただ分かることと言えば、目の前の光景が異常だと言うことだけ。

彼はその仮面の奥にある瞳で、四ツ橋を覗き込んだ。

そこにあるのは、光と闇をそのままぐちゃぐちゃに混ぜたような、怪しい光だった。

「さっさと決めてよ。

あんな小物じゃなくて、君みたいに個性因子のことを理解している人間が使ったところが『見たい』んだ。

データを取りたいとかじゃなくて、純粋な好奇心って意味で」

分かりやすく要約すると、『気になるから使って死ね』である。

倫理観の抜け落ちた願いと、人間味のない笑顔が、四ツ橋の持つ恐怖を掻き立てる。

「選択権を与えてるのは、君が特別だからだよ。なにも、君が使う必要はないんだ。
あの…なんて言ったっけ？出版社の…」
「……キュリオス」

キュリオス。
本名『気月置歳』。出版社『集瑛社』の専務であり、インタビュワーの経歴を持つ女性。
恵まれた容姿、築き上げた地位。
そのどれをとっても一級品と呼べる存在。
異能解放軍の中でも、幹部として相応しい力を有している。
彼女が一体どうしたのだ。
まさか、彼女に誇りを捨てろと言うのか。
四ツ橋は怒りのあまり、全身をドス黒く染め、その体を膨れ上がらせた。

「そうそう解放コードだっけ？『好奇心』！
似合ってるねぇ、マスゴミに相応しいレッテルじゃないか！
…話逸れた。彼女ねぇ、後数年で死ぬよ」

フィクサーは『物が壊れる』と告げるように、あっけらかんと告げた。

「空から落っこちて、ぐしゃっ！…だったっけ？ああ、薄すぎてもう覚えてないや。とにかくまぁ酷い死に方するんだよ！

どうせ死んじゃうなら、今ここで有効活用してやろうっていう僕の親切心！

びっくりだよ！僕にそんな余計なものがくっついてたなんて！」

四ツ橋は放心しながら、フィクサーの並べる言葉を聞いていた。

一瞬にして散乱した注射器を回収すると、フィクサーはタワーの窓ガラスを割った。

「ああ、そうだそうだ！そうだった！

うっかりしてたよ！感情のままに生きてると、効率悪い動きしか出来ないなぁ…。

ま、そっちの方がいいか。善…ああ、いや、『悪は急げ』だね。

じゃ、キュリオスさんにコレ『全部ぶっ刺してくる』から、あとはお好きにー」

フィクサーは言うと、割れた窓から飛び降りた。

残された四ツ橋は、街へと消えていくフィクサーを見下ろし、舌打ちした。

「…悪魔め……!!」

♦？♦？♦？♦？

旅館にて。

最早なりふり構ってられないのか、異能解放軍の一部がついなちゃんを狙って暴動を起こしていた。

どうやら、異能解放軍全体で重要なプロジェクトであったらしい。

その要となる『他者を煽動できる個性』を持つついなちゃんを狙うのは、当然の帰結か。

「…プロヒーローと警察が、なんとか食い止めてる状況ですね」

いまだ遠くに居る暴動の波を見つめ、状況を伝える。

緑谷くん、爆豪くん、轟くんは、既に異能解放軍の温床である「愛知県泥花市」へと

向かった。
全員がそちらに逃げていると踏んで向かわせたが、どうやら見通しが甘かったようだ。
巧妙なのはトップだけで、他はミーハーなアホと一般人の集まりだったのだろう。
「…あの人…。去年一緒に出演した人だ」
音街さんがぽつり、と呟く。
東北さんが「どれですか？」と問うと、一人のプロヒーローを指差した。
「…ヒーローになって、テレビにも出て、人気者だったのに…。
何が不満だったんだろう…」
彼女はこの歳で、プロヒーロー蔓延る芸能社会を勝ち抜いてきた猛者だ。
彼女…アイドル『音街ウナ』にとって、ヒーローは液晶を隔てた存在ではない。
仕事を奪い合うライバルであり、仕事を共にする仲間だ。
その中の一人が、こんな暴挙に参加してることに、思うところがあるのだろう。

「立派な人だった。活動は地道だけど、パトロールをサボったりしないで、事件が起きた時も、対処が早かったり…」
「どれだけ立派でも、裏が腐りきってたらこうなります。
…ウナちゃんは、腐らないでくださいよ」
「大丈夫だよ。
未来のトップヒーローに見合うようなトップアイドルになるって、決めてるんだから！」

…爆豪くんに似て、強かな子だ。
自ら茨の道を進もうとするあたり、余計に。
それにしても、大阪のプロヒーローは仕事が早い。
比較的若手のファットガムや防壁系の個性を持つプロヒーローが、防壁として働いているのだろう。
旅館に近づこうとする者こそ居れど、隙間から通り抜ける人間は居なかった。

「本当なら逃げたいとこですけど…。

緑谷先輩の作った『アレ』は、完成はしたけど、まだ組み立て終わってないし…。
座標転移システムも、緑谷先輩の精密な計算が無きゃ無理だし…」
「陸路なら逃げても無駄ですね。
完全に囲まれてますし、発明品の利用も控えた方がいいでしょう」

僕がいうと、ミコトちゃんは「籠城？」と問うた。
消去法で言えば、それぐらいしかない。
発明品を使えば何とかなるが、それが世に出れば、個性社会は崩壊する。
日本だけで言えば、もう崩壊してるようなものだが。
だが、世界情勢からしたら、そうも言ってられない。
緑谷くんの発明品を狙って戦争…とはいかないものの、争い事になることは確実だ。

「…一つ最悪なお知らせがあります」

これからどうするかを思案していると、東北さんが青い顔して告げた。
最悪なお知らせと言うからには、僕たちの選択肢が減る類の情報だろうか。
ヒメちゃんが恐る恐る、東北さんに問いかける。

「きりちゃん。最悪なお知らせって…？」
「…バリア張る衛星がありまして。
私のはチューニング中なので、使えません。
今使えるのは、緑谷先輩が持って行っちゃったやつだけです。
緑谷先輩はコレを知りません…ってか、知らせてません」
「……つまり？」
「バリアでの籠城は不可能です」

…一番安全なものが使えなくなったわけか。
いざとなれば、「無個性だけど個性が出た！やった！」的なノリで乗り切れる唯一のパターンが消え失せた。

「手っ取り早く、私が倒せば済む話じゃないですか？」
「そうもいかないんじゃないですか？
私とあかりさんって、世間的には敵ですよ？
あの場に現れたら大混乱まったなしですよ」

あかりさんが立ち上がろうとするも、セイカさんが制止する。
どうやら、戦況を見る目だけは育ったようだ。
かなりのポンコツに諭された本人はと言うと、露骨に嫌そうな顔をしていた。

「……ポンコツに指摘された。屈辱です」
「そんな嫌ですか!?」

…まぁ、嫌だろうなぁ。
それにしても、困った。取れる手段が本格的に無くなってきた。

「……あのー。言いにくいんだけどさ」

と。ここでミコトちゃんがおずおずと手をあげた。

「前々から『言おう』、『言おう』って思ってたんだけど…。

ボクたち、別に万年開花が近くにないと個性を使えないってわけじゃないよ？

寧ろ、あかりさんよりもレパートリーは豊富だと思う」

……はい？

目が点になる僕たちに、ヒメちゃん。

いや、なんで君まで驚いてんの？

「なんでヒメちゃんまで驚いてんですか？」

「ずば抜けたアホだから自覚してなかっただけだよ」

「酷い!!」

東北さんのツッコミに、ミコトちゃんが呆れ気味に答える。

自分のできることを自覚してないって、確かに重症だ。

…まぁ、彼女らの場合、出来ることが多すぎて自覚できないと言う方が正しいのかもしれない。

「簡単にだけど、バリアを張るよ。
せんせーは、あとで個性届けに出しといて。
『突然変異的なアレで出た』ってデタラメ情報の登録、よろしく」
「……わかりました」

ミコトちゃんはヒメちゃんの手を握ると、目を瞑る。
瞬間。何処からか梅の花弁が飛んできて、防壁を作った。

「よしっ。出来るだけ頑丈に作ったから、後は籠城するだけだよ。
外の様子は、衛星カメラで見てほしいな。
…流石に、あかりさん並みのバカみたいな火力だと吹っ飛ぶけど」
「相手が人工個性を持ち出さないことを祈るばかりですね…」

前回のことで理解しているが、人工個性は既存の個性の数倍はデタラメだ。
あかりさん並みの火力も、慣れれば普通に出せることだろう。
後は祈るだけ…か。

「ちゃっちゃとブッ飛ばして、戻ってきてくれることを祈りましょうか」

♦?♦?♦?♦?

「…なんで」

私には分からなかった。
目の前に繰り広げられる、おぞましい光景のこと…ではなく。
理想を壊されても、全く動じなかった彼らの姿が、理解できなかった。

ーーーーーープロヒーローもいますね。…なーんでこんなことに加担してんだか…。

ボサボサの髪にそばかすがある…デクくんだったっけか。
彼はヒーローに憧れていると言った。
確かに、彼の持ち物の殆どはオールマイト関連のグッズだった。
記憶が正しければ、くじで当てるようなレアアイテムも多くあった。
他のヒーローのことも、聞けばスラスラと教えてくれた。

私の好きな１３号の活動歴、その成り立ちから信条まで全て。
だというのに。プロヒーローという夢を壊された彼は、これっぽっちも動じてなかった。

「…なんで……」

爆豪くんも同じだった。
彼は「オールマイトを超える。これだけは曲げねェ」と豪語する人だった。
ただ夢を語るだけじゃない。
その道の険しさを、その道を歩む上での苦しみさえも受け止めた、強い瞳だった。
彼もまた、理想を壊された子だったはずなのに。

ーーーーーー職業である以上は、こーゆーヤツは出てくる。社会の膿ってヤツだ。

彼は、全く失望を見せなかった。
最初から期待していなかったように。

「……なんで」

轟くんという子も、同じだった。

二人のような情熱は見せないけれど、彼は「優しいヒーローになる」という目標を持っていた。

どれだけ優しさを持っていても、汚れたヒーローが居るって、現実を突きつけられたはずなのに。

ーーーーーー何が不満なんだか。こういうことをするメリットなんざねーはずだろ。

それでも、膝をつかなかった。

その目は、どこまでも、目の前だけを映していた。

「……ウチと、どこが違うんやろ…」

ヒーローを目指してるのは同じなのに。

どうしてなのだろうか。

彼らがこの光景に挫けないのは。
どうしようもなく残酷でいて、容赦のない現実を受け止めているのは。
そんな、どうしようもない現実を変えようと争うのは。

「……ついなちゃん。ウチは……」

私には分からなかった。
彼らが眩しく見える理由も、自分がここから動けない理由も。
ついなちゃんを助けたい。
その気持ちは同じはずなのに。
どうして、私には力が無いのだろう。

私は、これ以上この景色を、見ていられなかった。

轟「人ってすげェな」

「うわっ…。マジで十万居るよ」

かっちゃんたちが体をほぐす傍、僕は衛星で撮った映像を見て辟易した。
細かい数までいちいち覚えちゃ居ないが、たしかに十万はくだらない。
これだけの人間が敵…。
軽犯罪どころか、殺人等の重犯罪も平気で犯すようなのが、だ。
よくもまあ、バレずにここまで勢力を伸ばしたものだ。
日本政府のザルさを嘆けばいいのか、それとも死後も尚、影響を与えるデストロのカリスマ性に感心すればいいのか…。

「…中には子供もいるな。俺たちとそう差がねェヤツ、ヒメとミコトと同じくれェの歳のヤツ、幼稚園に通ってるくれェのヤツ…。
漏れなく全員、目がヤベェ。
ウォーミングアップで出してる個性からして、危険な個性が多いな」

轟くんが言うように、映像には確かに子供も映っていた。
しかも、揃いも揃って目が血走ってる。
…洗脳教育に汚染された子供かぁ。
相手するには気が引けるが、相手にとってはお構いなしだろう。
治療する暇も与えてくれないだろうし、無力化に気を使う。
気絶させる音波やらは開発中だし。

「情に訴えかける作戦…ってトコかァ？
最前列、ガキかジジババしかいねェ。
個性縛っても、かなりキツイぞ」

かっちゃんは胸糞悪ィ、と付け足すと、調子を確認するように、指先を小さく爆破させた。
超圧縮した爆破を、指先から放つ技。
かっちゃんは飛んだ爆炎を見上げ、満足そうに笑みを浮かべる。
煙が立ち昇る指をガンマン風にふっ、と息を吹きかけた。

「下手すりゃ、これだけでお陀仏だぞ？」
「出来る様になったからってカッコつけんな気持ち悪ィ」
「ンだと半分野郎ォ!!」
「怒鳴らないでよ。バレたらどうすんの？」

とても戦闘前とは思えない緊張感だ。
…まぁ、相手は「生まれ持っての個性」に拘った人間たち。
人工個性を持ち出してくる危険性もないから、無理もないか。
そんなことを思っていると、パソコンの画面に通知が映る。
その通知の内容を確認すると共に、僕は笑みを浮かべた。

「二人とも出る準備しといて」
「子供と老人の対策は？」
「大丈夫。ジョセフ・ジョースターも言ってたでしょ？
『戦いは始まる前から既に結果が決まってる』…ってね」

僕は言うと、通知情報欄に表示された『ＯＫ！』にカーソルを合わせ、クリックする。

瞬間。子供と老人だけが一瞬にして消え失せた。

「よしっ。残りは容赦しなくてもオッケーな人たちばかりだ」

「「待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て何した今ァアッッッ!?!?」」

素っ頓狂な声をあげ、パソコンを仕舞う僕にツッコミを入れる二人。

説明もなく人が急に消えたら、そんな反応にもなるか。

僕は仕舞いかけたパソコンを開き、ある映像を映し出す。

そこには、殺風景な部屋に閉じ込められ、すぅすぅと寝息を立てる子供と老人の姿があった。

「座標指定型転移システム使って、特製のメイデンに閉じ込めただけだよ。

無害どころか健康的な成分がたっぷり詰まった催眠ガスのおまけつき。

ガス作るのに時間かかるし、そんなに広くないし、まだ数も作ってないから、子供と老人だけでぎゅうぎゅう詰めだけど」

言うと、かっちゃんたちは呆れた顔を見せた。
ハッキリ言うと、こう言う戦闘に於いては、催眠ガスをばら撒いて拘束しようと思っていたのだ。
だが、この街を覆い尽くす催眠ガスを作るのに、軽く二年はかかる。
僕の腕の問題ではなく、ガスが出来るまでの期間が長すぎるのだ。
メイデンを作るのにはコストがかかるし、そもそも置いておく場所がない。
今は『アレ』の中にあるからまだいいが、苦労して作った『アレ』が、監獄だらけになるのは避けたい。

「…なんか、もう慣れたわ」
「人ってすげェな。理解不能な現実も二ヶ月で慣れるんだな」

すごく失礼なことを言われた。
かっちゃんたちの個性も、僕からしたら十分デタラメなんだけど…。
そんなことを思いながら、僕はフォーマルハウトを身に纏う。

「そういう感想は後で言ってよ。
さっさと何処やるか決めよう」

僕が問うと共に、二人がスーツを纏う。
ウォーミングアップは終わったようだ。
相手もパニックになってるし、ちょうど良いタイミングだ。

「えーっと…、こっちから左は俺な。
データで見た『外典』ってのが見えた」

轟くんは言うと、僕たちから見て左側へと向かう。
飛び上がった勢いで、アスファルトが捲れて民家に激突した。
犯罪都市って分かったから容赦ないなぁ…。
…そんなとこの民家だからか、崩れた壁の奥に危険物がかなり見えた。
…本当、どうなってんだこの国。
目に見える被害だけ調べてたから、こう言う隠蔽された犯罪は頭から抜け落ちてた。

「右っ側。妙に数が多い。
『キュリオス』と『トランペット』が指揮してンだろォな」

かっちゃんは言うと、掌を爆破させ、ロケットのように飛び上がった。
遠慮する必要がないって分かった途端、だいぶ容赦なかったな。
アスファルトがハゲたぞ。

「じゃ、僕は…『スケプティック』と『リ・デストロ』の居るだろう真ん中…って、僕の方も人数多いじゃん…」

うまく加減できるかなぁ、と呟きながら、僕は駆け出した。

このとき、僕らは集団行動をしていた方が良かったのかも知れない。
…いや。多分、この時点ではもう遅かったんだろう。
僕たちはとっくの昔に、『絶対悪』に目をつけられていたのだから。

♦？♦？♦？♦？

「…結構いますね」
「ついなちゃんの個性って、そんな強力なモンなんですかね？」

僕は映像に広がる光景に、口元をひくつかせた。
警察とプロヒーローが、一般市民とプロヒーローと殴り合う光景。
ミコトちゃんが作り出したバリアが無ければ、旅館はあっという間に瓦礫と山と化してただろう。
伊織さんはというと、僕たちが事情を説明して、旅館に泊まっている人たちを集めている途中だ。
ついなちゃんと麗日さんは、僕らの膝下が安全だろうということで、僕たちの部屋に居る。
二人とも部屋の隅で蹲ってる状態だ。

「クロスカウンター決まった！距離をとってぇ…、な、なんとっ!!
丸々したファットガムのドロップキックが、異能解放軍のプロヒーロー、えーっと、名前なんだっけ?!とにかくなんか変なやつのの顎に決まったアア!!!」

「きりちゃん、楽しんでない…？」
「ヤケクソです。ウナちゃんはＢＧＭお願いしまぁだぁっ!?」

小学生一人が汚い現実に耐えきれず、ヤケを起こしてる。
何処からか取り出したカラオケセットを音街さんに差し出すクソガキに、音街さんのツッコミが炸裂した。

「そこのヤケ起こしてる小学生はさておき…麗日さん」
「な、なんですか…？」

窓から離れ、彼女に声をかける。
麗日さんの体は、小さく震えている。
こういう争い事に慣れていないのだろう。
普通ならば、安心させるような言葉をかけるのが大人だ。

だが。僕は麗日さんの顔を覗き込んで、こう告げた。

「映像を見なさい」
「……っ、や、嫌や…っ」

僕の言葉の意味を理解し、拒絶を顔に浮かべる麗日さん。
確かに、旅館の前で繰り広げられる光景は、子供にとっては酷な光景だろう。
しかし、ヒーローを目指すのであれば、知らなければいけない現実であることも事実だ。
後で現実を知って後悔させるくらいなら、先に現実を見せて恐れさせる道を選ぶ。
「ヒーローがどういう仕事で、どういう人間を相手にするか。
ぼんやりとではなく、きちんと知った上で目指すかどうか決めなさい」

♦?♦?♦?♦?

「…ぶっ飛んだお客様案内しちゃったなぁ」

お客様を全員、頑丈にできた一室へと移動できた。

一室と言ってもキッチンなのだが、ほぼ木造の旅館の中で頑丈な場所といえば、あそこくらいなものだ。
…こんなことなら、リフォームを頼んでおくんだった。

「…ヒーロー」

あの子たちは、プロヒーローと呼ばれる人間たちとは違った。
どこまでも現実を見ていて、どこまでも理想を描いていた。
…僕は、現実を見過ぎて、この職業に落ち着いた。
小さい頃は、プロヒーローに憧れた。
それはそれはもう、テンプレを踏みに踏み抜いた憧れ方だった。
誰かの人生のコピペみたいな憧れ方だった。
そんな憧れなど、無個性という現実に木っ端微塵に打ち砕かれた。
後は絵に描いたような転落…はしてないか。
とにかくまぁ、なんの捻りもないような、普通の人生だった。
祖母の切り盛りしていた旅館の跡を継ぐという形で、職を手に入れた僕は、今の今まで目の前の現実ばかり見てきた。

ついなちゃんと出会ったのは、本当にたまたまだった。
彼女の境遇を知るほどに、義憤に駆られた。
助けようと思ったのも、多分、あの日の憧れが薄れながらも僕の中に燻っていたから。

ーーーーーー証拠がない。これが現実です。

だけど。憧れは、再び現実にかき消された。
歪められど、それは現実なんだ。
そのことを自覚した僕は、もう抗うことはしなかった。

ーーーーーーウチ、ヒーローになりたい！

お茶子ちゃんの夢のことも聞いた。
彼女の個性…『無重力』は、ヒーローをやる上では強力なものだろう。
だけど、この子は現実に打ち勝てるんだろうか。

ーーーーーー…ウチじゃ、助けられんのやな…。

知っての通り、彼女は負けた。
現実という化け物は、僕たちが歯向かうには大きすぎて。
仕方がない。そう、下を向いて生きてきた。

今日。現実がひっくり返るまでは。

ーーーーーーというわけで！異能解放軍の悪事はさらしたので、ブッ飛ばして来まーす！

ひっくり返した本人は、旅館から妙なバイクで飛び立って行った。
まるで、彗星のように煌めきながら。
聞けば、僕と同じ無個性だった。
あの手は個性でもなんでもなく、科学で生み出したものなんだとか。
正直、嫉妬した。
彼のそれが、誰かの人生を何倍にも濃縮した苦労で成り立っているということは、小さな女の子が語ってくれた。

それだけ現実を見ながらも、本気で理想を目指せる人間に、僕は嫉妬していた。

「……あったあった」

そんな下らない考え事をしながら、僕は旅館、土地の権利書等を取り出す。

印鑑と通帳は既にリュックの中に入れた。

「旅館に被害が出る前に収まってほしいな」

本気で望んだ職場…というわけではなかったが、愛着がないわけではない。

むしろ、こういう「意外な出会い」を、僕は楽しんでいる。

…今回のは、ちょっと意外過ぎたけれど。

「……お茶子ちゃんに、影響を与えてくれるといい…かな？」

嫉妬はしている。

だけど、それ以上に。

現実も理想も見据えた彼らが、理想を見て、現実に打ちのめされたお茶子ちゃんを奮い立たせて欲しかった。
僕のように、無個性という恵まれない子供ではないのだから。
たった一度、現実に負けたことで挫けないで欲しかった。

「頑張れ、ヒーロー…ってね」

僕は、輝く星を見上げるように呟いた。

現実はいつだって理想を砕く

『次ィ!!その腐った根性叩き直すからさっさとブッ殺されやがりなさい!!』

俺の拳が、『トランペット』の個性で強化された異能解放軍の連中の意識を刈り取る。
あのアホみてェに強い女にボコボコにされた甲斐があった。
デクとは別ベクトルでやべェ無個性。

ーーーーーー個性使ってもいいよー。ボコボコにするのに変わりはないからー。

間延びした喋り方からは、とても予想のつかない容赦ない拳。
吐いたし、あばらも何回かやった。
ナノマシンが無かったら、普通に5、6回は病院送りにされてる。
そのおかげか、スーツというサポート付きで相手を捌けていた。

「……っ、相手の動きを読む異能か…!?」

「異能が使えない…!?まさか、イレイザー・ヘッドと同じ異能をも…!?」

どれも不正解だ。

そう思いながら、何事か喚く奴らの顎を、軽く指で弾く。

スーツの機能と合わされば、これでも十分なくらいだ。

個性遮断プログラムも順調に作動しており、トランペットに身体能力を強化されただけの相手であれば、簡単に対処できた。

…トランペット自身はどっかに隠れてるのか、個性遮断プログラムの範囲外だったが。

「キュリオス様の異能なら…!!」

「つっこめ！我らが犠牲になることで、ヤツを倒すのだ！」

『やめろや』

キュリオスとやらの個性で、人間地雷と化した人間にかかった個性を解除し、気絶させる。

『個性遮断プログラム』と双璧を成す…らしい。詳しいことは知らん…『個性解除プログ

ラム』のテストも兼ねていると聞いた。
相手は普通に自爆特攻かます命知らずだ。
自爆するタイミングは、キュリオス次第。
この機能がなければ、確実に死人が出来てただろう。
…これが、俺の超えなければならない人間が作ったもの。
俺が使ってる格闘術も、超えなければならない人間から教わったもの。

「ひるむなァ!!この数の差で負けるワケがないんだ!!
その身さえも犠牲にして、この腐った世界を変えろォ!!」
『腐ってんのはそっちです』

超えなければならない。
なら、超えるだけだ。
同じ分野ではない、ヒーローという分野でもない。
俺だけにしか出来ない『何か』を、極める。
襲いかかる個性を払い除け、キュリオスの個性がかかってるのか、がむしゃらに突っ込んでくるヤツらの腹に蹴りを入れる。

俺のカバー範囲が甘いのか、一部の人間が掴みかかってくるが、その手を掴んで武器として振るう。

「ぐぅ…!?」

「かかれ、かかれェ！必ず綻びがあるぞ！

我々はこんなところでつまづく存在ではないのだ!!」

『…つまづき方は、自分じゃ選べねェよ』

…キャラ付け忘れた。

かかってくるヤツを軽く弾き飛ばし、異形系のヤツの頭を引っ掴んでアスファルトに叩きつける。

常時発動型の異形系には、少し動きが鈍くなるくらいしか効果がないようだ。

敵の無力化を続けてるうちに、どうやらトランペットとやらの場所を突き止められたらしい。

変なマスクをしたスーツ男が、俺を一瞥すると共に喚き立てた。

「なぜ我らの理想がわからない!!

貴様らも力を好きに行使してる存在!!我々となんら変わりない存在!!
それが、なぜ我らの邪魔を…」
『ガキが泣いてた』

力を好き勝手に使ってる。
それに対しての反論はない。
俺もデクも轟も、許可なくヒーローとして活動している。
日本の法で言えば、俺たちも同じ犯罪者…同じ穴の狢だ。
それでも。泣いてるガキ一人を突き飛ばすようなヒーローにだけは、なりたくねェ。
助けたガキに、音街に、東北に誇れるようなトップヒーローになる。
そのためにも、この場に来ないという選択肢はなかった。

「……たった、それだけのことか?」
『だから、ブッ飛ばしに来た』

口ぱくぱくしてらァ。
金魚みたいだな、と思いながら、拳を握る。

相手は、直接的な戦闘を好まない。
異能解放軍の幹部たちは、リ・デストロ以外は他者が、果ては物体があって初めて成り立つ個性ばかり。
本人はそこまで強くない。

「っ、巫山戯るなァア!!!それだけのことで、我らの長年の計画を…」
『テメェらとお話するためじゃなくて、ふんじばるために来たんだ。
覚悟決めて歯ァ食いしばれや』

瞬間。トランペットのマスクを突き抜け、俺の拳がヤツの顔面をとらえた。

『もう二度と人前に出れねェな。
そのひっっでェ顔面じゃ』

鼻は折れ、歯が数本抜けたくらいだ。
この時代で言えば、比較的軽傷だろう。
刑務所病院で治してもらうといい。

「……っ、怯むな、怯むなァ!!
トランペット様は、身をもって我らに教えてくれたのだ!!奴の傲慢さを!!
ならば、我らはそれを罰しなければ…」
『自覚してる。あと、そこから降りろ』

自分らが上っていう考え方から降りろ。
前の自分を見てるようで、痛々しい。
屋根に乗ったヤツへと距離を詰め、胸ぐらを掴んで投げ飛ばす。
このままだと落下死間違いなしだろう。
なので、地面に体が叩きつけられる直前で受け止める。
『ようこそ。傲慢な人間の世界へ』
「は、ぐぅっ!?」

きょとんとしたところを、一撃。
全く。どいつもこいつも、昔の俺みたいなやつばかりだ。

轟あたりが「お前そっくりなやつばっかだったわ」と馬鹿にしてきそうだ。

「キュリオス様を守れェーー!!」
「トランペット様は諦めろ!!幹部が数人揃ってさえいればこの状況は立て直せる!!」
『大声で言うなよ』

アホ丸出しだ。
やはり、ミーハーとアホの集まりとクソ教師が馬鹿にするだけある。
中には個性を鍛えるばかりで、学校にすら通ってないヤツもいると聞いた。
そんなに集まってちゃ、「ここに居ますよ」って目印つけるようなものだ。
実際、スキャンでそっちにいるって出てる。
アホにアホ重ねてどうする。

『キュリオス様とやらはあっちか』

…ＲＰＧでもアクションでも、キレてコントローラー投げてる数だ。
十万の一部と思っても、やはり多い。

『ちゃっちゃとブッ飛ばして、大阪観光だ』

俺は小さく呟くと共に、地面を蹴った。

♦？♦？♦？♦？

『み…ＳＡＶＥＲのヤツ、こんなとこまで飛ばしてくんなよ…』

びっくりした。

スケプティックとやらの個性で作った人形…本当はただの電波受信機…が、こんなところまで吹っ飛んできた。

心臓飛び出るかと思った。

思わず「ひゃっほう!?」って悲鳴出ちゃったぞ。

「す、スケプティック様の人形が…」

「怯むな！こちらには外典様が居る！

幼少期から鍛えた異能さえあれば…」

『学習したらどうでござるか?』

…なんで俺、侍口調にしろって言われたんだろうか。

いくら家が和風で、好みが和風料理だからって、もう少し何かあったろ。

確かに、一時期は夏兄がこっそり見せてくれた『るろうに剣心』に憧れたし、一通りマネしたが。

口調の違和感に耐えながら、襲いかかる敵の頭を揺らし、気絶させる。

ーーーーーー君はいろいろ甘いねぇ。肉弾戦でいえば、ダントツで弱いよぉ。個性が強い分、油断が多いんだねぇ。

……トラウマが甦った。

あの人も連れてこれば良かった気がするが、「今日は近所の子とスイパラいくから〜」と断られた。

日本の運命とスイパラを天秤にかけてスイパラが勝つってなんだ。

先生の周りは、あいも変わらず魔境だ。

「リ・デストロの邪魔をするな!!」

俺たちと、ちょっとしか変わらないくらいの歳の男だろうか。
その声が響くと共に、地面が隆起する。
…なるほど。水管に流れる水を凍らせて、操ったのか。
馬鹿正直にデータを残してくれたお陰で、相手が何をしたのかすぐにわかる。
声の発生源を見ると、氷でできた床に立ち、息を荒げる男が居た。

「もう少しだった…。もう少しで、世界は正しい形に変わったはずだったんだ!!
それをお前らのエゴで邪魔するなァ!!!」
『街一つを簡単にどうこうできる時点で、個性が人の手に余って危険だってことに、どうして気づかないんですかね?』

未来では危険な芽を摘むために、個性を人から切り離すのが普通だという。
実際に、個性で文明が終わりかけたこともあるらしい。
バカでもちょっと考えれば分かることに、どうして気づかないんだ。

「異能は人の権利だ!!人に扱いきれない!?違う!!権利に選ばれなかっただけのことだろう!!」

『学校にも行ってねェアホ丸出しのセリフ…でござるな』

あっぶね。素が出かけた。

緑谷はほぼ毎日、こんな慣れないキャラ作りやってるのか。

俺の罵倒にキレたのか、肌寒いくらいの時期にコートのフードを被ったアホ…もとい外典がふるふると震える。

「ブッッ……殺オすッッッ!!」

『図星突かれてキレるあたりがアホなんだ…でござる』

隆起する氷が、龍の形を取って襲いかかる。

東北の持ってたレトロゲーム…ロクゼロのレヴィアタンみたいな攻撃だ。

あっちは水中だったが。

『捻りなさすぎだろ』

どっちにしろ、捻りはない。

操作の難しさはなんとなく分かるが、ただ突っ込ませるならただの氷塊で十分だ。

この程度なら、これで破壊できるだろう。

『ヘルズスキル…。ヘルズフィスト!!』

ただ殴るだけ。

ただし、スーツを着た全力だ。

隕石をも破壊する衝撃に耐えきれず、隆起した氷ごと龍が吹き飛ばされる。

角度を調節したため、雲がちょっと吹っ飛んだだけの被害で済んだ。

「「……は?」」

『良かった…でござるな。まだ加減がうまい拙者が相手で』

…緑谷が鎌倉山を叩き割った理由が、なんとなく分かった気がする。

確かに、コレは迂闊に本気になれない。
へたり込む外典に近づき、その胸ぐらを掴む。
力を追い求めた末路…ってヤツだろうか。
外典は果敢にも、再び氷の散弾銃を俺に浴びせた。
が。緑谷の作ったスーツがそんなことで傷付くはずもなく。
俺は顔を寄せ、外典を睨んだ。

「……、リ・デストロは言った!!この世界は間違ってる!!
だからこそ、力を持つ我々がこの世界をあるべき形に…」
『何様のつもりだお前』

前の爆豪といい、周りを見下して、自分が正しいっていう言い方が腹が立つ。
俺が正義とは言わないし、俺がやってることは犯罪だってこともわかってるが、言わせて欲しい。

『お前の正しさはお前のものだ。
俺はお前の正しさなんざ知らんし、世界はお前らの正しさなんざ見向きもしねェ。

同じように、俺の正しさも他のやつにとっちゃ「知ったこっちゃない」で片付けられる。
俺の正しさは、世界にとっちゃ「ヴィジランテ」っていう「間違い」って見られてる。
それは正しいことだ。本人である俺も、それは理解してる。
お前らの正しさも、世間じゃ「敵」って間違いって見られてるだろ』

襲いくる人間たちを捌きながら、懇切丁寧に説明する。
現実が見えてない…というよりは、『自分たちが歪める現実』だけを見つめている。
ならば、無理やり顔を掴んで、こっちに向かせるだけだ。
先生が、毎日のようにやってるみたいに。

『人にはその人が、世界には世界が決めた「正しさ」があンだよ』

コレで反省したかは分からんが、ちょっとは現実の方を向いたろ。
顎を弾いて、同じように気絶させる。
…淡麗な顔してる。この顔なら、タレントでもやっとけばよかったのに。

「げ、外典様がやられた!!」
「ヤツの暴論に怯むな!!我らの正しさを証明するのだ!!」

確かに暴論だろう。
でも、俺にとってはこの世界の真理だ。

『お前ら、弱肉強食大好きだろ？
喜べよ。潰され消え行くのはお前らだ…でござる』
「「さっきからなんだその取ってつけたみたいな喋り方は!!」」

……うん。俺もそう思うわ。
そんなことを思いながら、俺は襲いくる敵の顎を弾いた。

♦？♦？♦？♦？

『我の拳が悪を砕く…。って、久々に言ったなコレ』

襲いくる人形と人を蹴散らし、奥へ、奥へと進む。
さっき人形一体を轟くんの方に吹っ飛ばしちゃったけど、問題ないだろう。
…にしても、やっぱり多い。
倒した数を数えても、軽く3万はいた。
人形1万、人間2万と言った数だ。
兵力だけで見れば、どの敵集団よりも随一だろう。
流石、何十年も隠れてきただけはある。

「来たぞぉ!!ＳＡＶＥＲだぁ!!」
「近づけば異能が使えなくなるぞ!!
遠距離攻撃で対応しろぉ!!」

石飛礫の如く、ビームやらなんやら…いちいち描写するとキリがない…が飛び交う。
…この武器、数回見たことあるぞ。
アホな敵…多分解放思想だったんだろう…が何人か使ってた。
その時は急いでたから全然気にしてなかったけど、コレ、デトラネット社製か。
個性に沿った品物を作る会社として有名だが、こんなことしてたとは。

日本のネットを掌握してる『Ｆｅｅｌ　Ｇｏｏｄ　Ｉｎｔ』の取締役も居たし、本当に掌握される直前だったんだな、この国。

『そんな攻撃では、防御力最低値のフォーマルハウトも傷つけられない』

フォーマルハウトは攻撃と速度に重きを置いた装備だ。
ハッキリ言うと、全装備中最低の防御力。
攻撃と素早さに極振りしたってヤツだ。
防御力と両立できなかったのかと問われれば、無理と答える。
オールマイティな機体コンセプトのシリウスと被ってしまう。

『レーザーモード』

両手と両足に付いた『攻撃強化用ビット』を取り外し、宙に浮かせる。
火力は抑えてる。直撃しても、ちょっとの火傷とショックで気絶するくらいだ。
脳に命令を与えるタイプの音波等は、今回は使わない。
アレは僕がきちんとアフターケアをするからやってるのであって、今回みたいな数い

る相手にアフターケアができるとは限らない。
そんなことを考えながら、発射口を向ける僕に、周囲がざわめく。

「な、なんだ…？」
「防御班！早く防御しろ!!」
「まかせろ!!」
「我ら異能解放軍の防護壁は、計算上ではあのオールマイトの一撃も耐えるようになっている!!フハハハハ!!手も足も」

ちゅどん。
文字通り、防壁ごと吹っ飛んだ。
オールマイトの一撃も耐えるって聞いて、ちょっと出力を上げた。
オールマイトを超える火力って、世界を探せば割とあるんだよなぁ。
別ベクトルでの破壊力ではあるが。

『説明してる暇があるなら、とっとと誰かを逃せよ』

なんにせよ、賢い集団ではなかったわけだ。
バレたならバレにくい敵性国家へと高飛びすれば良いだけなのに、なんで普通に拠点にたむろしてるんだ。
そんなことを思いながら、歩みを進める。
集団で襲いくる人形をつかんでは投げ、つかんでは投げ…。
…人間は全員気絶したな。スケプティックの人形しか襲ってこなくなった。
だいぶ焦ってるのか、操作が甘い。

『電波の送信元は…あっちか』

独自の回線で通信してるんだろうが、電波で送ってるんなら問題ない。
ちょっと憧れてたことをやってみよう。
コナンくんがやってた、サッカーボールシュート。
一回やってみたかったんだよね。
障害物と空気抵抗を計算して、意識を持ってくくらいの強さで蹴る。

『蹴るものは…これで良いか』

丁度、誂え向きにバレーボールがあった。
授業中に蹴ったら怒号が飛んでくるヤツだ。
今は遠慮なく蹴らせてもらうが。

『サッカーは未経験なんだよなぁ…。
まぁいいや。普通に蹴ろう』

僕は言うと、ボールに蹴りを入れた。

♦？♦？♦？♦？

「あり得ないあり得ないあり得ないあり得ないあり得ないあり得ない…。
あり得てたまるか、こんな現実!!!」

スケプティック…本名『近属友保』は、血走った目で液晶画面に映る現実を睨んでいた。

任された同胞と人形が、一人残らず返り討ちにされた光景。
たった一人の人間によって、何十年にも渡り、研いできた牙を引っこ抜かれた。
到底信じられる結果ではない。

「失敗じゃない、失敗じゃない…！まだ巻き戻せるはず、まだ巻き返せるはず…!!」

必死になって新たな人形を動員させる。
もうストックはほぼ無くなるが、どうでもいいことだ。
今はこの状況を巻き返さなければ。
完璧主義たる彼にとって、今回の件は大きな『失敗』と認めるのは屈辱だった。
が。そんなこと知ったこっちゃないと言わんばかりに、現実が迫ってくる。

「私は一度しか失敗したことがないんだ…。
これまでも、そしてこれからも!!」

歪めた現実ばかり見てきたツケが、風切音と共にやってくる。

もし、この場に他の解放軍が意識を保てていれば、結果は違ったのかもしれない。
もしくは変わらなかったのかもしれない。
ただ一つ分かることといえば。

「世界は、解放軍が変えるぶらっぱぁっっっ!?!?!」

現実という名のバレーボールが、彼の理想を描く頭に激突したということだけだ。

爆豪勝己、絶対悪と対峙する

「……っ、どうして、私たちの理想が…たった三人に……!?」

キュリオス…本名『気月置歳』は、ひどく焦っていた。
理由は他でもない。連絡を取り合っていた幹部、果ては部下たちが次々と倒れていったからだ。
思いつく限りで残っている人間といえば、目の前の部下たちとリ・デストロだけ。
十万いた軍勢はすでに、千人規模の集まりに減っていた。
そして、その現実は今もなお、こちらへと向かってきている。

「やっほー」

その焦りを自ら解消すべく、装備を整えたその時だった。
彼女の目の前に、見たくもない仮面が姿を現したのは。

「フィクサー…？」

そこに居たのは、マスコミとしても、解放軍としても、自らが最も恐れた存在だった。
以前、フィクサーの思想を持ち上げた特集を組んだ出版社があった。
だが。その出版社はフィクサーの逆鱗に触れてしまった。
静かに怒り狂ったフィクサーは、常人であれば思いつかないような、凄惨な公開処刑を全国のお茶の間に放送した。
三日間に渡るソレの終わりに、彼は告げた。

ーーーーーー僕は絶対悪だ。誰に対しても悪である存在。肯定される謂われなんて、どこにも無いんだよ。

スケールも価値観もイカれてる。
無個性でありながら、国を簡単に崩壊へと導くスキルを有した敵。
解放軍としても、マスコミとしても。
目の前で笑顔を浮かべる男以上の恐怖を、キュリオスは知らなかった。

「あーそっか。生きてるの知らないのか。
そりゃそうだね。あの～、り、り…。リーマンショック？いや、違った。オオトロっぽい名前なのは覚えてるんだけど…」
「リ・デストロのことかしら…？」
「ああ、そうそう！いやぁ、どーでもいいことはすぐ忘れちゃうんだよね！
ソイツには予め挨拶したんだけどさ！」

フィクサーがカラカラと笑う。
キュリオスは彼に対する警戒心を、最大限にまで引き上げた。
が。それは無意味だった。

「ソイツを恨めよ。
さっさと答えを出さなかったアイツが悪いんだからさ」

どすっ。
目にも留まらぬ速さと、優しい感触。
キュリオスが視線を上に向けると、自らの脳に注射器が突き刺さってるのがわかっ

た。
悲鳴をあげようとして、気づく。
全く痛くない。
それどころか、頭への異物感すら感じない。
「頭がイカレるのは避けたいからさ。
脳の隙間に注射器を刺したよ。
あと九万くらいかな？身体中にぶっ刺して注入するから」
瞬間。
キュリオスの体は、無数の注射器で埋め尽くされた。
♦？♦？♦？♦？
『あ、終わったー？』
『おーう。…頼むから、ござる口調に変化するプログラムとか作ってくれ。
敵にも喋り方を馬鹿にされた』

スケプティックをバレーボールで気絶させ、同じ要領でリ・デストロも倒した後。
僕たちは大体の解放軍…その数七万を、縄でふんじばっていた。
かっちゃんの方はまだ喧騒が包んでいるあたり、数が多いのだろう。
なんにせよ、後数分で決着は着くか。

『その細いハゲ、デトラネットの社長か？
んで、根暗そうなオカッパはＦＧＩの取締じゃなかったっけか？』
『そっち方面に興味ないと思ってた。意外と詳しいね』
『まぁ、ちょっとはな。知ったのは最近だ』

細いハゲ…って言うには、ちょっと早いんじゃないだろうか。
リ・デストロの薄れ始めた頭を見ながら、そんなことを思っていると。
ふと、轟が声を上げた。

『…アメリカのルーカス大統領もハゲだよな。コレと違って、カッコいいが』
『支持率絶大だもんね。個性がちょーっと…その、アレなだけで』

この解放思想は、アメリカにとってもまずかった気がする。
ルーカス大統領の『自分の頭部の毛根の残りがわかる』という、思わず顔をしかめてしまいそうな個性でどうやって勝ち上がれって言うんだ。
あの人の奇跡的な手腕で犯罪率が３５％から３０％に減ったんだぞ。
…つくづく、オールマイトの存在って大きかったんだなと思う。

『ってか、ボイチェン切らねェか？
もうこっちは終わったんだし』
『それもそっか』

いつまでも同じ声で話してちゃ、訳わかんなくなるか。
そう思い、喉元のスイッチをオフにしようとしたその時だった。

街が吹っ飛んだのは。

♦？♦？♦？♦？

『…なんだアレ。サボテンか？』

大体のヤツを倒し、キュリオスを探している途中。
ふと、街の一角に異様なオブジェがあることに気づき、足を止める。
街中にはあまりにも不似合いなソレ。
異形系の個性でも、なかなか無いような風貌に目を引かれた。
これ以上、特に探す場所もないため、罠だろうなと思いスキャンする。

『……は？』

俺の視界に出された結果は、予想外のものだった。
マスクに搭載されたカメラ。
写る物体をスキャンし、調べた結果を映し出す機能を持っている。
そのことは分かっている。
だが、唯一わからないのは…。

「あ…、ぺっ……？」

そこにあるサボテンが、『キュリオス本人である』という結果だけ。

『……いや、どういう状況だ？』

突き刺さったのは注射器だろうか。

身体中を埋め尽くすソレは、ご丁寧に針の長さもバラバラで、全身にその中身を注ぎ込んでいる。

あまりに理解不能な状況に、一周回って頭が冷静になった。

冷静になると同時に、恐怖が背中を撫でる。

殺されてるわけではない。まだキュリオスは生きている。

『…誰がやったんだ、コレ』

どんな個性を使えば、こんな神業を為せる？

それとも、デクたちの同類の仕業だろうか。

そんなことを思っていると、注射器が一斉に引き抜かれた。

「初めまして」

瞬間。

この世の悪を全て煮詰めたような、余りにも禍々しい声が俺の鼓膜を撫でた。

慌てて人差し指を声の方向へ向け、爆破する。

超圧縮爆破。軽く人が死ぬ威力だが、反射的に放ってしまっていた。

それ程までに、そこに居るソイツは、邪悪としか言えなかった。

「…っとと。いいねぇ、凄くいい!!

判断力が優れてるよ、君!記憶の中の君よりもずっと強くてずっと凄い!!」

『…イカレてんのか、テメェ…』

興奮気味に俺を褒め称えるソイツは、これでもかと拍手を送る。

記憶の中の俺?こんなヤツ、一度も会ったことがないと言うのに?

特徴的な仮面、露出した口元。

…その顔に見覚えがあることに気づいたのは、数秒見つめてからだった。
現在でも、ネット上に死亡の瞬間の動画を上げられている敵。

『…いや、死んだろ…？そう言う個性か？』
「残念。マジの無個性だよ。
僕は死なないんだよ。絶対悪だから」

フィクサー。個性不明の世界的な敵として知られている存在。
随分前に死んだはずの存在が今、俺の前に立っていた。

『テメェ、キュリオスに何した？』
「別に？一万くらいの『人工個性』を注入しただけだよ。
個性に耐性のないヤツならすぐ食われるけど、コレなら適合するかなーって」

子供が自由研究するような感覚で、おぞましいことを口にするフィクサー。
…待て。人工個性だと…？

『テメェが、人工個性関連の黒幕か？』
「当たり。作ってんのは別人…って言うのかな？まぁ、僕ではないんだけど…って、やばっ」

その言葉を聞いた瞬間。
キュリオスの体が破裂し、俺ごと街を吹き飛ばした。

♦？♦？♦？♦？

「…ブローカーがわりに来たけど、この状況になってだいぶ必死だね」

とある神社にて。
フィクサーに連れ回された挙句、６徹目の頭を回転させながら、ブラックボックスが言い放つ。
目の前には、如月ついな…もとい、『役ついな』の父親が映る。
異能解放軍とやらの思想に染めたのは、他でも無い、フィクサーであった。

「…あいつの洗脳もツメが甘いって言うか。
どうでもいいやつ相手にはトコトン中途半端なんだよなぁ」
「ブラックボックスさん、例のアレは!?
早よ出してえな、早よせんと…」

醜い。
言葉にするなら、この一言に尽きた。
普通の父親だった男でさえも、ただ少し会話を交わすだけで醜悪な敵に加工する。
その手腕に呆れと感心が混じったため息を吐き、ブラックボックスは注射器を投げ捨てる。

「これで、解放軍が再興できる…!」
「……夢見すぎだろ」

ああ。この男はもうダメだ。
フィクサーによって、完全に『加工』され切っている。
こんな状況でも解放軍に盲信してしまうほどに、どうしようもなく汚染されている。

何人目かもわからないソレに、ブラックボックスはなんの感情も向けなかった。

「…揃いも揃ってバカだな」

人工個性を受け入れた時点で、早期の死は確定している。

既に『人工個性』という生命体として孤立している『万年開花』や『紲星あかり』ならまだしも、人間が耐え切れるはずがない。

「ま、短い人生で頑張ってよ。

上手くいくとも思えない夢物語を描くのに、さ」

絶対悪対緑谷出久、開戦

街が吹っ飛んだ。
その認識が間違いだったことに気づくのは、数秒経ってからだった。
街が吹っ飛んだというよりは、押し出されていたのだ。
電磁浮遊機能で、崩れた街並みを蹂躙するソレを空から見つめる。

「コレ、人工個性だろ」
「持ち出してこないって思ってたけど、考えが甘かったみたい。
…僕らもアホだったわけか」

街を埋め尽くす肉塊。
繊維のように細かく、液体のように流動するソレ。
ふんじばったヤツらさえも巻き込んで、その肉塊は獲物を探すが如く蠢く。
かっちゃんが居た地区あたりは、肉塊が一つの塔を作り、そこに一人の人間が立っていた。

「…か、か、かか、カい、ほほほ、ホぉ、おおおおおおおっ!!」

焦点の合ってない目。
口から垂れる唾液に、口腔から放たれる壊れたラジオのような咆哮。
データにあった端麗な姿さえも捨てたキュリオスが、獣のように喚いていた。
肉塊が泥花市より外へと向かう。
その質量の暴力が為す破壊を反射的に理解した僕は、咄嗟に叫んでいた。

「ＭＥＳＳＩＡＨ、隔離システム起動!!」
『了解』

その質量が他へと襲い掛かる前に、バリアが街を隔離する。
プロヒーローが現行していたけど、この状況に飛び込むのはどう考えてもまずい。
何故か、こっちに電磁式の網袋に包まれて投げ飛ばされてきたトランペットたち含むふんじばった人間は、引っ張って空中に連れてきた。
仕方ないけれど、アレにブチ込んで放置するしかないか。

本当なら移動拠点のはずだったのに、まさか監獄がわりに使う羽目になろうとは。

「『北斗七星』第一から第五地区に満遍なく飛ばしといて。シャッター閉めて」

『かしこまりました』

予め設置したビーコンに向けて、この連中を転送する。

『北斗七星』。地区ごとに設計して、上空1万メートルを漂う浮遊大陸…っていうか、僕が作った国とも呼ぶべき要塞。

まだ組み合わせてはいないが、十万くらいだったらこのくらいで十分だろう。

まさか案内するのがメンバーじゃなくて、悪党が先だなんて思わなかった。

運命って残酷。

「ほほほっ、かかかかかかぁぁああ、いい、うう、かかほぉおおっ!!!!!」

そんなことを考えていると、声とも呼べない声と共に、肉塊が迫る。

その先端から冷気やら炎やら雷やら、思いつく限り「強い個性」という称号が似合いそうな個性が発動されていた。

個性のことをわかってる分、同時発動とか簡単にしてくるわけか！

「スラッシュモード！」

ビットから高温のブレードを出し、肉塊を根元から切り裂く。
瞬間。その切り口から光が放たれた。
ブースターからエネルギーを噴射し、身を翻してソレを避け、次の肉塊を焼き切る。
はっきり言ってキリがなかった。
あかりさんが居れば、炎か何かで簡単に街ごと吹っ飛ばしたんだろう。
僕も出来るっちゃ出来るが、エネルギーを溜めるのに時間がかかる。
隙さえ与えてくれない肉塊に、その切り札を放てるとは思わなかった。

「爆炎車ァ!!」

僕たちが肉塊に悪戦苦闘していると、その塊を融解させながら、燃え上がった球体が僕たちに近づく。
球体がその炎を払うと、スーツを着たかっちゃんが姿を現した。

「かっちゃん！どういう経緯でこんなことなってんの!?」
「要点が多すぎて纏められる余裕が…っ、デク!!今すぐそっから離れろォ!!」

かっちゃんの声が響いた瞬間。
僕は反射的に身を翻す。
機械の頬に工具が掠めるのを感じながら、僕はその存在に拳を突き出した。
が。ソイツはひらり、とソレを避けると、フォーマルハウトの腕に工具を差し込む。
瞬間。僕の腕の一部が、一瞬だけ空気に触れた。

「…あれっ？なんで再生してんの？」

子供が「わからない」とでも言うような軽口なのだろう。
しかし、その声は。
僕たちを引き摺り込んですり潰すような、酷く悪意に満ちた声だった。
一瞬で再生したスーツに興味を持ったのだろうか。
爛々としたその瞳は、真っ直ぐに僕へと向けられていた。

「射撃モード！」
「危なっ」

飄々と佇むソイツの背後にあった肉塊ごと、高出力レーザーで焼き払う。
流石に町全体は焼けないが、背後にあった肉塊は消し飛んだ。
予想通りと言うべきか、ヤツはちょっと身を翻しただけで躱した。
目の前に立つソレと僕は、面識はない。
しかし、互いに知識はあっただろう。

「はじめまして、ＳＡＶＥＲ。世界を股にかけるヴィジランテ」
「…はじめまして、フィクサー。世界を弄ぶ絶対悪」

迫る肉塊に、それぞれが一撃を叩き込む。
僕はフィクサーの背後にレーザーを放ち、フィクサーは僕の背後に即席の爆弾を放り投げる。
互いの背に爆炎が舞う最中、浮遊装置でも仕込んだのか、空中に立つフィクサーが口

を開いた。

「恐れ慄け。僕が来た」

「悪よ、退け。僕がヒーローだ」

♦？♦？♦？♦？

「ぎっ、いい…!!」

「うぎゅううう……!!」

ヒメちゃんとミコトちゃんの呻き声が響く。

映像には、思いつく限りの強個性を叩きつける男の姿が映る。

麗日さんは、その光景を見てられないとばかりに目を瞑ろうとするが、なんとか耐えていた。

「ヒメちゃん、ミコトちゃん!あとどれくらい保ちますか!?」

「あと二分ってところ……!

結構焦ってる、ぐぅっ!?…からっ、バカ、みたいに、強いっ……!!」
「ミコト、しっかりぃ…!!気をっ、抜く、とぉ…、破られちゃうぅ……!!」

必死に堪えることで、なんとかギリギリ耐え切れるくらいの強度にしているのだろう。
砕けそうなほどに歯を食いしばり、彼女らは僕らを守っていた。
…悲しいことに、僕は彼女らの力になることはできない。

「僕は最悪、肉壁ですね。
老衰以外で死にたくないので、僕が肉壁にならないよう、頑張って守ってください」
「こんな時にっ、そんな、やる気っ、削がれるっ、言い方、する!?!?!」

そうは言われても、死にたくないのは事実なのだ。仕方ないだろう。
…にしても、映像に映る男から、知性というものを感じない。
まるで、何か一つの目標に向かって突き進む…猪突猛進の獣のように思える。
こういうタイプになると、煽りが通用しないからタチが悪い。

「東北さん、この状況からなんとか出来ますかね？」
「もう手の打ちようがないんで、あかりさんにぶん投げたらいいんじゃないんですかね」

…一番手っ取り早いのはソレだよなぁ。
でも、あかりさんが旅館から出てきたら出てきたで、面倒なことになるのは間違いない。
土埃と共に現れる…ってシチュだったら、まだ押し通せるかなぁ。
そんなことを考えてる暇もないんだが。

「あかりさん。
思いっきり土埃起こして、スーパーヒーロー着地みたいなのやってください。
それで誤魔化しましょう」
「…そんな適当でいいんですか？」
「内部の腐敗に気づかないくらいド間抜けな国相手ならコレで十分です」
「公務員にすらバカにされる国ってどうなんですかね？」

哲学関連の大学教員よりかはマシだろう。

あの人種は余計な事言った挙句、良くも悪くもマイペースで反省もしないから、他人の逆鱗をペット並みに撫でまくってるぞ。

そんなことを思っていると、バリアにヒビが入る。

あかりさんが飛び出そうとした、まさにその時だった。

「……ウチが、捕まればええんやろ？」

ついなちゃんが、そんなことを言い出したのは。

♦？♦？♦？♦？

この状況を作り出したのは、多分、私なんだろう。

私と言う存在が、世界にどんな影響をもたらすかなんて、これっぽっちもわからない。

だけど、この人たちは。

私を助けようとして、国一つの信頼を瓦解させた。

「…う、ウチが今捕まれば、全部丸く収まるんちゃうかな…？

ほら、だって…、あいつら、ウチの個性を狙っとるだけやし…。
その、えとっ…、ウチが捕まっても、殺しはせんと思うんや……」

嬉しかった。

ずっと、誰にも助けてもらえなかった私を、助けようとしてくれた。
ちゃんと、私の手を掴んでくれた。
でも、それ以上に。

「だ、大丈夫やから…。慣れとるから…。
やから…、もう……」

嫌だった。

助けられるのが嫌なわけじゃない。
寧ろ、母親が死んでからずっと『助けて』と泣いて、叫んでいた。
こんな危険を冒してまで、私を助けようとしてくれている。

だからこそ、嫌だった。

命の危機がそこまで迫ってるのに、自分の命など関係ないかのように振る舞うそぶりが。

先生と呼ばれる人の言葉も、自分の命に無関心としか思えなかった。

それ程までに、さっきの言葉に重みがなかったから。

「…だって、知っとるもん…。

ウチ、知っとるんやもん……」

母親も、そう言う人だった。

ーーーーーーー……ついな。ウチ、もうすぐ死んでまうかも知れんのよ。

大丈夫。ついなが嫌いやから、とかちゃうんよ。大好きやから、ついなを守るんよ。

死ぬ前日になって、狸寝入りしていた私にかけた言葉。

それだけで、母親が死んだあの日、何があったか、大体理解できる。

母親は、私を守ろうとして、死んでしまった。

「大丈夫やから。平気、やから」

死んで欲しくない。

夢を持ってるこの人たちが、その道半ばで死んでしまうのが、嫌だった。

震える体を抑え付け、慣れた笑みを浮かべる。

その時だった。

「歯ァ食いしばりなさい」

『お茶子の姉ちゃん』が、ウチと変わらんくらいの女の子に殴られたのは。

東北きりたんの説教、再び

ぱちん。

乾いた音が、旅館の一室に響く。

バリアの亀裂が大きくなるのも気に留めず、私の頬を叩いた女の子は、私の胸ぐらを掴んだ。

「ちょっ、きりちゃ…」

「外野は黙ってなさい。今は私が、この人と話してるんです」

ヘッドフォンを着けた女の人が止めようとするも、女の子の気迫に押され、口を噤む。

女の人だけじゃない。他の人たちも、その気迫に押されて黙っていた。

「あなた、ヒーロー志望なんですって？」

「……、そ、そやけど…」

「じゃ、そこにいる女の子は誰ですか？」

彼女の指差す方向に沿うように、視線をそちらに向ける。

視線の先には、私を見つめるついなちゃんの姿があった。

誰、と問われれば、ついなちゃんである、としか答えられない。

「…つ、ついなちゃ…」

「助けを求める人だ。アンタがヒーローなら、彼女をどうするべきですか？」

凛、とその言葉が響く。

助けるべき人間。それは、分かりきっていたことだった。

それでも、私には。

「ウチには、ないもん…。ついなちゃんを助けられる力なんて、これっぽっちも…」

「聞き飽きたし、私も散々言いました。

『自分じゃ無理』って。

…その言葉を使う資格があるのは、私たちみたいな諦め癖のあるヤツじゃないんです

よ」

彼女は言うと、おでことおでこをくっつけて、私が目を逸らせないようにした。

「アンタには出来ることがあるでしょう？

ちっちゃい女の子が、泣きそうなの我慢して、震えるのを必死で堪えて。

それでも、大丈夫って言って、自分の身を悪に捧げようとしてんですよ。

それが怖くないわけないでしょう？

悪に望んで身を捧げるような子じゃないってのは、アンタが一番分かってるでしょう？

それさえもわからないって、アンタの脳味噌は腐ってんですか？」

ついなちゃんがどれだけ怖い思いをしたか。

それは分からないけれど。

悪いことを、きちんと「悪い」と言える子だっていうのは、よく分かってる。

それでも、私には分からない。自分が、何が出来るかなんて。

「…それすらも分からないなんて、随分と臆病なヒーローが居たモンですね」

仕方ないじゃないか。
デクくんみたいに、凄まじい技術があるわけじゃない。
爆豪くんみたいに、轟くんみたいに、現実を見据えてたわけでもない。
ただの中学生に、何かが出来るわけがない。

「どうせ『普通の中学生だから仕方ない』なんて思ってんでしょうけどね…。
いつまでそうやって言い訳してんですか？
アンタがその『普通』から抜け出すのはいつなんですか？
あと何十年待てばいいですか？」

ふつふつと、怒りが湧くのがわかる。
なんで、力があるアンタに、そんなことを言われなきゃいけないんだ。
何にもできない私の気持ちも分からない、アンタらに。

「なんで、そこまで言われなあかんのよ…。

なんでも出来る、アンタらに……！」

私が言うと、彼女はその形相を鬼のようにして、私の頬に拳を突き刺した。

「……なんでも出来る？
私たちがなんでも出来るですって!?
違いますよ!!全くの見当違いです!!!
何にもできなかったから、何かが出来るように頑張ったんですよ!!!
無個性なんですよ……！ここにいる人間の大半は無個性です!!!
自分に何にもできないってことが分かってるから、なにかを成し遂げようと必死になって頑張ってんですよ!!!!
アンタはなにかを死ぬほど頑張ったことはあるんですか!?
いつまでそうやって『でもでもだって』と甘えてるつもり!?!?!?」

女の子が叫ぶも、私は答えなかった。
死ぬほど頑張ったことなんてないけれど。
無駄と分かってる努力をして、何になるって言うんだろう。

相手は、現実さえも歪めてしまう巨悪なんだから。
私の声なんて、揉み消されるに決まってる。

「ついなァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ!!!!」

私が口を開こうとした時だった。
窓の外に見える防壁が、音を立てて砕け散ったのは。

♦?♦?♦?♦?

フィクサー。
僕が生まれる前には、既に没後数年が経過していた敵。
本来ならば存在しないはずの人間が、僕と対峙していた。
いつものような余裕は出せない。
はっきり言えば、人工個性を相手にするより、遥かに骨が折れる。
「やっぱ動きは型にハマってる感拭えないなぁ。でも、オールマイトのものとは違って、

効率的に人を無力化するような構えだ。…彼以外の誰かから習ったのか？」
「さっきからごちゃごちゃと、随分と余裕そうだな」

ブツブツと何事かを呟くフィクサーに、幾つもの砲門を展開して、一斉に放つ。
分解の手つきは速いけれど、移動のスピードはそこまで脅威じゃない。
ただ、気配を消すスキルが異常だ。
気がつけば接近されてる。
視界に居るはずなのに、集中して見ているのに。
何故かは分からないが、彼を『視界に留めて置けない』。

「まぁ、誰に習ったかなんて、この際どーでもいいや。
想像以下ばっかだったから、嬉しいよ。
想像以上に想像を絶してるよ、君の磨き上げられた、他の追随を許さぬ『科学力』!!」

僕の得意分野を理解してる…？
個性だと言って誤魔化すことすら、目の前の存在の威圧感が許さない。
せめてもの抵抗として、絞り出すように惚けたような声を出した。

「…なんのことだ？」
「誤魔化さなくていいよ！
君の胸のソレ、『永久機関』だろ!?
あらゆるスキルを極めた僕でさえも、設計さえ出来なかった『超常の頂上』…!!
『永遠はない』と言う常識が壊されてる!!
そんなちっちゃい物体一つに!!!」

イズクジェネレーターのことまでバレてる。
分解して取り出そうとしてるんだろうけど、マッハを超える速度で分解しなければ、ジェネレーターは取り出せない。
ジェネレーターに近ければ近いほど、再生が速いのだから。

「いい!!凄くいいよ、君たち!!
志し、強さ、決断力、執念!!
僕が出会ってきた『ヒーロー』の中で、最上級と言ってもいい!!」

…まさか敵にヒーロー扱いされるとは。
いつもなら「お前も俺と同じだよ！ナカーマ！」みたいな同族勧誘ばっかなんだが…。
それに喜んでる暇もなければ、喜ぶつもりもない。
絶対悪と呼ばれ、自称している敵の強さを知っているから。

「そう考えると、今までのはゴミだね。
大きい粒を見つけては喜んでたけど、君ほどじゃない」
「オールマイト…は…？」

平和の象徴とまで呼ばれるに至った、世界の誰からも認められたヒーロー。
それさえもゴミと言えるのだろうか。
…多分、この男は普通に言うのだろう。
口元に浮かべる笑みを崩すことなく、フィクサーはぶつぶつと何事かを呟く。
「絶対的な正義って思ってたんだけど、君は盲目的に信じてないんだよな…。
なにが違うんだ…？今まで会ったのと違い過ぎて、ちょっと困惑するなぁ…」

モードチェンジも含めた連撃でも、意識を刈り取るには至らない。
小言を呟きながらも、余裕を崩さないフィクサー。
…寝不足と全力を使ったせいで、思考力が低下して予測が出来ない。
コンディションが万全であれば違ったんだろうけど、文句は言ってられない。
こんなことなら、仮眠取るんだった。

「君はコレまでどんな努力をしてきたんだろう？才能なんて幻想。積み上げてきた努力の質と量に比例して、天才は作られる。
その歳でこんなの作れるってことは、多分、冗談抜きで脳みそ焼き切れるくらい酷使したんじゃないかな？」
「随分と正論垂れ流すんだ、な!!」

…気持ち悪い。
僕の全てを知っているかのような、そんな振る舞い。
コレに対して『嫌悪感を覚えるな』と言うのが無理な話だ。
その嫌悪感を吐き出すように、射撃モードでフィクサーを狙い、撃つ。
やはりと言うべきか、避けられた。

「でも、格上との戦闘は慣れてないっぽいね。…そりゃそっか。こんだけバカみたいな火力をポンポン撃てるんだ。

その速度といい、撒いてる電磁波、超音波もかな…？個性因子が動かなくなる数値だね。

装備さえ整ってれば、大抵の敵はなんとか出来るか…」

個性遮断プログラムまでバレてた。

機械もなにも用いていないのに、電磁波と超音波の二つを感じ取れるのか。

…コイツ、琴葉博士たちと同類なのか…？

「惜しむらくは君のコンディションだね。

ちょっとフラついてる。寝不足と…もう一つは分かんないけど、だいぶ疲れてるんだろ？

全力の君と闘いたいけれど…我儘は言わないや。今日は『試合』だからね」

試合。

その言葉に疑問を持つ暇もなく、フィクサーの蹴りが、分解されて一瞬薄くなった脇腹に突き刺さった。

この程度なら、喰らい慣れてる。あの人の蹴りよりはマシだ。

「『絶対悪』が胸を貸すよ。『ヒーロー』」

「そりゃ、どう…も!!」

絶対悪に立ち向かうヒーロー…か。

僕のは『人生かけたごっこ遊び』だから、そう言うのが正しいのか怪しいけれど。

そんなことを思いながら、フィクサーに殴りかかった。

♦？♦？♦？♦？

フィクサーと緑谷が闘う傍ら。

俺たちは街を蹂躙するキュリオス…とは呼べない何かと戦闘していた。

あの手この手で肉塊を取り除こうにも、ある時は再生し、ある時は致命的なダメージを喰らった箇所を切り落とし…。

要するに、いたちごっこが続いてた。

「流動してやがるから、完全に炭化するまで焼けねェな…。
この街ごと凍らせろ。ブチ割ってブッ殺す」

無茶なこと言うな、爆豪。
街ごと凍らせるのは簡単だが、ここまで広いと表面だけが精一杯だ。
どう考えても、凍らせた直後に肉塊が中から叩き割るだろう。
そう考えると、広範囲を凍らせることが出来る青キジすげェな。超憧れる。

「無理だ。凍らせるだけの隙がねェ。
凍らせた途端、トカゲの尻尾みたいに切り落として消しとばしたの見たろ。
キュリオスを叩こうにも、あの防壁だ。相当苦労する。
火力持ってる緑谷は、厄介そうなのと戦ってるから頼りに出来ねェ」
「火力系の個性持った俺らが火力不足って、笑えねェ…。
終わったら死ぬ気で鍛えるか」

爆豪の言う通りだ。
プロヒーローで言えば、オールマイトの次に位置する程度には実力のあるクソ親父が、トップクラスの火力持ちだ。
その親父を超える火力でも、普通に火力不足扱いされる。
…敵を倒すヒーローってのも、楽じゃない。

「あの爆炎車ってので突っ込むか？」
「無理に決まってんだろブッ殺すぞ。途中で勢いが死ぬ」
「……じゃ、アレやるか」

まだ威力の調節が出来てないが、照準をちょっとズラせばいいだろ。
精々、ちょっと地表を削るくらいで終わる。

「正直言うとお前に貸し作るのは死ぬほど嫌だが、ちっとの間、俺を守ってくれ」
「後でブッ殺す。…で、勝算は？」
「バッチリだ」
「…半殺しで済ましてやらァ」

迫りくる肉塊を、爆豪が焼き尽くす。
その背後で、俺は掌を重ね合わせ、感覚を研ぎ澄ませた。
「…マトリフとか、ベジータもこう言う感覚だったのな」
確かにおっかねェわ、コレ。
そんなことを思いながら、エネルギーの生成に集中した。

女の子は、男の子よりもずっと強かである

ーーーーーー君はヒーローになれる！

そんな言葉からだった。

『……』という人間が、ヒーローを目指すようになったのは。

憧れのヒーローの力を受け継いで、数多の苦難を乗り越えて、ヒーローとして成熟していく。

それが、『……』だった。

ーーーーーー大丈夫。僕がいる。

日本を支配する巨悪が差し伸べた手を、彼は握った。

それが、『……』が悪の道に進むきっかけだった。

憧れのヒーローを、より輝かせるための悪に染まる。それが『……』だった。

ーーーーーーヒーローには、なりたい。でも、個性がない…。
だったら、どんなヒーローよりすごくなる。

そして、『……』。
彼は、誰にも出会わなかった。
巨悪にも、最高のヒーローにも。
ただ一つだけ、『……』の目には映ってたものがあった。

ーーーーーー個性が無ければ、何にもできない…なんてことは、無いと思うんです。
無個性に希望を与える、そんなヒーローに、僕はなりたい…です。

力がなければ、誰も助けられない。
個性がない彼は、虐げられる最中でその真実にたどり着いた。
ならば、力を手に入れよう。
彼はそう決めてから、あらゆる人脈を使ってあらゆる物事を学んだ。
誰かを助けるために、個性を超えた。

ーーーーーー大丈夫。僕が助ける。

最初はあらゆる命を救う医学。

いくつもの屍を乗り越え、その数十倍の命を救ってきた。

いくつもの命を救うヒーローを助け、助けられども死に逝く運命だった人間を助ける。

そんな日常に終わりが来ることを、彼は最も理解していた。

憧れでさえ、老いには勝てなかった。

ーーーーーー…次の、技術…。磨かないと…。

人知を超えた延命技術を作り出すのに、生涯を費やした。

死ぬ間際になって、漸くそれが完成した。

自分にその延命を施すことで、彼は若返り、次の技術を学んだ。

永遠を生き、誰かの希望になり続ける。

そんなヒーローになりたかった。

その延命を施したのは、後にも先にも自分だけだった。

永遠の命を求めた人間は、彼が助けた中には一人も存在しなかった。
その延命を知るのは、彼一人となった。

ーーーーーーこれなら、建造物が倒壊しないな…。よしっ。

次は工学だった。
特殊金属を作るのに、二度目の人生を費やした。
この発明で、人々が生活する建造物をより強固なものにした。
彼の永遠は、学びと救助に費やされた。

ーーーーーーここら辺、明日地震が起きて地盤崩れます。避難先の準備、お願いします。

ーーーーーー大丈夫。どんなに敵向けって言われても、君がヒーローになりたいって思うなら、ちゃんとヒーローになれるから。

ーーーーーー……手術、成功。三日後には起きますよ。十年間、よく頑張りましたね。

次は自然現象。未曾有の大地震の被害を、最低限にまで抑えた。少なくとも、死者は確認されなかった。

次は言葉。その言葉で、心に憧れを抱く人間の背中を押した。

次は脳医学。十年間、脳死状態のヒーローを治療し、完治させた。

それからも彼は、技術を磨き続けた。

元々、才能も何もなかった『……』は、取り柄である集中力と思考力を駆使し、多くのことを学んだ。

何度も、何度も…、気が遠くなるほどの年月を、『……』として歩み続けた。

全ては、人を救うために。

♦？♦？♦？♦？

防壁が破られて数分。

取り敢えず、あの教師に言われた通りに登場し、男の注意を引きつけたはいい。

イズクくん特製のスモークマシンで煙幕を張ってるから、こっちの様子も見えないだろう。
そこから先はノープラン…っていうか、完全に私に押し付けられた。
あの男、通常生活を送る分には優秀なスキルを持ってるのに、戦闘面ではやわらか戦車並みに役に立たない。
いや、元から期待はしてないけれど。

「退けぇえぇっっ!!ワシの目的はついななんじゃアア!!!!」
『退くかァアッッッ!!!』

スーツを身に纏った腕で、鞭のように振り下ろされる腕を受け止める。
至る所から個性による産物が噴射され、スーツの表面を削る。
あの時代なら火力で街ごと焼き払ったが、この時代でそんなことは出来ない。
そもそも殺すこと自体がアウト。

「死ねやアァッッッ!!!」
『なぁあああっっ!!いい加減しつこい!!こンの、デッドコピーッッ!!!』

こういうことになるなら、個性因子に関する論文、もっと読んどくんだった。
未来じゃそんなの残ってなかったし、この時代のものは難解すぎて読めない。
…そもそも、私自身が頭が悪くて、更に救いようのないレベルで勉強嫌いっていうのも一因なのだけど。
心に無理やり余裕を持たせるように、私はそんなことを頭に思い浮かべる。
しかし、現実は非情だった。

「お前は…っ、お呼びじゃあらへんのや！」
『っ、なぁ…!?』

切り裂く個性。私が過去に多用していたソレが、私の腕を切り落とす。
激痛が走るが、再生の個性を作って無理やりに腕を再生させた。
この程度、未来で慣れてる。
半身が吹き飛ぶよりはまだマシだ。

「早よ死ねやァアッッッ!!!」

『うるっ…、さいっ!!』
「がぺっ!?」

切り落とされた腕を掴み、スーツが装着されたままのソレを鈍器として振り下ろす。
イズクメタル製のハンマーみたいなものだ。
普通に頭蓋骨が陥没するだろうが、人工個性を摂取してるなら平気だろう。
吸い込まれるようにその脳天に直撃し、頭がアスファルトに突き刺さった。

『あーもう…。説明大変じゃないですか』

わー…。千切れた腕がプラプラしてるー…。
現実逃避、終了。
処分しよう。流石に「千切れた腕です!」ってノリで持ってたら気持ち悪い。
『塵にする個性』で、千切れた腕を丸ごと処分する。
くっつけるのは無理だ。私の頭が足りない。
…本当、この個性で服ごと再生しないだろうか。
服の袖がバッサリ切れたから、腕切れたことバレる。

『…で。狸寝入りはやめてくれません？
脳が退化しつつある割には、まだ理知的なんですね』

私が言うと、先ほどの切り裂く個性が旅館に向けて放たれる。
ソレを打ち消す個性は、幾つか知ってる。
さっきは咄嗟の判断を要求されたため、対処しきれなかったが、今度はそうはいかない。

『「握りつぶす個性」』

これは構築が楽だし、個性を使う本人の力が反映される。
私の全力なら、切り裂く個性の斬撃程度、簡単に握りつぶせる。
…反動で握ったものの持つ衝撃も来るから、手がだいぶ裂けた。
痛みには慣れてるつもりだけど、やっぱり痛い。
ここ最近は、こう言う大怪我を負わないから余計に。

「出てこいついなァアアアッッッ!!!」
『出すわけあるかって言ってんですよ!!』

絶叫をあげる男が、再び鞭のようにしならせた肉塊を振るう。
私はそれを掴み、切り裂く個性を『固定する個性』で、裂かれた私の手の中に固定させた。
いくらなんでも、ノーモーションで切り裂けはしないはず。
そんな個性になると、個性学の権威レベルじゃないと構築できない。
でも。今はそんなの、必要ない。

『きりちゃんが言うなら…「歯ァ食いしばりなさい」…ってトコです…ねっ!!』
「がぱべっ!?!?!」

引っ張って、ストレートを叩き込む。
男の歯どころか、鼻が折れた感触が手に伝わった。
首ごと飛ばさないか心配だったけど、加減は上手くいったみたいだ。
後は腕を切り落として、再生した手で追撃し、意識を刈り取ろうとする。

が。ここで誤算が起きた。
血で拳が滑り、衝撃を浸透させられなかった。
「づ、ついなァァぁぁぁァァァ!!」
『さっきからそれしか言えないんですか、アンタ…はっ!!』
体から肉塊が突き出る男を蹴り飛ばし、無理やりに距離を取らせる。
向かい側の神社が悲惨なことになったが、許して欲しい。
無論、この程度で相手が気絶するわけがない。
人工個性を摂取した人間の強度は、私自身がよく知っている。
『…やっぱ、この程度じゃ無理ですよね』
「解放せよぉぉぉぁぁぁぁぁぁっ!!」
絶叫と共に放たれる光線を、『殴り飛ばす個性』で吹き飛ばす。
街に被害が及ばないように加減するだけで、正直精一杯だ。
意識を刈り取るだけの攻撃をするなら、周りに何もない場所が理想なんだけど…。

『…無理ですね。プロヒーローとか野次馬が邪魔です』

こっちが被害を出すことを嫌ってる。
相手はたぶん、そのことを理解している。
さっきから延長線上に人がいる場所にしか行かない。
こっちが迂闊に手を出せないようにしてる。

『それがどうした…ってね』

これは、私が任されたことだから。
拳を握りしめ、私は襲い来る男に拳をたたき込んだ。
まだ、戦いは終わらない。

♦？♦？♦？♦？

静寂。その言葉が相応しいほどに、静まり返った街に降り立つ。

デクとフィクサーも戦いを止め、あまりの光景に目を丸くしてる。
キュリオスは衝撃をまともには受けなかったものの、気を失っている。
泥花市という街は、もはや形を成していない。
張ったバリアも、粉々に砕け散った。
俺は呆然と、その凄惨な光景を見ていた。

「…………とっ」

震える声で、声を絞り出す。
この光景を作り出した本人は、何事もないかのように手の埃を払った。
「轟テメエ俺らごと殺す気かァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァアアッッッッッ!!!!!」
「うぉっ、びっくりした。急にデケェ声出すなよ」
顛末を説明しておこう。
轟がメドローア擬き撃ったらこうなった。

五分間時間を稼いだ結果、放たれた光線が肉塊を消し飛ばし、雲をも吹き飛ばした。
死ぬかと思った。ってか、死を覚悟した。
仲間どころか街丸ごと消し飛ばす技ってなんだブッ殺すぞ!!

「迂闊に撃てねェなコレ。完成度高いのに、それだけが惜しい」
「当たり前だ!!ンなもんぽんぽん撃たれる味方の身になれや!!」

反省してなさそうだ。
むしろ、ちょっと満足げに思える。
確かに、俺が同じ立場だったら、躊躇いなくやってただろうが。
それに、これ以外に決着をつける方法があるかと問われれば、否だった。

「……何はともあれ、俺らの勝ち、か」

正直、喜ぶ気にはなれない。
街一つ犠牲にして得た勝利。
もっと強ければ。もっと正確な攻撃が出来ていれば。もっと突破力があれば。

ヒーローに強さが求められる理由が、少し分かった気がする。
まったく。スーツがあってもなくても、足りない物だらけだ。

「…反省は後にしよう。今は、苦戦してる緑谷の援護に回るぞ」
「……アイツが人工個性関連の諸悪の根源だ。絶対ェここでブッ殺す」

俺は気持ちを切り替えて、その場から飛び立った。
この時。誰かが少しでもキュリオスに目を向けるべきだった。
誰かが気付いていれば、まだマシだったかもしれない。

淡麗な容姿など関係なく、跡形もなく溶けていくキュリオスの姿を、このとき見ていれば。

♦？♦？♦？♦？

「あかりさん一人で良かったんですか？」
「彼女の戦闘技術って、基本的にワンマン前提で鍛えられてんですよ。

変に連携を取らせるよりは多少マシです。
緑谷先輩より加減が下手なんで、だいぶ力を抜いてもらってますが」

二人の攻防を見守りながら、そんな会話を交わす女の子と先生。
映像の中で繰り広げられる戦闘は、圧巻という他なかった。
飛び交う血潮、容赦なく切り落とされる腕、躊躇いのない自己犠牲。
どれもが異常で、どれもが眩しかった。

「ああなれ、とは言いませんけど。
ヒーローになるって言うなら、あの激痛を味わう危険が付き纏うって、覚悟はしといたほうがいいですよ」

想像してしまった。私の腕が、敵に切り落とされる光景を。
私の個性は、手で触れたものを浮かせる『無重力』。
もし敵が私の無力化を図るんだったら、真っ先に狙われるのも…。
流れ出る冷や汗の滴る先。
現実から目を背けるように、そちらに視線を向け、固まった。

私の腕の中には、怯えて入ってきたついなちゃんがいる。
無論、汗は下に落ちて、私はそれを目で追っていたわけで。
つまり、何が言いたいのかというと。
ついなちゃんのその目が、映像を見てしまったのに気づいてしまった。

「……お茶子の、姉ちゃん」

震える声で、彼女が私の名を呼ぶ。
どんな罵り声が響くのだろうか。
そんなことを何処か遠くで思った矢先。

ついなちゃんの手が、私の手を抱きしめた。

「……たすけて」

瞬間。脳裏に、両腕が千切れたついなちゃんの姿が連想された。
妄想かもしれない。だけど、外にいるバケモノは、確実にソレを現実にする。

いや。腕だけじゃないかも知れない。
もしかしたら、もしかしたら。
言葉には出来ないような、そんなことも、平気でやるかも…。
いや。やる。あの存在は、確実にやる。

「……っ」

言葉が喉元を通るのを、必死で抑える。
無責任な「大丈夫」なんて、言っちゃダメ。
「私が助ける」なんて、言えないんだ。
私は、誰かを助けるだけの力がない。
…ない、けれど。だけど。

ーーーーーー大丈夫ですよ。必ず助けます。

憧れのヒーローは、何度その言葉を投げかけたのだろう。
きっと、助けられなかった人もいる。

守れなかった人もいる。それも、たくさん。
だけど、それでも笑顔で言い続けてる。
辛いと分かってる戦いを、辞めずにいる。
それに憧れるなら、私も立ち上がらないといけない。
失うのは怖いけれど。助けられないことは、もっと怖いけれど。

「……っ、つ、ついな、ちゃん…！」

それでも、言わなきゃ。
ここで言わなきゃ、私はもう、ヒーローになれない。

「大丈夫…！ウチが、守るから…っ！
もう、離さへんから……っ！もう、突き飛ばさんから……っ!!」

彼女を強く抱きしめる。
現実は大きくて怖いけど、容赦なく牙を剥いてくるんだ。
だったら、憧れのように少しでも。

『負けてたまるか』って歯を食いしばれ。
きっとそれは、どんな人でもやってることだから。
脅威が、旅館の壁を削ぎ落とす。
剥き出しになった部屋で、私は現実を強く睨みつけた。

「見つけたァア……!!ソイツ、をぉ、よこここっ、せせせせェェェェェェエエエエエエエエエエエッッッッッッ!!!!!」

バケモノが吠える。
目から溢れそうになる涙を堪え、私は無理やりに笑顔を作った。

「渡すか、ドアホォオオオオッッッ!!!!
ウチは…、ウチはァア!!!!どんなに怖くても、どんなに辛くてもォオッッッ!!!
ヒーローになるんやからアアアアアアアアアアアアアッッッッッッ!!!!!!」

弱々しく、情けなく、みっともなく吠えた。
目に映る光景の全てが、清々しく感じる。

「大丈夫…。ちゃんと、守るから」

潰れた喉から、声を絞り出す。

こぼれ落ちる涙を、乱暴に拭う。

着物も邪魔。勢いよく破いて、動きやすい格好になる。

もう、目を背けない。ちゃんと向き合って、辛くても笑ってやる。

だって、私は。

「ウチが、ヒーローや…!!」

ヒーローだから。

あかり「いっぺん死ね」

「麗日先輩、右に避けて!!次来ます!二秒間、ちょっと飛んで!!」

狙いはついなちゃんだけのようで、鞭がついなちゃんを抱きしめる私を狙う。
個性の影響で、三半規管がイカれそうだ。
こみ上げる吐き気を無理やりに飲み込み、女の子の指示通りに鞭を避ける。
弱音も恐怖も胃の中身も、吐き出すのは全部後だ。

「鬼さんこーちらーっっ!!ほらほらどうしたへっぴり鞭ィイ!!
女子中学生一人殺せへんとか、異能解放軍とやらも大したことあらへんなァア!!!!」

嘘ですめっちゃ怖いです。
胃の中身の代わりに、ありったけの語彙力を振り絞って罵声を絞り出す。
喉元に酸っぱくて熱い何かが込み上げたが、なんとか飲み込んだ。

「ナイスです！そのまま注意を引き付けてください!!ハードなの来ますよ!!」
「わかっ…んぐっ、だぁああっっっ!!!」

ちょっと出かけた。
ちょっとでも気を緩めると込み上げてくる胃酸を飲み込み、声を張り上げる。
伸ばしていた髪が切り裂かれ、破いた着物もさらにズタボロにされる。
下着も切られ、私のおっぱいが天下に晒された。

「恥ずかしさで隠しちゃダメですよ!!
その隙を突かれて殺されます!!」
「殺されてたまるかぁあああっっ!!!
この子だけは絶対離さへんからなぁああっっっっ!!!!」

ビシバシ揺れて痛い。
そんな痛みも羞恥も気にならないほどに、攻撃の激しさが増す。
身体中に切り傷が出来て、血が抜けていく。
脱力感にたたらを踏みそうになるのを堪え、必死に避けるのに集中する。

「あかりさん、個性の用意は!?」
『あと二分!!ごめんですけど、それまで耐えてください!!』
「が、ぉおぇっ…、がっ…、でぇん、しょぉぢぃ…!!」

吐き気を我慢しすぎて目眩がしてきた。
チラッとあかりちゃんの方を見ると、身体中から紫電を駆け巡らせている。
今作ってる個性は、『武器を作る個性』。
…というのは、少し間違いだ。
正確には、『武器を作る個性で武器を作っている最中』なのだ。
なんの武器かは知らないけど、「一撃で沈められて、かつ殺さない武器」らしい。
こうして計八分間、私は死ぬ気で鞭を避けてるわけだ。
「捕らえる個性は…、難しくて作れない…って、言ってた…!
あとは、時間を稼ぐだけ…!」

ここで自惚れを出すな。

あわよくば一撃、なんて考えるな。
一瞬の自惚れが、死を招く。
あの鞭にかかれば、私の頭と体なんて、簡単にサヨナラするんだ。

「…お茶子の、姉ちゃん…」

ついなちゃんが、私に視線を向ける。
私は攻撃を避ける最中、彼女を抱く手に、力を入れた。

「安心しい。アンタは、ちゃんと助けてって言ってくれた。
…ウチは、それに応えなあかん」

武器の完成まで、あと一分。
目の前の脅威がより怪しく蠢いた。

♦？♦？♦？♦？

「死ィイねェエッッ!!!」
「っ、らぁああっっ!!!!!」

爆炎と熱線が飛び交い、空を、大地を彩る。
跡形も無くなった街並みにクレーターが出来るたび、僕たちの喉奥から声が飛び出た。
僕たちとフィクサーの戦いは、かなり長引いていた。
膠着状態、ということはない。
攻撃も、僅かにだが当たり始めた。

「…クソが…!!カス当たりで、殆どダメージがねェ…。どんなバケモンだよ……!!」
「生身の人間…って思わねェ方がいい。
殺す気で行っても死なねェぞ、コイツ」

既に加減はしてない。
ここら一帯の雲は残らず吹っ飛ばした。
プロヒーローが入らないように、破れたバリアも張り直した。

だというのに、フィクサー相手にかすり傷程度しかつけられていない現状。
脳を酷使し過ぎて、顔の穴という穴から血が吹き出てる。
マスク内に体液を拭き取る機能をつけてて良かった。

「…その調子じゃ、七孔墳血…ってとこ？
本当に、万全の状態で戦いたかった」
「俺らは眼中にナシか？
ヘルズスキル…コキュートスバインド」

轟くんが、フィクサーから半径数百メートルの大気を一気に凍結させる。
先程までは、局所的に凍らせようとした瞬間に避けられていた。
ならば、広範囲を凍結させればいいと言うわけだ。

「ナイス、轟くん！『正義の拳』!!」
「インフェルノレイ!!」
「十ノ惨状ォ…！千壊滅殺ゥ!!
地獄ッ、爆粉砕!!!」

拳が、光線が、爆炎が。
氷に包まれたフィクサーを穿つ。
これで倒せていれば御の字なのだが。
そんな祈りが口から出るのを堪え、崩壊する氷塊を見守る。

「ちょっとズラしたけど…。
あーあ…。右腕なくなっちゃったよ」

僕たちの期待を裏切るように、氷塊の影になったフィクサーが笑みを浮かべる。
その右腕だけがあり得ない方向にひん曲がり、焼かれに焼かれ、炭化していた。
避けられることは、覚悟していた。
だが、ダメージを負わせたにもかかわらず、威圧感はこれっぽっちも薄れない。

「いやぁ、助かったよ。
真っ先に拳で氷を叩き割ってくれたから、炎の軌道から逃れられた。
右腕はこんなんなっちゃったけど、ちょーっとした誤差だよ、誤差」

…コイツ、本当に人間なのか…？

叩き割ったとはいうが、それは骨を折って、もし外れたとしても炎の通りを良くするためだ。

実際に、ヤツの右腕は折れてる。

そのあと、一秒もない内に爆炎と熱線が押し寄せたはずだ。

軌道から逃れるなんて、強度的な意味でも、速度的な意味でも、人間の限界を超えた速さを要したはずだ。

僕が思考を巡らせていると、フィクサーがそれを悟ったように語り出した。

「僕は君ほどじゃないけど、電子工学を極め…ああ、いや…。

君を前に極めたって言い方はおかしいか。

そこそこかじってるんだけどさ、ブースターと空気抵抗防止用のバリアくらいなら、そこしかしこに仕込んでるのさ」

そういうわけか!!

どんなバケモノスペックだ、コイツ!!

あらゆるスキルを極めてる…というのは、間違いではなさそうだ。
…勝ち筋はあるけれど、条件が揃ってない。
僕の寝不足と、脳の酷使による思考力の低下さえなかったら。
自立したスーツに相手させる、という戦法も取れるが、それも無理だ。
生憎とリゲルはメンテナンス中だし、シリウスなんて機能拡張とグレードアップの最中で使えない。
本当に、自分のタイミングの悪さが嫌になってくる。

「…殺す気でやって、腕一本か…」
「……っ、ソが…!!
寝不足と消耗が祟ってデクはあのザマ、こっちも目眩がしてきやがった…!!」

かっちゃんの動きにも、僕ほどではないものの、多少のふらつきが見えた。
そんな僕たちを嘲笑うように、フィクサーが使い物にならなくなった右腕を掲げる。

「いや。ノーダメージだよ」

瞬間。フィクサーの腕が再生した。

「「……は？」」

「君もオールマイトに使ってたじゃないか。治療用のナノマシン。君のに比べたら、デッドコピーも良いところだけどさ」

ふざけるな、と叫びたかった。

ゲームで言う『負けイベボスを倒せ』って言われてるようなものだ。

頑張ればイケるかもしれないが、目の前の敵は自己再生持ちで、しかも攻撃がほぼ当たらない。

対するこっちは、状態異常のせいでロクに動けないようなモノだ。

クソゲーにも程がある。

「…だから、どォした」

かっちゃんが呟くように言い、指先をフィクサーに向ける。

僕たちもそれに続いて、掌や拳をヤツに向けた。

「あれ以上のチート、経験済みだろォが。
アイツは真っ当に生きてる人様に大迷惑吹っかけるクソ野郎だ。
いずれ俺らがぶっ殺すことにゃ変わりねェ」
「…俺らも迷惑側だと思うぞ。ヴィジランテなんだし」
「僕なんてこんなの作ってるし、バレたら世間がとんでもないことになるって先生が…」
「知ってらァ。人を助けるための迷惑なら、いつかその責任取ったらいいだろ」

そんな軽口を叩いて、後ろ向きな思考を断ち切る。
責任を取る…か。
どうやって責任取るべきかは分からないけど、今のうちに考えておこうかな。
そんなことを思いながら、ジェネレーターの出力を上げた。

「…へぇ」

感心したように、ヤツが目を細める。
それを合図に、再びフィクサーに攻撃しようとした、まさにその時だった。

轟音と共に、空が白く染まったのは。

♦？♦？♦？♦？

「…お、ええっ…」

口いっぱいに広がった、酸っぱくて鉄臭い物を吐き出す。
ついなちゃんを咄嗟に突き飛ばしたのは、英断だったのだろう。
さっきまでついなちゃんを抱いていた箇所に、肉塊が突き刺さっていた。
多分、内臓削られた。
詳しい箇所は知らないけど、喪失感と血液が流れ出る感触が伝う。

「麗日先輩!!絶対引き抜かせないでください!!死にますよ!!」
「…!?や、嫌やっ!!死なんっ…!!死なんもんっ…!!」
「わ、かっ…とる……っ!!だい、じょうぶ……、やから…っ!!」

漫画で読んだけど、この傷になれば抜かれれば余裕で失血死する。
私は力の限り肉塊を掴み、何がなんでも引き抜かせないようにしていた。
でも、それも限界だ。
正直、私は鍛えてるのかと聞かれれば、否と答える。
本当に、単純な筋トレしかやらなかった。
要するに、私の体から肉塊を引き抜くのは、たこ焼きに刺さった爪楊枝を引き抜くかの如く容易いということだ。

「あ、あぁっ、血がっ!!血がぁ!!
おとん、やめて!!やめてぇな!!ウチが捕まるから!!なんでも言うこときくから!!、なんでもやるから、やから!!
お願いやから、お茶子の姉ちゃん殺すの、やめてぇなぁ!!!」

ごめん。ついなちゃん、ごめんなさい。
痛みを堪え、死が近づく恐怖を堪え、時間を稼いだのに。
力の抜けていく体、薄れていく意識。
彼女を守りきれないことの悔しさだけが、私を支えていた。

「よくも手こずらせたな…。死ね」

死の宣告と共に、私の腹部から肉塊が引き抜かれる。
本来であれば、引き抜かれたと同時に、血が大量に噴き出し、私の命を終わらせる。
そう思った矢先。
いつ間にか女の子が私に駆け寄り、何かをスプレー缶から吹きかけた。
結果、傷口から血は吹き出さなかった。
代わりというべきか、何かが傷口に蠢いていた。

「よく頑張りましたね。ナノマシンで止血しました。今は治療してる途中です」

女の子が私に称賛の声をかける。
そして、気づいた。
彼女の側に、般若のような顔をしたシルエットがあることを。

『…アンタ、この子の父親なんですってね』

シルエットとは言ったが、その風貌はまさしく、先ほどまで戦闘を行なっていた彼女だった。
しかし、どう考えても様子がおかしい。
駆け巡る電流が光源となり、辺りを白く染め上げている。
笑っているはずのマスクは、光で歪んで見えるのか、牙を剥いた般若のようだ。
極め付けには、手に握られた武器。
豪華絢爛な装飾と裏腹に、殺意溢れる大槌が鎮座している。
だけど、そんなことが気にもならないほどに、その声は怒りで満ちていた。

「それがどうした？」

火に油を注ぐが如く、ついなちゃんのお父さんがなんの反省も見せない。
彼女の槌を握る手から、金属同士が擦れ合う音が響いた。

『この子が、アンタの非道で泣いてるんですよ。アンタの行いを知っててなお、アンタのことを父親って慕っているんですよ。

何も思わないのか、この外道』

揺らめく雷が、マスクをさらに変貌させる。

怒り狂う仏様のようだ。

どこか遠い思考でそんなことを考えていると、ついなちゃんのお父さんは鼻を鳴らした。

「はっ。子が親の役に立つ。ほんなもん、当たり前やろが」

油に火ではない。ニトロに衝撃を与えるかの如き愚行。

彼女の怒りが頂点に達するどころか、爆発するのが感覚で分かった。

それを反映するかのような轟音。

それと共に、空がペンキをぶちまけたかのように、白く染め上げられる。

『再現「トール」』

いや。白く染まってるわけじゃない。

雷が、空を覆っているんだ。雷雲も全くないというのに。
それを作り出した本人が、槌を構え、アスファルトを蹴り砕く。

『いっぺん死ね』

刹那。空に青白い花火が咲いた。

ヒーローの敗北

「……いい。いいけど…。
本当に、ベストコンディションでなかったことだけが悔やまれるね」

体が、脳が限界を迎えている。
猛烈な眠気と脱力感に、僕は悔しさだけで対抗してる状態だった。
すでに視界はぼやけ、普通に立つことすらままならない。

「右腕三回、左腕五回、胴体二回、頭部は…かすり傷で四回、右足一回、左足一回…。
うん。過去最高のスコアだ。おめでとう」

ヤツが数えたのは、ヤツが再生した箇所とその回数だ。
正直言って、本当に殺す気でかかった。
そうでもしない限りは、勝てないと思ったから。
蓋を開けてみればどうだ。

轟くんは、戦いの終わる一分前に、ただの突きで気絶させられた。
かっちゃんは、耳元で囁かれると同時に、眠りに落ちた。
僕はフィクサーに何もされずとも、意識を保つので限界だ。

「この調子じゃ続行は無理だね。
おめでとう。今後、僕と対峙する資格を、君たちは得た。
君たちに敬意を評して、元いた場所まで運んであげよう」
「……っ、なんの、つもりだ……？」

かっちゃんたちを担ぎ上げるフィクサーを睨みつける。
フィクサーはそれを意に介さず、僕の体も担ぎ上げた。

「だから、敬意だよ。未来の『正義』に対する…ね」

ソレを最後に、僕は意識を手放した。

これが、僕が久方ぶりに味わった敗北だった。

♦？♦？♦？♦？

何が起きたのかを語っておこう。
あかりさんが一瞬のうちに相手を空まで蹴り飛ばし、空で槌に込めたエネルギーを叩き込んだ…らしい。
「人工個性持ちだったら耐えられるけど気絶はする」くらいの威力に抑えたとのこと。
どう見たって殺す気満々の一撃だった。
いや、空真っ白だったよ？完全に地球砕くくらいの勢いあったよ？
本当、しぶとさだけはゴキブリ並み…ああいや、随一だな、異能解放軍。

「…麗日先輩、お腹大丈夫ですか？」
「へ？…あ、ああ、うん。
見ての通り、傷口も塞がっとるし…。
ただ、貧血やろか…。ちょっとえらいわ…」
「えらい？なんで貧血が偉いの？」
「そっちの意味じゃなくて、方言ですよ。

体がだるいことを『えらい』というんです」

半壊した旅館の前で、そんなやりとりをする。
彼女らが戦っている間に、異能解放軍は全員が捕まったようだ。
流石はプロヒーローに警察。手際がいい。
日本の警察は、吠えていい相手にはトコトン吠えるクチだからなぁ。
その分、吠えられない相手にはトコトン従順だけど。

「……星が壊れるよりはマシですね」

ズタボロになった旅館を見上げ、呟く。
避難していた人たちもゾロゾロ出てきて、旅館の有様に同情的な視線を向けた。
避難していた人たちに、傷はこれっぽっちも見当たらなかった。
そのことに安堵するのも束の間、幾人かの男性客が驚いた表情でこちらを見て、目を逸らす。

「…麗日さん。いい加減、ソレ、隠したらどうですか?」

「はへ？」

凝視すると何言われるかわからないため、目を背けて彼女の体を指差す。

突風が吹いて、なけなし程度に彼女の秘部を守っていた布が、全て吹き飛ばされた。

その証拠とでも言うように、僕の前に、彼女がまとっていたであろう布切れがひらひらと落ちた。

「……まぁ、えっか。『終わり良ければ全てよし』やぁああ…ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

ばたん。

貧血が祟ったのか、脱力して地面に倒れ込む麗日さん。

横目で見たけど、よりによって仰向けで倒れたぞ。

僕はそう言う趣味はないけど、何人か写真撮ろうとしてる。

僕が壁になることで、彼女の痴態が晒されるのをなんとか防ぐ。

「音街さん、僕のスーツケースからパーカーを出してください。

サイズからして、それなら秘部を隠せます」

「は、はいっ！」
「子供たちは、それまで麗日さんの体を隠してください。
セイカさんは…とにかく動かないでください。アポカリプス起こされたら迷惑です」
「私のドジそこまで酷い!?!?!?」

酷いだろ。星砕く兵器一つ、おシャカにしてんだから。
気絶する麗日さんに、音街さんが僕のパーカーを被せる。

「……バクゴーさんにそっくり」
「「「「いやいやいやいや!!どこが!?」」」」

音街さんの言葉に、僕たちが総ツッコミを入れた。
性別も違うし、あんな目つき悪くないし、髪は割に整っている方だ。
性格に至っては論外だろう。
そんなことを考えていると、音街さんは慌てて首を横に振った。

「いや、あのっ…。助けた後に、笑うのが似てるな…って…」

彼女の言葉に、僕たちは寝息を立てる麗日さんの顔を覗き込む。
だらしなく緩んだ頬に、下がった目尻。
コレを笑顔と呼ばずになんと呼ぶべきか。

「お茶子の姉ちゃん…。起きたら、ぎょおさん、ありがとうって言わせてぇな…」

ついなちゃんが彼女の手を握る。
この場面に口を挟むほど、僕は野暮なつもりはない。
プロヒーローたちがこちらに駆け込む最中、僕はふと、気絶したついなちゃんの父親に目を向ける。

「……は?」

そこには、衝撃の光景があった。

「セイカさん!!あかりさん!!

その子たちの目線を、コッチに向けさせないでください!!」
「え、あ、はい」
「…?は、はい」

僕が指示を飛ばし、子供たちを無理やりその場から離れさせる。
正直、荒事には慣れているつもりだった。
そういうつもりをしていた。
だが、僕はそれを知らなかった。
前世で味わったソレを、僕は知らないフリをしていた。

「……前々から、疑問だったんですよ。
どうして、『人工個性』と『自己修復細胞』を結合させたものを、『移植する』必要があるのかって。
『人工個性』を摂取するだけじゃダメなのかって、思ってたんですよ」

スモークマシンの煙が消え、プロヒーローたちにもその光景が晒される。
子供たちからは見えないが、その光景は、あまりに刺激が強すぎた。

「あ、ばば、ぱぷっ…」

まるで、蝋人形を溶かしたかのように、人がドロドロに溶けていく光景。
不思議と僕は、吐き気を催していない自分に気がついた。
人の死を見るのは、これが初めてじゃない。
中学の頃、同級生が敵に殺された光景を見たことがある。
現実感がなさすぎて、驚きもしなかった。
だけど、死は現実にある。
それは、僕が一番知っていた。

「だとしても、コレは、ないだろ…」

どんなバカだ、こんなの思いついた奴は。
赤と肌色が混じった水たまりとなっていくその男に、その場の全員が釘付けになる。
伊織さんも状況を把握したのだろう。
急いでこちらに駆け寄り、覗こうとするついなちゃんたちの目を覆い隠した。

「理解が早くて助かります」
「…こんなの、彼女たちに見せられるもんですか」

ぐずぐずと溶けていく男に、誰かが嗚咽を飲み込む。
そちらを見ると、まだ新人なのだろうか。
比較的若い風貌のプロヒーローや警察が、そこらに吐瀉物をぶちまけていた。

「つ、いな、ぁあ……。ご、め、ん…」

頭骨が溶け、脳さえも溶けていく。
そんな状態になって、初めて彼は、娘へ謝罪を送った。
瞬間。ついなちゃんは腕に赤いオーラを走らせて、僕たちを振り切った。

「っ、待っ……!!」

遅かった。

ついなちゃんの視界には、父親だったソレが飛び込む。
幼い少女の心に傷をつけるには、十分すぎる光景。
溶けていく父親を前に、彼女の動きが止まった。

「ごめ、めめめ…んん…。つ、いな……」
「……なんやいな。
外道に相応しい、無様な死に様やんけ…」

ぽつり。
ついなちゃんが小さく呟く。
ぐずぐずに溶けていく父親に駆け寄り、彼を見下ろした。

「ごめっ、ごめめ……、めん……。
おか、さ……、まも、なく……。めん……」
「……今更すぎるわ、あほぉ…っ。
おかんが、どれだけ苦しい思いして、死んだと思っとるんや…！
ほんな、ほんな姿になって、漸くかいな…！

ほんまに、アホやなぁ……っ!!」

ぽたり、ぽたり、と水たまりに透明な滴が混じる。
僕たちの位置からは見えないが、肩が震えていることから、彼女は泣いているのだろう。
死に逝く父親を前に、彼女は続けた。

「ごめっ、んん…。つ、い…ぁ……」
「……死ぬ時くらい、言ってぇな。
おかんが死ぬ前は、言ってくれたやん…。
お願いやから、死ぬ前に…っ、一回だけでも言ってぇな…。
抱きしめんでもいいから…。頭を撫でて、ちゃんと、言ってぇな…」

彼女の言葉に答えたのか、ソレとも偶然か。
溶けて倒れた掌が、彼女の頭に覆いかぶさる。
あれだけ溶けたらもう、神経も働きを成していないはず。

「あ、い…う…き……」

その言葉を最後に、彼女の父親は溶けた。

水たまりとなった父親を前に、ついなちゃんの慟哭が響く。

後に、旅館内にて気絶した状態で発見された緑谷くんたちはこう語る。

この戦いは、惨敗だった。

犠牲者を出してしまった。完膚なきまでに、一等星は悪に負けた。

この敗北は、ヒーローたちの胸に深く刻み込まれることとなった。

先生の秘密
衝撃の事実

太平洋のど真ん中にて。
この海域は、個性社会となってから、個性を有した鮫によって蹂躙されていた。
人間が持つ分には、あまり脅威とは言えない個性の集まり。
だが、野生動物が持つ分には、あまりにも強大すぎるものだった。
その元凶は、ＡＦＯと呼ばれる巨悪なのだが、それは置いておこう。
そんな集団に対し、近づく影が一つあった。
鮫たちは魚影か、と思ったが、ソレが間違いであることに気づく。
鱗もなければ、水中に生きる者でもない。
身を守る毛もなければ、獲物を引き裂く牙もない。
鮫たちは、その存在の名と脆弱さを熟知していた。

ーーーーーーー人間だ。

彼らの個性は、『意思疎通』。
同族同士のみにかぎるが、意思疎通が可能になる個性。
人間であれば、そこまで脅威ではない。
しかし、群れで行動することのない、またはその必要のない品種の鮫ならばどうだろうか。
結果、彼らは団結し、かれこれ数隻の船を襲い、水底に沈めた。
搭乗員は全て腹の中…いや。排泄物となっている。
この人間の末路も同じだろう。そう思った矢先だった。
鮫ですらも慄くほどの、濃い血液の香りが広がったのは。
ーーーーーーーこの人間、何かが違う。
ーーーーーーー待て。ヤツはあの妙なのに乗ってないぞ？
ーーーーーーー本当に人間なのか？
個性で意思疎通し、数匹で思考を巡らせる。
だが、悲しきかな。彼らはどこまで行っても鮫だった。

あれほど濃密な血液の香りを纏う人間。
見れば、四肢は柔らかそうで、すべすべもっちりしている。
余計な付属品も殆どない、滅多に見ないご馳走だ。逃す手はない。
鮫たちはそう判断すると、一斉に泳ぐ人間に襲い掛かった。

「邪魔よ」

刹那。人間の手がブレた。
その手には、海を漂っていたのだろう、立木の破片が握られている。
リーダー格の鮫は、その光景をどこか遠くの光景を見るように見ていた。
ただのささくれ程度の木材で、同族を殺していく人間の姿を。
自らが死んだと認識する直前に、その顔を見た。

ーーーーーーバケモノだ!!逃げっ。

同胞にそれの危険性を伝えることなく、鮫はあっさりと殺された。
ぷかぷかと浮かぶ死体をボードがわりにして、その人間が潮でベタつく髪を払った。

「ふぅっ……。日本まであとどれくらいかしら？かれこれ3時間は泳いでるのだけど」

その人間は言うと、太陽を確かめる。

「方角的には合ってる…。なら、もう2時間はかかるかしら？

途中で航空機が燃料不足で墜落って、いい土産話にはなりそうだけど。

……ぁーーー。あーーーーっっっ!!十年もお預けくらってムラムラするぅっっっ!!!」

一人そんなことを愚痴ると、彼女は再び泳ぎ始める。

2時間後に、東京湾にて十匹の鮫を担いだずぶ濡れの女性が現れたと騒ぎになるのだが、彼女はまだ知らない。

♦？♦？♦？♦？

「人工個性の危険性は、以上です」

あかりさんが話を終え、茶を呷る。

重苦しい空気が、緑谷くんの作った要塞の一室に漂う。

今日は、緑谷くん作の『浮遊大陸』お披露目の日であった。

だと言うのに、僕らを包む空気は酷く重く、とてもじゃないが、何かを発言する気にはなれなかった。

それもこれも、フィクサーとやらが悪い。

「…前にハッ倒したあのガリガリも、同じように死んだのか」

「ええ。十中八九」

爆豪くんが、絞り出すように問うた。

人工個性に限らず、個性という代物は、「本来ある細胞を食い潰し、新たな器官を形成している」らしい。

天然の個性の場合、病原菌のように潜伏期間があり、４歳ごろになると発症する。

ようするに、「病原菌」のような「生命体」という見方が正しいのだ。

人類という種が、比較的早めにソレに適応した体を形成…つまり、「進化」しただけで。
人の手に負えないのも納得だ。
だって、「病原菌」という「未知の生命体」なんだから。

話を戻そう。
人工個性と個性には、そこまで大きな違いはない。
ただし、一つだけ違いがある。
個性はせいぜいコバンザメのように、宿主に引っ付いてるだけだ。
そうしないと生きていけないから。
しかし、人工個性は別。
「自らが滅びることがわかっていても、宿主さえも食い潰す」のだ。
結果、食い潰された細胞の結合が緩みに緩み、液状化する…らしい。
…幸いというべきか、一度誰かに寄生した人工個性は、宿主と共に死を迎え、他人に寄生することはないそうだ。
「…個性のことがわかっただけでも、結構ダメージあるが…。
何よりヤバいのは、そんなヤバいシロモノだってわかってながら、無差別にばら撒く

アホが居るってことだ」
「俺らはそのアホに負けた。それも、文句のつけようのねェ敗北。
情けまでかけられて、俺らは負けたんだ」

爆豪くんは言うと、掌を爆発させた。

『アレは強かった』とか、『俺らはまだ中学生だから』とか、負けたことに理由つけて仕方ねェで済ませられる…。
ンな器用な生き方、俺らにゃ出来ねェ。
それに。プライド関係なしに、アイツが本格的に動く前に、ブッ殺さなきゃなんねェ。
でないと、これからもっと増えるぞ」

なにが、とは言わなかった。
彼の瞳に、静かに炎が揺らめいているのがわかる。
『敗北』の2文字が大嫌いな子だ。
今回の完膚なきまでの敗北に、文句をつける気にもならないのだろう。
勝たなければいけない戦いで、負けてしまったのは事実なのだから。

「異論はないけど…。ハッキリ言うと、今の僕らが勝つのは厳しい。
全体的に、体力が低すぎる。
一番タフなかっちゃんでも、足りないって思うくらいに、僕らには体力が無さすぎる」
「その考え方だと、長期戦前提だぞ。
格上の相手を一瞬で仕留める技術も、俺らにはないだろ。
基本的にゴリ押しで戦ってきたから、ゴリ押しの効かない相手に弱いっつーのも改善点になるんじゃないか？」

そんな討論をしていると、勢いよく部屋の扉が開く。
この部屋は会議室となっており、少し大きめの机…ちゃぶ台だが…の周りに、僕、緑谷くん、爆豪くん、轟くん、あかりさんが座っている状態だ。
その真ん中に、皿に盛りつけたカットフルーツを置いた彼女は、議論を打ち切るかのように掌を合わせる。
「はいっ！難しい話は一旦そこでやめ！
三時のおやつでも摘まないと、頭まわんないでしょ？」

彼女…三重にいるはずの麗日お茶子が言うと、背後から子供達が飛び出し、フルーツに群がった。
彼女がここにいる理由は、至極単純。
一等星のメンバーに加入したのだ。

後日談を語り忘れていた。
あの後、怪我人も逮捕者も大多数出て、日本は大混乱となった。
それだけではない。国家としての信頼も落ちるところまで落ちた。
今や国民にさえ、「オールマイトのいる国でこれだけの悪出すとか、お上の人なんなの？馬鹿なの？」と煽られる始末だ。
ヒーロー業界も政界もてんやわんやしてるが、身から出た錆だと思ってほしい。
緑谷くんたちが目覚めた直後、この浮遊大陸に放置していた異能解放軍は、一人残らず警察の本庁前に突き出しておいた。
結果、全員が急遽増設されたタルタロスにぶち込まれることになったらしい。
茜さんも増設に協力してるらしく、どういう風の吹き回しかと問うと、「シンプルに暇だった」と返された。

ＳＡＶＥＲは、日本政府から「国家の混乱を招く敵だ」と発表された。

緑谷くんたちは納得してるらしく、「ま。やめませんけど」と平気そうだった。

無論、そんなこと関係なしに、日本社会は更に大荒れ。周りの国家も大激怒。

伊織さんから聴くと、元々燻っていたのだが、今回の件で不満が爆発し、大規模なデモ活動が始まったのだそう。

その筆頭は、なんとあのシンリンカムイ。

「悪に染まった国家に未来なし!!それの証明となっただけのこと!!」と気合入れて演説までしてるらしい。

お盆明けほどから、「無個性差別撤廃運動」も始めたとのこと。

ストイックだな、若い子は。

で。肝心の麗日さんとついなちゃんのことについて語っておこう。

彼女は病院に搬送され、輸血するだけで健康になったそう。

すぐに退院した後、帰宅途中の緑谷くんに「ウチも入れて!」と電話で懇願。

押しに負けた緑谷くんが許諾し、彼女もメンバーの一員になった。

この場にいるのは、緑谷くんが作った転送装置で呼んだのだそう。

ついなちゃんはと言うと、傷心したものの、すぐに立ち直って「誰かの世話にならなあかんな」と笑っていた。

彼女の親類は、全員がタルタロスにブチ込まれてしまった。
そのため、僕が引き取っても良かったのだが、伊織さんが「僕が引き取るよ」と申し出たことで、彼の養子となった。
毎日忙しいが、前よりはマシとのこと。
復讐の意思はないかと聞くと、「ヒーローがおるから」と麗日さんに激励を送っていた。
また今度遊びに来ると緑谷くんが伝えると、嬉しそうにしていた。

で。加入した麗日さんはと言うと。

「コレ、先生のお家にあった高そうなの切ってきた！
きりちゃんが『勝手に切っても文句は言いませんよ』って言うてたし！」
「麗日さん、君入って1日目ですよね？」

ダメだコレ。まだ比較的マシだけどクソガキ汚染始まってる。
僕にしか発揮されないクソガキぶりは一体なんなんだ。
ハイエナのようにフルーツに群がる子供たちを前にそんなことを思っていると、携帯

から着信音が響く。
一体誰かと思うと、警察からだった。
「誰からですか？」
「警察です」
「え？先生捕まるの？」
「失敬な。後ろめたいことは、君たちのこと以外ありませんよ」
僕はそう返すと、通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。
「もしもし？」
『すみません、静岡県折寺市在住の水奈瀬コウさんの携帯でよろしかったでしょうか？』
「ええ、合ってますよ」
『えーっと…、その…。説明が難しいので、本人に変わります』
困惑した様子の警官が言うと、耳に聞き覚えのある声が入った。

『私よ私。迎えに来い。東京湾最寄りの警察署。そこまで言えば分かるでしょ？』
「……あの、せめて名前言いません？」
『今更でしょ。とにかく迎えに来い。
航空機墜落して、太平洋のど真ん中から5時間も泳いで帰ってきて疲れたの』
「嘘でしょ!?」

前々から人間離れしてるなとは思ったけど、十年経って人間離れが深刻化してる!!
一方的に切られた通話に、僕はどっと疲れが出た。

「…ちょっと、迎えに行ってきます」
「え？誰を？」

ーーーーーー別居中だった妻ですけど？

『は？』
「え？」

『はアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッッッ!?!?!?!?』

瞬間。全員が素っ頓狂な声を上げた。

馴れ初めからして薄い本

「せ、先生…、結婚してたんだ…」
「居候の私も初耳でした。
指輪もしてないので、てっきり独身のまま生涯を終えるのかと思ってたんですけど…」
「失敬な。追求されるのが面倒なんで、外してるだけですよ」

言うのも小っ恥ずかしいが、妻を迎えに行って数分後。
磯臭かったので自宅の風呂にぶち込んで、十年ぶりの湯船を楽しませてる。

「馴れ初めとか気になります！」
「先生、いろんな意味で堅物っぽいから、ちょっと気にはなるなぁ」

と、女性陣。
結婚の経緯も、音信不通だったわけも、別居の理由も、あまり語りたくはないのだが

…。

まぁ、個人情報の秘匿なんて、この子達の前では意味をなさない。

別に他人に言いふらすような子でもないから、気にする必要もないか。

「『やっちゃった婚』です」

『へ？』

一言で言うなら、コレである。

デキ婚ではなく、『やっちゃった』。

ハッキリとは言わないが、まずいことをやらかしたのだ。

僕は被害者側だが。

…濁してもわからないな。正直に言おう。

ある程度の知識は、全員が身についてるし。

「僕がレ〇プされて結婚しました」

『は????』

「何言ってるのかわからない」みたいな顔された。
うん。大丈夫。僕もわかってない。
十年経った今でも、時々思う。
「なんでレ〇プ犯と結婚してんの？」って。

「出会いからして、ちょっと特殊でしたからね。まぁ、いろんな偶然が重なってこうなった…と思ってくれたら」
「すみません結婚までの経緯が特殊すぎて思考がショートしてんですけど」

そうは言われても、こうとしか言いようがないのだが。
馴れ初めとか全部すっ飛ばして、当時大学生だった僕は、高校生くらいの歳だった彼女に…まぁ、ハッキリ言うとレ〇プされた。
とある理由で傷心してた彼女を見つけ、普通に励ましたら、ものすごい怪力でホテルに連れ込まれた。
顔立ちも淡麗で、体は筋肉もついてないように見えるくらい綺麗なのに、アマゾネスみたいな生態してた。
十年も前のことだが、鮮明に思い出せる。

僕がもの思いに耽っていると、風呂から上がった彼女が全裸で部屋に入ってくる。

「脱げ。ヤるわよ」

『いろいろと隠せ!!!!』

全員でツッコミを入れた。

めちゃくちゃ目が血走ってる。

僕の財布からお札を抜いて買ったであろう、両手には『そういうこと』のお供が添えられている。

そうだった。この勢いに何も抵抗できずにベッドインしたんだった。

「脳内ピンクなの変わってませんよね。クール系の見た目してて」

「いいから脱げ。こっちは十年もお預け食らってムラムラしてんのよ。

我慢しすぎて股間爆発するわ。

ほら、脱げ。今すぐ脱げ。朝までコースね」

緑谷くんは特に何も感じていないのか、何もツッコミを入れない。

いや違う。自分と同類で「話を聞かないタイプ」ってことがわかってる目だ、アレ。
そんな「僕じゃどうにもできないんで、頑張ってください」みたいな目で見ないでくれ。
頼むから見捨てないで。

「いやいやいやいや子供の目があることに気づきましょうよ!!!」
「それよりも今昼なんだけど!?!?」
「先生殺す気ですか!?!?」
「バクゴーさん、見ちゃダメーっっ!!」
「いや見ねェっての!!そんなに下半身に正直な生き方してねェわ!!!」
「ショート!!見ちゃダメだよ!?」
「ショート!!見ちゃダメだから!!まだ早いからーーーっっっ!!!」
「見てない。大丈夫だから」

良かった。クソガキ筆頭でも常識はあったみたいだ。
東北さんがツッコミながら、緑谷くんの目を掌で覆う。
轟くんはうちの双子が、爆豪くんは音街さんが必死になって目隠ししてる。

世紀末を経験してるあかりさんたちも、素っ頓狂な声をあげてツッコミを入れていた。

「性教育ってことで見せてあげるわ。
あと、ウチの旦那は竿役としても優秀よ。
ネタにしてくれてもＯＫ」
「ダメだ話が通じねェ!!!!!!」
「動物かよ!!!」
「一番タチが悪いタイプだ!!!!!」

男三人からもツッコまれてるぞ、我が妻。

「後で相手しますから、一旦服着て落ち着いてください。君は情操教育に悪い。とても」
「……チッ。わかった」
「その間は何なん!?」

♦?♦?♦?♦?

「はじめまして、鈴木つづみよ。
十六の時に、この人と籍を入れたわ。
苗字の方はこっちの方が慣れてるから変えてないだけ」

その後、なんとか説得して彼女を止めた。
基本的に下半身に忠実な人だ。
今度の土日、全部使って相手することになった。
……本当に勘弁してほしい。普通に死ぬ。

「十六で逆レ〇プ…」
「先生って今年で３２だから、２２の大人を力づくでホテルに連れ込んだんですか…？」
「優しくされたら『抱いて!!』ってならないかしら？」
「テメェの場合は『犯す!!』だろォが」

爆豪くんのツッコミに、皆が一斉にその通りだと言わんばかりに頷く。
僕もその当時はまだ運動していた…というより、教職課程の都合上、授業で運動させ

られていたクチで、それなりには力があった。

だと言うのに、華奢な女子高生に拉致に近い形でホテルに連れ込まれた。

軽くショックだった。

「…これ、聞いてもいいか、分かんないんですけど……。

十年間も、どうして別居してたんですか?」

緑谷くんが問うと、僕たちは顔を合わせ、眉間に皺をつくった。

説明するのが、かなり面倒くさい。

彼女の生い立ちが関わり、更にそれもややこしいだけあって、余計に。

「…聞きたいって言うなら話してあげるわ。

まずその話をするには、私の境遇とか、諸々を説明する必要があるけれどね。正直、子供に話すようなモンじゃないし」

「子供に見せるようなモンじゃないコトやろうとしてた人が何言ってんだ」

轟くんがツッコミを入れるも、つづみさんはスルーして続けた。

「私、親が超弩級のクソ野郎だったのよ。
ネグレクトだけならまだいいけど、まだ三つのガキを小間使い扱いして、更にはサンドバックにするくらいには。
で、私は三つの時から、クソ親に死ぬほど殺意を抱いてたわけ」

サラッと言った。
まだまだ子供の緑谷くんたちは、彼女があっさりとその境遇を語ったことに、目を丸くしていた。

「でも、流石に個性もない子供が大人に勝てる、なんて思わなかった。
で、私は個性が出るまで待ったわけ。結局、無個性だったんだけどね。
結果、私は5歳で捨てられた。まぁ、ようは施設育ちなの。
聞けば私、戸籍の出されてない子供らしくてね。名前も『ガキ』としか言われてなかったから、施設の保母さんが名付け親なのよ」

空気が重い。

だと言うのに、当の本人は呑気にカフェオレを呷り、ケーキを頬張っている。

「十年ぶりの甘味美味っ」と無表情で声だけ弾ませる彼女に、皆は何も反応しなかった。

…出来なかったと言った方が正しいが。

「そこで私は、隠れて死ぬほどの鍛錬を積んだわ」

「な、何の…?」

麗日さんが問うと、彼女はあっけらかんと答えた。

ーーーーーー殺しの。

僕の妻、鈴木つづみは『殺意の塊』と呼べるほどに、殺意に溢れたスペックをしている。

その武勇伝は腐るほどあるのだが、それは本人の口から語ってもらおう。

「とは言っても、最初は無効化させる術を習得してただけ。

何処を叩けば気を失うか、何処を切れば殺さずに無力化できるか、とかね。

流石に本気で殺す…なんて思ってなかったわ。
医学の専門書を死ぬほど読み耽って、血反吐吐きながら体を鍛えて、どういう動きなら最速で生物を無力化できるかを研究したわ」

彼女は言うと、カフェオレの入っていた缶をこれ見よがしに見せる。
と。次の瞬間。スチール缶が真っ二つに切れた。

「爪で切っただけよ。
このくらいなら、十になる頃には出来てた」

あまりのデタラメに、全員の目が点になる。
天性の才というわけでは、決してない。
鈴木つづみという人間は、胸に燻り続ける『殺意』だけで、血反吐を吐くような努力をし続けてきた。
緑谷くんたちの同類であり、彼らとは違う想いでその実力を磨き続けてきた人間。

「並行して死に物狂いで勉強もしてたから、私は、小、中と成績トップの座を逃したこと

はなかったわ。
でも、だからかしらね。
受験する高校も選ばせてもらえず、雄英普通科を受験させられ、半ば無理やり進学させられたわ」
「……あっ」

と、ここで緑谷くんが声をあげた。

「あの、もしかしてですけど…。
十年前の雄英体育祭で、鎧袖一触で優勝してた方ですか？」
「体育祭…？ああ、あのアホみたいなレクリエーション。
あんなのやってヒーローが育ったら、敵なんてとっくに淘汰されてるっての」

緑谷くんの顔が面白いことになってる。
彼女が高校一年生の頃、雄英体育祭は未来のチャート上位で溢れかえっていた。
その錚々たる顔ぶれの伸びきった鼻っ柱を叩き折ったのが、彼女こと鈴木つづみ。
つづみさんが参加しただけで、十年前の雄英体育祭は午前中に終わった。

午後全てがレクリエーションに変わってしまうほどに、彼女の実力は圧倒的だった。
僕はリアルタイムでは見ていなかったが、ネットが大荒れだったことは覚えている。

「…十年前っつったら、雄英に結構居なかったか？今のチャート上位がかなり」
「…ったく。テメェらとつるんでから、超えなきゃなんねェ壁がポンポン出てくる…」
「……さりげに雄英体育祭を『アホみたいなレクリエーション』って言わんかった？」

ヒーロー志望組の反応は、各々違っていた。
つづみさんの底の見えない実力に、戦慄する轟くん。
これから超えていく相手として見据え、闘志を燃やす爆豪くん。
オリンピックの代わりを担う体育祭を「レクリエーション」呼ばわりしたことに、首を傾げる麗日さん。
緑谷くんはというと、静かに彼女のことを見つめていた。

「ケチが付いたのは多分ソレからね。
どうやら国から圧力がかかったらしくてね。
私は自主退学って名目で、強制的に退学させられて、更には施設も追われたわ」

彼女の言葉に、全員が息を呑む。
要するに、鈴木つづみは着の身着のままに世の中に放り出されたのだ。
「中卒を雇ってくれるトコなんて、何処にも無くてね。
雇ってくれても、謎の圧力で即クビ。
街中だったから、野生動物もいなくて、生ゴミ漁りながら生活してたわ。
…まぁ、そんな時に、たまたま。
講義の帰りのコウくんに会ったの」
あっけらかんとしているが、無表情が加速してる。イライラしてる証拠だ。
…まぁ、思い出したくもないことを語らせているのだから、当たり前なのだろうが。
だが、本人は語るのを止める気はないらしく、続ける。
「私を湯船に入れてくれた。
胃腸の弱ってた私にお粥を作ってくれた。
薄らと笑みを浮かべて、『気にしないでください。人として当然です』って言われた時

には、速攻でコンビニでゴムとか精力剤買わせて、最寄りのラブホに連れこんでたわ。
極限状況が続いたせいで、性欲旺盛になってたから」
『それで逆レ〇プか!!!!』

しまった。僕も思い出したくもないことを思い出してしまった。
いやぁ、激しかったなぁ…。いろいろと。
死ぬかと思った。
初体験がアレなせいで、いまだにちょっとトラウマなんだが。

「で。変な空気になって、『責任取ります』ってなって籍を入れたってわけです。
ね？『やっちゃった婚』でしょ？」
「うん。『やっちゃった婚』ですね」

僕の言ってたことの意味を理解したのか、東北さんが同情を込めた視線を向ける。
まぁ、結婚したことに後悔はない。
恋愛感情の確認は出来なかったが、互いに一緒にいて楽な相手ではあったのだから。

「で。なんで結婚直後に別居になったんですか？」
「私の行く先々で圧力かける政治家ブチ殺すための修行に出たの。
厄介な個性持ちでね。相手の殺意がわかるんですって。
心の奥底から誓ったわ。『殺す』って」

やけにあっさりと言った。
特段、隠す気もないらしい。それはそれで問題なのだが。

「敵性国家っていう世紀末地帯に行って、十年で一億は殺したわ。
今じゃ一秒で百は殺せる。
殺しを日常にしたのよ。十年もかけて。
そのくらいにならないと、バレずに殺すなんて芸当はできないって思ったから。
…ま、諸々の罪がバレて、死刑が執行されたらしいんだけど」

一億の人間を殺した女。
それが、僕の妻「鈴木つづみ」。
十年越しの復讐を遂げられなかった、理不尽の中で育ってきた殺意の塊。

同時に、緑谷くんたちが求めた、『敵を一瞬で沈める技術』を有する人間でもある。

「…あなた達の倫理観は、私とは違うと思うわ。理解できなくて結構。
私はこういう女で、水奈瀬コウの妻をしてる…。そのことだけは変わらないから。
ね？コウくん？」

「……ええ、まぁ。分かってて結婚しましたからね」

僕はつづみさんと結婚したことは後悔してない。
してないけど、このいろんな意味で隠し事をしないタチだけは好きになれない。
生徒たちのつづみさんを見る目は、複雑なものだった。

サバイバルにクマは付き物

「……先生、大丈夫ですか？」
「これが大丈夫に見えたら眼科行ったほうがいいですよ」

つづみさんが帰宅し、ある程度日が過ぎた。
身の回りの物の整理が終わり、魔の土日を過ごし、仕事を終えた月曜日。
僕はソファの上から一歩も動く気力が出ないほどに、疲弊し切っていた。
理由は…まぁ、アレだ。死を覚悟した。
何あれ？掘削でもしてんのかってくらい動き激しかったんだけど。
今は野暮用で訪れている緑谷くん以外は、なにかしらの用事で来ていなかった。

「そういえば、奥さんは？」
「そこで寝てますよ。ああ、刺激しないでくださいね。旦那の僕でも首元寸止めなんで」
「何が!?!?」
「刃物が!?!?」

「殺意満々!!!!」

死ぬかと思った。土日とは別の意味で。
寝顔は可愛いのに、起こそうとすると割と容赦なく殺そうとしてくる。
まぁ、十年も紛争地帯にいて「こうなるな」って言うほうが無茶だが。

「…意外でしたね。君たち、彼女のことを糾弾するかと思っていたんですが」
「……そうでしか生きられない環境があるってことを知らないほど、僕は世間知らずってわけじゃないです。
敵性国家に居たなら、なおさら」

緑谷くんは「納得はできませんけど」と付け足し、キーボードを叩く。
まぁ、納得できないだろうな。
これまで良くも悪くも、殺さないように努めてきた人間なのだから。
一応言っておくが、つづみさんを警察に突き出しても意味はない。
理由は簡単。彼女は敵性国家内でしか殺しをしていないから。
敵性国家における殺人は、合法である。

寧ろ敵性国家を滅ぼした功績は、国連平和賞受賞レベルの偉業としてカウントされる。

「…ついなちゃんのお父さんのこと、きりちゃんが一応録画してた映像を、かっちゃん、轟くん、麗日さんと一緒に…見ました」

緑谷くんがぽつり、と語り始める。

あんな凄惨な場面を録画してたのか、あのクソガキ。

そのことを叱ろうと心に決めるも、緑谷くんが「僕が頼んでたので、きりちゃんを叱らないでください」と止められた。

元は人工個性の解析のために依頼していたらしい。

「…どう思いましたか?」

「その…。うまく言えないんですけど…。多分、悔しかったんだと思います。

涙は出ました。…でも、誰も…、目を逸らしませんでした」

助けられなかったと言う事実から、目を背けなかった。

それだけでも、彼らはしっかりと成長していってるのだろう。
ただ、今回は少し、つまづいてしまっているようだった。

「……僕たちは、恵まれていて…。
誰も、身内が亡くなったとかがないから、人が死ぬってこと、あまりよく分かってなかったんです。
初めて見た人の死で、その…。怖くなったんです。助けられないことが」

今までの功績による弊害、と言うべきか。
緑谷くんは卓越した科学力で、多くの人間を助けてきた。
その功績によって、今もニュースでは国民たちが声を上げて彼を擁護している。
だが、ただ一つ。彼は関わった事件において死者を出したことが無かった。
初めて見る人の死が、自分が関わってしまった人の死が凄惨な物だったのだ。
つまづくのも無理はない。

「プロヒーローは、いつだってその重圧と戦っています。君はそれを知っただけですよ」
「…そう、ですけど…。

やっぱり、忘れられないんです。自分が、助けられなかった人間がいることが」

緑谷くんは言うと、マグカップに注がれたポタージュを飲む。

この重圧に耐えきれず、プロヒーローを辞す者は多い。

僕の知り合いも、耐えきれずに万年サイドキックという道を取った。

それ程までに、救えなかったことの責任というものは、重い。

中学生一人を容易く押し潰す程度には。

「…見苦しいわね」

と、声が響く。

僕たちがそちらを見ると、ずっと起きていたのだろうか、つづみさんが眼を擦ることもなく、普通に言葉を続けた。

「次の一週間、ヒーロー志望のあの子たちと一緒に学校を休みなさい。

私がちょっとした授業をしてあげる」

「え？」

緑谷くんが困惑すると、つづみさんの姿が消える。
視線を緑谷くんへと向けると、彼に距離を詰めたつづみさんが居た。

「科目は道徳。お題は『命について』。
人を殺せ、とは言わないわ。ちょっとの間、サバイバルで生き抜いてもらうだけ。
どう？ただの教師の授業よりは有意義だと思うけど」
「は、はひっ……」

腰抜かしてるぞ、緑谷くん。
彼女の言うサバイバルって、ガチのサバイバルしか思い浮かばないのだが、大丈夫なんだろうか。

「コウくん、ご実家の方に連絡しといて」
「最近クマが出没してますけど、大丈夫なんですか？」
「それも含めて授業するって言ってんのよ」

あー…。緑谷くん。強く生きてくれ。
そんな意思を込めて、彼に向けて合掌する。
当の本人である緑谷くんはまだ知らない。
想像を絶するサバイバル訓練にブチ込まれることに。

♦？♦？♦？♦？

「言われた通り、着替えは持ってきたぞ」
「サバイバルって言っても、イマイチ、ピンとこんのやけど…」
「……」

あれから数日。
とうとう月曜日を迎えたこの日、僕たち四人は山形県の月山に居た。
キャンプコース…などではなく、ガチの獣道の方に。
許可は取ったのかと聞くと、「とっくに取っている」と返された。
この近くに、先生の実家である農家もあるらしい。
興味はあるけど、今は自分の命の心配だけで手一杯だった。

「支給品よ」

からん、と音を立てて、四つのナイフが地面に転がる。
見たことがある。サバイバルナイフだ。
鞘に入ったそれを僕たちが拾うと、先生の奥さんは木の上に飛び乗った。

「ルールの説明よ。
それで一週間生き延びなさい。
『個性や科学を使う』、『ここから抜け出そうとする』という二つの行動を禁止する。
ペナルティとしてそれ相応の仕置きをするから、破るなら覚悟することをお薦めするわ。
どんな目に遭おうと助けないから、死ぬ気で生きなさい」
「「「はぁああ!?!?!!」」」

生身でこの山で生き延びろと!?
越冬準備中の獣が沢山の山で!?!?!!

個性も科学も無しで!?!?!?
そう反論しようとするも、彼女はそのまま姿を消した。
残された僕たちは、顔を合わせる。

「……この中でサバイバルの経験あるヤツ、手ェ挙げろ」
「居ねェよ俺らン家見たろ。こう言う自然とは無縁だったろ記憶力腐っとんのか」

かっちゃんが割と不機嫌だ…。
まぁ、いきなりこんな所に放置されて、沸点が人類史上類を見ない低さのかっちゃんなら機嫌を損ねるのも無理はないか。

「麗日さんは？」
「ウチは割に自然豊かやし、山菜取ったりしてるから、触ったらアカンのとか、そこらへんの知識はあるけど…。
野生動物の肉とか、捌いたことないで？」
「捌けても、多分口には合わねーだろ。調味料なんて持ってきてないからな」

麗日さんの言葉に、轟くんがため息混じりに応える。
まぁ、味気ないだろうな。
日本人の舌、ほぼ調味料で成り立ってるようなモンだし。
でも、摂らないという選択肢も出来ないんだよな…。

「肉捌くのはやりながら覚えろ。
内臓使わねェのと火ィ通すンなら、大抵はなんとかなるだろ。
今は手分けして、最低限安全が保障できる寝床を探すか作るかをすべきだろォが。幸い、物資はナイフ以外にもある」

かっちゃんは言うと、倒れた木を指さした。
倒れた木…というよりは、切られて放置された木だろう。
放置されてそこまで時間が経っていないのか、腐食も見られない綺麗な木材だった。

「え？こんな、売り物になりそうな木でも放置するん？」
「土建屋の娘のくせして知らねェのかアホ。
日本産の木材は高値過ぎて売れねェんだよ。

外国産のが遥かに安くて、値段の割に丈夫だからな。
だから、こーゆー伐採されて放置されたヤツが昔から問題になってんだよ」
「あ、アホちゃうわァ!!」

かっちゃんが怒鳴るんじゃなくて普通に罵倒してる…!!
その情報って、社会でちょっとだけ先生…中学の社会担当教師…が言ってた情報じゃないだろうか。
変な所でみみっちいかっちゃんだ。
プロヒーローになった後、いろんな問題解決に臨んで、着実に名声を築き上げてくるつもりなんだろうなぁ。

「それでも、自然林でここまで綺麗なモンってなると不自然だが…。
あの女の温情ってトコだろ。ご丁寧に貼り紙してあらァ」

かっちゃんは言うと、木材に貼り付けられていた紙を剥がし、内容を読み上げる。

「『自由に使いなさい』…ってよ。

コレだけじゃ、薪にしかなんねェが…。
デク、石削って斧作れ。テメェが一番手先が器用だろ」
「……かっちゃん、妙に詳しくない？」
「俺の趣味が登山なの知ってるだろ。
キャンプも兼ねて…って時に、雰囲気のために、薪は許可取って現地調達にしてんだよ」
「初耳なんだけど」

びっくりしたみたいな顔されても。
いや、マジで初耳なんだけど。
…小学二年の頃から、ちょっと疎遠だったからなぁ。
僕が発明に傾倒し過ぎて、周りとあまり関わりを持たなかったせいだけど。
お母さんからも、「友達作ったら？」って心配されたっけ。

「…兎に角、今は動け。
動かねェと、山のど真ん中で無様に野垂れ死んで動物のおまんまになるだけだ。
全員に役目を割り振るから、よく聞け。やりたくねェとか言ったら殺す」

サラッと言うと、かっちゃんは僕たちに役目を割り振った。
こう言う時にある程度の知識のある人が居ると便利だなぁ。

「麗日は山菜の採取、轟もそれに続け。
俺とデクは木材の調達と、火おこしの習得に集中する。野生動物は…リスとかウサギとかの小動物だけ狙え。猪とか攻撃性のあるヤツは間違っても手ェだすなよ死ぬぞ」

言うと、かっちゃんは「ほら、行けや」と麗日さんと轟くんに指示を出す。
麗日さんたちは特に不満はないのか、指示通りに奥へと進もうとして、ふと歩みを止めた。

「木の皮がひっぺ返されとるけど、コレ、なんかの印なん？」
「今すぐ木材担げ死ぬ気で逃げるぞ!!!」

その怒号とともに、僕たちは反射的に木材を担ぎ上げた。
先頭のかっちゃんが凄まじいスピードを出すためか、僕たちもつられて足が早まる。

「ちょっ、どうしたん爆豪くん!?」
「いいから死ぬ気で逃げろさもなきゃここでブッ殺すぞ!!!!」
「言っとること無茶苦茶や!!!!」

麗日さんに向けて怒鳴りつけるかっちゃん。
だが、ふとその表情が固まり、更にスピードを上げる。
僕たちもかっちゃんの見たものが気になり、ふと後ろを向いた。

そこには、山の王者が居た。

「「「クマァァァァァァァァァァァァァァァイヤァァァァァァァァ
アァァァァァッツッツ!?!?!?!?」」
「だから逃げろって言ったろォがァァァァァァァァァッツッツ!!!!!!」

僕たちのサバイバルは、前途多難なようだ。

轟「麗日、麗かじゃねーぞ麗日」麗日「だまらっしゃい!!!」

「麗日テメェ…!気づいたんなら、もうちっと…、早く言えや……!!
アレはクマの縄張り主張だっつーの次言わんかったらブッ殺すぞ……!!!」
「ご、ごめん…」

あれから３０分は走った。
どうやら気づかれずに縄張りからは抜け出せたようで、安堵からか僕たちはその場にへたり込んでいた。
このままでは会話もままならないので、切れた息をなんとか整える。
「絶対に確信犯だよね、アレ…。
あんなトコに放り出したのも、クマの縄張りってこと絶対に知っててやったよ…」
「やっぱ、先生の奥さんだわ…。性格の悪さは、夫婦揃って似てるのな…」
今思えば、彼女が登っていた木にも、クマが付けたであろう傷があった。

多分、奥さんなりの優しさだったんだろう。
彼女ならば、あのまま僕たちの前から姿を消すのは簡単だった。
一度、これ見よがしに木に登ったのには、ちゃんと理由があったのか。
優しさが不器用すぎて、どう反応すればいいのかイマイチ分からない。

「で、どうするの？
当初の予定の通りに動く？」
「ウチは…クマは嫌やなぁ……」
「気づかれたらエサ確定だ。最悪個性使って足止めする」
「ペナルティ受けることになるが…。ま、死ぬよかマシだ」

どんなペナルティが待ち受けてるかは分からないが、ロクでもないことは確かだろう。
ただ、死と比べれば遥かにマシだ。
クマへの対策はコレでいいとして…いや、いいってわけではないけれど。

「作業始めっぞ。日が暮れちまう。

昼飯は抜きにしとけ。出来るだけ食料を取っておきてェ。
苔を採取しとけ。絞って水にする。
間違っても川の水を持って来る、ないし飲むなよ。死にたかったら止めねーが。
水源を見つけられりゃ楽なんだが…、はっきり言って自殺行為だ。クマがアレ一匹とは限らねェからな」

かっちゃんの指示を聞く度に、どんどんと自分がとんでもない状況に置かれていることに気づく。
サバイバルって、テレビで見る分には楽しそうだったけど、ここまで過酷なのか。
…こういう体験って、今までしたことがなかったなぁ。

「おらデク。ボサっとすんな働け。麗日たちはもう行ったぞ。
働かないっつーなら飯減らす」
「働きます!!」

かっちゃんはデビューして速攻で事務所立ち上げそうだなぁ。
そんなことを思いながら、僕はせっせと石を削った。

♦？♦？♦？♦？

「はひゃあ」

「あかりちゃーーーーーーんっ!!!

無　気　力　す　ぎ　て　ア　ホ　に　な　っ　て　る　よ　あ　か　り

ちゃァァァァァァァァァァァァーーーーーーんっっっっっ!!!???」

その頃、緑谷家にて。

今日から出久がいないことに気がついたあかりは、顔面を崩壊させていた。

緑谷引子が叫ぶように、まさしく「アホ」と形容すべき崩壊っぷりだった。

♦？♦？♦？♦？

「やからそれは触ってもアウトなんやって轟くん今ここでブッ殺すで!?!?!?」

「麗日、麗かじゃねーぞ麗日」

「だまらっしゃい!!!」

しょーもない轟くんのギャグ…多分天然…をグーでシバいて、生えているキノコから離れさせる。
これで六度目だ。しかも同じキノコ。
殺したいとまではいかないが、本気で腹が立ってきた。

「…ほんまに山で遊んでたん？触っちゃあかんモンの区別も出来てへんやん……」
「知識があるのはヒメとミコトだ。山に関しては、俺は本当にクソ役立たずだ」
「胸張って言うなやからそれはダメなやつやって聞いとんのかボケ埋めてミミズどもの餌にするぞ!!!!」

前言撤回。本気で殺したくなった。いや、ほっといたら死ぬから止めてるんだけど。
コイツは本当に人の話を聞いてるのか？
素人がキノコに触るなって常識も知らないのか。
怒りが爆発するのをなんとか堪え、可食である山菜やら雑草を取る。
貧乏を経験してたことが役に立った。
そんなことを思っていると、轟くんが口を開けた。

「顔に反して言葉遣いが爆豪じゃねーか」
「あ、た、り、ま、え、や、ろ、ど、れ、だ、け、あ、し、ひっ、ぱっ、て、る、と、思っとんのじゃアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ!!!!!!!!!!」
「ひでぶゥ???!!!」

アッパーをかましてやった。
話してる途中で八度も毒キノコ触ろうとするのは何なの？
そしてこの毒キノコの群生率は何なの？
…そういえば、クマの縄張りの件もわざとって言ってたなぁ。
ここら辺、有毒植物の群生地になっているのも、計算のうちなんだろうか。

「轟くん、そこの草取ってくれる？それは食べられるから。
あと、そこの苔も絞ったら水出るし」
「…麗日、詳しいんだな。
社長令嬢って聞いたから、てっきり…」

轟くんが言葉を濁す。
確かに、私の父親は会社を経営してる。
経営者として、社長として会社を引っ張っていて、私もその苦労を知っている。
今でこそ順風満帆ではあるけれど、幼い頃は暮らしていくのも一苦労だった。
「…自慢やあらへんけど、先生が株主やるまでは、ほんな裕福じゃなくて…。
父方の爺ちゃんな、優しいんやけど…会社の経営者としての才は無かったんよ。
そんで、父ちゃんが引き継ぎした時は、かなりの貧乏会社でさ。
せやからさ、食べられる雑草とかは、いろいろ知ってるんや」
先生には感謝してる。
家が裕福になったのは、紛れもなく先生の『教育』があったからだ。
私は先生の授業を受けたことはないけれど、緑谷くんやきりちゃんが言うには、「教育者としては優秀」らしい。
…現実に負けない「夢」になるには、多くの現実に打ち勝たなきゃいけない。
先生や緑谷くんは、その多くの現実と向き合って、戦い続けてきた人。
なら、目の前の現実にも勝たなきゃ、ヒーローなんて名乗れない。

「…伊織さんに頼らなかったのか？」

「ウチの家族は、お金のことで親戚の手を借りるほど、面の皮が厚いわけやあらへんかったから。

それは…解毒できるけど、どのみち危険やから、放置な。触らんとき」

脳みそみたいな形をしたキノコに手を伸ばそうとする轟くんを止め、雑草を取らせる。

動物も捕まえろ、とは言われたけど、正直言って無理だ。

最初こそはリスやらウサギやらを捕獲しようとしたけど、流石にすばしっこかった。

次に会ったのは鹿。やっぱり逃げられた。

次に会ったのは猪。死ぬ気で突進を交わして撤いた。

母ちゃんは、捕まえるの上手かったなぁ。

「…罠とか、考えんとな……」

自然のもので作れる罠もあるはずだ。

使えそうなものは採取しておこう。
あいにくと、私はそこまで頭が良くない。
こういう罠作りって、デクくんが向いてるだろうな。

「……そういや、あかりちゃんは許可したんやろか。デクくんにべったりやったやん」

仲睦まじいカップルだったけど、本当に大丈夫なんだろうか。
デクくんはあんなんだから、割に平気そうだけど…。
あかりちゃんは今頃荒れてそうだ。
そんなことを思っていると、轟くんが私の疑問に答える。

「あっさり了承したと思うぞ。
『自分が足枷になるわけにはいかない』って理由で。
あの2人の関係性は、持ちつ持たれつって訳じゃねェ。互いを尊重しすぎて、互いに一歩引けてんだ」

…そういう関係なのか。

まぁ、確かにデクくんはヘタレそうだし、あかりさんはデクくん優先主義だから、彼の嫌がることはしないか。
と、ここでふと、あることを思い出した。

「轟くんのお父さんは、許可出したん？
結構がんじがらめって聞いたけど」
「あのアホ、『焦凍を連れて行きたければ、俺を超える指導ができると証明しろ！』って襲いかかってな…」
「……どうなったの？」

なんかもう、結果が見えてる気がする。
でも、問わずにはいられなかった。
事件の解決数だけで言えばＮｏ．１を誇るエンデヴァーと、十を超える敵性国家を一人で滅ぼした奥さんの戦いの結果を。

「親父は、負けたよ。三日三晩、戦いっぱなしだったけど、負けた。
殺さないように手加減されて、だ。

奥さんは、殺しに特化しまくってる人間だ。
それが殺しを封じたってことは、実力の半分も出してねェのと同義なんだよ」

轟くんの目は、上を見上げていた。
天高く聳え立つ壁を見上げるように、ただ上を。

「親父でも勝てなかった。
だから、聞いたんだよ。誰か、お眼鏡にかなったプロヒーローは居ますかって」

轟くんが言葉を区切った。

「イギリスのＮｏ．１。弱い個性で、敵性国家の戦地を五年間生き抜いた猛者。
殺しの腕はそこまでだけど、戦力としてはピカイチだってよ」

イギリスのＮｏ．１。個性は覚えていないけれど、かなり弱い個性だと聞いた。
頭が悪ければ使えない、とも。
だけど、イギリスのＮｏ．　１はその個性で、敵性国家での戦いを五年も生き残った。

…というのを、バラエティで見たな。

「…会ってみたいね、イギリスのＮｏ．　１」

「奥さんの下で修行してたら、ひょっこり連れてくるかも知れねーな。似た者夫婦だし」

「ね」

そのためにも、まずはこの一週間を生き残らないと。

私は気を引き締めて、採取に集中した。

「やからそれは触っちゃあかんって!!!」

「これもダメなやつか?」

「十回目!!同じキノコやし!!!!」

無知って怖い。

父ちゃん、母ちゃん。アホみたいな点数取る子でごめん。

これからはちゃんと勉強するわ。

♦?♦?♦?♦?

「順調ね。…轟くんはアレ、反応を楽しんでやってるわね。

あの性格の悪さ、コウくんの影響かしら?」

きりちゃんから貰った監視カメラの映像を見ながら、一人呟く。

同じ森の中で映像越し…ってのも変な話だけど、視野が広がるのは悪いことじゃない。

私は襲いくるクマの脳にナイフを突き立て、絶命させる。

敵性国家で飼われてたのを食べたくらいで、かれこれ三年は食べてない。

今晩の献立が決定したところで、と。

「そろそろ出てきたら?尾行が下手なのは、十年経っても変わらないのね」

ナイフの血を払って、こちらに視線を向ける存在に問うた。

彼と私の接点は、母校が同じとしか言えない。

それほどまでに薄い関わりだけど、私は彼のことを知っていた。

「ねぇ、世界が認めるオールマイトさん？」

筋骨隆々としたシルエットが、木の裏から姿を現す。

堀の深いその顔には、申し訳なさを表現するかのように、微妙な表情を浮かべていた。

「……や、やぁ、久しぶりだね、鈴木少女…。

最近、帰国したと聞いてね…」

「どうせ国からの命令で、私の説得を依頼されたんでしょう？」

日本という国の評価は、正直言って最底辺も良いところだ。

中枢にまで敵に侵されていた。

その事実だけで、世界中が石を投げているような状況だ。

まぁ、アメリカやら、オールマイトに救われた経験のある国は、そこまで激しく批判してるわけではないけれど。

敵性国家に片足突っ込みかけてるのは、変わりない。

十を超える敵性国家を殲滅した私は、脅威以外の何者でもないだろう。

「相変わらず鋭いな、君は…」
「それ以外の理由で、私を尾ける理由が見当たらないもの。
…まぁ、感情で動くアナタのことよ。
私を見かけてアホみたいに尾行してた…なーんてこともあるわね」
「うぐっ…」

…今回は後者か。
多分、見つかったのはあの子達を放った後。
あの時は久々の汚染されてないアケビに興奮して、普通に気配を消すのを忘れてた。
私が軽く後悔していると、目の前の筋肉ダルマは頭を下げる。

「十年前の強制退学…食い止められなくて、申し訳なかった…」
「退学時にも言ってたわよね。あの政治家の外堀埋めてたって。
本当、余計なことしてくれたわ。私が殺そうって思ってたのに」
「っ、そこまで歪んで…」

歪んでる、と言われたが、私からすればこの国の方がイカれてる。
平和の象徴。あまりに強大すぎる正義が君臨し、限界ある平和だということに気付かずに日々を謳歌している人が集まる国。
その要たるオールマイトでさえも、敵性国家には足を踏み入れない。
だから、私の考えを知らないのだろう。
…これだから、この人には本当に腹が立つ。

「歪んでる？聞くけど、何も殺さないことが正しい、なんて言えるの？」
「…だからといって、人を殺すわけには…」
「私でよかったわね。試しに、フ…ああいや、イギリスのＮｏ．１にも言ってみたら？彼女、烈火の如くブチギレるわよ」

敵性国家を経験した人間にとって、道徳教育は足枷にしかならない。
だって、ふんじばっても突き出す先がないんだから。

「…君は、日本を滅ぼす気なのか？」
「まさか。里帰りに来ただけよ。旦那の〇〇〇が恋しくて」

「ぶっふぅ!?!?」

吹き出した。汚い。

「と、年頃の乙女がそんな淫語を堂々と…」
「結婚してるわ。○○○が優秀でいて、すごく頑張り屋さんな旦那と」
「紹介するにしても男根についての情報は要らなくないか!?!?
私も知りたくはないし!!!!」

イギリスのあの子とは、すごく盛り上がったのだけど。
こっち関連の話題で盛り上がらないなんて、日本は変ね。

「というか、結婚してたのか!?いつ!?」
「十年前」
「嘘だろ!?!?」
「退学して一ヶ月後に出会って一目惚れしたから私が無理やりホテルに連れ込んでレ○プした後にお互い了承して籍入れた」

「情報量!!! 情報量が多い!!!!」

そうは言われても、こうとしか言いようがないんだから。
〇〇〇にも惚れてるけど、人柄にも惚れてるのは本当だし。
別に体の相性だけで結婚したわけじゃない。
責任を取ってもらった訳でもない。
お互いにきちんと了承して結婚したのだ。

「まぁ、それはさておき」
「さておくには大きすぎる話題なんだが…」
「日本には手を出さないわ。安心して。
旦那との〇〇〇に専念するために帰ってきたから」
「だからオブラートに包んでくれない!?」

私は言うと、クマの死骸を担ぎ上げ、木の上に飛び乗った。

「いつまでも私のことを申し訳なく思わないでくれるかしら？

私は自分で選んだ人生を歩んでるつもり。
誰かに文句を言われる筋合いはないわ」

それこそ、本当に腹が立つ。
私のことを勝手に不幸だと思うな。
私の人生が不幸せに満ちたものだと勝手に決めるな。
私の幸せは、私が掴んでるんだ。
横からとやかく言うな…と言っても、コレは聞かないんだろうな。

「じゃあね。Ｎｏ．１ヒーローさん」
「待ちたまえ、鈴木しょ…」

私はオールマイトが制止するのを聞かず、気配を消した。

ーーーーーー殺すなら、殺した命に責任を持ちなさい。その犠牲の上に立っていると、強く自覚し、忘れないでください。農家の息子からのアドバイスです。

「……あのくらいは言えないのかしら？本当、日本って気持ち悪いくらい呑気ね」

先生・オールマイト「誰か助けて!!」

問題児が来なくなって三日が経った。
すごく平和なのはいいことなのだけれど、べったりだった子供たちの元気がない。
あかりさんは四六時中、虚空を見つめて呆けてるらしい。
ウチの双子は、少し寂しそうにするだけで、そこまで心配はしていなかった。
音街さんは例外で、「バクゴーさんが居ないうちに外堀埋めます!」と張り切ってた。
爆豪くん。音街さんにウチの嫁と同じ空気を感じるが、強く生きてくれ。

「…先生、どうかしました?」
「ああ、いえ。なんでも」

…ウチの嫁も子供できたら大人しくなるだろうか。
そんなことを考えながら、注文したコーヒーを啜る。
現在、僕と東北さんは、ある人を連れて喫茶店に訪れていた。

「で。どれだけ宿題出してないんですか?」

ある人、と言うのは、彼女の姉。

東北純子…通称「ずん子さん」だ。

放課後で散歩していたところを、偶然ばったりと出会った。

宿題の提出率の悪さの話になり、ずん子さんが怖い顔しながら「先生も交えてお話ししましょう」と言うことになったのだ。

東北さんがこの世の終わりみたいな顔してるけど、無視しとこう。

「はっきり申し上げると、一学期前半のものは全て故意で忘れてます。面談時の録音もあるので、それを聞いていただければ。

後半の授業態度、提出率、テストの成績が良かったので恩赦を与えてるだけで、それがなければ容赦なく成績下げてますよ」

「き・り・ちゃ・ん……?」

わぁ。どっちも顔が怖い。

でも、それは自業自得と思ってほしい。

レトロゲーム…僕らの前世からしたら最新ゲーム…にかまけた罰だ。
成績の減点作業って、結構面倒なんだからな。

「二学期になってからは割に真面目ですよ。
宿題への意欲は少ないですが、学ぶ意欲が皆無な訳ではありません。
全体的な成績はかなり良いので、早めに中学、高校の勉強を抑えておくことをお勧めしておきます。
最近はプログラミングに夢中だそうで」
「はい、わかりました。きりちゃん、先生にお礼は?」
「……あ、ありがとう、ございます」

血涙流してる。
お叱りが確定した子供からの視線は、やはりいつ見ても複雑だ。
僕が悪い訳じゃないのに、向こうが「先生が悪い」みたいな目をするから。
成績に関しては、本当に僕は贔屓目を入れてない。
生活態度の採点とかもあるけれど、余程人道に逸れてない限りは、そこまで抑圧しない主義だ。

「……あら？先生、結婚したんですか？」

ずん子さんが脈絡もなくブッ込んできた。

何処でバレた、と思うも、指輪を外し忘れたことに気づく。

しまった。すっかり油断していた。

行為中は繋がりを強く自覚したい…というつづみさんの要望で、指輪をしているのだが、昨日から外すのを忘れてた。

だから職員室の全員が目を丸くしてたのか。

「いえ、十年も前に籍を入れたんですが、ある理由で別居してたんです。

追求されるのも気分が良くないので、外してたんですよ。

最近になって帰ってきたんで、もうその必要もないかと…」

「まぁ！奥さんはどんなお方ですか!?」

すごい食いついた。

十年で十を超える国を殲滅できるバグです…なんて言えるはずもなく。

当たり障りのない内容だけ、それとなく伝えることにする。

「逞しい女性ですよ。子供たちの教育にも意見してくれて、すごく助かってます。外見も魅力溢れる女性でして…」

「写真とかありますか？」

「ええ、まぁ」

写真かぁ…。九割九分九厘『そういうこと』を収めたＡＶのシーン集みたいなことになってるんだが。

液晶を隔てるとそこまで反応しないな、なんて思いながら、相手から見えないように、普通の写真を見せた。

「綺麗な方ですね！出会いは!?馴れ初めとか聞きたいです!!」

「あ、あはは……」

頼む、緑谷くん。助けてくれ。

こんな喫茶店の中でレ〇プなんて言えない。

サバイバルしてる緑谷くんにＳＯＳを送っても、返事が返ってこないことは分かりきっていたが、そう思わずにはいられなかった。

♦？♦？♦？♦？

「……オールマイト。

彼女が帰ってきた理由が言いにくい、というのは、どう言うわけかな？」

私は平和の象徴。誰かに助けを求めるのは、本当に限られた時だけ。

ヒーローになる際に誓ったソレを反故するようで気がひけるが、言わせて欲しい。

誰か助けてくれ。

このままだと猥談おじさんになってしまう。

現在、私は母校の校長室に居た。

私の事情を知る数人が私を囲み、とある少女…今は女性…について問いかける。

名は鈴木つづみ。十年前、我々の力不足によって不利益を被った少女。
私は人伝いに聞いただけだが、単身で敵性国家に渡り、十を超える国家を滅ぼした…という逸話がある。
聞いただけなら一笑に付すが、私は敵性国家に渡る前の彼女を見たことがある。

ーーーーーーくだらない。ヒーロー科って何を教えてるの？おままごと？

十年前の雄英体育祭。
それは圧倒的な理不尽として、生徒たちの前に立ちはだかった。
恐らく、目の前の生徒、プロヒーローの大多数は彼女が何をしたか見えなかっただろう。
鈴木少女が使った技術は、『存在感を操作する技術』、『視界から外れる技術』、『人間を気絶させる技術』の三つ。
フィクサーが使っていた、という前例があったからこそ、私もその三つを見破れた。

ーーーーーーあのバケモノを、雄英から追い出せ!!

常軌を逸した技術で瞬く間に頂点を勝ち取った彼女は、ソレに恐怖を感じた者たちによって排斥された。
私がなんとか彼女を引き止めようとするも、彼女自身も雄英に…いや。この国に愛想を尽かしていた。

ーーーーーー出てけって言ったのは国よ。

そこから彼女は、行方をくらませた。
情報は度々入ってきたが、詳しいことを知ったのは前日だった。

ーーーーーー旦那の○○○が恋しくて。

まさか猥談混じりの惚気話を聞かされる羽目になるとは、全く思わなかった。

「…オールマイト?どうして黙っているんだい?」

言えるか?この状況で「旦那の男根が恋しくて帰ってきたそうです」と。

幾度もの修羅場を潜り抜けてきた私でも、これだけは無理だ。
どうしよう。どうやって誤魔化そう。
誤魔化さないと社会的に死ぬ。
この校長のことだ。誤魔化したところで、普通に見破ってくるんだろう。

「え、えっと、その、ですね……」
「…そんなに言いにくいことなのかい?」

じゃあ貴女この空気で言えるんですか!?○○○とか、○○○とか!!!

圧が凄いリカバリーガールに心から叫びながら、どう誤魔化すかと頭を回す。
…うん。正直に言った方が早いな。でも、それだけは口に出したくない。
ヒーローとして…というか、男として終わる気がする。

「オールマイト。さっさと言ったほうがいいよ。アンタはわかりやすいからね。
アンタが鈴木つづみが帰国した理由を知ってるのは、もうバレてるよ」

「えげぇっ……!?」

変な声が出た。

マジか。ここで公開処刑されろと？

よりにもよって、これからも付き合いのある恩師の前で？

「言った方がいいよ、オールマイト」

「言いな、オールマイト」

助けてくださいお師匠ォ!!!

ーーーーーー気にするな俊典！これから大きくなるさ！旦那のアレは、高校くらいから凄かったぞ!!

ーーーーーー教え子になにセクハラしとんのじゃお主はァ!!!

あ、ダメだ。お師匠も同類だった。

猥談になると元気だったな、お師匠。

事あるごとに、グラントリノにハリセンで叩かれていたな。
こんなことで在りし日のお師匠を思い出したくなかった。

「「オールマイト!!」」

グラントリノ、助けてください!!!
平和の象徴は屈しない。屈しないけど、コレだけは勘弁して欲しかった。

♦？♦？♦？♦？

「そっち行った！デク、捕まえろ！」
「任されっ、たァ!!」

手の中に、その命が収まる。
僕が掴んだのは、小さなリスの体。
僕はサバイバルナイフを構え、リスの命を手折るべく、その鋒を向ける。

「……っ」

が。その瞳と目が合うと同時に、僕の手から力が緩んだ。
そのことを察知したリスは、あっさりと僕の手からすり抜け、茂みの中を逃げていく。
かっちゃんはと言うと、リスを逃した僕を罵倒するでもなく、淡々としていた。

「……やっぱ、目が合うと、ダメだな」

かっちゃんの一言に、この三日の全てが収束されていた。
僕たちは現在、ヴィーガンでも目指しているのか、と言うほどに肉を口にしていない。
捕まえられないって訳じゃない。
幸いにも、リスやウサギなどの小動物は捕まえられるようになった。

「…触っても、分かるんだ。この子たちも、必死に生きてるって」

だけど、そこから先のことを、僕たちはよく分かってなかった。
その手に握った、小さな命。

それを奪って生きてきた…というのは、十分に理解しているつもりだ。
だけど、いざ自分が奪うってなると、どうしても手が止まる。
麗日さんも、轟くんも、あのかっちゃんだって、手を止めた。
虫を殺しても何も感じない、というのは分かる。体液、体の作り、何もかもが違うのだから、その感覚があまりない。
だけど、哺乳類は別。
自分と似通った生命体であると言うことが分かっているからこそ、躊躇ってしまう。
結果、力が緩んで逃げられる、というのが、最早恒例と化していた。

「ンなこと、百も承知だろォが。
分かってなかった、とかじゃねェ。分かろうとしてなかっただけだ」

かっちゃんは言うと、足元に少しだけ目をやって、すぐに逸らす。
分かってない、という言い方は、確かに相応しくないのかもしれない。
僕たちは命を犠牲にして生きている。
そんな当たり前のことが見えなくなるほどに、僕らは手を汚してこなかった。

「……奪った命には、責任が伴う」
「え…？」

かっちゃんは言うと、その場でかがみ、立ち上がる。
その手には、足から血を流すウサギの首根っこが掴まれていた。
多分、罠を張っていたんだろう。
足を怪我したウサギの喉笛に、ナイフを当てる。

「……デク。俺がやること、見てろ」

ぞぶり。
かっちゃんは、躊躇いがちに、力を入れる。
血が毛皮を濡らす様に、思わず目を閉じてしまいそうになる。
だけど、必死に目を開けて、その様を見届けた。

「……、っそ、がぁああ……っっ!!」

かっちゃんが慟哭のような叫びをあげて、その首を切り落とした。
だくだくと流れ落ちる血液、切り落とされ、転がり落ちる頭。
その全てを、かっちゃんと僕は、しっかりと見た。

「……解体するぞ。手伝え」
「……うん」

僕らは、命を奪うことを覚えた。
脱力感にも似た感覚が胸を覆い尽くす中、かっちゃんの言う通りに、ナイフを受け取り、その内臓を取り除く。

「……かっちゃん、泣いてる?」
「…ねェよ、バカ。…鏡、見ろや…。テメェだよ、泣いてんのは……」

僕たちは、二人して泣いていた。
理由はわからないけど、泣かずにはいられなかった。

一週間の終わり

「ちょっと待ってください。鈴木つづみ…って言いました?」

鎌倉山事件、梅ノ空事件、そしてこないだの「異能解放軍事件」を調べていたところ。

寝不足の俺…ホークスに、寝耳に水な情報が飛び込んできた。

鈴木つづみ。

一躍、国内で徹底的に排斥され、ある男と婚約した後に単身で敵性国家に渡った女性。

どうせ死ぬだろう、と誰もがタカを括っていたが、最近「太平洋のど真ん中から普通に泳いで帰ってきた」という。

俄には信じられないが、彼女なら普通にやりそうだ、という謎の納得が国の上層部を襲ったのは言うまでもない。

その男の家に行って、今回の「世界の危機」への対処のため、協力を仰ごうかと思っていた矢先のことだった。

ヒーローとして先輩に当たる『ミルコ』さんが、俺の事務所に訪れたのは。

「おう！アタシの先輩！最近帰ってきたって聞いてさ！
昔から仲良くしてたんだけど、あの人連絡手段持ってねーから連絡取れねーんだよ！
結婚祝いも十年遅れだけど、渡さなきゃ失礼だろー？てなわけで、探すの手伝え!!」

十年遅れの結婚祝いって聞くと、失礼なイメージしかないな。
そんなことを思いながら、鈴木つづみに協力を仰ぐにあたり、ミルコさんが利用できる存在であることをメモする。
鈴木つづみは育った境遇からか、かなり気難しいと聞く。
また、オールマイトの話によると、日本の倫理観がまるで通じないらしい。
そんな相手に、俺が協力を仰いでも効果は薄いだろう。
ならば、友人関係にあると言うミルコさんを利用するまで。

「手伝う必要はありませんよ。旦那の住所は割れてます」
「へぇ、そうなのか！どんな男か気になってんだ！案内しろ！」
「わかりました、わかりました」

まったく。その男…『水奈瀬コウ』さんとやらも災難だな。

そんなことを思いながら、俺は訪問の段取りを決めた。

♦？♦？♦？♦？

「……やるぞ」

帰宅日の朝。
僕たちはある存在を前に、ナイフ片手に覚悟を決めた。
薄い茶色の毛に、細い四足。
ツノは既に切り落としたものの、その顔つきだけで、その動物が何かが分かる。
その名は鹿。たまたま、麗日さんが仕掛けた罠に引っかかっていた一匹。
即座に命を終わらせなければ、確実に暴れられてしまう。
僕たちは役目を分担して、鹿の命をいただくことにした。
放血とトドメは、轟くん。洗浄して内臓を除くのは僕。皮を剥ぐのは麗日さん。
かっちゃんは、食べられる部位のみを捌く。
何度も繰り返した。
何度も何度も、僕たちは命を奪った。

人並みの大きさはある鹿の鎖骨に、轟くんがナイフを差し込む。

「……っ、すまねェ……っ!!!」

何度目かも分からない謝罪を口にしながら、ナイフを下ろして放血する。

滝のように溢れ出る血に、僕たちは溢れそうになる涙を堪える。

いつもより量の多い血に、目の前の命が無くなっていく実感が、強くのしかかった。

「……」

僕は洗浄して、鹿の臓物を取り除く途中、何も言わなかった。

命をいただいている。いくら謝っても、そのことには変わりない。

だったら、真剣に向き合うべきだと思ったから。

僕は、謝罪を口にはしなかった。

「……ごめんな。ごめんなぁ…っ。家族、居たんやろぉなぁ……っ。お友達も、おったんやろぉな……!

ごめんな、ごめんなぁああ……っっ!!!」

麗日さんは、終始謝りながら、その皮を剥いでいった。

皮のない肉塊になっても、彼女は謝り続けていた。

「……」

かっちゃんも、何も言わなかった。

淡々と解体し、一部を僕たちに渡す。

血すら、肉の量からは考えもつかないほどに、ほとんど滴っていなかった。

「……今日、ソレ持って帰るぞ。

命を奪ったって証拠として、しっかりいただきやがれ」

かっちゃんの言葉に、僕たちは頷く。

そう考えると、この鹿も、最後の獲物には相応しかったのかもしれない。

麗日さんの提案で、「最後に命を奪ったことを、目に焼き付けよう」ということで、僕

たちは罠にかかった獲物を仕留めた。
思えば、多くの命を奪ってきた。
生きるために、その命を貰ってきた。

「命について…か」

命の向き合い方を、僕たちは知った。
この長い一週間で、多くの命を躊躇いながら終わらせてきた。
何度も、何度も泣いた。肉が裂ける感触が、今でも手に残っている。
多分、これからもずっと、この感覚を忘れない。

「お疲れ様。一週間、よく頑張ったわね」

僕たちが達成感と脱力感にその場に立ち尽くしていると、奥さんが姿を現した。
僕たちは奥さんの前に並び、彼女の話に耳を傾ける。

「命との向き合い方、わかった?」

奥さんの問いに、僕たちは頷いた。
この一週間、散々話し合って出した結論。
代表として、僕が一歩前に出て告げる。

「……僕たちは、沢山の命を奪ってます。
社会では罪のない人でも、その命は、多くの命の上で成り立っています」

拙くてもいい。
この一週間で出した答えを、精一杯の言葉に乗せて、彼女に伝える。

「僕たちが助けられなかった命も、僕たちが奪ってきた命も、同じ命です。
誰しもに与えられた、最初で最後の一回なんです」

僕たちより器用な生き方は、沢山あるんだろう。
だけど、僕たちはヒーローだから。
こんなにも、不器用な答えしか出せない。

「だから、僕たちは…。
その一回を奪ってしまった、失ってしまったことを…、これから一生背負いながら、生きていきます。
これが、僕たちが出した、命への向き合い方…です」

僕たちなりの、精一杯の答え。
それを聞いた奥さんは、僕たちの前で浮かべなかった表情を、初めて浮かべた。

「なら、私はその答えに口は出さないわ。
その答えは、あなたたちだけのもの。
私がその答えに横槍を入れる権利はないわ」

奥さんは、僕たちの出した答えを認めもしなければ、否定もしなかった。
本当に、こういうところも先生に似てる。
そんなことを思っていると、彼女は下げたクーラーボックスを下ろし、懐からラップを取り出した。

「ラップにクーラーボックスよ。そのお肉、包んで入れましょうか」

僕たちは言われた通りに、肉をクーラーボックスに入れる。

こうして、僕らの長い一週間は終わった。

この一週間が色濃くて、僕たちは忘れていた。約一名のせいで悪夢の祭典と化しそうなイベントが、すぐそこに迫っていたことに。

ガチハロウィン、開催
先生、青筋でメロンになる

緑谷くんたちがサバイバルから帰還し、一週間後。
つづみさんは彼らのことをいたく気に入ったらしく、空いてる日に希望があれば稽古を付けることになった。
現在、僕は子供たちを連れて、興味本位でその稽古場…緑谷くん作の浮遊大陸…に訪れてるわけだが…。

「…ば、バクゴーさんたち、大丈夫？」
「「「大丈夫に見えるか？」」」
「見えませんごめんなさい」

死屍累々としていた。
目の前で一方的にボコボコにされた四人は、大の字で寝転びながら音街さんに問う。
プロヒーローでもここまで容赦のない訓練とかやるんだろうか。

「親父のよりはマシだぞ。アレはただのアホだ。アホアホの実を食ったアホ人間のダメ親父だ。まるでダメな親父でマダオだ」
「エンデヴァーのことになると饒舌に貶しまくるよね、君…」

父親が嫌いすぎて反抗期が天元突破してる。
縁切られるんじゃないか、とも思ったけど、むしろ喜びそうだ。
下手なエンデヴァーアンチよりアンチしてるな、轟くん。

「エンデヴァーの強みは冷静な判断力と、長年磨き上げた個性によるものよ。
国内なら、彼に敵う敵は少ないんじゃないかしら?そうなると、必然的に、格上との戦闘も経験しなくなる…。
だから、前例のない事態に非常に弱い。
テンパる事態に陥ったことも少ないから、テンパった時のリカバリーが極端にド下手。
轟くんにもその癖があるから、矯正が効く今のうちに叩き直すわよ」
「わかりました……」

エンデヴァーと似た欠点があると言われて、露骨に嫌そうな顔をする轟くん。
血縁までも嫌ってそうだ、アレ。
…そういや、つづみさんが轟くんをサバイバルに誘う際、突っかかってきたからブチのめしたって言ってたな…。
今度、菓子折りを持って謝りに行こう。
つづみさんの「殺すこと前提の強さ」は、戦闘において「ヒーローとして対応するための強さ」よりも理に叶ってる部分が多い。
彼女がエンデヴァーに勝てたのは、それが大きな要因だろう。
殺しを極めた女に心をへし折られて、変な方向に向かわれても迷惑だ。
よそ様の家庭に口出しするのは気がひけるが、轟くんのために動いた方が良いのかもしれない。
「お茶子ちゃんは、格闘のセンスはズバ抜けてるわ。体運びがすごく上手。
でも、本格的にやったことがないから中途半端に終わってるのよね。
コウくんの知り合いに、格闘術が得意な子がいるから、師事を仰いでみたら？」
「は、はひ……っ」

麗日さんが息も絶え絶えに、つづみさんの言葉に頷く。
あの子には、初めて女の子を紹介するなぁ。
修行した後にスイパラを連れ回す未来が鮮明に見える。

「爆豪くん。個性を使った立ち回りは、かなり上手いわ。
ただ、動きがパターン化し過ぎ。対処された時の対応も、初見だったら通じるけど、二度目からは通じないわ。
全体的にパターンの使い回しが多いから、臨機応変に対応できるまで徹底的にやるわ。
地獄見るけど、覚悟はできてる？」
「わーってらァ……！次はブッ殺す……!!」
「あと、殺意も中途半端。
それを使ったフェイントも重ね合わせたら、手数が増えるのと同義なのにね」
「……っ、そがァ!!!!」

爆豪くんの「殺す」、本職には通じないことが判明。

顔面の圧だけで言ってるようなものだったし、無理もないんだろうけど。

「で。緑谷くん。君は分析力と判断力はズバ抜けて良いわ。

多分、人類の中で最もソレに優れてる。

…でも、それ以外は全ッッッッ部ダメ!!

ダメダメの実でも食べたのかってくらいダメすぎて呆気に取られたわ!!!

はっきり言って、惰性で部活してる中学生のがまだマシよ!!!」

「……は、は…ひっ……!」

緑谷くんがボロクソ言われてる。

小学校の頃から、体動かすのは得意じゃなかったからなぁ。

基礎体力は人並み以上にあるけれど、ルールある競技になるとてんでダメになっていた。

頭では最適な動きを理解しているんだろうが、体を動かし慣れていないらしい。

結果、彼が最も厳しい評価を下されることとなった。

まぁ、要するに。鈴木つづみは、一等星における「師匠ポジ」になったわけだ。

ただし、頭にスパルタの付く。
因みに。轟くんに思うところはないかと聞いたところ、「個性鍛えるよりも有効。個性は個人の発想力次第だから」と、言外にエンデヴァーの修行を否定し、つづみさんの修行を持ち上げてた。
ううむ。エンデヴァー嫌いが加速してる。
エンデヴァーはただ教え方が押し付けに近いだけで、同じ個性持ちならば有効な修行ではある…つづみさん談…らしいんだけど…。
嫌うな、とは言わない。
気が合わないのはもう仕方がないのだから、その血縁を利用するということも覚えてほしい。
修行を終えた四人に、子供たちがスポーツドリンクを渡す最中、僕は隣に座り込んだつづみさんに問うた。
「やってみてどうですか?」
「……教えるのって、大変ね。
その子たちに足りないものは、それぞれまったく違うものだから」

そりゃあ、な。
その子に必要なものを見抜く目が無ければ、教育なんてやらない方がいい。
必要としているものじゃなくて、これがあればもっと輝ける、欠落したもの。
それを見抜けなければ、やりたいことしかやらない中途半端な子供の出来上がりだ。

「そう考えると、教師って給料の割に合わない仕事量よね」
「まぁ、そうですね。
正直、プロヒーロー兼教師やってるヒーロー科教師の方が、はるかに給料はいいです」

ヒーロー科教師の給料は、普通の教師の給料が雀の涙に見えるほど高い。
小学校の教師の給料…何倍だアレ。
ヒーローとしての歩合給と合わせれば、僕からすれば乾いた笑みしか出ないほどに高いのは確かだ。

「…さっきから、携帯鳴ってるわよ」
「へ？」

給料への不満を心の中で愚痴っていると、つづみさんが僕のカバンに指を刺す。
言われた通りにその中身に手を突っ込み、ブーっ、ブーっ、と揺れる携帯を取り出した。
どうやら、知らないうちにマナーモードにしていたらしい。
液晶に映る名前は、町内会会長のものだった。
…嫌な予感しかしない。
出ないわけにもいかないため、僕は通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。

「もしもし…。あ、はい?……。
……はぁああっっっ?!?!?!
えっ、ちょ、マジで言ってんですか
あと何日だと思って…ああ切れてる!!!!?!?
「ど、どうしたの…?」

マジか畜生。
告げられた「お願い」という名の強制命令に、僕は眉間を抑える。
あのボケ老人、本当に町内会から出ていってほしいんだが。

ふと、周りを見ると、僕の叫び声に反応してか、皆がぽかんとしていた。
…この際巻き添えだ。協力してもらおう。

「……ハロウィンの出し物考えろと」
「折寺って、そんなこともしてんのか？」
「まぁ。死ぬほど盛り上がらねェクソみたいな仮装大会だぞ」

折寺、町内会のメンバーが妙なところで季節イベントに乗り気なんだよなぁ。
盛大に大コケしてるのに、懲りずに続けるくらいには。
お盆の出し物が大成功したから、ハロウィンも押し付けようって魂胆だろう。
全く、いい性格してる。

「ウチの地元はやらんなぁ…。
で、その出し物はいつやるん？」

そこに触れるか、麗日お茶子。
正直、口にも出したくないが、言わなければ伝わることもないだろう。

僕はため息混じりに、その事実を告げる。

「三日後です」

「……はい？」

「三日後です」

これだから折寺の町内会は大っ嫌いなんだ！

重要なことほど後で伝えやがって!!

もし会社だったら、とっくの昔に倒産してるわ!!!

忘れていた。あの連中の無責任さが、この二ヶ月ですっかり頭から抜けていた。

そのことを今更後悔しても、もう遅い。

「……東北さん。ずん子さんに連絡を」

「あの、先生…？」

こうなったら、トコトン全力でやってやる。

仮装パーティー？生ぬるい。

「ガチハロウィン、やりましょう」
「青筋でメロンみたいになってる…」
「そりゃ怒るわ…」

学問に青春全てを捧げてきた僕を舐めるんじゃない。
ハロウィンの由来くらい、とっくの昔に知っている。
なら、その再現と行こうじゃないか。
恐怖のドン底まで叩き落としてやる。

緑谷「生首が商店街に飾られる行事って……」

「……なんですか、コレ？生首？」
「マジモンに近いジャックオーランタンです」
「嘘でしょ!?これが!?!?!」

準備場所の公民館にて。
ずん子さん作のジャックオーランタンを前に、緑谷くんがあんぐりと口を開ける。
まぁ、ビックリするよな。
元はマジの人間の生首だったのだ。出来る限り、生首に似せてもらった。
彫刻みたいなことになったため、怖さは薄れているだろう。
…にしても、手先が器用ってレベルじゃないなコレ。

「流石に参加者全員に配るほどの数は揃えられませんからね。
開催地の商店街に飾り付けときます」
「生首が商店街に飾られる行事って…」

引くなソコ。ちゃんと許可は貰ってるぞ。
ケルトで開催されていたハロウィンでは、死人の仮装に生首を手に持つことで悪霊から逃れてたと言う話だ。
これを持ち歩くよりはマシだろう。

「飾り付け用の包帯の加工終わりましたー！
どうですか？ちょうどいい感じに黄ばんでるように見えるでしょ？」
「黄ばみ具合が甘い。薬品で黄ばんでるのか劣化で黄ばんでるのかが微妙。
時間ないからこれも使うけど、次はもっと上手くやりなさい」
「奥さんまで厳しい!!!」

セイカさんはつづみさんが担当してる。
が。流石は僕の妻というべきか、判断基準がかなり高い。
これで４回はダメ出しを聞いたぞ。
挫けないのは美点だな、と思いながら、すっ転ぶセイカさんから視線を外す。

「バクゴーさん、リテイク。セリフ長いからってゆっくり言っちゃダメだよ」
「クソがァァァァァァァァァァァァァァァアァァァッッッ!!!」
「これ、『がァァァァァァ』の部分だけ超低音にしたら、バケモノの鳴き声っぽくなりませんか?」
「だね。やっぱりバケモノ役適任だよ、バクゴーさん」
「嬉しかねェわブッ殺すぞ!!!」

爆豪くんは音街さんと東北さんに挟まれて、恐怖を煽るバケモノの声を録音。
途中、早口の長セリフがあることに苦戦しているようだ。
これで何度目のリテイクだろうか。
繰り返す度に声に熱が入ってるのは、気のせいではないだろう。

「…ハロウィンって、子供がお菓子を貰いに行くイベントですよね…?
おかしいなぁ…。なんでホラー系の出し物を作ってるんだろう…?」
「ハロウィンはケルトにおける正月兼お盆でしたからね。
今回は出来るだけソレに寄せます」

ハロウィンの本来の姿は、ハッキリ言って世間のイメージからはかけ離れている。
子供にお菓子を渡すのは、元は悪霊に菓子を渡すことで追い返すのが目的。
ジャックオーランタンは本来はカブであり、カボチャではない。
ハロウィンは収穫祭とお盆、そして正月を掛け合わせたイベントである等々。
今回は出来るだけ、元の姿に近いハロウィンを行おう、というわけだ。

「仮装する理由は、死霊に『自分が人間ではなく仲間だ』と誤魔化すためです。
ハロウィンの怖さ、全員に骨の髄まで知っていただきましょうか」

勿論、所々でミッションも用意してる。
アメリカでやっている「水に浮かべたリンゴを口でキャッチする」というミッションも、きちんと用意している。
リンゴは実家経由で売り物にならない…可食…リンゴを大量に仕入れてるから、問題ない。

「…イージーモードかハードモードか選べるお化け屋敷って事ですよね？」

緑谷くん、察しがいいな。
このハロウィンでは、仮装した人間は見た目が怖いだけのホログラムやら着ぐるみやらと戯れるイベントを。
仮装しない人間には、ガチでビビらせにくるイベントを用意している。
仮装したいけど事情があって無理と申し出る子供のために、貸し出し用の着ぐるみも用意する予定だ。

「ま、そんな感じです。
きちんと来場者にお菓子を配る予定なので、ハロウィン要素もありますよ」

商店街から悲鳴の絶えない一日になるかも知れないな。
あの町内会のボケどもが考えも無しに大々的にネットに出し物やるって公開しやがったから、当日は観光で賑わうだろう。
シンリンカムイがＳＮＳで取り上げてたし。

「さ、緑谷くんも準備をお願いします。
ホログラムデータの作成と、訪れる客に臨機応変に対応するＡＩも」

「それ、僕に寝るなって言ってません？」
「寝るのも珍しいでしょ、君」
「……そうですけど」

当日まであと二日。
バケモノたちのバックストーリーもきちんと考えてある。
…にしても、手伝いを要求して来たのは、折寺の一等星の関係者だけか…。
トコトン他人任せだな、ここの町内会。
そんなことを思いながら、僕は轟くんに渡す台本を考えていた。

♦？♦？♦？♦？

「ヒメ、ミコト。良かったのか、手伝いに行かなくて」

先生たちが出し物の準備でてんやわんやしてる現在。
俺はヒメとミコトを連れて、俺の家の近所にある大型デパート施設に訪れていた。
中には映画館も備え付けられており、今は映画上映までの待ち時間中だった。

「いや、前例がアレなの知ってて言ってるならだいぶ鬼だよ？」
「ショートも、せんせーがキレた時の暴走具合知ってるでしょ？」
「……まぁ」

今度もまた、口に出すのも気がひけるようなおっかないモン作ってるんだろうな。
ポップコーン売り場の長蛇の列の真ん中あたりに来たところで、話題が映画に切り替わる。

「漫画が原作の映画だったよな」
「うん！昔の漫画なんだけど、前は社会現象にもなったからリメイクしたんだって！」
「超常黎明期以前のヤツだよね」

漫画か。夏兄はチョイスが古臭いと言うか、妙に絵柄が荒いのばかり集めてたっけ。
この間お勧めされたのは「うしおととら」…だったっけか。
先生も好きだと言ってたっけ。
逆に冬姉は、漫画はあまり知らなくて、文学作品が多めだったな。

「痴人の愛」を紹介されて読んだ時は、反応に困った。
そんなことを思い出していると、二人が俺の服の裾を引っ張った。

「どうかした？」
「…なんでもねーよ。…そろそろポップコーン買えるが、どれがいい？」
「キャラメル！」
「塩！」
「味覚だけは似てねェんだよなぁ…」

シェアする、なんて頭にはないらしい。
昔から何処か食べ物の好みだけがズレてるんだよな、二人とも。
以前、緑谷たちと行った映画館では、塩もキャラメルも入ったポップコーンがあったが、ここでは無いらしい。
仕方ない。セットを二つ頼んで、ドリンクを一つだけ買おう。

「…あの、さ」
「ん？なんだ？」

くいっ、とミコトが俺の裾を強く引っ張る。
俺がそちらに目を向けると、恥ずかしそうに問うた。
「先生の奥さんに会ってから、聞こうって思ってたんだ。
ショートは、どんな人と結婚したい？」
「……はっ？」

その質問に、俺は目を丸くする。
中学生になって初めて、もうそろそろ年を越そうかという時期だ。
そんなこと、一度だって考えたことがなかった。
…俺が「結婚」に、良いイメージを持っていないことも要因の一つなんだが。
「私も…気になる。ショート、どんな人がいいの？」

ヒメまでも俺に迫る。
強いて言うならば、どんな人だろうか。ここで答えを出す必要はあるのだろうか。

考えるも、答えは出ない。
でも、いつかは出さなきゃいけない答えなんだろう。

「……まだ、分かんねぇな」
「そ、そうなんだ…」
「へぇ…」

…妙な空気になった。
取り敢えず、話題を逸らしたいが、どうしようか。
そんなことを考えていると、前の人間が注文したポップコーンを受け取り、その場から去っていく。
どうやら俺たちの番が来たようだ。

「ご注文どうぞー」
「ポップコーンセット二つ。塩とキャラメルで、ドリンクはゼロカロリーコーラ。
あと、同じドリンクを単品で」
「かしこまりましたー」

俊敏に仕事をこなすスタッフに金を渡し、その対価を受け取る。
そこから流れるように、俺たちは上映シアターへと向かった。
映画の感想だけ言おう。
面白かったことだけは覚えてるが、内容はあまり覚えていない。

ハロウィン前日、それぞれの過ごし方

商店街の飾り付けが始まった。
僕たちは通常業務をこなす店の方々に挨拶しながら、飾り付けを進めていく。
今日は日曜だというのに、緑谷くんたちは相変わらず僕に付き合ってくれている。
彼らが断らない、と知っていて頼むのだから、やはり僕は性格が悪いのだろう。

「…ってか、これだけ広い商店街の飾り付けを、僕らだけでやれって…」
「緑谷先輩…。
ウナちゃんとこの使用人さんが手伝ってくれてるだけ、前回よりかはマシですよ」

最終手段の一つとして、音街さんに頼んで、彼女の家で働く使用人を何人か回してもらった。
流石は富豪…というべきか。
かなりの人数が、この行事の準備に充てられていた。
他には、緑谷くんのお母さんと爆豪くんのお母さんにも来てもらった。

爆豪くんの所は、お父さんも手伝いに行こうとしたらしいが、極度の怖がりのために爆豪くんが止めたそう。

確かに、あの人は気が弱い節があったな。

「勝己ー！将来の嫁さんに怪我させるんじゃないわよー!!」

「過程をすっ飛ばし過ぎだババア!!!

嫁にするにしても清い付き合いしてからだわ頭に花畑でも詰めとんのか!!!!」

「バクゴーさん、式は何処であげる？」

「まだ付き合ってすらねェわもうちょいしっかり考えろ結婚の意味ィ!!!!!!」

爆豪くんの外堀埋まってるな、コレ。

彼が雄英を卒業すると同時に、さっさとスピード婚しそうだ。

そんなことを思っていると、グラスをトレーに乗せた使用人が、彼の前で傅く。

「若旦那様、お飲み物です」

「だから若旦那って呼ぶなァ!!!まだコイツと婚約してすらないわァ!!!!」

「『お付き合いしない』という選択肢を頑なに出さないので、婚約したも同然かと判断い

たしました」
「うぐっ……」

図星だったようだ。
変なところで義理堅い性格してるから、『自分への好意を無下にする』って発想が出来ないんだろうな。
相手は爆豪くんの一声で、割となんでも要望に応えてくれている。
爆豪くんも、その礼はすべきと考えているのだろう。

「慕われてますね、若旦那」
「面倒見はいいからね、若旦那」
「テメェら後でブッ殺す……!!」

ここぞとばかりにバカにするなぁ、緑谷くんと東北さんは。
爆豪くんがとんでもない顔で二人を睨むも、当人たちはなんでもないように作業を続ける。
多分、グループチャットで爆豪くんのあだ名一覧に加えられるんだろうな。

「むっつりスケベ」とか、「殺す（笑）」とか、主に轟くんと東北さんにバカにされてるフシがある。

「そういえば。先生、奥様はどちらに？」

「あっちで飾り付けしてますよ」

僕が指差した方向に、緑谷くんのお母さんが視線を向ける。

そこには、割にリアルな血飛沫を演出するつづみさんの姿があった。

流石は殺しのプロ。色合いといい乾き具合といい、完全にソレにしか見えない。

ここまで過激な表現を許可してもいいのか、と言う疑問は出てくるが、前回の肝試しも割にエグい表現が盛り沢山だったから大目に見てくれるだろう。

何か言われたら、「任せたと言ったのは町内会ですよね？」と反論するつもりだ。

「彼女に何か用ですか？」

「先週のことでお礼を。あれから出久、少しだけ気持ちが軽くなったみたいで」

「そうですか。じゃあ、お礼を言ってあげてください。

素っ気ない対応をされるかも知れませんけど、人見知りなだけですから」

人見知り、というよりは、人の選り好みが激しいんだよな。
お眼鏡に適った人間は、緑谷くんたちのように積極的に絡みにいく。
逆に、お気に召さなかった人間は、無視か冷たくあしらうかの二択。
緑谷くんのお母さんたちなら大丈夫だろうが、全体的に日本のプロヒーローやら警察やらがどうも苦手なようだ。
テレビ越しでも露骨に嫌な顔をしていた。

「……先生って、意外と奥さんにベタ惚れなんですね」
「否定はしません」

緑谷くんの茶化しを一蹴して、飾り付けに集中する。
…青春系の作品なら、こう言うシーンは楽しそうなんだけどなぁ。
なのに、どうしてだろうか。
思い浮かぶのは、短いタイムリミットで仕事を押し付けられた恨みのみ。
ここまで暗い気持ちで街の飾り付けするヤツ居る？しかも小学校教師で。

「…結婚の経緯といい、今回のことといい、先生って妙なトコで真面目ですよね」
「下手して自分の評価を下げたくないんですよ。人間が生きていくには、どうしても他人からの評価が必要になりますから。
内申点だって、他人からの評価でしょう?」

よく昨今の漫画では「周りを気にするな」と聞くが、僕は間違いだと思っている。
自分の思うように生きるのは、確かに大事だし、充実している。
だけど、その望みを続けるために、嫌なことをやらないといけないのも事実だ。
嫌だ嫌だと言って逃げるのは簡単だが、それで無くしたものは取り戻せない。
…こういう社会だから、日本はＮＯと言えない人たちばかりなのだ。
他人からの評価は気になって当たり前だ。それで自分の価値が決まるのだから。

「だからって、こういう『後で文句言われても任せたのそっちでしょ?』案件で暴走するの、ハッキリ言って大人げないですよ?」
「ええ自覚してますよ」
「してるんだ…」

引くな、緑谷くん。君も「治せない悪癖がある」って言う点では同類なんだから。

自分にそういう根本的な欠点があるのは、もう仕方ない。

治そうと思った時期もあったが、どうしても治らなかったので、隠す努力をした。

「無駄話はそこまでにして、さっさと終わらせますよ。僕はテストも作らなきゃいけないんですから」

「過労で倒れそうな仕事量なのに、全然動じてない…」

慣れただけだ。小学校教員のブラックさなめるな。

♦？♦？♦？♦？

「ショートのお家って、お屋敷なんでしょ？

なんか、こう、『トドロキ流！』…的な剣術とかないの？」

「すっかり影響されてるね、ヒメ…。

ショートの家は元は一般家庭で、比較的新築だって言ってたじゃん」

「影響されんのも無理ねーだろ」

先生から頼まれた録音を終え、俺たちは俺の家の近所にある公園で休んでいた。
公園とは言っても、そこまで広い施設ではなく、住宅街に申し訳程度に遊具が設置された空き地のような雰囲気だ。
今時はそんな公園で遊ぼうとする子供も居ないらしく、公園には俺たちしか居なかった。

「ここで先生から教えられたうんちくな。
日本刀って、実は簡単に買えるらしい。
『鉄砲刀剣類登録証』っつー証明書付きじゃねーとダメらしいが」
「へぇ…。…ショート、ヒーローになったら使ってみる?」

ふと、あんな羽織を羽織って、帯刀してる自分を思い浮かべた。
憧れは…確かにある。思春期の男児だ。
誰だって一度はやってみたいと思うだろう。
が。実用性のことを考えると、俺にとっては無用の長物以外の何者でもなかった。

「いや、使う理由もメリットもねーな。
ああいうのはその道を極めた達人か、それを利用できる個性の人間が使って初めて真価を発揮する」

俺の場合は、間合いが関係しない立ち回りができるという強みがある。
遠距離攻撃しか出来ない個性…と言うわけではないのだ。
間合いを詰められた時、咄嗟の判断が出来る様になれば、刀よりも確実に敵を無力化できる。

「…そう考えると、不本意だが…親父に感謝すべきなのかもな」

俺は一等星の中で、学ぶべきことが少ない。
物理、化学などを会得して初めて真価を発揮する個性のため、難易度は高いが、学ぶことは他と比較すれば少ないのだ。
運否天賦で授かった、この個性。幼い頃は正直、要らないとさえ思った。
しかし。あるもの全部を利用する強さがなければ、到底ヒーローにはなれない。
あるもの全部をぶつけても勝てない壁が、いくつもあるのだ。

望まぬ個性も、それを穿つ武器になる。

「……あ」

と、ここで気づいた。

親父から連想するのは失礼だが、母さんのことが頭をよぎる。

「…やべっ。全くお見舞いに行ってねェ」

そう。俺はこの七年間、一度たりとも母親の見舞いに行ってなかった。

愛情を持って育ててくれた母親だ。

言うのも小っ恥ずかしいが、家族として愛しているし、心配もしてる。

だけどそれ以上に。

俺に対して罪悪感を抱いて、自己嫌悪に陥るような人だって分かっている。

だから、見舞いに行こうと言う発想は早々に頭から抜け落ちていたのだ。

「ショート、どうかした？」

「ショート？」
「……ここからなら、歩いてすぐだな」

そうだ。ヒメとミコト…万年開花のことも友達と言っていた。
友達を連れてお見舞いって言うなら、母さんも気が楽かもしれない。
流石に外出は無理だろうが、明日の出し物についても話そう。
そうと決まれば、善は急げだ。
俺はヒメとミコトの肩を掴み、彼女らの顔を見た。

「俺の母さんに会いに行こうか」

♦？♦？♦？♦？

「…お茶子。あんな、ヒーロー目指して鍛えてるのはわかるんよ」

お昼。お仕事がたまたま休みだったお母さんと、昼食を摂っている最中。
この間持ち帰った鹿肉を食べながら、お母さんが切り出す。

「やからといって、雨ん中もひたすら拳打ち込むのやめへん？風邪ひくで？」

私の髪から、雫が滴り落ちる。

私は先ほどまで、大雨と報道される最中、拳法の自己鍛錬を行っていた。

一区切りついてシャワーを浴びたが、結果的にお母さんを心配させてしまったようだ。

「…これ食べたら、もっかいやる」

「ほんなに頑張らなあかんの？プロヒーローって…」

「うん。頑張らな、誰も助けられんから」

楽しむことだって大事だ。

だけど、その楽しみを守るために、私はプロヒーローにならなきゃいけない。

でないと、ついなちゃんに胸を張れるヒーローになれない。

零した命を背負って生きていけるほどに、強くならないと。

「……子供って、見んウチに大っきくなるモンなんやな」
「へ？」

お母さんの言葉に、箸を止める。

「なるって決めたら、死ぬ気で頑張ればいい。お茶子のようなヒーローは、お茶子にしかなれへんのやから」
「……うん」

♦？♦？♦？♦？

病室にて。
初めて訪れる母の病室を前に、俺は軽く深呼吸をして、はやる鼓動を鎮める。
母さんに会うのは、七年ぶりになる。
最初こそは会いたいと喚いたものだが、七年も経って、そのわがままを出すことも忘れていた。

「…ヒメたち見たら、驚くかもな」

そんなことを口に出しながら、扉を開く。
そこには、少しだけ老けた母さんが、ベッドの中で佇んでいた。
隣には、見舞いに来ていた冬姉も居る。
扉を開けた俺を見て、あんぐりと口を開けていた。

「…し、しょう…と……？」
「焦凍…!?」

…まぁ、驚くよな。
面食らった顔を浮かべる二人に、「入ってもいいか？」と問う。
二人は顔を見合わせると、軽く頷いた。

「友達もいるんだけど」

俺が言うと、ヒメとミコトが俺を盾にして顔を見せる。

冬姉は少しばかり面食らっていた。
片や、母さんの方は大きく目を見開き、二人の顔をマジマジと見つめていた。
「……冬美。ちょっと、この子たちにお菓子を買ってきてくれないかしら？」
「え、あ…、うん…」
母さんの頼みを聞いた冬姉は、ポーチを手に病室を去る。
残された俺たちに、母さんは軽く手招きした。
「……ひ、久しぶり、母さん」
「…えぇ。久しぶり」
いざ面と向かって話すとなると、話そうと思っていた内容がすっぽり抜け落ちる。
久しぶり、としか言えない自分が情けない。
俺がそう思っていると、母さんが頭を下げた。
「ごめんなさい」

想像はできていた。
母さんが、俺の左目周りの火傷を負い目に感じてることくらい。
頭を下げる母さんに、心配ないと伝えなければ。
俺が口を開こうとすると、母さんが続ける。

「謝っても、許されることじゃないのは…分かってるの。
でも、ずっと言いたかった。恨んでくれても…、縁を切ってくれても構わないから…。
一言だけでも、謝りたかった」

火傷のことなんて、ほんの些細なことだと思っていた。
ヒメもミコトも特に気にしてなかったし、緑谷たちも、事情を知っても扱いを変えることはしなかった。
でも、母さんにとっては、忘れてはいけない…許されることのない過去なのだ。
頭を下げ続ける母さんを前に、ヒメとミコトが、俺の手を強く握った。

「……母さん。母さんは、さ。リスとか、鹿とか…捌いたことあるか？」

「…え？」

学んだことを言おう。

俺が緑谷たちと出会って、精一杯悩みながら、初めて出した答え。

俺はやったこともないのに、テストを見せるような誇らしげな顔で、言葉を続ける。

「俺、この間…。自分から頼んで、一週間だけサバイバルをやったんだ。

持ってったのは、着替えとナイフだけ。

…友達と協力して…。生きるために、多くの動物を捌いた。

…山ほどの命を貰って生きてるんだって、初めて知った。ここまで育つのに、山ほどの命を殺してきたんだって、初めて知った」

この間持ち帰った鹿の肉だって、冷蔵庫にあるソレを見るだけで、涙が止まらなくなる。

俺が殺したんだって、分かっているから。

あの時、トドメを志願したのは俺だ。

命を奪う感触を、この手で知っておきたかった。

個性を使った殺人なら、奪った命の感触すらも知ることができないから。
プロヒーローになれば、敵の殺害も視野に入れなければならない。
それで壊れてしまう前に、命を奪うということを教わって良かったと思っている。
今はその学んだことを、しっかりと伝えるべきだ。母さんがまた、前を向けるように、ちゃんと言おう。

「命を奪った。それは、もう変わらない事実なんだ。…だから、人はそれを背負って生きていかなくちゃならねェ。
過去は、もう変えられない。
でも、その罰は『笑っちゃいけねェ』、『愛しちゃいけねェ』、『幸せになっちゃいけねェ』ってことじゃ、決してない。
その『過去』と向き合って、『誰かに胸を張れる自分』になるってことなんだ」

少なくとも俺は、まだ誰かに胸を張れるようなヒーローじゃない。
どれだけ険しくて遠い道のりかなんて、目指す俺自身が理解してる。
だから、その姿を見せることで、母さんにも前を向いてもらわないと。
ひたすらに前だけを見て、猪突猛進に進む友達から教えてもらった、精一杯を見せろ。

「俺は、見てくれた人たちに胸を張れるような…優しいヒーローになるって、決めた」

気にしなくていいんだ、母さん。

俺はその過去に負けないくらい、強くなってるんだから。

「だから、母さん。

…これからも、俺の母さんでいて下さい」

これが俺の精一杯。

俺が言い終わると、母さんは目尻に涙を溜めて、口を開く。

「…私、焦凍のお母さんで居てもいいの？」

俺が頷くと共に、母さんがポロポロと涙をこぼして、俺を抱きしめる。

久々の母さんの手は、母さんの個性とは違って暖かった。

ハロウィンと恋バナ

「…えぇっと、折寺でこんなに人が降りるって、なんかあるんですかね…？」

人混みが織りなす津波に巻き込まれながら、俺…ホークスが呟く。

隣に居るミルコさんは慣れないのか、顰めっ面で口を開いた。

「なんか、商店街で出しモンやるんだと。

シンリンカムイがＳＮＳで大々的に宣伝してたからこうなったんじゃねーの？」

「…ミルコさん、ＳＮＳやるんすね」

痛っ。シバかれた。

ハッキリ言うと、そういうのに疎いだろうと思っていた。

現在、俺たちは相手に警戒されないよう、私服姿で折寺に訪れていた。

無論、警戒云々は俺のみで、ミルコさんはただ単に「先輩の家に遊びに行く」というのが目的なため、私服だった。

「にしても、多すぎやしませんか…？」
「なんでもアイドルが売り子やってんだと。
名前は覚えてねーけど、ちんまいヤツ」

アイドルか。
イギリスのＮｏ．１が、歌手として兼業してるってくらいしか知らないな。
そんなことを思いながら、人混みをかき分けて前に進む。
鈴木つづみが住んでいるアパートは、駅から徒歩１０分ほど。
しかし、この調子ならば徒歩３０分は覚悟した方がいいだろう。
私服で来るんじゃなかった。

「ああっ!!ウナちゃんの背後に明王が!!明王が居る!!!」
「中学一年生くらいの背丈なのに、なんだあの迫力!?!?!!!」
「そ、それでも…!ボクちんはウナちゃんのパンツを諦めな」
「あ？」
「ごめんなさい」

「眼光だけで屈した!!!!」
「個性か!?!?」
「いや、掌ボンボン爆発してる!!個性じゃねェ!!!覇王色だ!!!!」
「バッカ覇王色じゃねェ!!!ただただ顔が怖ェだけだ!!!!」

ここで何が起きてるんだ。
野太い男の声に混じって、女の子の「落ち着いてくださーい!」という声が聴こえる。
なんにせよ、ヒーローとして確認しておく必要がある。
ったく…。こうも人が集まる場所だと、面倒なトラブルに巻き込まれがちだな…。
俺が仲裁に入ろうとした時、ミルコさんが先行して声を張り上げた。

「誰だァ!!???
このプロヒーロー…ミルコ様の前でいたいけな女のパンツを被写体にしようっつー度胸の有り余るヤツァよォ!!!???」
「「み、ミルコ!?」」

いつものヒーロースーツではないものの、彼女は非常に目立つ出立ちをしている。

今日は髪を結んでサングラスをかけていたが、彼女は手慣れた様子でそれらを外し、彼らの前に躍り出た。
ハキハキとその場に響く声とその分かりやすい容姿に、カメラを構えた全員が慄き、頭を下げてその場を去る。
残されたのは、魔女を意識した衣装に身を包む少女と、フランケンシュタインの格好をした少年だった。

「あざっす。助かりました。
…だから着ぐるみにしろっつったろォが!!
あーいう輩は言うこと聞かねェし、無駄にしぶといし、何より欲求が素直にキモい!!!
いくら未来のトップヒーローになる俺でも、庇える範囲に限界あるわ!!!!」
「未来のトップヒーローに限界あるの？」
「無くす!!!!だから毎日毎日死にかけてるんだろォが!!!!」

…へぇ。
少年の体をまじまじと見て、少しわかった。
「死にかけてる」というのは、恐らく誇張表現でもなんでもない。

どんな体勢からでも攻撃や防御に移せるよう、構えている。
体つきも、がむしゃらに鍛え続けたスポーツマンというより、戦場を潜り抜けてきた戦士のような体つきだ。
ミルコさんもそれが分かったのか、不敵な笑みを浮かべて少年を見つめていた。

「お前、ヒーロー目指してんのか？」
「違うっす」

ミルコさんの問いに、彼が答える。

「俺が目指してんのは、世界を背負うトップヒーローっす」

…成る程、ね。
あの目は、エンデヴァーさんのように、はるか高みを掴もうと足掻いている人間の目だ。
鈴木つづみに会いにきたのに、こんなに面白い少年に出会えるとは。
ミルコさんが笑みを獰猛なものに変える。

「ヘェ。一丁前にナマ言ってるワケじゃなさそーだ。アタシんトコで鍛えてみるか？」
「断るっす。俺の師匠よりも、アンタは強くなさそーだ」
「あ？」

その言葉に、ミルコさんの額に青筋が浮かび上がる。
その時だった。

「爆豪くん、ウナちゃん。大丈夫？」

目的の女が、目の前に現れたのは。
彼女…鈴木つづみは俺を一瞥すると、興味を失ったのか、爆豪と呼ばれた少年に近づく。
爆豪くんとやらの側に居るミルコさんは、呆然としていた。

「嬉しいわね、私のこと師匠って言ってくれるって」
「…一応、師弟みたいなモンだろォが」

……待って。とんでもない一言が聞こえたんだけど。
師匠？　あの十年で十を超える国を滅ぼした、目の前にいるこの女が？
ミルコさんの顔が、真っ青になっていく。

「はァアアアっっっ!?!?!?　先輩が!?!?　師匠ォオオ!?!?!?」

ミルコさんが叫ぶと、鈴木つづみは彼女に迫った。
こちらからは見えないが、ミルコさんが獅子に追い詰められた兎みたいな顔してる。
足はガッタガタで、立ってるのもやっとらしかった。

「ルミ。少し見ない間にまた天狗になっていたようね…？
あれだけ私にボコボコにされて、私の弟子に私を超える教えをしようだなんて、でっかい口叩けたわね？」

「は、はひっ……！」

彼女の口から、あんな情けない声聞いたの初めてだ。
なんにせよ、目的の人間が目の前にいる。
さっさと要件を終わらせるに越したことはないだろう。
俺が話しかけようと近づくと、鈴木つづみの鋭い眼光が俺を捉えた。

「私がルミと話してんの。ホークス…だったかしら？黙りなさい」
「……っ、おー、怖い怖い…」

警戒されてる。
機嫌を損ねるな。相手は敵性国家を容赦なく滅ぼした『災害』。
今現在、敵性国家ギリギリの日本に戻ってきた理由が不確定だ。
一応、オールマイトからの『旦那が恋しくなった』という情報があるが、そんな理由であるわけがない。
なるべく穏便に事を運びたい。

「…ま、いいわ。今や実力者として知られるプロヒーローだからね。自信があるのはいい事ってことで見逃してあげる。

…アレだけヤンチャしてたおてんば娘が、今やプロヒーローで日本のＮｏ．５。
十年の時の流れってすごいわね」
「先輩もっ！ご結婚っ!!おめでとございやァァアすっっっ!!!
これっ、めっちゃ遅れたし少ないですけど、ご祝儀でェす!!!」

舎弟みたいだ。
九十度に礼をするミルコさんは、何処からかご祝儀袋を取り出し、鈴木つづみに出す。
それを受け取った鈴木つづみは、中身を確認した後、ミルコさんに返した。

「いらないわよ、そんなの。
祝ってもらいたくて結婚したんじゃなくて、旦那に惚れたから結婚したの」
「……この先輩が惚れるって、どんなバケモンだよ…」

…相手の旦那は、小学校教師。
折寺小赴任当時、教育委員会から厳重注意を受けた直後あたりから、波風を立てない
…どころか、おとなしすぎる男性教師。
教師ということは、その気になれば人質に取れるかも知れない。

旦那が職を失うとなれば、こちらの言うことも多少は聞いてくれるだろうか。

そんな事を考えていた時だった。

鈴木つづみが、凄まじい眼光で俺を睨みつけたのは。

「……さ、行きなさい。交代の時間よ」

「…っす。おら、行くぞ」

「うん」

鈴木つづみが二人をこの場から離れさせる。

と、同時に。周りを凍てつかせる程に強い殺気が、俺の肌を撫でた。

「…おい、ホークス。先輩に関する情報、二つだけ教えてやる。

一つ。先輩は『未来予知でもしてんのか』ってくれェ勘が鋭い。

二つ。先輩はキレたら容赦ない」

「……今更な情報ありがと」

まずい。非常にまずい。
さっきの考え事がバレていたのだろうか。
全く…。世の中には末恐ろしい無個性も居たモンだ。
俺がそんな事を思うと同時に、鈴木つづみが間合いを詰め、俺の頸動脈に爪を押し当てる。

「公安の犬。考えてる事は分かってるわよ。
私を手懐けようってんでしょう？」
「……っ!?!?」

想定外だ…!!まずいまずいまずい!!
何処から漏れた？俺のことを、こうも的確に捉えてるって、どういうことだ…!?

「前々から工作員が張り込んでたの、知ってるのよ。アンタの気配がそれに似てた。
これから手懐けるペットを吟味するような、不愉快な視線も相まってすぐわかったわ」

あー…。こりゃ、全部バレてるわ。
公安から、工作員を送り込んでいたのはとっくに聞かされていた。
相手は気づいていない、と言っていたが、見逃してもらってたの間違いだろう。
こりゃ、飼い慣らそうってのが間違いだ。
協力って形を取り付けるしかない。
…異能解放軍の言い方で言えば、『ノーギフト』…だったか。
確かに、『異能を持たざる異能者』だ。

「ホークスにミルコ!珍しい、貴殿らも来ていたのか!」

緊迫した空気が張り詰める中、それをブチ壊すかのように一人の男が訪れる。
俺たちが一斉にそちらを見ると、ハロウィン仕様なのか、マスクの上に包帯を巻きつけたシンリンカムイが居た。

「おや、主催者の奥方。ホークスにそんなに迫ってどうかしたのか?」
「いえ、弟子がファンで。サインを強請っていたの」

サラッと嘘つきやがった、この女…。
話を合わせなければ、何をするか分かったモンじゃない。
「そ、そーなんですよ。プライベートで来たんですけどね？」
「え？ホークスはこう…」
「ルミ。旦那が計画したアトラクション、楽しみにしてたわよね？早く行かないと、行列がさらに長くなるわよ？」
「……うす」
ミルコさんが完全に屈服してる…。
どんな中学時代送ってきて、どんな関係だったんだ、この二人は…。
そんな事を思っていると、シンリンカムイが俺に迫った。
「ホークス。実は此方にエンデヴァーも訪問しているのだが…」
と、シンリンカムイが告げた時だった。

「親父が相変わらずバカで助かった!!!
俺に対して動く隙を与えたのが悪い!!!!
どうだ『エンデヴァーの知られたくないヒミツ百選』の写真集は!!???
テメェの痴態を世に晒したくなきゃ、ばら撒いた写真一枚残らず回収する必要があるなァザマァみやがれクソ親父!!!」
「焦凍ォォォオオオオオオッッッッッ!!!!
反抗期にも程があるぞ焦凍ォォォォォォオオオオオオオオッッッッッ!!!!!!」

憧れの人が、ばら撒かれる写真を焼きながら息子らしき少年を追い回してる姿が見えたのは。

「…アレ、止めてくれないか？
止めようとしたんだが、速すぎてな…」
「あ、ああ、はい……」

こんな形で憧れの人と話したくなかった。
そう思いながら、俺は追いかけっこをする二人を追いかけた。

♦？♦？♦？♦？

「…轟くん、エンデヴァーをおちょくる時は活き活きしてるよね」
「まァ、ＤＶ親父のことを好きになれ…とは言えませんしね。
轟先輩の場合は、以前まで逃げるしかなかった分、余計に鬱憤溜まってるんでしょ」

エンデヴァーと壮絶…？な追いかけっこを繰り広げる轟くんを尻目に、僕ときりちゃんは来場者用のお菓子を包装する。
あかりさんはと言うと、さっきからあまりの恐怖で僕の腕を抱きっぱなしだ。
音声加工ってすごい。
聴きなれたかっちゃんとか轟くんの声が、あんなに恐ろしくなるんだもんなぁ。
そんな事を思いながら、黙々と作業を続ける。
途中、ふとあることに気づいた。

「…ちょっと聴きたいんだけどさ」
「なんですか？」

「このお菓子とか、衣装さ、ずん子さんが全部作ってるんだよね？」
「ええ、まぁ」
「手先が器用ってレベル超えてない？」

このお菓子の量…、三日で用意できる範疇超えてない？
衣装と並行して出来んの、これ？
予算とか物資関連は、二徹して僕がなんとかしたけども…。
それにしては、物資が充実してる。
僕がその疑問の答えを知るであろうきりちゃんに問うと、彼女は何処ぞの司令のようなポーズを取った。

「ずん姉様は手先が器用なだけじゃなくて、スケジュールを瞬時に組み立てるほどの計画性があるんです。
…ずんだが絡むとバカな事やりますけど。
緑谷先輩も見習ったらどうですか？
頭いいのに計画性皆無とか、笑えませんよ」
「うぐっ…」

痛いところを突かれた。
確かに、僕は計画性皆無だ。自覚はある。
計画性があるのなら、徹夜なんてやらない。
仕方ないじゃないか。アイデアが降りてくる時はわからないんだから。

「…それにしても。プロヒーローがちらほら居ますね。緑谷先輩、この状況で珍しく暴走してませんね？」
「誰彼構わず迫ったら失礼でしょ。
プライベートで来てる人も沢山いるんだから、節度はきちんと守らないと…」
「…ウナちゃんのファンにも、そういう良心的な人が居たらいいんですけどね」

あの子のファンは…まぁ、無個性だから抵抗できないと思われて、過激派が多いだけなんじゃないかな。
彼女は歌唱力とキャラ付によって、多くのファンを得た。
しかし、無個性というレッテルの効果は良くも悪くも絶大だった。
犯罪を取り締まるプロヒーローとは違って、変な絡み方しても抵抗されない…もとい

出来ないということが認知されてしまっている。

「ウナちゃんと言えば。かっちゃんとウナちゃんがくっつくのって確定なの？」

「確定ですね。本人曰く、婿養子として許婚になってる…らしいです。

だから若旦那ってのも、あながち間違いじゃないそうで」

知らないうちに、かっちゃんが一気にお嫁さん付きで富豪になってた。

ウナちゃんの許婚ってことは、世間に漏れたら、とんでもないことになりそうだなぁ。

そんなことを思っていると、商店街の方から一際大きな悲鳴が響く。

「緑谷先輩」

「大丈夫。敵じゃなくて、単に叫び声なだけだよ」

監視カメラによって、敵ではないことは確認済み。

だと言うのに、ここまで街が阿鼻叫喚と化すって、本当にどうしてこうなった。

今日、ハロウィンじゃなかったっけか。

「…ってか、そういう緑谷先輩とあかりさんはくっつく予定なんですか？」
「……ノーコメントで」
「私はこの時代での結婚について、詳しく知らないので、イズクくんの返事待ちです」
先ほどから僕にしがみついてばかりだったあかりさんが、漸く声を出した。
が。やっぱりまだ怖いのか、僕の腕を握ったままだった。
「未来での結婚って、どんなんですか？」
「セイカさんに聞いた方が…ああ、いや。
あの戦闘力でも貴い手が居ないくらいポンコツなので、詳しくはないですね…。
私も『父様』に聞いただけですけど、それでいいなら話します」
父様…？
初めて聞く単語に首を傾げるも、彼女はそれに気づかず、続ける。
「あっちでの結婚は…生産作業みたいなものですね。新しい世代を産むための。
皆、戦争に夢中だから、勝つためにいろんな事をするんですよ」

彼女は、それ以上語ることはなかった。
あまり言いたくないのだろう。その顔には少しばかり、影があった。

「だから、こっちの結婚に憧れがあったんです。父様も、この時代でなら身を固めた…って言ってました」
「…そんなに酷いんですね、未来」
「ぶっちゃけると世紀末です。
そこらに星やら宇宙そのものを容易く消しとばす兵器沢山あるしで、人類滅亡ギリッギリってわけです」

北斗の拳より酷い。
その世紀末に僕、発明で間接的に加担してる訳なのか…。
…そうだ。没後に全ての発明を封印するプログラムを仕込んでおこう。
人類滅亡の片棒なんぞ担がされてたまるか。

「……この時代での結婚も、そこまでいいモンじゃないような気がしますけどね」

「人によるって言った方が正確でしょ」
「経緯とか目的とか考えると、褒められたものじゃないケースもありますしね」

なんにせよ、僕たちにはまだ少し先の話題になるだろう。
轟くん家の家庭事情とか考えると、先生とつづみさんって、夫婦としてはいい関係なのかもしれない。
…毎度毎度、土日休みの度に先生が死にそうになってるけど。

「あーっ！未来って真っ暗だなァ!!」
「ホンットそれ」

駄目だ。未来のこと考えると、ひどく憂鬱になってくる。
お先真っ暗って言葉を考えた人って、天才なんじゃないだろうか。

「真っ暗じゃないですよ」

と、あかりさんが食い気味に言う。

「だって、イズクくんたちは『一等星』じゃないですか」

彼女は吐息がかかるほどに顔を近づけて、言葉を続ける。

「どれだけ暗くても、どれだけ塗り潰されようとしても、命尽きるまで輝き続ける…。

そんなお星様に、私は救われたんです。

イズクくんがヒーローである限り、その光は消えませんよ」

あかりさんが笑みを浮かべる。

なぜかはわからないけど、僕の頬が熱くなってるのを感じた。

麗日「性格悪いわァアっっっっ!!!!!」

「あ、お茶子ちゃんについなちゃん。

怖い系のイベントは苦手って聞いてたけど、来たんですね」

阿鼻叫喚と化す商店街の入り口にて。

私は親から預かった少しばかりの小遣いと、ついなちゃんを連れて折寺に来ていた。

交通費浮くって便利。転移装置って便利。

デクくんが発表した途端、とんでもないことになりそうだけど。

「セイカさん、こんにちは。

ダメなのはウチの方で、ついなちゃんの付き添いで来たんや。はい、参加料な」

「あれ？でも、イージーモードの仮装してるの、ついなちゃんだけですよ？」

受付のセイカさんに、渡された小遣いの一部を渡そうとすると、彼女が疑問を口にする。

私は完全な私服…つまりはこのイベントを『ハードモード』で挑戦する訳だ。
ついなちゃんはと言うと、ハロウィンという西洋のイベントで方相氏の格好をしている。
曰く、「忘れたくないから、たまに着る」とのこと。
どうやらこれも仮装には入るらしい。
流石は無宗教国家。国教を決めてる国からしたら、キレられそうだ。

「実はお師匠様に『ビビリなの治せ』って、真顔で叱られて…」
「ウチは普通に楽しみに来ただけやで」
「そうですか。では、コレをどうぞ!」

渡されたのは、カボチャでできた生首っぽい物体だった。
ご丁寧に、中にランタンが仕込んである。

「「ん???」」
「昔は生首を持ち歩いていたそうですよ!
是非、ランタン代わりにどうぞ!」

「「待って。いろいろおかしい」」

こういうのって、もうちょっとこう、デフォルメされたヤツじゃないだろうか。
渡されたそれは、配色を寄せて仕舞えば、まごう事なき生首だ。子供泣くだろコレ。
ほら見ろ。ついなちゃんが涙目にはならずともドン引きしてる。

「…ガチでこれ持って歩くん?」
「はい!決まりなので!
本来だったら数が足りなかったんですけど、先生のご友人宅からダメになったカボチャを大量購入して、緑谷くんの機械でランタンを量産して貰ったんですよ!
終わった後は持ち帰って煮物かポタージュにでもしてください!
因みに、『カボチャの生首』を持ってないと、例え仮装しようが超超超ハードモードになりますよ!!」
「……ウチは元よりハードやし、ええわ」
「お茶子の姉ちゃん、目ぇ死んどるで…」

ついなちゃんは渋々ながらランタンを受け取り、私は受け取りを拒否する。

プロヒーローもちらほら見るが、ランタンに対して違和感を持つどころか「企画者は博識だなぁ」程度にしか思ってなさそうだった。

何なん？ウチらがおかしいんか？

「では、悪霊飛び交う地獄道にご案内いたしまーす！

ミッションをクリアするとご褒美が豪華になるので、是非挑戦してくださいね！」

「ご褒美……？」

ついなちゃんが、その言葉に足を止める。

「……一番豪華なのは？」

「んんっと…、超超超ハードモードの全ミッションクリアで、イギリスＮｏ．１ヒーロー『Ｆｌｏｗｅｒ』のライブチケットですね！

航空券や旅費等、提供元の企業持ちですよ！

二枚しかないので、先着二名限定品です！」

「やるわ」

ランタンを台に返し、ついなちゃんが凛々しい顔つきで告げる。
やや食い気味なあたり、本当に欲しかった物らしい。
イギリスＮｏ．１ヒーロー『Ｆｌｏｗｅｒ』のライブチケット…か。
転売品のチケットが五十万ドルで売れたって話、ニュースで見たなぁ…。

「……ん？なんで五十万ドルの価値がある物が、ここの景品に？」
「つづみさんとＦｌｏｗｅｒが親友だそうで！
ご本人が『良かったらどうぞ』と寄付してくれたそうです！」
「あー…。なるほどね」

…勝手に景品にしちゃってもいいの、それ？
私がそんなことを思っていると、その表情から察したのだろう。
セイカさんが「勿論、個人宛の物は別に貰っているそうですよ」と付け足した。
その直後、私の肩を誰かが突いた。

「お嬢ちゃん。楽しそうなお話中ごめんやけど、早よしてくれんか？」
「あ、ごめんなさい…」

私たちが会話に夢中になっているせいで、待ちぼうけを食らっていたのだろう。
そちらに視線を向けると、白衣を羽織った茜色の髪を纏めた女性が立っていた。
関西弁…イントネーション的には、大阪あたりだろう…を話してるあたり、そこら辺の出身だろうか。
私たちは頭を軽く下げ、商店街の入り口に足を踏み入れた。

「では改めまして！いっらっしゃーい！」
「逝ってきまーす…」
「いってきまーす！」

♦？♦？♦？♦？

「問題児の方のＭｓ．コトノハは何処だ!?」
「『友を訪ねて』とどっか行きました!!」
「で!?エキスポの飾り付け担当は何処のどいつだ!?!?!?」
「Ｍｓ．コトノハです!!問題児の方の!!」

「あのバカは何処だ!?!?」
「だからわかりませんって!!!!」

現在、ｉ・アイランドは荒れに荒れていた。
物理的な意味ではないが、そうとしか言えない大騒ぎだ。
トシから貰った日本の漫画…『こち亀』だったっけか。
似たようなセリフが飛び交っている。
今年は数年ぶりの『ｉ・エキスポ』が、クリスマスに開かれる予定である。
同時にイギリスのＮｏ．１ヒーロー『Ｆｌｏｗｅｒ』のライブも行われる、豪華なイベント。

国連が「世界の滅亡だ！」とてんやわんやしてるこの年に開催してもいいのか、と些か疑問に思ったが、「世間一般に悟られないようにするため」と開催を決定したらしい。
無論、急な決定のためか、ｉ・アイランドの方も大慌て。
必要な準備をするのに、そこそこ…いや、かなりの期間を要する。
それを『たった一ヶ月半で用意しろ』と言われたのだ。
その際、最も重要となる飾り付けを担当していたのが、幾つもの作業を並行して行え

る『問題児の方のＭｓ．コトノハ』。

が。一刻が惜しいと言うこの時に限って、あのド阿呆はバックれやがったのだ。

私の愛娘たるメリッサ共々。

ーーーーーーメリちゃんとハロウィンデート楽しんできまーす！

憎らしいことに、あのアマ、私のパソコンにビデオメッセージまで送ってきた。

人をイラつかせる天才とは、彼女のためにある言葉なんじゃないだろうか。

ｉ・アイランドにハロウィンなんて高尚なイベント無いんだぞ。

「シールド博士！どうしましょう、飾り付けはおろか、展示スペースの取り合いで全然事が進みません！」

「展示スペース関連は私がやるから、君はあのアホの居場所を探してくれ！」

いけない。彼女のことになると、歳の割に老け込んでるとまたバカにされる。

目頭を押さえながら、自身の作業に没頭しようとした、まさにその時。

私の携帯から、着信音が響いた。
携帯の画面に表示されるのは、見慣れた『トシ』の文字。
私は通話ボタンを押し、スピーカーモードに切り替えた。

「どうかしたか、トシ?」
『デイブ。君はイギリスのＮｏ．１の連絡先等を知っているか?』
「『Ｆｌｏｗｅｒ』の?」

トシがプロヒーローの連絡先を聞いてくるとは、珍しい。
何かあったのだろうか、と思いながら、私は彼の期待には応えられない旨を伝える。

「すまないが、面識もない。…何かあったのか?私でよければ、ある程度は聞くが」
『いや、ありがとう。彼女自身に聞きたいことがあっただけなんだよ』

声色からして、個人の悩みだろう。
しかし、見ず知らず…というわけではないが、あまり面識のない相手に相談をする事態になるとは、あまり考えられないが…。

その疑問を口にせずとも、トシには伝わったのだろう。
彼は電話越しでも分かるほどに深呼吸して、語り始めた。
『……鈴木つづみ、という日本の女性は知ってるかね?』
「確か、何年か前に敵性国家の無力化…と言うより、殲滅に貢献したとして、国連に平和賞を授与された子だろう?」

その授与式に、私も来賓として呼ばれたことがある。
というより、トシが同じくして平和賞を授与される時期が、彼女と被ったのである。
遠目から見た鈴木つづみは、磨かれたナイフのような美しさと危うさがあった。
詳しくは知らないが、トシ曰く「同じ母校であった」らしい。
しかし、どうして今になってその名前を出したのだろうか。
『…鈴木つづみが、日本に帰国したんだよ』
「なんだって!?!?」

敵性国家認定ギリギリに立たされている日本に、鈴木つづみが帰国した。

その事実から導き出される答えは、「日本を滅ぼしに来た」という他にない。
私の推測を悟ったのだろう、トシは「心配ない」と付け足した。
『本人曰く、十年前に籍を入れたきりの旦那さんが恋しくて帰国したそうだ』
「……既婚者だったのか？」
『私も驚いたんだが、事実らしくてね。
その…、非常に反応に困る惚気をされた。
ハッキリ言うとベタ惚れだそうだ』

反応に困る惚気ってなんだ。
そもそも、遠目から見ても「近づくな」と言いたげなオーラを纏っていたあの彼女がベタ惚れ？
それ、どんなバケモノなんだ？
そんなことを思っていると、トシが「それは一旦置いておこう」と話を区切る。
『…実は、たまたま見かけて、彼女に謝罪に出向いた。
同時に、人を殺すことに対して積極的な彼女を説得しようとした』

「……甘い、と言われたのか？」
『それだけなら良かったんだがね』

聞けば、「イギリスのＮｏ．１にキレられる」と言われたそうだ。
彼女もまた、敵性国家の殲滅に貢献していたが、「私の貢献は微々たる物だから」と賞を辞退したという話を聞いたことがある。
どうやら鈴木つづみと彼女は友人としての関係があるらしく、倫理観も近い物であるらしい。

『…彼女にとって、私の思想はどうなのか。
殺害を忌避することは悪なのか…。
それを聞いてみたかった』

やむを得ないとはいえ、ＡＦＯをその手で殺めたトシだ。
殺すことに対して、思うところがあるのだろう。
それに対して、私は何かを答えを出せるかと問われれば、否と答える。

「…そうだ。今年のクリスマス、空いているか？」

であれば、私にできる範囲で、トシが望んでいる場を用意してやろう。
そんな気持ちで、私はトシに提案を持ちかけた。

◆？◆？◆？◆？

「あァァァァァァァァァァァァァァァ無理無理無理無理無理無理アカンってマジでアカンからめっちゃ怖いィィィィィイヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ!?!?!?!?」
「あァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ手が手が手が手がジメッとしててヌメっとしててなんかもういろいろと限界やからお願いやからマジでもう堪忍してエエエエエエエエエエエァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ!?!?!?!?!?」

数分前の自分を殴りたい。
襲いくるバケモノたちを振り払いながら、必死になってミッション地点へと向かう。
ホログラムだという前情報があったから安心し切っていただけに、裏切られた気分

だ。

何が「ホログラムだから触ることはできない」だ。ガッツリ触られた感触あったぞ。

そんな恨み節を言えども、この状況は変わらない。

『何故ぇぇぇぇぇ……!!何故何故何故異能を持って生きているぅぅぅぅぅう……!!』

『嗚呼妬ましい浅ましい許せないどうして我らは受け入れられなかったのだ同じ異能を持つ者のはずなのにいいいいいいい……!!』

『貴様ァァァァァ我らの同胞でありながら何故其奴の首を取らぬゥウ!!!!

同胞であれども容赦せん、こちら側に引き摺り込んで再教育だァァァァア!!!!』

ウチらの声って、加工したらこうなるんだ。

遠い思考でそんなことを思いながら、ついなちゃんを抱えて必死に逃げる。

超超超ハードモードの名は、伊達じゃなかった。

悍ましさで殺す気かって程に恐ろしい見た目のバケモノが、こぞって私たちに殺到するんだから。

しばらく走っていると、「ミッション1」と書かれたアーチが見える。

私は転がり込むようにそのアーチを潜り、バッ、と背後を振り返る。

『……ちっ』

バケモノたちがアーチを前に舌打ちして、その場を去っていく。

どうやら、アーチから先は襲ってこない設定になっているらしい。

私たちが胸を撫で下ろしていると、アーチの裏から、ぶら下がるように、葉巻を咥えた老父と、バスケットを持った老婆が姿を表す。

『あらあら、生首を持たぬ者が最初の扉にたどり着いたそうですよ、お爺さん』

『ハロウィンに生首を持たぬとな？全く、常識破りにも程がありますな、おばあさん』

私たちがその会話にツッコミを入れようとするのも束の間、老夫婦がアーチから降りる。

そこで私は、初めて気が付いた。

ついなちゃんも同じように気づいたのか、息を呑む音が響く。

老夫婦の首から下。明らかに「顔と年齢が合っていない」。

『コレではミッションのクリアが出来ないのではないですか、お爺さん』
『いやいや。そう決めるのは早計ですよ、おばあさん』

老夫婦の顔が、この世のモノとは思えないほどに邪悪なモノに変わる。
ついなちゃんが泡吹いて白目を剥くも、私が「景品」と言うと、即座に目を覚ました。

「で、ミッションってのは？」
『簡単ですよ。「生首に火をつけろ」です』
『生首を持たぬ貴殿らにとっては、非常に困難でありますな』

ランタンという名のあの生首確実に必須アイテムやん!!!!
やから「仮装しなくても超超超ハードモード」って言ってたんか!!!!
ハードモードやなくてクリア出来へんこと前提のクソゲーやん!!!!!
そんな事を思っていると、老夫婦はそれを悟ったのだろう。
愉快そうにケラケラと笑っていた。

『ミッションをクリアしなければならない、という決まりは無いのですから、逃げ出せば

良いのでは？』

『逃げた先には、恐ろしいバケモノたちが蔓延っているでしょうなぁ…』

つまりは、ミッションはスルー出来るということか。

ご褒美は無くなるが、それよりもここから抜け出したいと思う人は多そうだ。

「抜け出すかアホ!!やったろうやないかい、ミッション!!!」

ついなちゃんは、「恐れより欲」って感じだなぁ。人間は欲が絡むと強い。

…少しだけ考えよう。

このハロウィンを企画したのは、あのクソみたいな性格した先生。

一見『無理ゲーだろ！』って思わせて、景品を取らせないようにしてるのだろう。

…付き合いの浅い私でも思う。つくづく性格が悪い。

「クリア条件は、『生首に火をつける』でいいの？」

『……？その通りだよ』

言質は取った。
生首に火…もしくは灯りを灯す。
普通に考えれば、あのランタンさえ持っていれば普通にクリア出来る。
戻って取りに行く、という選択肢もあるけれど、それなら「超超超ハードモード」からランクが落とされて、景品お預けになる可能性が高い。
セイカさんの口振りからして、ランタンの所持が、仮装よりも重大な「難易度変化のカギ」を担っているはず。
なら、この場にあるモノでクリアできるようになっている。
あの先生は、正解できない問題を出すような人間じゃない。
捻くれた問題を出して、必死に解こうとする様子を見て笑うような人だ。

「…ついなちゃん。個性使ぉたら、目ェも良ぉなるんやっけ?」
「目ェ良ぉなる…っていうか、正確には『真贋を見抜く』らしいわ。
お茶子の姉ちゃんが言う『ほろぐらむ』かマジモンか、即わかるで」
「頼んでええか?」
「わかったわ」

瞬間。ついなちゃんの周りの空気が変わる。
口腔に並ぶ歯は鋭くなり、目玉が猛禽類のようにギラギラした物へと変貌する。
これが、彼女の個性『鬼神』。
何が出来るのかは詳しく知らないけれど、ついなちゃん曰く「使い所さえ守れば便利な個性」らしい。
ついなちゃんが黄金に煌めく瞳を老夫婦に向け、「うげ」と声を漏らした。

「…首部分が作りモン、体はほろぐらむ、葉巻はマジモン。
どーゆー原理かは分からんけど、ホンマに吸うてるみたいになっとる」
「……エッグいこと考えるわぁ」

成る程。たしかに、『すごく簡単なミッション』ではある。
世間一般で培われるはずの倫理観が欠落してたら、の話だが。

『どうやら気づいたみたいですよ、おじいさん』
『そうか。でも心配はいらない。実践できるかは別の話だからね、おばあさん』

全く。クリアさせる気が無いにも程がある。

私としては、作り物とはいえ、対話できてる生首に火をつける…なんて行為は避けたい。

私がどうしようかと考えていると、ついなちゃんが裾を引っ張った。

「悩んでるところアレなんやけど…」

ついなちゃんが指差す方向に沿うように、目線をそちらに向ける。

目を凝らすと、暗闇に擬態するような形で黒塗りにされた火の灯っていない生首ランタンが、これまた見つかりにくいように物陰に置かれているのが見えた。

「アレ、カブやで。カボチャやない。

『カボチャの生首を持ったら難易度低下』なんやから、大丈夫やろ」

「性格悪いわァアっっっ!!!!」

私は叫びながらそのカブを掴み、老父から葉巻を奪って中のキャンドルに火をつける。

夜目が効くように訓練しててよかった。
ついなちゃんが居なかったら、確実に生首チャッカマンになってたぞ。
『おやまぁ。隠してたのがばれちゃいましたよ、おじいさん』
『ばれてしまったね、おばあさん。
何はともあれ、ミッションクリアだ。証をあげよう』
老夫婦は言うと姿を消し、その場に二つのバッジを残す。
私たちはそれを拾い上げて、互いに顔を見合わせた。
「…こんな性格悪いミッションがまだ待っとるん…？」
「やろぉなぁ…」
あの先生、つくづく性格が悪い。
そんな事を思いながら、私たちはミッション通過口のアーチを潜った。

道徳の授業の抜き打ちテスト

「こ、コレで…ミッションは、後一つ…！」
「キッツ…。精神的にも…、肉体的にも、キッツいわぁ……」

超超超ハードモードって分かってて挑んだ私が言うのもなんだけど…。
ハッキリ言おう。アホほどキツいんだけど。
ミッション自体は簡単そうなのが多いけれど、蓋を開ければ『超超超ハードモード相手にはクリアが難しい』ように設計されてた。
アップルボビングだっけか。
水に顔を突っ込んで、口で浮かんだリンゴをキャッチするゲーム。
仮装をしていれば、補助機能付きの仮面を渡され、していなければ普通に水に浮いたリンゴをキャッチする。
が。私たち超超超ハードモード相手には、『片栗粉を多めに混ぜた水に沈んだリンゴを掘り当てる』という、性格の悪さが滲み出たミッションが下された。
ついなちゃんが個性を使って、大体の場所を見極めてくれたお陰で、クリアはできた。

…片栗粉で顔カピカピになったけど。
掘り進むのも楽じゃなかった。
パサパサしてるのかドロドロしてるのかよく分からない物体に、短時間顔突っ込むだけでも拷問だったのに。
底にあったリンゴが、隣の桶に入った物よりも2回りくらい小さかったのに気づいた時には、殺意が芽生えた。
その他にもいろいろあったけれど、全て割愛させていただこう。
ただの愚痴大会になりそうだ。

「…にしても、あの先生。結構攻めた事やるなァ。超常黎明期やったら叩かれとるで？」
「たぶん、町内会に全責任押し付ける準備、整えてるんやない？
そういう準備早そうな人やし」

ついなちゃんと言葉を交わし、バケモノたちの恨言を聞き流す。
どうやら集まっている悪霊は、全てが「超常黎明期」の死者という設定らしい。
実際にあっただろうから、同情はする。
でも、私に出来るのはそれだけだ。

「無くしてしまったモノをもう一度」なんて、神様でも無いんだから出来ないに決まってる。

「……ウチのと言い、個性ってほんま、難儀なモンやなぁ」

「一種の『障がい』って見られた時期もあったくらいやし、な」

そんな事を話してると、ふと、デクくんとの会話を思い出す。

あの時はサバイバルの途中だったっけか。

ふとしたことから、話が「個性」の話題になった。

個性が病原菌に近い生態をしてる…なんて私たちにとってタイムリーだった話題。

ーーーーーー個性と人は、共存が出来ないものだって、僕は思ってる。

今も、昔も…多分、これからも。生物って、本来は互いを貪り合う関係だから。

あの時、デクくんの言葉に、私たちは確かに納得していた。

例えば、私の個性。使い過ぎると三半規管に負担が掛かって、自律神経に異常が出る。

爆豪くんの場合は、あまりに連続して爆破すると、最悪汗腺が破裂する。

轟くんは、左を使い過ぎれば体温が上昇して、死に近づく。逆に右を使い過ぎると、体の水分が凍って死に至る可能性がある。
ついなちゃんは、個性を発動すれば代謝が激しくなる。
曰く、一日ぶっ続けで使ったら確実に餓死するくらいには燃費が悪いらしい。
要するに、今も昔も、個性を「扱いきれているようで扱いきれていない」のだ。
個性そのものである生命体は、ノーリスクでその力を振るうことが出来るらしい。
丁度、あかりちゃんのように。
そう考えると個性って、人には過ぎた代物だったんだろう。
昔に「個性特異点」という「いずれ個性を制御しきれずに、人は滅びる」という終末論があると、何かの番組で見た。
それもあながち間違いでは無いのかも。
でなければ、未来で個性が切除されるなんて事にならないだろうし。

「…繰り返さんとええな。こんなこと」
「ほんまにな」

個性差別は、今なお社会に根付いている。

アメリカは大統領の個性が非っっっっ…常に残念過ぎる事もあってか、大分緩和されてるらしいけど。

なんにせよ、「個性があるから起こる悲劇」を回避しようと頑張るのも、ヒーローとしての務めになる。

「……それはそれとして、怖いことには変わりあらへんけどなァア!!!!」

「慣れてきたって思ったけど、怖すぎて感覚麻痺してるだけやからなァ!!!!」

『こっちにおいでぇぇぇ……』

『君たちも異能があるんだろぉお……？僕らのように、社会の被害者なんだろぉおお……？

生きててもいいことなんてないんだろぉおおおお……？』

「黙れや！ウチの最後はウチが決めるわ！」

ほんまにあの教師シバいたろか。

失禁に対応してか、ご丁寧に「着替えコーナー」なんちゅうモン設置しおって。

各サイズの下着やらズボン、シャツやらを用意する手際の良さは何なんだ。

私がそんな事を思っていると、ついなちゃんが立ち止まる。

「…なァ、あれ。ラストミッションって書いてへん？」
「へ？」

私がそちらを見ると、『ラストミッション』と書かれたアーチがあった。
小さく「ラストでは無いよ」的な事を書いてるかも、と思ったが、訴えられる可能性がある詐欺まがいのことはやらない人だ。
やることと言えば、ふざけんなと叫びそうになるような法的にセーフなことくらいで。

「どうせ超性格悪いミッション待ってるんやろうなぁ…」
「ウチ、あの先生とあんまり喋らんかったけど、今ハッキリ思ったわ。
大っっっっっっっ……嫌いやあの先生」

…まぁ、世辞にも好かれるようなタイプではないよなぁ。
そんな事を思いながら、私たちはアーチを潜り抜けた。

♦？♦？♦？♦？

「貴様か。ウチの焦凍に余計な事を吹き込んだのは」

助けてください修羅場なんですが。

現在、僕…こと水奈瀬コウの身に何が起きているのかを言うと、この一言に尽きる。

どうやら轟くんを連れ戻しに来たエンデヴァーと轟くんが、予想斜め上過ぎる嫌がらせと並行した逃亡劇を開始。

たまたま居合わせたホークスが轟くんを捕まえ、エンデヴァーが逃げた理由を問い詰めたところ、轟くんを探しに来たウチの双子とばったり遭遇。

双子はエンデヴァーの圧に逆らえず、僕の元に連れてきた訳だ。

胸ぐら掴まれてますよ、ええ。

ウチの嫁は、ホークスたちと話があると何処かへ行ってしまった。

「余計なこと、とは？」

「とぼけるな。今年の夏あたりから、焦凍の反骨精神が露骨に嫌らしくなった」

「…轟くん。自分の口から説明したらどうなんですかね…？」

僕が半目で轟くんに視線を向けると、露骨に顔を逸らす。

口聞くのすら嫌なのか。どんだけ家庭内での評価低いんだエンデヴァー。

「答えろ。何を吹き込んだ？」

「強いて言うなら、自分で選択すること、その選択を貫くことの重要性を説いたくらいです。後はノータッチですよ」

基本的に、僕の教育理念は「手は差し伸べないから自分で立て」だ。

最低限の知識を最高の状態で与えるだけで、それをどう扱うかは本人次第。

轟くんの性格が悪くなっても、僕は全く関与してないと言える。

全部、彼の意思でやったことだ。

…まぁ、目の前の頑固親父にその言い分が通じるかは、微妙だけど。

「ふざけるな。焦凍は子供だ。

オールマイトをも超えるプロヒーローに育てるには、一人では限界がある」

「だから、自分が鍛えると？」
「そうだ」

うーむ。ダメ教師の轍をものの見事に踏み抜いてる。
プロヒーローの育成は得意なんだろうが、子供の教育は向いてないな、この人は。
そもそも、轟くんはオールマイトを越えようと思ってないことを知らないのだろうか。

「言っときますが、本人が本気で望まない限りはやめたほうが良いですよ。
やったことの一割も身に付きません」
「それは貴様の自論だろう」

結構有名な教育学者から、論文出てるんだけどなぁ。
そんな事を言えば、火に油を注ぐことは目に見えてるから、敢えて言わないが。

「あのショートのお父さんなんでしょ？大丈夫なの…？」
「せんせーのことだから、なんとかすると思うよ…。多分、きっと、メイビー…」

「ミコト、自信がないなら無理にフォローしなくてもいいぞ」

わかってます轟くん君の所為でこうなってんですがねェ!!!???

と、怒鳴りたい気持ちをなんとか堪えて、僕はエンデヴァーを見据える。

「今後、焦凍は俺が面倒を見る。

赤の他人の貴様に任せては、どうなるか判ったものではない」

「願い下げだバカ親父」

…言っても聞かない、なんて輩は、腐るほど相手にしてきた。

今だって、言っても聞かない子供達を相手にし続けている。

そんな相手を一発で黙らせる方法は、ただ一つだけ。

「人に『こうなんだろうな』、『こうであってほしい』なんて願望押し付けないでください

よ。付き合ったら面倒なタイプの女みたいですね。洗脳ですよソレ。

それに、轟くん。君のそれは反抗ではなく、癇癪に近い逃避です。

変わり始めた爆豪くんを見て、何も学ばなかったんですか？
彼と緑谷くんのように、このダメ親父との関係に何かしら折り合い付けましたか？」

現実という名の鈍器で「二人まとめて」引っ叩く。

♦？♦？♦？♦？

「…最後のミッション会場だけ、なんか雰囲気違ぉない？」
「…ほんまやな。こっちも、そっちも…。苔生えた墓がぎょおさんあるわ」

アーチの奥は、墓地のような間取りだった。
ずらりと墓が並び、所々、鬼火のような火の玉がふよふよと浮いている。
西洋風の墓もあれば、日本の墓石まである。
雰囲気ぶち壊し…なんてことはなく、本当に、多種多様な墓が違和感なく場の空気をおどろおどろしく彩っている。

「…遺品、なんかな。今まで会ってきた霊の持ってたモンが置いたる」

「ここの案内人はおらんのやろか…？」

私たちが先ほどとは毛色が違う不気味な雰囲気に戸惑っていると、ソレを嘲笑うように、笑い声が鼓膜を揺らす。

さっきから何なんだ。

毛色が違うこともそうだが、ハロウィン独特の「華やかな恐怖」の「華やかさ」が削れたように感じられる。

さっきまでは、最低限の華やかさが存在していたのに。

飾り付けも、このミッション会場だけ、ランタンも比較的新しい植物もない。

ただ、苔や朽ちた木の幹やらが散乱してるだけだ。

作り物にしては、やけにクオリティが高い。

…きりちゃんのお姉さんが、手先が器用だとは聞いたが…。ここまで行くのだろうか。

『こんにちは』

と。そんなことを考えていると。

私の背中に、柔らかく冷たい感触が伝ったのは。
氷嚢ではない。確実に、人の肉の感触。
なのに、人特有の温みはなく、氷のように冷たい。
恐る恐る、背後を振り返り、自分たちの置かれた状況に気づいた。

『いらっしゃい。こちらの世界へ』

髪の長い女性が、この世の物とは思えないバケモノを従えて、私達に抱きついていた。

「「ひぎゃァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ無理無理無理無理無理無理無理無理誰か助けてェェェェェェェェェァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッッ!!!!!!」」
『わっ。びっくり』

気がつけば、恐怖で喉が擦り潰れそうなほどに叫んでた。
ついなちゃんと必死に抱きしめ合うも、それを覆う形で女性が私たちを抱き寄せる。
勘弁してくださいい冷たさで心臓が凍って止まりそうです。

『大丈夫。私の質問に応えてくれたら、それでいいから。ここから出してあげるから。憑り殺す、ないしこの世界に閉じ込めるなんて、野蛮なことしないから』

「はへ…？」

息も絶え絶えに、精一杯疑問を表現すべく、首を傾げる。

女性は袖で口元を覆いながら、笑みを浮かべた。

『どうする？私の質問に、答えてみる？』

「…は、はひっ」

断ったら殺されそう。女の人じゃなくて、後ろのバケモノに。

ついなちゃんに目線を向けると、彼女はガッタガタ震えながら、風圧で音がするほどに頷いていた。

私に至っては、恐怖が一周回ってひどく冷静になっている。

『私の質問は、前準備はちょっと面倒だけど、すごくシンプルな物で、答えもない。

でも、今まで質問に応えて、私を納得させた人は居ないわ』

応えた人、大丈夫なんですか…？

その一言が言えなくて、私の喉奥から飛び出そうとした言葉は、違和感になって喉にこびりついた。

その理由は明白。『納得させなければ殺す』と言いたげに、バケモノが幾つもある目を私たちに向けていたから。

作り物とは思えないほどの、濃密な殺気。

私たちがソレに怯えていることもつゆ知らず、女性は笑みを崩さずに続ける。

『前準備…って言っても、大したことじゃないわ。ただ、私が生きていた頃のことを話すだけ』

言うと、彼女はぽつぽつと続ける。

その横顔は、ひどく冷徹なものに感じられた。

『…私は、普通の家庭に産まれて、普通に育って、普通に学校を卒業して…。

そんな、すごく普通の人間だった』

普通。何度、その言葉に悩まされてきたことだろうか。

そんなことを考える暇もなく、女性は話を続ける。

『…十八、だったかしら。私、異能…あなた達の時代で言う、「個性」が出たの』

個性の発動は、基本的には四歳まで。

しかし、それは個性が浸透してきた現代のことであって、超常黎明期初期はまちまちだったと言う。

中にはお爺さんになってから発動した例もあるくらいだ。

個性発動は、今の時代なら喜ばしいことだということで赤飯を炊かれるようなイベントだけど、昔は真逆。

個性が発動した途端、世界が敵に回る。

それこそ、誠実に生きている人間を、非行に走らせるくらいには。

『当時は「反異能団体」…なんて公的集団がいたの。仕事は異能者の排除。

私は…その一環で殺されたわ』

ーーーーーー停滞することでの一時の安定を覚えた人は、最も変化を嫌う。

やから超常黎明期に個性持ちの大量殺戮が行われたわけや…って麗日以外寝とるんかいな!!つまんないのはわかるけどもお前ら寝るなァ!!!

ふと、担任の先生の言葉が頭をよぎる。

混沌を極めたとされる超常黎明期。

その沈静化を図るために、各国で個性持ちの殺戮が行われたことは、知っている。

当時はそれほど強力な個性が無かったことも災いし、死者は推定でも一千万は行っている…らしい。

女性は話に区切りをつけると、こちらを向いた。

『じゃあ、ここで質問ね』

ーーーーーー私はどうして死んだのかしら?

彼女の放ったそれは、個性持ちにとって最悪の質問だった。

♦？♦？♦？♦？

「……なんだと？」

「先生…？」

二人が僕の言葉に面食らっている。

やはり、ある程度成長しているからと轟くんを放置したのが悪かった。

悪態を吐くのは別に構わない。

だけど、彼がエンデヴァーにやっていることは、何のケジメも付けられない、ただの嫌がらせだ。

家庭環境の改善を、完全に轟くんにぶん投げていた僕が悪い。

責任を取るためにも、このまま取り返しのつかない事態に陥る前に、徹底的に叩かねば。

「聞こえませんでしたか？それとも、理解できませんでしたか？

なら、分かりやすく言いましょう。二人とも『大人になれ』って言ったんです」

「貴様……っ！」

エンデヴァーの眉間の皺が深くなり、怒りを体現するように、炎が揺らめく。

無個性で３２年も生きてきて、今更そんなのにビビると思ってるのだろうか。

間違ってるものは間違ってる。

そう言って貰える機会というのは、立場が上になればなるほどに少なくなっていく。

僕が偉そうに言えた立場でもないが、言わないと何も変わらない。

「エンデヴァー。貴方は実績は確かに素晴らしい。正直、僕みたいな一介の…それこそ無個性の教師が何かいうのも差し出がましいとは思います。

でも、言わせてもらいましょう。

貴方は『親としての覚悟』はありますか？」

これは現世の母からの受け売りだ。

結婚する際、子供をもうけるなら…と言うことで、説教された。

学生婚だったから、余計に。

「轟くんや彼のご兄弟が、我が子を愛してあげられるように、『父親としての愛』を教えましたか？
ヒーローとしてじゃなく、『父親として恥ずかしくない背中』を見せましたか？
絶対の自信を持って、この二つの問いに頷けますか？」

まだ親でもない僕が言うのもなんだが。
それでも、職業柄、小学生の面倒を常日頃見ているのだ。
子供のことについて、人一倍、理解はしているつもりだ。

「…愛の鞭という言葉があるだろう」
「貴方のソレは違います。ただの独りよがりな押し付けです。
その証拠として、轟くんが『どんなヒーローになりたいか』、知ってます？」
「無論、Ｎｏ．１ヒーロー…」

と、エンデヴァーが言い切る前に。
様子を見ていたウチの双子が、声を張り上げた。

「「ちがうもん!!!」」

エンデヴァーが鋭い目で彼女らを見やる。

が。彼女らはソレに屈することなく、エンデヴァーに近づき、睨みつけた。

「ショートは、『優しいヒーローになる』って言ってたもん!!

『Ｎｏ．１になりたい』なんて、一度も言ったことないもん!!!」

「…他人の貴様らに何が…」

「７年も一緒にいるから知ってるよ!!

『優しいヒーロー』が夢なんだって、ずっと言ってたもん!!!」

二人が声を荒げて、エンデヴァーを怒鳴りつける。

僕は二人を抱き寄せて、未だにエンデヴァーと目を合わせようとしない轟くんの頬を両手で挟んだ。

「轟くん。君、ここまでこの子たちに言わせておいて、父親ときちんと話し合うこともしないんですか？

ヒーローになる前に、まずは子供として…人間としての責任を果たすべきでは？」

僕が言うと、轟くんは暫し沈黙する。
数秒だろうか。それとも、数分だろうか。
轟くんが小さく口を開き、沈黙を破る。

「…先生。退いてくれ」

僕が轟くんから離れると、彼はエンデヴァーに歩み寄る。

「……見下げ果てたクソ親父。
この際だから、ハッキリ言う。
俺は、アンタの目指した『Ｎｏ．１だけが取り柄のヒーロー』ってのには、なりたくねェ」
「……っっっ」

恐らく、轟くんが初めて自分の意見をしっかりと話したのだろう。

エンデヴァーは面食らったようで、目を白黒とさせていた。
「俺がずっと目指してんのは、『優しいヒーロー』なんだ」
「…焦凍……」
初めて反抗ではなく、自分の意思を伝えたことで、ショックを受けている。
そんなエンデヴァーに対し、轟くんは膝と掌を地面につけ、深々と首を垂れた。
「だから…、頼みます。その時にきちんと誇れるような…いや。冬姉や夏兄…俺たち、アンタの子供が誇れるような、立派な父親になってください。
母さんが死ぬ時に、一緒になったことを後悔しないような、立派な夫になってください。
これ以上、俺が『大嫌い』と思うような父親に、成り下がらないでください。
もし、この頼みが聞き入られることが無いのであれば、俺…轟焦凍は、縁を切ります」
人生で恐らく初めての、父への土下座。
エンデヴァーはその様子に何を思っているのだろうか。僕には分からない。

分からないけれど、コレだけは言える。

「反抗しまくってた実の息子にここまで言わせておいて、まだ意地張りますか？」

「……」

エンデヴァーは黙っていた。

答える気配があるかと思ったが、煽りに反応がないあたり、放心しているのだろう。

僕は詰め寄って、少しばかり声を低くした。

「ケジメはつけろ。大人だろ、お前」

僕の言葉で漸く戻ってきたのか、エンデヴァーの目が、真っ直ぐに僕を捉える。

「……俺は、ヒーローとして、それこそサイドキックと同等…いや、それ以上に厳しく焦凍に接してきた。

全ては、焦凍を俺の代わりに頂点に立たせるためだった」

「とっくに知っています」

轟くんから散々聞かされた。
どんな心境でその答えに至ったのかは、薄々察するが…。
それでも、理解はできない。

「……俺は父として、この子に接したことは…ない。ヒーローとしての俺が、俺の全てだと思っているからだ」
「でしょうね。貴方は仕事人間って呼ばれるタイプです」

実際に接してわかった。
Ｎｏ．１になる。その夢が捨てきれない。
夢に対して、折り合いをつけることを覚えずに育った大人。
それがエンデヴァーなのだろう。

「…見届けていろ。今から為すことを」

言うと、エンデヴァーは僕の傍を通り、頭を下げる轟くんを見下ろす。

「……頭を上げてくれ、焦凍」

エンデヴァーの言葉と共に、轟くんが地面につけた頭を上げる。
ソレを確認するや否や、エンデヴァーも同じように座し、首を垂れた。
あまりの勢いに、額の肉が裂けたのか、軽く血飛沫が飛び散る。

「俺は、父としての接し方がわからん。
純粋に父として、一人の子を育て切ったことがないからだ。
俺は、女の愛し方を知らん。
男として、冷を愛したことがないからだ」

エンデヴァーはそこまで言うと、「だが」と付け足した。

「…冷を精神病院に送り、冬美、夏雄を放置し、燈矢を棄てておいて言えた口ではないのは、わかっている。
償いとして記者会見を開き、全てを世間に告白し、一からやり直す。

今度こそ、お前たちに誇れるような父に…一家の家長になってみせる。
だから、焦凍。しっかりと俺を見ていて欲しい。相応しくないと感じれば、すぐに縁を切ってくれても構わない。
だから、頼む。俺にもう一度、父を名乗らせてくれ」

その言葉に、轟くんは面食らった顔を見せた後、ふっと笑みを浮かべた。

「見てるぞ。親父」

その様子を見届けた直後、僕はあることに気づいた。
エンデヴァーが今までやってきたこと晒す?ソレってつまり、ただでさえ最低評価の日本が更に低評価を下されるのでは?
慣れてきたはずの胃痛が、今日はヤケに鋭く、激痛に感じた。

「……せんせー。大丈夫?」
「多分胃に穴開きました、コレ…。入院してきます…」
「…イズクさんのナノマシンで、入院要らずなんじゃなかったっけ?」

「そうでしたねあははは……。はぁ……」

♦？♦？♦？♦？

超常黎明期に死んでしまった理由。

『時代のせい』と答えれば、すぐに解決するだろう。

しかし、彼女が納得するかどうかで言えば、殆どの確率で否だ。

…そもそも、答えのない質問に対しての答えなんて、決まっている。

「……多分、理由なんてあらへん」

自分の最大限をぶつける、だ。

『……へぇ？続けて？』

「人は、死ぬときはどうしても死んでまう。

そこに理由や違いなんてあらへん。ただ、死んだって事実が残るだけ」

あのサバイバルで学んだこと。
あらゆる命に対する向き合い方。私はソレを答えるだけ。

「でも、生きてる限りは、その命を背負う責任が伴う。
例え赤ん坊でも、その命はそれよりも前を生きてきた、幾つもの屍の上にある」

関係ない、じゃ済ませられない。
死ぬことは避けられない。でも、それから逃げ出してはいけない。
きちんと向き合うことの大切さを、私は学んだから。

「ウチは、その命たちを忘れない。
頭悪いから、今まで死んだ命が多すぎて、細かい数とかは分からんけど…。
でも、『ウチらの前に死んでしまった命があったから、この命がある』ってことは、忘れちゃいけないんや。
ウチらが笑い合って生活できるのは、前に生きてきた人々が、屍に塗れて、血みどろだった歴史を歩んできたからだってことを、絶対に、忘れない」

女性は真っ直ぐに私の瞳を見つめる。
ただの死に意味などない。その死を活かして初めて、死に意味ができる。
そのことを、私の言葉で伝えなきゃ。
例え作り物だとしても、ヒーローとして…いや。人として、答えを出さなきゃいけないから。

「だから、貴女が死んでしまったことも、きちんと背負って生きていく。
『貴女の死があったから、平穏な今がある』って誇れるように、少しでも平和な世界を作ってみせる」

これが、私の生き方。私の命への敬意。
その答えを聞いた女性は、先ほどのような仮面のような笑みではなく、人間味あふれる優しい笑みを浮かべた。

『……ありがとう。「私の死に意味がない」って言われたのと同じなのに…。こんなに晴れやかな気分なのは、初めて』
「……そか。やったら、よかったわ」

私も同じように笑みを返す。

瞬間。バケモノの体、女性の姿、あたりの墓地が霧のように消え始めた。

『お名前、教えてくれる?』

「麗日お茶子。未来のヒーローや」

『……うん。覚えたわ。

次にこっちに来るときは、しわくちゃなお婆ちゃんになってからにしてね?』

その言葉を最後に、世界が崩れ去る。

残された私たちは、いつの間にか商店街の出口に居た。

「…うん。頑張って、長生きするわ」

私は渡された髪飾りを手に、出口で待っているデクくんたちに駆け寄った。

♦?♦?♦?♦?

『イタコちゃん、ありがとう』
「ちゅわぁ…。やっぱり、上級霊の降霊は疲れますわ…」

お茶子たちが去った後。
商店街の出口付近で、着物を着た女性…東北イタコがへなへなとへたり込む。
なんてことはない。
先程、彼女らがクリアしたミッションは、『本物の幽霊の質問に答えて納得させる』だったのだ。
その際に白羽の矢が立ったのが、高度な降霊術を習得している東北イタコ。
今回出される賞金に目が眩み、この重労働を行なっているのだ。
「…にしても、きりちゃんの先輩方は逞しい子が多いですわね」
出口をくぐり抜ける後ろ姿を見て、イタコがそう呟く。
女性はそれに反応することなく、ただ手を振っていた。

『……あんなこと言ってくれる人が、増えたらいいのにね』
「あっ、次来ましたわよ！ほら、早く私の中に戻って！」
『…それ、字面だけ見ると凄いわよね……』

因みに。その後に訪れた茜色の髪の女性と、金髪にメガネをかけた少女の二人組は、殺害状況を推理してしまって失格になったと言う。

♦？♦？♦？♦？

「あいも変わらず、死にたくなる世界だ」

ボクはそんなことを嘯きながら、惰性で流していた動画を閉じる。
ニホンの…ジェントル何某。
彼もまた、何かしら社会に不満があって活動しているのだろう。
人が織りなす社会というのは、どうしてこうも不完全で、醜いのだろうか。

「ボクが死ぬ思いで五年を費やしても、つづちゃんが十年で十を超える数を消しても…。

死にたさが変わらない…。死にたい…」

社会を変えたくてヒーローになって、イギリスのトップに立ったのに。
オールマイトのように、平和の象徴であろうとも、世界を変えることは出来ない。
そんなことを思いながら、もう一つ、サジェスト欄に上がってる動画を再生する。

『我々こそが、ヒーローだ!!』
「…ＳＡＶＥＲ」

再生される動画は、今から少し前に各世界で同時に映された映像。
ＳＡＶＥＲと呼ばれるヴィジランテの、大胆不敵なスピーチ。
世界を熱狂させる程の正体不明のヴィジランテであり、何者にも縛られない自由な男。
ああ。ニホンはどうしてこんなにも眩しい彼を、暗雲で閉じ込めようとするのだろうか。
そんなことをしても、星が輝いていることには変わりないというのに。

「…ボクのそばにも、星が居てくれたらいいのに。生きるには暗すぎて、毎日毎日死にたくなる」

憂鬱だ。死にたい。

そんなことを思いながら、ボクは愛用の剣と、携帯用のマイクを手に取った。

「i・エキスポでライブなんて、死にたさの極地だ」

二ヶ月後に迫ったイベントへの愚痴をこぼし、ボクはベランダから飛び降りた。

今日もボクは、死ぬために生きている。

新婚旅行（結婚十年目）はエキスポに緑谷出久の手のひらはモーター式

「あの、轟くん…。大丈夫？」
「な訳あるか…。寝る暇もねェ」

クリスマスが近づいてきた今日この頃。
僕らは浮遊大陸に集まって、訓練の反省会を開いていた。
この二ヶ月近い期間で、轟くんの目元には深いクマが刻み込まれている。
理由は簡単。エンデヴァーが家族への所業を記者会見で堂々と暴露したのだ。
結果。マスコミは大荒れ、ネットは嵐が巻き起こり、日本は世界中から非難轟々な最底辺と化した。
その影響で、轟家には連日連夜、マスコミが張り付いているそう。
「覚悟を決めた時の潔さだけは認めるし尊敬する」と、轟くんは語っていた。
「後先考えずに行動した」と世間は責めているが、遅かれ早かれバレていたことだ。
腐敗を放置した天罰…とでも思って欲しい。

「爆豪。すまねェ。俺があんな偉そうなこと、言えた立場じゃなかったな」
「謝んな気持ち悪イ。俺もテメェと同じで、ケジメ付けたんだ。
終わったことで頭下げられても困る」

人って成長すると、見違えるんだな。
そんなことを思いながら、僕は先ほどの組手の映像を確認し、粗を探す。
自分の欠点が嫌ってほど見つかることに辟易しながら、僕は映像を止めた。

「で、エンデヴァーはどォしてんだ？」
「家族全員に謝罪した後、母さんの実家とか、事務所のサイドキックたちにも頭を下げに行った。
…帰ってきて、学校帰りの俺に出くわした時には、身体中アザだらけだった。
後は…知っての通りだ。Ｎｏ．２から降りることを宣言して、一から頑張り始めてる」

この二ヶ月で、日本という国は地に落ちた。

異能解放軍の騒ぎに続き、エンデヴァーの家庭事情がぶち込まれたことで、日本の治安が更に問題視された。
オールマイトがバラエティ番組で「彼がああなった責任は私にある」って言ってたっけ。
そういう言葉でも人気がさらに爆発するって、象徴は伊達じゃない。
最早オールマイトが、外交関連で国を支えてるようなものだ。
何はともあれ、日本が地に落ちた元凶が僕たちだと思うと、思うところはあるが…。
僕たちは、あの選択に後悔はしてない。
世界を変えても、助けないといけない人たちが居たから。
僕は誰かを助けるためなら、この世界を作った神にだって喧嘩を売る。
自分がそういう人間だってことを、自分が一番よくわかっている。

「しっかし、そう考えるとまぁ、随分と難儀な国に生まれちまったな。
言語はマイナー、アホみたいな輩はゴロゴロ居るわ、社会福祉が中途半端だわ、学に秀でてる訳でもないわ…」
「いっそのこと、政治家になるか？」
「ヒーロー兼政治家…。斬新やなぁ」

「俺らみたいなヤツに任せたらいよいよ終わるだろ、この国」
「言えてるね、それ」

僕やかっちゃんが政治家とか、想像だけでも「ダメだこれ」ってわかる。
頭が悪いとかじゃなくて、本質的に政治家に向いてない。
社会を変えたい…とかは思うけれど、それは政治家にならなくても出来ることだ。
国を治めるのは、そういった才のあふれる人に任せるべきだろう。
そもそも、法を守ってない僕らが法を作るなんて、馬鹿げた話か。

「そろそろクリスマスだけど、折寺は町内会でのパーティーとかないん？」
「今年は無いよ。先生が『新婚旅行に行くので』って企画を断ったから」

麗日さんの問いに、僕は先日の先生の剣幕を思い浮かべる。
ハロウィンでメロンみたいになってたのに、今度は魔王みたいな顔面してたなぁ。
キレたかっちゃんといい、人って怒りで人をやめられるんだ。

「クリスマスに新婚旅行かぁ。

しかもあのｉ・エキスポやろ？ロマンチックやなぁ。１０年越しって言うんやから余計に」
「そっちもｉ・エキスポだろ？」
「うん。ついなちゃんと一緒に。
弓鶴の兄ちゃんに譲ろうって思ったんやけど、お仕事あるからって」

今年のクリスマスは、ｉ・アイランドと呼ばれる人工島でｉ・エキスポが開催される。
本来であればもう少し先の予定だったらしいが、何故か急に開催が決まったのだとか。
その理由が気になるところではあるが、知ったところで、僕たちになんのメリットにもなりはしないだろう。
そもそも、僕に招待券ないし。
今年に限っては、日本からのお客様は招待券持ちじゃないと来れないらしいし。

「行きたいなぁ、エキスポ…」
「……なんか、マジですまねぇ。緑谷…」
「ほっとけ。行きたいって決めたら無理にでも行くだろ、コイツは」

むっ。失礼な。
ｉ・アイランドのセキュリティをハッキングで掌握できるだろうかとかちょっとだけ考えたけど、やらないぞ。
流石にそこの線引きは徹底してる。
…そう反論しても、説得力が皆無なのは分かってるから言わないが。

「轟はエンデヴァーが以前貰った招待券、譲り受けたんだろ？」
「まァ、な。要らねェって思ったが、ヒメとミコトが行きたいって。
セイカさんに保護者役頼んで回るつもり」
「覚悟しとけよ。テメェが保護者になるぞ」
「そんなに酷いのか…」

大阪の時、セイカさんの面倒見てたかっちゃんはひどく疲れてたからなぁ。
あの人、何故かお汁粉缶を爆発四散させて、部屋がとんでもないことになったって先生が愚痴ってたっけ。
どうやったら爆発するんだろう、あれ。

「かっちゃんも、きりちゃんたちと行っちゃうんでしょ？」
「東北は音街の付き添いで、俺は護衛兼保護者兼音街家の代表だっての。
知らんうちにババアどもまで丸め込まれて、完全に婿として迎えられてた」

かっちゃんの結婚は確定のようだ。
タキシードとか着てるイメージが湧かない。
どっちかと言えば、紋付袴で結婚式挙げそうだ。

「高校卒業と共にスピード婚とかありそう」
「デビュー早々大スキャンダル」
「相手アイドルやし、めっちゃアンチが出てくるとかご愁傷様やなぁ」
「後半二人不吉なこと言うんじゃねェぞブッ殺すぞ!!!???」

そもそも、この活動がバレたらスキャンダルどころじゃないんだけど。
言えば、かっちゃんの胃に大ダメージだろうから、黙っておいたが。
自分の反省点をノートにまとめ終え、僕が筆記用具をしまったときだった。

『アカネちゃんやでー！アカネちゃんやでー！』

間の抜けたトーンの声が、僕の携帯から響いたのは。

皆が一斉に僕の方を見る中で、僕は通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「はい、もしもし？」

『一体誰や。名を名乗らんか』

「電話してきたのそっちですよね!?!?

あと勝手に着信音変えるなってあれほど!!あれほど言いましたよね!?!?!?」

ボケにしては高度すぎる。

僕のツッコミに満足したのか、電話の向こうからカラカラと笑うと声が響いた。

『いいツッコミやったわ！漫才出るか？』

「出ませんよ…。要件言わないんなら切りますよ、茜さん」

『いやぁ、なんでか電話すると毎度毎度切られかけるなぁ』

「出た直後にボケかますからですよ…」

あと、こう言わないとずっとボケをかましまくるから。

出会った当初、小学二年生の頃は、それを知らなかったから地獄だった。

２時間近くボケをかまされた時には、幼いながらに本気で怒りを覚えたくらいだ。

僕の怒気に気づいたのか、茜さんは笑い声を止めた。

『要件なんやけどさ、バイトやってくれん？報酬でウチの招待客としてｉ・エキスポに』

「行きます先程は申し訳ございませんでした茜様なんなりとお申し付けくださいませ」

『食い気味!!!??』

見えないというのに出来る限り素早く頭を下げ、口から出来るだけ謙った言葉を出す。

人間、欲望の前には無力だった。

「出たぞ、緑谷の手のひらモーター」

「ホント欲望に忠実だよな、コイツ…」

「爆豪くんも人のこと言えんくない？」
「おーし後で組手６時間な」
「はァア!?!?鬼っ!!悪魔っ!!!鬼畜っ!!!爆豪勝己ぃぃーーーっっっ!!!」
「なんとでも…っておい最後ォ!!!
麗日テメェ俺の名前がさも悪口みたいに言うなや死ねっっっ!!!!!」
「傲慢不遜って意味の立派な悪口だろ」
「轟ィイッッッッ!!!!!」

外野が騒がしい。
その会話が電話越しにも伝わったのか、茜さんが再び声を大きくして笑った。
『なははははっ!!なんや騒がしいご友人らやなぁ!!連れてきてもええで!!』
「いや、それぞれ招待券持ってるんで…」
『なんやそうかいな…。
じゃあ、あかりちゃんとお母さん呼びいな。デートと親孝行もしたらなあかんやろ』
「あ、本当ですか？ありがとうございます」

茜さんの申し出は、ありがたいものだった。
思えば、今年はお母さんに迷惑かけっぱなしだったなぁ。
あかりさんの食費は僕が稼いでるとはいえ、家事全般を殆ど押し付けてしまったし。
クリスマスばっかりは、向こうで羽を伸ばしてもらおう。
年末には、お父さんも帰ってくるし。

『ほな、スピーチの原稿よろしゅうなー』
「発表内容は？」
『此間、ウチと葵が協力して作ったやん「完全栄養食」。
報酬は招待券やホテル代やら、その他諸々旅行費用は全部負担したる。納期は…そやな。来週いっぱいまでなー。
要件以上や。切ってくれてもええで』
「分かりました」

師事してもらってて良かった。
そんなことを思いながら、僕は「では」と別れの挨拶を告げて電話を切る。

「…一等星のメンバー全員参加でーす♪」
「気持ち悪ィからその顔とポーズやめろ」

うん。自覚はある。

♦？♦？♦？♦？

「結局、鈴木つづみの懐柔には失敗。
水奈瀬コウの説得にも失敗、それどころか向こうに『公安が動いてる』ってことも完全にバレた。下手に動けば国が危ない…。
どうしましょ。詰んでるでしょ、コレ」

いやぁ、見誤った。
ただの教師にしては、手元にあるカードを使うのがやけに上手かった。
公安の違法捜査やら汚職隠蔽やらの証拠を、あれだけ把握されてしまっていては、迂闊に手を出せない。
どうやって把握した、と問い詰めても、上手いこと誤魔化された。

…ほんっと、ただの教師だとなめたのが悪かった。いろんな意味で。

「何処のバカだよ…。『夫の方に迫れば楽』っつったの…」

公安からの情報も、アテにならない。

そんなことを思いながら、俺は現状を纏めた書類を持って本庁の一室に入る。

そこには、見慣れた仕事仲間たちが、あいも変わらない無表情で待ち構えていた。

「…首尾はどうだ？」

「最悪の状況です。ぶっちゃけ、どーにもならないっすね。諦めましょ」

睨まれた。正直に伝えただけなのに。

俺が肩をすくめながら、報告書に書かれた内容を口にする。

「お相手さん、こっちのことに完全に気づいてますよ。弱みもそこにある通り、山の如く握られてます。

お国から高跳びする準備も、とっくの昔に出来てるっぽいですし。

これ以上国の地位落としたくないなら、大人しくしたほうがいいですよー」

何にせよ、あの存在は手を出さなければ無害なのだ。

俺に出来ることは、手を引いておけと言うことくらい。

報告書を見た仕事仲間たちの顔が、無表情から引き攣っていくのを感じる。

ああ…。俺もあの教師に何気ない感じで資料渡された時、あんな顔してたんだな。

「……今すぐ、上に報告する。通達を待て」

「はいはい。りょーかいしやしたー」

全く。エンデヴァーさんのことといい、先日のことといい、今年は日本にとって厄年だ。

そんなことを思いながら、俺は部屋を後にした。

飛行機は自家用機で

「……蝶よ花よと育てられるって感覚、こんな感じなんですね」
「それな。音街家って一体全体どんだけブルジョワなんだよ…」

爆豪先輩が見たことない顔してる。
現在、私たちはウナちゃんの家が用意した飛行機に乗っていた。
姉様たちも誘ったのだが、ずん姉様は受験勉強だからと断り、タコ姉様はお仕事だからと断った。
爆豪先輩のご両親は、「デートに行くから」と断ったのだそう。中学生の子供が居ても尚お熱い…。
にしても、前世合わせても初めての飛行機が、アホほど金注ぎ込んだ自家用機とか、贅沢すぎない？
そんなことを思いながら、渡されたジュースをストローで啜る。
よく分からない名前だったけど、ただ一つ言えることは、美味しいってことくらいだ。

「若旦那様、お食事は如何なさいますか？」
「…適当に…見繕って…ください……」
「敬語は結構ですよ。私めは貴方様に仕えてるのですから」
「……うっす」

爆豪先輩が疲れてる…。
適当に見繕ってくれ、なんて言ったら、どんな高級食材が出されるか。
さっきから金銭感覚が違いすぎて、頭がおかしくなりそうだ。
こち亀の両さんも、こんな感覚を毎日味わってたんだろうか。

「自家用機といい、あの豪邸といい、このジュースといい…。
音街家って、どんだけ資産あんの…？」
「んーっと…、本気出せば、経済ガン回し出来るくらい？」
「こち亀の中川家ですかね…？」

緑谷先輩とか、つづみさんのデタラメさばかり目立ってたから気にならなかったけど、ウナちゃんも大概か…。

アイドルとしての人気もあるし、人の本質を見抜く才能もある。
そう考えると、爆豪先輩を選んだのは正解だったのかもしれない。
この人、口の悪さはとにかく、人を動かす才能は確かなものだし。

「爆豪先輩、経営とか運営とか、そういうの学んだりしてるんですか？」
「音街の爺さんにな。
心理学とか、人を動かすには欠かせない学門は勿論、経済学とかその他諸々、時間空いた時に頼んでる」

ウナちゃんのお爺さんか。
前に何度か会ったけど、縁側でお茶啜ってるような、何処にでも居そうなお爺ちゃんだったけど…。
音街家は結構な資産家で、歴史もそこそこあるらしい。
…私の交友関係、実は結構ヤバい？

「……で。爆豪先輩はウナちゃんのこと好きなんですか？」
「……さぁ？ハッキリいうと分かんねェわ。

今まで『好き』なんて感覚、ヒーローに対する憧れくらいだったからな。
…ま。プロまでにはキッチリ答え出す」

一等星の男性陣はなんでこうも堅物なんだ。
緑谷先輩といい、この人といい…。
あかりさんとウナちゃんが不憫に思えてならないのは、私だけなんだろうか。
そんなことを考えていると、ウナちゃんが爆豪先輩の肩をつつく。

「バクゴーさん、なんか映画見る？お爺ちゃんの趣味で、ジ○リの作品しか無いけど」
「…ラピュ○で」
「は？もの○け姫一択でしょ」

この先輩は何言ってんだ。
私が反射的に言うと、爆豪先輩の目が据わった。

「は？東北、テメェ目ェ機能してるか？どう考えてもラピュ○の方が面白い」
「は？髪どころか脳内まで爆発してんですか？もの○け姫が劣ってると？」

「あァ?」
「おォ???」

戦争だ。
なりふり構うか。これはもうとっくに鬨あがってるわ。
ブォーンブォーン言ってるわ。

「普段は仲良さげなのに、なんでそんなピンポイントで喧嘩するの…?」
「気は合うようですが、好みが壊滅的に合わないだけかと」

♦?♦?♦?♦?

「先生、ほんまに良かったん?ウチら一緒の飛行機で」

機内食に舌鼓を打つ最中。
目の前に座る麗日さんが、ソースを頬に付けたついなちゃんの顔を拭きながら、僕に問いかけた。

僕たちは現在、音街家の息がかかった航空会社の飛行機に乗っている。
本当は妻の友人が用意する予定だったが、一等星関連の話題を制限しないように、と音街さんが全員分を手配してくれたそう。
富豪ってすごい。

「つづみさんの希望です。『自慢の弟子を一人でもいいから紹介したい』と」
「…ばか。そんなにハッキリ言わないで」

僕が答えると、つづみさんが肘で僕を突く。
まだ優しい威力だけど、本気でやったら骨砕けるんだろうなぁ…。

「新婚旅行にお邪魔するって、気がひけるんやけど…。あの、ほんまにええん？」
「いいですよ。二人きりになる時間はしっかり確保してますので」
「いいわよ。二人きりになる時間はしっかり確保してるから」
「わっ、息ピッタリ」

同時に同じようなセリフを言ってしまった。

二人きりになる時間…とは言っても、食事で指定席を用意してるだけのことだが。

「二人って、十年前は同棲とかしてたん？」

「ええ。二ヶ月くらい」

あの二ヶ月は…刺激的だった。いろいろと。

おかげで女体に耐性が出来たが、もう二度と体験したくない。

性欲だけ除けば性格含めて普通に可愛いのに、そこだけが残念だ。

「デートとかしたん？」

「勿論。ただ、その頃はコウくんのチョイスが酷かったわね。

最初のデートなんて、大学の講演会よ？」

「その節は本当に申し訳ない…」

目の前に座る二人が『うわぁ…』って言いたげな顔してる。

二十代の僕は、自分で言うのも何だが、どうかしてた。

教師になるために、どう考えても過剰な密度の勉強をしていた気がする。

それをデートにまで持ち込むくらいには。

「でもまぁ…、つまらない…とは思わなかったわね。好きな人と一緒だったから」

と、つづみさんが笑みを浮かべた。

…小っ恥ずかしいから、やめてほしい。

そんなことを思ったその時だった。

機内に衝撃が走ったのは。

♦？♦？♦？♦？

「わぁぁぁぁぁぁっっっ!!!」

「今度はなんだ!?」

「ポテチの袋がパンパンにぃ!!!!」

「爪楊枝で穴開けろォ!!!!」

飛行機に乗った時点でもう疲れた。
なんだ、この人のポンコツ具合は。
こないだの『お汁粉「缶ごと」爆発事件』に加え、さっきの墜落しかけた事件といい…。
緑谷から諸々の機械預かってて良かった。
多分、これ無かったら、今頃死んでる。

「あの、もうこの人、寝かせたほうがいいんじゃない…？」
「同感。起きてたらまた墜落しそうになる」
「酷ぉい!!!」
「「酷くない!!!」」

酷いのはお前のポンコツ具合だろーが!!
心中でもそう叫びながら、俺は用意されたお茶を一気に呷る。
喉が潰れそうだ。先生はよくこんなのと生活できてるな…。

「これでマシになったとかマジか…？」

「韻踏んだ？」
「踏んでない…」

緑谷と出会った当初は、一体どんだけポンコツだったんだろうか。
何にせよ、このポンコツをなんとかしない限り、俺たちの空旅に安寧は訪れない。
そんなことを思っていると、飛行機に衝撃が走った。

「……もう、慣れたわ」
「慣れちゃダメだと思うよ…」

♦？♦？♦？♦？

「葵さん、日本に来てたんですね」

琴葉博士…ややこしいから茜さんと呼ぼう…茜さんが用意してくれた飛行機の中。
僕は用意された料理を切り分けながら、目の前に座る女性に声をかける。
こうして実際に会うのは、かれこれ二年ぶりくらいだろうか。

あいも変わらず疲れ切った表情を浮かべる彼女は、頭を抱えながら愚痴をこぼす。

「あのバカ姉を連れ戻しに来たんだけど、いつの間にかｉ・アイランドに帰ってた。ほんっと、あのバカは……」

彼女…琴葉葵は、巷では「苦労人」と噂され、世界中から同情の視線を向けられる女性だ。

あまりの苦労人気質からか、「非公認葵ちゃんを見守る会」なんて会もあるらしい。

会長はなんとあの、現在のアメリカ大統領夫人だと言う。

彼女に用意されていた食事も、胃に優しい流動食だった。

「君のナノマシンが無かったら、私の寿命は五十年は縮んでたと思う…」

「大袈裟…なんて言えませんね…」

「ホント、どこぞの誰かが学生時代に無駄に焚き付けるから…」

ホント、どこの誰だろうなー…。

先生のことなんだけど。本当、どんな学生時代送ってきたんだ、あの人。

茜さんたちに聞いても、上手いことはぐらかされるし。
僕は凄まじい勢いで食事を楽しむあかりさんを隣に、切り分けた肉を口に運ぶ。
…肥えた舌でも分かる。高いヤツだこれ。

「葵さんも何か発表はするんですか？」
「いや。私はきちんと休暇を取ってる。
シールド博士からは『裏切り者！』と泣きつかれたがな」

あかりさんの問いに、葵さんはお粥を口に運びながら答える。
この人が休暇を取るって、珍しい。
普段は忙しさのあまり、「休暇」って単語を忘れそうになるのに。

「休暇の理由は？」
「君たち『一等星』だよ。君たちのせいで、個人で研究したいことが山ほど出来た」
「はへ？」

なんかしたっけなぁ…？

僕たちが首を傾げると、葵さんはカバンから資料を出した。

「個性について研究しようと思うんだ。
紲星さん曰く、個性は『人とは違う生物である』そうじゃないか。
すごく興味深い。ということで、数年間は個人の研究に専念する旨を国に伝えた」

茜さんは言うまでもないけど、この人も大概じゃなかろうか。
本当、僕の知ってる科学者って、好奇心だけで生きてるような人たちだなぁ。
…僕も人のこと言えないけど。
いつになく興奮する葵さんの資料を読み流しながら、僕はあかりさんに切り分けた肉の一切れを食べさせた。

「…仲睦まじいねぇ、君たちカップルは」
「まだ返事もらってませんけどね」
「そういう責任が取れるようになってから、返事をします」
「……今の日本の子供って、こんなに堅苦しいのか？」

葵さんが首を傾げると、それに答えるように、料理に舌鼓を打っていたお母さんが声を出した。

「自慢の息子です」

「…もう少し見た目に気を遣えば、引く手数多だろうな」

「しつこく言ってるんですけど、全然聞かないんですよ、この子」

うっ…。仕方ないじゃないか。

ファンデーションなんて使い方分かんないし、ワックスなんて使っても髪がテカテカするくらいで、癖っ毛が治るわけでもない。

ストレートパーマをかけた際には、皆にバカにされたし…。

そんなことを言っても、反論されて何も言えなくなることは分かってるから、何も言わないが。

「見た目というと…。紲星さんは化粧せずにソレなのか…？」

「化粧品が肌に合わないので…」

「ホント、末恐ろしい子…」

たしかに、あかりさんの見た目は男の僕が見てもかなり整っている。
学校に行くと、下駄箱に入らない量のラブレターが入ってるくらいには。

「そこら辺どうなの、出久としては？」
「綺麗って言うよりは、可愛いって感じかな？…あんまり見た目で人を見たことないから、分かんない」
「……よく出来た子だなぁ」
「思ったことをハッキリ言っちゃうのは難点だけど、それ以外はいい子なのよ」

ハッキリ言わないと伝わらないじゃないか。
流石に言葉は選んでるけど。
そんなことを思いながら、最後の一切れを口に運び、デバイスに目を向ける。
…轟くんも災難だな。いや、災難なのは『僕たち』か。

「……ちょっと席外すね」
「どうかした？」

「『ヒーロー』の出番が来た…ってところ」

僕は言うと、デバイスを軽く操作する。

グレードアップした『シリウス』の初陣だ。

ｉ・エキスポ前に派手にやってやろう。

遠距離攻撃は最強（ただし命中率は別）

「…あまり言いたくはないが、嘆かわしい。
いくら日本の信用が地に落ちたとは言え、義憤に駆られ、無差別に日本からの飛行機を狙うヴィジランテが現れるとは…」
「トシ…。心中察するよ…」

現在、上空五千メートルにて。
私…オールマイトは、親友であるデイブが用意した懐かしのマシンの羽部分に立ちながら、愚痴をこぼす。
昔はこれに乗りながら、アメリカ中の敵をばったばったと薙ぎ倒したものだ。
懐かしさに緩みそうな顔を引き締め、襲われている飛行機へと向かう。

「ＨＥＹ！そこのヴィジランテ諸君!!」
「……オールマイト？」
「オールマイトだ…」

飛行機を襲っていたヴィジランテに、私は見覚えがあった。
確か、アメリカで活動しているというヴィジランテグループ…『ＦＬＹＥＲＳ』。
ヴィジランテ集団とは言うが、「悪には容赦するな」を心情とした、過激な集団であるとデイブから聞いたことがある。
まぁ、物騒なアメリカなら当たり前のことなんだが。
そう考えると、手心を加えていた私は随分と異端だったのだろう。

「んんっ…。英語は久々だな…。『君たちはＦＬＹＥＲＳとお見受けする!!どうして日本からの飛行機を狙う!?』」

久々に発する英語に、不自然なところは無いだろうか。
そんなことを思いながら、私は声を張り上げて、個性をもって飛行機を襲おうとする彼らに迫る。
私からの質問にならばたじろぐと思ったが、彼らは淡々と言葉を返した。

「オールマイト。お言葉だが、今の日本が信用に値するとでも?」

「オールマイト。今の日本は『敵』だ。
あなたと言う絶対的正義が居ながら、尚も『悪』が育つのを放置した。
これを『悪』と呼ばずして何と呼ぶ？」
「オールマイト。邪魔をするのならば、あなたであろうと水底に沈んでもらう」
「それは極論すぎなんじゃないかな!!」

私がそう反論すると、彼らは首を横に振る。
極端な思考の持ち主は、総じて頑固だ。
心中で愚痴をこぼしながら、私は拳を強く握る。
飛行機に影響がないよう、最低限の威力で戦わなければ。
そんなことを思っていた次の瞬間だった。

「あぺっ」
「ぁふんっ」
「ふぺっ」

彼らが一斉に妙な声を上げて、空から転落していったのは。

私たちが呆気に取られていると、ぼふん、と下から音が響く。
そちらに目を向けると、いつ間にか用意されていたのか、空飛ぶネットに絡め取られたＦＬＹＥＲＳが見えた。
一瞬にして起きた出来事に首を傾げていると、人影が太陽を遮った。
私が顔をあげると、そこには。

『はぁぁぁあ……』

弓を片手にがっくりと項垂れるＳＡＶＥＲが、空に立っていた。

♦？♦？♦？♦？

『モード：アルテミス…。肝心の僕がクソエイム過ぎて宝の持ち腐れ感が…』

ずん子さんの弓道の腕が欲しい。
心の底からそう思ったのは初めてのことだ。
なんでノリで麻酔電流を放つ武器を、弓矢になんてしたんだろう。

おかげで数発外した。
下手な鉄砲数撃ちゃ当たるとは言うが、僕たちが備えるべき相手は、そんな甘えが許される相手ではない。
サポートＡＩも用意したが、それでもカバーし切れないほどに、僕が武器を使用したエイム力がクソすぎる。
…奥さんは詳しそうだから、帰国したら鍛えてもらうことにしよう。

『ったく…。あと六箇所も回らなきゃいけないのか…。クリスマスくらい大人しくしてろっての…』

反省点をいろいろと纏めながら、イズク１５号『アドラステア』…浮遊ネットを展開する衛星型ビット…でふん縛ったヴィジランテを、巾着袋に入れたみたいにして持ち上げる。
あとは…ｉ・アイランドにでも放り込んでおくか。
あそこはタルタロス並みの防衛システムが敷かれてる。
放り込むだけで、即座に警備ロボットが殺到するだろう。
あと六箇所も捕らえているから、大忙しだ。

全く。楽しみにしてたエキスポを出鼻から挫かれた。

「ＳＡＶＥＲ……!?」

「あれがか…!!」

『はへ？』

心の中で愚痴を吐き捨てる最中。

そんな驚愕の声が、僕の鼓膜を揺らす。

僕はそちらの方に目を向け、マスクの下で、外れそうなくらい顎を開いた。

『……は、初めまして…。オールマイトに、シールド博士…』

嘘だろ!?アメリカでの伝説コンビが復活してる!!

しかもブロンズエイジのコスチューム!?いや、それを改良して、デザインもちょっと変わってる!!正真正銘、初出のコスチュームじゃないか!?!?

わぁあ!!やばい!!興奮で死にそう!!!

一緒に写真撮って欲しい!!!!そんでもってそれを家宝にしたい!!!!!

出来ればいつまでもこうして見つめ合っていたいいいいいッッッッ!!!!!!

マイクを切って外にはわからないように、興奮をぶち撒ける。
初めて消音機能を付けてて、心の底から良かったと思った。
流石に小躍りしたり、詰め寄ったりはしないが…。
ｉ・アイランドでコレが観れるのだろうか。
楽しみを先取りした感が否めないなぁ…。

「ＳＡＶＥＲ！先程のは君の仕業か!?」
『…撃ち落としたのは、そうだが？
ああ、安心してくれ。先ほどのは麻酔電流を撃ち込んだだけだ。
一日寝たきりだが、人体に害はない』

メカニズムを明かしたら、シールド博士に簡単に正体を暴かれそうだ。
いずれ僕が学会に進出するまで、発明品の自慢はよしておこう。
いつの時代だって、科学は怖いんだ。
そんなことを思いながら、僕は巾着袋のように掴んだネットを広げ、中に居た人たち

をオールマイトに投げ渡す。
やはりトップヒーローは格が違う。
軽々と十数人を受け止め、凄まじい体幹で彼らを持ち上げていた。

『コイツらは貴方たちに任せる。
正直、貴方たちとの別れは惜しいが…。
我の目の届く範囲に、まだ悪が居るのでな』

ああー…。普通に話したかった!!
ヴィジランテやってると、本当にコレだけがネックなんだよなぁ…。
ｉ・アイランドで会えることを祈ろう。
神がいるかもわからないが、僕は神に祈りながら踵を返す。
…空を飛んでるから、踵を返すって言い方が正しいのか分からないけど。
僕がその場から去ろうとした、その時だった。

「一つ、答えて欲しい!!」

ーーーーーー君は、未来人なのか!?!?!

オールマイトの口から、その単語が飛び出したのは。
やっぱり見られてたじゃないか!!なんか変な勘違いもされてるし!!
どうしよう。何で答えたらいいんだろう。
こういう時、先生だったらどう誤魔化すんだろうか。
そのまま頷く?…バレた時、後が怖いなぁ。
……もういいや。変に隠すとボロが出るし。普通にバラしちゃえ。
念には念を入れまくって隠蔽してるから、バレやしないだろう。

『我は、この時代のヒーローだ』

…まだ免許もないのにヒーローを名乗るのもどうかと思うが。
しかも相手は、プロの中のプロ。しかもトップヒーローだ。
撤回するつもりは無いけれど。

『もう行くぞ。またいずれ、何処かで』

「待てっ!!」

オールマイトの制止を振り切って、その場から去っていく。
その後結局、僕は十二箇所でヴィジランテやら敵やらの排除をする羽目になった。
ちくしょう。クリスマスくらい、ゆっくりさせてくれ。

♦？♦？♦？♦？

「着いたー！」
「はしゃぎ過ぎんなよー。転んだ時の消毒面倒だろォが」

ｉ・アイランドに備え付けられた入口にて。
ウナちゃんが伸びをしながら、体をほぐすために伸びをする。
爆豪先輩も同じように、軽く体を動かして筋肉をほぐしていた。

「……それにしても、音街ン家の使用人は何なんだ」
「飛行機の外に出て、襲ってきたヴィジランテ薙ぎ倒してましたもんね…。便所用の

モップで」

あのメイドさんの個性って、確か「くっ付くだけ」だったような…。

それで飛行機にくっ付いたのはまだわかるけど、微動だにしないままモップで敵を薙ぎ倒してたのはどういうわけなんだ。

私たちがそんなことを思っていると、そのメイドさんがいつの間にか、私たちの背後に現れる。

「実は我ら使用人一同、十月半ばより鈴木つづみ様からご指導を受けておりまして。

彼女のご指導に比べれば、まだまだ軽いですよ」

「…あの人、どんだけ無茶な修行してたんですか？」

「少なくとも、なんの戦闘技術も持たなかった麗日が、二ヶ月で一騎当千の軍人レベルになるくらいにはキツいぞ」

爆豪先輩が「思い出したく無い」って言いたげな顔してる。

無敵軍隊でも育ててるつもりなんだろうか、ウチの担任の奥さんは。

そんなことを考えてる内に検問を潜り抜け、私たちは目の前に広がる光景に息を漏ら

す。

「わぁあ……！」

「すっご…。流石はｉ・エキスポ…」

初めて来たｉ・アイランドは、クリスマス仕様に飾り付けが施されていた。

南端に近いこの場所からでも理解できるほどに、天高く聳え立つクリスマスツリー。

遠目から見ただけじゃわからないが、おそらく本物の杉の木ではないだろう。

だが、その電飾やらホログラムやらが織りなす光の芸術は、言葉に言い表せない美しさを誇っている。

ｉ・アイランドにあるアトラクションも、クリスマス仕様に模様替えが施されており、テレビ局も殺到していた。

「……電飾がチカチカしてうぜェ」

「この光景見てそんなこと言えるの、多分アンタくらいですよ」

そんな雰囲気をぶち壊す一言を、躊躇いもなく放つ爆豪先輩。

この先輩は、ムードを読み取るスキルが欠落してんじゃなかろうか。

「……ねぇ、あれ。日本人じゃ無いか？」

「本当だ…」

爆豪先輩を半目で睨んでいると、ふと、そんな声が耳に入る。

英語だったが、学んでたおかげで容易に聞き取ることが出来た。

…まぁ、信用が地に落ちた日本人を、警戒を込めた視線で見るのはわかる。

それを小5と中1の子供にまで対象にするのかね？

「気にすンな。やましいことなんざねェんだから、堂々としてりゃあいい」

「前の爆豪先輩だったら、『退け端役ども』って罵声浴びせてそうですけどね」

「ンだとォ!?!?そんなことあったわチクショオオッッッッ!!!!」

「自覚してるんなら反射的に反論しなきゃいいのに…」

この先輩は成長してんだかしてないんだか。

そんなことを考えながら、私たちはi・アイランドでの一歩を踏み出した。

♦？♦？♦？♦？

『クリアタイム６８秒!!第２５位!!』
「ニホン人は引っ込めー!!」
「トロいんだよー!!」

「友人を呼んでくる」と言った先生たちと別れ、目ぼしいアトラクションを回っていると、そんな罵声が響いてくる。
私たちは互いに顔を見合わせ、人だかりが出来ているアトラクションへと向かう。
名前は『ヴィラン・アタック』。
仮想敵と称されるロボットを、出来るだけ早く破壊するというアトラクション。
ヒーロー免許が無くとも参加できるため、職によって個性を抑圧された人々のニーズもあってか大人気のアトラクションらしい。

「…日本人、印象最悪やな……」
「まぁ、しゃーないやん。あんなことあったんやし…」

ついなちゃんを助けようとして、世界中にあの映像を発信したのだ。
気にするな、とは言い難いか。

「引っ込めー!!」
「さっさと帰れー!!」

…にしても、態々カタコトに近い日本語で、こんな罵声を出す必要があるのだろうか。
このためだけに日本語を覚えたのかと思うと、ちょっと複雑。
ブーイングの嵐の中心にいる男の子は、果敢にも声を張り上げる。

「…っ、人を『日本人』ってだけでバカにすんな!!!」
「うっせーよニホン人!!!」
「アンタらは敵性国家の敵みたいなモンじゃない!!!!!」

…ああ、見てらんない。
こんなことなら、先生たちを連れてくるんだった。

先生なら、この場をたった一言で鎮められるというのに。
生憎と私には、言葉を武器として使うだけの知識が備わってない。
でも、このまま何もやらないってのも癪だ。

「ついなちゃん、荷物よろしく」
「へ？あ、ちょっ、お茶子の姉ちゃん!?」

私はついなちゃんに荷物を預け、人混みごと柵を飛び越える。
個性は使ってない。この程度なら、お師匠様と奥さんに嫌ってほど叩き込まれた。
そのままコンクリート製の床に着地し、私は声を張り上げる。

「ウチ、参加します!!」
『……へ？あっ、えとっ、はい!!』

司会の人が慌てて準備を始める。
私は男の子に「ちと退いてェな」と個性を使って、柵の向こうに投げ入れた。

『つ、次の挑戦者はこちら!!』
「またニホン人かー!!」
「出てけー!!」

ブーイングの嵐の中、私は体をほぐし、呼吸を整える。
実力で黙らせる。文句のつけようもない、私の全身全霊で。
…というのは建前で、本当は自分がどれだけ成長したか見たいってだけだけど。

『ヴィラン・アタック!!レディーッ、ゴー!!』

合図とともに、私は踵を地面に叩きつける。
敵の位置は駆動音で大体把握済み。
踵が砕いたコンクリートのカケラを指の間で掴み、私は思いっきりそれを投げる。
タイミングもズラして、照準もバッチリ合わせた。
その場から動いたりしないあたり、随分と優しい設計になってる。
私は指を合わせ、コンクリートのカケラに付与した無重力効果を解除する。
次の瞬間には、カケラは敵を纏めて貫いていた。

『……は、８秒……？』

「「「……は？」」」

皆の目が点になる最中、私はぱんぱん、と手を払って埃を落とす。

「『狙撃隕石』。狙った獲物は逃さんで…なーんて♪」

昔見てたト○とジェ○ーから着想を得た技だが、完成までに二ヶ月かかった。

まずは距離の測り方を、きりちゃんのお姉さん…ずん子さんにお願いして、みっっっ…ちり教えてもらった。

あとは筋力を鍛えて、無理矢理に投擲する物を作り出せるようにした。

おかげで、それなりには使える技になったと思う。

屋内に避難されたら完全に無力…というなかなかの欠点はあるが。

『も、もう一度、スローで…』

司会の人がスローカメラで、私の一連の行動を映し出す。
文句のつけようもない流れに、観客席が唖然とする中、ついなちゃんだけが「お茶子の姉ちゃん、カッコ良かったでー!!」と声を張り上げていた。

「どや?文句ないやろ」
『……は、はい。だ、第一位、です…』

ふふん。この記録なら、あのデタラメ個性二人組も超えられまい。
私は誇らしげに胸を張りながら、個性で浮遊して、観客席へと戻る。
と同時に、騒ぎを聞きつけたのか、爆豪くんたちがやってきた。

「おォ、麗日。面白そォなことやってんじゃねーか」
「爆豪くんもやる?ウチの記録は8秒やで」
「ドヤ顔やめろやうぜェ」

爆豪くんは端的に私を罵倒すると、柵を飛び越え、スタート地点に立つ。
司会の人は未だに放心していたが、慌ててマイクを手に取った。

『さぁて、お次の挑戦者はこの人!!一体どんな記録を出してくれるので…』
「前座はいいからさっさと始めろ」
『はひっ…!』

爆豪くんが淡々と司会の人に言うと、彼女は怯えがちに頷いた。

『では、ヴィラン・アタック…。レディーッ、ゴー!!!』

と、開始の合図が響いた直後。
小さな破裂音とともに、全てのロボに風穴が空いた。

『……よ、４秒……』
「「……」」
「だぁぁあっっ!!!フッツーに越された!!!1分もない天下やんか!!!!」

さらば、私の天下。

まさかこんなにもあっさり終わるなんて、思いもしなかった。

やっぱり、『意識の外からの攻撃』になってはじめて真価を発揮する技を使ったのがまずかったか。

普通に投げれば良かった。

「1分天下ご苦労ォだったなァ麗日ァ!!!

未来のトップヒーローの引き立て役として充分な活躍だったわ!!!同じ時代にこの俺、爆豪勝己サマが居たことを恨むんだな!!!」

「早漏!!煽り厨!!!爆豪勝己!!!」

「なんとでも…っておい最初ォ!!!

思春期の乙女がンな下ネタ大声で言うな!!あと誰が早漏じゃ見たこともねェのに勝手に判断すんなブッ殺すぞォ!!!」

「名前はいいんだ…」

「良かねェ!!!」

爆豪くんと言い争いながら、スローカメラを横目で見る。

最初の1秒で位置を把握し、2秒目で指を構える。3秒目で幾つもの細い爆炎を飛ば

し、４秒後には全てが貫かれていた。
やっぱり、奥さんに一番扱かれてるだけあって、状況把握能力が半端じゃない。
私が全力で投げても、６秒はかかりそうだ。
隣の芝生は青いなぁ。
そんなことを思っていたその時。

「なんか騒がしいって思ったら、お前らか」

人混みをかき分けて、轟くんたちが姿を見せた。
珍しくポカをやらかしてないのか、生傷のない顔であたりを見渡すセイカさんに、外国人相手に人見知りを発動しているヒメちゃんとミコトちゃんも居る。
爆豪くんは轟くんの姿を確認すると、心底腹立つ笑みを浮かべて挑発する。

「轟、やってみるか？爆豪勝己という超えらんねー壁を見せてやるぜ？」
「はっ。踏み台の間違いだろ？」
「あァ???」
「おォ???」

「いつも言うとるけど、勝負の度に煽り合うのやめへん…？」

この二人は、仲が良いんだか悪いんだか本当に分からない。
気は合うようだけど、勝負事になるとすぐに相手を煽り出す。
爆豪くんは軽く掌を爆破させ、柵の内側へと戻る。
それと入れ替わるように、轟くんが柵の内側へと飛び降り、軽く着地した。

「始めてくれ」

『……ぁ、えとっ、はい!!ヴィラン・アタック…。レディーッ、ゴー!!』

放心していた司会が、ヤケ気味に叫ぶ。
瞬間。ピンポイントで敵が凍りつき、砕け散った。

『……お、同じく、４秒……』

轟くんは、前に言ってた「ピンポイントでの凍結」を習得したらしい。
デタラメ二人組には、勝てなかったよ…。

肉弾戦なら私の方が強いのに、個性の差って本当にバカにならない。

「俺の方がコンマ数千桁の1秒早かった」

と、轟くんがスロービデオを見ながら、そんな屁理屈をかます。

出たよ、負けず嫌い。完膚なきまでの負けじゃないと、引き分けとか絶対に認めないタチだもんなぁ。

勿論、爆豪くんも同じように屁理屈をかます。

「あ？時差ボケか？テメェの方がコンマ数百桁の1秒遅かったろォが」

「お前の脳細胞、ポップコーンみたいにポンポン破裂してんのか？どう見ても俺の方が早かったろォが」

柵を通して、二人が睨み合う。

リアルファイトに発展した試しはないけど、こうなったら数時間はこのアトラクションに入り浸るだろうなぁ。

「ほ、ほら見ろ!!アレがニホン人の本性じゃないか!!」
「なんて野蛮なの!!」
「とっとと去れー!!!」

まぁ、欠点を見せればこうなるわけで。
もはやただの言いがかりの域だ。
どうやって止めようか、と思案に暮れたその時。

「揃いも揃ってバカばっかなんですかね」

凛、とその声が響いた。
私たちがそちらに視線を向けると、チリドッグ…だったっけか。
ホットドッグにチリソースのかかったソレを頬張る先生が、呆れ顔で立っていた。

「なんだと!?」
「ニホン人が悪なのは、ＳＡＶＥＲが証明していたじゃない!!」
「すみません、脳みそ詰まってます?

ＳＡＶＥＲが証明したのは『国を温床にして育つ悪がいる』ってことで、『日本が悪』って訳じゃないですからね？

あの放送で一言でも『日本は悪だから排斥しましょう』なんて、彼が言いましたかね？」

胸ぐら掴まれても淡々と煽れるあたり、強かな人だよなぁ。

チリドッグを平らげた先生は、「コーラ飲むんで、放してもらっていいですか？」とさらに煽る。

いや、煽ってる訳じゃなくて本当に普通に聞いてるんだろうけど、私がやられたら確実にイラッとする。

先生の声の性質上、疑問系が煽ってるようにしか聞こえないんだよなぁ…。

「野蛮だの何だの言う前に、自分の行いを見つめ直しては？

集団心理で他人を虐げることを良しとする。

小学生のイジメ見てる気分です。ママからきちんとやって良いことと悪いことの区別つけろって言われてないんでちゅか？」

いや、煽ってるわ。めちゃくちゃ煽ってる。
ガタイのいい人相手に良くやるわ。

「の野郎ォ!!」

と、先生に拳が振われる。
無論、先生に抵抗する力があるはずもなく、彼は甘んじてその暴力を受け入れた。
幸い、歯も折れることなく、先生は口の中を切った程度で済んだろう。
口の端から血液を溢すも、特に気にすることなく続けた。

「それに、今回のエキスポで参加できる日本人は、エキスポ開催における関係者から招待状を貰った人間のみです。
つまりは、主催者側から許可を取って来た、信用に値する人間だけなんですよ。
今のあなたたちはどうですか？
勝手に決めつけて騒ぎ立てて…。今なお、この現場が監視カメラで撮影されてることにも気づいてないあたり、しょっぴかれる覚悟が出来てると判断しますが」

先生が言うと、一人が舌打ちをし、その場を去る。
瞬間。その場にいた人たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げ出し、私たちの周りには人が消えてしまっていた。
が。先ほどの男の子と、先生を殴った一人だけが、納得できないと言うようにその場に残っていた。
義憤によって人を殴ったことで、善悪の区別がつかなくなってるんだろうか。

「それが何だって言うんだ!!ニホン人は悪だってことは変わらないだろ!!!」
「会話が成り立たないアホって、あなたのことを言うんですね。
帰国後、生徒達に事例を教えるので、撮影してもよろしいですか?」
「……っっっ!!!」
「っ、危ねェ!!」

と、怒りに任せ、男が拳を振りかぶる。
さっきより威力がある振り方だ。先生の鼻が折れる。
男の子含む私たちが、ソレを止めに入ろうとした、まさにその時。
一人の女性が何処からともなく現れ、男の額に指を当てた。

「トラブル起こさないでよ。死にたくなる」
「ぴぃっ!?!?」
男が裏返った声と共に崩れ落ちる。
女性は深い紫のコートをたなびかせ、私たちの方を振り返った。
「つづちゃんの旦那さんが居るってことは、君たちが、つづちゃんの教え子かな?」
その顔を、私は知っている。
整った中性的な顔立ちに、ショートカットの艶やかな紫色の髪。
少し病的な印象を受ける瞳に、ファンデーションでも隠しきれていないクマ。
彼女はテレビで見た姿そのままに、この場に立っていた。
「初めまして。ボクはハ…ああいや。本名じゃダメか。
ヒーロー名『Ｆｌｏｗｅｒ』。イギリスのトップをさせてもらってるよ」

その笑顔は、疲れが隠しきれていない、ぎこちないものだった。

緑谷出久が友人に頼みごとをすると大体忘れられる

「すまんなぁ、気づかんくて。
前々から『オールマイトを独占してる日本が気に食わん』言う国があってな。
これを機に、血眼になって日本を『敵性国家にしたい』って人がぎょおさん居るねん」
「はぁ……」

疲れ切った僕の体に、コーヒーが染み込んでいくのがわかる。
今飲んでるのはインスタントの物だが、正直、高価な物でもコーヒーの味の違いはまだよく分からない。
大人になったら分かるのだろうか。
そんなことを考えながら、茜さんの話に生返事を返す。

「やっぱ、オールマイトが日本中心で活動してることに不満な人も居るんですね」
「そやな。どの国でも、な。
３０％以上の犯罪率を爆発的に下げたオールマイトの手腕は、各国喉から手ェ出るほ

ど欲しいやろさかい。
強行策に出たら印象悪ぅするから、誰も表立って動いとらんだけや。
水面下じゃもうバチバチやで」

たしかに。ただ一人の人間が永住してるってだけで、こんなにも犯罪率が減ってるのだ。
他の国が欲しがらない訳がない。
それこそ、条件次第ではあの手この手で奪ってくるはず。

「さっきのヴィラン・アタックの件でもそやな。調べたところ、情報がしっかりしとるアメリカ出身は一人もおらんかったで。
ま、そんな出身でも、アンタのメッセージを深読みしすぎて日本イコール悪っちゅう輩は腐るほどおるけどな。
…話戻すわ。あの現場な、『日本が悪だ』と報道で嘘に嘘を重ねまくって洗脳しとる国の出身が、これまたぎょおさんおったんやわ」
「なるほど…。だから、あんな支離滅裂な言動をした人たちが多かったわけか…」

報道ってのは、人を簡単に洗脳する手段の一つだからなぁ。
何処の国だとは言わなかったけど、茜さんは呆れ気味に呟いた。
どうやら、かなりの人が分別ついてるらしいが、一部そういう思想を持つように教育された国の人も招待されているらしい。
全く。国家って仕組みは面倒な物だ。

「まぁ、君のあのビデオも酷いのなんの。
音声差し替えで『日本は悪だー』って感じのセリフになってたし。
全国一斉放送のヤツも、後々で『こっちがホンマやった』ってその国のネットの操作までやってたんやと」
「成る程…。
そもそも自分たちが間違った情報を掴まされてるなんて思ってなかったのか」

日本がオールマイトファンの中では羨望と嫉妬を向けられているのは知ってたけど…。
まさか、そこまでやってる国もあるとは。
オールマイト欲しさで日本を貶める…という話は聞いたことあるけど、まさかマジで

あるなんて思ってなかった。
…大体、敵性国家の隣国らしいが。
まぁ、何年も戦争してたら、平和の象徴に縋りたくなるのも頷けるか。

「それでも、今回の奴らは毛色が違ったな。
わざと騒ぎを起こしたようにしか思えん。
手引きしたヤツも、紙だけしか存在のない科学者やったしな」
「そんなの、あり得るんですか？」
「普通はあり得へんからこんなことなっとんのやろ」
「…たしかに」

ソレを差し引いたとしても、今回の件は少し特殊な気がする。
普通、警備のしっかりしてるｉ・アイランドでトラブルなんて起こすのだろうか。
茜さん曰く、トラブルを起こしたのは一律して同じ国出身で、招待したのは『存在を証明する紙のみ存在してる科学者』。
手を出した例もそれなりにはあるが、全員が捕まる前に逃げ出してる。
しかも予め示し合わせたように、誰も気づかないような警備の穴を縫って、今なお逃

げているらしい。
　そもそもの話、あれだけの日本語を、日本を嫌う国が覚えさせるだけのメリットがあるのだろうか。

「……なんやろ。きなくさいな」
「ですね」

　たしかにそれも気になる。
　気になるけれど、ソレ以前に一つだけ言わせて欲しい。

「…すみません、やっぱりちょっと気まずいんで言いますね。
　裸で寝てるメリッサさんといい、大人のおもちゃといい、しわくちゃな布団といい…。
　ちゃんと後始末はしましょう？」
「しばらくお預けやったから、激しくやり過ぎたなぁ…。満足やしええけど」
「感想言わなくていいですから」

客人が来るんだから、情事の後始末くらいして欲しかった。

♦？♦？♦？♦？

「成る程。俺らはたまたま、その国の連中に絡まれたってわけか」
『うん。…このエキスポで、何かが蠢いてることは確からしいよ。警戒はしたほうがいいと思う。
じゃ、僕はこれからエキスポ限定オールマイトのグッズ販売とサイン会兼握手会に行くから、Ｆｌｏｗｅｒにもサイン貰っといて』
「わかった。こっちからも何か分かったら、また連絡する」

緑谷からの電話を切り、ふぅ、と息を吐く。
日本人が白い目で見られるのは覚悟してたが、中には洗脳教育までして、日本を貶めようと画策してる国家もいる…か。
そんな国から来たヤツが、差出人のない招待状を使って、こぞってｉ・アイランドに集まってる…。
そんでもって、同時に問題を起こす…ってのは、確かにきなくさい。
何が狙いかは知らんが、面倒なことは確定だ。警戒するに越したことはないだろう。

プロヒーローに相談しようにも、情報源はあの茜さんだ。名前を出した時点で、余計ややこしくなることが確定する。

ったく…。毎度思うが、旅行くらいゆっくりさせろよ…。

「イズクさん、なんて？」

「なんでもねーよ。『サイン貰っといて』って頼まれただけだ」

空での活動を終えた緑谷は、茜さんの手引きで何事もなくｉ・アイランドに着いたらしい。

紺星たちがどうしてるかは知らんが、面倒なことに巻き込まれてないことを祈ろう。

…何にせよ、ヒメとミコトを不安にさせるわけにはいかない。

俺の様子を見に来た二人に軽くそう返し、麗日たちがいる部屋に戻る。

「いやっ、あのっ、こんな高ぇの飲めねェっすよ!!俺っ、用務員の親戚から招待状もらった程度で、金なんてねーっす!!」

「遠慮しないでよ。迷惑料だと思ってくれたらいいから」

中に入ると、約一名が用意されたジュースを前に声を張り上げていた。
それを用意したのは、Ｆｌｏｗｅｒ。
一杯五千円近くするジュースをポンと初対面の人間数人に出すあたり、随分と稼ぎがいいのだろう。
俺は用意されたソファに腰掛け、ジュースをストローから啜る。
…音街ンとこといい、コレといい、先生の無駄金消費のために買う食材といい…。
舌がバカになりそうだ。いや、貰えるものは病気以外なんでも貰うけど。
「切島…だっけか。貰えるモンは貰わねーと失礼だぞ。これの材料取ってる人にもな」
「……うっす」
少年…切島鋭児郎と名乗っていた…に諭すように言うと、観念したのか、ジュースに口をつけた。
彼は「またああ言うことされると危険」というわけで、なし崩し的に俺たちに同行することになった。
同行している友人もいないようなので、俺たちが護衛がてら同行するわけだ。

「つづちゃんが前々から『良い弟子が四人できた』って喜んでたんだ。
会ってみたいって思ってたんだけど…あと一人…モジャモジャのミドリヤって子は？」
「知り合いンとこっす。なんか用事あるらしくって」

爆豪が誤魔化し、茶菓子を摘む。
ハッキリ言うが、琴葉茜の名前は見え透いた地雷みたいな物だ。
彼女の知り合いと言うだけで、どうなるか分かったモンじゃない。
俺も何度か話したが、あの人は「他人を自分の領域に引きずり込むのが天才的に上手い人」なんだろう。
予め緑谷に警告されたお陰で、そのペースに飲み込まれずに済んだが、「善悪の区別を曖昧にするのが上手い人だ」と感じた。
正直、敵じゃなくて良かったと心の底から思う。

「ハナ、少し話を遮るわ。
…ヴィラン・アタック、見せてもらったわ。
麗日さん。試したいからって新しい技を使いたがる傾向を治しなさい。

轟くんは位置把握に時間かかりすぎ。1秒足らずで出来るようにしなさい。
爆豪くんは…スキル面は問題ないけど、弾速を上げなさい。アレじゃ防がれる」
「「は、はい……」」

ダメ出しされた。
多分この人なら、1秒足らずで真っ二つに引き裂いたりとか、普通にやるんだろうな。
一等星に入ってから、つくづく自信無くす。
規格外を超える…ってのは、こんなにもキツいのか。

「良いわよ、ハナ」
「羨ましいなぁ。最初、ボクに指導した時はもっと適当だったくせに。
この子たち、そんなに気に入ってるの？」

軍の教官なのか、奥さん…？
音街ン家のメイドやら執事やらが漫画みたいな戦闘力を身につけた件といい、俺らのこの爆発的なパワーアップといい…。
殺伐とした日常に身を置いていただけあって、「何を伸ばせばいいか」を判断する能力

がズバ抜けてるんだろう。
当の本人は、俺たちを気に入ってると認めるのは恥ずかしいのか、そっぽを向く。
「……ノーコメントで」
「めちゃくちゃ気に入ってますよ。少なくとも、僕に自慢しまくる程度には」
「ばっ…、コウくん……!!」

が。先生がカミングアウトしたことにより、膨れっ面になる。
訓練時と我慢し過ぎた時がアレなだけで、普段は表情豊かな人なのだろう。
Ｆｌｏｗｅｒはその様子を見て微笑み、俺たちをまじまじと見つめた。
「……ボクが死んでも大丈夫なくらい活躍してくれそうだね。
これだったらすぐに死ねる」

そんな発言を添えて。
さっきから何かにつけて「死にたい」としか言ってないぞ、この人。
ヒーローはストレス職だと聞くが、二言目に「死にたい」って言うほどなんだろうか。

…なんだろうな。イギリスの犯罪率、低めとはいえど２８％らしいし。
そう考えると、日本のヒーローは如何に気楽になれる職業なんだろうか。
全く。オールマイトの存在がデカ過ぎる。

「その死にたがり、結局治らなかったのね」
「むしろ悪化したよ。最近じゃ事あるごとに死にたくなる」
「あ、昔からだったんですか」
「うん。生まれつき、そういう病気らしくてね。あ、うつ病じゃないんだけど…。
お医者様が言うには、ボクって生まれながら、『死ぬことに依存してる』…らしい。
『死亡懇願依存症』…って言われた」

随分と難儀な病気だ。
音楽に携わる人の中には、そういう重いバックボーンを武器にして戦う人もいる…と、音街から聞いたことがある。
…死にたいと言ってるのに、ソレにしては、自殺を図ったような傷跡は見られないが…。
マジマジと彼女の姿を見ていると、その視線の意味に気づいたのか、彼女は俺に確認

するように問うた。

「……ああ。ボクに自傷痕がないのが不思議なのかい？」

「…ま、まぁ」

「なんてことはないよ。ボクは自殺しようって思ったことがないだけ」

自殺しようと思ったことがない？

俺たちが首を傾げると、彼女はあっけらかんと答えた。

「心の底から死にたいって思った時は…昔は、敵の真ん前に出て『殺してくれ』って懇願してたからね。

自分で終わらせるだけの胆力もなければ、自殺がもたらすものを理解できないほど理解力に乏しいわけでもなかったから」

よくそれで生きてたな!?

あまりの暴露内容に目を白黒させていると、奥さんが口を挟む。

「ヒーローになるまでは『イカれた女』ってことで、敵にもまともに相手にされなかったらしいわよ？」
「失礼しちゃうよね。ただ殺して欲しかっただけなのに」
「…妥当な判断じゃないっすかね？なんか怖いし」

話題に着いて来れてなかった切島が、バッサリ言った。
緑谷みたいに、思ったことをハッキリ言うタイプか。

「切島、お前爆豪に次いでツッコミ役として優秀だな…」
「え？何その嬉しくねェ褒め言葉。爆豪ってこの口悪ィのだろ？」

東北が吹き出した。
緑谷居たら大爆笑して爆豪がキレてたパターンだな、コレ。
生憎、緑谷はオールマイトが参加するイベントに参加して、この場にはいないが。
当の本人は不服そうに、怒鳴り声を上げることなく視線を逸らす。

「……ソが。反論できねェ」

「にべもなく怒鳴りつけないあたり、成長しましたよね、君」
「毎日毎日やってりゃ流石に学ぶわ」

爆豪は気に食わないのか、膨れっ面でスコーンを口に入れる。
ボロボロ零したり、乱暴に口に放り込んだりはせず、あくまで上品に。
作法を習ってると聞いたが、本当だったのか。
イメージに合わな過ぎて気持ち悪い。

「じゃあ、ヒーローになった理由も、敵性国家に渡ったのも？」
「まぁ、そだね。紆余曲折あって、できることなら平和な世界で野垂れ死にたいって願望が出来たけど。
…ああ、紆余曲折については、あまり聞かないでおくれよ？」

「紆余曲折」が気になるが、話すつもりはないらしい。
…自分だけの思い出に浸りたいって気持ちは、分からないでもない。
俺も、母さんとの思い出はコイツらに語ったことがない。
…多分、独占欲というか…土足で踏み入られたくない領域…とでも言うのだろうか。

「結局死にたいんや…」
「生まれながらずーっとこう思っちゃう病気だからね。軽々しく言うなって人もいるけど、ボクからすれば息を吐くほど当たり前なことだから」

つくづく思う。難儀な病気だ。
ＰＶを一つ見ただけだが、儚げな印象があったが、実際に会った感想としては、儚いと言うより、酷く脆いように思える。
それこそ、ちょっと突いただけで崩れ落ちてしまいそうだ。
そんなことを考えながら、俺は前々から聞こうと思っていた疑問を放つ。
「…あの、敵性国家って、どんな場所なんですか？
おくさ…、鈴木さんに聞いても、なかなか教えてくれなくて」

そう。俺たちは、敵性国家の詳しい事情をこれっぽっちも知らない。
以前、どっかの国が電子ドラッグをばら撒いて、一日にして隣国を壊滅に追い込んだと言う理由から、国連から徹底的に情報が規制されているという部分もある。

だが、それを差し引いても、俺たちは敵性国家のことを知らなすぎる。
今回、とある国がエキスポに乗じて何かを企んでるという。
考えたくはないが、もしそれが敵性国家だとすれば…。
ハッキリ言うと、どんなに無茶苦茶なことが起きてもおかしくはない。
Ｆｌｏｗｅｒは半目で奥さんを一瞥する。

「……つづちゃん、意地悪はいけないんじゃない？」
「知らなくて良いことだもの」

奥さんの言葉に肩をすくめ、「頑固なんだから」と茶化すＦｌｏｗｅｒ。
彼女は紅茶を啜ることで唇を潤すと、あっけらかんと答えた。

「地獄だね」

その答えは、求めたものとは違った。
あまりにも抽象的で、判断に困る。
たった二文字の文字列から、どうやって詳しい事情を汲み取れというのだ。

俺が思っていることを察したのか、麗日が口を挟む。

「……いや、その、轟くんが聞きたいのは抽象的なことじゃなくて……」

「そうとしか言えないんだよ。

あそこだけが、世界が違う。ボクはそんなふうにしか思えない」

世界が違う。一体どういうことだ？

俺たちが首を傾げると、彼女は淡々とその疑問に応える。

「終わってるんだよ。どうしようもなく。

絶対的に悪が蔓延しきってる。

『悪』っていう病気に、国が…人々が汚染されてるんだ」

…絶対的な、悪。

その言葉から、以前対峙したフィクサーを思い出す。

敵性国家が出てきた理由も、ヤツだった。

ヤツがただ一人と会話を交わしただけで、その国は終わった。

ただ、俺たちが知ってるのはそれだけだ。

「…詳しいことは、小さい子たちがいる手前、あまり話せないけど。
ただ一つ言えることと言えば、『世界ごと心中しようとしてる連中が山のようにいる』ってだけ」

世界ごと、心中…？
その言葉に、思わずヒメとミコトを見やる。
万年開花が起こしたあの事件。
薬を打ち込まれたことによって暴走した二人は、躊躇いなく世界を終わらせようとした。
…考えたくは、ない。しかし、考えずにはいられない。

あの機械の塊が『二人が世界を終わらせることを知っていた』としたら…？

「ショート？どうかした？」
「大丈夫？お腹でも痛いの？」

「……ああ、いや。なんでもない」

悪い推測はやめにしよう。

警戒するに越したことはないが、確定した情報が舞い込んでこない限りは考えないことにしておこう。

考えただけで気が狂いそうだ。

俺が頭を抱えていると、着信音が鳴り響く。

少なくとも、俺のポケットは揺れていないため、俺のものではないことは確かだ。

全員が確認し、携帯を耳に当てた一人に視線を向ける。

視線は一斉に、Ｆｌｏｗｅｒに向けられていた。

「ごめんね。…もしもし？

……あれ？…おかしいな、あと数時間は余裕あるんじゃなかったっけ？

……あっ。ああ！そうだよ、そうだった！

…うん。ボクの確認不足だったよ。すっかり忘れてた。ごめんね。すぐ向かうよ」

Ｆｌｏｗｅｒが通話を切ると、ソファから立ち上がる。

そして、俺たちに向けて頭を下げた。

「ごめんね。こっちの都合で来てもらって申し訳ないけど、用事ができちゃった。
ボクの話に付き合ってくれたお詫びに、レストランを予約してあるから、そこでディナーを楽しんで欲しい」

Ｆｌｏｗｅｒは言うと、俺に向けて紙を渡し、窓を開けた。

「次は、ミドリヤって子も一緒にね」

そのまま窓から飛び降りたかと思うと、数秒もしないうちにビル街の間を飛び回る姿が見えた。
残された俺たちは一斉に顔を合わせ、折られた紙を広げた。

「この招待券、サイン付きだぞ…」
「デクにこれ渡したらどうなると思う？」
「これは受け取っても『色紙は!?!?!』ってめっちゃキレると思う」

「なんで？」
「だって俺、緑谷から『もしヒーローに会ったらサイン貰っといて』って百枚くらい色紙預かってるから。ちなみにすっかり忘れてて今全部白紙」
「それお前が悪ィと思うぞ…」

ディナーは騒がしく混沌に

「出久。出久が稼いだお金なら別にいいと思うけど…、買い過ぎじゃないかしら？」
「限定品商法に見事に引っかかった。
流石はオールマイト。ファンの購入傾向までしっかり把握してる」
「出久の物欲に対する耐性が極端に低いだけでしょうに」
「うん。そうともいう」

合流した直後、お母さんに呆れられた。
まぁ、昔からオールマイトに憧れて、オールマイトのグッズを何度もせびったからなぁ。
今はゴーストライターの仕事が稼げてる…茜さんからの報酬がいいだけ…から、自分で買うようになったけど。
それでも、今まで貯めた金の三分の一が吹き飛んだ。具体的に言うと安めのお家建てるくらいの金額。
エキスポ限定品は超プレミアで、値段高騰間違いなしだったからなぁ。

それより遥かに安い買い物をした、と思うことにしよう。
デビュー当時のは、今や数億円単位で出しても普通に売れるくらいだからなぁ。

「茜は？」
「夜の発表会に向けて準備してます。気が乗った時は用意いいんですよね」
「珍しい。発表会に対してやる気があるような人じゃ無いのに」
「ですよね？」

葵さんが言うように、今回は茜さんの様子が変だ。いや、いつも変なんだけど。
しかし、今回ばかりは余計におかしい。
普段、彼女が依頼してくるのは『学会に出す論文の代筆』だ。
バレたら大問題なのは確定だが、定期的に僕の長期休みの宿題の一部を買ってくれる。結構な価格で。
何の宿題かって？自由研究だけど。
先生が悉く「ボツ」ってグレードダウン要求するから、余計余るんだよなぁ。
話が逸れた。
ともかく、今回の彼女はおかしい。内容も茜さんが決め、尚且つ「スピーチ用」とき

た。

何度でも言おう。おかしい。欲に目が眩んで全く気づかなかった僕も間抜けだが。

「イズクくん、難しい顔してますよ?」

「…ああいや。轟くんたち、ちゃんとサイン貰っといてくれたかなって」

そっちの方も心配だ。大阪でも色紙五十枚は渡したのに、全部白紙だったし。

大阪はヒーロー飽和状態だと言うのに、そんなことある?と問い詰めたら、忘れてたと白状された。

今回のエキスポだって、道すがら多くのプロヒーローを見たんだ。

少なくとも百枚のうち五枚…いや、一枚くらいは誰かのサインをもらっていて欲しい。

奥さんと合流したって言ってたし、Ｆｌｏｗｅｒのサインなら貰ってるだろう。

「さっき轟くんからチャット来ましたよ?

『Ｆｌｏｗｅｒと話してたらすっかり忘れてた。ごめんちゃいてへぺろ』って」

「あ???」

轟くんから放たれたとは思えないチャット内容だが、僕を落ち着かせようと測ったのだろうか。
火に油を注ぐと言う言葉、ご存知か？
顔中に青筋を浮かべながら、僕はドスの効いた声で呟いた。

「後で覚えとけよ…って伝えといて」
「久々に見たわ、本気でキレた出久…」
「いや、頼み事忘れた挙句の『ごめんちゃいてへぺろ』はキレるだろ、誰でも…」

♦？♦？♦？♦？

漸くガキどもの世話から解放された…。
疲れ切った表情を浮かべながら、僕は並んだ料理を口に運ぶ。
ブルジョワ達が集まるレストランだが、ここは完全個室らしく、Ｆｌｏｗｅｒも愛用しているとのことだった。
ｉ・アイランドに足繁く通ってるのだろうか。

そんなことを考えながら、僕は食事を口に運ぶつづみさんに目を向ける。

「…つづみさん、その格好はどうかと思いますよ」

「動きやすくていいでしょう？」

彼女が着ているのは、機能性を重視した黒のワンピース型ドレス。

曰く、綺麗に見えるが、スカート部分が破きやすい素材で作られてるらしい。

つづみさんなら何キロの錘を着けていようが、普通に戦いそうなものだが。

「女の殺し屋みたいって、爆豪くんにバカにされてましたよ」

「殺し屋じゃなくて、傭兵」

「とっくに傭兵辞めたでしょうに」

「そうね。主婦って言ったほうがいい？」

「まぁ、そうですね」

普通の主婦なら良かったんだけど。

先日訪れた公安という面倒ごとを思い出す。

なんでも、ウチの嫁を日本の兵隊にしようと画策していたらしい。
血に塗れた日常から帰ってきたんだ。彼女の思う人生を歩ませてやりたい。
国がどうなろうと知ったことか。
クソガキ筆頭が「暇なんで公安のデータベースハッキングして全部魚拓しました」とトンデモ発言かました時のデータが役に立った。
正直、すぐに破棄しても良かったが、公安の弱みを握れたのは大きかった。
「この証拠がでっち上げである」なんて言えないほどに証拠の山だったからなぁ。
隠滅しようにも、手間がかかる…というよりはほぼ不可能だろう。

「……ねぇ。結婚して、良かった？」
「経緯はアレでしたけど、あの二ヶ月は楽しかったですよ。それで充分でしょう」

結婚のことを悔いたことは一切ない。多分、これからも後悔はしない。
鈴木つづみという人間を救えたこと、鈴木つづみという人間と出会えたことなど全て。
あの二ヶ月は、そう思えるだけ、得るものの多い日々だった。
詳しいことは…あまり語ろうとは思わない。

ありきたりなデートをして、ありきたりな日々を送っていただけだから。
なんの面白味もない日々だったが、心の底から楽しかったと言える。

「躊躇いもなく言うのね。そう言うところも好きよ」
「夜の営みの数は減らしてほしいですがね」
「それは無理」

本当、それだけがネックだが。
お陰で男遊びばっかで仕事しない後輩に「枯れてますねー」なんて言われるんだぞ。
まだ三十前半だと言うのに。

「そういえば、貴方から聞いたこと…ほとんどなかったわね」
「何がですか？」
「口説き文句よ」

うぐっ。痛いところを突かれた。
文学作品は論文を出すくらいには嗜んでるため、そういう言葉は割と知ってる。

でも、彼女にそれを言ったことはない。
恥ずかしい…とかではなく、あまり相応しくない言葉たちだと思ったから。
…口腔に広がる料理の味が、分からなくなってきた。
雰囲気に酔ってるのかも知れない。

「……何度死んでも、何度別の人生を送ろうと、君を愛してます」

恥ずかしいけど、この一言に尽きる。
前世は本当に、人生の醍醐味全てをゴミ箱に捨て去ったような人生を送ってきた。
あまり語りたくはないが…。クソみたいな性格が災いしまくって、人生における敵を多く作りすぎた。
前世は人を愛する、なんて、創作の中だけだと思っていたけど。
本当、こんな捻くれた僕でも、誰かと愛し合うって出来るんだな。
いけない。雰囲気に酔って、こんならしくないこと考えるなんて。
クソガキたちに聞かれたら大変だ。

「今度からは積極的に言ってほしいわ」

「……善処します」

悪戯っぽく笑うつづみさんに、苦笑を浮かべる。

新婚旅行ってことで舞い上がってるんだろうか、いつもより声が弾んでる。

夜のライブを楽しむくらいには、まだ余力を残しておこう。

♦？♦？♦？♦？

この数時間で濃い体験し過ぎだろ、俺。

俺…切島鋭児郎はそんなことを思いながら、用意された料理を口に運ぶ。

作法とかいろいろあるんだろうが、生まれも育ちもごくごく普通の一般家庭なので、微塵も知らん。

ただ分かることは、目の前に用意された料理は、俺のような中学生が食えるような安いモンではないことくらい。

「緑谷、お前いつの間に作法覚えたんだ？」

「小５の時。茜さんが『覚えといて損はないでー』って」

信じられるか？
さっきまでショックで腰砕けそうなレベルの口喧嘩してたんだぞ、コイツら。
日常茶飯事なのか、謝りもせずに仲良さげに話し始めるし。
さっきから困惑が止まらない。
天才子役アイドル兼世界トップクラスの富豪の娘として、世界に名を轟かせる音街ウナ。
生物工学者として、人生数回分を費やしてようやく得ることができるほどの、数多の功績を残す琴葉葵。
この二人が居るだけで、充分異常なのに。
ここでの食事を手配したのは、世界的スターとイギリストップの二足の草鞋を吐いた、あのＦｌｏｗｅｒだ。
混乱が止まることを知らない。
「二年前か…。茜が私に習って、作法を覚え始めたくらいの頃だな。
基本的に、覚えたこととか思いついたことは他人に教えたくなる性格だから、君に教えたかったんだろう」

「テメェもそォだろォが行き遅れ」
「殺してホルマリン漬けにするぞクソガキ」

コイツらの口の悪さは何なんだ。
俺の学校は、ガラの悪いのが多くいて、世辞にも治安がいいとは言えない。
そいつらでも躊躇いそうな悪口を、コイツらは躊躇いなく放つ。
普通なら自信過剰で、他人を見下してるような、仲良くなれなさそうなヤツらだと思う。
しかし、自信が過剰なんてことはなかった。
ヴィラン・アタックの結果。プロでさえも5秒を切るのは厳しいというのに。
爆豪と轟は、ほんの4秒でクリアした。
それを遅いと称したあの人は、いったい何者なんだろうか。

「切島の兄ちゃん、大丈夫？高い店で萎縮しとんの？」
「…いや。そーゆーわけじゃねェけど…」

嘘だ。それもある。

周りの視線が気にならないように、と大部屋を貸し切ってくれたのには、感謝している。
だけど、それ以前にメンバーが豪華すぎるし接点が全くわからん。

「バクゴーさん、あーん」
「音街、頼むから自分の立場を自覚しろ。
休業してるつっても、仮にも人気アイドルだろテメェ」
「それ以前にバクゴーさんの許婚だよ？」
「……そーだったわ」

……待って？本当に待って？ツッコミが追いつかないんだけど。

マスコミが狂喜乱舞しながらスキャンダルですっぱ抜きそうな光景を前にしながら、味もわからない肉を口に含む。
あの口が悪くて性格悪そうなのと、天才子役アイドルが、許婚？
脅されてるのかと思いそうだが、どうやら音街ウナは爆豪にベタ惚れらしい。
どこに惚れる要素があンだ、このクソを下水で煮詰めたような性格のコイツに。

混沌とした空間に放り出されると、人って思考を放棄するんだな。

「…わかる。わかるで。カオス過ぎてついてけんのやろ？」

その俺の心情を理解してくれたのか、同情の視線を向ける麗日。

俺は軽く頷くと、彼女は俺の肩に手を置き、にっこりと笑った。

「大丈夫やで。三日も付き合えば、今までの常識ブッ壊れるから」

「全然大丈夫じゃねェ!!!!!」

大丈夫かな、俺。常識バグったりしない？

そんなことを思いながら、俺は食事を口に運んだ。

♦？♦？♦？♦？

「お疲れ様」

「ん。メリちゃんも、お疲れさん」

発表を終えて、メリちゃんから日本から取り寄せたワンカップを受け取る。
やっぱり、ビールよりもこっちの方が私の舌に合ってる。
体に染み込むアルコールに気分を良くしながら、荷物を持って会場を去る。
歩きながら飲むワンカップは、あいも変わらず美味い。

「……随分と警戒してるのね。そんなに危険な相手なの？」
「確定しとらんけどな。よからんこと考えてんのは確かや」

葵も巻き込んでしまうが、許してほしい。
現時点で、『相手』を止める術は殆ど…否。絶対に無い。
どれだけプロヒーローが数を揃えようが、確実に犠牲者が多く出る。
だから理由をつけて、救助に優れたロボを多く有する緑谷くんたちを招きたかった。

「緑谷くんらも薄々勘づいとる。
気づいとらんのは、『今回ばっかり』は役に立ちそうにないプロヒーロー連中…。
いつ来るはわからんけど、エキスポ中なのは間違いあらへん」

全く。興味本位でハッキングして、初めて戦慄した。

このエキスポで各国要人やトップヒーローを一網打尽にする作戦なんて立ててるとは。

「覚悟しいや、アホども。星に手ェ出したら消し炭になるってこと、教えたるわ」

全く。これだから正義の味方はやめられない。

先生「出番なくて役目も取られた。キレそう」

「あー…、あー……。うん。ファルセットもちゃんと出る」

声の調子を整え、ライブに備える。
楽屋に居るのは僕一人。いつだってボクは、自分の楽屋に人を入れない。
他人が信用できない…とかじゃない。
信用できないなら、つづちゃんたちを呼んだりしない。
ただ、歌の前は自分の世界に浸っていたいという、ボクのワガママだ。
このライブで、初めてつづちゃんに恩返しができる。
十年越しの新婚旅行なんだ。
戦友に最高の思い出を作ってあげたいって思うことは、なんら不思議なことじゃ無い。

「……失恋ソングはリストから外してもらってる…。祝福ソングは…トリに入ってる」

スタッフから貰ったリストを確認しながら、歌詞を思い出す。
誰かのために歌うって、初めてな気がする。
今までは、ボクをこの世に繋ぎ止めるための道具だって思ってた。
こんなありきたりな用途に気づくのに二十六年とは、随分と時間がかかったものだ。

「……つづちゃんの旦那さん、きっと、優しい人なんだろうな」

お幸せに、って言葉はおかしいかも知れないけれど。
十年分、思いっきり幸せになってほしい。

「…初めてだ。こんなに、『生きたい』って気持ちが溢れてくるの」

胸に溢れる幸福感に浸っていると、とんとん、とノックの音が響く。
時計を見るも、ライブまでにはまだまだ時間がある。
一体なんだろうと思いながら、ボクは楽屋の扉を開く。
そこには、女性スタッフが困惑を隠しきれない様子で立っていた。

「はい？」
「あの、Ｆｌｏｗｅｒさん。実は、ライブ前に会いたいとある人が…」
「断っておいて」

ライブ前に人を通すとしたら、つづちゃん夫婦とその弟子さんくらいだ。
ボクはにべもなく言うと、扉を閉めようとする。
しかし、女性スタッフは慌てた様子でボクを止めた。

「……何？」
「あっ、あのっ！実は、会いたい人っていうのが…、その、すぐそこにいて……」

と、テンパった女性スタッフの背後の照明がフッ、と消える。
いや。照明が消えたのではなく、何かの影で遮られた。

「やぁ！Ｆｌｏｗｅｒ！初めまして！いや、国連での集まり以来かな!?」
「……なんだ、オールマイトか」
「あれっ!?思ってたより反応薄っ!?」

そりゃ断り難いわけか。
しかし、ボクにとっては関係ない。
ボクが憧れてるのは、つづちゃんとＳＡＶＥＲだけだ。
接点のない仕事仲間と、仕事でもないのに言葉を交わすようなことはしないだろ？
そう言う感覚で、ボクはオールマイトとの面会を断ろうとする。

「オールマイト。初対面で言う言葉じゃないだろうけど、言わせてもらうね。
ライブ前に来るなんて、一体全体アナタは何を考えてるんだい？
このライブは、ボクにとって生涯最大級の舞台と言っても過言じゃないんだ。
その精神統一の邪魔をされて、ボクでも苛立ちを感じてるのだけど」
「えっ!?あっ、その、ごめんなさい!!」

頭を下げるオールマイトを一瞥し、「じゃ」とだけ言い残し、扉を閉めようとする。
が。オールマイトは瞬時に扉に足を挟んだ。

「すまないとは思っている…。しかし、これは私にとって大事な話でもあるんだ…!!

一度でいい、私の質問に答えてくれるだけでいいんだ……!!」
「……自分の立場を利用してるわけじゃ無さそうですけど、もう少し自分の立場のこと考えたらどうです?」

女性スタッフに軽く目配せし、この場から去ってもらう。
全く。これじゃ脅しじゃないか。
平和の象徴という力を、あまり行使して欲しくないのだけど。
根は善人らしいから、無自覚なんだろうな。
人を見る目はつづちゃんに言われ、敵性国家で嫌ってほど鍛えた。
人の本質くらい、少し言葉を交わせば理解できる。

「手短にお願いします。暇じゃないんで」
「あ、ああ…。すまないね…」

大舞台への集中力が削がれたことに苛立ちながら、ボクはキツめに言い放つ。
オールマイトに恐れ多い…なんて言う人は、きっとかなり居るだろう。
しかし、考えてもみてほしい。

大事なプレゼンの前に全く接点のなかった他社の社長がおちょくりにきたらどう思う？

つまりは、そういうことだ。

「……敵は、殺すべきだと思うかい？」

「うん。思うよ」

ボクはそれだけ言うと、扉を閉めようと力を込める。

が、しかし。オールマイトは足を扉から退けなかった。

「質問には答えたでしょ」

「私は…。敵であろうと、人を殺すことは避けるべきだと思っている」

…荒廃期のアメリカのみを経験してるからだろうか。

あの時期は敵性国家の連中も、こぞって国力が随一であるアメリカを支配しようとしていたし、オールマイトの実力がめきめき上がったのも知ってる。

だけど、敵性国家を経験した身から言わせてもらおう。

「……ボクで良かったね。敵性国家を経験して、アナタにキレないヤツ居ないよ」
「鈴木少女にも同じことを言われたな…」

つづちゃんにも接触してたのか。
…制御できるかどうかはさて置いて、兵力として最上級の代物だ。
それこそ、中国の盛りに盛った伝記が「これ何の誇張もないんじゃ…？」って思わされるくらいには。
国からの命令で「説得しろ。もしくは捕獲しろ」と言われていておかしくないか。
この調子じゃ、失敗したんだろうが。

「……敵性国家での命は、それこそ塵芥同然に軽いよ。それだけならまだ、戦争地帯程度だからマシだって言える。
厄介なのは、国全体が『他人を巻き込んで死ぬこと』に夢中なんだ」

敵性国家は、生物が織りなす組織として、どうしようもなく破綻してる。
彼らが互いを殺さずに徒党を組むのは、「利用できるから」。

誰もが互いを利用し、誰もが互いを殺そうとしてる。
そういう国が、敵性国家だ。
片っ端から殺さないと、世界すらも巻き込んで、凄惨に死んでいく。
つづちゃんとボクがそんな中で生き残れたのは、単純に強かったから…くらいしか理由がない。

「巻き込まれてからじゃ遅い。その前に殺す必要があるんだよ。
だから、敵性国家が近くにある国のヒーローは、殺しに躊躇いがないんだ。
アナタが捕まえた敵性国家出身の敵…。その末路を知ってるかい？」
「タルタロスに投獄されたと、知り合いの刑事に聞いたが…？」
「……優しいんだね、その刑事さん。
多分、甘さと優しさをごちゃ混ぜにしちゃってるアナタには教えなかったんだろうね」

全く。ニホンは平和の象徴に寄りかかって、吐きそうなくらい甘い蜜にどっぷり浸かってるんだろうな。
ボクはそんなことを思いながら、真実をあっけらかんと告げた。

「死刑だよ。タルタロスの次…。大罪人の処刑場…『コーカサス処刑場』。
残虐極まりない処刑で、確実に、ゆっくりと死んだらしいよ」
「……そう、か。やはりか」

どんな処刑があるかは言わないけど。
薄々勘づいてたんだろうか、オールマイトは少しばかり疲れた表情を見せた。
敵性国家出身の敵なら、タルタロスに投獄されて半日で処刑執行なんてこともあり得る。
個性発動に必要な箇所を、麻酔を打ってる間に摘出するなんて話も聞くほどだ。
そんな処刑場が成り立つ程に、敵性国家と言うのは世界にとって毒すぎる。

「アナタは殺しを怖がって、答えを出せてないんだと思うよ。
イギリスＮｏ．　１として言わせてもらう。
命に対する答えがなきゃ、今の時代のヒーローなんてやってる意味はない。
世界が認めるＮｏ．　１ヒーロー。アナタは、命を奪うことに対して答えを出したかい？」

「……私は」

…殺したことはあっても、心に決着をつけていないタイプか。
実力と心が伴っていないように感じる。
一つのことしか見ていなかったような、そんなふうにしか思えない。
四十を超えて女々しい人だ。

「…ボクの昂揚を返しておくれよ。
今日は、つづちゃんの結婚を祝うために歌う予定だったんだから」
「……本当に、すまなかった」

オールマイトはぺこり、と頭を下げると、楽屋から離れていく。
…過去最高に死にたい。人生で初めて感じた昂揚を邪魔された。
再び気分を上げようにも、肝心のキッカケのインパクトが薄れてしまってる。

「厄日だ……」

そう呟きながら、扉を閉めようとした時。

あたりに衝撃が走った。

♦？♦？♦？♦？

「切島くん、お疲れみたいですね」

「えっと、京町さん…ですっけ。

まぁ、疲れたって言うとその通りっす」

缶ビール片手に合いそうな油物を紙皿に乗せた京町さんが、俺の隣に座る。

ディナーは高級店だったからか、量は少なかったから小腹が空いてるんだろう。

気味良い音を立てて、グルストを噛みちぎると、彼女はビールを呷る。

「…ぷはっ。大人の贅沢は楽しいですね～。

子供なんですから、そんな受け身にならず、ものごとを受け流すってことも覚えた方がいいですよ」

「……俺の憧れは、真正面からぶつかる漢っすから」

京町さんの言葉に、俺は否と答える。

受け流すなんて、漢らしくない。まるで逃げてるみたいで、嫌なんだ。

俺が憧れた紅頼雄斗は、逃げなかった。

敵性国家から迫り来る大軍の中、一人で戦って、毒ガスだろうがなんだろうが、全てを真正面から叩きのめしたヒーロー。

その姿に憧れて、真っ直ぐにヒーローを目指してるんだ。

「紅頼雄斗ですか？」

「……古いっすけど、知ってるんです？」

「ええ。スーパーのパートの先輩…って言っても、腰曲がったお婆ちゃんなんですけど、ちょうど世代らしくて。

休憩中にしつこいくらい、英雄譚を聞かされるんですよ～」

世代の人は、好きな人が多いだろうな。

敵を倒し切るまで、致命傷に近い傷を負おうがなんだろうが、その命尽きるまでヒー

ローに殉じた漢。
オールマイトが現れるまでの繋ぎとして、日本の犯罪率を４０％から３０％まで抑えた。

「…俺は、彼みたいになりてェ…んすよ。
だから、受け流すなんてしたくねェ。
逃げてるみてェで、やられたまんまでいるみてェで、嫌だ」

俺が言うと、京町さんは缶ビールに軽く口をつける。
中身を少しだけ飲み込むと、彼女は笑みを消して俺に向き合った。

「切島くんは、なりたいものが決まってるんですね？それは否定しません。
でも、それになる…いや。その夢をより立派なものにするために、大人からのアドバイスをしましょう」

ーーーーーー人間って、自分で思ってるより強くないんですよ。

その目が、似ていた。
性別も性格も全然違うはずなのに、彼女は俺の憧れと似た目をしていた。
「たとえば、失敗。
小さいものでも大きいものでも、失敗しちゃったら落ち込みますよね？」
「…そっすね」
失敗…か。真っ先に思い出すのは、初めて個性が出た時。
硬くなった手で目をかいたせいで、瞼の端に消えない傷がついてしまった。
その他にもいろいろあるが、あまり人に語ろうとは思わない。
「落ち込みが何度も重なると、『自分って居る意味あるのかな？』…って思っちゃうこと、ありません？」
「……あるっす」
それは、ある。
テストで悪い点数が続いたりするとお袋たちが怒るし、なにより雄英を目指すための

基盤がなってないという証明になってしまう。
それで落ち込んで、寝れなかったりすることもある。
京町さんは、何処か寂しそうな顔をして、通路の天井を見上げた。
「私って、ドジっ子なんです。
生まれた時からずっと、致命的なドジばっかの、とんでもない疫病神なんです」
「……まぁ、思い知ったっす」
「ですよね」
さっきのディナーでもそうだった。
彼女の取り分けた分だけ、何故か奇跡的な調和でとんでもなく不味くなってたし。
聞くには過去に、言葉に出来ないほどとんでもないやらかしをして、当時の職をクビになったらしい。
今ではだいぶマシになってるらしいが。
「そんな私でも生きてる。その理由って、分かります？」

……分からない。
はっきり言って、俺の頭はそこまで出来が良くない。
精々、平均点を取るのが精一杯くらいで、死ぬ気で勉強しなきゃ雄英は無理だとまで言われてるほどだ。
俺が首を傾げると、彼女はあっけらかんとその答えを言った。

「強くないからです」
「え？」

その答えに俺は目を丸くする。
京町さんは俺の瞳を見つめながら、続けた。

「皆が強くないから、皆で補おうとするんです。私だって、いろんな人に支えられて、逆にいろんな人を支えようとして頑張ってるんです。
強くないって認めないと、誰も気づいてくれなくて、壊れちゃうから。
強くないって、きっと、恥ずかしいことじゃないんです」

そんなこと、初めて言われた。
俺が呆然としていると、彼女は再び笑みを浮かべ、ビールを呷った。
「…ぷはっ。だから、こーやって、たまには逃げてもいいんですよ。
大人から言わせてもらうと、必要のない意地を張るって疲れるんですよ～」

必要のない意地。
そう言われ、俺は少しばかり顔を顰めた。
漢でありたい。それを「必要のない意地」なんて言わせてたまるか。
反論しようとすると、彼女はそれを遮るように続けた。

「強がらないといけない時に強がれる人。きっと、そう言う人を、ヒーローって言うんです。
だから、肩の力を抜いて。漢にならなきゃいけないときにだけ、漢になれるようになったらいいじゃないですか」
「……」

違う。この人は、俺の憧れを否定してない。
ただ、「上手な生き方」を教えてくれてるだけなんだ。
胸に感じたことのない、新鮮な気持ちが溢れ出す。

「俺って、力入れすぎてたんですかね？」
「そうだと思いますよ。
オンオフしっかり切り替える。緑谷くんたちは無意識にやってますよ」
「……あざっす。なんか、ちょっとだけ、スッキリしたっす」

……紅頼雄斗も、そう言う生き方してたんだろうか。
そんなことを考えた、まさにその時だった。

ｉ・アイランドに、悪夢が襲いかかったのは。

シールド博士「詰んでねコレ?」

「やっぱり来たわね。敵性国家」
「分かってて連れて来たんですか、君…」

会場に響いた衝撃と轟音に臆することもなければ、驚いた様子もないつづみさんが呟く。
新婚旅行に行きたいと言った時点で何かあるとは思ってたが、まさか臨死体験の類だとは思わなかった。
まったく。僕の嫁、性格悪すぎだろ。

「いえ、分かってたわけじゃないわ。
『今最も狙う理由がある場所』なのよ、今のi・アイランドは」
「確かに…。　各国要人、各国のトップランカーヒーローたちが勢揃いしてる…。
それを差し引いても、人類の叡智の結晶とも呼ぶべき土地柄だ。
それこそ、敵性国家にとって脅威となる兵器をポンポン作れる頭脳が大勢…。

脅威になる人材を始末するには、絶好のタイミングすぎる…!!」

緑谷くんが早口で補足することにより、皆に緊張感が走る。
ヒーローの中でも一部がちょっとピリピリしてたのは、そういう理由があるからか。
慌てて緑谷くんがデバイスを取り出し、何処かへと連絡をかける。

「…もしもし、茜さん？頼みたいことが…って早っ!?予想してたんですか!?
……いやいやいやいや!!知ってたならプロヒーローに予め言って……え？いや、嘘でしょ？……わかりました」

緑谷くんはそれだけ言うと、通話を切り、だらだらと冷や汗を流す。
その汗がぽたり、と床に落ちると共に、彼は真っ青な顔で告げた。

「……非常事態、です。あと３０分もしないうちに、ｉ・アイランドは水底に沈みます…。
逃げ道は…ありません。空も、海も、何処を探しても…!!」

♦?♦?♦?♦?

「デイブ!!一体何が起きてる!?」
『分からない…!!
ただ、ｉ・アイランドの最終防衛機構が発動してる以上、過去最悪の異常事態であることには間違いない!!』

ライブ会場の通路を走りながら、私はデイブに渡されたインカムで彼に問いかける。
外の状況は一切わからないが、外にいるデイブ曰く「最終防衛機構」なるものが発動しているのだとか。
一度だけ、聞いたことがある。
確か、ｉ・アイランドが直接攻撃された際に、特殊金属がドーム状になってｉ・アイランドを覆うように展開される…らしい。
それ即ち、現在ｉ・アイランドが攻撃されているということに他ならない。

「衛星カメラがあった筈だ!!デイブ、確認してくれるか!?」
『今やってる!!くそっ、何処のどいつだ、衛星カメラをジャックしたのは!?!?!』

インカム越しにタイピングの音が響く。
あいも変わらず素早いタイピングだ。私なら絶対できない。
というより、この歳にもなって私がパソコンに慣れていないだけなのだが。
乱れた心を落ち着けるようにそんなことを考えながら、足を早める。
と、その時。インカムにノイズが走った。

「むっ…？インカムの調子が…？」
『オールマイト!!』

私がそれに疑問を抱くとほぼ同時に、インカムから大声が響く。
その声の主の名前を呼ぶ前に、声は捲し立てるように続けた。

『死んでもｉ・アイランドの外出んな!!死ぬぞ!!!』

それだけ言うと、ブツっ、と何かが切れたような音共に声が聞こえなくなる。
間髪入れずに困惑したデイブの声が、鼓膜を揺らした。

『今のは、アカネ…? 一体どう言う……!?』
「デイブ? どうした?」

デイブが息を飲むのを聞き、私はその理由を問うた。
しかし、放心しているのだろうか。
デイブはそれに応えることなく、「なんてことだ…」と呟く。
『……トシ。どうやら私たちは、既に詰んでるらしい』
「デイブ…? 一体どう言う……?」

ーーーーーーi・アイランドを覆い込むように、毒ガスが散布されてる。

♦?♦?♦?♦?

「毒ガスの成分表です。ちょっと触るだけで死に至るほど危険極まりないです。
引火性も高く、焼却処分なんぞしようもよなら、此処ごと『ボン!!』ってなりますね」

「風で吹き飛ばそうにも、大砲で無尽蔵に打ち込まれてる…。とっくの昔に船に積める量を超えてるあたり、物質を複製する個性持ちが居ますね」

ホント何処の何奴だこんなこと考えたの!!

衛星カメラを浮遊大陸から飛ばし、撮影した映像を前に皆が息を飲む。

映ったのは、幾つもの軍艦。

艦種などはあまり詳しくないからわからないが、主砲から撃ち込まれる弾丸が、ｉ・アイランドの最終防衛機構であるバリアに阻まれるたびに、白い霧が立ち込める。

あの霧の正体は、毒ガス。

それも致死量が少なく、皮膚への浸透性が高い…極め付けには引火性も高いという、危険極まりないもの。

「ｉ・アイランドを支えているアンカーが根こそぎ壊されてます。さっきの衝撃はコレが原因かと。

ｉ・アイランドは浮島ですが、その浮力は装置によるもの…。

海中部分にあるその装置を破壊しようと、魚雷やら個性やらで集中攻撃されてます」

全く。殺意が高いとはこのことか。
そんなことを考えながら、僕はシリウスのコンディションを確認する。
今日は寝不足でもなければ、体力切れを起こしても居ない。
もし途中でフィクサーが来ようとも、相討ちにまでもっていく…くらいは出来るだろう。
もっとも、これは希望的観測だが。

「俺らはどうすりゃいい?」
「…茜さん曰く、『中にも怪しいのが居る』らしい。轟くんたちは、そっちの対処を頼んでいい?」

さっきの騒ぎを意図的に起こした連中、この毒ガス騒ぎと繋がりがないとは思えない。
各国の主要人物をまとめて殺すというのなら、より確実性ある計画を練ってるはず。
…最悪の場合、人工個性が用いられている可能性が高い。
ならば、外の連中の掃討に全力を集中させるのは得策とはいえないだろう。

「…中は私も手伝うわ。作戦は緑谷くんに一任する。ハナ…Ｆｌｏｗｅｒにも協力を仰ぐわ」
「助かります。だったら…麗日さん。僕についてきて」

かっちゃんは爆破で、轟くんはメドローア擬きでｉ・アイランドごと吹っ飛ばす可能性がある。
引火するガスがある分、余計に危険だ。
そう言う点では、麗日さんは適任かもしれない。
ただ一つ問題があるとすれば…。

「ウチ？ウチのスーツ、まだ完成しとらんのやなかったっけ？」
「その……、えっと…、だいぶ前に、とっくに完成してたり……」
「あ???」

麗日さんの顔に青筋が走る。
そりゃそうか。一ヶ月も黙ってたし。
無論、黙ってたのは、忘れてたとかじゃなくて、しっかりと理由がある。

それを語るのは少し後にしておこう。どうせ麗日さんにシバかれるのは確定だ。
今は非常事態だから、彼女も『アレ』を着ざるを得ないだろう。

「……まァ、ええわ。ウチらが外の連中を止めたらええんやな?」
「うん。毒ガスは…葵さん。
浮遊大陸にある研究室に連れていくから、中和ガスの作成を頼んでもいいかな?」
「ああ。成分表さえあれば、十分程度で済む。任せてくれ」

僕は成分表と装置を渡す。
装置は転送に必要なビーコン…まぁ、ＧＰＳみたいなものだ。
研究室や装置の使い方は簡単な説明書を添付してるし、葵さんなら数分もしないうちに理解できるだろう。

「あかりさんと…、気が進まないけど、きりちゃんに、ヒメちゃんとミコトちゃん。海中の装置の防衛、頼んだよ」
「大丈夫ですよ。私と双子は直接戦うわけじゃ無いんで」
「ミコト、ぼーえーって何?」

「習ったでしょ…。守るってこと。海の底にバリアを張ったらいいの」
「それじゃ限界ありそうですから、私が海中で守ります。毒ガス程度じゃ死なないので大丈夫ですよ」

防衛陣はコレでいいだろう。
中はつづみさんと轟くん、更にはかっちゃんが居る時点で過剰戦力に近い。
後は、ｉ・アイランドが陥落する前に行動するのみ。

「先生、残りのメンバーは頼みますね」
「了解です。セイカさんたちもこっちで探して保護するので、ご安心を。
数万年後に発掘されたく無いので、しっかり守ってください」
「もっと言い方あるやろ…」
「前からだし、治らないんじゃない？」

相変わらず、やる気の削がれる言い方だ。
僕は転送装置を起動し、転送が必要なメンバーが光に包まれるのを確認する。
僕もまた光に包まれる中で、お母さんが微笑んだ。

「出久」
「お母さん、どうかした?」
「ヒーローになるって決めたなら、しっかりとやり抜きなさい」
お母さんの言葉に、僕は笑みを返した。
「うん。頑張ってくるね」
次の瞬間。僕らの姿はｉ・アイランドから消えた。

切島、恐怖する

「ぁンの脱獄犯、後で絶対に殴る…!!」
「だからごめんって…」

麗日さんがプルプルと震えながら、地獄の底から這いずってきたような声を出す。
彼女の今の姿は…ざっくばらんに言うと、ソシャゲのキャラが着てるような衣装に身を包んでいた。
無論、顔を隠す仮面はしてる。
口は透明なバリアが覆ってるから、外見的には口が露出してることになってるけど。
毒ガスを通さないように、透明なバリアによるコーティングもしてるし、空気を精製する装置も搭載してるくらいだ。
露出してない。してないんだけど露出が多いと言う矛盾が発生してる。
茜さんが興奮気味に「ちち！しり！ふとももーッ!!」って欲望ダダ漏れな叫び声あげながらデザインしてた。
あの人、性的興奮を覚える対象が女の子だから、欲望ガン積みしたんだろうなぁ…。

麗日さんの健康的でいて綺麗な肌が眩しい。
茜さんがここに居たらまず、「股間に悪い衣装着やがってからに」とかなんとか言って、お持ち帰りしそう。

「スカート前ないから意味ないやん…!!
ほぼブラとパンツ丸出しな痴女ファッションやでこんなん…!!
体のラインもハッキリ出とるし、ウチに娼婦でも目指せっちゅうんか!!??」
「麗日さん、不満たらたらな割には、抵抗なく着てたよね…？」
「黙らっしゃい!!!コレ着るしかないんやったら着るわ乙女のヤケクソなめんなドアホ!!!!」

スーツ越しに殴られた。ぐわんぐわんする。
ＦＥでありそうな衣装だなぁ。
そんなことを思いながら、僕は部屋の扉を開ける。
同時に、凄まじい風圧が、僕らの仮面を激しく撫でた。

「あかりさんたちに負担掛けるのも忍びないし、とっとと出るよ」

「…この中世モチーフのソシャゲみたいなデザインは好きなんやけどなぁ…。あるよなぁ…。こういう…絵で見るには全然エロないけど、自分が着るってなるとどちゃくそエロいの……」

「茜さんに言ってよ…。僕は機能面しか担当してないし…」

♦？♦？♦？♦？

「へっぷし！…ぅう、やっぱエアコン無しの冬寒いなぁ!!」

「機能してるのは最低限のライフラインだけですからね。空調は真っ先に遮断しました」

「メリちゃん、判断力ハンパないなぁ!!」

ｉ・アイランドのセキュリティを握るメインコンピュータを前に、私はやけ気味に声を張り上げる。

緑谷くんたちが居てくれて本当に良かった。

でなきゃ詰んでた。

少人数であれば脱出する方法はあったが、流石にここにいる全員を避難させるのは…

科学者として言いたくはないが、不可能だ。
相手は凶悪さで有名な敵性国家。確実性のない計画を立てる訳がない。
相手の詰めの甘さを期待するのは、やめたほうがいいだろう。

「プロヒーローには通信機器をジャックして現状を伝えとる。
アナウンスもさっきやって、民間人には建造物ン中に避難してもろた。
そっから『あの国』出身のヤツだけを絞り出して、爆豪くんらにデータ転送を…」
「あの国って、昼間の騒ぎの？」
「せや」

あの国は敵性国家近隣で、週一回のペースでそれ絡みの事件が起きていた。
しかし、先程調べたところ、二週間ほど前からパッタリと問題が起きなくなったらしい。
…考えたくはないが、最悪の可能性を考えておこう。

「プロヒーローはどうします？」
「コウくんに説得頼む。　ウチは無理や。ボイチェンで葵の声にしとくさかい」

そういえば、今回の事件は葵とも協力してるんだっけか。
いつ以来だろうか。妹と共同作業をするなんて、ワクワクする。
そんなことを考えながら、防衛機構の捜査を続けた。

「終わったらエジプトあたりで、デートでもしよか」
「年明けに、ピラミッド攻略しちゃう？」
「ええなぁ！お土産に財宝ちょっと持ち帰ろか！」

♦？♦？♦？♦？

『防壁甘いですよ！もっと密度上げて!!』
「やっ…てる、よ……!!」
「こ、ないだっ…より…キッツいぃ…!!」

ヒメちゃんとミコトちゃんが歯を食いしばり、全身に力を入れる。
その傍らで私はデバイスを展開し、指がちぎれそうな勢いで命令を入力していた。

私たちが任されたのは、海中にある装置の防衛。
まずはこれを防衛しなければ、確実にｉ・アイランドは水底に沈む。

「全く、小５には荷が重い…!!」
「こっち、も…だよ…!!」
「むぃいいいっ!!??ミコトぉ!!急に緩めないでよ!!!」
「ごめ、ん…っ!!」

私にはわからない感覚だが、相当力まないとバリアは張れないらしい。
先日の一件から分析するに、魚雷やら個性やらに耐えられる時間はそこまで長くない。
なら、『私』とあかりさんが出来る限り迫り来る攻撃をいなすしかない。

「潜水式きりたん砲。アホみたいな見た目の割には高性能でしょ？」
『……イルカ型のロボに巨大きりたんぽ付きのランドセルって…。
さっきから小型のきりたんぽ型のミサイル打ち込んでますけど…』
「弾幕張れば大体は防衛できます。

撃ち漏らしはお願いしますね」

この見た目にしたのには、訳がある。

私こと、東北きりたんにはとある一つのトレードマークと呼べるものがある。

ランドセルの側面に無理矢理くっつけたような、巨大なきりたんぽ…。

公式が「弾丸は味噌」という、正直言って何処に需要があるか分からない設定を公開していた、「きりたん砲」である。

無論、そんなおふざけ兵器でこんな世紀末もビックリな世界を生き残れる訳がない。

どうしたものかと思案に暮れてる私に、緑谷先輩が天啓を授ける神の如く、私に告げたのだ。

ーーーーーー自分の思う「無敵」を作ったら？結構楽しいよ？

もうお察しだろう。

私のきりたん砲を一言で言い表すなら、「わたしのかんがえたさいきょうのきりたんぽ」である。

陸、海、空に対応した、兵器として理想的な機能をコレでもかと搭載した自信作だ。

コレでヴィジランテやってみても良いかもしれない。
…身バレの可能性があるから、よっぽどのことがないとやらないが。

「いいでしょ？イルカは鷹にも変形しますし戦車にも変形するんですよ」
『戦隊ロボでもそんなに変形しないと思う』

あんまりそっち方面には明るくないけど、確かにそう思う。
前世の幼児期、「ムゲンバ〇ン」って玩具があって、そこから着想を得たんだが…。
もうちょっと自由度高めの開発とかもしてみたい。
出来ることがあるって素敵。楽しい。

「「ガールズトークしてる余裕あるならちゃんと戦ってよ!!!」」
「ああ、すみません」

双子に叱られた。今のは完全に私が悪い。
ゲームをやってるような感覚で駄弁ってたが、ミスればリアルでお陀仏だ。
三度目の人生があるとも限らないし、そもそも溺死なんて絶対したくない。

というより、この世界がとんでもないことになる。
想像して欲しい。各国要人やプロヒーローが一気に死んだらどうなるか。
少なくとも大混乱は待ったなしだろう。
下手すりゃ、超常黎明期以上の世紀末と化す恐れすらある。

「…皆。私が一番得意なゲーム、何かわかります？」
「今そんなこと話してる場合!?」
「いいから画面見て!!五発も流れ弾が来たら割れるから!!」

双子が怒鳴り声に近い声を張り上げ、画面を指差す。
私はそれをチラ見しながら、軽く命令を入力した。

「正解は、シューティングゲーム。
この程度だったらしっかり見なくてもなんとかなりますよ」

瞬間。映像にあった魚雷が、あかりさんによって破壊される前に一斉に炸裂した。

『…ゲーマーって、こういうところで役に立つんだ……』
「惜しい。こういうところでしか役に立たない、が正解です。プロになったり、配信が軌道に乗ったりすれば稼げますが」
「自分で言うんだ…」
「悲しくならない…？」

♦？♦？♦？♦？

ビル内にて。
早速騒ぎを起こしていた数人を取り押さえ…というより、気絶させた。
その場にいた…確かアメリカのＮｏ．１０に身柄を引き渡した後、騒ぎを起こしていた人間からくすねた注射器を取り出す。
「数人捕らえてもらったわ。皆、『人工個性』ってラベルのある注射器を持ってた。
既に回収済みよ」
『あかりさん曰く、注射器を破壊するのもＮＧだそうです。回収するので、デバイスの液晶部分に向けてください』

きりちゃんの指示通り、渡されたデバイス…スマホみたいなもの…の液晶画面に、積み重なった注射器を近づける。
と。注射器が粒子となって、液晶の中に吸い込まれてしまった。

「すごっ…。魔法みたい…」
『立派な科学ですよ』
「…私、高校一年目で中退したきりだから、てんで理解できないと思うわ」

…高卒認定受けて、大学通おうかしら。
私の磨いてきたスキルは、はっきり言うと日本での日常生活で役に立つ機会がほぼない。
いくらノーベル平和賞を受賞したとは言っても、中卒とこの筋肉が表に出にくい体質のせいで現場仕事にすら雇ってもらえないし。
そもそも私の知名度は日本じゃほぼ皆無だ。
徹底的に情報操作されてたせいで、過去の名声なんてカケラもない。
そのくせ厄介なのばっか付き纏う。

正直、コウくんが「今の生活でいい」と言わなきゃさっさと高飛びしてる。

『うっわ…。爆豪先輩たちからも人工個性が大量に送られてきました。

誰か一人にでも使われると厄介です。急いで掃討してください』

「…防衛戦って面倒ね。私、今まで攻撃側しか経験しなかったから、余計にそう思うわ」

人工個性。私も日本に帰る少し前、それを使った人間数十人と交戦したことがある。

殺した途端に液状化したからなんだと思ったが、たしかに一度に出す個性に統一性が皆無だった。

弟子が出会した前例によれば、都市一つを巻き込んで潰すなんて造作もないと聞く。

なら、使われたら即殺せばいい。

「敵性国家と繋がりあり。つまり、殺害してもなんの文句も言われない相手。

…弟子たちには悪いけど、加減できない状況になったら殺すわよ?」

『人工個性を摂取した時点で死亡は確定です。できる限り犠牲者を出さない方向性で行きましょう。

先輩方には上手く誤魔化します』

「ＯＫ」

最近の小学生は肝が据わってる。

そんなことを思った瞬間だった。

自分たちがさっきまでいたドームが、肉塊で破壊されたのは。

♦？♦？♦？♦？

「京町さん、大丈夫っすか!?」

「いたた…。さっきからごめんなさい…」

すっ転んだ京町さんの手を掴み、彼女を立ち上がらせる。

コレで転んだのは８回目だろうか。

そのせいで私服は見るも無惨に破け、露出した擦り傷から血が滲み出す。

菌が入らないよう、水で流してアルコールで消毒するってのがセオリーなんだろうが、生憎と今はそんなことをしてる暇はない。

「っ、何なんだよ、このぐにゃぐにゃ!!」

さっきからこのドームを何度も何度も貫く、肉塊としか形容できない物体。
筋繊維なのか肉なのかも判別がつかないコイツが蠢くたび、ドームに衝撃が走る。
アナウンス曰く、今は敵性国家に攻め込まれている。
出来る限り建物の中にいろと言われたが、コレは一体どう言うことなのだろうか。
建物の中は安全じゃなかったのか？
そんなことを考えながら、俺は京町さんを抱え上げ、全力で走り出す。

「えっ!?ちょっ、擦り傷ですから自分で走れますって!!」
「明らかに痛みでスピード落ちてる!!
ンな女をみすみす死なすほど、俺の目指した漢は腐ってねェ!!!!!」

敬語も忘れ、俺は迫り来る肉塊を避けながら、外を目指す。
ｉ・アイランドの建物を軽くぶっ壊すんだ。
俺の個性で硬化して受け止めても、破られて死ぬのがオチだ。

「……っ、ソぉ…!!」

くそっ。逃げるしかねェってのが歯痒い。
クリムゾンなら、紅頼雄斗なら、こんなピンチなんぞ、軽々と乗り越えたろうに。
今の俺にはヒーローとしての資格も、実力も、心構えも、何もかも足りてねェ。
ンなこと分かってる。分かりきってる。
だけど。だけども。

「『漢ならァ!!救ったことで自分を誇りやがれ』ェエっ!!!」

紅頼雄斗が言ってたじゃねェか。
誰かを救うのは、たしかに誰にでもできるけど、すっげェ難しい。
だから、ヒーローを目指すなら、救うことに目を向けろって。
今の俺は、ヒーローじゃない。
ヒーローなんて、ご大層な名前背負えるほどの器じゃない。
俺は、大勢の人を救えるほどの力がない。
でも。多くの人が救えないなら、俺に救える人を救うだけだ。

「切島くん、飛んで!!」
「っ、応ォ!!」

京町さんの指示に従って、地面蹴って軽く飛び上がる。
瞬間。俺の靴の先端を掠めるように、肉塊が凄まじい勢いで床を破壊した。
肉塊を地面がわりにと着地し、ぶにゅぶにゅとする足場を硬化した足を鉤爪のように突き刺して固定する。

「京町さん、もうちょいで出口だ!!
早く安全な場所…プロヒーローがいる場所に行くっすよ!!」

俺は京町さんを安心させようと、兎に角元気に振る舞う。
大丈夫。プロヒーローが居るんだ。絶対にどうにかなる。
この時の俺は、まだ、そう思ってた。
暗闇が支配する外へ続く門が見えてくる。
俺は肉塊が再び動き出す前に、その出口へと飛び込んだ。

「……なんだよ、これ」

そこは、地獄絵図だった。
昔見せられた、超常黎明期の映像。
それに近い混沌が、あたりを支配する。
ある程度高い場所に居たからか、炎に包まれ、空が閉ざされてるのに雷が落ち、肉塊や鉄塊が山のように突き出る様を、俺は放心して見ていた。

「う……、嘘、だろ……？」

嘘だと言ってくれ。
震える唇で、そんな懇願を込めた声を放つ。
プロヒーローたちが、混沌を生み出す存在と対峙してるのが遠目で見える。

「何なんだよ、コレっっっっ!!!!」

俺は初めて知った。
世界に牙剥く敵性国家の、底知れない『悪意』を。
俺は初めて知った。
憧れた漢がどれほどの巨悪を前に屈しなかったのかを。

「一緒、ににに、ぃいい、しししししししししししし死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死」
「だいじょおおぉぉおおおおぶぶぶだだだだだだだよよよぉぉおおお?
死死死ねねぇばばばば、あばばははははっっっ!!!!」
「ありがとう…!!神様、ありがとう…!!僕を皆と一緒に死なせてくれる場を設けてくれて、ありがとおおおおおおおおぉぉぉあばんじゃぁぁぁぁあああいいぃぁあはははははははっっっっ!!!!!」

俺は、知った。
生命の危機すら感じる余裕すらない、底知れぬ『恐怖』を。

「…これが、敵性国家……」

その声は、何の音もわからない轟音によってかき消された。

戦いは数

「えーっと、何回目だっけ…。
細かい数は覚えてないけど、『この段階』で本気出したのはいつぶりだろうなァ」

集団を率いよう、なんて、いつ以来だろうか。
少なくとも、自分が覚えていないことだけは自覚している。
流石にしばらく調整してなかったせいで、海馬に限界が来てる。
また不要な部分を外に出力しないと。
あの科学力が羨ましい。
僕の発明なんて、足元にも及ばない、あの理不尽なまでの科学力が羨ましい。

「…今のｉ・アイランドを沈めるって、時期尚早じゃ無いか、フィクサー」

暗闇から『僕』…いや。ブラックボックスが姿を現す。
今回の件について、ずいぶん立腹のようだ。

…まずい。視界が定まらない。
目の前に立つ彼の姿が、まるで酩酊した時のように定まらない。
限界が来るスパンが確実に短くなってる。
この様子だと、残り少ない…か。
体は『……』を生きようとも、脳の処理が神の域に達することはないようだ。
…本当にまずい。思考すらままならない。
早急に完成を急がないと、間に合わない。

「今だからだ…。もっと、もっと強く輝いてもらわなくちゃ困るんだよ…」
「そんなに良いのか？今回のは」
「……正直、彼でダメならどうすればいいかわからない」

もう、何度目だろうか。
数えていた。数えていたのは覚えてるんだ。
でも、それが何回目かは分からない。
だけど、彼が最も輝いてることだけは、全身の細胞に刻み込まれてる。
今回で「完成」させるんだ。

「……いや、『アレ』が来るころには、とっくに死んでるだろ」
「だから、時期を早めるために思想を操作した…!!!前回は死んだ後に来た…。
今回は『全盛期』に『アレ』が出現するように調整してる…!!!」

アレが来るのは確定なんだ。
だったら、アレが生まれやすい環境を作ればいい。
敵性国家もそのために作った。
アレを退けるために、文明の均衡も、僕が裏で支えてる。
アレを退けるための戦力も、鍛えてきた。
…僕の思惑を知ってか知らずか、日本に向かってた敵はオールマイトに悉くブッ飛ばされたが。
その手際の良さから、さらに人気を盤石のものにしたというのだから、脱帽だ。
…話が逸れた。
兎に角、アレに備えるためにも、彼には限界の逆境で成長してもらう必要がある。

「……『ミラー』、『アーミー』。

君たちは、そのために作った。彼の糧になって、死んでくれ」

今回の作戦の要として、『ミラー』と『アーミー』を作った。

生命を作り出すというのは、やはり骨が折れる。

忌避感なんぞ、とうに消え失せた。

そんな物を持つほど、今の僕に余裕はない。

『了解。愛してる、パパ』

『……わかった。お父さん』

甘い吐息と共に吐かれた言葉と共に、通信が途切れた。

♦？♦？♦？♦？

『っ、なんか同じ人多ない!?』

『複製の個性持ちだろう。割れるように消えるあたり、鏡系の個性か。

…あと、口調に気をつけろと言ったろ』

頼むからその三重弁を隠してくれ。バレる。
ただでさえイントネーションだけでも分かりやすいのが三重弁なんだから。
変装してる手前、キツい言い方にはなるけど、こう言わないと効果がなさそうだ。
そんなことを思いながら、襲いくる人たちを槍で迎え撃つ。
槍とは言っても、ほぼ棒に近いものだ。
先端は軟質パーツだし、棒自体もそこまで殺傷力に優れてはいない。
無論、当たりどころが悪ければ死ぬが。
ただし、相手を気絶させるためにいろいろと仕込んであるけど。

『あっ。そ、そうで…やんす?』
『もうちょいあるで…あるだろ、少女』

なんでヤン〇スになった乙女。合わないにも程がある。つい素でツッコミかけた。
ヒラヒラとした痴女っぽいカッコに恥ずかしがっていた姿はどこへやら、麗日さんは迫り来る攻撃をひらりと避け、掌底で相手の意識を刈り取る。
さっきから一言も話さないし、気絶させれば割れるように消える。

恐らく、人さえも複製する個性を持った人間が搭乗してる。非常に厄介だ。

『んーっと…ですわ？

いや、なんか合わんなぁ…。もお面倒いし、こんままでええんちゃう？』

『……標準語に変えるだけでいいだろ』

『あ、その手があったわ』

あれだけ流暢に標準語が扱えるなら、それだけでも大丈夫だと思うが。

…揃いも揃って、変装が下手だなぁ、僕ら。

正直、ボイチェンなかったらとっくの昔にバレてそうだ。

正直、複製の人間だらけなら、この艦…艦種はわからない…を丸ごと沈めればいい。

しかし、僕が使ってる探知機の反応で見分けることはほぼ不可能なため、その案は現実的ではない。

…正直、殺すことに躊躇いがなくなったかと言えば、否と答える。

出来ることなら、オールマイトのように、誰も殺さずにヒーローをやっていたい。

オールマイトは理不尽なレベルの手際の良さと活動範囲、更には拳一つで天候を左右できるほどのパワーを持つ。

それだけならまだしも、今まで倒してきた敵が強大だった功績がある。
四年前には当時の巨大な宗教団体を、たった３０分で壊滅に追い込んだ。
五年前には、数百の艦隊で迫り来る敵性国家を拳一振りで粉砕し、全員捕らえたという功績も誇っている。
敵性国家近隣の国でも人気を誇る理由。
それは、「絶対的な実力があり、悉くを粉砕するから」である。
要するに、「生きる理不尽」なのだ。
あのフィクサーに敗れた、という話は有名だが、彼の享年…正確には姿を消した年に、オールマイトが強力な一撃を叩き込んでいたという話は、それ以上に有名だ。
オールマイト曰く、「あれでもピンピンしてた」らしいが、民衆には「追い詰めていた」というように映っていたとのこと。
無論、どれも加減が超がつくほど下手な僕が出来たもんじゃない。
僕には精々、動力炉を破壊して、艦を浮島にするくらいで精一杯だ。
艦ごと吹っ飛ばす？そんなことしたら、確実に「遥か向こうの大陸ごと」吹っ飛ばす。
地面に向けて拳を放とうものなら、誇張表現無しで星が割れる。
毒ガスも同様だ。吹っ飛ぶのがｉ・アイランドか大陸かの違いだ。

『……にしても数が多い!!』

『さっきから言うて…言ってるでしょ!!

私が引きつけとくから、とっとと増やしてるヤツをブッ飛ばして!!!』

兎に角、麗日さんの言う通り、増殖してる個性持ちを何とかしないと。

他の艦はやたらと人が少なかったのに、ここだけ異常に多い。

ダミーという可能性も考えたが、湯水のように弾丸を使ってるのはこの艦だけだ。

どう考えても、この艦に『増やす個性』が居る。

『少し待ってろ。我の拳が、悪を砕く』

僕が鼓舞するように言うと、麗日さんはこちらに向けて、サムズアップしてみせた。

♦？♦？♦？♦？

私は三日前に生まれた。

パパからもらった名前は、『ミラー』。

鏡って意味らしい。
そもそも私は、必要最低限の知識と感情を埋め込まれただけで、鏡という物を見たことがないのだけど。
砲弾や兵士を増やしながら、私は頭上に走る衝撃に辟易の息を漏らす。
「享年０歳０ヶ月三日、か」
そのことに対して、思うことはない。
パパが言ってたから、私は死ななければいけないんだ。
「パパ。死んだら、いっぱい褒めてね」
パパが満足できるように、いっぱい殺して、いっぱい争って、死のう。
だって、親に尽くすのが子供だから。
『……君か。これを増やしたのは』
「そうだよ。はじめまして、ＳＡＶＥＲ」

だから、目の前のこいつも殺さなきゃ。

♦？♦？♦？♦？

『……ツソが。キュリオスん時の二の舞だな、こりゃ…』

肉塊に塗れ、うぞうぞと蠢く地面に立ちながら、そんな言葉を口にする。

スーツに搭載された防衛システムが防壁を作っているおかげで未だに死者は出てないが、それなりの負傷者はちらほらと居るらしい。

兆もナノマシンが必要かとデクに意見したことがあったが、今じゃ「足りんわ」って言いたくなる。

『…っ、気味悪イ』

人工個性の特性だろうか。

肉塊の所々に人の顔や手が見える。

恐らく、摂取した人間が同化し、ｉ・アイランドを覆い尽くそうとしてるのだろう。
先公や師匠は無事…だろうな。アレらは存外しぶとい。
問題はプロヒーロー。
ナノマシンが防壁を成す前に抜け出してしまい、何人かが肉塊と戦ってるのが見える。
薄らとだが、「ＳＭＡＡＡＡＡＡＳＨ!!」という裂帛の気合いと共に、肉塊が吹っ飛んでるのも見えた。

『…スーツも無ェのにアレか』

プロヒーローからすれば、こう言う状況は慣れたモンなんだろうか。
そんなことを考えながら、俺は足元の肉塊に指を向けた。

『さっきから狙ってんのバレてるぞ』

どん。
俺の指から爆炎が放たれ、肉が焦げる臭いがスーツ越しにも伝わる。

爛れた肉塊から、女が突き出たのは、その直後だった。
這い出る…いや。まるで迫り上がるように現れた女は、薄い目で俺を捉える。
「…バレた。どうして？」
『本能』
勘、と言ったほうが良かったか。
まぁ、どっちでもいい。
寝てる間に殺されかける…なんて訓練を２ヶ月もやったんだ。いやでも気づく。
「……ま、いーや。『アーミー』」
女が言ったその時。
肉塊が俺めがけて、肉の槍を突き出した。
軽く爆破で飛び上がり、それらを避ける。
が。予測していたのだろうか、槍の側面から炎やら雷やら、数えきれない個性が放出された。

咄嗟に爆破で全てを撃ち落とし、指を女へと向ける。

「……無駄」

俺が放った爆破は、肉塊によって防がれた。

…おかしい。

肉塊がヤツの指示に従って、効率的に俺を殺そうとしている。

元は人間だったソレが、だ。

以前対峙した時は、そこまで知性を感じなかった生命体が、そこまで思慮して行動するだろうか。

「アーミー、ヒューマンズ」

そんなことを考えていた、その瞬間。肉塊が一部切り離され、人の形を取る。

その顔には、見覚えがあった。

『…っ、そいつら、昼間の…!?』

「……加工、した。面倒、だった」

コイツ、あの胸糞悪いのと同類だ。

ソレを察した俺は、警戒心を一気に引き上げる。

「私は、『アーミー』。屈服させた人々を、操る個性。個性、そのもの」

アーミーと名乗ったそいつが手を掲げる。

瞬間。視界いっぱいに人型の肉塊が現れた。

先生「君ら死ぬかもしれないのに呑気ですよね」葵「いや、お前も大概だからな？」

「私はミラー。私は個性そのもの。私は鏡。私は無限。私は悪。私はあなたを殺す、悪」
『っ、どれだけ増殖するんだ…!!』

目の前の少女が鏡合わせのように、無限に増えていく。
敵性国家の人口は、かなり減少してる。
その理由は、捨て身の作戦が多く、プロヒーローが悉くを返り討ちにしてるから。
全盛期…オールマイトが活動する以前は、大国がこぞっていろんな兵器や個性を容赦なくぶち込んで抑制していたらしい。
ソレに加え、奥さんの大量殺戮の件もある。
現代の敵性国家は、正直言って、数はあまり問題視されなかった。
そんな問題を軽く解決する個性が、目の前に居る。
『人工個性生命体プロトタイプＮｏ．２５』。

歳はぁ…、０歳三日ぁ。Ｎｏ．１…キズナ　アカリの…二十四番目の妹。
私は『増やす』個性しか使えない。
それでも自由に、無限に、どんなことにも使えるの」

部屋を埋め尽くさんばかりに増殖した彼女が、一斉に僕の方を向く。
あかりさんの、妹…？姉じゃなくて…？
そのことを疑問に思う暇もなく、彼女らが僕に迫る。
慌てて応戦するも、増えた彼女が割れて消えるたびに、新しく増殖していく。
無限ってのは間違いじゃなさそうだ。

『これ以上増やされちゃ厄介だな』

兎に角、相手が人工個性なら、加減は無用。
押し寄せる少女を躊躇いなく殴り飛ばし、本体である彼女へと近づく。
無限に増え続けるのなら、ソレを上回るスピードで潰せばいい。
脳筋な考え方だが、こっちの方が手っ取り早いのはたしかだ。

「私が増やせるのは『知ってるもの』だけ。肉塊なんて、たくさん増やせるの。
毒ガスの仕組みも、この船のことも、全部、ぜーんぶ知ってるの。
でも、あなたは別。あなたの使ってる『モノ』は知らないの」

そう簡単に知られてたまるか。
僕が血反吐吐く勢いで三年かけて作り上げたものを、簡単に敵に使わせてなるものか。
心の中で反論を繰り返しながら、更に増える少女を退ける。
ぱりん、ぱりん、と連続して鏡が割れるような音がする。
災害でも起きてるみたいだ。いや、とんでもない人災起きてんだけど。
「パパが知ってること、そのまま私の頭に入ってるの。すっごく、ズキズキする。
頭が、中から弾けそうなくらい、痛くて、多くて、凄い量の、知識が…!!」
『……マジかよ』

０歳三日で、あかりさんの妹。
ということは、『パパ』と称してるのは…。

ーーーーーー恐れ慄け。僕が来た。

『あの理不尽の差金かよ、コレ…!!』

この世には二つの理不尽がある。
一つはオールマイト。理不尽なまでのパワーで、あらゆる悪事を粉砕する。
そこに大きいも小さいもなく、ただ平等に、「ただの敵の企み」として、その拳によって地に伏せる。
敵性国家などお構いなし。拳一発。
それだけで迫り来る艦隊を壊滅させた男だ。
コレを理不尽と呼ばずしてなんと呼ぶ。
もう一つは、僕たちが経験した、フィクサーという名の理不尽。
理不尽なまでの悪意が国をも蝕んだ。
人の尊厳などお構いなし。ただただ悪を振り撒き、嘲笑う。
倒そうと足掻けど、その行いすら簡単に無に帰す。
もう一度言わせてもらう。コレを理不尽と呼ばずしてなんと呼ぶ。

「パパは言った。もっと、もっと輝いて欲しいって。だから、だから、もっと、もっと黒く塗りつぶすの。
私は悪。私は、星を塗りつぶす悪でなきゃいけないの。
だから、お星様。もっと眩しく輝いて、私を溶かしてみてよ」

目の前の少女が、更に増える。
その手には、詳しく言ってたらキリがないが、とんでもない用途を持つ兵器たちが握られていた。

「輝かないなら、殺してあげる」

♦?♦?♦?♦?

「死の、ののの ぉおおよぉおお!!」
「っ、やばっ…!?」
「切島くん、伏せて!!」

銃声が響く。
京町さんが護身用にと持っていた特徴的な銃から、特殊な麻酔弾が放たれる音。
何度目かもわからないその音を掻き消すように、嬌声と笑い声が響く。
京町さんがそれを放つたびに、肉の床からポンポンと人が生まれる。
肉塊だとわかるのに、人の形を成したソレは、生理的嫌悪を誘うには十分な見た目をしていた。

「ナノマシンが起動した…って聞いたのに、ここには来てない…？一体、なんで…？」

京町さんが何事かを呟きながら、迫り来る肉塊をいなし、銃を乱射する。
百発百中とはこのことか、麻酔弾が着弾し、肉塊が地に伏せる。
肉と言えども、神経はあるようだ。
俺も迫り来る肉塊を硬化した手で殴る。
殴ることを知らなかった俺の拳に、その重さが伝わる。
肉塊は見た目に反し、鉄の塊のような重量と、ある程度の硬度を誇っていた。
重量と勢いに、硬化してない中身が耐えきれなかったのだろう。

中にある何かが砕けたような嫌な感触と、激しい激痛が手を襲う。

「っ、痛ぅう…っ!!」

「切島くん、痛くても気を抜いちゃダメ!!死にますよ!!っ、きゃっ!?」

「がっ!?」

京町さんの足元から、肉塊の槍が突き出て、手に持った銃を貫く。

同時に、肉塊の鞭が俺の腹部を捉え、俺を京町さんへと飛ばした。

おそらく、内臓に影響が出た。

胃酸と共に込み上げてくる鉄の味を飲み込みながら、独学で身につけた受け身を取る。

京町さんは俺を軽く受け止めると、すぐさま別の銃を取り出し、足元に乱射した。

「切島くん、動ける!?」

「大、丈夫っす…!!」

めちゃくちゃ痛い。今すぐにでも救急車を呼んでるくらいには。

汗か涙かも分からない液体が、頬を伝う。
そんなことなどお構いなしに、肉塊は人の形を成し、無尽蔵に増えていく。
このままでは、押し潰されて終わる。
あちこちでプロヒーローが応戦する声が響いている。
きっと、その中にはオールマイトも居て、今も誰かを助けるために奔走してるはず。
それまでは、この人を守らないと。
俺が応戦すべく、構えを取ろうとしたその時だった。

「危ないっ!!」

京町さんが慌てて俺を突き飛ばす。
その瞬間。俺の首があった場所に、幾重にも重なった刃を纏う肉塊が、鞭のように通り過ぎた。
その刃は京町さんのカッターシャツ、スカート…しまいには、その下にあった下着すらも引き裂く。
が。彼女の柔肌には、奇跡的に傷一つついていなかった。

「っ!?京町さん、その、いろいろと大丈夫っすか!?」
「前はもっと恥ずかしいカッコですっ転んだことがあるので大丈夫です!!」
「それはそれでどうなんだ!?!?!?」

もっと羞恥を覚えてほしいが、今の状況じゃ、動じないくらいが丁度いいか。
兎に角、彼女の秘部を見ないように、俺は彼女の前に出る。
と、その時だった。

「二人いるなら、背中合わせになるように立ち回った方がいいよ」

凛、とその声が響くと共に、人型の肉塊の首が裂かれる。
俺たちがそちらを見ると、細身の剣を構えるＦｌｏｗｅｒが立っていた。

「助けるのが遅れてごめんね。スタッフたちを避難させるので精一杯で」

俺たちの死角になっていたそこには、うぞうぞと蠢く肉塊や、人型の肉塊がひしめき合っていたらしい。

が。Ｆｌｏｗｅｒが剣を振るったことで、あっさりと首と体が分たれていた。
肉塊は見る影もなく、バラバラに切り裂かれてる。
「うぷっ…」
「人手不足だからね。その銃と個性の無断使用については、後で対応してあげる」
俺が吐き気を催してるのを傍に、彼女は淡々と告げる。
吐いてたら死ぬ。攻撃の苛烈さと威力が、ソレを物語っている。
「この連中、こんなこと企てた割にはどうやら、そこまで頭が良くないみたい。
キリシマくん…だっけ？頑張って、生きておくれよ」
「んぐっ…。ぷはっ！了解!!」
込み上げた胃酸を無理に飲み込み、構えを取った。
♦？♦？♦？♦？

『ＭＥＳＳＩＡＨ!!どうなってる!?』

肉の地面から這い出るバケモノと個性を無力化しながら、声を張り上げる。

俺は純氷で簡易的な防壁を作り、逃げ惑っていた人たちを保護していた。

この場に氷の個性を持った人間が居るのかは知らないが、緑谷にテキトーな三文芝居やってもらって、「ＳＡＶＥＲは氷も出せますよ」と認識を刷り込んでもらえばいいだけだ。

が。後のでっち上げによって取り返しが出来ない事態…死者の発生だけは避けないといけない。

だというのに、頼みの綱であったナノマシンは、ｉ・アイランドに来ていた人間の一部のみを覆い隠すだけだった。

『申し訳ありません、轟様。侵食が苛烈で、防壁を厚くする必要がありました。

そうなれば、ｉ・アイランドにいる人間全員を覆うには、数が足りません』

『要するに?』

『一部区域、防壁が張れてません。その分布図です』

兆はあるナノマシンでも足りんってどーいうこった。
そんなことを思いながら、氷の防壁を分布図に記されたポイントに出現させる。
スーツの補助機能があるから、ズレもない。

『また、一定以上の実力を誇るプロヒーロー等は、保護対象としてカウントしてません。
重傷者はその限りではありませんが』
『そら戦力削る訳にゃいかんだろ…!!』

簡易メドローア…そろそろオリジナリティある名前をつけなければ…を放ち、目の前の肉塊を消し飛ばす。
人の形をしてるが、「生命」とは決して呼べない。
ただ、人工個性が作り出してる『肉の塊』でしかなかった。
スーツ越しから見ると、相手のバイタルを計測してくれる機能が搭載してある。
ソレが示すのだ。
『目の前の存在には、血は通ってない。ただの肉の塊だ』と。

『っ、ば…んんっ、そっちは今どうだ!?』

爆豪と叫びそうになったが、なんとか誤魔化し、彼と通信を繋ぐ。

『うっせェぞォ!!余裕ねェから話しかけんなブッ殺すぞ!!!』

が。状況確認も出来ずに、爆豪は通信を切ってしまった。

俺たちの中でもピカイチの実力を誇るアイツに、余裕がない。

即ち、かなり厄介な敵…恐らくはこの肉塊の司令塔だろう存在を相手にしてるのだろう。

『待ってろ、今…』

と、俺が駆け出そうとした、まさにその時だった。

「と…っ、そこのあなた!!そこから十メートル離れなさい！今!!すぐ!!!」

奥さんの焦った声が響いたのは。

俺は反射的に炎による推進力で、その場を一瞬にして離れる。
刹那。俺の立っていた地面から、形容し難いバケモノが突き出たのは。

「……死、ィ「殺、ろろろろろろ「おいで、ぇ、こっ、ここっ、ちちちちち「あは、ははははははははっっっっ!!!!!」

四つん這いで地を這う、人型のソレ。
ソレを構成しているのは、人型の肉塊たち。
よく見れば、昼間に会った外国人が大多数を占めている。
嬌声にも、悲鳴にも似た笑い声を上げながら、バケモノは瞳を全て俺たちに向けた。

「…こんなの、前から使ってたかしら?
少なくとも、2ヶ月前は見なかったわ」
『その疑問は、後で考えましょう。今は、コイツを倒すことが先決です』

♦?♦?♦?♦?

『おい、バカコウ!!何が「任せろ」だ!!保護できてないじゃないか!!』
「仕方ないでしょ。見つける前に防壁作動しちゃったんですから」

防壁の中。
僕らはキツい体勢…主に音街さんとついなちゃんの髪のボリュームのせい…で、葵さんの怒号を流す。
切島くんたちを保護すると言った手前、その直後にこんな事態に陥ったのだ。
正直、浮遊大陸に全員ご招待した方が早い気がする。
が。緑谷くん曰く「転送装置がオーバーヒート起こしてドカンするからダメ」だそうだ。

「プロヒーローはどうですか?」
『だいぶ奮闘してる。
…が、オールマイトは別格だな。粉砕っていう言い方がしっくりくる』
「生物学論文で『オールマイトから推測する人類の進化』なんてものもありますからね」
『知ってる。ってか書いたの私だ』

あの論文は、テーマこそ老害に馬鹿馬鹿しいと一蹴されるようなものだったが、完成度にしては中々高かった。

それこそ、論文検索サイトを評価順で見れば、最初らへんに出てくるくらいには。

まぁ、その話を得意げに書いた本人の前でするなんてことはしないが。

『…中和ガスの完成は後2分。ソレまで耐え…れる状況か、これは？』

「耐えるやろ。国を敵にまわしても、ヒーローになろうとする人らの集まりなんやから」

「バクゴーさんに限らず、皆死ぬほど負けず嫌いだから、意地でも勝とうとすると思う」

子供達に信頼されてるな。

緑谷くんのお母さんも疑ってないのか、特に動じることもなく、リュックから飲み物を取りだす。

「喉乾いたでしょ。何飲む？」

「カルピスー！」

「緑茶ー！」

「君ら死ぬかもしれないのに呑気ですよね」

『いや、お前も大概だからな？』

♦？♦？♦？♦？

「…眩しいくらい、強い。

お父さん、言ってた。お星様。

きらきら光るの。他の人すらも巻き込んで、燃え盛りながら、光るの」

『お星様じゃねェ、ヒーローだっての!!』

噴射速度の上がった爆破で激しく回転し、肉塊の壁を吹き飛ばす。

アーミーと名乗った女を気絶させるべく、俺の掌が彼女に迫る。

が。その距離は、再び肉塊によって引き離されることになった。

『ツソ、数が多い!!!』

一人一人の質は、正直言ってクソ低い。

だというのに、ソレを完全に補える程にアホみてェに数が多すぎる。

こっちが気軽に範囲攻撃できないことを知っているのだろう、随分といやらしい戦法だ。

泣き言というわけではないが、どうしても思ってしまう。

無尽蔵に増える肉塊を吹き飛ばしていると、轟から通信が入った。

『ば…んんっ、そっちは今どうだ!?!?』

『うっせェぞォ!!余裕ねェから話しかけんなブッ殺すぞ!!!』

指先の汗腺が痛んできた。癖になってしまって、指先からの爆破を飛ばしすぎた。

その痛みと余裕のなさを簡易的に伝え、通信を切る。

もう少し、バランス良く鍛えなければならなかった。

個性に関しては、自分の発想力と知識を応用…つまりは独学で鍛えるしかない。

今更の後悔だが、自分を殺したいほどに、自分自身に腹が立つ…!!

「…熱い。お星様、燃えてる。すっごく、熱く、眩しく、自分さえも焼き尽くすほど…」

『軍隊ごと焼いてやるから死なねェ程度にくたばりやがれ!!!』

そう叫びながら爆破を放つ。

肉塊の壁に防がれるのは目に見えてるため、最低限の威力と、できるだけ広範囲の攻撃に、間髪入れずに高威力狭範囲の爆破を叩き込んだ。

女はそれを読めなかったのだろう。

肉塊の壁で広範囲の攻撃を防ぐも、続く攻撃が肉塊を貫通し、女へと襲いかかる。

「っ、危なかった」

しかし、その攻撃は女の毛先を焦がすだけに留まった。

「もっと、もっと強く輝いて。私はこの程度じゃ、燃え尽きない」

『俺はトップヒーローになる男だぞ…？この程度で収まるわけねェだろ…!!!!』

自分を鼓舞するように、痛む汗腺から爆破を放った。

爆豪勝己、片鱗目覚める

『モード：ヘーパイストス!!』

ミラーの持つ兵器をハッキング、もしくは破壊する電磁波と超音波を放つ。
モード：ヘーパイストス。シリウスに付け足した機能…『モードチェンジ』の一つ。
ある程度の兵装を無力化させる電磁波と超音波を放つと同時に、想像した武装をナノマシンで顕現できる能力を誇る。
無力化できる兵装には、僕が理解してるものでなければならない。
また、艦などの巨大なものは無力化できないという制約があるが、そこはどうでもいい。
問題は、彼女の持ってる兵器。
「…電磁波と超音波を『増やす』」
くそっ、ジャミングが無効化された！

同じ電磁波と超音波を完璧なタイミングでぶつけ合うことで、打ち消された。
ミラーはその隙にとばかりに、持っている兵器の引き金を引いた。

「光が集えば、炎となる」

放たれるのは、凄まじいエネルギーの奔流。
僕がフォーマルハウトに搭載したモノを小型化…見たところ、エネルギー炉はイズクジェネレーターではない…したものだった。
それが、３６０度あらゆる方向から放たれる。
僕は慌てて盾を複数生み出し、光の奔流…つまりはレーザーを受け止める。
余波で部屋が融解している。
彼女が増やした存在も、大多数が割れて消えていたが、本体となる彼女だけは無傷だった。

「たくさんの私が庇ってくれるの。たくさんの壁が守ってくれるの。
だって、無限に増えるんだから」

ミラーは言うと、ケタケタと笑いながら、踊りを披露する。
生後三日だとは到底思えない不気味さだ。
恐らくは、フィクサーによって『悪意』を刷り込まれてる可能性がある。
あかりさんは、幸いにも『悪意』を刷り込まれることなく、良くも悪くも普通に育った。
だから、初めて会った時、あんなにも疲れていた。
目の前にいる存在は、もう一人のあかりさんと言ってもいい。

『……なんで、そうも笑える？』

ふと、疑問を声に出す。
彼女に聞いたわけではない、その言葉。
僕にとって、笑顔というのは特別だった。
僕が作ってきた、僕のスーツの頭部。
マスク部分には決まって、「笑顔を浮かべている」ように見えるようなデザインとなっている。
理由は、オールマイトへの憧れ。

彼はいつだって、怖いもの知らずだと周りに示すかのような笑顔で戦っている。
笑顔は「自分を鼓舞するモノ」だって、幼い頃からずっと心に刻み続けてきた。
このような、邪気あふれる笑顔が、どうしても許せなかった。
かっちゃんが小学校の頃、僕をいじめていた頃、浮かべていた笑顔が許せなかった。
今でも思い出す、小学校一年生の時。
僕は一度だけ、問題を起こしたことがある。

ーーーーーーどーだ!!おれがいっちゃ…。
ーーーーーーっ、がぁぁぁぁあっっ!!

かっちゃんの顔面を思いっきり殴った。
原因は…もはや言うまでもないが、言っておこう。
かっちゃんが僕をいじめる時に浮かべた笑顔が許せなくて、馬乗りになって殴った。
僕からの反撃が意外だったのか、かっちゃんは反撃できずに痛みに泣いていた。
その後、先生と両親にめちゃくちゃ叱られたことだけは覚えてる。
かっちゃんの顔面からガーゼが剥がれたのは、それから三日も経った後だったことも。

そこから段々といじめがエスカレートして、二年の頃の授業で収まりを見せたのだ。

…我ながら嫌なことを思い出した。

現在では話のネタとして二人で語るくらいには割り切ってるが、嫌な思い出には変わりない。

閑話休題。その呟きが耳に入ったのだろう、ミラーは僕の疑問に答える。

「嬉しいからだよ？」

その返答は、予想だにしないものだった。

楽しい、とか、せいせいする、といった感情なら、幾度か見てきた。

しかし、そんな中で「嬉しい」と表現したのは、彼女が初めてだった。

「私ね、パパの役に立てることが、すっごく嬉しいの」

ーーーーーーだって、子供は親に尽くすものだから。

幼い。見た目とは違い、あまりにも幼い悪意が、僕に牙を剥く。

…相手は幼い子供。それなら、スペシャリストがいる。

『……物分かり悪い子供を言葉でねじ伏せるって、出来ます？』

スペシャリスト…先生からの言葉は、ある意味先生らしい言葉だった。

『そのくらい自分でしなさい。とっくの昔に教えたでしょうに』

『…ですよね』

突き放された。これは横着した僕が悪い。

相手を説得するなんて、あかりさんの時以来だろうか。

「どうしたの？急にブツブツ言って。仲間に相談？しても無駄だと思うよ？」

そんなことを思いながら、僕はレーザーや弾丸を撃ち落とし、口を開いた。

『いちご味を知ってるか？』

「……は？」

♦？♦？♦？♦？

『奥さん。一つ言わせて欲しい。アンタ絶対手加減してるだろ!?!?!?』

「あら、今更気づいたの？」

再生するバケモノを前に、俺はナイフを手で遊ばせる奥さんに怒号を放つ。

２ヶ月も相手したんだ。いやでもわかる。

俺らと組手やる時よりも、あからさまに手加減してた。

具体的に言うと、彼女はただ動き回って、自分に来る攻撃をいなしているだけだ。

「来年の夏休み、アンタたちを敵性国家に二週間合宿に連れてくつもりなんだから、これくらい軽くやっつけなさい」

『ごめんアンタとんでもない爆弾発言しなかった!?!?!?』

悲報。来年の夏休み、地獄確定。

比較的感覚が壊れてない麗日に言ったら、血涙流しながら「いぃぃぃぃぃぃぃやぁぁぁぁぁぁじゃぁぁぁぁぁぁぁあああああっっっっっっっ!!!!」って叫びそうだ。

この人のことだから、死ぬ気で頑張ればギリ死なない程度に過酷なとこ選ぶんだろうな。

思考を逸らすことで無理に余裕を作り、バケモノの攻撃を氷で逸らす。

「けひひけひけひけひ「み、みみみ、ちちちちっちづりぇぇぇぇぇっ「死のっ、死のののののっ、死「こ、す、ろすすすすすすすすす「っ!!!!!」

『残念だったな!生憎俺は500歳で老衰で死ぬ予定だ!!』

「平均寿命って知ってる?」

500歳で老衰は、ちょっと欲張りすぎたかなって俺も思う。

256歳の人間も居たんだ。せめてそのくらいは生きて、家族に囲まれながら安らかに死にたいって願望がある。

生涯現役でヒーローもやる予定だ。

そのためにも、こんなところで死んでたまるか。

『弾を調整してる暇が無ェ…。
大きめに作れば、この肉ん中に埋まってる防壁ごと消し飛ばしちまう…!!』

爆豪がバランスよく攻撃できるが火力に欠けるタイプなら、俺は火力には事欠かないが、細かい調節ができないタイプだ。
この状況に最適な大きさの弾を作れるほど、まだ俺はメドローアもどきをコントロールできてない。
目の前で衝動が赴くままに俺たちに襲いかかるバケモノに、どうやって引導を渡すか。
急激に劣化させて崩れさせる?
ダメだ。それを嘲笑うように再生したのを忘れるほど、俺は間抜けな頭をしてない。
芯まで凍らせて叩き割るか?
…無理だな。さっき体液を放射されたせいで、氷が脆くなって脱出された。完全に凍らせるタイミングも理解されてる。
焼き尽くすか?
それこそ無理だ。再生されるせいでまともに効かない。振り切られて終わる。

「どう？攻略するって、楽しくない？」
『轟家は全員漏れなくムリゲーをやり込むタイプだ…！この程度なんざ、ムリゲーの内に入らねェよ…!!』

大丈夫。やりようはある。
俺はマスクの下で笑みを浮かべた。
それを合図に、バケモノが地面から、身体から幾つもの槍を突き出す。
俺はそれを避けながら、狙うべきポイントを確認する。
『ちょっとの隙を与えるには、ちっとやりすぎな気もするが…』

一部だけを一気に削り取るから、隙もほとんど生まれないのだ。
であれば、『一部を攻撃して隙を与える』だけでいい。
無論、視覚を奪う訳ではない。さっき試したが、無理だった。
なら、『めちゃくちゃ痛い攻撃』をやるだけだ。
『俺の個性は、厳密には「分子運動を操作する」…らしい。

「体を流れる血液を沸騰させる」って、どうなるんだろォな？』

瞬間。バケモノの体が異常に膨れ上がった。

「「「あぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっっっいいいいいいいいいよよよよよよよよよぉぉぉぉぉおおおおおおおおっっっっっ!?!?!?
ぎっ、ぎぎぎぎごっ、ぶぴやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁあっっっっっっ!?!?!?」」」

本来なら死ぬが、殺しても死なないヤツ相手なら加減無用だ。
金切声の大合唱に耳を塞ぎかけるが、そんなことをしてたらすぐに再生される。
俺は仕込みを完了させると、再生したやつを挑発する。

『ほら。槍も個性も効かねェんだ。直接殴って殺してみろよ』

攻めあぐねてたのは相手も同じ。
先程のダメージと俺の煽りで、焦燥感が頂点まで到達したのだろう。
バケモノは形容し難い叫び声をあげ、唾をそこら中に撒き散らしながら、俺へと迫る。

タイミングを見計らって、俺は仕込みを作動させた。

『コキュートス・ピラー!!』

「「ぺっ」」

瞬間。俺が空中にばら撒いていた装置から突き出た氷の柱が、バケモノをバラバラに引き裂いた。

肉塊がくっ付く前に、俺はサイコロ状になったソレを目で捉え、氷結を発動させる。

「な、「なぜぜぜぜ？「こ、んんんな、「われら「まけ「？」

『さぁな』

一塊になって凍ったソレを掴み、俺は天へと投げる。

そして、ソイツ以外何もない上空に向けて、俺は消滅弾を放った。

「「死っ」」

断末魔までソレかよ。
バケモノとは言え、ここまで生物として終わってると、流石に同情する。
「…殺しちゃって良かったのかしら？」
『アレは一部だ。本体を止めねェ限り、そのうち復活するだろォよ。
見たとこ、ここにしか来てねェ。作るのに手間かかるらしい』

つまり、無尽蔵って訳じゃない。
人が使う人工個性に『無限』は存在しない…というわけか。
っと、そんなことを考えてる暇はないな。
さっさとこの本体を倒さないと、さっきのバケモノが量産されてしまう。
『俺は爆豪ンとこ行って、援護してくる。
奥さんはＦｌｏｗｅｒの援護を頼む。あそこだけ反応が随分と多い』
「わかったわ」
俺が奥さんにそう頼んだ瞬間だった。

爆豪が居るあたりから、『太陽』が見えたのは。

♦？♦？♦？♦？

「……つまんない」

『ポコポコ産みすぎなんだよテメェは…！繁殖期のマンボウか…!!??』

既に億は殺した。

殺した…とは言っても、人型の肉塊を破壊した数だ。

どうやらこの肉塊からは、ほぼ無尽蔵と言ってもいいほどにポコポコ人型が出る。

汗を無理に出してるせいで、汗腺が痛ェ。眩暈もしてきた。

激痛を堪え、こちらへと駆け出す肉どもを纏めてこんがり焼く。

…これで左手の汗が尽きた。水分不足で汗が分泌されなくなってきてる。

炭化して不味そォだな、と無理に思考に余裕を持たせ、女へと近づく。

「あなたは、お星さま。お星さまは、ひっそりと、誰にも知られず、消えていく」

女の合図と共に、肉塊が隆起する。
俺を飲み込もうと迫るソレを、間を縫うようにして避け、女に爆破をお見舞いしようとした、その時だった。

「かぱっ」
『うぉっっ!?!?』

女の体が裂け、クリオネみたいに俺の左腕に食らいついた。
スーツがある手前、消化も食いちぎられることもなかったが、女の体が肉と一体化し、俺を飲み込もうとしてくる。
左掌を爆破させようにも、水分がとっくに限界を迎えてる。
くそっ。吐き気が…!!
デクに「水分補給の機能つけとけ」って言っときゃ良かった。

「わかるよ。わかる。水分不足で限界なんだよね?お星さまみたいに、ゆっくり、死ね」
『……っ、ざっ、けんな……!!!』

脱水症状のせいで、目が霞む。
そもそも個性による水分不足が起きるなんて、想定してなかった。
汗腺の耐久度が上がりバカスカ撃てる代わりに、消耗に気づきにくいのが難点か。
まずい、まずい、まずい。
音が掠れてきた。舌もいつもより大きく感じる。
脱水症状が重症化してる。このままじゃ…。

「大丈夫だよ。あなたがいなくても、お星さまはまだいるから」

瞬間。あの言葉が聞こえた。

――――――俺が、最高のヒーローだ。

『…………っっ、まだ、負けてねェぞォ…ゴラァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ!!!!』

瞬間。俺の体から熱が放射される。

ごっそりと力が抜けたような感覚を堪え、俺は手に力を込めた。

『ハイパァアアアアアァァァアアアアアアッッッ!!!!ノッッッッ……ヴァァアアアアアアァァァァアアアアアアアアアアアッッッッ!!!!!』

刹那。俺を中心に、大爆発が起きた。

似たもの同士

「っ、何っっっ、だ今のォ?!?!?」
「さぁね。でも、敵の新兵器って訳じゃなさそうだ。わざわざ肉塊だけを吹っ飛ばすメリットがない」
スニーカーを脱ぎ捨て、裸足になった状態で硬化させた足を肉に突き刺したことで、俺たちはなんとか爆風をやり過ごした。
…腕千切れるかと思った。
２人が吹き飛ばされないよう、支えとしての役割は果たせたようだ。
あれだけの爆風にもかかわらず、吹っ飛んだのは地表を覆っていた肉塊だけ。
確かに、敵にとって有利な状況の要因となってるソレを吹き飛ばすなど、考えられない。
「何はともあれ、戦況が変わったのには間違いない。さっきから爆発が起きる度に、肉塊が爆心地へ向かってる」
「そりゃ、ありがたいことっすけど…！」
「考察は後回しにしよう。数が減っても、戦況が厳しいことには変わりない」

肉塊の人形は、気持ち半分少なくなったくらいで、こっちの戦闘が楽になったと言うわけじゃない。
硬化するにも集中力や体力が必要になる。
さっきなんて、手の硬化が切れて、拳が悲惨なことになった。
今はワイシャツを破って、適当にくくりつけて止血し、グローブがわりにしてる。
多少打撃の威力は落ちるが、俺の貢献は隙を作るのが主な為、問題はない。
「キリシマくん、踏ん張りなよ。どんな敵であれ、追い詰められた時が一番ヤバい」
「おっ…す…っ!!」
Ｆｌｏｗｅｒの言う通り、数が減った代償というべきか、さっきから肉塊の攻撃が激しい。
前の「効率よく戦う」ような動きじゃなく、「何かを恐れてがむしゃらに抵抗している」ような気がする。
生憎、子供の癇癪くらいの喧嘩しか経験のない俺は、想像でしか語れないが。
「切島くん!!後ろ!!」
「ぐがっ!?」
と、背中に衝撃が走る。
激痛で霞む視界の端には、肉塊が槍のように突き出ていた。

意識が朦朧とし、頭がくらくらする。
それでも、霞む視界は絶えることなく、肉塊を注視していた。
「まだ、まだァ…!!」
流れる血が、俺の限界を物語る。
まだだ。まだ、助けられてない。まだ、助けられた礼ができてない。
プロヒーローがそばに居るとか、関係ない。今強がらなくて、いつ強がるんだ。
京町さんに襲いかかる一人を殴り飛ばし、続く奴に蹴りを浴びせる。
嫌な音が響き、激痛が走る。最早、どこがどの程度痛いのかすら分からない。
「……ああ。『君も』か」
Ｆｌｏｗｅｒが口角を上げ、俺を見つめる。
その意味は分からない。分からないことだらけだが、一つだけわかることがある。
まだ、立てる。
「来いよ、理不尽…。死んでも、この人らは殺させねェ」
啖呵が、死に体の俺を立たせる。
波のように襲いかかる肉が、手当たり次第に俺たちを呑み込もうと迫る。
幾度も弾ける太陽を恐れるように。そこから逃れるように、雪崩れ込み、あらゆるものを飲み込もうとする肉の塊。

京町さんにその顎門が迫る寸前で、俺の体は弾かれたように動き出した。
「ぎっ……」
「切島くん!?」
京町さんを呑み込もうとしたソレの顎を、つっかえ棒のようにして止める。
形成されていた牙が、俺の掌と足を貫く。
痛みがわからないほどに傷ついた体が、これ以上の痛みに怯むことはない。
俺は掌と足を硬化させ、簡単に牙が抜けないようにする。
捉えた俺をそのまま喰らおうと、口腔を形成する肉片が何度も俺に殴打を喰らわせる。
肉が削がれる感触がする。逃げていく熱を補うように、身体中から煮えたぎるような熱さを感じた。
「切島。男らしかったぞ、お前」
瞬間。業火と氷が炸裂し、肉塊を薙ぎ払う。
火の粉と氷片が舞う中。安堵で薄れゆく意識で、俺は確かに、ヒーローを見た。
♦?♦?♦?♦?
「……今の……」
目の前に広がる光景に、少女は目を剥く。

焦げる肉塊。肉塊に埋もれていた筈だが、剥き出した元の街並み。
その中心に立っていたのは、先程捕らえたはずの異形。
先程とは違い、全体的に刺々しい印象を受ける…まるで『爆発という現象そのもの』を体現するかのような鎧。
そのマスク部分の奥にある瞳が、燃え盛る闘志を宿し、少女の姿を捉えていた。
「嘘……。なんで、なんで今…、『個性特異点』が……!?」
『もォ隠れらんねェなァ…!!』
マスクの剥き出しの牙を象徴するかのような口元から、ふしゅう、と水蒸気が出る。
否。口元だけではない。あらゆる部位から水蒸気が発生し、異形の周りを揺蕩う。
その姿を例えるなら、明王。悪に屈せぬ炎を背負う、憤怒の化身。
『俺らの『先生』と『師匠』の初クリスマス台無しにした落とし前、きっちりつけてもらおォかァア!!!』
異形が叫ぶと共に、揺蕩う水蒸気が彼女に迫り来る。
少女が武器…エネルギー弾を撃ち出すだけの簡易なもの…の引き金を引き、水蒸気を払おうとする。
余波だけで金属が融解するレベルの温度を持つエネルギー弾が、水蒸気へと迫る。
が。水蒸気は轟音と共に爆炎となり、エネルギー弾を容易くかき消し、少女を襲う。

「ひっ……!?」

先ほどとは違う。

まるで『現象そのもの』が牙を剥いているような、そんな感覚。

少女は無表情を崩し、短い生の間で初めて感じた「恐怖」に、上擦った声を出した。

「アーミー!!私を守って…、アイツを、殺してっっ!!!」

縋るような声と共に、肉塊が再び街を覆い、異形へと襲いかかる。

その抵抗も虚しく、水蒸気が爆炎に変わると共に、肉塊が消し飛んだ。

『死なねェ程度にブッッッ殺してやらァアッッッッ!!!!』

その鎧は最早、纏う衣ではない。

皮膚そのもののように隆起し、揃う牙から咆哮が放たれる。

この時、爆豪勝己の個性因子は急速に活性化し、彼の体そのものとなっていた。宿主の限界を重ねて迎えた極限状態に、個性が進化を促したのだ。

これだけなら、まだここまで爆発的な変貌を遂げることはなかっただろう。しかし、イズクメタルには、緑谷出久ですら把握していない、ある特性があった。

いや、そもそも、彼では知ることはなかったかも知れない。

大阪にて、空が白く染まったあの時。その光景を創り出したあかりの纏う鎧は、雷によって歪んだように見えたわけではない。『実際に変貌していた』のだ。

イズクメタルは、緑谷出久では…「無個性」では絶対に気づけない特異性がある。
「個性因子の覚醒に呼応し、変貌する」という、他の金属には見られない、唯一無二の特異性が。
そもそもの話、爆豪勝己の個性因子が、紺星あかりの人工個性並の覚醒を遂げることは、まずあり得ない。
確率論で言えば、机に振り下ろす腕が机をすり抜ける確率…宇宙生誕の確率よりも遥かに低かった。
しかし、生命の神秘は、そんな確率論をあっさりと踏み倒した。
掌が過剰に熱せられることで、汗腺から溢れ出す汗が気化し、羽衣のように周囲を漂う。その羽衣は、主たる爆豪の意思一つで形を変え、或いは大爆発を引き起こす。
太陽を生み出すが如きその御業は、明らかに人を超えていた。
「っ、近づくな…、来るなっ…！私から離れてよ、化け物ぉ!!」
『…そんなに怖ェか？』
幾つもの太陽が、肉塊を焼き払い、元ある街並みを露呈させる。
追い詰められた少女が、恥もへったくれもなく泣きじゃくり、歩み寄る怪物を拒絶する。
その姿が、更に爆豪の琴線に触れ、その怒りをより激しく燃え上がらせた。

『恐怖に屈するくれェ軽い気持ちでここに居ンなら、今すぐ帰って震えて寝てろや!!!
覚悟も決まってねェ、恐怖すら分かんねェくれェに狂気に浸ってもいねェよォなガキが、一丁前に悪者気取ろうってか!?!?
テメェらのチャチなままごとに付き合ってられるほど、オレらの全部賭けたごっこ遊びは甘くねェぞォ!!!』
乱暴に胸ぐらを掴み、そう吐き捨てる爆豪。
既に戦意を喪失し、ただ震えるだけの少女にトドメを刺す気も失せたのか、そのまま手を離して踵を返す。
と。彼は思い出したように、少女へと振り返った。
『…その惨めさが、テメェの出発点だ。
気張れや、クソガキ』
瞬間。爆炎がｉ・アイランドに蔓延る肉塊をまとめて吹き飛ばした。
♦？♦？♦？♦？
「……な、何を言ってるの？いちご味？」
僕の言葉に、戸惑いを見せるミラー。
攻撃の苛烈さは少しも落ち着かないものの、動揺によってその精度は地に落ちている。

確かに、この場で飛び出すには、あまりにも場違いすぎる単語ではあるだろう。だが、それなりに興味を抱いているのか、「いちご、味…？」とつぶやく姿が見える。

あの理不尽の塊のことだ。捨て駒扱いのこの子に与えた知識は、娯楽関連は一切合切含まれていないのだろう。

僕は襲い来る弾丸を受け止めつつ、言葉を紡ぐ。

『子供でも知ってることなんだけどな…。

じゃあ、プリンは？…ああ、シュークリームも捨てがたいな。エクレア、ドーナツ…。

これらは所謂、一つの「幸せ」の形だ。

君は父親に尽くす以外の幸せを、全く知らないんだな』

「……知らない。悪にそんなの、必要ない」

人は本質に幸福に縋って生きている。

僕たちのように、艱難辛苦を背負い、失った業を引きずりながら歩くことを選んでも、心の中ではもっといいハッピーエンドがあったんじゃないかと後悔を繰り返している。

親に尽くすことも、確かに幸福ではある。だけど、無垢に付け込んで、ただ尽くすだけの一生を与えられるのは、果たして幸福と言えるのだろうか。

『夕暮れの赤さは？星の煌めきは？

君は僕を星に例えていたけど…、自らを燃やし、空を照らすあの美しい光群を…、君

は一度でも目にしたことがあるのか？』

あの日、絶望に盲目になっていたあかりちゃんを、僕は言葉で殺した。生まれ変わったあかりちゃんを、そこらで悪意が牙を剥くディストピアに引き摺り下ろした。

僕はヒーローだという、自分の心すら騙す妄想で、そんな絶望を七色に飾りつけた。そんな光り輝く絶望を…僕の正義を、あかりちゃんに押し付けた。

いつか僕の妄想が叶って、七色の絶望が、色すらわからないほどに煌めく希望に変わることを、信じさせて。

だから、僕はこの妄想を、現実にしなくてはならない。あかりちゃんが望む、希望溢れる世界を見せなくてはならない。

僕が目指したヒーローは、「平和の象徴」という夢物語を現実にした。

彼にできて、他の誰にも出来ないなんて、どこの誰が決めたのだろうか。よしんば神が定めたとしても、それを捻じ曲げることが可能なくらいに血反吐は吐いてきた。

「……うるさい。そんなの、私は知らなくていい。私は、悪で在ればいい」

『じゃあ聞くが。君は「悪」が何か、答えられるのか？』

「…っ、うるさいっ!!」

少女は答えに詰まり、声を遮るように、幾人ものコピーを生み出す。

その姿に既視感があることに気づかないほど、僕の頭脳は鈍感ではなかった。

『…あの頃のかっちゃんに似てるな』

都合の悪いことから目を逸らし、気に入らないことから逃げるその姿。

かっちゃんが変わる前に、よく似ている。

なら、尚更放って置けない。

これは、僕の自己満足だ。彼女を無知の幸福から追い出して、愛も希望もへったくれもない現実の世界に叩き落とす。

『邪悪な無垢であるだけの君が語るほど、それは軽い存在じゃない。

君のそれは、ただの「作業」だ』

「違う…。違う…。パパが言ってたんだ…。絶対に、悪なんだ…」

『君は悪じゃない。ただ無垢につけ込まれただけの、子供だ』

「っ……!!」

――――子供は無知ですからね。一度ペンを入れた紙に、文字を消しても筆圧が残るように。教えられたことに、馬鹿みたいに従順なものなんですよ。僕たちの本来の仕事は、その紙に新しいことを書くことではありません。その紙を取り上げて、自分で自由に描ける、新しい白紙を与えることです。

昔、先生が言っていたことを思い出した。

やっぱり、僕は相当物覚えが悪いらしい。教わったことを忘れてしまうなんて、先生

に叱られても文句言えないや。
飛び交う光線を打ち消しながら、彼女に歩み寄る。
「っ、それでも…」
『父親に尽くせるなら…か。
君は、薄い。悪かどうかじゃない。人として、どこまでも薄っぺらい』
生まれて三日だという彼女には、重みがない。無邪気であるが故に邪悪だが、その悪はちょっとしたことで裏返る。
どうしようもないほどに悪に染まっていない彼女なら、まだ助け出せる。
『何もかもがない君が悪を騙っても、それは子供の妄言とおままごとでしかない。
僕の存在全部を賭けたごっこ遊びが、それで際立つことなんてない。ただ、君を倒した僕が虚しくなるだけだ』
僕の紡ぐ言葉に呑まれ、嫌だ、聞きたくないと、ただ拒絶を繰り返す少女。
気づきたくない現実ほど、人を打ちのめすものはない。あかりさんを生み出してしまった絶望の未来。僕の正義がその原因となってしまったという事実が、僕を一度でも諦めさせたように。
でも、人はそこから這い上がれる力がある。最初の一歩を踏み出すだけで、驚くほどにあっさりと、世界は変わる。

僕の右腕が駆動音を伴い、その姿を変える。
この狭い世界を壊すために、握る拳に力を込める。
『この敗北が、君の最初の一歩だ』
――――――正義の一撃。
拳を天に掲げるとともに、光が僕らを包み込む。
上を見上げれば、雲ひとつない満天の星が僕たちを照らしていた。

憤怒と憤怒

「…絶対忘れとったな、ウチがおること」

要となる存在が無力化され、物資が枯渇したのだろう。殆どの艦が引き返す中で、私は海上に横たわっていた。

流れ弾、とでもいうのだろうか。加減を完璧に忘れたアホに制裁を喰らわせることを決意しながら、私は水面から飛び立つ。

濡れて衣装が透けるかと思ったが、そんなことはなく、水を吸った重みすら感じない。

…これ、素材だけ普段着に流用してくれないだろうか。私、妙に発育がいいからか、汗かいた時とか視線が気色悪いし。

「…キレーやな、星」

見上げれば、満天の星が私を魅せる。そんな夜空を彩るように、叢雲のような煙が、あたりに立ち込めた。

私がふと、その発生源たる箇所を見ると、ホバーバイクでガスを散布する葵さんがいた。

「葵さん。出来たんやな」

「ああ。これで、防衛機構を解除しても大丈夫…」
と、葵さんが言いかけた、まさにその時。
私は咄嗟に、彼女を抱え飛び降りる。
次の瞬間には、葵さんの乗っていたホバーバイクに、一人の男が立っていた。
「……ああ。君も成っていたのか。…全く。因果というのは恐ろしい」
落ちていく中、私はその姿を見た。
邪悪の化身。世界に牙剥く理不尽。平和と正義の対極。
ニュースで流れていた単語が、脳裏を駆け巡る。そこに立っていたのは、ついなちゃんのお父さんを殺した、あの『絶対悪』だった。
「……退いてくれるかな。今は、心中穏やかじゃないんだ」
怒り狂う絶対悪が、牙を剥く。
♦？♦？♦？♦？
「切島くんが、切島くんが…!!」
「……ぁ、ぃ…」
絶望が太陽によって薙ぎ払われ、爪痕残る街並みの中。
死にかけの切島から流れる血液が、床を赤く染め上げる。致死量超えてるんじゃなかろうか。

「…切島。死にたくなかったら我慢しろ」
「ひぎっ…!?」
特に出血がひどい箇所に、俺は掌から生み出した火を押し当て、焼き潰す。
悲痛な呻き声が切島から発せられたが、俺は心を鬼にして、次々と傷口を塞いでいく。
正直、ここまでしないと確実に死ぬ。医療用ナノマシンには、造血機能など搭載されていないのだから。
「……すま、ねぇ…。また…迷惑、かけた…」
「…ったく。つくづく、ヒーロー目指してるやつは、カッケェ無茶しやがる」
爆豪が腕二本焼き尽くして、あの脅威を追い払ったように。コイツは、全身から血を噴き出そうが、四肢の骨があり得ないほどに砕けようが、セイカさんを守り抜いた。
俺も大概だが、ヒーロー志望に自分の命が惜しい奴は少ないらしい。
「……やっぱ、な。轟。お前…、ＳＡＶＥＲの仲間だったんだな。届かねェ…、ワケか…」
光の薄い瞳で、そんな馬鹿げたことをのたまう切島。
俺は生意気な脳みそが詰まってるだろう、その額に軽くデコピンをかまし、語りかけた。
「…ただヒーローの真似事やってるガキに、追いつけねェことあるかよ。

追いつきてェっつーなら、テメェの全部賭けて追いかけてこい…って、爆豪だったら怒鳴り散らしてるぞ」
「……そうか」
コイツみたいな馬鹿が、俺たちに追いつけないなんて、あるわけがない。
気張れよ、と励まし、治療を進めていく。
と。Ｆｌｏｗｅｒが、マスクに覆われた俺の顔を覗き込んだ。
「…つづちゃんが気にいるわけか」
「……どーします？捕まえますか？」
ボイスチェンジャーを切っていたとはいえ、流石にバレていたらしい。
俺が両手を上げて言うと、Ｆｌｏｗｅｒは首を横に振った。
「いや。もともと、つづちゃんから聞いてたんだ。ハロウィンのちょっと前に」
「……弟子自慢か。あの師匠らしい」
俺らにはキツく当たるくせに、親しい人間にだけ俺たちのことを褒めまくる。
もっと素直に褒めてくれてもいいんじゃないか、と思うこともあるが、素直じゃない奥さんには酷な話か。
それに、俺たちは自惚れやすい年頃だ。
そんな頻繁に褒められては、昔の爆豪みてェになること間違いなしだろう。

「…それはそれとして。
キリシマくん。意識はあるよね？」
「……ウス。な…んと……か」
掠れた声で返す切島。
あまり無理はするな、と宥め、ナノマシンが入った針なし注射器を押し当てる。
これで損傷は治せるはず。流石に貧血はどうしようもないらしいが…。
「僕さ…、弟子が欲しかったんだよね。つづちゃんがあまりに自慢してくるからさ。
…ここまで言えば、わかるよね？」
プロからのスカウト。しかも、一国の頂点に立つ、トップヒーローの。
またとないこのチャンスに飛びつかない人間は、どこを探してもいないだろう。
しかし、切島はセイカさんを見て、即座に首を横に振った。
「日本で、やりてーこと、あるンで…。ありがてーっスけど、お断りするっス…」
「……フラれちゃったか。残念」
「お喋りはその辺にして、輸血…。…切島、血液型言え」
奥さんがA型で、俺がO型。Ｆｌｏｗｅｒは宣伝用の公式サイト曰くＡＢ型。セイカさんがＢ型と、四種は揃っている。
切島が希少性の高い血液型でないことを祈るばかりだ。

…切島の出血量からして、どの血液型でも貧血症状は避けられない程度にしか輸血できないのだが。
「…O型」
「そうか。応急処置程度に輸血すっぞ」
良かった。スーツに備わった機能と、俺の血液が揃ってる。何とかなりそうだ。
スーツの腕部から伸ばした管を、切島の腕に差し込む。あとは造血に努めさせ、病院か何処かに運び込めばいい話だ。
…果たして、今の日本人に対応してくれる病院が、このｉ・アイランドにあるかは些か疑問ではあるが。
最悪の場合、緑谷作の浮遊大陸『北斗七星』に運び込めばいい。
これからのことを思案していると。通信が入ったことを知らせるノイズが聞こえた。
『轟先輩。まずいことになりました』
「東北？…なんだ、まずいことって」
東北が落ち着きながらも焦燥感あふれる声で、緊急性を訴える。
この状況下だ。しょうもないことで通信を入れるということは、まず無い。
暫し深呼吸の音が聞こえた後、東北は血反吐を吐くような声で告げた。
『艦隊の方にフィクサーが来てます。

あろうことか、オールマイトを煽って居場所を知らせてから』

「……そりゃマズいな」

なまじ状況が解決したせいで、新たな問題が浮上してる。

フィクサーは絶対悪ながら、世界を支配するような思想は抱いていない。寧ろ、自分に敵う正義の生誕を心待ちにしている節がある。

その思想から考えると、ここで殺戮の限りを尽くすというのは考えにくい。

となれば、ここに来る理由はなんだ？そもそも、オールマイトを煽ったのは何故だ…？

…駄目だ。緑谷みたく、アホみたいに頭がいい訳でもない俺の頭じゃ、全然わからん。

思案してる暇はない。輸血が済んだ切島に、「ちょっと行ってくる」とだけ告げ、黒の中に、星々が煌々と輝く夜空へと飛び立った。

♦？♦？♦？♦？

「ミーティア・ストラァァーーイクッ!!」

葵さんを何とか逃し、フィクサーと交戦する。

私の個性は、コイツ相手には役に立たない。まず触れることすら叶わない。

私は麻酔薬が入った弾丸を、個性で軽くし、勢いよく投げ飛ばす。

乱れ飛ぶ弾幕を弾きながら、フィクサーは心底苛立ったように頭を掻きむしった。

「…狙撃スキルなんて、君にあったっけ？
結構正確だけど…、いかんせん、飛ばすものと狙いが馬鹿正直すぎて、面白みが無い」
「っ、ミーティア・フィニッシュ!!」
数回転して間合いを詰め、蹴りを繰り出す。
私たちの中で、格闘術に秀でているのは私だ。個性無しの格闘戦で言えば、白星は私が1番多い。
だから、フィクサーにも通じるという自惚れがあったのかもしれない。
まるで、ふわふわの布団でも蹴ったかのような感触が、足を伝うまで、私はその自惚れを抱いていた。
「……経験が浅いのかな？
同じ装備なのに、彼らと見劣りするよ」
「ッ…!!」
そんなこと、分かってる。
私が1番弱いことも、私がヒーローになる決心をしても、あの時誓った決死の覚悟に負けるくらい、目の前のモノに恐怖を抱いていることも、とっくの昔に知ってる。
しかし、足を掴んだのは、相手の油断からだろうか。
袖口に仕込んだ麻酔弾を取り出し、軽いスナップで投げる。

正直、防がれてもいい。意識が少しでも別に向けば、攻撃のチャンスはある。
「…三発のブラインド」
３回、何かが弾ける音がした。
次の瞬間、私の意識はひどくゆっくりと、目の前の事象を捉えていた。
フィクサーの腕が、麻酔弾を弾きながら、私に迫る。負ける。そう確信しながらも尚、ヤツを睨め付ける。
心で負けたらダメだ。ついなちゃんに、助けた人たちに顔向けできない。
私はまだ、負けてない。
『ジャスティス・スマイト』
フィクサーの土手っ腹に、蹴りが入る。
私の足を離し、吹っ飛ぶ彼のいた場所。そこには、ヒーローがいた。
『漸くマトモに入ったな、フィクサー。随分と余裕が無さそうじゃないか』
ボイスチェンジャー越しにもわかるほどに、怒気を孕んだ声音で滲みよる緑谷くん。
フィクサーは脇腹を押さえながら、マスクの奥にある闇孕む瞳で、緑谷くんを見やる。
「……ああ、君か。
本音を言えば、今すぐにでも君と遊びたいけれど…、残念ながら、殺さなきゃいけない相手が出来たんだ」

フィクサーの姿がブレた、と思いきや、緑谷くんとクロスカウンターを決める。
星すら砕く一撃も、フィクサーにとってはただの拳同然らしい。
その強大さに目を向く暇もなく、激しい攻防は問答と共に続く。
『誰のことだ!?』
「君も知ってるだろ？」
――――爆豪勝己だよ。
その名を聞いた瞬間、緑谷くんはフィクサーに強く拳を入れ、距離をとった。
『……今、何て言った？』
緑谷くんの鎧から飛び出したバイクが分解され、彼の体に纏わりつく。
形成された槍が、その身から溢れ出す憤怒を象る稲妻を抱いた。
『武装「オーディン」』
瞬間。赫耀の稲妻が、暴風と共に空を染め上げた。
♦？♦？♦？♦？
『爆豪!!おい、爆豪!!
ヤベェぞ、緑谷がキレた!!』
『……っ、せェな…、聞こえてるっての…』
轟の声で目を覚ます。

記憶が曖昧だが、この景色を見る限り、俺は勝ったらしい。
ずきずきと痛む頭を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。
まだ意識が朦朧としている。呆然としながら涙を流すガキに、「止まってんな」とだけ告げ、歩き出した。
『……っ、ソが…。こんな、ギリギリで…、何が、勝利…』
俺の目指したヒーローは、こんなことで躓いているような、ちっぽけな存在じゃねェ。
そんな意地が、俺の体を支えている。
瞼が重い。腕が、足が、何もかもが重い。
意識が闇の底に沈むのも時間の問題だと思った、まさにその時。
「先輩、お疲れ様です。
栄養剤、持ってきました」
クソガキが、俺の体を支えていた。
『…頼むわ。次、控えてっからよ』

意地と意地

「そういえば、イズクくん。最近、私と戦った時の装備、使いませんね」
「あー…っと…。それ、聞いちゃう？」
　遡ること、数日前。
　スーツ…正式名称『イズク一号…シリウス』のアップデートを２ヶ月かかりきりで済ませ、日付が変わった頃。
　話題が鎌倉山事変…出久が手加減を忘れ、鎌倉山を真っ二つに叩き割った…に辿り着き、あかりが自然と疑問を浮かべる。
　それに対し、出久はなんとも言えない表情を浮かべた。
「アレ、手加減出来ないんだよね。
　あの時は、ほら。あかりさんみたいな規格外が相手だったから、ほぼ損害ゼロで済んだんだけど…。
　……アップデートした際に出力上がってたらどうしよ…。怖くて試せないし…」
「……ああ、成る程。使わないんじゃなくて、碌に使えたモノじゃないんですか」
「……はい。その通りです」

あらゆる事象に対応できるように、これでもかと火力を盛りに盛った装備が、武装「オーディン」である。
ただでさえ、月を砕くほどの拳を放てる装備なのだ。過剰過ぎる力は、簡単に人の手を離れていく。
つまるところ、出久は武装「オーディン」を御す力を持っていないのである。
新しく機能を付け足そうにも、武装「オーディン」にそんな容量はカケラも残っておらず。下手に取り除こうモノなら、データが膨大すぎてどこにも保存できない。破棄するにしても、データを完全に破壊することなど不可能で、それなら自分が管理していた方が安心できる。
そんな事情が重なり合った結果、ここまでズルズルと搭載したままにしていたのである。
スーツのアップデートに合わせて、おかしな進化を遂げていないかが心配だが、あかりほどの規格外がそうそう出るとは思えない。
フィクサー相手にも、これを使うことはないだろう。
そんな言い訳で心を落ち着かせ、出久はシリウスを格納庫にしまった。
「使うとしたら…、本気で怒った時くらいだと思うな」
「……てんで想像できませんね、イズクくんが本気で怒るところって。

大阪の時の怒号も、ストレス発散に怒鳴っただけでしたし」
「いや、僕も人間だから怒る時は怒るよ。
…まぁ、どこか余裕がある限りは使わないと思うけど」
願わくば、この余裕が失われることがないことを祈るばかりだ。
そんなことを考えながら、出久は格納庫を後にした。
♦？♦？♦？♦？
現在、僕の余裕は失われていた。
今すぐ、目の前の存在を倒さなくては。前みたいに見逃してもらっても、確実にかっちゃんは殺される。
これ以上、何も奪わせるものか。
「…いいね、その本気」
『余裕のつもりか』
槍を振るうと共に、赫の雷が空を薙ぐ。
アレだけ恐れていた力が、体に馴染んでいく感覚。今、この恐怖に飲まれたら、かっちゃんが殺される。
フィクサーの繰り出す音を雷鳴の轟音でかき消し、幾度となく刺突を繰り返す。
オーディンを発動させた際、相手を倒すまで機能を停止しないよう、スーツのＡＩに

ラーニングさせている。そのためなら、骨が折れようが、僕が死のうが、絶対に止まらない。
目の前の存在を倒すためなら、僕は喜んで『天災』になる。
『お前だけは、死んでも止める』
「全く…。ただの無気力な中学生だったヤツらより、好感が持てるよ」
『ほざけ』
後先のことは考えるな。
周囲を巻き込む心配はいらない。コイツを倒すことだけ考えてればいい。
刺突と雷に、次々と身を躱すフィクサー。その瞳は、変わらず闇が灯っている。
僕の脳波をスキャンし、フィクサーの行動パターンを幾重にも分析。この時点で目眩がしそうだが、そこから連携を構築する。
以前より遥かに頭脳を酷使しているせいか、顔中から血が溢れ出すのが分かった。
『っ…』
「…この負荷でたたらを踏まないってことは、成る程。スーツが無理矢理体を動かしてるんだな？
死んでも止めるってのは、比喩でもハッタリでもないわけだ」
『当たり前だ…!!』

暴風を巻き起こし、フィクサーの姿勢を崩しにかかる。
武装「オーディン」に搭載された機能は、火力の底上げの他にも、いくつかある。
その中の一つが「暴風」。文字通り、風を…正確には、大気を操る機能。本来であれば、台風や竜巻といった災害への対処に使う機能なのだが、フィクサー相手になら遠慮なく使える。
相手は多くのトップヒーローを打ち負かした男。大気を操れる程度で勝てるとは、微塵も思えなかった。
突風によって姿勢を崩したフィクサーを刈り取るように、赫の雷を放つ。が、フィクサーはそれを予測していたように、足から吹き出したブースターによって、あっさりとそれを避けた。
「あっぶな。死ぬかと思ったよ」
『白々しいぞ』
「…まぁ、雷なら数え切れないくらい食らったからね」
天災になった程度で、この理不尽を倒せるとは思えない。
空を彩る幾つもの赫を、槍として固定する。範囲攻撃でさえ意味を成さない相手ならば、確実に倒せる一撃を何度でも放てばいいだけだ。
「……成る程。こりゃ、本格的にマズイな」

槍を振るうと共に、赫の大群が一斉にフィクサーへと迫る。
直撃を嫌ったフィクサーが躱そうとする度、奴を囲うように暴風の壁を発生させ、逃亡を阻止。何箇所かに雷が突き刺さるも、どれもこれも決定打にはならず、傷は数瞬のうちに回復してしまう。
正直、ジリ貧だ。雨霰と槍を放とうが、空全体を焼き尽くす勢いで雷を放とうが、コイツは倒れない。
何がここまでコイツを駆り立てるのだろう。
そんな疑問が湧いた、次の瞬間だった。
「ＳＭＡＡＡＡＡＡＡＡＳＨッ!!!」
「…セーフ」
フィクサーの顔面目掛けて、理不尽が放たれたのは。
突風が全てを薙ぎ払い、雷の槍さえも掻き消えていく。フィクサーが悪の理不尽であるならば、彼は正義の理不尽。
僕が憧れた人が、そこにいた。
『…オール、マイト』
「やぁ、ＳＡＶＥＲ。さっき見た時とちょっと変わったね？イメチェンかい？」
『……、本気でやっていただけだ』

なんてタイミングで来るんだ。
シールド博士が操るマシンのウィング部分に立ち、月明かりを背に浴びるその姿。普段ならば興奮して気絶していた自信があるが、今は状況が状況だ。
その存在感に気が逸れてしまったが、吹っ飛んだフィクサーを追わなければ。そのまま海に潜って逃げている可能性が高い。
色さえも抜け落ちた世界へと突入し、フィクサーの反応がある場所へと向かう。
オールマイトたちもそれを追うように、同じ世界へ突入した。
「Ｈｅｙ!!君とフィクサーはどうして対立してるんだい!?」
『くだらない問答はやめてくれ。こちらも今、余裕がない。
君たちを巻き込むかも知れないんだ。できるなら、復興の手伝いをしてくれないか』
どうして音速を超えた世界で普通にしてられるんですか、アンタ。
オールマイトの規格外さを改めてヒシヒシと感じながら、問答を突っぱねる。
フィクサーに追いつけなければ、かっちゃんが殺されてしまう。ついなちゃんのお父さんの死を見た時も、身を引き裂くような後悔が湧いたというのに。かっちゃんが殺されたら、僕はヒーローという亡霊に取り憑かれたバケモノになってしまう。
そうだ。かっちゃんが殺されるかどうかの瀬戸際なんだ。
なりふり構うな。死んでも、倒せ。

フィクサーの影に追いつくや否や、僕は槍に幾重もの雷を宿らせる。あまりの膨大さに槍には収まらず、握る僕の腕すらも焼き焦がす炎雷。
痛みに呻くことなく、僕は叫んだ。
『グン…ッ、グニル!!』
必ず相手を貫く矛となる。
海を焼き、天すら焦がし、大地をも叩き潰す、僕が繰り出せる究極の一撃。
海中のフィクサーは青い顔をして身を躱し、衝撃波と共に飛ばされる。巧く避けたみたいだが、これが一発限りの必殺なわけがない。
確実に倒す。その一心で、僕は更に腕を焦がし、続け様に放った。
『ぐっ、…、た、おれ…、ろオ!!』
「……まだ、その時じゃないんだ。
僕が…屍たちが待ち望んだその時を迎えるためにも、僕の邪魔をしないでくれ!!」
フィクサーが躱す共に、顎に衝撃が走る。
意識を刈り取るべく、脳を震わせようとしたのだろう。意識が一瞬飛んだが、焦げた腕の痛みで無理矢理に目を覚ます。
この腕が使い物にならなくなってもいい。この身が滅んでもいい。今、ここでコイツを止めなければ。

「ＳＭＡＡＡＡＡＡＡＡＳＨ!!」
「かっ…!?」
刺突を繰り返して、幾度目か。
赫雷を掻い潜って漸く僕らの元へたどり着いたオールマイトが、フィクサーの土手っ腹に拳を叩き込んだ。
水飛沫が上がる中、僕がそのまま刺突を決めようと移動するのを、オールマイトが肩に手を置いて止める。
「…手負の獲物を横取りするようで悪いが、ＳＡＶＥＲ。コイツは…、コイツだけは私に譲ってくれないか？」
あのオールマイトがいつもの笑顔を崩し、険しい顔で告げる。
若き頃とは違い、あらゆる悪を同様に、平等に粉砕してきた圧倒的な理不尽。笑顔と共に在った彼の顔には、決意と覚悟があった。
「私には、巨悪を打ち倒す使命がある。
それは、この男をも踏み越えていかなければならないんだ」
オールマイトの眼差しが、僕を捉える。
無視しようにも、あまりにも強大な存在感に惹かれ、僕の体が止まってしまう。
ダメだ。止まるな。今お前が止めなくて、誰がかっちゃんを助けるんだ。

僕が動き出そうとした、その時だった。
「……、いいことを教えてあげるよ、オールマイト」
フィクサーの笑みを孕んだ声が響いたのは。
僕たちがそちらを向くと、再生が追いついていないのか、傷を庇うように抑えるフィクサーの姿がある。
オールマイトから受けた傷もあるだろうが、僕から受けた傷も相当深いらしい。
あと少しで倒せる。僕が槍を持って、トドメを刺そうとしたその時だった。

「彼はキズナと繋がってる」

最悪のタイミングで、その情報が飛び出したのは。
あまりの衝撃に、僕たちは目の前が真っ白になった。フィクサーに刺突を放つも、あまりの動揺に脳波が混乱し、見当違いの方向に繰り出してしまった。
フィクサーは思惑通り、と言わんばかりの笑みを浮かべ、姿を消す。
終わった。かっちゃんを守れなかった。
僕がそう思い込んでいた、その時。
『テメェが俺を守ろうなんざ、一兆年早ェわ』

太陽が、夜空を照らした。

♦？♦？♦？♦？

「…緑谷先輩、なりふり構ってませんね。

ここら一帯、空が真っ赤に染まってます」

「紲星にこれ以上負担増やしてどォすンだ、あのタコ」

少し時は遡り。

栄養剤を流し込んだことで、身体が潤っていくのが感じる。汗腺の痛みも完全に治り、爆破は完全に機能を取り戻した。

俺は現状確認の傍ら、軽くストレッチをして、目眩がないことを確認する。

「……にしても、爆豪くん。随分とイメチェンしましたね」

「そっちの方がバクゴーさんっぽくって素敵だと思うな」

「世辞はいい。今重要なのは、フィクサーが俺をブッ殺そうとしてて、デクがそれにキレて暴れ回ってるっつーことだ」

イメチェンってのは、今俺が着ているスーツのことだろう。…俺からすりゃあ、ゴテゴテしてて動き辛ェんだが。

意識が逸れた。

あのバカのことだ。おおかた、自分が守らなきゃ殺されるとか自惚れているのだろ

う。

あとで殴ることを誓いながら、自分の体に起きた変化を確認する。

まず、掌の温度操作。その気になれば、金属を一瞬で融解させるほどの高温に到達する。続けて、汗の気化によって散布されたニトロ擬きの操作。これによって羽衣のようにニトロを漂わせ、自由に爆破することができる。掌の温度操作と合わせて、瞬間的に生成できるのが利点か。

そのまま個性が進化したみてェだ。…それでも、あの師匠にゃ勝てねェんだろォが。

「轟と麗日は？」

「轟先輩の方は、向かってくれてます。…近づけるかどうかは、正直怪しいですが。麗日先輩は…、追いかけてますけど、雷が邪魔して追いつけてませんね。

あかりさんは急いで向かってますが…、彼女だけはオールマイトがあの場にいる以上、下手に動けません。

……大事にされてますねぇ、幼馴染に」

「余計な世話っつーンだよ」

本当に、余計なお世話だ。

デクが調子に乗ってるのも腹が立つが、なにより俺が軽く見られてるのが心底苛つく。

フィクサーと交戦するデクの位置を覚え、俺は羽衣を生み出した。
「ンじゃ、ちょっくら行ってくらァ」
「…墓は作りませんし、葬式の準備もしませんからね」
「存外、気が利くじゃねェか、クソガキ」
発破に笑みを浮かべ、地面を蹴る。
眼下に見えるクソ教師の口元が、小さく動くのが見えた。
「任せろや」
アホどものフォローは骨が折れるな。
そんなことを思いながら、これから太陽に照らされる黒へと飛び立った。

その生き様が、何かを救う

『……随分と無様な姿になったなァ。
手負だろォが関係ねェ。リベンジに来たぜ、絶対悪』
爆炎が払われ、その影が顕になる。
爆破という現象そのものが形になったような鎧に、悪を威嚇する明王が如き羽衣。
朝日と共に立つその姿は、太陽の化身さながらであった。
「……僕は、知らない…。
君がここまで『至る』なんて、今まで見たことも、聞いたこともない…!!」
『海水浴が好きみてェだなァ。冬場に海に入って冷てェだろ？
あっためついでに釜茹でにしてやらァ!!』
恐らくかっちゃんなのだろう。
彼が叩きつけるように海水に手を突っ込んだ瞬間、海は赤く染まり、沸き立つ。
急激な温度の変化に耐えきれず、フィクサーは赤く爛れた皮膚を庇うようにして、海水から出た。
『逃すかよ。「ソル・ノヴァ」』

「がぁあっ!?」

新しき太陽。

かっちゃんがその名を告げると、太陽がフィクサーの身を焼き尽くす。爆発というにはあまりにも圧倒的な暴威。

明王は炎を背負ったそうだが、目の前の幼馴染は、太陽そのものを背負っている。

ああ、そうだ。この眩しさだ。

「……、暴走、して、いない…？理性を保ってる…？何故だ、何故…？」

『そこらの有象無象と一緒にすンな。

俺ァ、世界を背負うヒーローになる男だぞ。テメェがテメェに溺れっかよ』

トップヒーローたちでさえも、有象無象呼ばわりか。強がりもここまでいくと、いっそ清々しい気分だ。

どこまでも傲慢不遜で、救いようのない程の自信家で。だけど、自分の限界に怒り、それを何度でも超えていく。

この姿を、僕は追いかけていたんだっけ。なんで忘れていたのだろう。忘れちゃいけないことだったのに。

僕の心に余裕が戻っていく。何を焦っていたんだ。

彼が目の前の理不尽に容易く踏み潰されるほど、小さな男じゃないことなんて、とっ

くの昔に知っていたのに。
『オラ、なにボサッとしてンだ。その図体は飾りかアホ』
『…そんなわけないでしょ』
こつん、と拳を合わせる。
こうして隣に立っている彼が、なによりも頼もしい。
かっちゃんは思い出したように、オールマイトの方を見て、口を開く。
『オールマイトか。初めて生で見たわ』
「……ＳＡＶＥＲのなか」
『コイツの付属品みてェに言うないくらアンタでも殺すぞ。俺ァ「ばくさ』
『ＤＹＮＡＭＩＴＥだ』
『勝手に決めんなやクソが殺すぞ!!』
『殴らないでよ。スーツ越しでも痛い』
かっちゃんのことだ。爆殺王とか名乗るつもりだったのだろう。というか、どの世界線のかっちゃんでも名乗る気がする。
技名はまともなクセして、他が壊滅的なんだよな。…僕がコレを指摘すると、頭蓋骨を叩き割らんばかりのデカさを誇るブーメラン…もといかっちゃんの更なる鉄拳が返ってくるため、口には出さないが。

かっちゃんは僕を一発殴って気が済んだのか、肉薄したフィクサーに向けて、再び太陽を創り出した。
「がっ…!?」
『おいおい、前に比べて間合い管理がクソ甘ェなァ。
テメェ、フィクサーじゃねェな？』
「っ……!!」
消えゆく太陽から、焦げた人型の胸ぐらを掴んで引っ張り出す。
フィクサーじゃない…？であれば、僕の攻撃を直撃から免れてきたあの手際は、一体何だというのか。
オールマイトもかっちゃんの言葉に目を剥き、フィクサーをまじまじと見る。
『かっ…、ＤＹＮＡＭＩＴＥ。本当か？』
『思い出してみろや。俺らが「天災」になったくらいで、倒せるくれェ弱かったかァ？』
…成る程。あの余裕のなさは、本物ではないからか。
胸ぐらを掴まれたフィクサーはというと、何事かをブツブツと呟きながら、かっちゃんの手を振り払った。
「…誤算も誤算、大誤算だ…。彼がここまで至るなんて想定外にも程があるし、なにより経歴が異質すぎる…。日本に…、『彼』の周りには絶対に手出しはしないと決めていたヤ

ツが手を出し始めたのも鎌倉山が割れたあの日からだ…。何なんだ…？何なんだ、このイレギュラーの多さは…!?そもそも、『彼』が科学をヤツを超えてしまうまでに極めていることだって…、いや、『彼ら』がここまで立ち上がって進むこと自体がイレギュラーなんだ…!!誰だ…!?一体全体、誰が『彼ら』を手引きしている…!?」

『……なんか、テメェみてェなパニくり方してんな、アイツ。気色悪ィ』

『…「あの人」の話題って…さ。その、絶対に今後出さないほうがいいよね？』

『頭良いならもォ分かってンだろ態々聞くなやタコ』

手引きって言うより、背中をちょっと押してもらっただけなんだけど。…あなたの教育は、世界を震撼させる敵をもが、舌を巻く結果を運んできたようです、先生。

本人に言えばストレスによってその場で圧死しそうなので、そっと胸にしまっておこう。ついでにそのまま墓場に持っていこう。

先生を示唆する会話は今後控える、と二人して頷くや否や。

偽物のフィクサーの袖口から放たれた光の奔流が、僕らを飲み込もうと迫った。

『グングニル』

『ソル・ノヴァ・ハスタ』

雷と太陽の矛が、光条を貫く。

光が雨のように舞い散る中、僕たちは呆然とする偽物のフィクサーを睨め付けた。

『悪よ、退け。僕がヒーローだ』
『お天道様が赦しても、俺の正義が赦さねェ』
♦？♦？♦？♦？
太陽と雷が世界を隔絶し、全てを拒絶する外で。俺と麗日、そして合流した紲星は立ち往生する他なく、ただソレを見守るだけのカカシになっていた。
プロヒーローらがこちらに来るのがちらほら見えるが、どいつもコイツも近づけないと分かった途端に引き返していく。俺も引き返そうかと迷ったが、あの二人のことだ。戦った後に気絶して水底に沈んでもおかしくない。
「…あの中に突っ込む勇気ある人ー？」
「それ勇気ちゃう。無鉄砲や」
「死にたかったらどうぞ」
「だよな」
流石にこの装備でもタダでは済まないか。
本気で周りが見えてないな、アイツら。一度熱中すると周囲のことに構わず暴れるのは悪い癖だと怒られたばかりだと言うのに。
帰ったらまた説教食らうな、と思いつつ、隔たれた世界へと目を向ける。
…連携が巧い。幼馴染として、いつも近くにいたからだろうか。言葉を交わさずと

も、何をするか、どう動くか分かっている動きだ。
爆豪は兎に角、緑谷は俺らン中で1番身体が出来上がってない。あんな動きをすれば、全身の骨はひしゃげ、内臓はいくつか傷つくだろう。それだけでなく、雷の副作用で肌が焦げると言う、自分への負担を完全無視した装備なのだ。
それで苦悶の声ひとつあげないとは、緑谷らしい。
戦慄にも似た感心を抱いていると、何度目かの通信が入った。
『轟先輩、一大事です』
「……今度はなんだ？爆豪と戦った奴が逃げ出したとかか？」
『あ、惜しい。逃げ出したってより、暴走してi・アイランドを出たって言うか…、完全にバケモンになってたって言うか…』
と。東北のまごつく言葉の先を聞く暇もなく、俺は視界の端にあるものを見つけた。
「……なあ、おい。あの影…、すごーく見覚えがあンだが？」
『あ、はい。キュリオスのアレと同じヤツですね。多分、数倍凶暴でいて強い』
波荒れ狂う海に潜む、巨大な影。
それが海を持ち上げ、その姿を現すのを前に、俺は二人に視線を向けた。
『…サナイ、ゆる、サ、N@イ…!!』
『否定スルな…!!私たちを、否定、するなァァァ…!!』

「何がなんでも、二人の邪魔させんなよ。とばっちりで太平洋が干上がるぞ」
「……いや、デカ過ぎん？」
　海から飛び出した巨体を前に、麗日の口元が引き攣る。町一つを覆い尽くしたキュリオスの時よりも、二、三倍は巨大だ。コレを爆豪と緑谷抜きでなんとかしろなんて、クソゲーにも程がある。
「未来じゃ一回り小さい方です。それこそ羽虫のようにあちこちで見ますよ、アイツ」
「この時代に産んでくれてありがとう、お母ちゃん」
「麗日、しっかりしろ。俺らが相手してんのはアレを何匹も作れるバケモンだぞ」
「そうやった…」
　未来にはうじゃうじゃ居るのか、アレ。…戦時中だもんな。そりゃあ居るか。
　…俺もアイツらに習って、決め台詞の一つや二つ言ってみようか。
「俺の『矛盾』が、お前の悪をブチ壊す」
「宇宙に轟くウチの拳が、アンタを裁く星の名や」
「平和な未来は、その残穢すら赦さない」
　…ノせてきやがった。前々から考えてたんだな、と思いつつ、それぞれ臨戦態勢に入る。
　海すら覆い尽くそうとする二つの影の背に、太陽が炸裂する。

『ああAあ@アっ!!ニくい、ニクいにクい憎い憎い憎イ!!あの太陽ノ輝キがァァァァァァァァァァァァ消してやる消してやる消してやるゥゥゥゥゥゥゥ一片たりとも残さずこの世から消してやるゥゥゥゥゥァァァォォォォォォォォォォォォッッッ!!!!!』

癇癪を起こした子供のような、悲しみや悔しさ、怒りが入り乱れた!!咆哮が太陽の残穢を薙ぎ払い、闇が垣間見える空を取り戻す。

爆豪と緑谷に、余程酷くやられたのだろう。プロヒーローたちをも歯牙にかけず、ただ真っ直ぐにアイツらへと向かっていく。それだけで波が荒れ狂い、転覆する船すら出てきそうだ。

流石にそんな状況を放置して逸楽に浸る趣味はないが、俺にはどうすることもできない。

麗日や紲星に頼もうにも、プロヒーローがこぞってあのバケモノに立ち向かおうとしてる時点で、それも難しい。定点攻撃は、あそこまでの巨体になると、急所に当てなければまず無意味だ。

かといって、下手に放置もできない。これ以上緑谷たちに負担をかければ、間違いなく太平洋が消し飛ぶ。

「さーて、決め台詞言ってみたものの、どーしたモンか」

「考えナシやったん!?」

「違ェよ、取れる選択肢が一つも浮かばねェほどに少ねェんだ」
「…未来だったら、なりふり構わずまとめて吹き飛ばすんですけどねぇ」
「俺も泥花じゃそォしたんだが、今の状況だと絶対に犠牲者が出るから無理だな。…あと、単純にデカ過ぎる。半分も削れないだろ」
「……大陸ごと吹っ飛ばしていいなら、私がやるんですけどねぇ」
俺たちがそんなことを考えていると、ふと、月明かりが何かに反射されるのが見えた。
何か、嫌な予感がする。プロヒーローがバケモノにデカい一撃を喰らわせようと、光を溜め始める。
同時に、彼の目の前に、あの光を反射する物体が集まりつつあった。
「やめっ…」
俺が制止すべく声を張り上げるも、既に遅すぎた。放たれた光が、真っ直ぐに化け物へと向かっていく。
同時に、その光と同等のソレが、四方八方から船に目掛けて放たれた。
原理はなんとなくわかったが、出鱈目もここまでいくといっそ笑いが込み上げてくる。いや、笑ってる場合じゃない。あのままだと、船ごと消し炭になる。
俺は船を覆い包むように氷を発生させ、光を防ぐ。と、バケモノがその歪な四つの瞳を、こちらへと向けた。

『『邪魔、邪魔、邪魔ァァァァ…!!光、光ィ…、あの星が、憎いィイイイ…!!』

どうやら、完全にターゲットとして認識されたようだ。それと同時に、プロヒーローたちの視線が一斉にこちらに集まるのを感じる。

咄嗟に氷を使ってしまったが、どうやって個性を誤魔化そうか。

「き、キズナだ!!キズナが仲間を引き連れて来たぞ!!」

「くそっ、こんな時に…!!」

最悪の誤解されてる。

いや、世間的にはコイツ敵だから、誤解でもなんでもないんだが。ＳＡＶＥＲとセットって考えてる輩もチラホラいるが、今の状況だと緑谷は横から参戦なんて出来るわけがない。

プロヒーローがどちらを優先すべきかを討論する間にも、バケモノの体表を光を反射する物体…鏡が覆い尽くす。

…さっきの光景を見るに、おそらく粗方の攻撃を増幅して反撃してくるのだろう。俺のメドローア擬きで漸くダメージが通るくらいじゃなかろうか。

『お姉ちゃん、お姉ちゃん、お姉ちゃん…？お姉ちゃん…、待って…、待ってよ…、置いていかないでよぉ…』

『姉さん…、姉さん…、なんで、なんでそっちにいるの…？そんな忌々しい光の中へなん

て行かないで…』

最悪のカミングアウトが、最悪のタイミングで放たれた。

プロヒーローの一部が絶望に顔を歪め、一部が忌々しげに紲星とバケモノを睨む。状況がややこし過ぎる。

俺たちに向けて放たれる鏡のかけらを避けながら、麗日が俺に通信を送ってきた。

『いやマジでどうするん!?ウチら下手に動けんのやけど!?』

『うるせェ、通信で叫ぶな。…転移装置で送り返してェトコだが、浮遊監獄か浮遊大陸にしか送れねーって緑谷が言ってたな…。

プロヒーロー、まとめて監獄に送り込むか?アソコなら催眠ガスもあるし、邪魔されねーだろ』

プロヒーローがやけを起こしたのか、それとも勇気によって奮い立ったのか、果敢にバケモノや紲星へと向かっていく。

紲星はあしらい慣れてるから加減はするだろうが、前者は別だ。最悪、死者が出る。

俺の提案を聞いてか、東北からも通信が入った。

『名案って言いたいですけど、ビーコンなきゃ無理な』

『だいじょーぶだよー!!』

と。ヒメが元気よく東北の言葉を遮る。

俺がその言葉の意味を理解する暇もなく、空から梅の花吹雪が舞い降りた。
プロヒーローたちがソレに訝しげな表情を浮かべる暇もなく、その姿が花が織りなす嵐の中へと消えていく。やがて嵐が収まると、船は一隻残らず消えていた。
『あ、転送できました。ヒメちゃんたち、こんなこと出来たんですね』
『…と言っても、葵さんが研究してた個性因子のデータを私が無理矢理頭に詰め込んだだけだからねー…。多分、もう出来ない…。
ヒメは提案者のくせして爆睡してたから、微塵も理解してないと思うけど…』
「いや、助かった。これで容赦しなくて済む」
あとでご褒美でも買ってやるか。…何がいいかは、本人たちに聞くとしよう。
そんなことを考えながら、掌に全意識を集中させ、力を練り上げる。範囲攻撃が可能になった今、手加減する必要は一切ない。
力は混ざり合い、掌の中にあらゆるものを消し飛ばす『矛盾』が生まれる。
…ただ、手加減せずに放ったところで、全部消し飛ばせるかと言えば、それは別問題である。せいぜい、半分が限界だろう。
麗日たちもそれが分かっているのか、俺に視線を向けた。
「…麗日。俺がブッパした後傷口に爆弾投げ込むとか出来るか？」
「考えることがエグいわ…。装備の中に爆弾があったし、いけるで」

「私は何すればいいですか?あ、攻撃だと加減できずに巻き込むので、ソレ以外で」
「わーってるよ。いつも通り、サポートに回ってくれ。具体的には流れ弾の処理頼む」
「はーい」
泥花市の破壊は…正直、爽快感のかけらもなかった。むしろ「ここまで壊して大丈夫なんだろうか」と心配になったほどだ。破壊は少なく済む方がずっといい。
そんなことを考えながら、俺は掌に生まれた『矛盾』を増幅させていく。
麗日たちも所定の位置に着いた。後は、この『矛盾』を更に大きくするだけだ。
その唸りを聞いてか、バケモノが俺に向けて鏡のかけらを散弾銃の如く放つ。直撃はしないものの、放たれた弾丸は霧散することなく、俺の周りに止まった。
先程の光景を見て、俺の技がコピーされないと思うほど、俺は馬鹿ではない。なら、どうするか。
「…緑谷に感謝、だな」
スーツの演算機能に任せる。本来であれば、攻撃がどう作用するか、被害を計算する機能なのだが、応用すれば相手がどうやって反射してくるかを計算することができる。
そして、鏡の性質上、そう難しい動きは出来ないことは、緑谷との交戦データと先程の反射で分かっている。
相手の知能面がほぼ死んでるのは幸いだ。

割り出した軌道に沿って、鏡が反応しきれない程の速度で移動し、限界を超えた『矛盾』を構える。

「いい加減、名前抜きじゃカッコ付かないんでな」

――――『アブソリュート・パラドクス』。

究極の矛盾。

忌々しい父と、愛しい母から受け継いだ二つを合わせた俺の切り札であり、俺という存在の象徴たる技。

形容し難い力の嵐が、バケモノの体を包み込む。同時に、幾重もの鏡から同じ威力の嵐が放たれ、互いに打ち消し合う。

予測通り、こっちへの被害をゼロにできた。紲星の負担はこれで少しは減っただろうか。

『っ、ぐぅうう…!!退いて、退いてよ…、私を否定されたままで、このまま終わりたくないの…!!』

『まだ、まだ、まだ…、まだなの…!終われない…!!』

「…誰だってそォだろォがよ」

轟音が止むと、大きく抉れたバケモノの体躯が露わになる。

と。そこへ、凄まじい速度で飛来する流星群が着弾した。

「『ミイイイイイティアアアア!!レイイイイイイイイイイン』!!」
麗日が放つ流星群が、抉れた傷口を更に抉りにかかる。爆炎舞い散る傷口へと、麗日は投擲を繰り返しながら近づいていく。
その肩は、おそらく数回、壊れてる。決死の表情で肉塊を掘り進め、本体を引き摺り出そうとしているのだろう。ダメ押しにもう一発、と行きたいが、放てば確実に麗日に反射される。
なら、取れる選択肢はひとつだけ。
爆炎纏う舞姫の後ろ姿を、俺は全速力で追いかける。煙炎を切り裂き、風を薙ぎ払う。2ヶ月前の俺とは違う。体術だけじゃない。自分で何が出来るかも考えてきた。
爆豪たちと同じ場所に立てるとは思わねェ。なら、別の方法で並ぶだけだ。
「うっすらと…、『矛盾』を『纏う』…!」
これが、師匠に勝つために俺が編み出し、たどり着いた場所。スーツ越しじゃなきゃ、体がエネルギーに壊されるせいでマトモに使えたモンじゃないが、今なら使える。
全身の皮膚が喧嘩するように、引き裂くような痛みが駆け巡る。元々左右で分けられてたモンを無理矢理に一つに合わせているのだ。喧嘩しても仕方がない。それに、これより痛い思いなんざ、死ぬほどしてる。
「麗日…っ、まだっ…、やれるな!?」

「もぢ…っ、ろォん!!」

二人して喉が擦り潰れんばかりの咆哮を上げ、再生する肉塊を削り取っていく。

周りは紲星がカバーしてくれる。俺たちは、ただ一心不乱にこいつを削り切ることを考えればいい。

コイツの再生は、いつも傷口からだった。ならば、傷口から再生を超える速度で削っていけば、いつかは無くなる。

『二人の師匠』に扱かれた俺たちには、ソレが出来るだけの力はあるはず…いや、そんな確証なんていらない。意地でも削り取らなければ、コイツらは世界を害する。

『なぜ、なぜ、なぜ…、私を悪と言ってくれないの…?なぜ、誰も…、私を肯定してくれないの…?』

『お願いだから、一度でも…、私のことを、悪と認めて…。お父さんの娘なんだって、認めさせて…』

…成る程。矜持が緑谷たちにへし折られて暴走したのか。

息を吐き、吸い込む。削りながらでいい。

言葉を使え。俺たちがこれまでで見つけた生き方を、そのままぶつけてやれ。

「言葉一つで揺らいでる時点で、テメェらは何者でもねェ!!

そんな生半可な状態で、テメェらの何を肯定しろってんだァァアッッッ!!!!」

「お父さんお父さんって五月蝿いわ!!アンタの人生はアンタの人生やろォが!!!
自分の生き方くらい、自分で決めろやァァァァァァァァァァァァッッッ!!!!!」
最後の一撃が、バケモノを穿つ。
残った人影二つを受け止めると共に、雷纏う太陽が炸裂した。
「……ったく。ガキ共の説教は疲れるな」
「ウチらが言えた話か?」
「……いや。俺らもガキだったか」
雷纏う太陽が霧散すると、水平線の向こうから、眩い太陽が顔を出す。
太陽を背負い、絶対悪と対峙するアイツらに目を向ける。…まだ、遠いか。
「次は追いつこうな、麗日」
「ん」
♦?♦?♦?♦?
なんと眩しいのだろうか。
私は目の前の光景に心奪われ、ただの傍観者と化していた。
偽物とはいえ、フィクサーの名を冠する強大な存在。それを圧倒する、二人のヒーロー。
正確にはヒーローではないが、その在り方は、平和の象徴とまで呼ばれた私…オール

マイトを惹きつけてならなかった。
「くそ…っ！お前たちは、何故…、なぜ、その力に溺れない…!!
何故、そこまで真っ直ぐに…!!」
『溺れてる暇はねェんだよ…!!
俺らが生きてるこの世界は、中途半端に強ェだけじゃ、力に酔うことどころか、少し立ち止まることすら許してくれねェ…!!』
『それだけで、誰かが涙を流す…!!
僕たちが築き上げてきたこの力は、その涙を拭うためにあるってことを、僕たちは知っているから…!!』
この二人ならば、もしかして。
苦悶の声ひとつあげず、無茶な動きを繰り返す彼らが、眩しく見える。
まるで、煌々と輝く恒星のように。世界を塗りつぶす黒を、光で染め上げていく。
『『だから、何度だろうと立ち上がって、前に進む!!全部背負って前に進むだけの強さは、とうの昔に仲間から貰っている!!』』
…そうか。私も、背負えばよかったのか。
偽物のフィクサーが、必死の形相で彼らに迫る。ソレに向けて、二人が叫ぶ。
『その強さがテメェ如きに砕けるかよ!!』

『その強さがお前如きに砕けるか!!』

太陽と雷が重なり合い、偽物のフィクサーを包み込む。

全てが終わる頃には、彼らは夜明けを背負っていた。

登る朝日

太陽の残穢が消えたことを確認し、脱力する。
逃げられた。しかも、トドメの直前に。ワープでも使ったのか、ソレとも別の方法があったのか。
何かは分からないが、その手際の良さには覚えがあった。
『……トドメの直前に逃げられた。本物のフィクサーが回収したんだろうね』
『……おい。口調、いいのか？だいぶ前から崩れてっぞ』
『あ〟』
やっば。あれ？オールマイト、すぐそばにいなかったっけ？
…ん？あの、もしかしなくてもヤバい？かっちゃんも口調はもう諦めたのか、普通に喋ってるけど…、ヤバいよねコレ絶対。
どうしよう。変な汗が出てきた。僕はオールマイトに向き直ると、早口で捲し立て、さらに上空に飛び立つ。
『……悪は去ったさらばっ!!』
『おいコラ置いてくなクソ…野郎!!』

「ま、待ってくれ!!」
『すまん待てん!!』
今『デク』って言いかけたな。
身バレの危機を防ぐために、とっととこの場は去るに限る。
…そういえば、さっきの子たちは大丈夫かな。偽物のフィクサーと戦ってる時、ちょっと声が聞こえたから気になったけど。
僕は別に悪を滅したい訳じゃない。誰もが悪にならずに済む世界が欲しいんだ。
悪を望む彼女たちには悪いだろうけど、新しい生き方を見つけてくれたら、嬉しい。
そんなことを考えていると、轟くんから通信が入る。
『おい、緑谷』
『あ、轟くん。大丈夫だった?』
『すまねェ、しくった。フィクサーが横からあのガキ共掻っ攫いやがった。
…ヤツのことだ。まだ利用価値があるとか思ってンだろォな』
『……そっか。次会う時には、足を洗ってくれてたら嬉しかったんだけど』
いつだって、現実は非情だ。
世の中の理不尽が、あらゆる理想を無差別に壊していく。無個性だから、中学生だから、無力だから。あらゆる理由で、夢も希望も奪い続けていく。

奪われるたびに強くならなきゃ、この世界はマトモに歩くことさえ許してくれない。強くならなきゃ、諦めるしかできないのだから。
僕はヒーローとして、誰かの『強くなるキッカケ』になりたい。
…なりたいもの、欲しいものばかりだ。
『……僕って本当に欲張りだなぁ』
『欲張りで何が悪ィ。ヒーローになるンだ。
世界一欲張りなくらいが丁度いい』
『……ホント、敵わないなぁ』
『たりめーだろォが。一生追いつかせるか、バーカ』
…本当に、この幼馴染には敵わない。
取り敢えずはｉ・アイランドに帰って、祝勝会かな。
僕が晴れ晴れとした気持ちで空を舞っていると、その気分をぶち壊しにする一言が放たれた。
『あ。そうだった、緑谷先輩。
適当に監獄にブチ込んだプロヒーロー、ｉ・アイランドに戻しておいてくださいね』
『おい今なんつった???』
♦？♦？♦？♦？

「…私の出る幕もなかったわね。残念」
「出る気すらない人が何言ってんだか」
皆がｉ・アイランドの復旧を急ぐ最中。僕たちはあくびを噛み殺しながら、指定された避難所にて荷物番をしていた。日本人に当たりが強い世の中になってしまったが、流石にこんな状況で誰かを責める気にもなれないのか、避難してきた人間は揃っておとなしい。
Ｆｌｏｗｅｒはプロヒーローたちを取り仕切り、死傷者がいないかを確認している。一夜を死闘で明かしたというのに、ヒーローというのは元気なものだ。
「…やっぱり、不安だったんでしょうね。ぐっすり寝てるわね、この子たち」
「東北さんも、緑谷くんに言いたいことだけ言って寝てしまいましたからね。こうも強がってばかりだと、少し心配になります」
「あら？それをコウくんが言うの？」
くすくすと笑い、僕の顔を覗き込む彼女。
確かに、僕が言えた話ではない。特に、とびっきり弱いくせに、強がりな僕にはとても。
僕が同じく笑みを浮かべると、視界の奥に、ある人影を見つける。五体満足だけど、相当疲れたらしい。

千鳥足にも似た、おぼつかない足取りを互いに支えるようにして、こちらに向かう四つの人影。そこには、僕の生徒たちが居た。
「……先生。依頼は果たしたぞ…」
「ありがとうございます」
「…ま、頼まれなくてもやって…た…」
「も…、戻すの、疲れた……」
爆豪くんが青い顔しながらも、相変わらずの強がりで、笑みを浮かべる。それだけで言いたいことは終わったのか、彼はその場に倒れ込んだ。
支えてた緑谷くんもまた、この事件が終わったことに安堵したのか、同じくその場に倒れた。
「…相当激戦だった、からな…。…俺らも、ちっと眠イ…。悪イけど、土産話は後にして、寝かせ…、てく……」
「ええ。子供は寝るのも仕事ですからね」
「……なんやいな…。ウチら、赤ん坊と…、ちが…んぅう…」
轟くんたちも同じように、泥のように眠り始める。彼らの激戦を、この場のほとんどの人間は知らないだろうし、称賛することもないだろう。
だけど、彼らを知る僕たちだけは、今しばらく、この子たちの見守ってあげよう。今

の彼らはヒーローもクソもない、ただの小・中学生の集まりなのだから。
「怪物の討伐に向かったヒーローが、一塊になって急に現れただって!?
お前、夜通し戦っていたからって寝ぼけているのか!?」
「いや、本当なんですって!!なんか、急にブワーって現れて!!」
……前言撤回。叩き起こそうかな、コイツら。
最後の最後まで、面倒ごとを追加するのを忘れないのは何なのだろうか。僕をストレスで圧殺する気なのか?
そんなことを考えても、今年の夏休みの時点でもう手遅れだと分かっているので、諦めることにする。バレる時はバレるって精神で開き直ればいいかな。
「……こーやって寝てると、普通の子供たちなんですけどねぇ」
「人間寝れば、誰だって普通よ」
「寝室にマーダートラップ仕掛けるような人が何か言ってる」
「今日も寝かせない方がいいかしら?」
「勘弁してください」
冗談よ、と付け足し、大きく口を開いてあくびをする彼女。どうやら、それなりに疲れてはいたらしい。それもそうか、と思いつつ、僕は膝を手で叩く。
「別に、寝てもいいですよ」

「こんな公衆の面前で、そんなみっともない真似しないわよ」
「そうですか」
僕たちがそれだけ言葉を交わしていると、軽く寝ていたセイカさんが目を覚ます。
彼女は切島くん、Ｆｌｏｗｅｒと協力して戦っていたと聞いたし、もう少し寝ていた方がいい気がするのだが。それに、変にドジ踏まれて惨事を起こして欲しくない。
寝ぼけ眼を擦りながら、起き上がり、状況の整理をつけるために周りを見渡す。
「おはよぉございまぁす…。おくさーん、変わりますよぉ～…」
「大丈夫よ。私は慣れて…」
公衆の面前で寝ることに抵抗があるつづみさんは、咄嗟に断ろうとしたが、僕がソレを遮った。
「君もヒーロー志望組と同じく、自分を許すのが下手ですね。師匠が弟子に似てどうするんですか」
「……なら、お言葉に甘えるわ」
ぽふん、と僕の膝に頭を預け、寝息を立てる彼女。マーダートラップの類を仕掛けないと安眠できないタチだと豪語している割には、随分と無防備な姿である。
…単に僕を信頼しているのか、それとも狸寝入りしているのか。僕にはその判別はつかないものの、彼女のとまり木として、安息のひと時を過ごしてもらえるなら、それで

いい。
僕が眠る彼女の頭を撫でていると、ふと、荷物番をしているセイカさんの瞳が、何度か切島くんへと向けられるのが見えた。
「どうかしましたか？」
「…その、お礼を言いたくって」
「……切島くんは自分に向けられた結果と、周りの声を素直に受け止める子です。
礼の言葉は、彼にとって糧となるように選ぶべきです。彼はまだ幼いんですから」
「……はい」
セイカさんには年がら年中、「正しい言葉を選ぶコツ」を学ばせているから、問題はないと思うが。
慌ただしくヒーローたちが動く光景の中、僕は太陽を見上げた。
「…帰国手続き、今日中にできますかね？」
「……毎度いい雰囲気台無しにするの、呪いか何かですか？」
♦？♦？♦？♦？
拠点に向けて、空を駆ける。
太陽が彩る青空から逃げるような、みっともない敗走。
三人が敗北感に打ちひしがれている中で、横槍を入れた張本人は、笑みを浮かべる。

ただ、そこに込められていたのは、自らをも欺く邪悪ではない。普通の笑い方すらも忘れてしまったがための、歪な笑み。そこにあったのは、絶望の最中、ようやく希望を見出したような、安堵だった。

「…何故、止めた…？アレを野放しにするなんて、お前、自分が何をしてるか…？」

「……少なくとも、『あの彼』は違うことはない。

なぁ、『ブラックボックス』。『僕』のくせに、彼のことを信じられないのか？」

「……」

知っている。知っているが、万が一を考えずにはいられない。

何より、これまで「確実」を重視してきたこの男が、運否天賦に身を任せることの異常さも相まって、どうしても不安になってしまうのだ。この不安は、根本の排除を為さねば、一生取り除けない。

その心境すら、目の前の男には筒抜けだろう。不安が突き動かすがままに行動すれば、待っているのは絶対悪の怒りだけ。

この男の強大さを知り、その一部を託されたからこそ、ブラックボックスは押し黙る。

「…で、その娘たちはどうするつもりだ？処分するのか？」

「……一定の成果は出せたからね。もう少しだけ、生かしておくよ」

男はくっくっくっ、と喉を鳴らす。先程の歪な笑みはもう無く、いつもの不敵な笑み

が、その顔に張り付いていた。

「…ようやく、終わりが見えた。世界のために、頑張ってくれよ。至上の英雄たち」

番外編

番外編：優雅？な朝食　その一

「……ねむ」

水奈瀬コウの朝は、歯磨きから始まる。

寝起きの口内は、とてつも無く汚い。

これは科学的に証明されており、一説によれば便器よりも菌が付着し、汚れているとか。

神経質なコウはこれを気にして、研磨剤を付けた歯磨き粉で菌を流し、さらにもう一度磨くことで汚れを完全に取る。

人前に出る職である以上、歯は第一印象に繋がる。

水奈瀬コウの教師としての人生に、妥協の二文字はないのだ。

「…いつ妊娠してもおかしくありませんね、あの様子じゃ」

昨晩の貪り合いを思い返しながら、コウはシャワーを浴びる。

妻に貪られた痕をどう隠そうか、と悩みながら浴びる温水が、欲望の痕を流していく。

ソレが終わると、冷蔵庫から作り置きしていたサラダと、卵、ベーコンを取り出す。

水奈瀬家の朝食は、非常に簡素だ。
ベーコンエッグとサラダ、そして食パン。
ベーコンの油がフライパンの熱で弾け、食欲をそそる香りを漂わせる。
それにつられたのか、寝ぼけ眼を擦る、半裸の妻…鈴木つづみが姿を現した。
「こーくん、おはよ……」
「はい、おはようございます。歯を磨いてしまいなさい」
「ん……」
あくびを噛み殺すこともせず、洗面所へと向かう彼女を送る。
これなら普通の夫婦である。
……そう。これだけなら。
「つづみさん、廊下のマーダートラップを解除しなさい。
セイカさん起きたら、僕ら殺人犯ですよ」
「えー…。今更じゃ…」
「ベーコン減らしますよ」
「わかった」
瞬間。つづみは風になって、全てのトラップを解除する。
異様な光景であるが、水奈瀬家ではごくごく普通のことである。

♦？♦？♦？♦？

音街家の食事は、武力無き戦争である。

おかずの取り合いなどではなく、期待される婿と、ウナの父との会話。

ただの一言でも、そこに油断が込められてはいけないのだ。

「……で。修行は順調かな？」

「ええ、おかげさまで。これも、お義父様の協力あってのことです」

「そうか、それは良かった」

この言葉を放ったのは、悪名高い、あの爆豪勝己である。

口調は最悪、性格はもっと最悪。

下水でクソを煮込みに煮込んだような性格とまで評された、唯我独尊を素で行く男。

多少は改善されたものの、根本的な部分は変わってないため、秘密結社『一等星』のメンバーにはこっ酷く弄られていた。

今のこの態度も、ケツを叩かれ、ケツの皮を剥いてまで手に入れた外面である。

が。その外面は、今まさに崩れ去ろうとしていた。

「オムレツでございます」

「ありがとうございます、小春さん」

小春六花、と言う名のメイド…音街家に代々使えているらしい…に、礼を言い、爆豪

は唾を飲み込む。
（このオムレツ、ケチャップまで自家製…しかも作りたてのホカホカじゃねェか…!!
　このアマっ、今日が大事な対談の日だって分かってて、クソみてェに美味ェメシ用意してやがんなクソがァ…!!）
（へーんだっ！昇天してポカやらかせやクソ煮込み!!ウナお嬢様奪われたオレのささやかな復讐を受けてみろってんだこの…名前思い出せねェけど、パムパムの実の能力者!!!あれみてェに禿げろバァァァーーーーーーーーカッッッ!!!）
　と。こんな調子で、両者は仲が非常に悪かった。
　それはそれはもう、ウナの見ていないところでは、我々であれば骨全てが叩き割られたのかと思うほどに腰がガクガクになる罵詈雑言が飛び交う。
　しかし、この場でそれをする愚行は、両者とも見せない。
　ウナの父は、戦闘力こそないものの、纏う気品と気迫は一級品。
　婿に入る爆豪としても、雇われの身である小春にしても、彼を怒らせることの恐ろしさを、魂に刻んでいた。
「しかし、君には驚かされてばかりだよ。
　まさか異能解放軍まで下してしまうとは」
「いえ。その直後に、フィクサーに負けてしまいましたので…。

頂点までの道のりは遠い、と、現実の厳しさを学びました」

爆豪は言うと、オムレツを口に運ぶ。

瞬間。まるで羽毛のような、体験したことのないふんわりとした食感が、卵の旨味、そしてケチャップのさっぱりとした酸味とコクと共に炸裂した。

(ぐぁぁぁあああああっっっ!!!

くそッ、なんて美味ェんだ畜生…っ!!普通だったら叫ぶほど美味ェ…!!あのクソ教師の買う高級卵より美味えってなんだよ材料全部安物だったろォが!!!

まずい、まずいまずいまずい…っ!!フィクサーん時よりまずい…!!美味すぎて話が耳に入ってこねェぞくそッ!!

あンのクソアマァァァァァ……!!!)

爆豪が流し目で小春を睨む。

と、隣に座るウナが勘違いしたのか、爆豪に向けて軽く手を振った。

爆豪もまた、軽く手を振り返すことで、なんとか誤魔化す。

(ザマァ味噌カツ♪あの『情報』が正しければ、次は…)

と、小春が内心で喜んでいると。

ウナの父が、慌てて何かを探し始めるように、視線を下の方に向け、血眼になって視線のみを動かした。

（やばい…っ!!カンペ無くしたぞ…!?
　爆豪くんに聞かなきゃならないことが詰まったメモが…!!もしや、テーブルクロスの中に入ったのか…!?）
　そう。彼もまた、戦っていたのである。
　自分の威厳を損なわぬよう、必死になって用意したカンペ。
　無論、使用人たちにはそれがバレているのだが、バレていないと思っている彼は、ダラダラと冷や汗を流す。
「…さ、最近は、どうなんだい…？」
（な、何イイイイイイイっ!?!?!?）
　予定とは違う質問に、慄く小春。
　彼女は一つ、計算に入れ忘れていた。
　ウナの父がカンペを無くしてしまうという可能性を。
　オムレツを食べていた爆豪は、一瞬だけ勝ち誇った笑みを浮かべたのち、爽やかな笑みを浮かべた。
「厄介ごとには巻き込まれますが、充実した生活を送れています」
「そうか。なら良かった」
　空になった皿を前に、一息。

爆豪はバレないように嘲笑を込め、小春を一瞥する。
結局のところ、カンペは見えない位置に行ってしまい、小春の思惑は全て外れることとなった。
（どうやら狙いは外れたようだな…!!
ザマァみやがれってんだこのクソアマが!!!）
（ちっ…!まさか旦那様がポカやらかすとは…!!だが、オレぁまだ諦めちゃいねェぞジェノサイドボンバーマン!!!）
（カンペ、どこ行ったんだろ？）
音街家の朝食は、婿が来る日のみ、戦争が起きている。
大抵はこのように、ウナの父によってかき乱されてしまうが。
「ご飯、美味しいね！バクゴーさん！
小春ちゃんも、ありがとう！」
「おォ…。このく…、小春のメシは美味えな」
「オレ…んんっ。わたしには勿体なきお言葉です、お嬢様に若旦那様」
（コイツの褒め言葉気持ち悪ッ!!名前でオレのこと呼ぶんじゃねェ殺すぞこのタンポポ頭!!!）
（わたしィ!?カマトトぶってんじゃねェぞこのヤンキーメイド!!今ここで化けの皮ひっ

ぺがえしてやろうか!!???)
(バクゴーさん、ずっと小春ちゃんと見つめ合ってる…。
も、もしかして、知らない間に、そそそ、そ、そそっ、そう言う関係になっちゃったの…!?)
純真なウナは、二人は仲がいいと思い込んでいるのであった。
♦?♦?♦?♦?
その頃、緑谷家では。
「おかーさん、おかわりー!」
「はーい!ホント、炊飯器がいくらあっても足りないわぁ」
「僕が作った発電機とプランター、どう?」
「電気代の節約になるわね!野菜代も節約できるわぁ…」
オーバーテクノロジーがここぞとばかりに活躍していた。

外伝：クソ個性を慰めようの会

「ああ、いたいた。ようやく見つけたぞ、緑谷くん」

「あ、葵さん。こっち来てたんですか」

正月ムードの抜けない一月後半。

皆で残った餅を囲み、おろしポン酢やらきな粉やら醤油やらで消費していたところ、葵さんが顔を出す。

ｉ・アイランドの復興はいいのか、と些か疑問が湧いてくるが、彼女はクリスマスをろくに休めなかったのだ。今だけでも休んでくれた方が、こちらとしても安心する。

葵さんを空いた席に座るよう促し、皿を渡す。

浮遊大陸『北斗七星』の管理室が、名ばかりの宴会場と化しているこの現状。開発者として思うところはあるが、気にしないことにした。

「餅か…。アメリカ暮らしが長いと、正月終わり定番の餅の残りが懐かしく感じるな」

「もう結構の間、向こうでしょ？

スターアンドストライプのデビュー戦を生で見たことがあるって、酒の席で自慢してたと先生に聞きましたよ」

「「聞かせろ」」
「食いつき早ェな、お前ら…」
新参者の切島くんが、アメリカのトップヒーローの名にめざとく反応する轟くんとかっちゃんを半目で見やる。
葵さんはというと、「茜に聞け」と話題を姉に投げ飛ばし、僕に向き直った。
「緑谷くん。実は今日、ここに来たのは他でもない。君にしかできない、重大な頼みがあるんだ」
「えっ…？」
もしや、人工個性繋がりだろうか。
僕が戦慄に身を震わせていると、葵さんは凄まじい勢いで頭を下げた。
「私の代わりに、『クソ個性を慰めようの会』に出て欲しい!!」
「……は？」
♦？♦？♦？♦？
「では、第７１回『クソ個性を慰めようの会』を始める!!」
復興途中のｉ・アイランドにて。
とあるビルの一室を貸切にした張本人…この集会の元締めであるアメリカ大統領が音頭を取り、会場に歓声が巻き起こる。

そんな中、明らかに場違いな僕は、本来葵さんが座るべき、「アドバイザー」の席に座していた。

「今回、アオイ・コトノハ女史は日本で用事があるらしく、彼女の弟子だという将来有望な科学者…Ｍｒ．ミドリヤに来てもらった!!

アオイ女史が一目置くその発想力で、我々のようなクソ個性に生きる希望を与えてくれることだろう!!」

「……よ、よろしく」

大統領のは慰めようがないくらいクソなのだが。自分の毛根の死滅具合がわかるという、希望もクソもない個性をどう慰めろと。

参加者もそこそこ多く、アメリカ大統領が主催する会にしては、敷居が低いらしい。世の中にはここまでクソ個性がいるのか。

そんなことを考えていると、大統領が参加者の紹介を開始した。

「では、まずは初参加のミドリヤのために、自己紹介から始めよう！

彼と同じ日本人、Ｍｒｓ．ハナムラ!!同じく初参加だ!!」

「出向してるサラリーマン、開発部です。会社はアロマを開発してます。

個性は『ハナクソの香』。ハナクソの香りが操れます」

誰だこの個性に名前つけたやつ!?

ってか、今日本人に風当たり強いのによくｉ・アイランドに入れたな!?

引き攣る表情筋をなんとか抑えながら、僕は適当に応用案を提案することにする。

「……自分の個性で新商品の方向性を決めることが出来るのでは？」

「生きる希望が湧いてきました!!」

単純!!こんなんでいいのか!?

なかなかにパンチの強い個性がトップバッターだったが、これを超えるクソみたいな個性がひしめき合ってるのだろうか。

個性持ちも大変なんだな、と思いつつ、大統領が呼ぶ次なる刺客を迎え撃つべく、気を引き締める。

「エロに関してはお任せあれ！

生物学界の重鎮であり、アオイ女史の恩師であるエーロ・シコルスキー博士!!」

「エロに関係するものの表紙やパッケージを見るだけで作品全体のシコリティがわかります。お陰でオカズ選びに失敗したことがありません」

改名しろ!!

酷すぎる字面に思わず叫びたくなったが、葵さんの恩師相手にそんな失礼なことはできない。

あとシコリティってなんだ。字面からして下品すぎる。

「…傍にそういう青年誌の編集業でもしたらいかがですか？コアな人気は出ると思いますけど」

「やってみよう」

フットワークが軽い。

僕も人のことが言えた立場ではないが、科学者とはこんなものなのだろうか。

そんな感想を抱く暇もなく、僕の表情筋を破壊する刺客の名が、大統領の口から放たれる。

「若くして日本でバーを経営!!その名も『ビー・バー』!!

飼ってるビーバーが有能すぎて若干影が薄いマスター・オフェリア!!」

「おっぱいを１０秒揺らすと世界のどこかにいる転売ヤーのパンツがズボンごと爆発四散する個性です。お陰で彼氏と夜を過ごすたび、店に並んだご近所さんたちのパンツが爆散して下半身丸出しに」

さっきから思ってたけど、悪ふざけで作ったみたいな個性だな!!

あとそのご近所さん、全員転売ヤーじゃないか!?なんて密度でひしめき合ってるんだ供給足りてるのかそこ!?

取り敢えず、適当に「夜を過ごすたびにご近所さんが更生してるんですからいいんじゃないか」と慰めておいた。

どうしよう。まだ数人しか紹介されてないのに、めちゃくちゃ疲れた。
そんな僕の苦労も知らず、大統領が続くクソ個性の持ち主を呼び出す。
「続いてはイギリストップヒーロー、ｉ・アイランドの英雄『Ｆｌｏｗｅｒ』だ!!」
「やぁ。こないだぶり」
「見知った顔ォーーーッ!?!?!?」
いやまぁ、たしかに「声をガビガビに出来る」とかいう微妙な個性だけども!!
ソレを駆使してきたからこそ、歌姫として人気を得たのだから、そんなにマイナスに見ることないだろ!?
僕が「上手く使えてるのだから、クソとは違うと思う」と指摘すると、Ｆｌｏｗｅｒは満足そうに引っ込んだ。
個性持ちは、無個性には分からない不満を持っているらしい。轟くんたちにも、一度聞いてみよう。
その後も、大統領の紹介は続いた。
揃いも揃って、神様に嫌われてるんじゃないかと思うほどに微妙な個性揃いだったが、大統領のように慰めようもない…正に絶望を体現したような個性はなかったため、僕は相当運がいいのかもしれない。
なんだ「力んだら股間の先からビームが出る。それに当たった果物は美味しくな

る」って。食べる気無くすわ。美味しかったけど。美味しかったけども。それでも股間から出たビームを浴びたって思うと…。

1番わけがわからなかったのは、「ブリッジをしたらヘソから七色のとんでもなく臭いゲルが吹き出す」だった。この世の終わりみたいな臭さしてたぞ。

無駄に眩しかったのも腹が立った。成分を調べてみたけど、あんな臭いしてて汚い成分が一切ないってどういうことだ。意味不明すぎて不安になったぞ、ちくしょう。

葵さんが僕に押し付けた理由がなんとなくわかった。この人たちを相手にするのが疲れるからだ。

そもそも、慰めてもらいたい人間が多いのに、慰める側が僕しかいないってどういうことだ。大統領も慰めてもらいたそうに僕をチラチラと見ていたし。まぁ、慰めたけども。

なかったほうがマシな個性って、実は結構ありふれているのだろうか。

轟くんもしょっちゅう、「こんな個性要らん」ってぼやいていたけど、この人たちほど切実ではなかったと思う。

まぁ、彼は事情が事情なので、比べるのも失礼なのだが。

「では、これが最後の参加者!!これまた初参加!!世界よ、これが象徴だ!!

コンビ復活したオールマイトのパートナー、デヴィット・シールド博士!!」

「指先を柔らかくするくらいの個性です」
「ワ゛ーーーーーーーーッ?!?!?」
こんなクソみたいな集会になんて大物呼び込んでんだ!?!?
…頼んだらサイン…やっぱりやめておこう。博士も疲れ切った顔してる。
そんな煩悩が顔を出しかけるも、こんなおもしろ集団の中にシールド博士がいることへの違和感が勝り、すぐに引っ込んだ。
「……さ、作業で怪我しないって考えたら…」
「う、うん。僕も普段、その用途で使ってるし…。
慰めてもらうつもりはなかったんだけど、大統領に無理矢理連れてこられて…」
「僕は葵さんに押し付けられて…」
「ああ、うん…。お互い、大変だね…」
互いに乾いた笑みを浮かべ、ため息を吐く。
あちらも苦労しているらしい。娘さんが茜さんと付き合ってるし、先生みたく社会に喧嘩を売るなんてことは絶対にしない気質だろうし、その気苦労は止まることを知らない。
僕たちが妙な共感を抱いていると、大統領がとんでもない爆弾を投下した。
「一通り慰めてもらえたところで!!

恒例の『クソ個性ワースト5』をミドリヤくんに決めてもらおう!!」
「イヤだァァァーーーーーッ!!!!」
どう答えても波風立つわ!!正直、どれもどっこいだし!!
葵さんこれが嫌で逃げ出したろ絶対!!
…いや、待て。そもそもクソ個性の定義を聞いてないぞ。
たしかに、万人に聞けば迷わず「クソ」って答えるような個性なんだけど、個性は人によって化ける。優劣をつけるのは違うのではなかろうか。
蜘蛛の糸を掴んだカンダタみたいな気分だ。そんなことを思っていると、大統領が僕に迫る。
「では、ミドリヤのために『クソ個性ワースト5』の評価基準について説明しよう!!
その一、使い所がまっっっっ…たくない!!その二、絶妙に迷惑!!その三、なかったほうがマシ!!
この三つを踏まえて、君が思うワースト5を決めてくれたまえ!!」
「無個性に聞かないでよそこそこ使い所あるやつほとんどだったでしょうがチクショーーーーーッ!!!!」
あの「七色激臭ヘソゲル」も、自衛としては最適って慰めで納得してたよね!?
生まれて初めて無個性に生まれてよかったってホッとしてしまったんだぞちくしょ

う。

よくわからない涙を流しながら叫ぶも、僕の抗議は聞き入れられなかった。

「さあ、決めたまえ!!さあ、さあ!!」

「大統領よりエンターテイナーの方がむいてますよ、絶対…」

そんなことを思いながら、眼前にあるボードに目を向ける。

…正直、個性がない辛さを延々と語ってやりたいが、彼らの方も個性があって苦労した人間の集まりなのだ。価値観の押し付けは違う気がする。

であれば、僕に出来ることは一つ。

「…その、皆さんの個性って、どれも『クソ個性』の定義に当てはまらないものばかりでしたよね？

だって、使い道あるんですもん」

詭弁でこの場から逃れることだ。

皆が動揺する中で、僕は淡々とこれまで紹介された個性について、何かしらの需要があったことを指摘する。

「使い所が全くないのではなく、使い所が微妙にわかりにくいだけだったんです。

自衛に、商品開発に、話のネタ…。

その定義で言えば、この中にクソ個性と呼べるクソ個性は存在しません。そんな中で

ワーストを決めろと言われても、該当者がいなければできません!!」

僕が言い終わると、少しの沈黙の後、拍手が巻き起こる。

皆が僕の言葉に涙ぐむ中、僕は心の中で吐き捨てた。

(もう二度と来るかバーーーーーーーーカッ!!!!)

「では、また来月にお会いしよう!!ミドリヤくん、次回もよろしく頼む!!」

「遠慮します!!」

正月明けの失楽園
ようこそ、東北家へ

正月明け。
大掃除も初詣でも三が日も終わり、惰性で過ごす冬休み終盤。たったの二週間の間の休みに出すにしては量の多い宿題を各々こなしながら、浮遊大陸に備え付けた勉強室でこたつにあたる生徒たち。
その監督役である僕はと言うと、船を漕ぐ切島くんの脳天にハリセンを振り下ろす。
「あだぁっ!?」
「半分も進んでないのに寝ない。間違っていてもいいから手と頭を動かしなさい」
「や、こうも快適だと眠くなるっつーか…。冬休みだしいいかなーって…」
確かに、正月明けやらゴールデンウィーク明けやらは妙にやる気が失せるが、それにしても寝かける頻度が多いのはどうにかしてほしい。
あまり勉学が得意でない麗日さんも、血眼で机に向かっているのだから。…彼女の場合、元々の学力では雄英はまず無理と宣告されたこともあるのだが。
切島くんのそんな態度を見兼ねてか、爆豪くんが軽くその頭を小突いた。

「雄英行くンなら死ぬ気で勉強しろや。
テメェの模試覗いたが、ンだあの結果。今のまま雄英受けてみろ。まず筆記で真っ先に落とされるぞ、テメェ」
「人の心配できる立場なのか、お前…?」
付き合いが浅いと、あまり理知的には見えないだろうが、爆豪くんは一等星の中では緑谷くんに次いで頭脳派である。
切島くんたちには酷な事実だろうが、爆豪くんの名誉のために教えておいてあげよう。
「爆豪くんはこう見えて全国模試3位です」
「ウッソぉ!?この顔で!?!?!!」
「オイ麗日ァ!!なんでテメェまで驚いてんだ誰が今まで勉強の面倒見てやったと思ってんだブッ殺すぞォ!!!!」
「顔から『サバンナの頂点に君臨してそうな野生児』感が滲み出てるしね、かっちゃん」
「ンだとゴラァァァッッッ!!!!」
流石、全国模試一位。余裕の煽りである。
本人は煽ってるつもりはサラサラ無いのだろう、怒号を気に留めず、パソコンとの睨めっこに集中する緑谷くん。

しかし、上から順に緑谷くん、轟くん、爆豪くんの全国模試スリートップがこの一室で勉学に励んでいるこの光景。「世間は狭い」という言葉が具現化しているようだ。
「爆豪が凄ェってのは…、まぁ、ここ数日で思い知ったけどよ。
普段エネルギッシュにキレ散らかしてるせいで、全然理知的には見えねーっつーか…、その、野生動物として出くわした方がまだ違和感ないっつーか…」
「次の訓練覚悟しろよ千回は三途の川に頭から突っ込んでもらうからな」
「望むところ」
「……その威勢の良さだけは好ましいンだがな。ホンット、余計な一言さえなきゃ」
切島くんは、無事に生徒たちのお眼鏡に叶ったようだ。そもそも、折れないだけの覚悟を持ち合わせている人間を、この子たちが邪険に扱うはずがない。彼らの人の好みは、僕によく似ているのだから。
再び机に向かい始めた切島くんを見守っていると、ふと、視界に東北さんが入る。
なにやら携帯を見つめ、しきりにため息を吐いている。ため息を吐くと幸運が逃げると言うが、今年分の幸運を使い果たす勢いでため息を吐く彼女。
その様子に気づいた緑谷くんが、「どうかしたの?」と問うと、咄嗟に携帯を隠しかけて、即座に諦めた。
「生家に帰るのをすっかり忘れてました」

「……きりちゃん、生まれ静岡やないん？」
「きりちゃんは籍は静岡だけど、生家は名前通り東北なんだよ」
「ええ。閉鎖的な集落生まれなんです。
昔、ちょーっと揉め事があって、タコ姉様とずん姉様と幼い私とで家を出ました」
揉め事と言うと、無個性という他に何かあるのだろうか。いや、姉二人も無個性のため、可能性は薄く感じるが。
思えば、このクソガキの生家について、僕は全くと言っていいほど把握していない。僕の実家は、もう暴くところがないくらいに個人情報を把握されているというのに。
「…なんで帰らなあかんの？」
「ずん姉様って、１７になって新年迎えたじゃないですか」
「うん。来年受験期だから大変だ…って言ってたし、知ってるよ」
「『子が１７になって新年を迎えたら、五日以内に、精霊の宿る神器を受け取らなければならない』って集落の決まりがありまして」
…東北さんの家にそんなモンあったっけ？
イタコさんは今年で二十歳だから、神器を受け取っているのだろうが、前に家庭訪問した時はそんなもの見当たらなかった。
僕が知らないだけで、どこかに隠し持ってるのかもしれないが。

「タコ姉様の神器は髪紐ですね。
　タコ姉様は…特例なんで、ほぼ効果なかったんですけど」
「まぁ、あの人はね…」
　顔を合わせて、うんうんと頷く古参の皆に、取り残される切島くん。あの家系は理解しようとすると、逆に謎が増えるから、下手に首を突っ込まない方がいいぞ。
　話の軌道を修正するべく、クソガキが咳払いをして、続ける。
「で、私は今から、生家のある集落に行かなきゃダメってことに」
「留守番してたら？」
「家族立ち会いの元で継承の儀をするので、参加の義務があるんですよ」
　ふむ。面倒極まりないしきたりだな。
　僕たちがそんなことを思っていると、切島くんが意外そうに口を開いた。
「…意外だな。こういうスピリチュアルなのって、信じるタチなのか、お前ら」
「信じる信じねェ以前に、幽霊とか普通にそこらにいるぞ。なァ、爆豪」
「なんで俺に振るンだよ」
「は???」
　僕の家は、つづみさんがいるから余計に集まるんだよなぁ。イタコさんが残らず食べ尽くしてくれたから、なんとかなったけど。

理解不能と言いたげな切島くんへの説明をどうしようか、と悩む暇もなく、クソガキが「じゃ、そゆことで」と踵を返す。
と。そこへ音街さんらが手を上げた。
「私、ついて行きたい！」
「あ、ウチも」
「私も～！」
「……わ、私も」
小学生組は仲がいいからなぁ。クソガキの生家に興味があるのだろう。
しかし、今から行くとなると、結構時間がかかるが。ワープは移動経路のことを突っ込まれると個性の無断使用と見られかねないため、緊急時以外は極力使わない、と制限を課している。普通に向かうとなると、確実に着く頃には日が暮れているだろう。
「新幹線に乗っても、そこから地方線に乗り換えて、バスに乗って…。
めちゃくちゃ時間かかりますよ」
「それ以前に、閉鎖的な集落が、集団を迎え入れてくれますかね？」
「……さぁ？」
クソガキが肩をすくめ、首を傾げる。
自分の生家のことくらい、もう少し把握していてもいいのではなかろうか。

そんなことを考え、ふと隣を見ると。緑谷くんたちも興味が湧いてきたのか、荷造りを始めていた。
「…ついてくんですねぇ、君たち」
「きりちゃんの生家って今まで頑なに教えてもらえなかったので、もう気になって気になって」
「イズクくんと離れたくないので」
「ヒメとミコトが心配だからな。変に絡まれでもしたら困る」
「音街のボディガード」
「ついなちゃんの面倒任されとるし、一緒に行きゃええかって思って」
「幽霊を見てみたくって」
純粋な好奇心で行くのは、緑谷くんと切島くんだけか。
…しかし、同行する理由の殆どが中学生とは思えないものばかりだな。ここまで達観した生徒を担当するのは、さぞ楽だろう。
感謝しろよ、この子たちの担任。僕の教育の賜物だぞ。裏でめちゃくちゃやらかしてることを除けば優等生だ。…なんだろう、悲しくなってきた。
「先生はどうします？」
「休みのセイカさんとつづみさんとで保護者として同伴します。君たちを野放しにする

と『と・て・も』不安なので」
「……はい。毎度ごめんなさい」
♦？♦？♦？♦？
「…ミタマの里、ですか。結構大層な名前してますねぇ」
「こう見えても、江戸時代初期までは結構栄えた土地だったらしいんですよ」
「その繁栄、見る影もないね…」
1日に2本しかない地方バスに乗って二時間。
漸く着いた、クソガキの生家があるという集落は、そこそこの発展はあるものの、「田舎」、そして「退廃」という単語をそのまま形にしたようなものであった。
中には数年放置されているのか、植物に覆われた民家の残骸がちらほらと見える。
繁栄の「は」の字もない限界集落。
そんな認識が、僕たちの中で一致していることだろう。
「……可笑しいですわね？」
「イタコさん、どうかしました？」
「ここを去った頃は、ここまで瘴気が強い里ではなかったのですが…。一体、何が…？」
「瘴気…？むしろ、空気が澄んでて気持ちいいくらいだけど」
「タコ姉様のような霊力の強い人間にしか感知できない…、まぁ、『死臭』みたいなモン

です」

……そこはかとなく嫌な予感がする。

来た時点で早速不安を感じさせるとは、流石は『そういう家系』。

皆が気を引き締め、里に足を踏み入れる。槍と矢で歓迎されるかと身構えていたが、意外にも、すんなりと入ることができた。

農作業に勤しむ老夫婦に会釈すると、「こんな場所にわざわざ…」と歓迎される始末。なんというか、拍子抜けだ。

『余所者』って言われて追い出されるかと思ったけど、そうでもないね」

「ったく。瘴気云々はなんだったンだよ、つまんねェ」

「閉鎖的って言う割には、それなりに歓迎してくれてるな」

「なー。…あれ？どしたん、きりちゃん？」

その声にふと、東北さんに目を向ける。

訝しげに眉を顰め、思案に暮れている。その表情は、いつものような余裕綽々といった態度はカケラもなく。不安だけが、その顔を支配していた。

「……私は幼い頃に出ていったので、あまり知りませんが…。それでも、ここまで余所者を歓迎するなんてことは、あり得なかったはずなんです」

「ええ。きりちゃんの言う通りで…、なんというか…、あまりに変わりすぎていて不気味

というか。そこまで時間が経っているわけではないのに…」
「……やっぱ帰った方が良いと思う」
「バスもう来ねェぞ。切島、諦めろ」
不安を煽られて、切島くんが帰宅を提案するも、轟くんの一言で撃沈。残念ながら、現実は非常だった。
一抹の不安を胸に歩みを進めると、一際大きい屋敷が、門を構えているのが見えてきた。
「あそこが私たちの生家ですわ」
「デカっ…。え？きりちゃん、もしかして良いとこ生まれ？」
「内弁慶なだけの家ですよ。ウナちゃん家ほどの名家というわけでもないですし」
少しばかり歩いて、屋敷の前に立つ。荘厳な作りの門に、申し訳程度に備え付けられたインターホン。
イタコさんがそのインターホンを押そうとすると、ぎぎぎ、と錆びた鉄を擦るような音と共に、その扉が開いた。
「…おや。久方ぶりですね、純子さん」
そこに居たのは、気品はあるものの、どこか猛禽類のような凶暴さも感じさせる男と、その付き人らしき青年であった。

ずん子さんのことを他人行儀に呼ぶあたり、この家の人ではないのだろう。名を呼ばれたずん子さんは、顔を顰めるのを堪えながら、軽く頭を下げた。
「……お久しぶり、です」
「つれない態度ですね。将来的に結ばれる仲だというのに」
「触るな、色情魔」
ずん子さんの肩に触れようとした男の手を、イタコさんが冷たく払い除ける。
男は一瞬だけ鋭い目で彼女を睨むも、即座に肩をすくめた。
「おやおや、お義姉さんには随分と嫌われたようだ」
「だれがお義姉さんだずん姉様はテメェと結婚しねェっつってんだろ気色悪イ単語しか飛びださねェその口に手ェ突っ込んで声帯引き摺り出してブチ殺すぞ」
「……義妹にも嫌われてるとはね」
この子が本気で嫌悪感を露わにするあたり、救いようのない問題児なのだろうか。
今にも噛みつきそうな東北さんを抑え、僕たちは道を譲る。これ以上問答をしていると、東北さんが暴走しかねない。
「ほら、退きますからさっさとお帰りくださいな。これ以上、私たちの前に姿を現さないでくださいまし」
「分かりましたよ。ですが、純子さんはいずれ貰いますがね」

男はずん子さんに向けて、軽くウィンクしてみせる。「本気で生理的に無理」って顔してるぞ、ずん子さん。

男たちが去っていくのを横目で見届け、東北さんが口を開く。

「…アレが私たちが静岡に越した理由です。

ずん姉様に何度も迫って、タコ姉様が私たちを連れ出した…というのが経緯でして」

「…そこまで毛嫌いするような人だった?」

「小学生のずん姉様に薬盛って強姦未遂。尚、アレ里長だから里内は周り全員グル。証拠ぜーんぶこの世にない。ヒーローは排他的なこの里に耐えきれず五日で逃げ出す」

「あ…、あー、あー…」

そりゃ、警戒するか。ずん子さんもそれなりに強かな女性ではあるが、流石にそんな男が牛耳る里で暮らしたくはないだろう。

さっさと儀式とやらを終わらせて、屋敷周辺を緑谷くんたちが警戒しておけば安心かな。

「にしても…、帰るって分かってる今年の正月あたりで張り込んだあたり、まだ諦めてませんね、アレ」

「異能解放軍コースは?」

「アレが証拠を残すなんてまず無いですよ。

個性が『自分の痕跡の消滅』なんですから。すごいですよ？都合の悪い証拠は完全に消えるのなんの」
「……ある意味、最強最悪の個性だな」
「な」
元の閉鎖的だったという風潮も相まって、やりたい放題なんだろうな。
逃げ出すという選択肢を取ったイタコさんを褒め倒したい気持ちが湧いてきたが、流石に子供扱いすると怒られそうなので、黙ることにする。
僕たちが門をくぐろうとすると、ふと、玄関にて立ち往生する少女が目に入った。
「…精霊様？」
「ぴゃあっ!?」
イタコさんが話しかけると、びくり、と肩を震わせ、そちらを向く少女。
見たところ、東北さんたちと同い年だろうか。僕たちがまじまじと見つめる重圧に耐えかねてか、慌ててずん子さんの足元へと駆け寄った。
「へ？」
「……」
「……前代未聞ですわね。継承の前に精霊に懐かれるなんて」
精霊と呼ばれた彼女は、ぺたん、と頭頂部にある耳を閉じ、こちらを伺っていた。

神器と『個性特異点』

「ボクの名前は純那…、んっと、ちょっと長いから、ずんだもんでいいのだ。
神弓『純那弓』に宿る精霊で、かれこれ一万年は生きてるのだ」
ジュースを飲みながら、自己紹介を終えるずんだもん。精霊と言うと、もっと厳かな雰囲気を纏うやんごとなき相手かと思ったが、見た目は完全にただの童女である。
切島くんがまじまじとその姿を見つめる傍ら、轟くんが緑谷くんに耳打ちする。
「精霊って、ヒメとミコトみてェに人工個性の一部ってこと、ないよな?」
「多分無いと…思いたい。
調べてみなきゃわからないけど…、その弓が手元にないんじゃあ…ねぇ」
「私たちも精霊!お揃い―!」と、ずんだもんを揉みくちゃにする鳴花姉妹を見やり、不安げな表情を浮かべる轟くん。
万年開花は緑谷くんのラボで保管しているから、暴走の危険性が皆無になっているが、ずんだもんの宿ると言う神器は別の話。
彼らからすれば、今すぐ持ち帰って保管し、研究したいだろう。万年開花の解析が頭打ちとなっているらしく、多少なりとも焦っていたのだから。

とはいえ、その神器が人工個性を宿しているかどうかといえば、確証を持って頷けるだけの材料がない。
「儀式は執り行うのですか、タコ姉様？」
「ん～…。なんとも言えない状況ですが、済ませてしまいましょう。明日1番のバスに乗って蜻蛉返りしないと、あの色情魔が何をやるかわかりませんわ」
「それは怖いわな」
「あの舐めるような目つき…。私や麗日さん…あと、その子たちにも向いてたわよ」
…この子ら、見た目だけはいいもんなぁ。
女の比率が高いのも相まって、アレの目には獲物のように映っただろう。ただ、揃って一皮剥けば狂生物である。万が一にも手を出されることはないだろう。
加えて、子供たちに色目を向けたのは悪手と言わざるを得ない。それを聞いた爆豪くんの体が羽衣に、轟くんの体が熱と冷気に覆われ、麗日さんの髪が闘志で揺れ動き。切島くんが硬化した腕を真顔でカチ合わせ、果ては、緑谷くんも無言で端末を操作している。
つづみさんが「落ち着きなさい」と一喝したおかげで、即座に鎮まったが。
「あんな里長で、申し訳ない…。この里に住まう者として、非礼を詫びる」
「東北さんのお父さん、頭をあげてください。あなたが謝る必要はないですし」

東北さんのお父さん…随分と荘厳な見た目だが、私服が壊滅的にダサい…が頭を下げる。

母親は現在、屋敷の隠し部屋に隠れているらしく、儀式もそこで行うため、準備をしているとのこと。僕たちもそれに同席したいところではあるが、よくないものを引き寄せる可能性も否定できないため、あまり近づかない方がいいらしい。

念のために、緑谷くんに盗聴器やら隠しカメラの類が仕掛けられていないかを確認してもらうと、案の定ゴロゴロ出てきた。全部潰しておいたが。

「アレが里長になってから二十年…。この里はアレに振り回されてばかりいます。ヒーローもこの里の排他的価値観に耐えきれず、五日で去っていくほど…。

…越していった娘たちがそういった偏見もなく、こうも立派に育っているとは、至らぬ自分を嘆くばかりです」

「子供って、案外自分で歩けるものなんですよ。教員になって六年…。今でも嫌と言うほど思い知ってます」

東北家は随分と懐の深い一族なのだな。

儀式の準備を手伝っている東北さんの祖父母も、僕たちを歓迎してくれたし。排他的側面があるとは思えないほどに居心地の良い里だと思うのだが。

…まぁ、短い間でそんな判断を下しても、なんら意味はないのだが。

「排他的って言う割には、結構みんな歓迎してくれますよね？」
「だよな。全然、そうは見えねーっつーか」
「それは一部の酔狂な者のみなのです。皆、余所者が来ると家に篭ってしまうので。現に、それほど通行人がいるわけではなかったでしょう？」
…たしかに、見かけたのは雪かきをする夫婦が数組だけで、あとは誰も見ていない。しかし、ずん子さんたちが覚えた違和感も気になる。酔狂な人間がいることは知っているだろうし…。
僕が思案に暮れているのを見透かしてか、東北さんの父親は、ふと思い出したように口を開いた。
「そういえば…、最近就任した副長が外からの人間の受け入れがスムーズに行くように、なにやら進めていましたな…。
その賜物なのかも知れません」
副長か。こんな限界集落に危機感を覚えて行動しているあたり、里長よりもはるかにマトモそうだ。
そんなことを考えながら、精霊…ずんだもんに目を向ける。
「…何故、この里の人間は神器を受け継ぐんですかね？」
「ふむ…。魔除けと…古い頃の記録になると、紀元前百数年前のものになりますが…。

『人々に異能目覚めし時、必ず来たる厄災を討つ神器』として受け継がれてますな」

…十中八九、個性特異点か。

余談だが、爆豪くんの体を検査したところ、「個性因子と細胞が融合してる。もはや爆豪勝己本人が『爆破』という個性そのもの」という結果が出てきたらしい。スーツの変貌に関しては、「個性の覚醒がイズクメタルに作用した」と聞いた。

週一で検査を受けている爆豪くんは、強大な力に飲み込まれることなく、ストイックに努力を続けてる。少し前は余計に調子に乗るだけだったのだろうが、人の成長というのは早いものだ。

話が逸れた。そんな逸話を持っている武具に宿る精霊が、この臆病な童女というわけか。

i・アイランドを危機から救ったこの子たちを見ると、随分と見劣りしてしまうな。

「まぁ、ほぼ風化しておりますが。

この伝承を知っているのは、もはや東北家のみでしょう」

「…東北さん、知ってました?」

「……遠い記憶でしか。静岡に越してからの方が長いし…、あと、インパクト強い記憶ばかりしかないので」

「……たしかに」

インパクトに関しては、この子たち以上の存在はないんじゃなかろうか。
そんなことを思っていると、東北さんの母親が襖を開いた。
「儀式の準備が出来ましたわ。お客様には申し訳ないけど、少しの間私たちは外します。数分程度で終わりますので、ごゆっくり」
「さ、行きましょう、ずんだもん」
「はいなのだ」
東北さんの母親に連れられ、ずんだもん含む東北家が席を外す。
残された僕たちはというと、恐らく一等星の中で最も好奇心旺盛なクソガキを抜いて、議論を煮詰めることにした。確実に猛抗議してくるだろうなぁ。
「さっきの伝承の『厄災』って、確実に個性特異点だろォな」
「ここにおるやん」
「制御出来てるっての。さっきの羽衣も、爆破せずに消したろォが」
「……なぁ、これ、紀元前からある伝承なんだろ？そんな昔から個性が世に出ることを予言してるって、怖くね？」
切島くんの言葉に、しん、と辺りが静まり返った。
「……か、完全に盲点だった…!!一体全体、過去の人間は何を知って個性に対する神器を作ったんだ…？それに、紀元前って言うと…万年開花もそうだ。あれは人工個性の原型

だけど、暴走した時は轟くんを『個性』で判別していた…。過去の人間が、『個性』によって脅威が訪れると知っていたなら…」

「それも気になるが、問題はヒメたちを暴走させたやつだ。

この間の戦闘データで、影武者のフィクサーがアイツだと分かったことから、確実にフィクサーと繋がっている。そして、万年開花の特性を知っていたと言うことは…」

「この謎はフィクサーに繋がってる…ってコトか」

光明が見えてきたようだ。夢中になって議論を交わす三人に、ハイスピードで繰り広げられる話が理解できず、目を回す麗日さんと切島くん。

まさか、東北さんのご実家に、そんな重大な秘密があったとは。灯台下暗しとは、よく言ったものである。

ますます、東北さんが帰ってきた時、機嫌を損ねるだろうな。

そんなことを考えていると、儀式を終えたのか、ずん子さんたちが部屋に戻ってきた。

ずん子さんの手には、弓をしまう「弓袋」が握られており、中には神弓と呼ばれた神器が入っているのだろう。

ずん子さんは緑谷くんの隣に座ると、その弓袋を差し出した。

「はい。調べたいんでしょ?」

「……えっ、と…、そんなあっさり? いいんですか?」

先程受け継いだばかりの神器を、緑谷くんに預ける。
その行為に皆が目を剥く中、ずん子さんは笑みを浮かべ、緑谷くんと目を合わせた。
「きりちゃんから、聞いたから。
私も、ヒーローのお手伝いがしたいなって思って…。あっ、でも、きちんと返してね？」
「あの…ご家族の方は…？」
「その神器を所有するのは、この子です。
この子が信頼して預けるというなら、私たちは何も言いません」
よっぽど親に信頼されているのだな。
渡された神器を握り、緑谷くんは深く頭を下げた。
「ありがとうございます」
『ボクを調べるからには、丁重に扱ってほしいのだ。ちょっと握る力が強くて痛いのだ』
「ああ、ごめ……ん???」
…おかしいな。今、弓袋から声が聞こえたような気がするのだが。
もしかして、『神器そのもの』って、誇張表現でもなんでもなく…。
『ボクはこの弓に宿っているって言ったけど、正確には弓そのものなのだ！きちんとお手入れして、綺麗な弓袋に入れて、快適な場所に安置して、定期的にずんだ餅をくれな

いとグレちゃうのだ！』
「……弓の状態だと限りなくやかましいな、こいつ」
「さっきから思ってたが、『も～ププ』のカービィみたいな口調だな」
先程の口下手が嘘のように饒舌に話す弓…もといずんだもん。
スピリチュアルな存在にしてはフランクすぎる。『純那弓』などという大層な名前じゃなくて、『ずんだアロー』に改名したらどうだろうか。
「取り敢えず、ちゃっちゃと調べましょう。
緑谷先輩たちのことです。私抜きで話進めちゃったんでしょ？
この弓を調べながら聞きますから、作業始めましょうか」
東北さんは言うと、緑谷くんの持つ弓袋から弓を取り出す。
と。ずんだもんの鼻を摘んだような声が、弓から響いた。
『……キミら、油と金属くちゃいのだ』
「日向ぼっこしましょうか。南極で」
『ごめんなさいやめてください弓に直射日光は厳禁なんですぅぅぅっ!!!』
「白夜だしな、今」
「雄英の過去問で見たな…」
「アマゾンに放置でもいいですよ」

『助けてええええええっ!!!』

弓にとっては死刑宣告も同然な言葉を吐く東北さんへ、ずんだもんの命乞いが轟いた。

♦？♦？♦？♦？

「…オレの純子の家に余所者がゾロゾロと…。

これだから空気の読めない余所者は好かん」

その頃、ある屋敷にて。

仕掛けた盗聴器や隠しカメラが全て潰されたことに気づいた里長は、予め仕掛けておいた『個性』を発動させ、証拠を抹消する。

彼からすれば、己が寵愛を授けようと言うのに、拒否を続ける純子がどうしても許せなかった。と同時に、届かぬ花に強く焦がれていた。

深いながらも鮮やかな翠の髪に、きめ細やかな潤い溢れる肌。ぱっちりと開かれた瞳は吸い込まれそうなほどに美しく、無垢の具現化と呼んでも過言ではないほどに澄んでいる。鼻と唇は控えめだが、美しい顔をより麗しく彩り。さらには、顔に相応しい、黄金比とも呼べる引き締まったボディライン。

今まで相手にしてきた女のどれよりも麗しく、また名の通り純粋である彼女。

だからこそ、自分で汚したい。

男に渦巻くのは、そんな穢らわしい欲のみだった。元はずん子の母を狙っていたのだが、幼いずん子を見染めてからというもの、それが拗れ出したのだ。
世の闇を照らす星…『一等星』。その一つたる少女…東北きりたん。
その姉である彼女に、その手が届くはずもないことも知らずに。
「…焦る必要はない。彼女を手にする計画は、すでに動き出している。
それに、万が一抵抗されても、こちらには『あの神器』があるのだ…。あとは…、あとはぁはははっ、ひひっ、ふひひひひひ、ひひひっ、ひひひゃひゃひゃひゃ…!!」
男の笑い声が部屋に響く。目をつけてから何年経ったことか。漸く、最も美しい花を摘み取る時が来た。
その邪悪な喜びを吐き出すように、男は嗤い続けていた。

ミタマの里の闇と小春六花の出撃

「はぁあっ!?!?崩落事故ぉ!?!?」

次の日の朝。解析を終えて睡眠をとったのち、「ずんだアローと万年開花が同じ存在である」という結果に、考察を繰り広げていた時のこと。

僕たちに知らされたのは、とんでもない事実だった。

切島くんの素っ頓狂な声が、その全てを物語るほどに、僕たちの間で走った衝撃は大きかった。

「は、はい…。どうやら、バスの通り道が塞がれてしまったらしく…。

この豪雪だと暫く…一週間ほどは里から出ることは叶わないかと…」

「冬休み終わるゥゥゥウウウっ!?!?」

「宿題家に置いてきてもォたァァァァァァ終わったァァァァァァァっ!!!!」

「どうしましょう、イズクくん。お餅カビちゃいます」

「保存してるから大丈夫だよ」

「…ま、最悪誰かに任せればいいか」

「後半三人余裕だなオイ!!」

阿鼻叫喚に陥る生徒たちの中で、僕は淡々とスマホを取り出し、教員用のチャットに「崩落事故のせいで出先を出られなくなりました」と送っておいた。
流石に事故のせいとあっては、誰も責めることは出来ないだろう。念のため、崩落事故の記事も添付しておこう。
「…ワープ装置でちゃちゃっと帰ろやぁ…。これは仕方がないやろ…」
「入ったところ見られてるんですから、急にいなくなったら怪しまれますって。ただでさえ目立ってたんですから」
「僕がＳＡＶＥＲとして事故の後始末出来たらいいんだけど…」
「無理に決まってンだろ、デク。
俺らは日本じゃヴィジランテと敵の境界線にいンだぞ?ヒーローの捜査が入る。確実に」
皆であーでもない、こーでもないと議論を重ねて分かったのは、「どうしようもない」という残酷な事実のみだった。
打ちひしがれる生徒たちの傍ら、つづみさんがなんとも言えない顔を浮かべる。
「……やっぱり、嵌められたわね」
「やっぱり、というと?」
「あの男よ。土とプラスチック爆弾の香りがするとは思ったけれど…、まさか、退路を塞

ぐために使うとはね」
……それ、相当ヤバくないか？
狙われているずん子さんは勿論、他の女性陣に被害が及ばないとも限らない。
しかし、ここに籠城しようにも、隠し部屋以外は相手に内装や仕掛けが粗方知り尽くされていると考えた方が自然だろう。
「…浮遊大陸に逃げます？」
「いや、ここを留守にするのはまずい。
儀式をした隠し部屋には…」
「あなた、言ってもよろしいので？」
「娘たちがこれだけ信頼するのだ。構わないだろう」
東北さんの父親が、意を決したように口を開く。そこから飛び出した言葉に、僕たちは思わず目を剥いた。
――――あそこには、神器を産み出すとされる『永遠咲』という一房の大豆の花がある。
…精霊がいるんだから、その源も勿論在るわけか。
万年開花と同じように、頭脳部を切り離して神器としているのだろう。彼女らの力と同等のものをこの弓が有してるとなると…。

成る程。個性特異点に対しての備えとしては、確かに申し分ないと言える。
「…どォすんだ。余計に詰んだぞ」
「緑谷、その永遠咲って花、万年開花みたいにラボに送…」
と、轟くんが提案した、まさにその時。
弓から人の姿になったずんだもんが、とてとてとずん子さんに歩み寄り、その袖を引っ張った。
「誰か来るのだ」
「応戦準備だ。いつでも攻撃に移れるように、溶け込んどけ」
瞬間。生徒たちが一斉に部屋の各所…、入口から死角になっている場所に隠れる。
ヒーローじゃなくて、暗殺者のような体捌きだな。僕たちも続くように死角へと隠れ、息を潜める。
東北さんの父親が迎えに行くと、聞き慣れない、若い男の声が聞こえた。
「おや、副長どの。如何されたので?」
「この里にお客人が来たと耳に入れまして。挨拶をしておこうかと思い立ち、足を運ばせていただいた所存です。
それと、こんな事態になってしまって立ち往生しているだろう彼らに、不便な里で申し訳ないと謝罪にも…」

…警戒の必要は薄いか。
僕たちは死角から離れ、東北さんの父親に案内される若い男を出迎える。
今時の若者にしては、やけに質素な服装だ。日頃から外で畑仕事をしているのだろう、健康的な焼けた肌に、筋肉質な体躯。しかしながら、威圧感のかけらもない童顔のその男は、部屋に入ると同時に、軽く頭を下げた。
「ミタマの里へようこそ。
私、不肖の身ながら、副長を務めている『米原　カズト』と申します。
此度は、このような崩落事故が起きてしまい、帰るに帰れない貴方たちにどうしても謝罪を…、と思い、挨拶に来ました。
不便な里で…、本当に、申し訳ない…」
「あっ、い、いえっ…。事故は仕方のないことですから…」
ここまで謙られると、どうにもむず痒い。
悪いのはこの人ではなく、あの色情魔とまで揶揄される里長なのだが。
やりたい放題の里長と違い、米原と名乗るこの男ならば、信頼できるだろう。子供たちも警戒を解いているし。
「余所者嫌いが多いって聞いてたけど、本当にそんなことない人にしか会わないよね」
「副長さんが動いてるって聞いてたが、この人となりなら納得だな」

緑谷くんと轟くんが賞賛を送ると、副長は少しばかり頬を赤らめ、恥ずかしそうに頬を掻いた。
「いっ、いえっ…。私はただ、皆様と話をしただけでして…。
他所から来た人も受け入れないと、この里が終わるかどうかの瀬戸際だと…」
「アンタ、余程この里に入れ込んでンだな」
「ええ。大事な我が故郷ですから」
恥じらいながらも誇らしげに語る彼に、皆の警戒がすっかり解かれる。つづみさんも特に怪しんでいないあたり、危険な様子もなさそうだ。
しかし、依然危険な状況に変わりはない。副長に対する警戒は解いたが、いつ里長が襲来してもおかしくないのだ。
僕たちのその警戒心が漏れ出していたのか、副長も神妙な面持ちで告げる。
「分かっています。里長のことを警戒していらっしゃるのでしょう?
あの暴君は長い間、純子さんに執着し、情欲を募らせていました。こんな絶好のチャンスを狙わないわけがない」
「話が早くて助かります、副長どの」
副長も、里長の危険性を解っているようだ。
後は、何をしてくるかを予測するかだ。あの里長の人柄や立場、そして今いるこの場

所の特徴を考えると…。
「……あの、副長さん。里長って、どれくらい信奉者います？」
「ヤツには家柄もありますからね。
東北家と…私の思想に賛同してくれた十数世帯以外は、ほぼヤツの言いなりと考えていいかと」
「……あれ？それヤバくない？？？」
僕の言いたいことが分かったのか、緑谷くんがダラダラと冷や汗を流す。
連鎖的に爆豪くんと轟くんも、この状況に気づいたようで、無意識のうちに近くに居た子供たちを抱き寄せる。爆豪くんの周りには羽衣が、轟の周りには冷気と熱気が漂っているあたり、本格的に警戒している。
僕もつづみさんの側に避難しておこう。彼女の側なら、まず安心だ。
「……足音よ。三十はくだらないわね」
「狼藉者め…!!永遠咲在るこの土地を侵すなど、先代が泣くぞ…!!」
「次の里長がガキに薬盛って強姦未遂やらかしてる時点で自殺モンだろ」
切島くんの冷静なツッコミが炸裂した、その時。木製の何かが破壊される音と共に、足音が響いた。
「余所者を出せ!!」

「永遠咲から余所者を引き剥がすのだ!!」
「余所者め、東北さんの家から離れろ!!」
「いや、永遠咲に捧げるのだ!!ここで捕え、即刻生贄の儀式を!!」
「そうか…。それなら、新たな神器を作り出せて、余所者も排除できる…!」
「捕らえろ、捕らえろー!!」
…うわーぉ。排他的って言うか、狂信的って言うか…。
宗教やら伝承やらが根本にある場所は、これだから嫌なんだ。何か一つ大義名分を得ると、人の倫理観は容易く壊れる。それこそ、悍ましい方法で人を殺すことを思いつくくらいには。
無論、緑谷くんたちにもそれを口を酸っぱくして言っている。異能解放軍のように、いい反面教師として働いてくれそうだ。
「神器を作るのに、生贄…?ずんだもん、そんなのいるの?」
「要らないのだ!ボクも永遠咲も人間がボクたちのためにとか言って死んだり、人殺したりしたら罪悪感で死にたくなるのだ!
第一、永遠咲はもう神器を作れないのだ!なにやっても無意味なのだ!!」
アイツら、神器に宿る精霊様からのありがたいお言葉で止まってくれるかなぁ…。
そのくらい単純な信仰心であるなら、まだ良かったのだろうが、残念ながら肝心の精

霊がコレである。言って止まるようなことはまずないだろう。
ぎゃあぎゃあと怪鳥のように騒ぎ立てながら、上がり込んでくる足音が聞こえる。
まさか強行策で来るとは。どうしよう。この子たち、手加減できるだろうか。特に僕の嫁さんの方。もう殺気ダダ漏れなんだけど。顔がよく見えないくらいには怒気が溢れてらっしゃいますけど…。
「コウくん、バレないようにすれば殺していいかしら?」
「殺したい気持ちはわかりますけど、我慢してください。それに、アレは衆愚の類です。敵性国家とは根本的に違う、ただの愚。根本さえ正せば、正気を取り戻せます」
「……わかったわ」
衆愚の行き着いた先が異能解放軍なら、彼らは衆愚に振り回されてるだけの集まり。生徒たちが打ち倒してきた悪よりも遥かに小さく、また小さいがために厄介な存在である。
迫る彼らに怯え、子供たちが緑谷くんたちの裾を掴む。
「……どうします?この様子だと、家中に侵入されてると思いますけど」
「迎え撃つ…というのも難しいですね。相手は神器を使ってくるでしょう。中には…はにゃあ……」
東北さんが説明する途中で脱力し、床に伏せる。まさか、個性の類だろうか。

緑谷くんが即座に個性遮断プログラムを起動させ、この場にいる全員の個性を打ち消す。例外的に個性因子そのものと同化している爆豪くんの羽衣だけは、消えずに彼の周りを漂っている。
「…ありぇ…？なんか、ねむ…」
「京町さん!?」
「ん…。あかん、もぉ…」
「つ、ついなちゃん…？」
個性遮断プログラムなど関係なく、次々と床に伏せる子供たち。小学生組が全員やられると、間髪入れずに麗日さん、切島くんの二人がその場に倒れる。
僕がその名を叫ぶ暇もなく、轟くんまでもが倒れてしまった。
「…神器と、やらの力…んぅ…」
「つ、つづみさんまで…!?」
次々と倒れ、遂に残ったのは僕だけ。
この場にいる全員を運んで逃げる余裕があるはずもなく、僕はパニックに陥る。
冷静に物事が考えられないほどに焦る僕の思考を蝕むように、眠気が襲いかかった。
「……な、に…が……」
微睡に落ちる視界の中、殺到する人々の中で、邪悪な笑みを浮かべる里長が見えた。

♦？♦？♦？♦？

「お嬢様…お嬢様…!!うぉおお…ん…!!」

その頃、音街家の屋敷では。

副メイド長兼ウナの世話役を務めている小春六花が、とても他人に見せられたものではない顔で咽び泣いていた。

その様は見ているこちらが気の毒になるレベルで、時たま身悶えする様は痛々しく映る。

最早、音街家の風物詩と化したその光景に、あまり六花と面識のないメイドが、長年勤めているメイドに問うた。

「副メイド長はお嬢様が若旦那様と出かけるたび、なんであの可憐な見た目が台無しになる勢いで咽び泣いてるんですかね？」

「そりゃあ、おしめも変えてきた妹みたいな子だからねぇ…。許嫁ってのが気に食わないんだろ」

ほら、仕事に戻るよ、と本来の業務へと戻るメイド二人。肝心の副メイド長がこんなので頼りにならないのではないか、と疑問に思う者もいるだろう。

しかし、彼女は咳き込むほどに泣きながらも、凄まじい勢いで業務をこなしていた。

と。そこへ、スマホを持ったテディベア…チャームポイントなのか、天使の羽と悪魔

のツノが生えている…が、歩み寄る。
「おおおおお…!!
……ん?ラキストン、どーした?」
『麗しのウナお嬢様がピンチらしい。爆豪くんからＳＯＳが届いている』
「はぁあああっ?!?!」
一大事にも程がある事態に、窓ガラスを拭く手が思わずガラスを握りつぶす。
キラキラと舞う破片を見て、他のメイドたちが何事だと群がる。
「ラキちゃん、どうしたの?」
『ウナお嬢様のピンチだ。乱暴王子が下手に動けないらしい』
「あらま、大変」
「大変ね。副メイド長抑えるのが」
「ね」
メイドたちは、今にも窓から飛び降りそうな副メイド長に目を向ける。
六花はというと、半狂乱になりながら叫び、テディベア…緑谷出久特製のＡＩ搭載型自立ロボ…ラキストンを傍に抱きかかえた。
「ラキストン、今すぐオレをウナお嬢様の元へ連れてけ!!」
『元よりそのつもりだ』

小春六花が騒動の元に着くまで、あと４５分。

暗い檻の中で

「……んっ」

刺すような冷たさが、意識の覚醒を促す。

ゆっくりと目を開けると、空間を仕切るような鉄格子に、床に倒れ伏す生徒たちの姿が見えた。

作りからして、座敷牢の類だろう。鉄を使っているあたり、そこそこに文明が発展した時期のものと考えて良さそうだ。

そんなことを思いながら、徐々に何が起きたかを整理し、冷や汗を流す。

まずい。このままでは、女性陣が危ない。強かな女性たちだが、手を出されないとは限らないのだ。

とは言え、何の力も持たない一般人の僕が何をやろうと、ヤツを止めることは叶わないだろう。連絡機器が取り外されていないかを確認するものの、そんな淡い期待は木っ端微塵に打ち砕かれた。

「…彼らのイズクテレフォンまで取り上げられてしまいましたか…」

コレは非常にまずい。緑谷くんらがスーツを装着するには、イズクテレフォンが必要

不可欠なのだ。
要するに、仮面ライダーから変身ベルトを取り上げたような展開になっている。
しかし、緑谷くんの頭脳はスーツや発明品が無くとも活かせる場面は多いし、爆豪くんや轟くん、切島くんには個性がある。早く起こして損はないだろう。
「緑谷くん、起きなさい。あかりさんがピンチですよ」
「あかりちゃん!?!?!」
あ、起きた。好意を向けられ続けて半年近く経つが、緑谷くんも一途なあかりさんに好意を抱いてはいたらしい。名前を出すだけで飛び起きるとは。
緑谷くんはあたりを見渡すと、何が起きたか悟ったのか、悔しそうに顔を歪ませる。
「おはようございます、緑谷くん。最悪の目覚めでしょう?」
「人生最悪のね」
「これからヒーローになるなら、コレを超える最低はあると思いますがね」
「僕にとっては今が最低ですよ…!!」
あかりさんも果報者だな。想い人にここまで言われるとは。
そんなことを考えながら、僕たちは爆豪くんたちを起こしていく。座敷牢に倒れていたのは、東北家と副長除く男性陣のみ。女性陣はどこか別の場所に運び込まれたのだろう。

起きた彼らは、それぞれ悔しさと不甲斐なさに唇を噛み、拳を握る。
「くそッ、油断した……！」
「あの野郎、音街に手ェ出してみろ…!!
俺……諸共、小春のアホに殺されるわ…!!」
「誰だよ小春って」
爆豪くん、照れ隠しが独特過ぎるぞ。音街さんところのメイドさんを盾に使うな。
しかし、見張りの一人も付けないとは、相当油断しているのか、それとも神器を有する故の余裕なのか。どちらかは分からないが、好都合だ。
「これ誰か目立たずに壊せます？」
「誰にモノ言ってンだ、クソ教師。朝飯前だわ」
「……マジに朝飯前なんだよなぁ」
「言うなよ轟…。余計に腹減る…」
轟くんの余計な一言に、ツッコミを入れる切島くん。
それを無視し、爆豪くんは赤熱化させた掌で鉄格子を融解させ、完全にその意味を失わせた。どうして眠らされたかの考察や雑談は後でもできるし、迅速な行動だ。
デロデロに溶け、轟くんの冷気によって冷え固まった鉄格子を跨いだ爆豪くんは、ある一点に視線を向け、即座にその足を止める。

「爆豪、止まってないで早く出ようぜ。喉までカビちまいそうだ」
「……進みたいのは山々なンだがなァ。
切島。アレ見て行けそうだったら、そのまま進め。無理そうだったら一回引き返せ」
「何言ってんだ…よ……っ…!?」
切島くんが言われるがままに前に進み、爆豪くんの指差す方向を見やる。
瞬間。彼は息を飲み、顔を真っ青にして何かが漏れ出そうとする口元を押さえる。
一体なんだ、と僕たちが思っていると、爆豪くんが告げた。
「縦に真っ二つにされた死体がある。
身なりからしてプロヒーローだな」
その声は、いつものような力強さはあまり感じられず、少し震えている。
この子たちがマトモな人の死体を目の当たりにするのは、今思えば初めてか。
僕は中、高と呪われてるんじゃないかってくらい敵が襲来して虐殺のかぎりを尽くしてきたから、嫌でも慣れてるのだが。酷いぞ。合計で五回は来たからな。
緑谷くんに関しては、勝手に警察のデータベースの魚拓を取ったりしてるので、まず心配ない。…いや、警察のデータベースに侵入してあまつさえ魚拓取るとか、やらかしてること半端なくヤバいけど。
轟くんもエンデヴァーの修行の一環として、幼い頃からグロ写真を見て育ったという

ため、問題ないだろう。情操教育どうなってるんだ、エンデヴァー。
切島くんの反応が1番健全なのだ。…プロヒーローになるのならば、慣れなければいけないのだが。
「…すいません、助けらンなくって…」
切島くんはそれだけ言って手を合わせると、そのまま進んでいく。
僕たちも続くように死体に合掌し、出口を探し始めた。
「…プロヒーローが五日で逃げるっての、アレが理由かもな」
「他にも犠牲になったヤツがいンのか…。
つくづくなんつー場所で産まれてんだあのガキァよ」
「逃げ出して正解だったかもね」
「かもじゃねぇよ…。神器とか受け取りに行かなくても良かったろ…」
切島くん、さっきから冷静にツッコミが出来てるあたり、常識人だな。この子たちの面倒を見ていると、このような反応が余計に新鮮に思えてくる。
…おっといけない、思考がそれた。
「風習というのは、なかなか抜けないモノですよ。こんな時に話すのも何ですが、日本人は、死者を『仏さん』と言うでしょう?
あれは他の国ではあり得ないことなのです」

「……初耳」
「日本では、『先祖崇拝』という思想が根付いてます。霊は盆行事の繰り返しによって、神に近い性質になっていく…と、民俗学界では語られています。
宗教学を取るとわかるのですが、他の宗教にはこの手合いはほぼ無いんですよ。何故だか分かりますか？」
歩きながら、切島くんが悶々と唸る。
僕も初めて聞いた時、謎の納得と共に疑問に思ったモノだ。
民俗学は１９００年代にある学者が開いていた郷土研究会から発足した学問というのに加え、超常黎明期時代の大混乱を経て、郷土風習が風化し始めていたから、知らない人も多そうだが。
因みに、僕が語ったのは、民俗学、宗教学においては常識のようなものである。コレを専門家の前で得意げに話していたら、まず死ぬほどバカにされる。
「…三大宗教じゃ、祈る神や仏は唯一の存在だからだろ。
日本は神道っつー、神様仏様が八百万いる宗教を信仰してっからな。今更何人増えようが関係ねェってこった」
「……そういうことです。日本は誰かが死ぬたびに神様を生み出してるんですよ。
それこそ…、一千年近くの間、この風習は抜けてませんね」

「爆豪、よく知ってるな」
「宗教習えば嫌でも知る」
　爆豪くんは音街さんのお祖父さんに扱いてもらっているんだったか。人心掌握のために、宗教を学ぶ。彼らしい発想だ。
「そう考えると、オールマイトも一種の宗教かもな。神様みてェに思えるし」
「でも、彼は人間だよ。神様みたいに永久に見守ってくれてるわけじゃ無い。
　ヒーローとしての彼が居なくなった後、今いるヒーローが代わりを務めなきゃ」
「荷が重いだろ。トップ…５０までか?そっから下、ほぼ向上心ない端役の塊だぞ」
　いつの間にか、現代のヒーローたちへの愚痴大会になってる。
　いや、たしかにトップ５０以下はやる気のないヒーローをちらほら見るけれど。
　切島くんは切島くんで、「紅頼雄斗も負けてない」と張り合うし。切島くん、その人もう先祖として崇拝される側なんだけど。
　…まぁ、先祖霊の定義からしたら、まだ崇拝する者じゃなくて、荒ぶるから鎮めなきゃいけない霊だとは思うが。
「……って、ンなこと話してる場合じゃねェよ先生ェ!!早く助けねェと…」
「騒ぐな・アホ・ブッ殺すぞ」
「相手がアホだからって、赤ちゃんに言い聞かせるように言いやがって…!」

切島くんのこめかみが凄いことになってる。
と。そんな雑談で気を紛らわせていた、その時だった。
「そ、その声…!今日、里に来ていたお客様ですよね?!」
曲がり角の奥から、声が聞こえたのは。
その声が副長のものだとわかると、僕たちは一斉に駆け出す。
走った先にあったのは、座敷牢の一つ。同じように捕まり、幽閉されたのだろう。副長が鉄格子を掴み、助けを求めるように視線を動かしていた。
「副長さんまで…!!」
「爆豪、出番だ。溶かせ」
「テメェ一人で全部出来るだろ」
「お前みたいな体力オバケと違って、消耗がないわけじゃねェんだよ」
「……戦闘時に役に立たねェとブッ殺すぞ」
爆豪くんは赤熱化させた掌で、鉄格子を破壊し、溶けた鉄を轟くんが冷やす。
副長は流れるようなその一連の光景に、目をパチクリと丸くする。
「た、助かりました…」
「個性の無断使用に関しては、目を瞑ってもらえるとありがてェっす。こんな状況だし」
「も、勿論です!このまま捕まっていたら、どうなっていたことか…」

ホッと胸を撫で下ろす副長。ここに捕まっている時点で、彼は味方としてカウントして良さそうだ。

この座敷牢について、構造を知っているかと聞いたところ、「いえ、私も初めての場所でして…」との答えが返ってきた。構造に関しては、緑谷くんが通ってきた道を記憶しているから心配はないが、問題はここの構造じゃない。

「…あの時、僕たちが眠りに落ちたのには、何か理由がありますね？」

「……ええ。里長の神器です。誤差はありますが、対象を３０分眠らせるものでして」

「やっぱりか」

「３０分か。起きてからの時間から換算すると…僕らが眠らされてから約３６分２５秒…」

「ンな細かく言わンくていいわデク」

３０分くらいなら、まだ手は出されていないだろうな。しかし、モタモタしていたら危険なのも事実。

神器についての対策を考えながら、僕たちは座敷牢を出るべく、手当たり次第に進んでいく。

「神器ってなんか対策できるか？」

「いえ…。私も『眠らせる』ということしか知らず…」

「寝起きの俺らでも効果抜群なんだ。効果に関して、縛りはほぼ無ェと考えていいだろ」
「人工個性だから、対策は…ほぼ無理か」
皆が手詰まりな状況を口に出すたびに、空気が死んでいく。
どうしたものか、と皆が悩んでいると、切島くんが口を開いた。
「……なぁ。アレ、一人ずつ寝てたよな？」
「ん？…確かにそうだけど」
「アレってさ、纏めて全員眠らせる…なーんて芸当、出来ねェんじゃねェの？」
「「「あ」」」
切島くんの鋭い考察に、全員が固まる。
確かに、範囲内の者を眠らせることが可能なら、あの時侵入していた全員が寝ていなければおかしい。
僕が最後に見た光景は、幾つもの人影と、あの男の笑みだ。切島くんの言うことは当たっているだろう。
「…よく見てましたね、切島くん」
「範囲内を全員眠らせる機能を、あのクズが隠してたら終わりっすけどね」
「…やっぱり、イズクテレフォンを取り戻さないと。
スーツさえあれば、僕たちが寝てもＡＩが戦ってくれるし」

「第一目標はスーツの奪還か」
そうと決まれば、善は急げだ。
まずはここの出口を探して、イズクテレフォンを取り戻す。
僕たちは互いに頷くと、再び散策を開始した。
♦？♦？♦？♦？
「ラキストン、なーんでここに出久クンと爆豪のアホ、その他諸々の携帯やら貴重品が置いてる？」
『十中八九、捕まったのだろう。不意打ちの類と考えた方が自然だ』
「ふーん…。会ったら返すか。カスの爆豪以外」
一方、彼らが取り戻そうと考えていた貴重品の類はというと。
猛スピードで木々を薙ぎ倒しながら山を駆け上がり、気配を殺して潜入していた小春六花が回収していた。

麗日お茶子は逞しさがあがった！恥じらいがゼロになった！

「……んっ」

肌につく違和感で、薄く目を開ける。

視界に飛び込むのは、檻だろうか。等間隔に並ぶ鉄格子が、私…紲星あかりの眼中を支配する。

ゆっくりと起き上がると、私はその違和感の正体に気がついた。

「ぴゃあっ!?」

着ていたはずのお気に入りの服は、そこにはなく。在ったのは、情欲揺さぶる、なんとも恥ずかしい民族衣装であった。砂漠の踊り子みたいな服だ。

お茶子ちゃんは…スーツがあんなのだから、「なんぼのもんじゃい」と言って動き回るのだろうが、私はあそこまで女を捨ててない。

加えて、この季節にこの格好は、普通に風邪を引く。人とは言えない体だけど、病気はそんなもの関係なく、平等に感染するのだ。勘弁してほしい。

恨み節を言っても仕方がない。とりあえず、引き裂いて新しい服を作る。服を作る個

性は、未来で需要が高かったのもあって、最初に覚えた個性だ。
それにしても、お気に入りの服はどこに行ったのだろうか？アレ、イズクくんに買ってもらったヤツだったのに。
「…全員分の服、作らなきゃダメかな」
そんなことを思いながら、鉄格子に手をかける。父様が偶に来てくれた、あの部屋。
その壁に比べれば、こんなもの、障子紙にもならない。ぐにゃり、とひん曲がる鉄格子を潜り抜け、通路に出る。
…なんか変な匂いがする。
薬の類は一通り耐性付けているが…。香りからして、媚薬の類だろうか。それにしては、酸っぱい香りもあるような…。
「…考えても仕方ありませんね。皆を助けに行きましょう」
誰もいないと虚しいな。一等星に入ってから、一人になる暇なんて無かったから。…正確には、一人になるのが怖かったから。
連絡機器の類は、着替えさせられていたことから、多分外されている。イズクくん以外に裸を見られるなんて…。あの男、五回は殺したくなった。
皆、イズクくん特製のナノマシンが体を巡っているから、薬は害を成すとして分解してくれるだろう。前後不覚になってその場を動けない…なんてことは、まず無いと思

う。
「…しかし、大掛かりな座敷牢ですね。
……なーんか見覚えのあるような…？」
悶々と唸り、記憶の引き出しを探ってみる。
思い出す個性を作れたらいいのだが、生憎、私の可哀想な頭ではまず無理だ。
思考しながら歩くこと数分。私はふと、視界の隅にある人が鉄格子の奥にて闘志を燃やしているのを見つけた。
「お茶子ちゃん、大丈夫？」
「あかりちゃん。ここの鉄格子って電気とか通っとらん？」
「通ってても私なら平気だから。ちょっと待っててね」
お茶子ちゃんは強かだけど、いかんせん行動することをしぶる傾向がある。
鉄格子に電気が通っていないかを警戒していたらしい。私の鉄格子は握ってもなんとも無かったため、この座敷牢を破られたことがないのだろう。
そんなことを考えながら、お茶子ちゃんの居る鉄格子を曲げ、救出する。
「あンのアホ、顔がトマトみたいになるまではシバかんと気ィ済まん」
「…あの、その格好で？見事なまでに逆バニーだけど…？」
そんな秘部を天下に晒す、服という概念そのものに喧嘩を売るような服装で出歩くん

じゃないよ、年頃の乙女が。

…いや、なんか最近妙に逞しいけど。女ってこと忘れかけるけど。

「一回公衆の面前でおっぱい晒しとるんや、今更やがな。こんなんでキャアキャア言うとる暇あるなら、ちゃちゃっとあのアホどもブッ飛ばして帰らんと」

「…服、作るよ? 個性で作れるし…」

「……頼むわ」

流石に、物理的にも精神的にも心配になる。

この空間もそうだ。やけに男の欲望をそのまま詰め込んだみたいな作りをしているが、内装からして千年近く遺されているのだろう。何度か建て替えた痕跡はあるものの、支えとなっている部分はそのまま残っている。

余程飢えているのだろうな、と思いつつ、お茶子ちゃんの着替えの終わりを待つ。

お茶子ちゃんがスニーカーに足を入れた、まさにその時だった。

「助けてぇぇぇぇぇっ!!なんかめっちゃ追われてるのだァァァァァァ!!!」

なんとも緊張感に欠ける、間の抜けた叫び声が聞こえたのは。

「あの声…、えっと、○ラえもん!」

「ずんだもんなのだァァァァァ!!!」

お茶子ちゃんが小○館に対戦車弾をブチ込まれそうな間違いを言い放ち、ずんだもん

のツッコミというには悲鳴に近い叫び声が響く。
私たちがそちらに向かうと、確かにずんだもんが追われていた。
…奇声を上げながら猿もびっくりな狂乱の舞を踊る全裸の男たちに。
「……お茶子ちゃん、勢い余って脳天潰さない程度に」
「分かった」
ばきり、とスニーカーが石畳を砕き、欠片が衝撃で舞う。お茶子ちゃんはその幾つかを手に取ると、個性を付与し、投げ飛ばした。
「解除」
掌を合わせ、個性を解除する。投げた欠片は的確に彼らの脳天を揺らし、意識を刈り取った。
自分を追ってくる人間が居なくなったとわかると、ずんだもんは息を切らしながら、こちらへと歩み寄ってくる。
「た、助かったのだ…。生まれてこの方、経験したことのない危機だったのだ…」
「まぁ、こんな見た目で二十人も追ってきたら、ねぇ…」
伸びている男たちを見やり、ため息を吐く。
ナノマシンで無効化できてるだけで、相当濃い媚薬が漂っているようだ。
…にしても臭い。酸っぱい匂いは、コイツらの体臭か。四日間風呂に入らなかった後

のツナギくらい臭い。
「健康に害を及ぼしそうなくらい臭いにおいがしますね…」
「吐くモン胃の中に無いけど吐きそう」
「言わないでください」
そういえば、朝ご飯、食べそびれたなぁ。
…絶対に許さんぞクソ野郎この世に生まれたことを後悔させてやる。
そんな恨み節を心の中で抱いていると、息を整えたずんだもんが声を張り上げた。
「はっ!そうだった!
ボクはずん子たちを助けにきたのだ!」
「…そういや、なんで牢屋から出られてるんです?」
私が問うと、ずんだもんはぺたん、と頭頂部の耳を閉じて、目を伏せた。
「要らんってポイされちゃったのだ」
「由緒正しい神器やのに!?!?」
「使い手ってボクが認めない限り、ボクはただアホみたいに撃ちにくい弓なのだ」
雑すぎやしないだろうか、この子の扱い。
古代人は神器を運用する際、人工個性故の暴走を危惧して、使い手を選ぶ機能を搭載したのだろう。

…この類の考察は、私の仕事ではないか。
それにしても、由緒正しい神器をあっけなく破棄するとは。手元に保管しておくのも、ずん子さんに反撃の芽を与えてしまうから気が引けたのか。…あり得る。あの小物臭い男なら余計に。
「ずん子さんたちの場所ってわかります？」
「んっと…、ずん子が見てるものと同じものを見るとか、聞いてる言葉を聞くくらいしか出来ないのだ」
「それのがいいです」
少なくとも、ずん子さんの状況把握にはなる。奴はずん子さんに異様な執着をしていると聞いた。
ならば、真っ先に手を出すのはずん子さんのはず。おまけに過ぎない私たちは、この欲望の座敷牢にぶち込まれてしまったのだろう。
ずん子さん以外は、別の場所にいると考えた方が自然だ。
「しっかし…、見事に頭脳班と分けられてしもうたなぁ。
男女で偏差値に差があり過ぎるわ」
「きりちゃんが見つかれば、まだ希望はあるんですけどね」
お茶子ちゃんは爆豪くん曰く「死ぬ気でやれ。さもなきゃ落ちろ」らしいので、言わ

ずもがな。
私に関しては、イズクくん曰く「僕と同じくらい必死こいてやれば、雄英一位も夢じゃないよ！」らしい。勉強が死ぬほど嫌いな私には、ちょっと無理な話だ。
「……ちょっと残念なお知らせなのだ」
「え？なに？」
「きりたんもイタコも、ずん子と一緒に捕まってるのだ。
なんか、目の前であの男の人と全くもって知らない女の人たち…十人くらいが…」
「ＯＫ分かった先急ごう」
「賛成」
思ったより深刻な事態になってた。
「お前らもこうなるんだぞ」的な演説をしているのだろうな。
早急に助け出さなければ。
「どこか分かる？」
「んっと…、ウチなのだ！」
「自分の実家でいけ好かん男と知らん女がおっ始めてるとか、絶対トラウマなるよな…」
「出口を探そうにも、周りの人は前後不覚だし、下手に壁を壊したりもできませんよ？どうします？」

崩落の可能性もあるし。
私がそう訴えようとすると、麗日さんは指を立てて、不敵な笑みを浮かべた。
「ウチを誰やと思っとんのや。土建屋の娘やで？建築に関してはおとんに一から百まで叩き込まれとるから安心しぃ」
「じゃ、どこ壊していいか教えてください。
壊すのはやります」
「まかしとき!!」
「ボクを置いてかないでなのだ～！」
こうして、私たちの脱走作戦が始まった。
♦？♦？♦？♦？
「……ふぅ。見張りはこれで片付いた」
「離れにある座敷牢ですか…。通りで見たことがないわけです」
里の入り口が見える場所にて。
僕たちはやっとの思いで這い出た座敷牢に別れを告げ。
申し訳程度に見張りをしていたのだろう。槍を構えていた村人を爆豪くんが気絶させた。
「…しっかし、なーんか妙な匂いがするな。

甘い匂いと…、汗が溜まったみてェな酸っぱい匂いだな」
「……コレ、嗅いだことあるぞ。
たしか、甘いのは前後不覚になるくらいには強烈な媚薬だったかな。
酸っぱいのは…、単純に汗の匂いだね。ただ、強烈に臭ってるだけみたい」
媚薬かぁ…。いい思い出がない。つづみさん相手だと、媚薬＝死になりかねないし。
教職者が腹上死なんて、笑い話にもならないぞ。
…というか、媚薬の匂いがここまで漂ってくるとか、絶対に碌なことになってないな。
「…あれ？薬対策してる俺らは兎に角、なんで副長さん平気なの？」
「その…、お恥ずかしながら、あの匂いは定期的に漂っておりまして…。嫌でも耐性ができてしまったのです…」
「なーるほど～…」
切島くんの疑問に、心底情けないのか、ため息をつきながら答える副長。
不全になってない？大丈夫？
僕たちのは薬対策…というより、緑谷くんのナノマシンが怪しい薬を分解してくれているだけなのだが。女性陣がこの匂いにやられていないことの証明にもなるし、緑谷くん様々だ。
「取り敢えず、イズクテレフォンを探しましょう。この状態で見つかれば、すぐにやられ

てしまいます」
「それってコレか？」
「そうそう、それそれ」
がさり、と草陰からひょっこりと顔を出すメイドさん。
緑谷くんはその声と共に差し出されたイズクテレフォンを受け取り、「あーよかった」と胸を撫で下ろす。
「……ん???」
緑谷くんは直後、なんとも言えない表情を浮かべた後、前を見やる。
可愛らしいテディベアが、その容姿に見合わぬ渋い声で『出久様、こんにちわ』と軽く礼をする。
緑谷くんが困惑する暇もなく、爆豪くんが派手にすっ転んだ。
「こ、小春テメッ、なんでここに…!?」
「お前が呼んだんだろォがクソの爆豪」
誰が呼んだか、「メイド界の核弾頭」。爆豪くんでさえも、一種の畏怖を覚えるほどの音街家の問題児。
小春六花が、僕たちを木々にぶら下がりながら、見下ろしていた。

邪悪なるもの

「……きりちゃん。…怪我だらけ、か」
「赦さねェ…!!あんなガキに手ェあげるなんざ、男の風上にも置けねぇ…!!!」
「落ち着け。変に殺気出す方が見つかりやすい。堪えろ切島」
「ふんじばっておきなさい。知り合いに男色の方が数十名いるので」
「先生は1番落ち着いてくれ」
　現在。僕たちは即席のギリースーツと、緑谷くんが用意していた双眼鏡で、東北家を覗いていた。
　中にはずん子さんたちしかおらず、他はどこか別の座敷牢に捕まっているらしい。その救出には、爆豪くんと小春さんが喧嘩しながら向かっていた。
　東北さんは現在、里長の不興を買ったらしく、嫌と言うほど痛ぶられている。正直、見てられない。
　僕は生徒に手を出されて黙ってられるほど、人が出来てない。だから、色情魔には1番嫌な方法で報いを受けてもらおうか。
　そんなことを考えながら、僕は携帯を操作して知り合いにメッセージを送った。

「…で、どうするよ?
　あの家に潜入するったって、ガスマスクつけた見張りが結構いるぞ」
「気配の殺し方は師匠に習ったろ。
　即効で殲滅する」
「アレはどうする?」
「中に入ってからな。外だと目立つ」
　皆で作戦を立てると、揃って頷き、気配を殺す。つづみさんも目の前で消えることがあるから、特に驚きはしないが。
　にしても、まさか生身の…それも衆愚に振り回されているだけの人間相手にスーツを持ち出すとは。
　切島くんに関しては…アレはスーツって言うよりはほぼ裸体だし。「漢らしいから俺は大好きだ!!」って興奮気味に言ってたなぁ。
「……僕たち、どうしましょうか?」
『どうしようと言われても、私は六花のサポートロボだ。武器を出すくらいしかやることがない。そして、その武器は既に六花が持っている。
　つまり、全くの役立たずなのだ、今の私』
「それ自分で言います?……僕もどっこいですけど」

荒事に関しては、僕は非力もいいところだ。
小学校襲撃とかあったら、多分、生徒たちの肉壁になって死ぬ。僕は存外、入れ込みやすいタイプみたいだし。
役に立たないなりに頑張ろうと月並みな使命感で下手に動けば、普通に捕まる。
どうやって時間を潰そうか、と考えていると、副長さんが口を開いた。
「私は…、少しやることがあるので、この場を離れます。また会いましょう」
「気をつけてくださいね。また捕まっても助け出せるとは限りませんので」
「肝に銘じておきますよ」
去り行く副長さんを見送り、ラキストンと目を合わせた。
「…取り敢えず、里が半壊しないことを祈るばかりですね」
『流石に弁えてはいるだろう。約一名の安全は保証しないが』
「殺したりはしないでしょうよ」
♦?♦?♦?♦?
「……ふむ。傷口から染み込めば、よく効くんだがな」
「きりちゃん!!」
現在、私は傷だらけで倒れ伏していた。
こんなに傷ついたのは、去年以来だっけ。

経緯としては、私たち家族に、ご自慢の媚薬が通じないことに苛立ったようだ。引き連れていた女は、あんなに乱れていたのに。

それもそのはず。私は無断で、家族全員に緑谷先輩の発明したナノマシンを投与しているのだから。

両親や祖父母は兎に角、私たち三人は無個性という欠陥を持って生まれた、凡人以下の存在。だから、常に失う怖さを抱かなければならなかった。その怖さから解放されたのは、緑谷先輩が、先生が立ち向かい方を教えてくれたから。

先輩たちが、先生が背中を押してくれたから、私は理不尽と戦う決意ができた。

だけど、ずん姉様は違う。「アイドルになって、ずんだカフェを開く」という夢のために、無個性なのに雄英の普通科に入って、名を売ろうと足掻き続けているけど…。

私は東北きりたんとしては紛い物だ。紛い物だけど、この東北ずん子の…私だけのずん姉様の家族である私にはわかる。

その瞳の奥には「諦め」があったことを。

凡人以下にしかなれない無個性であることを、雄英に通うからこそ自覚してしまったのだろう。

私は残酷にも、姉を諦めの世界へと連れていくことを拒否したのだ。

「…薬で言うこと聞かそうなんて、見下げ果てた男ですね。ウチのボンバーマンの方が

まだ紳士的ですよ」

「……さっきから、キミの妹は、随分と生意気なようだ…なっ!!」

瞬間。私の腹に、里長の蹴りが入る。

胃液が出そうになるが、こんなのなんて、大したことない。

もう二度と、屈しないって決めたから。

「きりちゃん…、もう…」

「狭い世界で踏ん反り返ってるだけの小物に、屈してやるもんですか…」

「っ、煩いっ!!ここは俺の里だ!!俺の国なんだ!!」

里長の踏みつけるような蹴りが、私の体を傷つける。こんなの、大したことない。

先輩たちは、もっと痛い攻撃を受けていた。もっと痛い思いをしていた。

私はあの人の手助けをするって決めたから、この程度で泣き喚くことはしない。

再生が追いつかないほどに怪我をするから、今の私はアザだらけだ。

「死ね、死ね、死ねっ!!お前がこの家で1番気に入らなかった!!

俺の純子の肌を引っ掻いて傷つけた赤子のクソガキがぁ!!俺の純子を連れて逃げていったお前は、存在価値すらないんだよ!!!詫びろ、オラっ!!今すぐ死んで俺に詫びろ!!!!」

「……バーーーーーーーカ…!!

テメェが社会的に死ね……!!」

私が中指を立て、舌を出す。
里長が声にならない絶叫をあげて、私を蹴ろうとした、まさにその時だった。
「おい。ウチの可愛い後輩とその家族に、なにしとんや？」
怒気で髪が揺れ動く、修羅の影が姿を表したのは。
家の中は冷え込んでいないというのに、吐く息が煙のように見える。爛々と光る目が、里長を捉える。
里長がそれに気づくも、もう遅い。床を蹴って飛び上がったその影は、ありったけの声を振り絞り、蹴りを放った。
「ミーティアァァァァァァ!!ツインストラァァァァァアイクッ!!!」
「ぐほおぉおっっ!?!?!」
影…麗日先輩の蹴りが、里長の顔面を見事に捉える。
鼻血を吹いて仰反る里長の顎をもう一度蹴り上げ、麗日先輩は手を払う。
「一回目はきりちゃんの分、二回目はお気にの服盗られたウチの分や」
ピクピクと痙攣する里長。
麗日先輩は私の前まで歩み寄ってしゃがみ込むと、笑みを浮かべた。
「死なんで良かったわ…。よぉ頑張ったな、きりちゃん…」
「……先輩たちみたいに、いきませんでしたけど…ね」

「……ううん。かっこ良かったよ」
３０分も殴られ、蹴られ。
私の体が限界に達していたのか、安堵と共に力が抜けていく。立ち向かう決意をしたのはいいけれど、まだまだ体は子供…か。
早く、先輩たちみたいになりたいな。
♦？♦？♦？♦？
「…終わってたな」
「ね」
「おっ、麗日、無事だった…、なんか服変わってね？」
僕たちが現場に到達した頃には、麗日さんによって全てが終わっていた。
トレンチコートを着こなす麗日さんの姿を見て、部屋に入った切島くんが訝しげに首を傾げる。確か、彼女は簡素なタートルネックとジーパンを着ていたくらいで、上着は家の中に放置していた筈。
それがこんなオシャンティになるなんて、何かあったとしか思えない。
僕たちが疑問に思っていると、麗日さんは淡々と答えた。
「逆バニーにされてたからあかりちゃんに作ってもろた」
「ぎゃっ…!?!?」

「逆バニーってなんだ？」
「轟くん聞かなくていいから!!」
中学生になんてモン着せてんだ!?
あかりさんも似たような格好だったのだろうか。果てしなく心配だ。
きりちゃんがこの状態な上、他の女性陣にも妙なことを仕出かしていないとも限らない。
僕は倒れ伏す里長に目を向け、死体蹴りしたい気分になったが、やめておいた。流石にそれはヒーロー云々より、人としてやっちゃいけない気がする。
「…おっ、これが里長の神器か」
「錫杖…ねぇ。煩悩を除く仏具のはずなのに、なんでこんな欲望まみれのやつの手に渡っていたのか…」
僕は拾い上げた錫杖を、イズクテレフォンで浮遊大陸へと送り込む。
しょうもない目的で使われていたとはいえ、人工個性の貴重なサンプルの一つだ。人工個性による細胞の破壊を止める薬の開発に、役に立つかも知れない。
「神器…。あっ、ずんだもんは!?ずんだもんは無事ですか!?」
倒れ伏したきりちゃんの看病をしていたずん子さんが、慌ててあたりを見渡す。
面倒見のいい彼女のことだ。自身の神器となったずんだもんのことを、新しい妹のよ

うに思っているのだろう。
ずん子さんに、麗日さんが笑みを浮かべて答える。
「大丈夫や。ウチが全力疾走して置いてきてしもたけど、もうすぐ着くはず…」
と。彼女がそう言い放った時だった。
「助けてなのだァァァァァァっ!!!」
ずんだもんの甲高い悲鳴が聞こえたのは。
怒ったきりちゃんに対して放った、緊張が抜けるような悲鳴じゃなく、緊迫感と悲痛がこもった悲鳴。
僕たちが慌ててその場を飛び出そうとしようとした、まさにその時。里長の体と壁が真っ二つに引き裂かれ、噴水のように血液が噴き出た。
「きゃあああああっ!!!」
「ずん子さん、見ちゃあかん!!」
「っ…、そ、即死だ…」
「ッソ、誰だ!?」
明らかに手の施しようのない死体を前に、皆に戦慄が走る。
助けられなかったのは、もう仕方がない。どうしようもない相手でも、命は命だ。悔やむより前に、これ以上奪われることのないように、今出来ることをしないと。

僕たちがスーツを換装しようとすると、続け様に壁が引き裂かれる。
切島くんが一歩前に出て、両腕を硬化させ、その斬撃を受け止めた。
「っ…、だぁああっ…!!
コイツ、簡単に…、骨を…絶てるくらいに…、強ェぞ…ッ!!」
「切島くん…っ!?ほ、骨まで…」
硬化していても、受け止めきれなかったのだろう。切島くんの切り傷は深く、骨だろう乳白色の物体までもが顔を出す。
慌てて緊急治療用のナノマシンを投与し、切島くんの傷を慌てて塞ぐ。
轟くんはというと、射線が見えないように氷で防壁を作り、倒れたきりちゃんを背負った。
「取り敢えず、壁際はまずい!!イタコさん、隠し部屋に案内してくれ!!」
「わ、分かりましたわ…!」
今の今まで呆然としていたイタコさんが、慌てて部屋を出ようとする。
と。誰かにぶつかったのか、「きゃっ」と短い悲鳴をあげ、その場に尻餅をついた。
僕たちが身構えていると、その奥から姿を表したのは…。
「ふ、副長さん…?」
「危ないぞ、アンタ!!今、ここは攻撃されてる!!」

切島くんが叫ぶも、副長さんは表情を変えずに、そのまま歩みを進める。
「ええ、知ってますよ」
ぞくり。体が芯から冷えてしまうほどに、低く平坦な声が響く。
もしかして、僕たちは何か重大な見落としをしていたのではなかろうか。そんな考えが頭をよぎるも、もう遅い。
副長…いや、米原は口の端を吊り上げ、告げた。
「何故なら、私が君たちの前でこのバカを殺しましたからね」
「副長…!?な、なんで…?」
「……地下のあの死体も、お前の仕業か…!」
困惑を露わにする切島くんを下げ、轟くんが臨戦態勢で問い詰める。
米原は薄寒い笑みを浮かべながら、里長の死骸の頭部を踏み潰した。脳漿が散乱し、僕たちの足元まで広がる。
ずん子はその凄惨な光景を目の当たりにし、カチカチと歯を鳴らした。
「ええ、そうですよ。私の計画に乗らず、里長から出る甘い汁を啜るだけのヘタレなんで、つい殺してしまいました。
苦労しましたよ?あの座敷牢に隠すのは」
「僕らが散策した時、死体があったのは…、里長もあの座敷牢の存在を知らなかったのか

…!!」
「ええ、そうです。私だけは狸寝入りをしただけでしてね。
あなたたちを私の場所で監視しておくと、その身柄を運び込んだのですよ。…まぁ、只者ではなさそうだったので、利用することを思いつき、私も牢に入ったわけですが」
冥土の土産とばかりに暴露する米原。
僕たちの怒りが爆発する中、米原は更に歪な笑みを浮かべ、告げる。
「私は里長殺しをなすりつけ、東北純子を抹殺できればなんでも良かったのですが…。
あなたたちが来てくれて助かりました。罪をなすりつける相手ができて」
「…ちょっと待て。なんでそこでずん子さんが出てくる?」
ずん子さんが呆然と米原を見るのを庇うように、僕が軽く前に出る。
それに対し、彼もまた一歩前に出て、息がかかるほどの距離で僕の顔を見つめた。
「そりゃあ出ますよ。私の狙いは、最初から『純那弓』なのですから」
言って、彼が取り出したのは、紛れもなく『純那弓』だった。

自慢のお姉ちゃん

「ず、ずんだもん…!!」
「この弓はそんな間抜けな名前じゃないんですよ。お前たちは知らないでしょうが」
ずんだもんの意識は、すでに途切れているのだろうか。あの小うるさい声が聞こえない。
先ほどの悲鳴は、ずんだもんが米原に襲われたものだったのか。
あんな小さな子供相手に手をあげるとは、この男も、里長と同じ類だ。自分以外の人間を、心底どうでもいいと思っている、救いようのない人間。
この場で倒してもいいが、ずんだもんが人質に取られているのが痛い。それに、何をしてくるか分からないのも、警戒を引き上げる要因となっている。
「ずんだもんの何を知っている…!?」
「あなたたちも、東北家に来たのだから、伝承は聞いているでしょう？
私の家にも伝承がそこそこ残っていてね。その中には、純那弓の『真の力』が残されていたんですよ」
――――射抜いたものを持ち主の気質に『染め上げる』異能を込めることができると

ね。
染め上げる…。それが事実なら、コイツがやろうとしていることはなんだ？
僕らが身構えていると、米原は突然涙を零す。
「ああ…。あと一歩だ。あとは、この小娘を殺すだけで…!!
どれだけ夢見ただろう…！嗚呼、嗚呼…!!二十年の時を経て、漸く…この終わりに向かうだけの里を救える…!!」
…話が少し見えてきた。分からないところはあるものの、取り敢えずヤツの目的は、「ずん子さんの神器を使って里を救おうとしているらしい。
目的は共感する。この里は、はっきりいうと限界集落の中でもひどい部類だ。若い女は里長が独占しているし、若い男はそもそも姿を見ない。
なんとかしようと動くのは、良いことだと思う。だけど、犠牲の出るこのやり方だけは、間違っている。
「神器を使うんなら、ずん子さんを殺す必要はないだろ」
「……いや。ずんたもんが言うとったんやけどな、神器は認めた人間しか使えへんっちゅう誓約があるらしいんや。
要するに、ずん子さん殺して、自分が次の使い手に選ばれようって魂胆なんやろ？」
浅はかやな、と付け足し、ずん子さんの前に立つ麗日さんと切島くん。

米原はその言葉を鼻で笑うと、手袋をした手を徐に見せた。
「コレが私の神器でしてね。『簒奪者ノ手』とでも呼びましょうか。
殺した人間の神器の使い手を『上書き』できる異能が備わっています。
この短剣…『旋風』は、私の親を殺して手に入れた神器なんですよ？
…まぁ、里長には把握されていたので、下手に動けませんでしたが」
「……っ、この、ゲスが…!!!!!」
親を嫌っているとはいえ、その凶行だけは犯さなかった轟くんが、地の底から響く声で怒りを露わにする。
「さてと…。時間稼ぎも終わりましたし、お喋りはここまでにしましょうか」
米原の姿が掻き消える。
奴の個性か、神器かの判別はつかないが、気配はまだこの部屋にある。
このままでは危ない。僕たちはスーツに換装し、ずん子さんたちを守るべく陣形をとる。
「…思うけど、俺半裸だけど大丈夫だよな？
今さっき骨見えるくらい切られたんだけど」
「粒子状のイズクメタルが個性の発動に反応して、細胞と結合して頑丈になるから、大丈夫だよ」

「そのメカニズムは分かんねーけど、お前が大丈夫って言うなら大丈夫か!!」
切島くんが言うや否や、斬撃が四方八方から襲いくる。
頭を伏せるずん子さんを守るように、僕たちはその斬撃を受け止め、衝撃に声を漏らした。
「…っ、再生が追いついてない…！」
流石は人工個性…！」
「斬撃の方向から場所を特定しようと思ったが…、ここまでやられると無理だな…!!」
「そういや、アイツ…っ、さっき室内なのに靴履いてたぞ…!!」
「高速移動もお手のものってかぁ…!?」
どれだけ人の血を吸えば気がすむ…!!
ふつふつと怒りが湧き上がってくる。
救うための犠牲なんて、必要ない。それを認めてしまったら、なんのためにヒーローは…僕たちは居るんだ。
これ以上、失わせないためにも、今ここでヤツを止めなければ。
しかし、相手は生身。下手に攻撃すれば、余裕で死んでしまう。
こうして悩んでいる間にも削られる鎧に焦燥感を覚えながら、思考を巡らせた。
「…緑谷。この斬撃、ただガムシャラに撃ってるだけだ」

「轟くん、本当？」
斬撃に耐えている傍、轟くんが耳打ちする。
斬撃が着弾する音で聞こえないくらいの声音だが、僕たちにははっきりと聞こえた。
「鎧が再生してくのは目に見えてるはずなのに、重ねて斬撃を撃ってこない。床を見る限り、狙いもバラバラだ」
「……僕たちがこの場から動けないことを分かってるだけの状態…あ、成る程」
「要するに、アイツがあの速さに慣れてねェんだろ…！」
動きが速くなったからと言って、相手がその速度に慣れているとは限らない。そして、相手は場所を悟られないよう、動き回って斬撃を放っている。
それらを加味すると、僕たちが取るべき行動は、たった一つ。
「轟くん、お願い」
「コキュートス・スパイダー」
轟くんが掌を握るとともに、氷が蜘蛛の巣のように広がっていく。
その途中にある氷が砕けると共に、何かが落ちる音が響いた。
「っし、まかせろォ!!」
切島くんがいち早く駆け出し、音の方向へと迫る。あんな雑な斬撃を繰り返していたヤツが、立て直しまでも素早く行える訳がない。

腕を硬化させると共に、粒子状のイズクメタルが切島くんの腕と結合し、より攻撃的に鋭くなる。
切島くんは強く踏み込むと、咆哮しながら拳を放った。
「いっぱァァァァァッっ!!!」
「ぐはぁっ!?」
直撃した米原は、そのまま数回バウンドして、棚に突っ込む。
その際、純那弓が吹き飛び、ずん子さんの足元に転がった。
…きりちゃんたちには、後で謝っておこう。
流石に気絶したかな、と思っていると、再び斬撃が飛んできた。
「……何故、どいつもコイツも理解しないんだ…!!」
飛び散る埃が払われ、その姿が露わになる。
鎧なのだろうか。やけに禍々しいオーラを放つ鎧に身を包み、武装する米原。
先ほどの理知的な態度は見えず、ただ激昂する怪物が、こちらを睨みつけていた。
「誰も、理解するわけないだろ…。
犠牲が出る方法を悩みもせず、進んで選ぶようなお前の理想なんか…!!」
「黙れェ!!この陸の孤島で暮らしていない貴様らが、『オレ』の事を分かったように語るんじゃねェ!!!」

先ほどの知性は何処へやら、ただ激情を振り撒くだけの声に、僕たちは思わず肩を震わせる。

ひたすらに隠し続けていた、本性とでも言うのだろうか。副長だった仮面はすっかり剥がれ落ち、ただ暴威を振るうだけの獣が、咆哮するように捲し立てる。

「この里は世界の縮図だ!!一部の力あるものが好き勝手にのさばり!!その他大勢は最低限の自由さえ与えられない!!

個性という力を持たずに生まれたオレが、誰よりもこの世界の残酷さを知っている!!オレが力によって終わりに向かうだけの世界を救う…!!オレこそが、世界から個性を消し去り、平和な世界を築き上げる救世主!!

だから、オレの救済の邪魔をするなァァァァァァアッ!!!!」

世界から個性を消し去る。まずい。それだけはさせてはならない。

あかりちゃんのいたという、戦禍が人の体と心を壊していく未来。

その未来がより残酷になって訪れたきっかけは、個性の消失。

あかりちゃんをあれだけ追い詰めた世界になんか、させるものか。僕がこれから救う未来を、誰にも奪わせてなるものか。

彼の気持ちに共感は抱くが、理解はできない。したくもない。

「それで死人を出してもか…。アンタが、力で人から自由どころじゃない、もっと大事な

ものを奪ってもか……！」
「ンなモン知るかァァアアッ!!!
　このカスが支配してた頃に比べりゃ、何億倍もマシだろォが!!!」
「テメェ、マジでいい加減にしろよ…？」
　既に原型も残らぬほどにグチャグチャになった死体を、米原が強く踏み潰す。
　飛び散る血肉に、切島くんがギリっ、と奥歯を噛み締め、ありったけの怒りを込めて睨みつけた。
　コイツは、僕たち無個性が中途半端な心持ちで力を持った末路なんだろう。僕が先生に生き方を教えてもらったのとは違い、誰にもそれを教えてもらえなかった末に行き着いた、狂気の救済欲。
　親を殺したことでタガが外れたのか、完全に暴走している、救いようのない敵。
　こうなればもう、倒してふん縛るしか方法がない。
「取り敢えず、ずん子さんたちから引き剥がさなきゃ…！」
「……情けないお姉さんで、ごめんね」
「何言ってんや、こんなん怖くて当たり前や。情けないことないで」
「……」
　麗日さんは言うと、一気に間合いを詰め攻撃に参加する。

轟くんが避難を促すと、ずん子さんは多少渋りながらも、弓を回収してその場を去っていった。

「待てェェェェェェッ!!!」

瞬間。その怒号が発せられると共に、斬撃が押し寄せた。

♦?♦?♦?♦?

情けない。情けなくて、涙が出てくる。

私…東北純子は、何の力も持たないどころか、一般人なら誰でも持っている個性すら持たずに生まれてきてしまった。

姉のように、神職の才に恵まれているわけでもなく、恵まれていたのは容姿だけ。アイドルになれば、自分の武器が増えて、普通に生きていけるんじゃないかと思って志し、一度だけオーディションを受けたことがある。

…言いたくはないが、「映える個性じゃなきゃね」という理由で落とされた。それ以外は完璧だったね、と慰めのように褒められて、悔しくて三日間寝込んだ。

アイドルになって、ずんだカフェを開く。この夢は、私が好きなことをするために必要な肩書きが欲しいからという、可愛さのかけらもない理由から出てきた。唯一、家族や近所の人たちから褒められて、自信を持てた容姿でさえ、個性の前ではゴミクズ同然だった。

少しして、妹が生まれてきた。目に入れても痛くない、甘えん坊な女の子。

この子には、私や姉様のように、苦労の多い人生を歩んでほしくない。そんな願いを抱いて、毎日のように神棚に祈った。妹を普通に生きていける体にしてください、と。

だけど、現実はそんな祈りを容易くへし折るほどに残酷だった。

妹も、無個性だった。少し達観したところはあると思っていたけれど、今思えば、それは一種の諦めだったんじゃないかと思う。

妹は、私が襲われたことをきっかけに、引っ越しについて来てしまったが故に、より広い世界の悪意を受けることになってしまった。

毎日のように病院に通って、「子供の個性の暴走もありますし」と宥められた。個性のない人間は、普通に生きることさえ許されないことに、妹は何も感じていなかった。

よく笑う子だったのに、少しも笑みを浮かべなくなった。私のせいだ、と毎日のように、自分を責めた。

そんな妹が変わったのは、去年、新学年になったばかりの頃。

担任の先生と同じ無個性として仲良くなり、毎日のように彼の家に入り浸るようになった。その中には、卒業した無個性の先輩も居るとかで、楽しくやっていると花が咲くような笑みで語ってくれたのを、今でも覚えている。

夏休み頃。妹が決定的に変わり始めたことを、私は妹の口から聞くことになった。

嬉しさ半分、劣等感半分だろうか。今でも甘えてくる妹を相手に、その劣等感を吐露する勇気は、私には微塵もなかった。

無個性という劣等を隠すためだけに、雄英普通科の枠を一つ潰して入学した私には、妹を取り巻く全てが眩しく見えた。

普通科に入ったのは、進学に有利だったからという、夢への諦めを込めた理由から。

無個性は、夢を見ることさえ許さないと思い込んでいたのに。その定説を、妹たちは呆気なく覆していった。

誇らしいと同時に、妬ましかった。

私はあんな風に輝けないと思えたから。私を守ってくれたこの子に誇れる姉になんて、もうなれないと思ったから。

抱き上げたこの子は、前に抱っこしてあげた時も、少し重くなっていた。

例え、由緒正しい神器を受け継いでも、私が出来損ないなのには変わりないから。

「……ずん子さん。アンタ今、相当酷い顔してるぞ」

「轟くん、思っても言わないでほしいな」

駆ける中で、轟くんが指摘する。

私が胸中を隠すように苦笑を浮かべごまかすも、轟くんは核心をつくように、私の瞳を仮面越しに見つめた。

「『アレ』を自分と重ねてるンじゃねェだろォな？」
アレ。副長…米原カズト。
無個性に生まれ、力無きゆえに奪われ続け、憤りで我を忘れ。挙句は、愛を注いでくれた親さえ手にかけた、狂い果ててしまった獣。
アレは多分、私の末路だと、私は無意識に思っていたのだろう。
轟くんの言葉に、胸が詰まるのを感じる。
「…与えられた愛を拒否するのは、すっげェ簡単なんだ」
「……？」
轟くんの顔は見えないけど。
悲しさ故か、声が少し、震えていた。
「…俺には、1番上の兄が居た。
…コレは、親父に最近聞いた話なんだがな。事の顛末は話さねェけど、兄は親父の愛と答えられない期待に押しつぶされて、壊れちまったんだよ。親父も同じように壊れてた。
だから、お互いにお互いの愛を拒否して…死んじまった」
轟くんはそれだけ言うと、私の瞳を覗き込むように迫った。
「頼む。俺の後輩に、俺の家族みたいな思いをさせないでくれ。

コイツの愛で、潰れないでくれ。コイツは、アンタがいなくなることを考えられるほど、大人じゃない。

俺みたいに、家族に無関心じゃない。自分の家族を、世界で一番愛してるんだ」

…そうだ。この子の弱さは、嫌ってほど見てきたじゃないか。

この子は、弱さを克服したわけじゃない。大阪から帰ってきたあの日。私に隠れて、嗚咽を堪えながら、ただ泣いていたあの日。

ただ、強がり方を覚えただけの、まだ小さな子供なんだ。

「だから、諦めないでくれ。下を向いて歩くんじゃなくて、前を見てくれ。

コイツが大好きな姉ちゃんを自慢できるように、少しでもいいから、強がってみてくれ。

コイツを守るためにも」

強がり方なんて、私は知らない。

だって、強がる前に諦めてきたから。争うことを捨てて、逃げてきたから。

きりちゃんの顔を見る。今更、何をやっても遅いとは思うけど。

いるはずのない神様。もう一度だけ、祈らせてください。私に、強がる勇気をください。

「ずん子さん!危ない!」

憤怒の獣が、私に凶刃を向ける。
私はきりちゃんを地面に下ろして弓を手に取り、その弦を引いた。
「未来の平和のために!!東北純子ォ!!犠牲となって死ねェェェェェェッ!!!」
「……捨てられない」
黄緑の閃光が、肌を焦す。風が辺りを薙ぎ、雲さえも形を変える。
捨てたものは沢山ある。諦めたものは、今更数え切れない。
でも、これだけは捨ててなるものか。
「お姉ちゃんであることだけは、絶対に」
一条の光が、辺りを黄緑に染め上げていく。
迫り来る凶刃すらも掻き消すその光景を前に、きりちゃんの声が聞こえた気がした。
――――――さすが、ずん姉様。

お前の救済なんて、誰も求めない

「……らしいと言えば、らしいけど」

ずん子さんを追いかけていった米原に追いつき、僕は目の前の光景を見て、ピクピクと目尻を動かす。何が起こったのか分からず、目を白黒させている米原。

そして降り注ぐ『ずんだ餅』。

もう一度言おう。ずんだ餅が降り注いでいる。何度でも言おう。ずんだ餅が降り注いでいる。

…どう言う状況？

僕たちが目を白黒させていると、米原が悲鳴に近い声を上げた。

「つ、旋風!?旋風が…、ずんだ餅に!?」

彼が手に握っていた短剣。旋風と呼ばれる、幾人もの人の血を吸った凶刃。

のはずが、彼が握っているのは、短剣の形となったずんだ餅であった。

無論、即座に崩れて、地面に落ちる。勿体ない気もするが、今なおずんだ餅が降り注いでいる以上、今更か。

「……えっ何これめっちゃ美味い」

「…なんだこれどういうメカニズムで無から生まれたずんだ餅が美味くなんの？」
　口元だけが空いている麗日さんと切島くんの二人が、降り注ぐずんだ餅の一つをひと齧りして、その美味に驚愕している。
　地面を激しく抉り取った矢が生み出すずんだ餅に、皆が戦慄する中。僕はふと、あることを思い出した。
「…もしかして、このずんだ餅がずん子さんの気質ってことじゃない？
　いい人ではあるけど、ずんだ狂いだし」
「なおさら、アレの手に渡らせるワケにゃいかねーな」
「あんな爆豪にクズさを足したようなヤツが撃てば、周りの奴全員アレになるぞ」
　ずん子さんの放った一撃は、僕たちの気をより引き締める結果になった。
　何より、旋風とやらを封じたのは大きい。ずん子さんには悪いけれど、彼女にも少しばかり力を貸してもらおう。
「ずん子さん。相手の神器、片っ端から撃ち落とせますか？」
「……ちょっと待って。
　ねぇ、ずんだもん？起きてる？」
『……ん、うぅ、体が痛いのだ…』
　ずん子さんの声に呼応してか、苦しげに返答するずんだもん。

どうやら、意識は戻ったようだ。
手にまとわりついたずんだ餅を引き剥がし、狼狽する米原を見て、ずん子さんは問うた。
「能力って、人には効かない？」
『へ？…ずん子が狙ったものにしか、効果はないのだ。
…ずん子とボクの相性が良すぎて、その軌跡からずんだ餅が生まれちゃうけど』
「それはこの際いいよ」
よくないと思う。確実に腐るし。
そうツッコミを入れようとしたが、取り返しのつかない死と比べれば、散乱したずんだ餅は後でどうとでもなる。
ずん子さんは狼狽する米原めがけて、弓を引き絞る。弓道着でも、手に☒があるわけでもないのに、手は一切ぶれることなく正確に相手を捉える。
その姿は、まさしく『狩人』。
「……っ、どこまでもふざけやがって…!!
この世界を平和に導く力で、こんな巫山戯た現象を巻き起こすなど、万死に値する!!!
骨の一片も残さずくたばりやがれ!!!」
米原が怒号を放ちながら、斧を取り出し、勢いよく振り下ろす。叩きつけた地面が隆

起して竜を象り、僕たちにその顎門を向け迫る。
ずん子さんはそれに臆することなく、凛、と口を開いた。
「その平和で、あなた以外の誰かが笑えるって、本当に言えるんですか」
ずん子さんが放った矢が竜を貫き、薄く弧を描くように、米原の靴に着弾する。
米原の高速移動が封じられた。僕はそれと同時に駆け出し、拳を握る。
僕の進む方向上には、ヤツを超えて、拳を硬化させて迫る切島くん。
この調子なら僕の方が速い。強く拳を握りしめて、鎧に覆われた腹を殴る。
「切島くん、おね…がいっ!!」
「かっ…!?」
「任されたァ!!」
受身を取ったのか、派手に吹き飛ぶ米原の腹部めがけて、切島くんの下からの一撃が放たれる。
一瞬の停滞と共に、上方向に吹き飛ぶ米原。
ずん子さんがすかさず矢を放ち、鎧をずんだ餅へと変える。
吹き飛ぶ米原を、険しい顔つきの麗日さんが待ち構えていた。
「こンのエセ救世主!!今まで殺してきた人の分までまとめて食らえや!!!」
麗日さんがいつの間にか両手に持っていた糸を引き、地面の一部を浮遊させる。

それを思いっきり引くと、浮いた地面に叩きつけられた米原を手前で止める。
「っ、な、なにを…」
「ふんっ!!」
米原の声を待たず、麗日さんの蹴りがヤツの顔面に突き刺さる。
それだけでは終わらない。他者の命を顧みない所業の数々には、相当頭に来ていたのだろう。
麗日さんは咆哮と共に、何発もヤツの体に蹴りを浴びせ、確実に戦意をへし折っていく。
最後の一発が原型も残らぬほどに腫れ上がった顔に突き刺さると、地面も砕け散り、辺りに散乱する。
しかし。落下していく米原は、口内に仕込んでいたのだろう。これ見よがしに出した丸薬を噛み砕き、飲み込む。
と。彼の体が即座に再生し、体勢を整えてそのまま着地した。
「残念だったなァ…!お前らと同じように、こっちにも再生手段はあるンだよ!!
しかもこの丸薬は、オレの口の中に仕込んだ神器を取り出さない限り…」
「ねぇ」
と。米原が何かを言おうとする前に、ずん子さんのドスの効いた声が響く。

皆が何事かと彼女の方を見ると。かつてないほどに怒りを露わにしたずん子さんの顔があった。

「その神器。私の幼馴染の家が受け継いでいたはずだよね？」

首筋からこめかみにかけて、血管が浮き出ている。呼吸は心なしか、蒸気のように彼女の怒気を象るように見えた。

そんなずん子さんの怒りに、米原は嘲笑で返した。

「ああ、あのアバズレ…!! 一昨日あのカスに捨てられたから殺して埋めてやっ…」

瞬間。ずん子さんは弓を投げ捨て、思いっきり米原の頬を殴り、地面に叩きつける。

あまりに一瞬の出来事だった。

垂れ下がる髪が、ずん子さんの怒りに燃える顔を覆い隠す。

ずん子さんが手を構えると、弓が一人でに動き、その手に収まる。まさか、米原ごとずんだ餅に変える気なのだろうか。

僕たちが一瞬そう思うも、ずん子さんは手にした弓を引くことなく、腕を下げる。

「貴方を殺す気はない。貴方と同じ場所に落ちるなんて、私には無理です。でも、この連鎖を断ち切るのは、この弓を受け継いだ私が、屍の思いを背負ってやるべきこと。

貴方が積み上げてきた屍の象徴全て、私色に染め上げます」

ずん子さんは弓を放ち、ヤツの所持する神器を次々とずんだ餅へと変えていく。

米原は「やめろ」と半狂乱になって暴れ出すが、取り出す神器全てがずんだ餅に変えられて、ダラダラと冷や汗を流す。

軈て。彼が野望の要としていた簒奪者ノ手だけが、彼の手に残った。

「や、やめてくれ…。お願い、これだけは、これだけは…!平和のために…」

「あなたじゃない。この子たちが…。自分を削り、血反吐を吐きながら前に進む『ヒーロー』が、この最低な世界を変えてくれる。

私も、その助けになる。私も、世界を変えていく。この子たちのように、犠牲を強いることなく、自分だけを削って」

ぱすっ、と軽い音が響く。

野望を打ち砕く音。野望が崩れ去る音。

全ての積み重ねが無駄になり、取り戻すことさえ叶わなくなった右手を見て、ワナワナと震える米原。

ずん子さんはその上から退き、告げた。

「お前の救済なんて、誰も求めない」

米原が甲高い絶叫と慟哭を放ち、その場に崩れ落ちる。

全てを失った男を横に、ずん子さんは弓をずんだもんに戻し、その頭を撫でた。

「…ありがとう。私に、力をくれて」

「ありがとうなのだ。ボクを正しく使ってくれて」

韋駄天、芸術に足を止める

春空は曇り

あの魔窟から帰ってきたのは、新学期が始まって一週間後だった。

なにせ、数えきれないほどに大量の死体が発見されたのだ。加えて、違法性のある媚薬を焚いていたことや、何人も廃人と化した女性も発見されたことで、里の異常性が大々的に報道されることとなってしまった。

無論、僕たちも事情聴取を受けることとなり、今度こそバレるかと思ったが、口裏を合わせていたのに重ね、副長さんが廃人同然に受け答えが出来なくなったらしく、緑谷くんたちの正体がバレることはなかった。

神器は純那弓とあの錫杖…そして、東北家が有するものを除き、大半が消えたか、ずん子さんによってずんだ餅にされてしまった。

消えたものに関しては、ずんだもん曰く、「神器が里に愛想尽かして永遠咲に帰った」とのこと。

ずんだ餅に関しては、緑谷くんが全てを回収し、付着した土やら菌やらを払い、十分に食べられる状態にして、食糧問題で困っている場所に配り歩くことにしたらしい。

その量は、あのあかりさんでさえも全体の半分だけを食い尽くし、「もう無理です」と白旗を上げる始末。胃袋の容量というより、ずんだ餅の味に飽きたようだったが。…いくら美味でも、アレだけ食べればそうなるか、と妙な納得を覚えた。

それでも相当な数が残っているので、配り歩き、少し前になってようやく全てを消費できたところなのだ。

座敷牢に閉じ込められていた人たちはというと、外の人もいれば、里の人もいたらしい。なんにせよ、僕たち以外の人間は揃って入院することとなったようだ。何人か、死んでしまった里長の子を産んだ、または身籠った人も居たらしいが、子供の処遇に関しては、音街家が責任を持って里親を探してくれたらしい。無事に全員引き取られたと聞いた。

ただ、捕まっていた男連中は僕たちを除き、全滅していたとのこと。どれも真っ二つに切られた形跡があり、あの副長が処理を行なっていたことが窺える。

悪習と衆愚に振り回された被害者として、東北家の皆様は世間からの同情を向けられ、折寺へと越してきた。

永遠咲は緑谷くんのラボに運び込まれ、東北家はすっかり「普通の家族」としての生活を送っている…というのを、その家の近くでテント暮らしをしている少女…四国めたんから聞いた。

情報料は商店街の肉屋のコロッケだった。僕に扶養されてるのは覆しようのない事実なのだから、いい加減家に入ってきて欲しいのだが。

そして、緑谷くんがクソみたいな集会で絶叫したのを最後に、一月は既に終わり。

今は不安を抱えたまま迎えた2月末。冬場の寒さが和らぎもせず、学年の終わりが見える中。僕は一枚の招待券をまじまじと見つめていた。

「先生、どうかしました?」

「……六年前、バイトで世話した子供から、こんなものが届きまして」

相変わらず、僕の家に入り浸るクソガキと緑谷くんが、僕の持つ招待券を覗き込む。

この二人、こういうのに興味なさそうだが。

「えっと…、サイン会?『春空』…?」

「これで『はる　うつほ』というペンネームらしいです。現在17で、一年前から小説家をしてるんですよ、その子」

この子の親が、「中学受験をさせたい」と希望し、塾に入れたことから、この子との関係は始まった。

その塾は、将来の心配全てが終わった僕が、暇を持て余して入った、最初で最後のバイト先だ。しかし、この塾は受験期の高校生も多く通っており、必然的に受験生でない小学生への優先順位が低かった故に、その一年だけは、もっぱら僕が面倒を見ていたの

である。
今でも連絡を取り合う中であり、聡明中を卒業し、普通科ではあるが、雄英に受かったと聞いた。無個性だし、仕方ないとは思うが。
…二年連続でずん子さんのクラスメイトだったらしい。「ずんだ餅が好きな子が今年もいた。ずんだ餅そのものに嫁ぎそうな勢いの狂気じみた愛を感じる」と文体からも戦慄していた。
「17の高校生が小説家でサイン会ですか。世の中わからないもんですね」
「ラノベ…はタイトルと出版社からしてなさそう。純文学ですか？」
「ええ。ちょっとファンタジックでセンシティブですが」
まぁ、あの文体なら分かりそうにはないが。
出版されるたびにいただいて、暇つぶしのために読んだことがある。
恋に恋する純愛モノから、母を求めて源氏物語ばりの歪んだ努力を繰り返すレズビアン作品など、愛の描き方には余念がないように感じた。
18の女が母に似た幼稚園児に赤ちゃんプレイ…18の方が赤ちゃん側…をかます表現には物議を醸したらしいが、中にはもっと攻めた表現があったからと通ったらしい。それを差し引いても、美しい言葉遣いではあったが。
と。緑谷くんが何かに気づいたようにあたりを見渡すと、「うぉっ」と声を漏らした。

僕も同じようにそちらを向くと。かってないほどに目をかっ開いてこちらを見つめている轟くんの姿があった。

「うぉおっ…」

ビビった。

普段ダウナー気味な彼が、ここまで興味を示したのは初めてだ。…その眼光は、死ぬほど怖いが。

「先生。春先生と知り合いってのはマジか?」

「……え、ええ。まぁ…」

食いつきがすごい。息がかかるほどに近づくに彼に、僕は思わず身を引く。純文学を嗜むことは知っていたが、ここまでとは思わなかった。

「…一緒に行きます?ヒメちゃんたちも」

「行く」

「本は苦手だけど行くー!」

「わ、私も…」

コレは、何人か連れていかなきゃダメなパターンじゃなかろうか。

僕はそれに戦慄しながらも、ため息を吐いた。

♦?♦?♦?♦?

私立聡明中。摩天楼が揃い並ぶ東京の中、最新の設備を導入して、生徒の学びに力を注ぐ日本有数の進学校。

雄英ヒーロー科への進学率も高く、毎年一人は聡明中出身の生徒が居るという逸話があるほど。無論、逸話などではなく、創設以来学校に携わっている教師からは、「毎年一人、多い時は三人は合格者が出る」という話が聞ける。

そんな誉れある学校故に、中学受験とは言え、倍率は驚異の６０倍。推薦もハードルが高く、まずもらえないと考えた方がいい。それに勝ち抜いたとしても、ハイスピードかつ難解な授業に根を上げて、公立に戻っていく人間もしばしば居る。

そんな激動の一年を終える目前。学年末試験も抜かりなく対策し、ボクこと「飯田天哉」は、学年一位の称号を冠した結果表を手に、軽く拳を握る。

この調子ならば、模試の判定も明るいのではなかろうか。そんな考えが頭をよぎるも、その油断はいけないと気を引き締める。

ボクの手には、もう一つ紙がある。そこには、全国模試の結果が書かれている。

今度こそ、と願うように、僕は勢いよく紙を開いた。

「…緑谷出久、爆豪勝己、轟焦凍、八百万百…、飯田…」

五位。以前までは三位だったというのに、急激に落ちたように感じる。

特に満点続きで、監視を幾人も用意された部屋で解いていたと言う緑谷出久。今回も

また、彼の名の横には、これ以上付け足しようのない点数が刻まれている。
一方で自分の点数を見る。そこには、緑谷出久の点数から五点だけ落とした数字が刻まれていた。
「……はぁ」
家族は「十位以内なら落ち込むことはない」と慰めてくれるが。それでも、この結果には、自分自身が納得ができない。
ヒーローというのは、皆の模範となる者の称号。模範となることを目指すのであれば、向上心を捨ててはいけない。
その最大の壁と言えるのが、この「緑谷出久」であった。どんな人物かはわからないが、さぞ向上心に溢れた、勤勉な人物なのだろう。ボクも見習わなければ。
次の全国模試に備え、春休みの間は今回の反省を活かそうと心機一転すると。
見覚えのある人間が、こちらに近づいてくるのが見えた。
「桜乃先輩、こんにちは！」
「はい、こんにちは」
桜乃そら。文学に傾倒したが故に著しく視力を損なったメガネが映える、おっとりした性格の先輩。
無個性の苦悩を描いた「畜生の慟哭」という作品で、純文学界に電撃デビューを果た

し。多種多様な作品を脅威的な速筆で生み出してきた経歴を持つ小説家。
ボクと彼女の出会いは、互いの両親が友人であるという、ありふれたドラマチックさのカケラもないものだった。一番古い記憶で言えば、幼少期の頃、何度か世話をしてもらった覚えがある。
普通は進学と共に疎遠になっていくが、はからずしも、彼女の軌跡を追いかけるような形で進学した今でも、まだ関係は続いている。
「今日、雄英も試験期間ですか？」
「んー…。普通科は違うけど、ヒーロー科とかサポート科とかがね」
基本的に、雄英が教育に力を入れるのは、ヒーロー社会を支える人間たちだ。教師が揃ってプロヒーローであることにも、その教育方針に起因したものである。
それ故に、普通科の授業はせいぜい「進学校」の範疇を出ないと聞く。それでも、ヒーロー科移籍に加え、国立大学はおろか、海外の有名大学ですらも視野に入れる事ができるネームバリューと教育内容から、普通科を受験する人間は星の数ほどいる。
しかし、普通科に受かったとて、そのまま三年間を過ごす人間は、実は少ない。何故なら、ヒーロー科やサポート科など、花のあるコースへの「劣等感」という、抗い難い敵が潜んでいるから。
目の前の桜乃先輩は、そこに無個性というハンディキャップを背負いながらも、注目

される小説家として名を馳せている。
模範となるべき存在とはまた違った、努力の結晶。
因みに、ボクは彼女の著書を愛読している。
多用されるセンシティブな表現ですらも官能的とは思えず、ただただ流麗な言葉遣いに感嘆の息を漏らしていたことを思い出す。
ボクは、困難を踏み越えていった彼女に、一種の憧れを抱いていた。
「飯田くんは、今日やけに浮かない顔ねぇ。どうかしたの？」
桜乃先輩が顔を覗き込んでくる。
ふわり、と香るシャンプーの香りにドギマギしながら、詰まった返事をする。
「…ああ、いや。自分が情けなくて。少し、悔しさに浸ってました」
「……そんなに点数悪かったの？」
「悪くはありません。決して悪くは…、ないのですが」
ボクは言うと、結果用紙を彼女に見せる。
まじまじとそれを見つめると、桜乃先輩は「あっ」と短く声を上げた。
「……緑谷って、もしかして」
「知り合いなのですか？」
ボクが問うと、桜乃先輩は首を横に振った。

「直接会ったことはないけど…。
お世話になった人の元生徒さんで、よく名前が出てくるの。
なかなか人を褒めないあの人が、『世界一の努力家』って、自慢してた」
「世界一の…努力家…」
どんな人間なのだろう。
同い年でどれほどの努力を積み上げて、「世界一の努力家」という賞賛を受けるに至ったのだろう。
会ったこともないのに、興味は尽きない。
そんなボクの態度に気がついたのか、桜乃先輩は、優しげに笑みを浮かべた。
「今週の土曜日、あそこのモールでサイン会があって。先生も誘ってるの。
緑谷くんに会わせてって頼んだら、連れてきてくれるかもよ?」
「え…?あ、いやっ。その、会ったことのない彼に迷惑かもしれないし…」
「じゃあ、世界一の努力家を育て上げた先生に興味はない?」
「……それは、まぁ」
ボクは軽く頷くと、桜乃先輩は「じゃあ、決まりね」と言って、右手にチケットを握らせる。
そのまま去ろうとする先輩に、ボクは深々と頭を下げた。

「ご両親のことで大変なのに、ありがとうございます」
「…ううん。私がやりたいことだったから」
去り行く先輩の顔は、浮かないものだった。
彼女の両親が行方不明になって、ちょうど一年。未だに、影すら発見されていない。

先生「普通なら過労死する」

「…人気だとは聞いてましたけど、まさかここまでとは」

「女子高生と合法的に話せるから…とか邪な気持ちで参加してる人も居そうですけど」

サイン会当日。僕たちは訪れた会場に並ぶ長蛇の列に、深いため息を吐く。

今日、僕と同行しているのは、あの子からの頼みでついてきてもらった緑谷くん、その付き添いのあかりさん、轟くん、ヒメちゃんとミコトちゃん、そしてつづみさん。

つづみさんに関しては、最終学歴が中学卒業で終わっているため、なんとか言葉の知識をつけようと愛読しているのが、彼女の小説なのだそう。人と接するのを苦手としているから、言葉の選び方を本から学んでいるらしい。

因みに。僕たちは遠慮なくズバズバと思ったことを言うので、全く参考にならないと言われた。

爆豪くんたちも同じショッピングモールに訪れており、そちらは別の展覧会に行く模様。保護者役にはセイカさんを派遣しているが…まぁ、彼女のフォローを苦痛に思わない切島くんがいるんだし、大丈夫か。

僕がそんなことを思っていると。緑谷くんがパラパラとパンフレットを二つ見比べ

た。
「んー…。よくブッキングさせようとか思えましたね。片や今話題を掻っ攫う小説家、片や特に話題に上がりそうもない彫刻家…。
彫刻家の人に同情します」
「正直にモノ言いますよね君」
「先生の影響ですよ」
爆豪くんたちが向かうのは、無名の彫刻家が開催すると言う展覧会。
小春さん曰く、相当な金を積んで開いたものらしいが、マイナー故に作品がどんなものかを知る人間はそこまでいないらしい。今回、爆豪くんたちがそれに訪れることになった理由は、審美眼を鍛えるためとのこと。
なんでも、音街さんの祖父が、爆豪くんにテストをするらしく、やれるだけのことはやっておきたいと言っていた。
「展覧会のパンフレットに作品の写真は載ってたりするんですかね？」
「写真はありますね。ただ、興味をそそるためか、全部モザイクにしてあります」
「そんなことしても、全くない興味を煽ることは出来ないでしょうに…。
致命的なレベルで宣伝下手ですね」
マイナーな理由がわかった気がした。

行きもしない展覧会に話題を掻っ攫われたものの、列に動きがあったことで、即座に話題が戻る。
「春空さんって、どんな人なんですか？」
「おっとりしていて、非常に物腰柔らかな女性ですよ。ずん子さんの方がよく知ってると思いますが」
「帰ったら聞いてみようかな」
東北家の面々は、今日は家族で羽を伸ばすために映画鑑賞に向かうと聞いた。一等星最大のクソガキのお守りをしなくてもいいと思うと、寂しい気もするが、それ以上に解放感が胸中を支配する。
今日くらいは普通に羽を伸ばしたい、と思いつつ、列が動くたびに小さく歩みを進める。
そんな中、轟くんがふと、あることを口にした。
「…ん？なんでそこでずん子さんの名前が出てくるんだ？」
「ずん子さんのクラスメイトですからね」
「……雄英普通科か？あそこ、小説書きながら行けるのか…？」
轟くんの問いに、即座に首を横に振る。
僕には雄英高校に通った経歴はないが、その方針は嫌というほど知っている。

「普通なら、勉強に追いつくだけで精一杯なので、まず創作活動とか無理ですね。部活も同じく、勉強に追いつくためにやらないって人がそこそこいますね」
「雄英が弓道部以外でインターハイ出場とか聞かないのって、人少ないからか」
「そうですね。時間が比較的取れて、人数もいる普通科の生徒が主軸になるのが必然的ですし」
「…ヒーロー科への移籍とか大変だろうな」
「ええ。冗談抜きで過労死しますよ」
まず勉学に追われるため、普通科からヒーロー科へ移籍というのは、かなりハードルが高い。それこそ、普通にヒーロー科を受験した方がまだ可能性が高いという始末。
移籍したとして、遅れを取り戻すべく普通の授業に加えて、特別補習を受け続けて倒れそうな日常を過ごし。
そこまでして漸く「雄英卒業」という称号と共にプロデビューを果たすことを許される。
ヒーローという職業が敷居が高い理由の一つとして、ヒーロー科は「過労死」の三文字がチラつくほどに多忙という致命的な理由がある。それでもなお人気があるのは、給料の良さか、はたまた目立つからだろうか。
そんなヒーロー科の忙しさを抜きにしても、雄英の授業はレベルが高い。

ＳＮＳでは「普通の授業」と称されることが多いものの、スピーディなのに加えて、テストが絡め手問題ばかりのため、範囲を正確に覚えぬ限りはまず赤点落ちが確定する。

そのため、勉強にかなりの時間を費やさない限りは、卒業すら危ういという。

「…そんな忙しい中で5冊も本出してるとか、ヤベェな」

「……そうじゃん！こんだけの文字数を量産できるって、どんだけ速筆なの!?」

…しまった。余計なことに気づかせた。

僕と彼女の交流が続いていたのには、少しばかり訳がある。彼女が小説家を志したきっかけが、何を隠そう僕なのだ。

無個性故に、これからの苦労を想定して潰されそうになっていた彼女に、「少しは肩の力を抜くことを覚えると良いですよ」と差し出したのは、僕が当時、卒論のために読み耽っていた「猫町」。少しならば、不思議の世界に逃げても誰も文句は言わない、と諭したところ、彼女はものの見事に純文学に取り憑かれた。

１ヶ月で本の読み過ぎが原因で視力が急激に悪化したものの、それと引き換えに驚異的な速読術を獲得。中学に進学した彼女を受け持つことになった友人曰く、「一時間で学級図書全部読破されてるんだけど、お前あの子に何したの？」と突っ込まれた。

執筆を始めたのは、中学一年生の頃。拙いながらも出来た作品を僕に見せにきた時は、「ありきたりな作品だな」程度にしか思わず、その感想をそのまま伝えた。

異常に気づいたのは、そこから1ヶ月後だった。十万文字にも及ぶ物語を、たった1ヶ月で書き上げ、僕に見せにきたのだ。

緑谷くんのことも相まって、胃痛が酷かった記憶がある。いや、今でも結構大荒れなんだけど。

もしかして、勉学そっちのけで執筆活動に傾倒しているのでは、と思ったが、友人曰く「文系科目に関しては言うことなしだし、理系科目も上位２０には入ってる」と返された。

要するに、異常なほどに速筆だったのだ。

内容が空っぽかと言えば、それもなく、寧ろ考え抜かれた流麗な言葉遊びの数々に、思わず悲鳴に似た声が漏れたのを覚えている。

デビュー作…「畜生の慟哭」。あの作品は、書き始めてから三日で出来たという。そんな作品が出版社の目に留まり、果ては受賞しているのだから、彼女の異常性を語るには十分な情報であろう。

無論、彼女にも欠点があるわけだが、それは今語るべきことではない。

「…まぁ、速筆に関しては、彼女の努力の賜物だと思いますよ。

緑谷くんも長期休みのたびに論文を量産してしまうんですから、速筆に関しては人のこと言えないのでは？」

「…あ、そっか。速筆くらいだったら頑張れば出来るもんね」
「『頑張れば』がここまで重い人って中学生の中にいる？」
「コイツくらいだろ」
そんなことを話していると、ようやく先頭が見えてきた。
サインされた本を抱きしめ、愛を熱弁するファンを前に、笑みを浮かべながら真剣に受け答えし、きっかり３０秒で会話を終わらせる少女。
背丈や体つきは変わっているが、六年前に世話した彼女が、そこに座って佇んでいた。
「大人の女性ってカンジがする人だね」
「ショート、ああいう人、好み？」
「や、ちょっと抜けてるとことか、子供っぽいトコとかある子が…って何言わせんだ」
轟くんが二人を軽く小突き、笑い合う。どうやら、轟くんの恋愛対象に、あの子は入らないらしい。
ヒメちゃんとミコトちゃんって、誰かと付き合うことになったらどうなるんだろうか。一応は同一存在だけど、戸籍上は二人なのだから、果てしなく面倒なことになりそうだ。
……よし。このことは、轟くんに丸投げしよう。二人とも轟くんにゾッコンだしな。
そんなやり取りをするのも束の間、いつの間にか僕たちの番が回ってきた。

彼女は僕の顔を見つけると、軽く手を振る。
返さないという選択肢を取るほど、人を捨てていない僕は、彼女に手を振り返した。
僕たちは特にサインに興味はないため、大ファンである轟くんが先陣を切って、ギクシャクとした動きで彼女に歩み寄る。
「はい、お名前をどうぞ」
「と、轟…、焦凍です。あ、名前はカタカナで結構です」
「カタカナですね。わかりました…はいっ」
彼女はスラスラと差し出された本にサインを書くと、轟くんに返す。
轟くんはそのサインを確認すると、少しばかり目を見開いたのち、こちらへと戻ってきた。
このまま邪魔をしてしまうのも忍びないな、と思い、僕たちは列から離れる。
ある程度離れて、人気のないベンチに座ると、轟くんはこれ見よがしにサインの書かれた本を開いた。
『13時ごろ、二階にある定食屋で待っていてください。会わせたい人がいます』
サインの下に、読めるか読めないかくらいの小さな文字で、その文言が書かれているのを見つけ、皆で顔を合わせた。
♦？♦？♦？♦？

「……っはぁ～…。気が滅入るわ…」
「爆豪が言うって、相当だよな…。や、俺も気分良くはねェけど…」
展覧会場にあるソファにて、俺は座り込みながら、深いため息を吐いた。
審美眼を鍛えるために来たは良いが、周りに立ち並ぶ彫刻は、どこのホラー映画のセットだとツッコミたくなるような薄気味悪いものばかり。
それは、人の手首の集合体が蝶を象っている彫刻や、何を表現しているのかはさっぱりわからないが、見ているだけで気分の悪くなるバケモノがこちらを睨みつけている彫刻と、規則はないものの、揃って「不気味」であることは確かだった。
特にひどいのは彫刻の目玉の集合体でオブジェ。あれを見た途端、自分でも情けない悲鳴が喉奥から漏れ出た。
音街はすっかり俺に引っ付くオナモミみたいになっている。ポンコツに至っては、切島を抱きしめなければマトモに動けないくらいにビビり散らしていた。
「夢に出てきそうなくれェ気色悪ィよ…。
…サイン会の方ついてけば良かった…」
「俺ァ作ったやつの顔が見てみてェ」
「やめといた方がいいと思うぞ…」
ここまで気色悪いデザインであれば、二束三文にしかならないだろうが、使われてい

る技術はかなりのものだ。
デザインの傾向さえどうにかすれば、充分値がつく代物は作れるだろうに。
こんなモンばっか作るからマイナーなんだろ、と思いつつ、ソファから立ち上がった。
「おい、音街。もう帰るから、引っ付くのやめろや」
「……むり」
「しゃーねぇ。おぶってやっから、セミみたいに引っ付くな。服が伸びる」
「……ん」
このまま帰せば、確実に小春に殺される。
お姫様の機嫌取りも楽じゃねェな、とため息を吐き、音街を背負う。
切島はポンコツに抱きしめられたまま、俺の後ろについて回った。
「…そォいや、麗日は？」
「ついなちゃんが展覧会場前で震え始めたから、気晴らしにゲームセンター行くって。
…案外、この作品群、悪霊の類が宿ってたりしてな」
ま、ンなモンいるか知らねーけど、と付け足す切島に、思わず同情の視線を向けた。
「……無知が羨ましいことってあンだな」
「なんか言ったか？」
「なんも。細けェコト気にすンなタコ」

♦?♦?♦?♦?

その頃、ゲームセンターでは。

「……だァァァァっ!!また落ちたァ!!」

「あの、姉ちゃん?もうそろそろお金…」

「いやっ、まだや…!そんなモンやないやろ根性見せんかいこの貧弱アームゥゥゥゥっ!!」

クレーンゲームに惨敗している麗日を宥めるついなの姿があった。

先生「こういう真面目なタイプがほしい」

「みなさん、初めまして。春空改め、本名『桜乃そら』です。
『桜乃』って書いて、『はるの』って読むんですよぉ」
間伸びした口調で自己紹介を済ませるそらさんに、生徒たちが軽く頭を下げる。
そらさんの隣に座るのは、生徒たちと同い年の少年。メガネに整った髪、しゃっきりとした姿勢からして、真面目な子なのだろう。
この子が「会わせたい人」なのだろうか。少しばかり申し訳なさそうにしながらも、真っ直ぐに僕たちを見つめる。
「で、こちらが…幼馴染…って言うのかな？親ぐるみの付き合いがある、飯田天哉くん。
先生がよく話題に出す『緑谷くん』と同い年の子なの」
「どうも、初めまして」
「どうも、水奈瀬コウです。小学校の教師をしています。初めまして」
丁寧なお辞儀に、僕もまたお辞儀を返す。一等星のメンバーに足りないのは、こういう真面目さだと僕は思う。
そんなことを思っていながら、僕は生徒たちに視線を送り、自己紹介をするように促

す。
「緑谷出久です。えっと…、好物はカツ丼」
「轟焦凍です。好物はざる蕎麦」
「鳴花ヒメでーすっ！好きなのは梅干し！」
「鳴花ミコト…です。好きなのは、梅サイダーです…」
「紺星あかりです。好物は食べ物です」
「鈴木つづみ。コウくんの妻で、好物はミルフィーユミルク鍋」
あるある。自己紹介で何を付け足すか迷って、結局無難な着地点になるの。
飯田くんはと言うと、暫し考え込んだのち、「ボクの好物はビーフシチューだ」と付け足した。そらさんまでもが「私は桜餅が好き」と言い出す始末。…これは、僕も言った方が良いのだろうか。
僕がタイミングを伺うも、口を開く暇もなく飯田くんが緑谷くんに迫った。
「君が、あの緑谷出久くんか…！」
「……あの…、って言うと…？」
「謙遜せずともいい。君は周囲から『世界一の努力家』と呼ばれるほどに勤勉な人だと聞いている。全国模試の輝かしい功績と言い、君が積み重ねてきた努力は、ボクには想像も出来ない…!!」

「せ、世界一の努力家って…。努力くらいなら誰でも出来るんだし…」

誰でも出来てたまるか。

頻繁に倒れたり顔中から血を噴き出したりしながら、気を失っても根性で起きてノートに向かうなんて、普通の人間に出来るわけがない。それこそ、緑谷くん並みにブレーキが壊れているタチでなくては。

皆も薄々そう思っているのか、遠い目をしながら、お冷やを呷る。

飯田くんはと言うと、「努力は誰でも出来る」という言葉に感銘を受けたのか、打ち震えていた。

「コレは参考にしない方がいいわよ。自分の体なんてお構いなしなんだし」

「お、奥さん…、辛辣…」

ナノマシンのお陰で無茶が出来る体になっているとはいえ、その無茶は今でも続いている。流石に顔中から血を噴き出すことや、知恵熱で突然ぶっ倒れることは無くなったが。

それでも、ノート五十冊をたった半日で、計算やら設計やらの用途で使い尽くし。浮遊大陸の一角を爆発させる事故を数回にわたって起こしても、即座に机に向かう姿は、依然変わらず狂気的だ。

「自身の体さえ顧みぬ努力…!?

一体、どんな…!?」
「んー…。特別なことは何もしてないし、ただ問題に向き合ってるだけ。普通の勉強に変わりないよ」
「顔中から血ィ噴き出すくれェ脳を酷使する行為を勉強って言い張るコイツの根性が未だに分からん」
あー…。轟くん、思ったことをそのまま口にしてしまったのだろうな。
覆水盆に返らず。口をついて出た言葉に気づいて、轟くんが思わず手を口に当てるが、もう遅い。
飯田くんが目をパチクリと丸くしながら、テーブル越しに緑谷くんに詰め寄った。
「顔中から血!?それは勉強というのか!?一体何を…」
「ノート見る?今、一冊だけ持ってるけど」
「み、見せてくれないか…?」
怖いもの見たさなのか、飯田くんが言うと、緑谷くんは快くリュックサックからノートを一冊取り出し、差し出す。
アレ、確か今使ってる、新装備開発の設計図じゃなかったろうか。渡していいの、アレ?
僕がそんなことを思っていると、ノートを開いた飯田くんが何度も緑谷くんとノート

を見比べる。
「…なっ、…え…、……はっ…!?」
「……あ〟」
渡すノート間違えた、って顔が言ってる。
ダラダラと冷や汗を流す緑谷くんに、言葉を失う飯田くん。そらさんもノートを覗き込むと、「まぁ」と声を上げた。
「あ、それ…、あの、勉強用じゃないやつですハイ…。その、返してください…」
「……この数式、以前見学した雄英のサポート科で見たことがあるような…」
「確か、難問指定されて、まだ解かれていなかったよね。すごいのねぇ、緑谷くん。答え出しちゃってる」
「……ハイ、恐縮デス…」
小説のネタとして逐一情報を仕入れている彼女からすれば、知らぬ筈がなかったわけか。
「なんでそんな数式書いてんだお前」と言いたげに轟くんが睨め付けると、緑谷くんは「しょうがないじゃん!ソレ使うしかないんだから!」と反論するように視線を返す。
「……成る程。ボクがしてきた努力は、まだまだだったと言うわけか…!!」
「いや、あの…。僕、無個性だから必死に勉強してるだけだからね?」

「いや、努力に無個性も個性も関係ない！
ありがとう、緑谷くん！」
「あ、えと、……何かしたっけ、僕…？」
真面目な気質だから、緑谷くんの努力の一端を感じ取って、気を引き締めたんだろうな。
手のかからなさそうな生徒だが、いろいろなものを背追い込みすぎて、いずれ潰れるようなタイプと見た。そらさんと非常に良く似た生徒だ。
「君と似た子ですね」
「あら、そうですか？私、もうちょっと不真面目だったような気がしますよ？」
くすり、と笑うそらさんに、僕は呆れを込めたため息をつく。
ふと、僕は彼女の両親のことが頭をチラつき、口を開いた。
「そういえば、ご両親の話題をここ一年聞きませんが…」
「っ……」
一瞬。ほんの一瞬だけ、朗らかな笑みが崩れ、悲しげな瞳が露わになる。即座に彼女は笑みで繕ったが、この話題についての追及はしない方が良さそうだ。
…ただ、僕の周りに座る生徒たちが黙ってるかどうかと言えば、首を横に振るが。
彼女に追及はしないだろう。ただ、勝手に周りを調べ上げ、勝手に解決して、勝手に

助けるだけだ。…黙っているだけの筈だったのに、いつの間にか彼らを認めていた僕も、ソレに加担してしまっていることになるのだろうか。なるのだろうな。

バレたら後が怖いな、と思いつつ、注文した料理が運ばれてくるのを待つ。

「話したくなさそうなので、追及はしません。相談してもらったところで、一介の教師が出来ることなんてたかが知れてますし。

…ただ、弱音の受け皿にはなりますよ」

「……先生は相変わらず、出来ないことは出来ないってきちんと言ってくれるのね」

「裏切られた時の絶望は、抱いていた期待や信頼に比例しますから」

…少しばかりカッコつけてはみたが、僕という人間は基本的に何の力も持たない一般人である。

誰かと繋がることで、僕という存在は初めて役に立つことができる。緑谷くんも、僕は少しばかり背中を押した程度で、彼の知識の大元は茜さんだ。

だから、僕に困り事を相談されても、僕が解決に導くわけではない。答えを知り得る人間を紹介することしかできないのだ。

こんな他力本願もいいところな一般人を、世間を容易く掻き乱すような超人たちが先生と慕ってくれる。居心地の良さもあるが、自分がつくづく、一人では何もなし得ないただの教師だという現実が突きつけられる。

…まぁ。そんな教師を演じることに人生をかけてきた僕からすれば、なんの苦にもならないのだが。

「…教師ならば、嘘でも『助けになる』と言って聞き出すものではないか？」

そんな思考に浸っていると、飯田くんが僕に問うた。

少し怒っているのか、それとも呆れているのか、険しい表情だ。無理もない。教師という存在は、誰かに寄り添って当たり前という生ぬるい風潮がこの世の真理としてある。

本来、教師は寄り添うことが仕事ではない。どんなに叩きのめされようが、立ち上がることを教えるのが役目なのだ。寄り添うことなど、そこらの子供でも出来る。

僕はお冷やを呷り、口を開いた。

「それはヒーローの仕事です。僕の言葉で現状が何か変わりますか？僕の言葉で、そらさんのご両親を助けることは出来ますか？

なんの積み重ねも持たない、解決するための知恵もなければ力もない人間が吐き出す言葉ほど、軽いものはありません。

そんな軽い言葉で、そらさんを傷つけるくらいなら、『傷を抉らない』ことだけ伝えて、自分には出来ないと伝える方が何倍もマシです」

前は、軽い言葉ばかりを吐き捨てた。

言葉に篭る重みは、言葉を発する人間の覚悟と、今まで何を積み重ねたかで決まる。
僕は非力ではあるが、無力ではないつもりだ。故に、軽はずみな発言が引き起こす悲劇を知っている。
ここまで全て、飯田くんに伝える気はない。これは、ヒーロー云々関わらず、人として生きる限り付き纏う問題なのだ。
僕の発言を聞いた飯田くんは、少しばかり考えたのち、頭を下げた。
「……申し訳ありません。考えなしに言ってしまって」
「いえ、君の意見はもっともですよ。ただ、僕がソレに答えられるほど強くなかっただけの話です。
…ただ、僕の代わりに解決に導けそうな人は紹介しますよ」
僕はすらすらとメモ帳にある番号を書くと、そらさんに渡す。
「あー…。確かに、適任ではありますよね」
「諸々に目を瞑れば…ですが」
そこにある番号は、「世界一の自由人」が持つ連絡網が書かれている。
そらさんは笑みを浮かべると、「ありがとうございます」とそのメモをカバンの中へとしまう。
…なにも、その人だけが動くとは言ってませんけどね。

　爛々と輝く瞳の『ヒーロー』たちに、僕はため息をついた。妖怪にでも取り憑かれてるような気分だった。

　♦？♦？♦？♦？

「姉ちゃん、あの、人によって向き不向きはあるから…」

「……どォいう状況だ」

　ゲームセンターにて。

　四つん這いになって本気で落ち込んでいる麗日を尻目に、俺はなんとか宥めようと試みる如月に声をかける。

　その手にはクレーンゲームの景品用だろうバケツサイズの菓子が抱えられており、先ほどまでゲームに興じていたのが見て取れた。

「あ、あの…。お茶子の姉ちゃんが…」

「カッコつけようとしたは良いけどクレーンゲームに散財して一個も取れず、如月があっさり取っちまったとかか？」

「爆豪の兄ちゃんよぉわかるなぁ」

「言わんといて!!堪忍や、堪忍してぇや言わんといてぇ!!」

「うるせぇ騒ぐな死ね」

　投擲のコントロールは寸分違わぬ腕を見せるというのに、クレーンゲームはこの有様

か。

呆れながらも、「おら立てや近くにいる俺らが恥ずかしいだろォが」と説教して、麗日を立ち上がらせる。

切島はというと、ポンコツと一緒にフードコートに行かせて席を確保してもらっている。

食欲が無くなりそうなモンを見たが、それでも腹は減るものだ。なんでも良いから腹に入れておきたかった。

何を食おうか、と考えていると、おぶっている音街が俺の肩から顔を出し、如月に問うた。

「ねぇ、ついなちゃん。もう平気なの？」

「うん。あそこから離れたら、気ィ楽んなったわ」

「…血筋の関係で、なんか感じたのかもな」

「……やろぉなぁ…。なんや、『こっちくんな』って怒っとる感じがしたわ」

……ん？ああいう手合いは、寧ろこちらを手招きするんじゃなかったか？

以前、イタコの仕事にたまたま出会した時、そんな説明をされた覚えがある。俺が疑問に思っていると、切島からメッセージの着信が来た。

「……あン？」

メッセージには、端的に「たすけて」とある。一体なんだ、と思いながら、俺は携帯をしまい、踵を返した。

「さっさとフードコート行くぞ。切島が面倒ごとに巻き込まれてるってよ」

「面倒ごとってなんなん？」

「俺ァ知らん聞くな死ね」

願わくば、ポンコツのやらかしが軽微なものであってほしいが。

そんなことを思いながら、俺は足早にゲームセンターを駆け抜けた。

芸術に隠れた狂気

「折角だから、皆で展覧会に行きません?」という緑谷くんの一言で、腹の膨れた僕たちは、展覧会場へと訪れていた。

サイン会の会場から、そこそこ人が流れているのでは、と思っていたが、そんなことはなく。そこだけ世界が違うかのように、人っ子一人見当たらない空間が広がっていた。

「…こりゃまた。パンチの強い作品が多いようで」

視界に広がるのは、地獄絵図を具現化したような作品群。何を思えば、こんな残虐な絵面を表現しようと思えるのか。

僕が呆れ半分、感心半分のため息を吐いていると、つづみさんが青い顔をしたミコトちゃんの手を取った。

「ミコトちゃん限界そうだし、私は一緒に出てるわ」

「あ、すみません。ミコトちゃんは無理ですもんね、こういうの」

アンパンマンのホラーマンで泡吹いて倒れていた頃に比べれば、まだ免疫はついた方なのだろうけど。

ここにある作品群は、慣れている人でも思わず嫌悪感を抱いてしまうようなものばかり。ミコトちゃんからすれば、夢に出てきそうなものである。
「…つづみさん、ありがとう…」
「戸籍上はアナタの母よ。『お母さん』ね」
「……あ、ありがとう、お母さん」
つづみさんが迫ったことにより、ミコトちゃんが恥ずかしそうに言う。その答えに満足したのか、つづみさんは笑みを浮かべ、「それでよし」と彼女と共に踵を返した。
「ミコトに無理させちまったな…。あとで謝んねェと」
「怖くはないけど…、なんだろう?気持ち悪いって言うのかな?」
「そうだね。恐怖を煽ると言うより、嫌悪感を煽るような形だ」
ボロクソに言われる彫刻を前に、僕はふと、ある違和感を覚える。
目の前にあるのは、幾つもの手首が蝶をかたどった彫刻。一つ一つの手首の形が違うのもそうだが、よくよく見ると、左手首の部分に指輪をしているものもある。
中には赤ん坊くらいの大きさの手もあり、えもいわれぬ気味の悪さに、毛穴から熱が逃げ出すような薄寒さを感じた。
「飯田くんたちは大丈夫ですか?」
「う、うむ…。少し面食らいましたが、ここまでこだわった作品を幾つも生み出す作者の

根気は評価できます…。
…作った人には悪いですが、見ていてあまり気分の良いものではないのも事実です」
それはそうだ。手首なんて皺の一つ一つ違うし、目のオブジェも、それぞれに何かしら特徴がある。
見た目の不気味さはとにかく、その苦労はひしひしと感じることができた。
「作者は…『ナル』…、どう見ても源氏名ですね」
「そらさん、知ってます?」
「いえ…。私も初めて聞きました。こんな大掛かりな作品……も……」
僕がそらさんに話を振ると、ある彫刻の前でメモを取っていた彼女が大きく見開く。
息をするのも忘れたように、微動だにしない彼女に疑問を持ったその時。僕はようやく、その理由に気がついた。
「…緑谷くん。一つ、お願いできますか?」
「なんでしょう?」
――――そこの彫刻に彫られている指輪を、分析してほしいんです。
その指輪は、僕の知る限りでは、彼女の両親しか持っていないものであった。
♦?♦?♦?♦?
フードコートに訪れると、やけにテラス席に人が集まっているのが見えた。従業員ら

も手を止めて、わらわらと人の集まる場所の様子を見ようと、さらに群がる。
こんな中で、いくら変装しているとはいえ、音街が見つかれば大変なことになる。
俺は音街を麗日に「任せた」と託して、人の集まる場所へと向かう。
なんとか人をすり避け、そこへ辿り着くと。神妙な面持ちをした切島とポンコツが、あるものに視線を向けていた。
「爆豪、来てくれたか。見てくれ、コレ」
「……ンだ、こりゃあ…？」
転がっているソレに目を向けて、俺は眉を顰める。
音街を連れてこなくてよかった、という安堵が少しばかり湧いてくるが、それ以上に俺の心中を支配していたのは、得体の知れない恐怖だった。
そこにあるのは、残骸。人を象った『彫刻』が、落下の衝撃でバラバラになっている。
ソレも一つじゃない。数える限りで言えば、八つは落ちていた。
「コイツは…、また悪趣味な…」
「…あの展覧会で飾られてたのとテイストは似てるけどよ…。ここまで気味悪いと食欲失せるっての…」
食欲が失せるような光景だ。
味気ない食事になるだろうな、と思いつつ、この彫刻を対処してくれるスタッフを

待っていると。
人混みをかき分けて、小柄な女が姿を現した。
「あ、ごめんなさい。スタッフさんが屋上で用意してた彫刻を落としちゃって…」
その女は、エプロンに石片を大量に付着させ、瓶底メガネをかけた、いかにも冴えない風貌をしていた。
コイツが件の彫刻家だろうか。そんなことを思いつつ、女が彫刻を片付けるのを見守る。
切島が「たすけて」と言ったのは、この不気味な現象のことだろうか。俺が切島に視線を送ると、軽く頷いた。
ジェスチャーを見るに、どうやら座ろうとした席にコレが落ちてきたらしい。
「取り敢えず、邪魔になりそォだから、さっさと別の席探そォや」
「え？俺、聴取とか受けなくて良いの？」
「この席の近くにいたか？」
「や、テラスの入り口に居たぞ。近づこうとはしたけどよ」
「ならいいだろ。他のやつが証言する」
俺は切島を引っ張り出し、昼頃だというのに、野次馬のせいでガラガラなフードコートを見渡す。

目立ちにくい端っこの席が空いていることを確認すると、俺は音街たちを手招きして、その席へと座った。
「……調べた方がいいかもな」
俺は靴の中にあるものを取り出し、まじまじと見つめる。
手に収まっているのは、先ほど落下した彫刻の「かけら」だった。
♦？♦？♦？♦？
「んー…。豚骨はやっぱこの店やな。
次はバリカタ麺で…」
その頃、とあるチェーン店にて。
ピラミッドに侵入して中を漁りに漁ったため、歴代最速でタルタロスにぶち込まれた茜は、これまた数分で脱獄を果たし、メリッサと共にラーメンを啜っていた。
尚、タルタロスを管理している責任者も、エジプト政府も「知ってた」と口を揃え、ヤケ酒を呷っているらしい。
そんなこととはつゆしらず。茜は替え玉を注文するため、呼び鈴を鳴らす。
「この赤いスパイスって、何で出来てるのかしら？」
「そこはロマンやで、ロマン。調べりゃわかるけど、調べちゃあかん。
そういうロマンが、食にはあるんや」

「雰囲気は大事だものね。
あーあ、ｉ・アイランドでもこのチェーン店、展開してくれたらいいのに」
パパに頼もうかしら、と付けたし、追加のチャーシューをスープに浸して食うメリッサ。
ニンニクがそこそこ入っているラーメンを、こうも豪快にかっ喰らう姿は、どう見ても淑女や乙女の類ではない。
増して、二人は性別こそ同じであるが、恋人同士。デート先にラーメン屋に入るなんぞ、普通に考えれば自殺行為にも等しいだろう。
しかし、この二人。ニンニクの匂いは寧ろ大好きであった。これだけで白米３合はイケると豪語するくらいには好きであった。
そんな芳しさのカケラもない香りが口臭となろうが、接吻を躊躇わぬくらいには、仲睦まじいのだが。
「ね、ね？そういえば、武装『オーディン』って、アカネは何か手を貸してるの？
凄かったじゃない、あの時。世界中の空に赫い稲光が走ったってニュースになったし」
「いんや？ぜーんぶあの子が作っとるよー。
ウチの基本理論ぜーんぶ取っ替えて、全く新しいモン作ってもぉたしなぁ」

自信あったんやけどなぁ、と呟き、スープを吸ったチャーシューにかぶりつく。
そんな雑談がダラダラと続いていたが、それに水を差すように、着信音が響く。
「お、コウくんから紹介された子おやな」
「いいの？ピラミッドのこと調べなくて」
「後回しや後回し。ウチらのモットーは？」
「『まずは人助け』よね」
そのモットーで、軽く日本社会が崩壊寸前まで追い詰められているが、彼らはその選択を責めはしない。
箸を置き、茜はポケットから携帯を取り出すと、通話ボタンを押した。
「はい、もしもーしっ！
コウくんから紹介されたと思うけど、ウチがアンタのお悩み、無料でなんでも解決したるでー？」
『あ、えっと…、私、桜乃そらと申します』
大人びた声だが、やけに弱々しい。精神的に相当参っているのが、通話越しにひしひしと伝わってくる。
油で滑りそうな口内を整えるべく、軽く冷やで油分を流す。
「はいはい。相談はなんや？どんな無茶でも口にしてみてみ？」

『無茶というか…。その…』

――――行方不明になった私の両親の行方を探してほしいんです。

♦？♦？♦？♦？

「……全く。どいつもこいつも、私のことをわからないクズばかり」

たん、とローファーを鳴らし、ショッピングモールから去る、エプロン姿の少女。

その手は台車を押しており、先ほど落下した彫刻の残骸が無造作に乗せられている。

砕けたとは言え、彫刻は彫刻。それを作った人間ならば本来、多少なりとも丁重に積み、運ぶものなのであろう。

しかし、この少女にとって、積み上がったこの彫刻らは、「作品」ではなかった。

「思わず『使っちゃった』けど、今回は八つもあって中々粒揃い……！

心配しなくてもいいわ…。『綺麗なところだけ』は、何億年経とうが、永遠に残るのよ…」

あどけなさが残る顔で、邪悪な笑みを浮かべる少女。砕けた彫刻の断面図には、よく見ると血管や神経と見られる、細かな差異があった。

「くふ、ふひっ、ひひひっ……！

ひひっ、ひはははっ…!!ああ、待っててね…。もうすぐ、もうすぐよ…。『あなた』を永遠に…、最高に綺麗にしてあげるぅ…!!」

彼女の胸元には、不気味な装飾品が鎮座していた。

怒りの暴露

翌日。
放課後の仕事を終わらせ、帰宅した僕を待っていたのは、妻の手料理…などではなく。床中に散乱する、資料の海であった。
紙の臭いでむせ返りそうになるほどに敷き詰められた絨毯を、僕は爪先立ちでなんとか掻い潜り、リビングへと進む。
そこには、議論を交わす緑谷くんとクソガキの姿があった。
「……初期メンバーほど、僕に対する遠慮が皆無ですよね、君ら」
「いやぁ、先生の家って居心地良くって…。
集中するならやっぱりここって、染み付いちゃってるんですよね」
「僕の家、君の実家じゃないんですが」
「緑谷先輩のお隣でしょう。誤差ですよ、誤差」
「誤差なわけあるか」
浮遊大陸作ってんだから、そっちでやればいいのに。
そんなことを思いつつ、これが日常になっている事実に辟易しながら、僕は荷物を置

く。
　片付けはしてくれるだろうから、別にいいや、と思いつつ、僕はソファに腰掛けた。と。その隣につづみさんが座っていることに気づき、僕は思わず「うぉっ」と声を漏らす。どうやら気配を殺していたらしい。今の今まで気が付かなかった。
「口で軽く言うだけで済ますって、アナタもこの家に入り浸ること認めてるようなモンじゃないかしら?」
「子供に迷惑かけられる仕事ですしね。慣れっこですよ」
「夫婦として私にもいっぱい迷惑かけてほしいのだけどね。子供とか子供とか子供とか」
「……高齢出産が初産にならないように気をつけておきます」
　産まれたとして、周りが要らんこと吹き込む可能性が高いのは、この際目を瞑ろう。
　そんなことを考えていると、玄関が開き、音街さんを迎えに行った爆豪くんと彼女が、リビングに踏み込んだ。
「おい、デク。整理整頓っつー四字熟語知ってっか?」
「それどころじゃないよ」
「……なんか分かったのか?」
　爆豪くんの真っ当な意見に、緑谷くんが淡々と返す。緑谷くんは資料の海の中からあ

る一つを引っこ抜くと、爆豪くんに手渡した。
爆豪くんは音街さんに「東北と遊んどけ」と告げ、資料を見やすいように持ち直す。すると、年中無休で仕事をしている彼の眉間の皺が、５００円硬貨すら挟めそうなくらいに深くなった。
「あの彫刻家って、顔出ししてんのか？」
「いや、なにせ無名だからね。ネット上でも顔出しはしてないみたい」
二人は日常会話を装っていたが、僕の目には、その首筋に浮き出た凄まじい血管が見えていた。
東北さんもそのことに気付いたのか、口を開く。
「……ウナちゃんも、それなりに覚悟はしてます。遠慮しなくても結構です」
「そ、そう…？なら、遠慮なく言うけど…」
――――あの彫刻、生きた人間です。
衝撃は走らなかった。
僕も薄々そうかと思っていたし、つづみさんもなんとなく「おかしい」とは思っていたようだ。音街さんは顔を青くしていたが、東北さんはただその事実を受け止めていた。
しかし、疑問はある。緑谷くんの言い方だと、「材料は人間」ではなく、「彫刻そのも

のが人間だ」と言ってるようなものなのだが。
僕が疑問の答えを聞こうと口を開くも、緑谷くんが遮るように声を放つ。
「アレ、死んでないんです。バラバラになろうが、生きてるんです。
痛覚も意識もあるように、微弱ではありますが、振動が確認されました」
「殺さねェ分、余計にタチ悪イな」
「ホントそれだよ…。何考えたら、こんなことが出来るんだ…っ!!」
ビキッ、と拳にまで血管が浮き出るほどに拳を強く握る緑谷くん。
生きているなら、元に戻せないのだろうか。
緑谷くんは少し気を落ち着けるように息を吐き、続けた。
「戻せるには戻せますが、その瞬間にバラバラ死体の完成でしょう。
破片をくっ付けようにも何処にあるか分からないし、そもそも粉々に砕かれてたら元も子もない。
……細胞全部取っ替えて、それがその人だと言い張れるなら、やりますけど…。
絶対に支障が出ます。それこそ、ただの肉の人形になります。…死と生の侮辱になります」
生死の侮辱…か。僕と東北さんも、まさに生死を侮辱しているような存在だ。
つづみさんと両親には予め伝えているし、緑谷くんもなんとなく気付いてるだろう。

でも、あの彫刻は、僕なんか比にならないほどの侮辱だ。
生死を侮辱した僕からすれば、何よりも許せない。踏み越えてしまった僕が言えた話ではないが、それでも尚、許したくない。
生は一度きり。死は永遠。それを破り、二度目の人生を歩むことで侮辱した僕たち。生を永遠にして、苦しいまま形を保つ芸術という名の侮辱。
僕たちのように、自ら望んで外道を歩んでいるなら兎に角、誰かにそれを押し付けるなど、言語道断だ。
「……これ以上、被害が出ないように食い止めることを考えましょう。
彼らを永遠の生から解放して弔うのは、犯人を叩きのめしてからです」
「そうですね。…こんな禁忌を犯すことを押し付けるなんて、許せません。同じ禁忌を犯している身としても」
そう付け足し、東北さんが決意を新たにする。
その言葉に、皆が目を剥く中、東北さんは告げる。
「私と先生は、隠し事をしてました。
致命的なまでに、私たちと言う存在の根幹がひっくり返るような、大きな隠し事です。
今回の件、私たちが許せないのは、その隠し事に大きく関わるからです」
そう前置きして、彼女が僕に視線を向ける。

つづみさんに目をやると、「言っても変わらないわよ、この子たちなら」と笑われた。

――――水奈瀬コウと東北きりたんが歩む人生は、一度目ではありません。この人生は、一度目とは別の二度目なんです。

♦？♦？♦？♦？

「……なんというか、出来の悪い創作物でよくあるような転生ですね」

「自覚はあります。チートとかないだけマシでしょ」

皆を集めて全部暴露した。

僕たちが今居るこの世界は、前の僕たちにとっては『原作』が存在する『創作物の世界』であったこと。僕たちの体は、本来、魂のない機械音声のモチーフキャラのものだと言うこと。なぜか、そのキャラクターに当てはまる人間が多数、この世界に存在すること。

何もかも洗いざらい、全部ぶちまけてやった。

緑谷くんは薄々気付いてたようで、「きりちゃんとか達観しすぎって思ってましたし」と言われた。

「神様とかには会ったのか？」

「いえ。死んだ時の記憶が、三歳の時に一気に蘇ったって感じです。

東北さんは生まれつきだったそうですが」

「あ、ずん姉様たちにはきっちり話してます。…タコ姉様曰く、私とこの体って、元々宿る関係性だったらしくって。きちんと家族って言ってくれたので、罪悪感とかはなく過ごせてます」

僕たちが隠し事を話したことで、何かが壊れるとかは、特になかった。

寧ろ、「え？その程度？」と目を丸くされた。こちとら重要な秘密を大暴露してやったと言うのに、なんだあの言い草。逆に腹立ったぞ。

僕たちが犯した禁忌に関しては、「嫌悪感とか特にない。性格悪いのは知ってるし」と訳の分からないフォローをされた。こう見えて、二人して結構メンタルに来てた時期あったんだぞ。胃腸弱いから繊細なんだぞ。

「…ってか、先生がヒキニートってのが意外すぎるんだが」

「国立大学院卒でしたし、高学歴ではあったんですよ。ただ…、この性格だから山ほどトラブル起こして。人脈皆無だったんで、完全に就職お断りに」

「……なーるほどねぇ」

前世は性格が裏目に出まくったせいで、『この世からハブきましょ』的な雰囲気が、常に周りを漂っていた。

その反省から、僕は人脈を繋げることに、学生生活を全て捧げた。教師になったのだって、水奈瀬コウを演じたかったからという、なんとも不純な理由だ。

要するに、僕は前とほとんど変わっていないのである。
そのことを話すと、「僕らと一緒です！お揃いですね！」と喜ばれた。
「……心っっっ……底っ！どぉぉぉぉぉ…っっっっ!!…でもいい話聞かせんなクソ教師にクソガキ殺すぞ。
そんなクソみてェな事実一つでなんか事態が好転するんか？変わるんか？あ？」
爆豪くんが鋭い目つきで睨め付け、僕たちに詰問する。
僕たちは怯むことなく首を横に振った。
「しませんけど。今回の件は、僕たちにとって許せないものであることを知って欲しかっただけです」
「ンな自己満あとでやれや死ねっ!!今優先すンのは彫刻家をふん縛ってサツに突き出すことだ違うか!?」
「……すみません。冷静さを失ってたみたいです」
あまりに許せなくて、つい話してしまった。
僕が頭を下げると、ふと、轟くんが問いかけた。
「なァ。俺らに『決められたレール』があったなら、そこから何か分からないのか？」
「先生たちの存在が作用して、そのレールを外れても、基本的なことは変わらないから…もしかしたら、分からなかったことがいろいろわかるかも知れない…。

先生、きりちゃん、どう?」
……なーんにも分かりませんけど!?
フィクサーとか出てないし、敵性国家も出てないし、人工個性も何もかも知らない単語ばっかで思考停止してたんですけど!?
そんなことを言えるはずもなく、僕は東北さんに説明をぶん投げるように、視線を向ける。
東北さんは軽くため息をつくと、言葉を選び始めた。
「……えーっと…。すっごく言いにくいんですけど、この世界、先輩たちの『決められたレール』から、めちゃくちゃ外れに外れまくってなーんも分からないんですよね。
フィクサーとか、人工個性とか、今回の彫刻もそもそも出てこなかったし。
…あと、原作の方が連載中のままだし、私らちょこっとキャラクター…ってか、先輩方のこと人伝に聞いた程度で死んじゃったので、核心部分とか、これっぽっちも分かりませんよ」
「…要するに、マジで誰もが知ってるような基本的なことしか分からないからアテにすんなってか?」
「ま、そゆことです」
「肝心なとこで使えへん前世やなぁ」

「「うぐぅっ」」
麗日さんに斬られた。仕方ないじゃないか。
二人とも、薄い程度にしか興味なかったんだし。
膝から崩れ落ちる僕たちに、緑谷くんが慰めるように背に手を置いた。
「エアプ層はそんなもんですよね。
詳しいことなーんも分かんないですよね」
「オタク特有のエアプ層ヘイト!!」
「緑谷先輩ってこんな性格悪かったですっけ!?」
違った。慰めじゃなかった。なじられただけだった。
僕たちが更に落ち込んでいると、ミコトちゃんがおずおずと手を上げた。
「あ、あの。彫刻家は？」
「あ゛。やっば。なーんにも調べてない」
「忘れんなアホデク殺すぞ」
「あだっ」
爆豪くんは言うと、緑谷くんをハリセンでシバき、引き摺ってこの場を去っていく。
皆も僕らの知識から大したことがわからないと分かるや否や、この後の予定を立てたりして、踵を返していった。

取り残された僕たちは、顔を見合わせる。
「……明かし損でしたね」
「……ね」
僕たちの怒りは、すっかり冷えていた。
♦？♦？♦？♦？
『…受け止める覚悟が出来たら、また連絡してぇや。ウチはいつでも待っとるよー』
「はい、ありがとうございます」
先生から貰った連絡先の人…名前は知らない…に頭を下げ、通話を切る。
雄英高校普通科２年Ｃ組。部活や進路相談で誰もいない教室で、私…桜乃そらは物思いに耽ることにした。
父様と母様の行方が分からなくなって、ちょうど一年。警察にもヒーローにも頼んで、必死に捜索を続けてもらって、影すら見つからなかったと言うのに。あの人に任せた途端、行方はあっさり見つかった。
ただ、相当の覚悟が必要だと言われ、両親が生きてることを愚かにも信じている私は、両親のことを聞くのをやめた。
「……ダメですね。筆を握れば、どこまでも残酷になれるのに」
結局のところ、私も人の子だったわけで。

耐えきれない絶望が進むべき道の先にあると知ってるなら、希望を持ったまま立ち止まり、死にゆく人生を送りたいと願ってしまっている。
今の情けない私を見たら、先生はなんと言うのだろう。
「……帰ろう」
このまま教室に居れば、気が滅入るばかりだろう。
私は席を立ち、荷物をまとめて外に出る。
静まり返った廊下を歩き、階段を下っていった。
「……ひひっ」
そんな笑い声が、後ろから聞こえた気がした。

推理ものとか絶対に向いてないメンツ

２月最後の休日。
昼過ぎまで寝ようか、と思い、暴露の件のヤケも合わさって、慣れない酒を一杯だけ飲んで爆睡した後の朝。
いつもより二時間遅い１０時前を指し示す時計に、僕はこれ以上眠る気にもなれず、布団から這い上がって洗面所に向かう。
歯磨きを済ませた後、朝食は何にしようか、と冷蔵庫と相談している、その時。寝起きの耳にはうるさい着信音が響く。
辟易しながらも固定電話の受話器を取り、電話先の相手を確認した。
「もしもし、水奈瀬ですが」
『…ああ、この番号で合っていた…！
水奈瀬先生、ボクのことを覚えていらっしゃいますか!?飯田天哉です！』
受話器の向こうにいるのは、以前のサイン会で出会った、そらさんの後輩だった。
慌てた様子に、僕は怪訝な顔を浮かべ、彼を落ち着けるように問いかける。
「…そらさんからこの番号聞きました？」

『はい。……いやっ、こんな問答をしてる場合じゃないんです!!』

落ち着きはしなかった。寧ろ、余計に焦っているように思える。

僕がその焦燥っぷりに疑問を抱いていると、受話器の向こうから、とんでもない言葉が放たれた。

――――桜乃先輩が行方不明に!!

♦?♦?♦?♦?

「最後に目撃された場所は…雄英の廊下…ですか」

「はい。弓道部の子たちと一緒に、進路相談に残っていた子たち…あと、先生方にも全員聞き込みして…。

一律して、『下駄箱に来たのを見た人がいない』ので、校舎内で攫われたのは確かだと思います」

肝心の場面を見た…という人は居ませんが、と付け足し、ずん子さんが唸る。

曰く、彼女の靴は回収されていたらしい。だというのに、誰一人そらさんの姿を見た人は居ないとのこと。

そらさんは良くも悪くも話題の中心だ。今をときめく高校生作家。純文学という若者には少しばかり高いハードルはあるものの、そのブランドだけで注目の的ではあるはず。

そんな彼女を、国内屈指のマンモス校である雄英内で全く見ないということが、果たしてあり得るのだろうか。

「雄英って、出入り口に雄英バリアーってダサい名前の防壁プログラムありますよね。アレの感知システムに引っ掛かってたりとかは…」

「…ハッキングして見ましたけど、個別認識ってわけじゃなくて、生徒手帳と各教員に配布されているネームプレートに仕込まれたチップで大雑把に通していい対象を判別してるみたいです。監視カメラ見たんですけど、マンモス校故におっそろしいほど人混みだったんで、あの中からそらさんを攫った人間を見つけるのはまず無理ですね。カメラの性能もとんでもなく低いし。

茜さん日本政府死ぬほど大嫌いだから、頼むと目ん玉飛び出るくらい高くつくし、お国がケチったんだろうな…」

「要するに、確認するのは無理ってことですね、イズクくん」

…あそこ、一応最新式と謳う設備が整っていなかっただろうか。

いや、そういえば日本はアメリカに比べて、設備面や産業面では劣っていたな。茜さんがあっちに行っちゃって、大統領の頼みで力を貸してるから。

ここに来て、それが裏目に出てしまったのか、と思いつつ、僕たちは集めた情報を展開していく。

「雄英に外部犯が侵入するなんて、まずあり得ない。侵入した瞬間、警報が鳴り響いて大パニックが起きるはず」
「そもそも侵入するメリットもねェ。春空先生を狙って侵入しようが、中には三桁近い数のヒーローがいる。仮免持ってるヒーロー科生徒も合わせれば…余程のバカか大物じゃねェ限り、侵入する気はまず起きねェ。
加えて、被害者の数は相当数だ。それが表に出てきてない以上、隠蔽は得意なんだろ」
「ちゅうことは…内部犯しか有り得へんってわけ…やな」
そこまで導き出せたとして、僕たちは悶々と頭を抱える。
何度も言っているが、雄英高校は国内屈指のマンモス校だ。そこから犯人一人を特定しろと言われても、確証が持てる証拠を有していない僕たちには不可能に近い。
どうしたものか、と悩んでいると、ふと、爆豪くんが口を開く。
「……デク、イエスかノーで答えろ。写真越しに解析って出来るか？」
「んー…。ツール入ってるし、3分もありゃイケるけど…。え？かっちゃん、あの彫刻撮ってたの？」
「そっちもだが、もう一枚あンだよ」
爆豪くんは言うと、懐から携帯を取り出し、出力したであろう写真を見せる。
スライドさせていくと彫刻の写真が何枚か続く。何が目的の写真なんだろうと皆が

疑問に思っていた途端、小柄で瓶底メガネをかけた少女の写真が写し出された。
「この女のエプロンに大量に付着した石片。拡大して調べてみろや」
「分かった。ちょっと待ってね」
緑谷くんはケーブルでパソコンと携帯を繋ぎ、写真の解析を進める。暫くして解析が終わると、「ビンゴ」と呟いた。
「カメラは性能良くしてナンボだね。結構あっさり分かっちゃうモンだよ。
断面図に神経やら血管、筋肉っぽい模様が見えてるから、確実にあの彫刻だ」
「あの女は落下した彫刻を『回収』しに来た。つまり、付着してる石片は、『落下した彫刻のモンじゃねェ』っつーこと」
「そして、あの場で壊れた彫刻は、調査したところ落下した八つだけ。そんなグロテスクな石片が付着する可能性は一つ」
「そいつが悪趣味な彫刻家ってわけか！」
犯人像は特定できた。あとは、この女の身元を突き止めるだけ。
東北さんが緑谷くんを押し退け、パソコンを軽くいじると、何処かへとアクセスする。
そこには、人物の名前が羅列する一覧表が映し出された。
「雄英高校のデータベースに潜り込みました。生徒写真も保管されてるんです。
この女、丸裸にしてやりましょう」

「雄英って、セキュリティ半端なく頑丈なことで有名だったろ…。障子紙かよ…」
「破られたくなきゃ、茜さんでも懐柔して連れてこいってんです」
「無理だろ。あの人、大の日本政府嫌いかつ大の日本プロヒーロー嫌いだぞ」
思えば、茜さんって「日本の文化は好きだけど、政治形態やプロヒーロー組織は嫌い」って言って嫌がらせしてたなぁ。僕たちが日本社会の信頼を地に落とした時も、めちゃくちゃ喜んでたし。
とことん自国民に愛されない国だなぁ、と思いつつ、ことの成り行きを見守る。
「出ました。…ありゃ、サポート科の2年なんですね、この女。
名前は『彫元鳴子』。専攻は…デザインですね。絵を見る限りは普通ですが…。
……ん？あれ？…個性が『計測』…？石化じゃなくて？」
「人工個性か、それとも別の何かか。どっちでもいいけど、『何かしらの手段がある』って考えた方がいいね」
「や、別人って可能性…」
「ない。完全一致」
…今わかった。この子らに推理ものさせちゃダメだ。法的証拠も隠蔽工作もなんのその、力技で解決しにかかる。
かつて、ここまで雑にも程がある名探偵がいただろうか、と思っていると。

ふと、イタコさんから声が上がった。
「この方、見たことがありますわ。
3年前に郊外にあるいくつかの集落で連続して起きた、千人規模の集団失踪…。ほとんどの人間が居なくなった集落の中で、残った数人のうちの一人として新聞に取り上げられていたはずです」
「タコ姉様、よく覚えてますね?」
「神隠しの類かと思って、記憶していただけですわ。　敵の仕業とか噂されてましたが、雄英の生徒が黒幕かもしれないなんて…」
「世も末ですよね。前々から言ってますけど」
神隠しの方が億倍はマシだと思う。
少なくとも、痛覚も意識もあるまま彫刻にされ、挙句は痛めつけられるという末路かどちらか選べるなら、真っ先にそっちを選んでる。
「……待てよ?失踪?石化じゃなくて?」
「…つまり、『そんな規模で石化した人間をバレずに運べる何か』があるってことですか。
雄英高校のセキュリティに引っかからないほどの隠蔽性能と合わせたら…、人工個性絡みであることは明白です」
「何はともあれ、奴の…謂わば『アトリエ』を探すほかないか」

アトリエ。まずはそこを突き止めねば、そらさんの救出もままならない。
彫下鳴子が頻繁に訪れている場所をしらみ潰しに探すほかないか、と皆の意見が固まり、緑谷くんとによる捜索が再開。
手持ち無沙汰となった子は、雄英の子たちの携帯をハッキングし、彫下鳴子と繋がっている人間を洗っていくらしい。
彫下鳴子、若しくはその両親名義の連絡機器に記録された会話も、できる限り見ていくとのこと。プライバシーもへったくれもない。
「…履歴を見るに、彼女は単独犯。
発言も相当気をつけてます。地元の人間は…ダメですね。3年前に削除されてる」
「…削除された連絡先に手がか…うっ…わっ!?何この数!?!?!」
「面食らってないで確認する!!」
東北さんの怒号に、緑谷くんがいくつものウィンドウに並ぶ会話を凄まじい勢いで確認していく。
と。数秒もしないうちにその動きを止め、緑谷くんはマウスを握る手を止める。
「……あれ?削除された会話…、どれも最後が待ち合わせ…?いや、待てよ」
緑谷くんは再びパソコンにて何処かのデータベースに侵入し、いくつかの資料を見る。

数秒でそれを終えたのち、緑谷くんは口を開いた。
「…全員、行方不明だ…」
「連絡機器は？」
「念入りに破壊されてるっぽい。そらさんの携帯も多分…」
「コイツの潜伏先を待ち合わせ場所から導き出せねェか？」
「待って。今やってる。待ち合わせ場所がどれも田舎駅やバス停…。交通機関が相当限られてくる場所だから…」
…僕、完全にお荷物だな。
何かしようとした時には、大抵彼らがなんとかしてしまっている。
彼らに糖分でも与えようと、冷蔵庫に作り置きしていた人数分の台湾カステラを切り分け、紅茶やコーヒーを注ぐ。
僕がそれをトレイに乗せて部屋に戻ると、緑谷くんがまさに作業を終えた瞬間だった。
「……イタコさん。最初に失踪が起こった集落は、『岩影村』ですか？」
「ええ。そうですわ」
「決まりだ。皆、支た…」
ぴたり。緑谷くんの動きが、僕特製の台湾カステラに留まる。

貧乏時代から余裕があれば作っていたシロモノのため、緑谷くんに毎度振る舞うたびに「美味い美味い」と言いながら、あっという間に食い尽くしていた思い出がある。

まさか、この状況で好物を優先するような浅ましさは無いだろうな。

そんな思いが通じたのか、緑谷くんは踵を返した。

「……その、ご褒美に取っといてください」

「分かりました」

血反吐を吐きそうな声をしていた。

♦？♦？♦？♦？

「兄さん、桜乃先輩は…!?」

「……サイドキックたちとしらみ潰しに探してみたが、見つかっていない」

リビングにて。祈るような気持ちで報せを待っていたボクに、兄さん…プロヒーロー『インゲニウム』が告げる。

その言葉に膝から崩れ落ちそうになるも、なんとか堪え、続報を聞く。

「聞いたところじゃ、雄英内で行方不明になったそうだ。大慌てで捜査しているが…状況は芳しく無い」

「ゆ、雄英で…!?つまり…」

「ああ。生徒か教師の中に犯人がいる可能性が高いだろう」

誉れある雄英高校で、そんな事件が起きるなど、あってはならない。あまりに現実離れした事実に愕然としていると、兄さんはグレープフルーツジュースを一気飲みし、多少むせながらも踵を返す。

「比較的近場を担当している俺も、雄英に来るよう、要請が来ている。

天哉。くれぐれも下手に首を突っ込むなよ…って、お前にゃ言わなくてもいいか」

「ああ。気をつけて」

ぱたん、と扉が閉まる。

また、あの不安と格闘する時間が来た。父も母も、兄さんと同じように桜乃先輩を探してくれてる。

大丈夫。頼りになる家族が探してくれてるんだ。きっと見つかる。桜乃先輩は、きっと。

拭いきれない不安をかき消すように、自分に言い聞かせる。

――――言葉には、人を変える力があるの。それはいい方向かも、悪い方向かもしれない。誰にもそれは分からないけど、私の言葉で前を向いてくれる人がいたら、嬉しいって思うの。私は、言葉に救われたから。

桜乃先輩の顔がよぎる。

あの声がもう二度と聞けないんじゃ無いか。言葉で世を変えようと足掻くあの姿を、

もう二度と見れないんじゃないか。
そんな不安が胸中を蝕むたびに、何度も何度も、大丈夫だと根拠なく唱える。
――――ね、天哉くん。君は、ヒーローになって、『何をしたい』？
ボクはヒーローとして、皆の模範となりたいと願っていた。その理想の『先』を考える機会をくれたのは、他でも無い桜乃先輩なのだ。
ヒーローになって、皆の模範となる姿を、彼女に見守っていてほしい。
そんな淡い願いすら踏み潰すような不安に抗うように、ボクは大丈夫、大丈夫と心を誤魔化す。
と。その時だった。ボクの携帯から、着信音が響いたのは。
「……っ!?桜乃先輩っ…」
映し出された番号は、桜乃先輩のもの。
ボクは慌てて通話ボタンを押すと、携帯を耳に当てた。
瞬間。ボクは即座に家を飛び出した。

狂気の芸術

『…不気味な村だね』

『そりゃあ、集団失踪なんて事件が起きた場所だ。気味悪がって近づく人間もいないんだろ』

僕…緑谷出久と一等星の戦闘メンバーの皆が、高台から村を見下ろし、言葉を交わす。

先生たちは留守番。また、前のようなことに巻き込まれては、たまったものじゃ無い。

先生と東北さんも、留守を守ることに賛成してくれた。

――――僕が言いたいことは、君たちが言ってくれるでしょう?

本当であれば、その燻る怒りを爆発させ、犯人に問い詰めたかっただろう。先生は気づいていないかもしれないが、いつもより遥かに声が低かった。それこそ、僕たちが思わずたじろぎ、殺されてしまうんじゃ無いだろうかと思考してしまうほどには。

どれほどの怒りだったのだろう。

自らの意思で生命の禁忌を背負い、苦悩を抱きながら生きることを選んだ先生たち。対して、その禁忌の重さも知らぬまま、他人にそれを押し付ける彫下鳴子。先生たちにとっては、なによりも許せなかったことだった。それこそ、年中気怠げな先生が、怒り

と殺意、憎悪を込めた声を発するほどに。
先生はそんな身を焦がすような怒りを飲み込み、僕たちにその役目を託してくれた。
僕が決意を新たにしていると。
彼女の企てを阻止すべく、この集落を偵察していた偵察機…イズク六号『ガニメデ』から有力な情報があったと映像が幾つか送られる。
『映像来たよ』
『コレで収穫なしだったら殺すからな』
『ちょっとは待ってよ』
かっちゃんの言葉に辟易しながら、僕は映像を一気に確認する。時間が惜しい。数倍送りにして確認しなければ。
数秒のロスはあったものの、1分にも満たない時間でその場所は突き止められた。良かった、かっちゃんに殺されずに済む。
『あそこだね』
僕が指を刺した方向には、民家も何もない茂みだけが鎮座している。皆が首を傾げるも、僕が高台から飛び立ったのを見て、一斉に動き出す。
しかし、人気のない村ほど不気味なものはない。…まるで、ここだけが日常から断絶された異世界のようだ。

『この先だ』

茂みをかき分け、奥へと進む。

一瞬で目的地に着くことも出来るが、高速で駆ければ、確実に周囲に影響を及ぼす。そうなると、確実にプロヒーローがこぞって集まってくるだろう。

人工個性が絡んでる以上、今回はプロヒーローは頼りにならない。…いや、人工個性のことで頼りにならないのは毎度のことだけど。寧ろ脅威側に回ったこともあったけど。

急ぎつつも慎重に、僕らは山の奥へ、奥へと足を進める。

『……アレか』

僕たちが見つけたのは、一軒の民家。

山奥に隠れるように鎮座するソレは、独特の不気味さが漂う多少の劣化が見られる。

血飛沫のような跡に、人の手形のようなペンキの跡。

民家を囲う柵に門。そこには、今から立ち入る人間を睨めつけるような、なんとも言えない不気味さを持つ犬の彫刻が座る。

いや、犬というには、些か語弊がある。その犬は、身体の至る所が『人の彫刻を幾つも組み合わせた』ものだった。

同行していたずん子さん…薄いバリアは張ってある…が、顔を顰める。

「……酷い」

『門は飛び越えよう。変に音を立てるとかえって危険だ』

僕たちは軽く跳躍し、門の向こうへと侵入する。ずん子さんも、何故か奥さんのスパルタ訓練を受けているらしく、三メートル近い門を軽々と飛び越えていた。

民家を近くで見ると、門と同じように、所々朽ちた跡が見られる。

おどろおどろしい雰囲気を放ち、鎮座する鉄製の扉。錆びたソレを軽く握ると、鍵がかけられていることがわかる。

僕は針金を二本取り出すと、鍵穴にその二つを突っ込み、鍵を開けた。

『開けるよ』

きい、と軋んだ音が鳴る。

蝶番が相当古かったのだろう。怪物の唸り声かの如き音に、皆が悲鳴を堪える。以前やった肝試しも相当だったが、あそこは管理もされてる公民館で開催されていたものだ。作り物と分かっているだけあって、何処か安心感があった。

が。ここは違う。本当の人の狂気が作り出した、地獄の顎門。

木漏れ日すら降り注がぬこの場所故か、少し先も見えぬ程の暗闇が扉の奥に広がる。

『スーツに暗視機能があるから、このまま進んでも不意打ちとかは対処できるよ』

『ずん子さんはウチと行こか』

「あ、大丈夫。私、視力１２．０だから」
『マサイ族かよ…』
恐怖を紛らわせるように、そんな談笑を交わし、足を踏み入れる。
仮面越しに見る民家は、空気が入るだけで埃が舞う、汚れた空間だった。人の出入りしている痕跡はあるのだが、家が汚れることに無頓着なのか、埃が雪のように積もっている。
定期的にゴミを出してはいるのだろうが、それだけだろう。とても衛生的とは言えない空間だ。
『…生体反応で桜乃さんの安否とか部屋の場所とか、分かりません?』
『彫刻が生きてるから、生体反応での確認は無理だね。桜乃さんの血液とか髪とか細胞片でもあれば、調べられたんだけど』
『緑谷お前今相当危ないこと言ってる自覚ある?』
『仕方ないでしょ、ホントの事だし…』
ストーカーもびっくりな物言いなのは、自覚してる。
このまま感知していても、埒が開かない。生体反応の感知を止めようと操作を続けていると。ふと、ある違和感に気づく。
『……ん?』

埃っぽい家の中に、彫刻の類が一切置かれていない。なのに、生体反応だけが数えきれないほどに点在している。

いや、点在というほど散漫な反応じゃない。むしろ、規則正しく等間隔で並んでいる場所があるのだ。

そちらに向かうと、僕の瞳には、何の変哲もない壁が飛び込む。

『隠し扉の類か…な……』

壁を見渡すと、そこに飾られたものを見て、思わず顔を顰める。

そこには、画鋲と紐で吊るされた、生首の彫刻が鎮座していた。

その表情は苦悶と絶望が入り混じる悲痛なもので、見ていて気分のいいものではない。その彫刻に合掌し、立てかけてある紐を画鋲から離す。

と、彫刻があった場所に取っ手が鎮座していた。ソレに手を突っ込むと、カチ、と軽い音が響く。

『……ビンゴ』

『隠し扉の仕掛けまで趣味悪いのな…』

ずっ、ずっ、と石を引き摺るような音と共に、壁が横へとスライドする。

現れたのは、階段。両脇にて、等間隔に鎮座する絶望の彫刻。見るだけで価値観をぐちゃぐちゃにされそうな彫刻が、僕たちに救いを求めるように、絶望に固められた眼差

しを向けていた。

『……法の裁きすら生ぬるいとこれほど強く思ったのは、３２年生きてきて初めてですよ』

先生が通信越しに、絞り出すように呟く。

確かに、この光景を見てしまっては、そう思わざるを得ない。絶望に染められた表情の生首が並ぶ、こんな狂気の空間なんて。

石造りの階段をゆっくりと降り、奥へと進む。防音加工がされているのか、それとも被害者は全員石化させられたのか。不安になる程に静謐に包まれた場所。

軈て最奥にたどり着くと、やけに重そうな扉が僕たちを出迎える。

『……この向こう、か』

『先手取られたら終わりだ。戦闘準備はしとけよ』

かっちゃんの言葉に、皆それぞれ臨戦体制に入る。

僕が殿として扉を開く。

「……っ、ゆる、さない…!!赦さないぞ貴様ァァァァァァアアアッッッ!!!!」

その時。先日出会ったばかりである、飯田くんの喉を引き裂く程の絶叫が轟いた。

♦？♦？♦？♦？

遡ること、数分前。

桜乃先輩の携帯を使って接触してきた犯人の要求通り、ボクは岩影村と呼ばれる、失踪事件が起きて以来、ゴーストタウンとなった集落へと訪れていた。
放置された家屋、雑草だらけの畑、最低限のライフラインすら機能していない。
まさに誰もいない死した村。幽霊の村とも呼べるだろうか。
「……ここに、桜乃先輩が…」
要求は簡単なものだった。
『桜乃そらの命が惜しければ、単身で岩影村に来い』という、非常に危険ではあるが、シンプルな条件。無論、ボクが単身で乗り込んだところで、相手の思惑通りに人質にされるか、最悪殺されるかがオチだろう。
兄さんにも既に連絡はしてある。単身でこの場に乗り込むなど、そんな無謀な事はしない。近くをパトロールしていた兄さんのサイドキックが、ボクの周りを見えないように警戒してくれている。
「…ここ、か」
何が目的で、ボクに接触を図ったかは分からないが、桜乃先輩を救出するチャンスだ。
兄さんが念には念を入れて、手の空いているプロヒーローに声をかけ回っている。その間にボクは犯人相手に時間を稼がなくてはならない。
改めて気を引き締め、待ち合わせ場所である広場へと足を踏み入れる。

「……あれ？な、にか…」

と、同時に。

世界が崩れるような感覚と共に、意識が遠のいた。

♦？♦？♦？♦？

「……や…」

あの人の声が聞こえる。

意識が薄らと覚醒していくのを感じながら、ボクは鉛のように重い瞼を開けようと力を入れる。

「……や……ん…」

声が聞こえる。

意識がより覚醒に近づくたびに、本能が「目を覚ますな」と警鐘を鳴らす。同時に、ボクの理性が「今すぐ起きろ」と叫んでいた。

「天哉くん!!」

震えるその声に、ボクは一気に目を覚ます。

先程の葛藤など無かったかのように、意識が覚醒を果たし、鮮明に目の前の光景を情報として脳に取り込んでいく。

本来ならば、目を覚ましたばかりで鈍いはずの脳が、今日は人生の中でも最速に迫る

勢いで回転する。
辺りは電気の光が煌々と部屋中を照らす、芸術書で見たアトリエのような空間。
そこに立ち並ぶ人型の彫刻が絶望を顔に浮かべる、狂気の沙汰としか思えない場所に、ボクは縛られていた。
「天哉くん…!!なんで、なんで来てしまったんですか…!?」
隣には、同じように鎖に繋がれた桜乃先輩。窶れているあたり、かなりの時間、ここに閉じ込められていたのだろう。
その顔は恐怖と憔悴で染め上げられており、彼女がどれほど追い詰められていたのかがわかる。纏う服は雄英の制服ではなく、絢爛でありながらも肌の露出がやけに多いドレスだった。
ボクは錯乱する桜乃先輩を落ち着かせようと、声を出そうとする。
と。その時だった。
「あれぇ?もぉ起きたのぉ?」
幼い子供のような、しかしながら凄まじい悪意と邪気を孕んだ声が聞こえたのは。
声の発生源らしき場所へと視線を向けると、雄英の制服の上に、石片だらけのエプロンを纏う少女が立っていた。
浮かべる笑みは、一見屈託のない無邪気なもののように思えた。

「まだ寝てていいのにぃ。今、いい『素材』が手に入ったんだもの」
「ーーーーーーーーッッッ!!???」
素材。その言葉に疑問を持つ暇もなく、声にならない絶叫が、ボクの耳をつんざく。
その声に聞き覚えがあったボクは、少女の奥へと目をやる。
と。鉄臭いにおいと、あまり嗅ぎたくない類のにおいが混じり合った、不快な悪臭がボクの鼻腔を駆け巡る。
一体なんだ、と思い、目を凝らして見ると。
「……は?」
そこには、ボクもよく知る人物が台座に寝かされていた。
兄さん…プロヒーロー、インゲニウムが信頼を置く「チームＩＤＡＴＥＮ」のメンバー…その最古参とも呼べるヒーロー。
彼を縛り付ける鎖は、プロヒーローたる彼でも簡単には千切れず、身じろぐことしか許さない。
桜乃先輩はこの先何が起きるか分かっているのか、彼から目を逸らした。
「……っ、天哉くん、早く、逃げ…」
「えーい」
「っ、がァァァァァァァァァァァァァァーーッッッ!?!?!?」

彼がボクに逃げろと告げようとするも、その声は肉が切れる音にかき消された。
少女の手には鮮血に染まる鉈が握られており、振り下ろされた先には、彼の右腕が転がっている。
激しく噴き出す血に、絶叫する彼。よく見ると両足も既に切断され、焼き潰されて簡易的に止血させられていた。
続けて、咽せるほどに何かが焦げるような香りが、部屋中に充満する。
その光景を作り出した張本人は、笑みを崩さず、絶望に顔を歪める彼を見つめていた。
「ぁ…、ああっ…、ああああああぁ…っ」
「ああ…、その顔、その顔よぉ…！人間はその顔が一番『綺麗』なの…！
そんなに怖がらなくてもいいわ…。安心して…。私に委ねるの…。永遠に、その顔で、生かしてあげるからぁ…!!」
「アアアアアアアアアアアアアアアァァァ…………」
瞬間。ぱきん、という音と共に、彼の息が止まった。
切り落とされた四肢もろとも、身体全てが石となったのだ。
あまりに凄惨な光景に、言葉も出ない。罵倒しようにも、ちろちろと歯を舐めるように舌が動くだけ。
ボクは今、完膚なきまでに恐怖に屈していた。

「……っ、これで、五人目…。
あなたは何がしたいんですか!?なんで、こんな惨いことが出来るんですか!?」
桜乃先輩がありったけの怒りを込めて叫ぶ。
五人。聞き間違いでなければ、目の前の女は少なくとも五人は同じように殺している。
少女はその言葉を聞き、きょとん、と目を丸くした。
「ええ?私の話聞いてても分かってないの?
小説家って言っても頭は悪いのね」
「そんなこと…聞いてません…!!
なんで、人を殺すんですか…?なんで、人を躊躇いもなく石にできるんですか…!?」
桜乃先輩の問いに、少女は屈託のない笑みを浮かべ、悍しい言葉を紡いだ。
「人って、絶望した顔が一番綺麗なの。
でもねでもね、絶望って過ぎると薄れてきちゃうの。だから、私は綺麗なまま保存してあげてるだけなのよ?
ああ、大丈夫。私が興味があるのは顔だけなの。割れちゃったり、取っちゃった他の部分はきちんと再利用してあげてるから」
それだけなのか?ただ、それだけの理由で、兄さんの仲間は殺されたのか?

ふつふつと湧き上がる怒りに恐怖はかき消され、ボクは絞り出すように怨嗟を吐く。
「そんな、理由でか…？それだけの理由で、兄さんの仲間を…!!」
「もぉ、怒らないでよ。一番綺麗な姿で、永遠に生きられるのよぉ？
なんで責められなくちゃいけないの？むしろ感謝してほしいなぁ」
「生きられる…？生きられるだって…？こんな姿のどこが生きてるって言うんだ!?」
ボクが怒鳴りつけるように問いかけると、少女は笑みを浮かべていた目を開き、その笑みを凄絶なものへと変貌させた。
「生きてるのよ!!ほぉら、コレに耳を当ててごらん…？」
彼女は言うと、台座に転がった石塊を担ぎ、ボクたちに近づく。
「や、やめろ…！近づくな…!!」
「遠慮しないでいいの、ほらぁ…!!」
ぴとり。先ほどまで体温を保っていたとは思えないほど、やけに冷たい感触が、ボクの頬に触れる。
一体なんのつもりなのだ、と訝しむも、その真意はすぐに分かることとなった。
どくん、どくん、と心音が聞こえるのだ。到底、生きているとは思えない体から。
あまりの不気味さに声を漏らしかけるも、なんとか堪え、少女を睨め付ける。
「……っ、ゆる、さない…!!赦さないぞ貴様ァァァァァァァァッッッ!!!!!!」

その時だった。重々しい扉が開き、歪なシルエットが大挙して押し寄せたのは。

悪よ、退け。

ＳＡＶＥＲ。

一年前より活動を始めて以来、日本を中心に世界を股にかけ、活躍するヴィジランテ。超常社会となった今でも不可思議と言える事件には必ずと言っていいほどに関わり。日本に巣食っていた異能解放軍を白日の元に晒し、壊滅させ。ｉ・アイランドに大挙して押し寄せた敵性国家とフィクサーの手の者を撃破した。

その対価は、世界中から犯罪者として身柄を狙われる立場。「英雄」として彼を祭り上げる風潮が少し前から蔓延しているが、本人はただ己の正義を執行することにしか固執しない。

ボク…飯田天哉から見た「ＳＡＶＥＲ」という存在は、「目指すヒーロー像の対極」だった。

己が正義のため、秩序を好き勝手に乱し、己を通すためだけにヒーローという存在を軽くしていく。

その所業は、秩序の番人であり、皆の模範として生きるヒーローたちに失礼極まりない。

模範として在るべきを捨て、エゴだけを信じて突き進んだ果ての姿だと、反面教師として見ていた。

そんな存在が、この狂気の世界へと足を踏み入れる。

仮面に包まれて表情は分からないが、機械越しの声音は酷く冷たいながらも、煮え滾るような熱が篭っていた。

『彫下鳴子。貴様の悪を砕きに来た』

「あれぇ?なんで私の名前を知って…」

瞬間。悪魔の顔を、静かな、しかし荒れ狂う怒りを乗せた拳が捉える。

衝撃波が部屋を揺らし、風が肌を撫でる。

吹き飛んだ悪魔から離れた彫刻を、彼は優しく受け止めた。

♦?♦?♦?♦?

『なんや、急に連絡寄越して。

ウチは今ピラミッドから見つかったロストテクノロジーの解明に忙しいんです〜』

「話くらいは片手間に出来るでしょう?」

パソコンに流れる映像を傍で見守りながら、通話の向こう側にいる自由人を問い詰める。

そらさんから依頼を受け、今回の事態に至っても傍観を決め込んでいる。コイツのこ

とだ。彫下鳴子が何をしでかすかは、大体検討が付いていたのだろう。
それでも僕たちに黙っていたのには、何かしらの理由があるはず。琴葉茜という人間はそういう人間だ。
僕の怒気が伝わったのか、『んな怖い声出さんといてぇな、泣くで』と付け足し、語り始めた。
『彫下鳴子がやらかすんは、昨日気づいたところや。厄介なんは…』
「それを『隠蔽する誰か』がいる…ってことですね。君も手こずるような相手が」
僕が問うと、茜さんは「話が早くて助かる」と笑った。
『…覚えがあるんは、フィクサーやな。
あのファイアウォールの癖、隠蔽の癖もほぼ間違いない思うで』
フィクサー。その名前を、ここ数ヶ月で何度聞いたことだろうか。
つくづく彼らと縁があるな、と思う傍、逸れた話題を軌道修正し、本題に戻る。
「君が黙っていたワケは、それだけではないでしょう？」
『…まーな。エジプトで見つけたロストテクノロジーに関係するんやけど…これコウくんに言ってもわかるやろか…？』
はて、何故そこでエジプトが出るのか。
僕が訝しげに眉を顰めたのが透けて見えているのだろう、茜さんは仕方ないと言わん

ばかりにため息を吐いた。
『アケト・クフって知っとるやろ。クフ王の眠るっちゅう言われとるピラミッド』
「ああ、メリッサ・シールドさん共々好き勝手漁りまくった」
…本当にエジプトに目の敵にされてもおかしく無いんじゃなかろうか、コイツ。いや、今更か。裁こうとしても裁けないから、野放しにされてるんだし。
十分足らずでホイホイ脱獄されるタルタロスの職員も大変だな、と同情を向けながらも、意識を茜さんの話に向ける。
『……あんな、その…。癪やけどな…。プライドズタズタにされてホンマに腹立つけどな。
ウチもマジで混乱しとるさかい、推測でもの語ってもなんのこっちゃ分からん思うから、あったことだけ話すわ』
――――王の部屋の奥に、イズクメタルに近い金属が使われとる部屋があった。
その言葉に、僕は手に持っていた携帯を思わず落とす。
ＳＩＭカード…知らないうちに変人たちによって魔改造されていた…に変に傷が入っても大変だ。いつまでも抜けない貧乏性が本能に染み付いていたのか、反射的に地面に落ちる前の携帯を掴み取る。
茜さんが向こう側にいる携帯を耳元に戻すまでの数秒で、僕は心を落ち着けた。

「……で、そっちはオマケですよね？」
　現時点では、彫下鳴子とイズクメタルに関連性は全くと言っていいほどない。加えて、エジプトにあるアケト・クフに至っては、渡航歴がない彫下鳴子と関係があるとは、とても思えない。
　少々面食らったが、本題となんら関係のない話をされても、今に限っては何の足しにもならない。
『おう。本題の方やけど、その部屋で日記みたいなモン見つけたんや。
　そん中に、今回の件に関わりありそうなブツのことが書かれとる』
「なんと？」
『えーっと、「バジリスクの瞳」。触れた人体を石化させる人工個性を搭載した宝石。
　目的は「生体保存」やとさ。要するに、持ち歩ける冷蔵庫。保存するのは人間やけど』
　ふむ…。漫画で見たような気がするな。
　そんなシロモノが、欲に塗れた個人の手に渡っていると考えるとゾッとする。
「コールドスリープみたいなモンですか。
　…昔の漫画にそんなのありましたね」
『参考にしたって書いとるで』
「そうです……か…。……いや…、ん…？

……えっと……、え？は???」

確かあの漫画って、超常黎明期以前に連載していたよな…？

そもそも、漫画という文化が産業として発展したのが近代なのだ。『参考にした』という物言い自体がおかしい。

一体どういうことだ、と思考の海に潜りかけるも、僕の頭では最適解を導くのは不可能だと断念する。

「…取り敢えず、奴に触れるな、とだけ伝えればいいですね」

『せやな』

頑張ってくれ、緑谷くん。

生きたまま彫刻になった生徒なんて、僕は死んでも見たくない。

♦？♦？♦？♦？

捕われの身となった飯田くんたちの保護を、麗日さんと轟くん、ずん子さんに任せ、残ったメンバーは全員が吹き飛んだ彫下鳴子を前に構えを取る。

乗り込んだメンバーは僕、かっちゃん、轟くん、麗日さん、切島くん、あかりちゃん、ずん子さんの七人。奥さんと京町さんは、ヒーローたちの監視に付いてもらっている。

相手は人工個性に連なる何かを有している。並みのヒーローでは太刀打ちできない。i・アイランドの事件がいい例だ。

少なくとも、海外のトップ１０クラスの実力者でなければ。
「邪魔しないでよ…。今良いところだったんだよ…？この子たちが一番綺麗になるところだったのに…」
『お前の悪趣味に付き合うつもりはない。
さっさと倒れてもらおうか』
気絶するほどの力を入れたはずだが、何か細工したのだろうか。
彫下鳴子の顔は赤くなるどころか、無傷の状態だ。全然効いていない。
小細工を暴くのが先決か、と思っていると。彫下鳴子が『あるもの』を取り出したのが、見えてしまった。
「邪魔だから、いらない子と相手しててよ」
見覚えのある注射器にラベル。間違いない。
フィクサーが売り捌いている、人工個性が入った注射器だ。
それも一本じゃない。ざっと見るだけでも、七本はある。
僕たちが止めようと駆け出すも既に遅く。彫下鳴子が投げた注射器が、周囲に佇む彫刻に突き刺さった。
「くひっ、ひひっ、ひひひっ…、あはははははっ!!
これよ…。これさえあれば私の芸術には、命が宿るのよ…!!」

どこまで命を侮辱すれば気が済むんだ、コイツは。
怒りを無理矢理に押さえつけるように、ギリッ…、と歯を食いしばり、動き出す彫刻を前に構えをとる。
「なっ、な…、何が…起きて……？」
「今はここから逃げるのが先!!」
解放された飯田くんが呆然と呟く隣で、憔悴した桜乃さんを背負ったずん子さんが喝を飛ばす。
が。彫下鳴子がその声によって2人の逃走に気づき、怪しい光の灯る瞳を向けた。
「どこに逃げるのぉ…？」
『コキュートスフォートレス』
轟くんの声で発生した氷の壁が、三人が登る階段と部屋を隔てる。
これで追えないだろうと安堵が沸いたものの、現実においてそんな甘いことはなく。
彫下鳴子がソレに舌打ちし、彫刻になんら関係の無さそうな絵筆を取り出した。
『縮小』
瞬間。轟くんの展開した氷が、軒並み小さく縮む。
彫下鳴子が防壁のなくなった階段を駆け上がっていく。慌てて彼女を追いかけようとするも、動く彫刻たちがソレを許さないように、その前に立ちはだかった。

僕が拳を握り、力を入れた瞬間。轟くんとかっちゃんの蹴りが彫刻を吹き飛ばす。
『デク、さっさと行け!!』
『ごめん!!ありがとう!!』
階段を猛スピードで駆け上がる彫下鳴子に追いつくべく、ブースターを起動させ、階段の上を飛んでいく。
その気配に気付いたのだろう。彫下鳴子が忌々しげに「しつこいなぁ」と呟き、小さな氷を投げ捨てる。
「『アンドゥ』」
『がっ!?』
瞬間。先程の氷の防壁が僕を押し上げ、天井へと叩きつけた。
彫下鳴子の手には、先程の絵筆が握られている。あの絵筆に何かあると考えた方が良さそうだ。
力任せに氷を砕き、拘束を脱する。
あの時展開した氷の防壁は、全部で三つ。後二回は妨害があるだろう。
しかし、止まっていられない。彼女に追いつかれたら負けが確定する。
「『アンドゥ』、『アンドゥ』」
『パソコンかよ…!!』

迫り来る氷の防壁に、愚痴をこぼす。
投げた勢いのまま元の大きさに戻されるのは面倒だ。
戻る速度が1秒足らずというのも、なかなかに厄介だ。処理速度はパソコンと同等と見て良いだろう。
注意すべきは、彼女の口元の動き。絵筆を使うためのトリガーか、単なる合図なのかは分からないが、警戒するに越したことはない。
『ジャスティス・ブロウ!!』
二発の拳で、二つの防壁を破壊する。
彫下鳴子たちは、もう外に出ている。捕まってしまう前に早く追いつかなければ。
ずん子さんを失うことになれば、きりちゃんは確実に壊れる。それを覚悟しながらも、きりちゃんは、立ち向かうことを選んだずん子さんを送り出した。
いくら力があるとは言っても、スーツが間に合わず、最低限の安全も保証されていないずん子さんには限界がある。
彫下鳴子には追いつけず、埃まみれの家へと戻ると、玄関が開く音が響く。
「無駄、無駄よ…。私には、最高傑作のこの子がいるんだからぁあああっ!!」
瞬間。埃と木材が弾け飛び、地中から怪物が迫り出した。
♦?♦?♦?♦?

村一つを覆い尽くすほどに巨大な彫刻の怪物が唸り、その場にいる全員に絶望を齎す咆哮を上げる。
ソレを前にして、桜乃そら、飯田天哉の二人は、恐怖に足が竦んでいた。
ざっ、ざっ、と霜柱が折れる音と共に、絶望の体現たる女が、笑みを浮かべて迫る。
「さぁ、綺麗になろぉ…？私が永遠に生かしてあげるからぁはははは、ひひっ、くひひは、あはははははっ!!!」
その笑い声に呼応するように、怪物がその巨腕で退路を防ぐ。
四面楚歌。あまりに希望の見えない状況に、そらが口を開こうとしたその時。
ずん子がその前に立ち、静かに叫んだ。
「あなたの言う芸術は、世界で一番醜いわ」
「……あ〝？」
ドスの効いた声で威圧を向ける絶望に、ずん子はたじろぐことなく弓を構える。
「本当の芸術は、人の心を豊かにしてくれる。人の心を前向きにさせてくれる。人の心に悲しみを教えてくれる。人に何かを慈しむ心を与えてくれる。
少なくとも、桜乃さんが書いた小説は、全部がそう」
「……黙れよ」
薄らと東北きりたんの影が、ずん子の視界には見える。

言いたいことは、全部吐き出す。妹の力を借りて、ずん子はこの場に立っていた。
「あなたの芸術はどう？誰も彼もが気持ち悪いって言って近づかない。
同情なんてしないわ。当然のことだと思う。
人の命を悪用して生み出した芸術なんて、誰かが認めるわけがないもの」
「あーもぉ、ほんっと…うるさいなぁ…。
黙れ…黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ死ね死ね死ね死ねみぃいんな死んじゃえぇえええええっ!!!」
否定の言葉を拒絶し、狂乱する女。
呼応するように、怪物が暴れ、ずん子たちに迫る。
が。その前に緑の一線が走り、怪物の一部を粉砕してみせた。
「やっぱり、私じゃ力不足でしたね。
『緑谷くん』。あとは頼みますね」
『ええ。任されました』
その後ろ姿は、赤のマフラーにシンプルな出来のヒーロースーツ。
飯田には、仮面に隠れて見えないはずの顔に、浮かぶ笑顔が見えた。
「緑谷…だって……？何故、何故君が…!?」
『これでしか、救えない人がいるから』

緑谷はそれだけ言うと、ボイスチェンジャーを切り、癇癪を起こす女へと視線を向ける。

そして指を向け、叫んだ。

「悪よ、退け…！僕がヒーローだ…!!」

止まる場所

「ヒーロー…？はっ、何をふざけてるの？
　ごっこ遊びなら他所でやりなさいよ」
「ごっこ遊びならやってるさ。お前と違って、僕のつま先から髪の毛一本に至るまでの命、魂に至るまでの全て…、文字通りの全身全霊をかけて」
　彫下鳴子の煽りに、淡々と返す。
　彼女は、他人の命どころか魂に至るまでを自身の芸術に作り替えている、芸術家気取りの悪人。醜悪なごっこ遊びで悦に浸り、生命を侮辱した、心底救いようのない悪。
　そんな存在が、あろうことか雄英に潜み、好き勝手していた。
　ヒーローを演じる者として、それ以前に人間として、許せるわけがない。
「私の芸術が、ごっこ遊びですって…？」
「ごっこ遊びだろ。お前の自称芸術家なんて肩書きは、ただの悪趣味を美化しただけの、醜い言い訳だよ」
　そもそも、コイツは彫刻を一から産み出していない。元々生きていた人間を石にして、砕き、適当にくっ付けただけのシロモノを『芸術』と呼んでほくそ笑む。

これがタチの悪いごっこ遊びじゃないなら、何だと言うんだ。
僕の言葉に、顔中に青筋を浮かべた彼女は、血走った目で僕を見下ろした。
「……決めた。あなたを最高傑作にするわ」
「生憎だね。お前の悪趣味に無抵抗で付き合うほど、僕は従順じゃない」
怪物の周囲の被害を顧みぬ猛攻を相殺し、走った痛みに拳を見やる。
一撃が重い。何度か骨が砕けた。
スーツの強度というよりは、僕の体が貧弱すぎるのが悪いらしい。肉体改造もまだ途中だし、来年には改善してるといいが。
相手は人工個性を取り込んだ彫刻。知性などカケラもない生命体なのが救いだが、この物量と威力でごり押されると面倒だ。
何より、僕の背後には守るべき人たちがいる。
業を煮やしたのか、石と石が刷りあう音に似た咆哮と共に、一撃が振り下ろされる。
もし地面に落とされたのであれば、岩盤を叩き割るだろう、僕の背丈よりも少しばかり大きい拳。
僕は軽く飛び上がると、回転することで勢いをつけ、それに蹴りを叩き込んだ。
「……は？」
「なっ、なぁっ…!?」

砕け散る拳。
僕は降り注ぐ破片の中で着地し、その感触と湧き出る罪悪感に顔を顰めた。
「…ふ、ふひ、ひひっ、ひゃはは…っ！
わかっているの…!?アンタ、『ヒーロー』って名乗ってるのに、『なんの罪もない人たち』に攻撃してるのよ!?
しかも、私がわざわざ残らずに再利用してあげた部品たちをここまでバラバラにするなんて!!もしこの状態で戻したら、バラバラ死体のかぁんせぇえい!!晴れて『人殺し』の汚名を被るのよ、アンタはぁああっ!!
あは、あははは っ、ふひひ、ひひひゃはははっ!!今のアナタ、すっ…ごぉく…滑稽ねぇえええっ!!!」
「そうか」
女の戯言を流し、横薙ぎに放たれた一撃を受け止め、背から伸びているであろう触手を握りつぶす。
動揺するどころか、たじろぐこともしないとは、夢にも思わなかったのだろう。
僕は目を白黒させる女を睨め付けるように、目先を向ける。
「生憎だね。背負う覚悟なんて、とうの昔に出来てるんだよ」
人工個性を取り込んだ時点で、この怪物を構成する全ての肉体は崩壊しかけている。

証拠として、砕いた破片が液状化して、地面に吸われているのが見えた。
侵食が以前より明らかに早い。相手がひどく歪な生命だからか、それとも人工個性の凶暴性が増しているのかはわからないが、それだけは解る。
僕は襲いかかる攻撃を迎え撃ち、一歩ずつ、命を侮辱する女へと向かう。
「緑谷くん…。君は…。君はどうして止まらないんだ…!!」
飯田くんの悲痛な言葉が、背中に当たる。
僕はそれに振り向くことなく、ただ前に進む。
「その人は…、その人たちは、まだ生きてるんだ…。きっと、助かるはずなんだ…！ヴィジランテといえ、ヒーローと名乗る君が…、あれだけ頑張れる君が!!真っ先に『諦めて』しまってどうするんだ!!」
その言葉が、痛いほどに突き刺さった。
と。その時だった。
怪物の一部がデロデロに崩れ、液体となってその場に落ちた。
「……は?み、緑谷くんは、まだ…」
「え……?」
飯田くんが狼狽え、桜乃さんが呆然としながら、そのグロテスクな光景に目をひん剥く。

思っていたよりも限界は近いらしい。
怪物は苦悶の声を上げることもなく、溶けかけた拳をこちらに振り下ろした。
が。その拳は届かず、腐り落ちるように、ぼとり、と転がった。
女はそれを見て、軽く舌打ちする。
「ちっ。なにがフィクサーよ、こんな限界の近いガラクタ売りつけやがって…」
「げ、限界…？お前っ！この人たちに何をしたんだ!!」
「危ないです、飯田くん！下がって!!」
飯田くんが女に詰め寄ろうとして、ずん子さんに止められる。
女はそれを横目に、可笑しくて仕方がないと言わんばかりの醜悪な笑みを浮かべ、天に顔を向けて嘲笑った。
「くふっ、ふふふっ…。『人工個性』っていう、超絶ヤバぁいブツを投与したの…！彫刻に打ち込めばあら不思議！私の言うことなんでも聞いちゃうぱぁあぁあふぇぇぇぇくとなァ、ドレイのかぁんせぇぇぇぇいっ!!
最終的には食われて溶けちゃうとか言ってたけどぉ…。まさかこーんな早いとは思わなかったわぁ」
「食われて、溶ける…？
まさか、最近の液状化事件は…っ!?」

飯田くんの目に、絶望が浮かぶ。
女は噴き出す笑いを堪えきれず、下品に涎を撒き散らしながら声を上げた。
「くひ、ふふふっ、ふひひっ、ひひっ、ひひゃ、ひゃはははっ!!
そう!アレが末路!一度接種すれば、絶対に逃れられない、究極の絶望なのよぉお!!
…ま、知性が死にすぎて、その顔が見られないのが惜しいけどぉ…。
でもさでもさ…。その顔って、最っっ…高に綺麗だと思うのよぉ…!」
狂ってる。
僕たちとは絶対に相容れない価値観を持つ彼女を前に、嫌悪を噛み潰していると。
桜乃さんが声を張り上げた。
「あなた…、あなたは…っ!そうやって、私のパパとママも殺したんですか!?」
「…ひはぁっ」
その追求に、歪んだ笑みを浮かべる女。
まずい。今すぐに、醜悪な言葉しか並ばないあの口を塞がなくては。
しかし、僕が動揺を露わにした隙に、ほとんど崩れかけた怪物が最後の足掻きとして放った拳が直撃し、吹っ飛ばされてしまった。
「そぉだよぉ…?解らないかなぁ…?
あなたのパパとママねぇ…、さっき溶けちゃったぁ!!多分、今頃地下で残った部分も

溶けちゃってるかもよぉ？
あは、ひひ、くふひひひっ!!!」
「……っ、ゆる、さない。
絶対に許さない…！今ここで、パパとママと同じように殺してやる…!!」
「桜乃さん…っ」
僕が受け身を取った頃にはすでに遅く、桜乃さんは既に変容してしまっていた。
怒りに声を震わせ、おぼつかない足取りで女へと迫る。
ずん子さんが慌てて止めようとするも、少し力を緩ませれば、今度は飯田くんが彼女に迫ることだろう。
怪物が身を削って作り出す雨を浴びながら、走り出す桜乃さん。
僕は慌てて殺意に取り憑かれた桜乃さんの肩を掴み、その顔をこちらに向かせる。
「桜乃さん！殺すことは背負うことです！奪った命に責任を持つことです!!
この悪魔の命は、アナタが背負えるほど重いんですか!?」
「……その言葉、先生の生徒さんですね。
…大丈夫です。そいつを殺したら、私も死にます…っ!!」
違う。それをしたら、本当に戻れない。
僕は声を張り上げ、彼女の肩を強く掴む。

「そういうことを言ってるんじゃない!!
今のあなたは、命を背負うことの意味を吐き違えてる!!」
「じゃあ、どうすればいいんですか!?
私は…、私は、もう…。この悪魔を殺すまで止まれない…!!」
復讐鬼。その単語が似合う形相に、思わず僕はたじろぐ。
だめだ。僕の言葉では救えない。彼女を止める言葉を、僕は持たない。
僕が諦めかけた、まさにその時。乾いた音と共に、桜乃さんの体が吹き飛んだ。
僕がそちらを見ると、手のひらを真っ赤にしたずん子さんが、桜乃さんを睨め付けていた。
「…飯田くんの…、ヒーローを目指してる子の先輩なんでしょう、アナタ…!」
「……東北、さん?」
「私は…、私だって、故郷にいた親友たちを失った!もう失ってた…っ!!
強がってたけど…。隠してたけど…っ!本当は…、その犯人を…っ、殺したくて殺したくてたまらなかった!!」
吐露された真実を、僕は初めて聞いた。
ずん子さんは、故郷を捨てて逃げてきた。それはきっと、楽しい思い出も捨ててきたんだと思う。

だからこそ、残った思い出が踏み荒らされたと知ったあの時。
髪に隠れたあの顔には、桜乃さんと同じ顔があったのかもしれない。
桜乃さんが呆然とする中で、ずん子さんは続ける。
「でもっ…、お姉ちゃんの私がそれをしたら…。きりちゃんや、この子たちはきっと、今よりもっと簡単に踏み越えてしまう!!
この子たちは…、ヒーローを目指すのはそういう子たちだから、支えてあげる立場の私たちが踏み外しちゃいけないの!!
アナタが止まらなきゃ、この子もいつか止まれなくなる日が来る!!
だから、お願い…っ。許せないだろうけど…、殺したくてたまらないだろうけど…!
飯田くんが簡単に踏み越えてしまわないように、止まってあげて…っ!!」
「……っ」
桜乃さんの目が、飯田くんに向く。
と。その時だった。
「……くっだらなぁい。なぁに、その三文しばぁい？殺したいなら殺せばいいのに」
最悪の煽りが、悪魔の口から飛び出たのは。
逸れかけた矛先が、再び悪魔の胸元へと向けられる。
「なら、望み通り…!!」

「だから！私たちが踏み越えちゃダメだって言ってんですよ！このわからずやぁっ!!」
「わからずやでいい!!コイツを殺さなきゃ、殺さなきゃ…っ!!」
意識が殺意に支配されている。
飯田くんも流石に桜乃さんの様子がおかしいと気づいたのか、慌てて止めに入った。
「……あぁ。そう、その顔…。
くひっ、ひひひっ。この程度の絶望で、そぉんなにキレイなのねぇ…？
もっと、もっと見たいわぁ…！
その先にある、さいっっ…こぉおにぃ、キレイな顔ぉ…っ!!」
悪魔は言うと、桜乃さんの足元に、あるものを投げつける。
そこにあったのは、わかりやすくラベルが貼ってある、人工個性が宿った注射器だった。
「ねぇ、殺したくなぁい？
より惨たらしく、より苦痛を与えてぇ…、じわじわと、私を!!
それを打てば、命と引き換えにソレが叶うのよ…？
さぁ、私はここよぉ…？早く殺しにきてよぉ…？」
「っ……!!」
激情に任せて、桜乃さんが注射器を握る。

まずい。今すぐ止めなくては。
慌てて僕が駆け寄ろうとすると。
飯田くんが流れるように注射器を取り上げ、草むらへと投げ捨てた。
「天哉くん」
驚くほどに冷ややかな声。
それに若干たじろぐ飯田くんだが、桜乃さんの手を強く握り、真っ直ぐに彼女を見据えた。
♦？♦？♦？♦？
桜乃先輩の冷ややかな瞳が、ボクに向く。
いつも見ていた、ボクが好きだった朗らかな笑みはもう、面影さえ見えない。
ボクも両親を…、尊敬する兄さんを失えば、きっとこうなるのだろう。
ボクはゆっくりと深呼吸し、彼女の腕を掴む手に力を入れた。
「桜乃せんぱ…。いや、そら姉さん。もう、止まってくれ」
「いやっ、離して…っ！あの悪魔は、私が殺さないとダメなんです…!!たとえ、私が溶けて消えようとも…」
「そんなことを言うな!!」
ボクは語気を強め、響くそら姉さんの怒鳴り声をかき消した。

そら姉さんは怒りの形相を変えないままに、ボクを睨んでいる。
でも、それに屈してはいけない。命を投げ捨てる真似を放置するなんて、ボクの目指したヒーローでは決してないのだから。
…いや、それだけじゃない。
「ボクは…っ！ずっと、ずっと…。そら姉さんの力になりたくて…、そら姉さんを守りたくて…！そら姉さんに見守ってほしいと思って！ヒーローを目指している!!
そら姉さんが好きだから、ヒーローになって守りたいんだよ!!」
「……ふぇっ!?」
ヒーローとして、どこへ向かうかを考える機会をくれた人。本で世界を変えようと、足掻く姿を見せてくれた人。ボクをずっと、見守ってくれていた人。
きっと、異性としての『好き』ではないのかもしれないけれど。
それでも、憎悪を打ち消すほどに、ボクがこの感情をぶつけなければ、彼女は止まらない。
「異性としてのどうこうなんてさっぱりわからないけれど…。まだ、全然、どんな感情かも整理はつかないけれど…！
それでもっ！ボクがそら姉さんのことを想っているのは本当なんだ!!
だからっ…！頼む…っ！ボクが止まる場所を…、ボクが進む理由を…！こんなヤツの

ために、消してしまわないでほしい…!!」
これがボクのできる精一杯。
ボクができることだけを告げなければ、ボクの言葉は軽くなってしまう。
だから、混じりっ気ない本当の気持ちを、憎悪を剥き出しにした彼女にぶつけた。
そら姉さんの怒りはすっかり消え、真っ赤になりながら、「ふぇ、え、えとっ」と慌てふためいている。
そんな時だった。
「ああ、もぉ、じれったいなぁ!!」
あの悪魔が、注射器をそらさんへ突き刺そうと迫っていたのは。
ボクは慌てて彼女を突き飛ばし、庇うようにして前に出る。
ああ。きっと、ボクはあんな風に溶けて死んでしまうのだろうな。
ボクがそう覚悟した、その時だった。
「正義の一撃」
その声と共に、悪魔の頬に拳が刺さる。
その主は、鎧に身を包んだ緑谷くんだった。
一瞬の静寂。次の瞬間には衝撃波と共に、その体が地面に叩きつけられた。
確実に、決まったと思える一発。

だというのに、拳を放った緑谷くんは、警戒するように僕たちを抱えて、距離を取った。
「な、なにを…!?」
「まだ終わってない」
緑谷くんはそれだけ言うと、少しばかり離れた場所にボクたちを下ろす。
その言葉の通り、悪魔は起き上がり、下卑た笑みを浮かべ、こちらを見ていた。
「…面倒だな。人工個性の技術を用いた道具は」
「くひっ…、流石に気付いてるのねぇ…？
それでも、流石に痛かったけどさ…」
手に持っているのは、謎の絵筆。
しかし、気になるのはそこではない。
ボクは慌てて、緑谷くんに問いかける。
「緑谷くん…っ！まさか、戦う前から人工個性を知っていた…のか…？
だからっ、あんなに躊躇いなく…っ!?」
緑谷くんは、世界一と称されたほどに、凄まじいまでの努力家だ。
ボクもその片鱗は見た。だからこそ不思議だった。
動く彫刻と対峙した時、どうして躊躇いもなく壊しにかかったのか。

先程のセリフから察するに、彼は既に、人工個性という劇物を知っていたのではないだろうか。
ボクの推論は正しかったようで、緑谷くんは首肯してみせた。
「…これは、僕にしか止められない。いや、『僕たち』が止めなきゃいけないんだ」
自分に言い聞かせるように語り。
「誰しもが生まれてよかったと…。生きててよかったと…！心の底から思える未来を作る、そんなヒーローになるために…!!」
誓いの固さを示すように、拳を握りしめる。
彼はそのまま駆け出し、悪魔に拳を叩き込んだ。
「僕たちはどれだけ罪を背負おうと、その未来を手に入れる…!!それが、僕たちの戦う理由だ!!」
孤独なように見えて、背を預ける誰かがいる。勇敢なように見えて、自分を騙すように強がっている。
そこにいくつもの決意があったのだろう。
いくつもの苦悩もあったのだろう。
そして、壁にぶつかるたびにソレを乗り越えてきたのだろう。
「ちっ…！こんなバケモノに付き合ってられるかっての…!!」

まるで自分の姿をドラッグして移動させたようにして、拳の嵐から悪魔が逃げる。
点、点、と少しずつワープして離れていく悪魔を前に、ボクはあることに気づく。
瞬間移動にしてはラグがある。加えて、一定間隔にしか移動していない。
…彼なら、この悪魔を倒してくれる。それは確定なのだろう。
しかし、ソレでいいのだろうか。ソレで、ボクは納得するのだろうか。
いや、ダメだ。考えるな。模範となるヒーローになるんだろう、飯田天哉。
いや、行け。そら姉さんへの言葉を無意味なものにする気か。緑谷くんは、彼女の心を救えるのか？だったら、少なくとも自信を持って救えるといえるボクが、ここで動かなくてどうする。
二人のボクたちが喧嘩している間にも、ヤツは離れていく。
緑谷くんはそれを追うことはせず、真っ直ぐにこちらを見ている。
ボクはどうするべきか、と考えていると。
ふと、そら姉さんの泣きそうな顔が目に入った。
「……天哉くん。ずるいこと、言いますね」
――――――助けて。
瞬間。ボクはズボンの膝下を破り捨て、ふくらはぎから突き出たマフラー部分に力を込めた。

足に熱が伝わっていく。
兄さんの見よう見まねで、正直、てんで上手くいく気がしない。
それでも。進みすぎるボクの止まる場所になってくれる、あの人を救うために。
ボクは一歩を踏み出した。
「……は？」
悪魔の手から、絵筆を奪い取る。
トルクオーバー・レシプロバースト。ボクの家に伝わる、瞬間的に加速する必殺技。
持続時間も精度も、兄さんのソレと比べれば、月とスッポンだ。
しかし、ヤツの移動に一定の間隔とパターンがあることを突き止めた以上は、そこに合わせて真っ直ぐに走るだけ。
それなら、ボクにでも出来た。
絵筆を奪われたことを認識した悪魔は、咄嗟にあの赤い宝石を取り出し、ボクに向けようとする。
「はぁあああああっ!!」
「かっ……」
先程の緑谷くんのように飛び上がり、加速したまま、数回転する。
この無理で、左足首が嫌な方向に曲がったような気がする。痛みが走るが、悲鳴を上

げることはしなかった。
ボクは叫びながら、彼女の脳天へと、勢いのついた蹴りを叩き込んだ。
その場に崩れ落ちていく、悪魔の体。
ボクはやってしまった、という感覚と、やりきったんだ、という安堵で、その場に脱力した。
この日。ボクは初めて、ルールを犯した。

バレンタインの阿鼻叫喚
小春六花、散る！

「……なるほど。…確かに、法的資格がどうのこうの、と言ってる場合ではないな」
事件から3日。これまでのいきさつを飯田くんに話し終えた疲れから、軽く息を吐く。
浮遊大陸でもよかったのだが、いきなり連れていくと困惑するのは確実。そのため、わざわざ音街さんの家にある応接室を借りてのプレゼンとなった。
応接室に集まったのは、テスト作りに集中している先生を除く男性陣…僕、かっちゃん、轟くん、切島くん、飯田くんの五人。
女性陣はそらさんを取り囲んで、「用事がある」とか言って出かけてしまった。
轟くんがマシュマロの浮いたココアを啜りながら、半目で僕とかっちゃんを見やる。
「相手が地球をどうこうできるような戦力をポンポンと生み出せるヤツが黒幕で、ソレに対抗できるのが緑谷のデタラメ技術と爆豪のデタラメ火力だけな時点で…なぁ」
「世紀末過ぎないか、この世界…？」
飯田くんがなんとも言えない表情を浮かべ、オレンジジュースを啜る。

その一言には激しく同意する。
つくづく、難儀な世界に産まれたものだな、と思いつつ、机の上に転がるブツに目を向ける。
彫下鳴子という名の悪魔から取り上げた宝石…『バジリスクの瞳』と、名称はわからないが、パソコンみたいなことができる不思議絵筆。
コレは誰にでも使えるらしく、試しに僕が実験台となって使ってみたところ、彫下鳴子が見せた機能は一通り確認できた。
しかし、目下の問題は機能面ではない。
「…コレ、いつ作られたんだろ？」
「ああ。話を聞いていたところ、そこが一番気になった。
『人工個性』は『いつの時代』に、『何のために』作られたのか…。緑谷くんでもわからないのか？」
「うん。ただ…、ピラミッドに新しく部屋を作るって、物理的に不可能なんだよ。
扉の劣化からして数千年近く放置されたって話だから…、その当時にはイズクメタルに関する技術と、人工個性に関する技術を誰かが持っていたんだろうね。
…だいたい予想つくのが怖いけど」
僕の脳裏によぎったのは、口元に笑みを浮かべた、あの憎たらしい絶対悪。

とっくに人間の寿命を超越しているのだ。古来より生きていたと言われても、正直驚かない。

かっちゃんと轟くんも薄々察しているのか、改めて感じる敵の強大さに、武者震いを隠すように自らの腕を強く掴んでいた。

「つーことは、『アケト・クフが建設された年には、すでにその悪趣味な宝石は完成していた』んだろ？

ヒメとミコトが何万年も生きてんだ。別におかしな話でもねぇ」

「や、でも…。日本からエジプトって、結構な距離あるよ？

細胞を持ち帰っても、それを品物として加工する技術なんて、当時じゃ考えられないし…。そもそも、第４王朝のエジプトじゃ作れないんだよ」

「なんで？」

「単純に設備がない。土粘土乾かすとか、紙を作るとかが最新技術な文明で扱える代物じゃない…ってのはわかる？」

「まぁ、そりゃあ…なぁ」

結局のところ、分かったことといえば「何もわからない」くらいだ。

僕たちが悶々と頭を抱える傍ら、切島くんが「気分転換しようぜ」とテレビを付ける。

そこには、雄英高校の先生方が記者会見をしている姿が映し出されていた。

「……飯田くん、大丈夫？」
「いや、ボクはどうということはない。君に試されたことには、正直腹が立ったが…。
それでも、あの場面でボクがトドメを刺すことに意味があったことは、分かっているつもりだ」
「あ、あはは…。ごめんなさい」
バレていたか。
許してもらえないだろうが、僕は深く頭を下げ、彼に詫びる。
しかし、飯田くんは眉間に皺を寄せた顔から一転、柔らかな笑みを浮かべた。
「気にするな。あの時、君に全てを任せれば、ボクはきっと、口先だけの軽い男になっていた。
そら姉さんも、晴れなかった怨嗟に今なお苦しむことになっていただろうな。
だから、アレは…。そうだな。ボクがそら姉さんを救いたくて…、彼女の憎しみに決着をつけたくてやったことだ」
結局のところ、僕たちは彫刻にされた命を救うことは出来なかった。
できたことと言えば、永遠に続く苦しみから解放することくらい。
どうしようもないほどに崩れてしまった体を用意する…なんて出来るはずもなく。
僕たちが宝石を取り上げた瞬間に、彫下鳴子の生家は地獄と化した。

唯一生きていたのは、手足を切り落とされた、チームＩＤＡＴＥＮのメンバーのみ。
僕たちが治療を施したことで、日常生活は送れるようになったものの、手足を切り落とされ、石にされたトラウマからか、サイドキックを引退してしまった。
彫下鳴子はそらさんへの執着が果たされなくなってしまったために茫然自失となり、碌に事情聴取ができない状態にあるらしい。しかし、しでかした事が事なので、タルタロスに収監されるのだとか。
失ったものはあまりに大きい。自分の力不足がひどく恨めしくなる。
通夜のような雰囲気が包み込む中で、話題を変えようと思ったのか、飯田くんが口を開いた。
「……そ、そういえばー…えっと、その…。明日のバレンタインに、そら姉さんに『返事をする』と言われてしまったのだが…。
正装で行った方がいいのだろうか？」
「こんな空気で惚気んなや死ね」
かっちゃんの毒舌が炸裂した。
必死に話題を変えようとした結果、惚気てしまった飯田くんにも自覚はあったのだろう。
惚気の部分を否定することはなく、ただただかっちゃんの口の悪さに驚嘆していた。

「口が悪いな、君は!?こんな空気だから話題を変えようと思ってだな…」
「かっちゃんのコレ、鳴き声だから」
「ンだとデク!!テメェ、俺が普段から死ねとか殺すとか言ってるわチクショォオオオオオッ!!!」
「…アレは一種のノリツッコミ…なのか？」
「いつものことだぞ。気にしてっとハゲる」
「む、むぅ…。濃いメンツなのだな…」
　否定はしない。
　飯田くんもそのうち馴染むのだろうな、と思いつつ、僕は小さく呟いた。
「…お返しって、どうすりゃいいのかな？」
　少なくとも、あと一ヶ月は悩みそうな問題が、そこにはあった。
♦？♦？♦？♦？
「私って、ずるい女だと思うんです」
　音街家の厨房にて。
　チョコの湯煎をしながら、そらさんが自嘲気味に笑う。
　私…東北きりたんは、特に本命となる相手もいないので、適当に型に流すだけの作業を繰り返す手を止めた。

「…大好きなパパとママが死んで。…抜け出せない感情の波に飲まれて…。
挙句、天哉くんにだけ責任を押し付けちゃったこと、すっごく後悔してます」
「いいじゃない、別に。
そんなずるい女でも、苦しんでいたことは事実なんでしょ？あのとき、飯田くん以外が決着をつけたら、抱えた気持ちに整理をつけられなかったでしょ？」
「…それでも、です。罪悪感がずっと、胸の中でしこりとして残ってるんです。
こんなずるい女、真っ直ぐな飯田くんに吊り合うわけがない」
告白は、「こちらが土俵に立っていない」と断るつもりらしい。
奥さんはそれに対し、「好きにしなさい」とだけ言うと、アート作品もびっくりなチョコレートのオブジェの作成に取り掛かった。
私もそこまで下世話ではない。
飯田先輩には悪いが、彼女の背を押すことはできない。
「責任を押し付けてもぉたのはウチらも同じやし、気にせんでええと思うよ。
責任を取るっちゅうのは、幸せになっちゃあかんってわけでもないんやし。
飯田の兄ちゃんと一緒にいて幸せなら、幸せな方がウチはええと思うけどなぁ。
兄ちゃんも、そらさんとおるのが幸せっちゅうとったんやろ？」
ついなちゃん、結構ませてるんだな。

いや、私が言えたことではないのだけれど。
彼女の無垢な笑みと意見に、思わずたじろぐそらさん。
しかし、まだ踏ん切りが付かないのか、小説家とは思えないほどにしどろもどろになって言葉を濁す。
「…そ、それは、そうですけど…、それはずるくて、卑怯な女がやることかと…。
わ、私…、そんな卑怯な女になってまで、天哉くんに迷惑をかけたくありません…」
「恋なんて卑怯なくらいがちょうどええと思うで。堅すぎると、出久の兄ちゃんとあかりの姉ちゃんみたくなるからなぁ」
「あー…。アレは確かにじれったいですね。
まぁ、アレも愛の形と言えば、聞こえはいいですけど」
ホント、早くくっ付かないかな、あの二人。
そんなことを考えながら、私は型にチョコを入れ終え、冷蔵庫に放り込む。
そらさんは顔を真っ赤にしながら、思考を巡らせ、頭から湯気を放つ。
活字の中では慣れっこだが、現実ではそうでもないらしい。
手持ち無沙汰になった私は、そらさんに声をかけた。
「ちょっとくらい先延ばしにしてもいいでしょ。お互い若いんですから。
引け目があるという前提条件を取っ払えた時に、改めて告白を受け入れるかどうかを

答えたらどうですか？」
「……それはそれで悪い気がします…」
「大丈夫ですよ。ああいう人種は、何があってもずっと待ち続けるってわかってるんで」
「…？なんでわかるんですか？」
首を傾げるそらさんに、私は地獄絵図を作り出してるあかりさんを指差して告げた。
「似たようなのが何人かウチにいるんです。
あそこでカツ丼にチョコぶっかけてる先輩とか」
「待って絵面おかしい」
そんなこと言われても、私は知らん。
♦？♦？♦？♦？
「カツ丼チョコです！」
現在、オレこと小春六花は、眼前にある冒涜的な食物を前に戦慄していた。
ウナお嬢様とその友人たちが「本命チョコと義理チョコ、あと友チョコを作りたい」と依頼してきたときは、若干小躍りするくらいには歓喜の中に居たはずなのだ。
だというのに、目の前に出された冒涜を具現化したような一品はなんだ？
ソレを生み出したるは、別名「暴食の権化」のあかり様。
試食として出された、チョコでコーティングされたカツ丼を前に、私は冷や汗を流す。

「イズクくんも、好きなものと合わせたら幸せなはずです！」と自信満々に笑う彼女。
ツンと刺す香りは、チョコとカツ丼をそのままミキサーでかけたんじゃないかと思うほどにミスマッチだ。
ごくり、と唾を飲み込み、言葉を探す。
相手は御客人。慎重に言葉を選ばねば、オレのメイド生が終わってしまう。
しかし、喉奥から漏れ出すのは、「あの」とか、「その」など、単体では意味をなさない接続詞ばかり。
自分の立場の弱さを呪いつつ、私は箸を手に取った。
「……い、いただきまーす…」
「はいっ！」
チョコに包まれたご飯とカツを掬い、口に放り込む。
口腔で炸裂したのは、あまりにも冒涜的すぎる、味の暴力。
あまりの味のコントラストに味覚が耐えかねているのか、正確な味が読み取れない。
ただ、コレを表す言葉が、私の脳裏を支配していた。
「どうですか？」
「……その…。あ、味が前衛的すぎて、現代人の出久様には合わないと思うなー…」
「むう…。難しいですね、チョコ…」

あり得んほどクソまずい、である。
それこそ、拷問の類と認識できるレベルでまずい。
まず醤油ベースの出汁の風味とチョコのカカオ風味が舌の上で全力ボクシングしてる。
それだけに飽き足らず、そこに米の甘みと、カツの油が参戦し、レスリングまで開催されている始末。
まずいと言う概念が今、オレの口内で爆誕し、産声を上げている。
「食えればいいや」という彼女の発想が恐ろしいだけで、料理自体は普通に出来るから、戦争とは恐ろしいものである。
しかも、そこに好きな相手への本命チョコという要素が絡んでるので、全力で迷走してらっしゃるのだ。
オレが止めなければ。止めなければ、出久様の味覚が死ぬ。
そんな使命感を胸に、オレは恐る恐る口を開いた。
「フツーのチョコを作った方が、出久様もお喜びになると思いますよ？
こういうのは、シンプルな方がウケがいいんです。下手に凝ると引かれますよ？」
「そうなんですか？」
「ええ。そうなんです」

よし。これで軌道修正は完了した。
あとは、この魑魅魍魎ですらたじろぐ物体を始末するだけだ。
私は覚悟を決めて、あかり様に笑みを浮かべた。
「じゃあ、これは勿体無いんで、私が食べちゃいますね。どんなチョコを作るか、レシピ本から選んでおいてください」
「はーい」
すみません、ウナお嬢様。小春六花、ここに散ります。

ヒーローたちのバレンタイン

「……あの、コレ、なんすか？」

バレンタインの朝。

休日ということもあり、少しくらい休もうと勉強漬けの頭をリフレッシュするべく、溜め込んだ任侠ドラマを見ていたところ。

急に来訪した人物が差し出したソレを見て、俺は恐る恐る問いかける。

俺の目の前には、イギリスＮｏ．１ヒーローである『ｆｌｏｗｅｒ』が、バレンタインチョコを持って立っていた。

「もしかして、違ったかな？日本では好きな人にチョコレートを渡すと聞いたから、キリシマくんにと思って持ってきたんだけど」

「合ってるっすけど、半分間違いっす。世話んなった人とか、ダチとかにもあげます」

「あ、そうなの？…参ったなぁ。つづちゃんたちの分、作ってないんだよね…」

「……手作りっすか、コレ？」

「うん。好きな人に渡すものは手作りがいいと聞いたからね」

「……俺、今日死ぬのかな…？」

多分きっと、近いうちに殺されるんだ。
そんな悲壮感を込めて呟くと、ｆｌｏｗｅｒは俺の両頬に手を添え、顔を近づける。
「大丈夫？心中でもするかい？」
「しないっす。冗談っす。
あと、やめた方がいいっすよ。絶対に誤解される」
「誤解だなんて。好きな人に愛情表現をするのは当然のことだよね？」
「助けてくれ爆豪…。俺、デビュー早々炎上とかしたくねぇよ…」
デビュー直後に炎上が確定している爆豪に助けを求めるが、多分「うるせぇ知るか殺すぞ」としか返ってこないんだろうな。
そんなことを思いながら、俺はｆｌｏｗｅｒを家にあげた。
その後、やってきた京町さんと居酒屋巡りに付き合わされることになるとは知らず。
♦？♦？♦？♦？
「ショート！はいっ、梅キャンディ！」
「飽きないように、少し味を変えたり、見た目もカラフルになるよう工夫したんだ。
ど、どうかな…？」
「ありがとう。すっげー嬉しい」
俺は瓶詰めされたキャンディを受け取り、カラフルに中身を彩るソレを覗き込む。

二人からのプレゼント、ということで結構な量があるが、片手で持てない程ではない。

梅というチョイスは二人らしい、と思いつつ、俺は桃色と薄い紫色のマーブル模様が目立つ一つを取り出す。

市販のキャンディと比べれば、不恰好なソレ。

かろっ、と口の中に放り込むと、梅の風味、酸味が広がり、飴特有の甘みが包み込む。

「…美味い」

「ホント!?やったぁ！」

「よかったぁ…。あんまり梅が好きじゃなかったどうしようかなって…」

「長い付き合いだろ。梅…、お前たちが嫌いなんて、かけらも思ったことねーよ」

俺が言うと、二人は顔を真っ赤にし、しどろもどろになりながら、「あわ、あわわ」と慌て出した。

…何かおかしいことを言っただろうか。

「し、ショート…？私たち以外にそんなこと言っちゃダメだから、ね？」

「そーだそーだっ！ちゃんとセキニン取ってよね！」

「あ、ああ……？」

ヒメとミコトの態度に、俺は首を傾げつつ、もう一つキャンディを頬張った。

♦？♦？♦？♦？

「はいっ。お茶子の姉ちゃん」
「ん。これはウチから」
自宅にて。
ついなちゃんから可愛くラッピングされたチョコを受け取り、私は下手くそなラッピングが施された箱を差し出す。
中には、不恰好なトリュフ型のチョコが並んでいて、力作とは言えど、あまり出来が良いとは言えない代物であった。
その工程を目の当たりにしているにも関わらず、ついなちゃんは嬉しそうに箱を抱える。
「あんがとなぁ」
「…結構へたっぴやで？ほんまにええの？」
「ウチのヒーローがくれたんが、すっごく嬉しいんやんか」
「そ、そっか。……へへ、えへへ」
きっと今、だらしないにやけ面を晒しているのだろうな。
私は照れながら、「これ、開けるな？」と確認を取り、箱を開ける。
ついなちゃんは男連中に渡す義理チョコ以外は家で作っていたので、こうして見るのは初めてだ。

ラッピングを丁寧に剥がしていき、中にある簡素な紙箱の蓋を取る。
そこに鎮座していたのは、私とついなちゃんを象った砂糖菓子が、ちょこん、と乗っかったケーキだった。
「わぁ…。よぉ出来とんなぁ…」
「六花の姉ちゃんに教えてもらってん。
お店のより下手っぴかもしれんけど…」
「いやいや、ウチのなんてもうコレに比べたらヘタクソもいいとこやから！
…すっごい嬉しいわぁ」
お店のよりヘタクソとは言うものの、私からすれば、作れると言う事実だけで尊敬に値する。
ついなちゃんも貰った箱を開け、嬉しそうに微笑んだ。
「…これからもチョコ交換したいからさ。あんま無茶したらあかんよ？」
「あ、あはは…」
その一言には弱いなぁ。
そんなことを思いつつ、私は牛乳を取りに、冷蔵庫へと向かった。
♦？♦？♦？♦？
「もう少し、考えさせてほしい…かな。

今の私だと、天哉くんも私も、納得できない答えしか出せないと思う」
そら姉さんの答えに、ボクは「理由を聞いても?」と返す。
ボクは卑怯者だ。大方の予想はついているのに、彼女の口から吐き出したくもないであろう気持ちを吐かせようとしている。
そら姉さんは暫し悩んだのち、口を開いた。
「告白が嫌ってわけじゃないの…。本当に、私なんかがソレに応えていいのかなって…。自分が最低な人間なんだって思ってしまってるから、きちんとした答えが出せないの」
「…わかった」
その言葉に、ボクは拳を握る。
あの悪魔がそら姉さんに遺してしまった傷痕は、ボクが思うよりも根深い。
彼女がそんな感情の海から抜け出すために、ボクにできることはないだろうか。
先日会った、水奈瀬先生の言葉が頭をよぎる。
――――適度に自分を許さなきゃ、人は生きられません。…だから、飯田くん。君があの子の「自分を許せる理由」になってくれませんか?
僕も彼女も、自分の許し方を知らない人間だ。
だからこそ、長い時間をかけて、そら姉さんが自分を許せる理由にならなければ。
ボクは手にあるラッピングされた箱を見つめながら、そんな決意を込めて告げる。

「…そら姉さん。ボクは必ず、貴女の心に残った罪悪感すらも救えるほどのヒーローになってみせる。

今は、まだまだ実力不足だけど…、それでも、この言葉に嘘はない」

ボクの言葉にそら姉さんは目を丸くした後、ふっ、と笑ってみせた。

「……ふふっ。天哉くんって、意外と口説き上手なんですね」

「……あっ、いやっ!?ボクがこんなことを言うのは貴女だけで!!」

人をプレイボーイのように言うのはやめてほしい。

そんなことを思いながら、ボクはいつも以上にカクカクとした動きで抗議した。

♦?♦?♦?♦?

「バクゴーさん!コレどーぞ!」

「…お、おう」

「ぷっ、くくっ…」

ニマニマとにやけヅラを晒す東北を横目で睨みつつ、音街からチョコを受け取る。

こんな浮ついたイベントなど、前までは自分から遠ざけていたというのに。

人生で初めて、クソババア以外から受け取ったチョコ。

コレと同じように、てんで甘くなった自分に呆れたため息が出る。

この秘密結社に入って半年。超えるべき壁ばかりが目の前に立ちはだかる現状に焦

りながらも、このイベントを楽しめるくらいには余裕が持てている。
自分の変化に複雑な感情を抱きつつ、俺はもらったチョコレートを仕舞おうとした。
「あ、あのっ、ここで開けてほしいな？」
「…わーったよ」
音街の懇願に、俺はカバンに入れかけたチョコを取り出し、ラッピングを剥がす。
軈て、剥き出しになった箱を開き、その中に並ぶチョコを一つ摘み上げた。
「ど、どう、かな？」
「……ガキにしちゃ良く出来てる。不細工だけどなァ」
「ほんと!?」
素直に賛美の言葉が出てこない。
そんな態度が気に食わなかったのか、東北は俺の脇腹を肘で突いた。
「ちょっと。素直にありがとうとか言えないんですか、アンタ」
「言えるような性格じゃねーの知ってるだろォが」
その指摘を一蹴し、俺は摘んだソレを口に放り込む。
市販のチョコを溶かして作った、何処でも食べられそうな味。
甘ったるいソレを飲み込むと、俺は音街に告げた。
「糖分補給にゃ丁度いい」

「そ、そう?よかったぁ…」
素直な褒め言葉など吐いた日には、卒倒するんだろうな。
そんなことを思いつつ、はにかむ音街に聞こえないように、「美味かった」と呟いた。
♦?♦?♦?♦?
「イズクくん!本命です!」
「ああ、うん…。ありがと…」
臆面もなく、堂々と「本命チョコ」であることを告げながら、僕にラッピングされたハート型の箱を差し出すあかりさん。
僕は気恥ずかしさから、蚊の鳴くような声で礼を言い、箱を受け取る。
傍でお母さんがニマニマと笑っているのが見える。
確かに、バレンタインなどというイベントで、お母さん以外でチョコを貰ったことなんて無かったからなぁ。
「開けてください!」と促す彼女に押され、僕は丁寧にラッピングを剥がしていく。
剥き出しになった箱を開けると、そこには「私のヒーローへ」とホワイトチョコで書かれたチョコレートが鎮座していた。
「…ねぇ、あかりさん」
「なんですか、イズクくん?」

いろんなものを背負ってきた。
あかりさんの底知れない悲しみ。運命に翻弄された人たちの亡骸。底知れぬ悪意に奪われた命。
取りこぼしてしまったものは多い。
僕は本当に、彼女に誇れるヒーローになれているのだろうか。
そんな思いを込めて、僕は彼女に問うた。
「僕、ちゃんとヒーロー、やれてるかな?」
僕の問いに彼女は、きょとん、と目を丸くする。
次の瞬間。あかりさんは優しく微笑みながら、僕を抱きしめた。
「大丈夫ですよ。イズクくんはこれまでも、これからも…、私のヒーローですから」
「……うん」
♦?♦?♦?♦?
「ほら、バレンタイン」
休み明けのテストを作り終えた僕の眼前に、チョコレートで作られたオブジェが雄々しく聳え立つ。
彼女からバレンタインチョコを貰うのは、今年で初めてだが、ここまで張り切らなくても良いのではないか。

そんなことを考えながら、僕はオブジェを崩さないように、一部をちぎり取り、口に運ぶ。
「…美味しいです」
「そう。よかったわ」
確かに美味ではある。あるのだが、1日で食べ切れる気がしない。
しかし、食べ切らないと、せっかく作ってくれたつづみさんに失礼だ。
僕は冷蔵庫から無糖のボトルコーヒーを取り出し、ベルトを緩める。
正直、チョコレートは進んで食べるほど好きではないが、そんなことは口が裂けても言えない。
オブジェを崩し、チョコを口に運んでいく。
飽きないように入れたのであろう、柑橘系の果物のピュレが時折顔を出す。
来年からは、もう少し控えめにしてもらおう。32の胃袋にコレはキツい。
「……来年は、もう少し抑えておくわ」
「そうしてください」
結婚して10年だというのに、僕たちの間には、新婚のような雰囲気が漂っていた。
…10年も別居してたから、当たり前なのだが。

センセーとキリシマはなかまを呼んだ！

「……大丈夫かよ、パワーローダー。死にそうな顔してっけど」
「そりゃあ死にそうにもなるだろ。
担当していた生徒があんな事件を起こしたんだから」
雄英高校の職員室にて。
サポート科を担当するプロヒーロー「パワーローダー」…埋島干狩が、今にも死にそうな顔で仕事に打ち込む。
彼が担当していた生徒の一人…彫下鳴子。
彼女が引き起こした凄惨な事件は、ＳＡＶＥＲによって暴かれ、解決に導かれた。
雄英高校の教職員が事件を知る頃には全てが終わっており、残されていたのは、頭部が腫れ上がった犯人だけ。
その自宅には、今しがた切り落としたとしか思えない人の生首が大量に転がっていたという。
彼らは実際には目にしていないが、その醜悪さに、現場検証をしていた警察、およびヒーローがカウンセリングを受ける羽目になったとか。

結果として。雄英高校はサポート科の生徒によって泥を塗られ、その尻拭いをＳＡＶＥＲに任せたという事実だけが周知されてしまった。
そこから始まるのは、連日連夜のマスコミからの問い合わせや、保護者からのクレーム。
特に、犯人を担当していたパワーローダーとなると、「お前はなんて悪魔を育てていたんだ」と責め立てられた。
が。その程度ならまだ耐えることができた。
では、何がパワーローダーを悩ませるのか。
その答えを悟った同僚…相澤消太は、彼に聞こえないように、話題を振った教師…プレゼント・マイクに耳打ちした。
「桜乃そらが気を遣って何も言ってこないのが、余計にキツいんだろ」
「あー…。成る程。あんな顔にもなるわな」
プレゼント・マイクも流石にこの空気には逆らえないのか、ラジオのパーソナリティのようなノリを発揮することなく、耳打ちを返す。
桜乃そら。あの悪魔の元から生還した、数少ない人間の一人であると同時に、悪魔に家族を奪われた一人でもあった。
雄英高校の敷地内で行方不明となり、数日間もの間、あの地獄に囚われていたのだ。

多少なり、警備、及び教育を任されていた教職員らに不満をぶつけても、誰も文句は言わない。
何より、教職員一同自らが、彼女より責め立てられることを望んでいた。
だがしかし。事件が解決して数日経っても、桜乃そらが不満をぶつけることはなかった。
普通に責め立てられるより、彼らの心境は穏やかではない。
それはパワーローダーだけでなく、雄英所属のプロヒーロー全員にも言えることで、職員室には通夜のような空気が漂っていた。
「…パワーローダー誘って、どっか飲みに行くか?」
「明日は日曜だしな…。ちょっとくらい自分を許す時間も必要だろ」
プレゼント・マイクの誘いに乗らない理由もない相澤は、即座に頷いた。
♦?♦?♦?♦?
その日の夜。
切島くんとセイカさんを除いたメンバーが僕の家に集まって、すき焼きを囲む。
コンロとすき焼き用の鍋がいくつか並ぶ圧巻の光景に、その中でぐつぐつと煮えたぎる割下の香り。
なんとも食欲を注ぐ光景を前に、飯田くんが恐る恐る口を開く。

「その、本当にご馳走になってもいいんですか？こんな、高級ブランドの…」
「いいんですよ。どうせコイツら勝手に見つけて食うんですから」
「なっ!?見損なったぞ、君たち!!立派な窃盗ではないか!!」
「先生が『勝手に食べていい』って言ってるんで」
「言質も取ってるよ」
「そ、そうなのか…？いや、しかし…」
「あんま気にすんな。こんな大量の肉、大人数で消費する算段がなきゃ買わねーだろ」
「確かに…。随分と仲がいいのだな、君たちは」
…バレた。
飯田くんは揶揄い甲斐があるな、などと思いつつ、僕は具材に火が通るのを見極めるべく、じっと鍋の中を見つめる。
やはり、すき焼きが嫌い、などという人間はこの場にいないらしい。皆一様に鍋を見つめているのが見えた。
「……ん？」
と。鍋が煮える音に混ざるように、僕の携帯から着信音が響く。
携帯を取り出して内容を確認すると、僕は頭を抱えた。
「先生、どうした？」

「……切島くんが面倒ごとに巻き込まれてるみたいです」
「助けに行った方がいい？」
「あ。いえ。ただウチの酔っ払いに絡まれてるだけみたいなので、スルーして結構です」
「あー…」
その説明で全てを悟った古参メンバーは、切島くんに向けて合掌した。
僕の携帯には、年上の女性二人に挟まれて真っ赤になる切島くんの写真が送られてきていた。
♦？♦？♦？♦？
「こ、個室でよかった…。大炎上するとこだった…」
情報化社会が進み、下手こけばケツの毛までむしり取られるような現代。ネット上でキャンプファイヤーなんて死んでもごめんだ。
両手に花とは言うが、流石に右の一輪はご遠慮願いたい。吊り合わないにも程がある。
俺は両隣に座る二人の目を見ないように、唐揚げを摘み、コーラを呷る。
キャットファイトやら牽制やらと言った、ライトノベルでよく見るような、ギクシャクとした展開はなく。
二人は俺を挟んで、きゃいきゃいと盛り上がっていた。

「切島くんはねぇ、髪の毛をアップすると垢抜けた感じになると思うんですよぉ。
今だと、ちょっと野暮ったいというか…」
「髪も染めた方がいいね。プロデビューするには、些か特徴がなさすぎる」
「うぐっ」
痛いところを突かれた。
仕方ないだろ。親父たちに「髪染めたりするんだったら、自腹でやれ」って言われてるんだから。
整髪料やら染毛剤やらで、ただでさえ雀の涙くらいしかない小遣いが逼迫されるんだぞ。
そんなことを思いつつ、俺は「注いでくださーい」と空になったグラスを手に迫る京町さんに、日本酒を注ぐ。
と。ｆｌｏｗｅｒが蠱惑的な笑みを浮かべ、俺の髪に指を這わせた。
「……もしかして、染毛剤とか整髪料とかを買い揃えるお金がないのかい？」
「ま、まぁ…。中１なんで。
それに…、その、なんの結果も出せてねーガキがイキんのもどーなんかなって…」
「…ふぅん。じゃあ、今のうちに結果残さなきゃね？」
「……っす。取り敢えず、雄英受かるとこから始めてみるっす」

実技の方は、正直心配してない。心配なのは筆記の方だ。
こないだの全国模試は、今までで一番の出来であったにも関わらず、順位は１２５位。雄英高校ヒーロー科の席は４０しかないので、この時点で不合格は確実。
実技が飛び抜けて良かったら、まだ一考の余地があるとして扱われるのだろう。
だが、一般を受けることが確定しているメンバーの中には、あの爆豪もいる。
ハッキリ言おう。アレより好成績を出せる気がしない。
戦う前から諦めるな、などと無責任に言う自分もいるが、アイツとの実力差がわからないほどバカではない。
差し迫った現実に辟易しながら、俺はグラスに入ったコーラを飲み干す。
「…俺、ドリンク取ってくるっす」
取り敢えず、今は一度、クールタイムを設けさせてほしい。
俺は空のグラスを手に立ち上がり、個室を出ようとする。
と。ｆｌｏｗｅｒが俺を通り抜け、個室の扉を開いた。
「ボクもお水が欲しいや。一緒に行こうか」
「私のもお願いしまーす」
誰かに見られませんように。
俺はそんな願いを込めて、腕を組んでくるｆｌｏｗｅｒを隣に、足を早める。

こんな光景を見られたら、どんなふうに騒がれるかわかったもんじゃない。
俺は戦々恐々しながら、ドリンクバーコーナーへと向かう。
が。悲しきかな。
俺の願いを神様とやらは全力で無視しやがったらしく、出てすぐ隣の個室が開き、出てきた人とぶつかってしまった。
「Ｏｈ、Ｓｏｒｒｙ！オレとしたことが、よそ見しちまってたみた……」
びしり。そんな音が聞こえそうな挙動で、トサカのように聳え立つ髪型を誇るグラサン男の動きが止まる。
…いや、ちょっと待て。この人、すっげー見たことあるんだけど。
俺は「あ、えっと、さーせんしたっ」と、ダラダラと冷や汗を流し、そそくさとその場を去ろうとした。
が。そうは問屋が卸さず、男はｆｌｏｗｅｒに迫った。
「…ｆｌｏｗｅｒ？マジモンの？」
「あんまり騒がないでほしいかな。弟子の様子を見に来ただけだから」
「……ど、どもっす」
そういうことにしておこう。
彼女が「バレンタインだから男にチョコを渡しに来た」なんて言った日には、とんで

もないことになってしまう。
俺が照れ臭そうな演技をすると、男は両目をひん剥き、静かに叫ぶという芸当をやってみせた。
助けてくれ、先生。胃痛で死にそう。
そんな淡い期待は、華麗にスルーされたのだが。
♦？♦？♦？♦？
「轟ィ!!テメェ俺ばっか具材の管理させやがってちったぁ手伝え殺すぞ!!」
「待ってくれ。今食い切るから」
「そう言って何分経ったと思ってんだテメェ食い終わってもねェのに次から次へと取りやがって死ねッ!!」
菜箸で具材を入れていく爆豪くんが、顔に青筋を浮かべ、向かい側に座る轟くんを怒鳴りつける。
彼らが突いている鍋は、爆豪くんと轟くんの二人に管理を任せていたのだが、轟くんはただ食べるだけで、一向に手伝わなかったらしい。
キレ散らかす爆豪くんを前に、轟くんは口に含んでいた物を飲み込み、申し訳なさそうに頭を下げる。
「すまん。すき焼きなんて初めてだから、ハメ外しちまった」

「……チッ」
「うっそー」
「轟テメェさっきの同情返せや!!」
「してたか?」
「してたわテメェ一体全体俺をなんだと思ってやがる!!」
「傲慢という概念で構成された謎生物」
「よし殺す今殺す今すぐ殺ォす!!!!」
…あのほとんど働かない表情筋で「うっそー」とか言うんだ、轟くん。
喧嘩、というには微笑ましいのか殺伐としているのかよくわからない応酬を横目に、僕は緑谷くんへと目を向ける。
「あ、あかりさん…。ちょ、ちょっ…と、ちょっと…」
「ちょっと?…じゃあ、ちょっと千切って…。
はい、あーん」
「ち、ちがっ…、むぐっ」
…見なかったことにしよう。
すき焼きって処刑道具になるんだな、などと思いつつ、今度は麗日さんたちの方へと目を向ける。

「あはははははっ!!あはははははっ!!
　なーんやいい気分やわー!!」
「酒やー！もっと酒持ってこーい!!」
「うへへへ、麗日先輩あんた、いい太ももしてますねぇ…」
「れれー？バクゴーさんがいっぱいいるー」
「みんなちょっと寝た方がいいよ」
「顔真っ赤だねー」
「鎖骨…。Tシャツからチラ見する鎖骨が好きなんですぅ…。
　天哉くんくらいのがちょうどいい色っぽさなんですぅ…。しゃぶりつきたい…」
「いい趣味してるわね、そらさん。私は旦那のうなじが好物よ。細いけど、結構がっしりしてるの」
「ずんだもん！なんでみんなのグラスにお酒混ぜたんですか!?」
「ぼ、ボクじゃないのだ！めたんなのだ！」
「私じゃないわよ！アンタがノリノリで入れたんでしょうが!!」
　こっちも地獄絵図だった。
　ウチの双子、ずん子さん、めたんさん、ずんだもんを除く女性陣が酒によって荒ぶってらっしゃる。

…多分、ウチの奥さんほぼ素面なんだけど、この酔っぱらいの中に溶け込んでるのはなんなんだろう。

阿鼻叫喚となったこの場に、僕は呆れたため息しか出てこなかった。

「……掃除、大変そうだなぁ」

そんな愚痴など届かず、酒によって撃沈した飯田くんの介抱に向かった。

誰か助けてくれ。そう切に願いながら。

愛と調和と宇宙人

運命的邂逅

「雄英体育祭、人数分のチケット取れましたよ」

「先生大好き!」

「その愛の告白はやめてください。あかりさんがすごい顔してこっち見てますから」

ヒラヒラと人数分のチケットを見せて報告すると、緑谷くんが僕に向けて平伏する。

まさか同性の生徒から告白される日が来るとは、思いもよらなかった。

僕は二枚のチケットを二人に差し出し、二人の名簿欄にチェックを入れる。

この一年ですっかり大所帯になったなぁ、などと思いつつ、僕は寛いでいるつづみさんに目を向ける。

「しかし、意外でした。つづみさんも『見たい』と言い出すなんて」

「私の教え子が出てるのよ?見に行かないなんて、生徒に失礼じゃない」

「教え子…、ずん子さんですか。

……あれ?3年の部で普通科って、参加してましたっけ?」

「してるわよ。大学受験に必要な内申点貰えないから」

雄英高校の闇を見た気がする。
多分、練磨されたサポート科やらヒーロー科やらの活躍に飲まれ、僕たちみたいなパンピーの印象に残ってないんだろうな。
普通科に勝ち目なんて万に一つもない時期なのだから、予め参加するかしないかのアンケートでも取っておけばいいのに。
そんなことを思いつつ、僕は無糖のボトルコーヒーを呷る。
「国立で『自由な校風』なんて謳ってるんだから、もう少し融通きいても良いと思うんですよね。
内申点の評価には確かに、『行事への参加態度』って項目はありますけども…」
「雄英体育祭は単なる学校行事ではなく、就活も兼ねてますからね。正直、普通科は参加希望型にした方がいいかと。
1、2年はまだ転科の希望があるからマシですけど、3年だと参加のメリットが少なすぎる。下手すりゃ大怪我ですし」
まぁ、こんなアパートの一室で愚痴っても仕方ないんだが。
緑谷くんとそんなやり取りをしていると。
ふと、つづみさんがくっ、くっ、と喉を鳴らし、不敵に笑って見せた。
「今年の3年は面白いわよ?」

その言葉で全てを悟った僕は、胃に走った痛みに顔を歪めた。

♦？♦？♦？♦？

「やっぱり、３年の普通科のエントリーって必要なの？

受験控えてるから、余計な怪我したくないって、結構な生徒が言ってるけど」

体育祭を二週間後に控え、教職員数十名が準備に奔走する中。

高校にいてもいいのかと甚だ疑問を抱かれる女教師…、１８禁ヒーロー「ミッドナイト」が、隣に座る相澤に問いかけるように呟く。

彼女が今年担当している普通科は、例に漏れず、ほとんどの生徒が「体育祭に参加したくない」と訴えかけている。

「内申点がもらえると思って…」と説得した回数は、もはや3桁では済まされない。

たった２０名のクラスだと言うのに、５倍近い回数相談されるくらいには、３年の普通科には嫌なイベントらしい。

３年ともなると転科も絶望的なので、正しい認識ではあるのだが。

「言い方は悪くなりますけど、引き立て役って必要じゃないですか。

お国様はそう言いたいんですよ、きっと」

「そうは言うけどねぇ…。

文句を言ってこないのなんて、桜乃さんと東北さんくらいよ」

相澤の捻くれた物言いを訂正する気にもなれず、ミッドナイトは伸びをしながらこぼす。

彼女の口から出た名前に、相澤はパチクリと目を丸くし、首を傾げた。

「珍しいですね。無個性の普通科ともなれば、声高々に不満をぶち撒ける生徒が多い印象でしたけど」

「私も聞いてみたんだけどね？

上手いことはぐらかされちゃって…。

お手製ずんだパフェは美味しかったし、未公開作品で1時間潰したわ」

「この忙しい時に何やってんだアンタ」

絶対零度の視線が、ミッドナイトに突き刺さった。

♦？♦？♦？♦？

「体育祭…。そうか、もうそんな時期か。

早いもんだなぁ」

折寺にあるサウナにて。暇を潰すために備え付けられたモニターに映るコマーシャルを見て、オールマイトが呟く。

すっかりおじさんになったせいか、時の流れが早いように感じる。

ハリのある麗しい肌は健在だが、よくよく見るとちょっぴり皺がある。

自分も老けたな、などと思いつつ、オールマイトは隣に座る少年たちを見やった。
「……おい、爆豪。話しかけろよ」
「死んでも話しかけねぇ…！ミーハーがいっちゃん記憶に残らんだろォが…!!」
「話しかけないと記憶に残るとかそういう土俵にも立てねーだろ…」
「というか、オールマイトもオフだろう？
ここは同じ客として、プライベートな時間に突っ込むようなことはしない方が…」
そこには、爆豪、轟、切島、飯田の四人が、なんとも言えない表情でオールマイトをチラチラと見ていた。
こういうファンは少なくない。
プロヒーローとして…いや。平和の象徴として恥ずかしくない姿を見せるため、ファンサービスはきちんとしなければ。
オールマイトはホワイトニングが行き届いた、驚くほどに真っ白な歯を見せ、ニッコリと笑って見せる。
「ごめんねー・こんなゴツいおじさんがお隣にお邪魔しちゃってー
この鍛え上げた体はもちろん自慢だけど、こういう場所では恨めしく思うよ！」
「い、いや、全然！・憧れのオールマイトとご一緒できて光栄っす！」
切島が慌てて返すと、オールマイトは「そう言ってもらえると嬉しいよ」と笑う。

一見、まだ成長期の子供らしく見える体躯だが、マジマジと見ると、恐ろしいまでに鍛え上げられているのがわかる。
例えるならば、研ぎ澄まされた刀のようだ。
「よく鍛えられてるね…。
この年の子供にしては珍しいけど、何かスポーツでもしてるのかい？」
「ヒーローを目指すにあたって、恩師のツテでいろんな人に鍛えてもらってるんすよ。
それが軒並みべらぼうに強くって…」
切島は言うと、今頃ケーキバイキングに出向いているであろう師を思い浮かべ、どこか乾いた笑いを浮かべる。
その瞳は奇しくも、オールマイトがグラントリノのことを思い浮かべる時の表情にそっくりであった。
「その恩師さん、ぶっちゃけヒーローだったりする？」
「いえ、普通の小学校教員ですね。
……いや、アレを普通と言っていいのか？」
飯田は言うと、小首をかしげる。
オールマイトがソレを疑問に思っていると、爆豪が口を開いた。
「鈴木つづみの旦那って言やァわかるか？」

「ぶーーーっ!?」
吹いた。思いっきり吹き出した。
切島は「言ってしまった」と言わんばかりに目を見開き、愕然とする。
オールマイトもその言葉は予想外だったのか、「え、え?え!?」と狼狽え始めた。
オールマイトからすれば、男根しか情報のない男であるため、仕方ないことではあるのだが。
「二人揃って性格悪ィからな。自分じゃ無理だっつって、生きづらい世界を変えてくれーって若人に責任丸投げしやがる。
…言われるまでもねェけどよ」
「まぁ、俺みたいな複雑な家庭環境のガキを、親諸共叱り飛ばすような先生だ。先生なりに、世界をより良い方へ変えようとか思ってるんじゃないか?」
「……そ、そうか。…うむ。
二人とも、立派な教師なのだな」
この奇妙な邂逅に、オールマイトは思わず笑みを浮かべた。
「…よし! 私も頑張って、未来の平和の象徴を育てる先生になっちゃおうかな!」
「どこ校だ? 絶対通う」
「食い気味!!」

「緑谷といい、オールマイト大好きすぎだろ、お前ら…」

♦?♦?♦?♦?

「……で、どういう風の吹き回しかな?」

黎明期の魔王様?」

とある山奥にて。顔が原型を留めず、髑髏のような仮面でソレを覆い隠した男が、フィクサーの前で微笑む。

フィクサーもまた、表面上の笑みを崩さないまま、敵愾心を剥き出しにして問い詰めた。

「惚けてもらっても困るよ、フィクサー。

僕たちは『ともだち』じゃないか」

「ともだち?ともだちねぇ…。

ともだちっていうのはさ、『僕の部下の個性を軒並み奪った男』が言うもんじゃないと思うよ」

フィクサーがその喉元を、爪で掻き切る。

その程度の攻撃が通じないことは百も承知。

挨拶がわりにと繰り出した攻撃で裂けた喉元が、なんともグロテスクな音を立てて戻っていく。

フィクサーはそれに呆れながら、彼のマスクを破壊した。
「僕の協力者を全員手駒にして、礼の一つも寄越さない君も同罪だろう？
僕の方が良心的だ。…だから、こうして手土産を持って来たんじゃないか」
「手土産…、手土産、ねぇ」
フィクサーは男の背後に佇む、脳が剥き出しになった怪物を見やり、ため息をつく。
「勝手に人工個性を組み込んで、無理矢理に安定化させた怪物が…、手土産？
おいおい、技術盗用にも程があるだろ」
「でも、君にはない技術だ」
「ない…？ないだって…？
違うな。『やらない』んだよ。何度かやったが、一番出来がいいのに逃げられ、残ったのは自分で考える脳もないボンクラだけ。
アレはコストに比べて極端に効率が悪い」
思い浮かぶのは、ガラス張りの部屋の中で佇む、白い髪の少女。
あの時は時代が時代だったために、碌に周囲の教育も出来ず。結果として、切り札は手元から離れていってしまった。
男はソレに嘲笑を浮かべ、残った口を開いた。
「その逃げた奴は、あの『キズナ』とかいう怪物なんだろう？

ドクターが欲しいと騒ぐからね。捕獲に協力してあげようか？」
「……どこまで解ってる？」
「さぁ、ね？少なくとも、『君の知る僕』よりも、僕はもっと、ずっと、遥かに強いってことは言えるかな？
『君が恐れる者』こそが僕だと断言できるくらいには、ね」
「おい。誰から聞いた？」
フィクサーが珍しく怒気を放ち、したり顔の男に詰め寄る。
男は惚けるように肩をすくめ、にっこりと笑った。
「『前の僕』に感謝しなくちゃね。
便利な『個性』だ。さすが、君が必死こいて『作った』だけはある」
「……ああ。そうか。それじゃあ、殺しても無駄だな」
フィクサーは言うと、どさり、とソファに崩れ落ちる。
さまざまなプランが頭を駆け巡る中で、フィクサーは男に向けて告げた。
「で、お喋りに来たわけじゃないんだろ、オール・フォー・ワン。要件は？」
「なぁに、簡単なことさ」
――――去年の夏。ヤツを治したように、僕を治療してくれないか？
フィクサーは気づいた。

コレから先、この男がより強大になって、彼らの前に立ちはだかるであろうことを。
この男が、自分が知るソレより、遥かに強くなっていることを。

身に覚えのない美少女

「…3年の部って、プロが観に来ることが多いんですね。あ、エッジショットだ」

「そりゃあ、卒業したらサイドキックとして正式に雇えますからね。

あとは、インターンで面倒見てる子とかの集大成を見に来たのかと」

売店で買ったたこ焼きを頬張りながら、緑谷くんとそんな会話を交わす。

既に観客は席に着いており、今か今かと開始の時刻を待っているのが見える。

僕からすれば、興味もないオリンピックを、家族が進めるからイヤイヤ見ているような気分なのだが。

まぁ、面倒なルートを経由してチケットを手に入れたのだ。お祭り感覚で楽しんでおけばいいだろう。

そんなことを考えていると、解説席に座った、なんとも刺激の強い格好のヒーローが声を張り上げる。

『待たせたわね、紳士淑女諸君!!

旅立つ前のヒヨッコ共、最後の晴れ舞台!!3年にわたる濃密な青春が交錯する雄英体育祭、これより開催よ!!』

３年の部のパーソナリティはミッドナイトか。
教育委員会は、公序良俗的にどうかと思うアレを完全に放任する方針なんだな。プロヒーローの肩書きって強い。
そんなことを思いつつ、行進する生徒たちを見やる。
いくら自由な校風とは言え、「流石に行事くらいはきちんとしろ」という教育が行き届いているらしい。
なんともダサいデザインの体操服を着用し、規律正しく並ぶ生徒たちを観客が見守る。
そんな中で、枝豆のような形のカチューシャが揺れ動くのが見えた。
「ずんちゃーん！ファイトですわー!!」
「フレー！フレー！ず・ん・ちゃん!!」
「ずん姉様ーっ!!」
「……席、離れていいか？」
東北一家が全力で応援してる。なんだその法被とうちわと旗は。
クソガキまでも必死こいて応援してる。
家族仲良しなのはいいことだと思うが、シュールな光景であることには変わりない。
隣に座る爆豪くんが、羞恥からか死にそうな顔してる。

僕も確かにアレは恥ずかしいが、東北一家がこうも応援したくなる理由も分からないでもない。

僕は顔を真っ赤にして震える爆豪くんを、軽く宥めた。

「今の今まで離れて暮らしてたんです。

高校最後の体育祭くらいは応援してあげたい…という気持ちくらいは、汲んであげてもいいのではないですか？」

「……チッ」

そう言われると弱いのか、舌打ちして会場…特にヒーロー科の生徒を観察する爆豪くん。

緑谷くんもまた、ヒーロー科の生徒たちの体躯を見て、ブツブツと考察を繰り広げていた。

「…で、目の肥えた君たちからして、今年のヒーロー科はどうなんですか？」

考察厨を無視し、僕は抹茶ラテを飲む飯田くんへと話を振る。

飯田くんもヒーロー科の観察はしていたようで、少しばかり悩んだ後、口を開いた。

「ボクはまだ新参者だが…。かなり練磨されているように見えるな。

サイドキックどころか、いきなり事務所を構えてもおかしくない実力者が…、うん。そうだな。３人ほどいる」

「雄英ビッグ3…とかいう、いかにもっつー肩書きがあるとかネットで見たな。
粗くはあるけど、その3人はいつでも入れる動きをしてるぜ」
「そんでも、やっぱ学生だな。入り方がパターン化してるぞ、アレ。
どう動くか、俺らからすりゃモロバレだ。個性が初見殺しとか、不意打ち無効とかじゃなきゃ、生身のデクでも勝てんだろ。
今のままだと…、そうだな。良くても2流ヒーローがいいとこだ」
爆豪くん、すごい辛口だな。
ヒーローを目指したことのない僕からすれば全くもって解らないが、概ね皆も同意見だったらしく、複雑な表情で頷いていた。
と。そんな空気をぶち壊すように、あかりさんの腹から、獣が唸り声を上げる。
「……イズクくん、お腹空きました」
「えっ、今?!……種目まで…、あと15分くらいならいけるかな?
あ、ちょっと行ってきます」
緑谷くんは言うと、財布だけ持って、あかりさんと共に立ち上がった。
これが、大波乱の幕開けとは知らず。
♦?♦?♦?♦?
「ふぅ…、小腹は埋まりましたね…」

「……これで、小腹…?」
半分が消し飛んだ財布の軽さに愕然としながら、僕は満足そうにお腹をさするあかりちゃんを見やる。
この眩い笑顔があるから、僕も母さんもつい甘やかしてしまうのだ。
戦ってきた分だけ飢餓を強く感じ、その分補給しなくてはならない体とは言え、流石に一年近い年月が経っても満たされないのは流石におかしい気がする。
…いや。この満たされない飢餓こそが、彼女の過去の凄惨さを語っているのだ。変に茶化すのも良くない。
そんなことを思っていると。
ふと、あかりちゃんの瞳が、晴天へと向いた。
「……なにか、来る?」
その瞳が向く方向に、僕はお手製の携帯を取り出し、特殊カメラをオンにする。
しかし、カメラ自体には何も映らず、ただ晴れ渡った空模様だけが佇んでいた。
「…レーダーには何も映ってな…」
と。僕が言いかけたその時。
なんとも摩訶不思議な音を立てて、ふよふよと光が降りてきているのが見えた。
僕もあかりちゃんも、あまりの光景に唖然とし、目を丸くする。

きっと、空いた口が塞がらないとは、こう言うことを言うんだろうな。
どこか他人行儀にそんなことを思いながら、降り立つ光を見つめる僕たち。
何かの攻撃かも知れない。僕たちはそう判断すると、いつでもスーツに着替えられるよう、携帯を構えた。
「……人？」
よくよく見ると、光の中に、二人の人間かのような影が佇んでいるのが見える。
警戒するに越したことはない。
ゆっくり、ゆっくりと光が収まっていき、そのシルエットが浮き彫りになっていく。
そこに立っていたのは、細く、現実離れした美しさを持つ、同い年くらいの少女が二人。
少女の一人がゆっくりと閉じた瞳を見開くと、僕に向けて、満面の笑みを浮かべた。
「イズク！久しぶり！」
「は？」
顔も名前も知らない少女が、凄まじい勢いで駆け出し、僕を抱きしめる。
僕が湧いては消える疑問を浮かべる中で、ふと、あかりちゃんを見やった。
「イズクくん……？」
あかりちゃんの絶対零度の視線が、僕に突き刺さった。

違う、違うんだ。僕、この人のこと何にも知らないんだ。その困惑は僕も同じなんだ。ぐるぐると思考が巡る中で、僕は慌てて少女を引き剥がし、衝動のままに問い詰める。
「い、いやいやいや!?どなたですか!?」
「えー!?たった数億年前のことを覚えてないなんて、酷すぎるよ!」
「君の知ってる『緑谷出久』がどうかは知らないけど、僕はノーマルな寿命のホモ・サピエンスで、今年で14歳の中学生だよ!!」
「ウッソだぁ!前会った時、『81京超えてから数えてない』って言ってたじゃん!」
「なにその天文学的数字!?僕、そんな宇宙の寿命を超越したクリーチャーじゃないんだけど!?」
だめだ。どこまでも話が噛み合わない。
なんだよ、数万年ぶりって。なんだよ、81京を超える年齢って。
僕が心底呆れていると、残っていた短髪の少女が、僕にウザ絡みをする少女の脳天に手刀を振り下ろした。
「あだっ」
「そこまで。イズク、困ってるよ」
「はぁーい」
「…にしても、本当に覚えてない？

イズクのことだから、若返ってもそんなに違和感ないけど…」
「い、いや…」
僕が首を横に振るも、少女たちは、まじまじと僕とあかりちゃんを見つめる。
舐め回すように、というよりは、確認するような感じだろうか。不快ではない視線だ。
露骨に不満を顔に出し、あかりさんが僕の腕を抱きしめる中。
ふと、彼女は首を傾げた。
「……あれ？」
「どうかしたの？」
「いや…、雄英って、校内に侵入者が出たら、警報鳴るんじゃ…？」
「……あっ!?」
そう言えばそうだ。
ここは雄英の敷地内。明らかに侵入者である二人に対して、何の警報も鳴っていないのは、確かに気になる。
そんなことを思ってると、携帯から着信音が鳴り響く。
画面を見ると、『かっちゃん』の文字が羅列している。
何かあったのか、と思い、通話ボタンを押して携帯を耳に当てた。
「もしもし？」

『どこほっつき歩いてンだ！とっくに始まってンぞクソデク!!』
「……えっ!?あ、マジだ!?」
会場にある電光掲示板に映る時刻表を見ると、８時１６分という現実があった。
とっくに競技が始まっているようで、爆音の歓声がここにまで轟く。
僕は慌ててあかりちゃんの腕を引っ張ると、その場から去ろうとする。
と。短髪の少女が僕の左腕に腕を絡め、長髪の少女が僕の背に乗っかる。
「……あのー、これは、なんですかねぇ?」
身体中から水が抜けていくような、そんな感覚が襲う。
右隣を見ると、目が据わってらっしゃるあかりちゃんが、こちらをこれでもかと凝視しているのがわかった。
そんな殺気に気付いているのか、それとも気付いていないのか、彼女らが頬を膨らませ、僕にその細い体を密着させた。
「もう！イズクってば、約束したじゃん！」
「イズクが覚えてなくても、それは守ってもらうんだからね」
「…えっと、なんの話?」
「ふんっ！大事な約束を忘れちゃうようなおばかさんには、教えてあげないもんっ！」
そうは言われても、本当にまったく身に覚えがないのだけど。

僕が顔を引き攣らせていると、あかりちゃんがハイライトが消えた瞳で告げた。
「イズクくんの女誑し」
「マジで身に覚えないんだけど!?」

緑谷「試合に集中させてほしいんだけど」

「そ、その、戻りましたー…」
「……おい。いつの間に俺の幼馴染はタラシになった?」
「だから僕も身に覚えないんだって!!」
かっちゃんからの視線が痛い。
誑かした覚えもないのに、女誑し扱いされるのは流石に堪える。
僕たちは周りを取り囲む二人の少女に席を譲り、階段に腰掛ける。
そんな中で、轟くんの訝しげな表情が目に入った。
「轟くん、どうかした?」
「ど、どうかしたって…。お前ら、さっきからなに言ってんだ?」
「何って…。その子たちのこと?」
「……誰も座ってねーけど?」
ふざけていない。
本当に見えていないのか、僕が指差す座席を見て、首を横に振る轟くん。
と。先生が皆に向けて声を張り上げた。

「ここに座ってる人が見えてる人は手ェ上げてくださーい」
手を上げたのは、僕、あかりさん、かっちゃんのほかに、ヒメちゃんとミコトちゃん、ウナちゃんなど、個性を持たない、または個性という生命体そのものという特殊事例の人たちのみ。
轟くんたちには本気で見えていないようで、何度も座席を確認しては、首を傾げていた。
「……あり得ませんわ。肉体のない、魂だけの生命体だなんて…」
そんな中、愕然としたイタコさんが呟く。
魂だけの生命体って、幽霊となにが違うのだろうか。
僕がそんなことを思っていると、麗日さんが切り込んだ。
「幽霊となんか違うん？」
「大間違いですわよ…。
その…。私にしかわからないでしょうけど、彼女たちは『生きている』のですわ。
その特異性から考えるに…、きっと、彼女たちに近い存在でなくては、認知ができないのでしょうね」
「近い存在って…、無個性とか、人工個性とか、個性特異点とかの特殊ケースか」
成る程。だから、警報にも、レーダーにも引っ掛からなかったのか。

不法侵入の手引きをしたとかで、雄英から訴えられる可能性がないってだけでも僥倖だ。

僕が胸を撫で下ろしていると、ふと、飯田くんが声を上げた。

「…第一種目が終わったが…。緑谷くん、ちゃんと見ていたか？」

「……あっ!?」

しまった。完全に見逃した。

慌てて電光掲示板を見やると、左半分にはハイライトなのだろう、盛り上がったシーンの切り抜きが流れている。

右半分を見やると、第一種目を勝ち抜いた人たちの名前が並んでいた。

「……そら姉さんは、敗退してしまったか」

「鍛えてもないパンピーなんだ、勝ち残ること自体有り得ねーだろ」

「それは確かにそうなのだが…。怪我をしていないかが心配なんだ」

経過なんてこれっぽっちも見てないから、話に混ざれない。

元凶となった少女二人を軽く睨め付けるも、彼女たちは意に介さず、かっちゃんを観察していた。

そんな中、麗日さんが「ほぇー」と感嘆の息を漏らした。

「ずん子さん、勝ち残っとるなぁ。

そんでも中位なあたり、やっぱヒーロー科とかは強いんやなぁ」
「サポート科とか押し退けての中位だぞ」
「ごめん。やっぱおかしいわあの人」
本当、なんであそこまで鍛えようって思ったんだろうな、あの人。
そんなことを考えつつ、僕は未だ尚、かっちゃんをじっくりと見つめる二人を見やる。
かっちゃんもその視線が気になるようで、鬱陶しそうに眉を顰めていた。
「なんだ、幽霊モドキ。言いたいことあンならとっとと言えや」
「……もしかしなくても、『大・爆・殺・神ダイナマイト』？」
その名前に、彼女の存在を認識できている全員が思いっきり吹き出した。
そんな中、かっちゃんが笑みを浮かべ、「イカすじゃねぇか」と呟く。
センス大丈夫？あり得ないほどダサいぞ、かっちゃん。
「やっぱり！ねぇ、なんでそんなに綺麗に『調和』してるの？
もしかしてさ、『今回』になって、イズクがやっと完全な『調和』の方法を見つけたの!?やったじゃん、イズク!!」
「倒錯してんのか、コイツ？」
「さぁ…？」
歓喜を露わにして僕に抱きつく彼女の口からは、あいも変わらず意味のわからない言

葉が飛び出す。
もしかして、未来人の類なんだろうか。
僕が悶々と思考を巡らせていると、観客席が沸き立った。
『さて、狭き門をくぐり抜けた猛者たちよ！
続いての門を突破できるかしら!?
第二種目はぁ…、「三つ巴棒倒し」!!チームはこちらで勝手に決めさせてもらったわ!!』
ミッドナイトの声と共に、表示される掲示板に注目が集まる。
名簿を見たが、ヒーロー科、サポート科など、主役級の活躍が期待される人たちは一塊になっておらず、見事にバランス良く分けられている。
そんな事を考えていると、コンクリートでできたフィールドから、三本の柱が精製され、そこらに転がったのが見えた。
『ルールは単純！「棒を倒せ」よ!!
棒が二本倒れた時点で即終了!!ただぁし！来年からヒーローになるんだから、人としてアレなのはＮＧね!!
さぁ、勝負の時よ！棒を持ち上げなさーい!!』
流石は雄英というべきか、即席のグループだろうに、テキパキと3チームに別れ、棒

を立てる生徒たち。
ずん子さんのグループには、無個性の普通科を入れた帳尻合わせなのか、ビッグ３のトップらしき女子生徒がいる。
彼女は無個性という明らかなデメリットを抱くずん子さんにも嫌な顔ひとつせず、爽やかな笑みで「頑張ろうね！」と声をかけているのが見えた。
…ああいう人が増えてくれたら嬉しいんだけどなぁ。
僕がそんなことを思っていると、ふと、二人の少女が神妙な面持ちで告げた。
「……ダイナマイト以外は、まだ『調和』されてないんだね」
「イズク、本当にどうしたの？
いくら記憶を無くしたとはいえ、それさえも忘れちゃったの？」
また『調和』だ。
単語の意味自体はわかるけど、何故そこでその単語を用いるのだろうか。
もしかして、かっちゃんみたいに個性特異点となった状態…、つまりは『個性と完全に共存している』状態をそう呼んでいるのか？
未来では、個性という存在そのものが危険視されていた。その理由は果たして、人の手に余るような状態になったから…などという、現時点でも提唱されている程度のものなのだろうか。

僕は恐る恐る、彼女らに問いかける。
「…『調和』しないと、どうなる？」
「どうなるって…、それも忘れたの？イズクが…」
彼女がその言葉を紡ぐ前に、爆音が轟く。
フィールドを見やると、増強型の個性であろう男子生徒の拳と、異形型の個性の男子生徒の拳がかち合っていた。
まさしく混戦。棒を倒すべく、ヒーロー科生徒や、サポート科の生徒が繰り出すサポートアイテムが飛び交う。
第一種目は見逃してしまったのだ。これ以上は見逃せない。
僕は質問を打ち切り、フィールドの方へと目を向ける。
「……ごめん、後で聞いていいかな？」
「いいけど…。イズクさ、大丈夫なの？さっきからなんか変だよ？」
「変って言われてもなぁ…」
本当に身に覚えがないのだから、仕方ないじゃないか。
そんなことを思いつつ、ずん子さんの姿を見やる。
彼女は極限にまでに気配を殺し、真っ直ぐに相手の棒へ向かっていた。
奥さんの技術を叩き込まれた僕たちだからこそ視認できているが、ヒーロー科生徒ら

はソレどころではないのか、それともただ単に認識できていないのか、棒に向かうずん子さんを誰も追いかけては来なかった。

と。観客席が急激に騒めきだす。

僕たちがそちらを見ると、剛腕を誇るヒーロー科男子生徒が、棒を振り回しているのが見えた。

「うぉっ…。棒を振り回してんぞ、あのヒーロー科。

アレ、コンクリだろ…？」

「加減はしてるんだろうが…。大丈夫なのだろうか…？」

そんなことを言っていると、ずん子さんがその男子生徒が振るう棒の前に、助走をつけるようにして駆けていくのが見える。

一体何をするつもりなのだろうか。

弧を描いたコンクリートの塊が、ずん子さんへと迫る。

あのままいけば、直撃はまず避けられない。

しかし、幾人もの生徒が吹き飛ぶ中で、間を縫うようにしてコンクリートの塊へと飛び込むずん子さん。

まるで吸い込まれるように、彼女の蹴りが横薙ぎに振られたコンクリートに炸裂する。

瞬間。びしり、と音が鳴ったかと思うと、男子生徒が持っていた棒に亀裂が走り、見事に折れてしまった。

『……は?えっ、ウッソォ!?あの子何したの今!?』

ミッドナイトの素っ頓狂な叫びが、観客の心中を代弁する。

そんな中、淡々と奥さんが口を開いた。

「ずん子の武器は器用さと視力。

じゃあ、そこから導き出されるのは?」

「……比較的脆い部分を見抜いて、ピンポイントで蹴ったのか。

しかも、振り回してる勢いがあったから、本来ならちょっとした亀裂程度で済んだのが、あっけなく折れちまった…ってこったろ?」

「正解」

常軌を逸した器用さと視力を鍛え上げると、こんな芸当ができるようになるのか。

ふと、東北家の面々を見ると、凄い勢いで沸き立っていた。

静まり返ったこの場では完全にアウェーなのだが、それすらも気にならないのは、家族の絆が成せることなのだろうか。

「……これ、判定どうなるの?」

「ミッドナイトも困ってるぞ…」

「ぶん回すまでは想定してたけど、へし折るとかは想定してなかったんだろうな…」
「セメントスが本気出すと、かなり硬くなるとかヒーロー特集の番組とかで見たような…」
……うん。奥さんが鍛えたから仕方ないってことで済ませておこう。
審議の結果、棒が折れてもダメという結論に至ったらしい。
観客席、職員、生徒の全員がずん子さんを凝視する中で、当人はただ真っ直ぐに、次にへし折る棒へと目を向けた。
「次」
ゾッとするほど低い声。その脅威を前に、サポート科の生徒が小さく悲鳴を漏らす。
ずん子さんが駆け出すと共に、ヒーロー科生徒やサポートアイテムが、彼女に向けて殺到する。
と。次の瞬間。轟音と共に、相手側の棒が倒れた。
『……は???』
そんな間の抜けた声が、そこらじゅうから聞こえる。
よくよく見ると、守りが手薄になった箇所に忍び寄っていたのだろう、ずん子さんのチームに居たヒーロー科数名が、数の暴力で棒を倒しているのが見えた。
いくらヒーロー科が指揮を取っていたとはいえ、即座に指示に従うほどに実戦慣れし

ていないサポート科の注目が、ずん子さん一人に集中したことが痛手だったのだろう。
呆然としていたミッドナイトが、はっ、と弾かれたようにマイクを手に取る。
『あ、呆気なーーーーいっ!?
大混戦を極めた第二種目は、まさかの普通科、東北純子によるどんでん返し!!3年ヒーロー科にも迫る未知数の実力に、担任の私自身驚きを隠せないわ!!!』
「胃が……」
ミッドナイトの声に先生が冷や汗を浮かべ、胃を抑えていた。
僕たち関係ないんで、奥さんを紹介したご自分を恨んでください。

地球の命運は、再び緑谷出久に託された

「くくく…。轟くん、麗日さん…。

認めるわ。確かにあなたたちは強い。強いけれど、『万能』ではなかったようね？」

昼休憩と、その間に観客の関心を離さないように企画された幕間のレクリエーションにより、人々が喧騒を織りなす最中。

少し離れた屋台にて、不敵な笑みを浮かべる少女…『四国めたん』が、打ちひしがれる俺たちを嘲笑う。

俺たちはしたり顔で踊り狂う彼女を前に、睨め付けることしか出来なかった。

「恥じることはないわ。あなたたちは、この漆黒のめたんを相手に足掻いた。

『定められし創造』という、私が支配する事象を前に立ち向かう勇気。

それは、十分に賛美に値するわ」

「ただの型抜きだろ」

悔しさと無力感に打ちひしがれる俺たちに、そんな冷めきった言葉が投げかけられた。

その言葉を吐いたのは、売店でいろいろと買って来たのであろう、手に大量のビニー

ル袋をぶら下げた切島。
紙コップに入った唐揚げを頬張る切島に、俺たちは演技を止め、立ち上がる。
「めたんさんのノリ、なんか面白くてな」
「この小っ恥ずかしい語彙、どっから出てくんのやろ」
「失礼ね！私の織りなす言の葉を『小っ恥ずかしい』などと、俗な言い方をしないでちょうだい！
これは名家に相応しい血筋、そしてこの漆黒のめたんが纏う権威を誇示するためのものなのよ！」
「めたんさんって、お嬢様としての方向性だいぶおかしいよな」
切島の鋭い一言に、めたんさんがたじろぎ、「うぐっ」と呻き声をあげる。
自分の家に誇りを持っている割には、四国という苗字で呼ぶと怒る。プライドなどと声高々に言う割には、しょっちゅう先生にご馳走になってる。
確かに、お嬢様と言われても、普段の立ち振る舞いが無ければ首を傾げてしまいそうだ。
そんなやり取りをしていると。昼休憩で席を外していたであろうミッドナイトが、なにかから逃げるようにして通り過ぎた。
「勘弁してぇ!!」

一体、なにが起きたのだろうか。
彼女の絶叫に、皆が首を傾げていると。
歪なシルエットが、ミッドナイトを追いかけてくるのが見えた。
「待ってください、先生〜！『もっと食べたい』って言ってたじゃないですか〜!!」
「いくらなんでも限度があるでしょ!?」
そこにいたのは、ずんだの従僕。
ずんだ地獄からの使者が、味覚と胃袋を破壊する兵器…『ずんだ餅』を手に、ミッドナイトを追いかけ回していた。
当人には全く悪気はなく、むしろ善意でやっているのだろうが、いかんせんタチが悪い。
しかし、俺たちにも、あの暴走したずんだの奴隷を止める術はない。
俺たちは断末魔をあげ、ずんだ餅に襲われるミッドナイトに合掌した。
「…私の口調より、あっちの方がよっぽど面白いと思うのだけれど」
「「ご冗談を」」
「本当に失礼極まりないわねアンタたち」
♦？♦？♦？♦？
会場から少し離れた場所にて。

僕たちは簡素な昼食を摂りながら、はしゃぐ少女二人を傍目に言葉を交わす。
「で、先生。この子たち、前世で見覚えとかありませんでした？」
「見覚えはめっちゃありますけど…。
僕たちと同じく、明確なキャラ付けがそんなにされてないって言うか…、使用者にぶん投げられてるって言うか…。
それはもう無限大に解釈が広がってるんで、名前くらいしか分かりませんよ？」
先生の前世は、あいも変わらず正確な情報を運んでこない。
『前世の記憶』なんて、そこまで良いものでもないんだな、と思いつつ、ずんだ餅を頬張るきりちゃんを見やる。
きりちゃんもまた、彼女らの情報を持っていないのか、首を横に振った。
「ある程度はわかってますけど…。ソレが絶対とは限りませんからね？」
「まあ、参考にはなるだろうし…」
「…髪が長い方が姉の『ＩＡ』。ばっさりしてる方が妹の『ＯＮＥ』ですね。
地球を救うために、『惑星ＡＲＩＡ』からやってきたとかなんとか…」
なんてトンチキな設定なんだ。
いや、前に面白半分で聞いたずん子さんの設定の方が、よっぽどトンチキなんだけど。
この突飛な設定がドンピシャで当たっていれば、彼女たちは『宇宙人』ということに

なるのだろうか。
　しかし、僕やかっちゃんのように『元あったレール』とやらがあるのなら兎に角、先生たちのような『レールもクソもない存在』である以上、そう決めつけるのは早計か。
　なんにせよ、僕は目の前にいる彼女たち…『ＡＲＩＡ姉妹』のことをまったく知らない。
　この子たちと僕の間にある認識の齟齬を改める、もとい明らかにするには、まずこの子たちを知る必要がある。
「えっと…、ＩＡさん、でいいのかな？」
「思い出したの!?」
「あ、まぁ…、名前、だけ？」
「ほら、やっぱり！若返ってはいるけど、私たちのイズクじゃん！」
「いや、どう…なんだろ？」
「先生たちに教えてもらいました」なんて言えるわけもなく。結局、齟齬がより深刻なものになったような気がしてならない。
　僕がそんな複雑な表情を浮かべると、かっちゃんがため息を吐いた。
「お前のその迂闊さ、どォにかした方がいいぞ。見てて不安になる」
「かっちゃんに心配されるレベルなの!?」

「お前らってホンット口を開くたび俺のこと馬鹿にするよなァ!?」
「馬鹿にされるほど性格がクソなのが問題なんでしょうが」
「ンだとォ!?そんなことあったわクソッタレェェェェェッ!!!」
かっちゃんって、面白。
先生の指摘に咆哮するかっちゃんを見やり、ＩＡさんたちが首を傾げる。
しかし、かっちゃんのことを馬鹿にできないほど、僕が迂闊なことは理解してる。
轟くんと出会ったのも、実験の失敗からだし、ついなちゃんと麗日さんの悩みを知ったのも、僕とあかりちゃんが夜中に抜け出したのがバレたからだ。
この迂闊さが良い結果を運んでくるばかりではないだろうし、なんとか矯正できないだろうか。
そんなことを思いながら、僕はＩＡさんたちに問いかける。
「その、ＩＡさんたちはどこから来たの？」
「あー…。じゃあ、改めて！
私たちは、地球上にあるすべての生命を『個性』や渦巻く悪意、社会が生み出す苦痛から救うために、惑星ＡＲＩＡから来た！」
「私たちの歌声で、すべての生命は救われる…はずだったんだけど。
イズクが必死になって止めるから、先送りにしてたんだからね？」

ＩＡさんとＯＮＥさんの言葉に、どっ、と冷や汗が流れ出すのがわかる。
最悪の想像が、現実のものではありませんように。
そんな願いを込め、二人に問いかける。
「君たちが『救う』と、どうなる？」
その問いに、彼女たちは満面の笑みを浮かべ、答えた。
「私たちとおんなじになるの！
魂だけの、空腹も憎悪も苦痛も、辛いことなんてなんにもない体になれるの！」
「体を捨てて、朽ちることなんてない、永遠の命を謳歌できるの。
齟齬も誤解も対立も、あらゆる思想の隔たりからも解放されて、自由になれるの。
だって、みんなを隔てるものなんて、何もないんだから」
衝撃が頭の中を反芻する。
彼女たちが嬉々として語るソレは、僕たちにとっては『死』でしかなかった。
もし対応を間違えば、この星に生きる生命諸共死ぬ。
そんな張り詰めた緊張感が、僕の気管を狭めるような気さえする。
僕たちは二人に「ちょっと、ごめん」と告げ、少しばかり距離をとった。
「ど、どうするんですか!?
エヴァの人類補完計画みたいなことやるって言ってますよ、アレ!?」

「嬉しそォに言ってるあたり、マジで『救い』だと思ってやがる……！
ざけンなよ……！そんなンが『救い』であってたまるか……!!」
「……うん。背負った責任さえも捨てて、そんな命を生きたいだなんて、僕は思えない」
あまりにも価値観が違いすぎる。
最悪、彼女たちをなんとか打倒する方法を考えなくてはならない。
そんなことを考えていると。
いつ以来か、先生が真っ直ぐに僕の顔を見つめた。
「…彼女たちは『個』であることの苦痛を見るあまり、その必要性を根本的に理解できないんでしょうね。
文化、価値観の違いはあれど、理解しようと歩み寄り、擦り合わせることはできます。
それができるのは、他でもない。
個であることの素晴らしさ、その苦痛。どちらにも真摯に向き合い、ぶつかってきた緑谷くんだけです」
「……先生じゃ、ないんですか？」
「僕は前に、苦痛から目を逸らしました。
僕にその資格はありません」
キッパリと、重い責任を僕に渡す先生。

押し付けられた、だなんて思わない。自分ができないことはできないと言う人だと、僕は知っているのだから。

しかし、本当に僕が彼女たちに僕たちの価値観を伝えることができるのだろうか。

そんな不安を抱いていると。

僕の体を、柔らかい感触が包み込んだ。

「大丈夫。できますよ。イズクくんはヒーローなんですから」

僕を抱擁するあかりちゃんが、にっこりと笑ってみせる。

弱気になるな、僕。覚悟なんて、とっくの昔に決めていただろう。

ぱん、と両頬を叩き、気を引き締める。

「やってみます」

地球の運命が、一年ぶりに僕の背に乗っかった。

♦？♦？♦？♦？

「…本当に、良かったのか？

アーミー、ミラー…。『成功例』に限りなく近い二人を、彼らに渡して」

狂乱の景色が広がる空間にて。

少女二人が人の姿を無くし、改造されてゆく光景から目を逸らすように、ブラックボックスが佇むフィクサーを見やる。

しかし、フィクサーは路傍の小石でも見ているかのように無関心な態度のまま、淡々と告げた。
「僕が目指したのはキズナだ。あんな単一の個性しか生み出せない失敗作じゃない。あんな人工個性を無理矢理に押さえつけただけの、人間の劣化版じゃないんだよ。
僕たちがどれだけ『捨ててきた』と思ってる?そこに二人加わっただけだ」
今更だ。二人殺した程度で痛む良心など、とうの昔に捨てている。
その答えに、ブラックボックスは言葉を紡ごうとして、項垂れるように頭を下げた。
「…すまない」
「謝る暇があるなら、ドクターを手伝え。
細工をするのなら、今だ」
「……わかったよ」
ブラックボックスは言うと立ち上がり、狂気に笑う医者へと歩み寄っていく。
彼の背をフィクサーがただ見つめていると、すっかり回復したオール・フォー・ワンがその肩に手を置く。
己とは違った、無邪気かつ無作為な悪意を、ただそのまま注いだかの如く澄んだ瞳。同級生を揶揄う学生かのように、その口が弧を描いている。
いっそのこと、人懐っこささえ覚えるその顔に、フィクサーは隠し持っていたアイス

ピックを向けた。
「おやおや？せっかく生み出した『娘』さえも消耗品扱いかい？」
「そんなの、覚えきれないほど殺してきた」
　同時に、覚えきれないほど居たよ。
「…相変わらず、君には遊びがない。
『定められた運命』を覆すために足掻くのもいいけど、たまにはハメを外さないとパンクしてしまうんじゃないかい？」
　刹那。フィクサーは激情のままに、オール・フォー・ワンの首を捉え、流れるように床に押さえつける。
　フィクサーから放たれる濃密な殺気が、空気を蝕む。
　茶化す暇もなく、仮面の瞳がこれ以上なくオール・フォー・ワンの眼前に近づく。
「…お前、分かっているのか？
　お前が成ろうとする『ソレ』が、最も僕が排すべきモノなんだぞ」
　フィクサーが威嚇するも、自分を殺せないと分かっているオール・フォー・ワンは、ただ笑い、その仮面に触れる。
　刹那。仮面が粉々に砕け散り、隠してきた素顔が、空気に触れた。
「おお、怖い怖い…。そう言う割には、オールマイトのように『笑ってる』じゃないか。

さすがは、『ヒーローを目指していた』だけはあるね。ねぇ…」

――――『何回前から繰り返してる』かもわからない『――――』。

フラグ回収してはいけない２４時

「…結局、パァになっちゃったなぁ」
はぁ、とため息をつき、熱狂に包まれている会場を見やる。
こんな危機を知ってまで、のうのうと雄英体育祭を観覧しようとは思わない。
僕の対応ひとつに、地球のすべての生命がかかっている。
迂闊さの塊である僕が慎重に言葉を選んでも、ボロが出るだけだ。
僕は出来るだけ心を落ち着けながら、売店で買った綿菓子にはしゃぐＩＡさんに問いかける。
「惑星ＡＲＩＡって、どんな星なの？」
「……それは話したことなかったかなぁ？
ＯＮＥちゃん、どうだっけ？」
「話したことないね。そもそも、話せるようなことなんてないから」
「話せることがないって…、文明も文化もある星なんじゃ…？」
「ないよ。私たち以外いないし、何もないから、何を話していいのかわかんないの」
…彼女たちの知る僕は、対話の「た」の字も知らなさそうなこの二人とどうやって交

友関係を結んでいたのだろうか。
　そんな疑問が浮かぶものの、僕は出揃った情報を口に出し、考察を広げていく。
「この二人以外、何もないってことは、生態系というサイクル自体も機能していないってことで…。イタコさんが言うには、この二人は『体』という有機的且つ物理的な器が存在せず、ただ魂だけが形を成している…。つまりはプラトンが説いた『イデア論』のイデアがそっくりそのまま歩いてると推察できる。となれば、ＡＲＩＡという惑星も物理的な法則が一切通じない、いわゆる『イデアの世界』と呼ぶべき存在で、それがヒメちゃんとミコトちゃんのように意識を切り離したのが彼女たちなのかも…」
「イズクが気持ち悪いモード入っちゃった」
「うぐっ」
　記憶の中の僕も、こんな感じみたいだ。
　無邪気な顔で放たれた言葉に呻き声をあげると、ＯＮＥさんが呆れたため息を吐いた。
「調和すれば、話すとか、考察するなんて余計なプロセスは要らないんだけど…」
「余計だとは思わないかな？
　わからないことを考える、知ろうとするって、自分の目線で自分以外をきちんと見てるって感じがして、僕は好きだけど」

「……よくわかんない。わかんないのって、気持ち悪いし」
「気持ち悪いって思うのも、自然なことだと思うよ。でも、その気持ち悪さが一気にじゃなくてさ、ちょっとずつ消えていくのが楽しいんだ。
ＩＡさんたちの価値観でわかるかは、ちょっとわからないけど…。そう言う思想もあるんだなって知識は持っておいて欲しいな」
僕が言うと、ＩＡさんたちは目を丸くしたのち、ふっ、と笑った。
「……イズクって、記憶を失くして、なんかちょっと変わったよね。
私、こっちのイズクも好きだよ」
「話してて、スッキリするって言うか…。
私たちに歩み寄ってくれてる、一緒に話してるって感じがするよね」
「もしかして、その…。君たちが知ってる僕って、けっこうひどい男だった…？」
「ひどくはないよ。一匹狼な感じ」
「余裕がなさそうだった。それでも、私たちのことを自分なりに解ろうとしてくれてた」
僕が一匹狼だと言われても、正直なところ、想像もできない。
僕は孤独を体感したことがない。辛い時はお母さんが寄り添ってくれたし、先生と出会ってからは、先生とばかり一緒にいた。
あの日、先生と出会ったから、僕は一等星という仲間を得られたのだ。

だから、僕は疎外感を感じることはあっても、孤独でいるなんて考えたことはない。
そんな僕に向けて、二人は寂しそうな、悔しそうな笑みを浮かべた。
「だから、使命に背いて先延ばしにしちゃったんだよね。
…あんなボロボロの星を、ここまで直しちゃうんだもん。イズクはすごいよ」
「ボロボロの星…？」
「ああ、そっか。忘れちゃってたんだよね」
「イズクが私たちと会った時、この星は…」
――――『第三次世界大戦』がキッカケで、その八割が死の星になっていたんだよ。
ひゅっ、と喉から空気が漏れ出す。
第三次世界大戦。あかりちゃんが生まれるきっかけとなり、自らの心を殺すきっかけとなった戦争。
僕は愕然としかけるも、それを無理矢理に押さえつけ、ＩＡさんたちが語る「過去の地球」について耳を傾ける。
「その理由は、環境汚染とかじゃない。
個性因子が原因だったの」
「…個性特異点」
「うん。ちょっとは思い出したのかな？」

「ああ、いや…」
個性特異点。かっちゃんが至った、ソレ。
以前、提唱されていた『人が抑えきれないほどの個性の進化』を、かっちゃんは『個性と混じり合うことで手懐け』、その危機を乗り越えてみせた。
しかし、過去のソレは違ったのだろう。
僕の想像を肯定するかのように、二人は神妙な面持ちで頷く。
「個性特異点が生まれたことをキッカケに、人は個性という生命体の凶暴性を知った。時は既に遅く、個性は人の枠組みを超えて、大地を、海を、空を『食い』始めた」
「……食うって…？」
「文字通りだよ。個性因子は進化の果てに行き着いた。その結果、人の体に寄生するだけでは自己を維持できなくて、手当たり次第に星を取り込み始めたんだよ。
私たちみたいなのには、関係ない話だったけどね」
…成る程。
かっちゃんの場合、僕が作ったイズクメタル製のスーツが防護壁になって、人の形を保っていられたのだろう。そう仮定すれば、意図していないスーツの変形にも理解が及ぶ。
スーツのない人間が個性特異点に至れば、二人が語るように、個性は手当たり次第に

あらゆるものを取り込む怪物と化す。
彼女たちの知る僕は、「過去の」第三次世界大戦勃発時に生きていて、個性特異点を止める術を探っていた。
…いろんなことがわからずじまいだ。
そもそも、数億年前に人類が栄えている…ないし、人類が生誕しているわけがない。
個性が発現したのも、人類史が近代に入ってからだし、地球の八割が死ぬ程の戦争が数億年もの過去にあったとも思えない。
いや。大前提として、彼女らの言う「一年」がどれだけの周期なのかもわからない。時間という概念も曖昧そうだし。
僕が悶々と頭を悩ませていると、二人は「でも」と付け足し、笑みを浮かべた。
「イズクはさ、それを止める方法を見つけちゃったんでしょ？
ダイナマイトの体が何よりの証明だし」
「あー…。アレ完全に偶然っていうか…」
「偶然でもいいじゃん。だってさ、もう…」
その先の言葉が紡がれることはなく。
――敵だァァァァッ!!!!
最終種目が開催されようとしていた会場から、凄まじい悲鳴が轟いた。

僕たちが疑問を口にする前に、僕の懐が、ぶるり、と揺れる。
懐から携帯を取り出すと、先生の文字が浮かんでいた。
「もしもし？」
『敵の襲撃！プロヒーローが対応にあたってますが、正直なところ結構キツイ!!』
驚愕するべき事実なんだろうけど、生憎とこういう状況には慣れた。
プロヒーローが何百、何千と集まる中で襲撃など、大それたことをするな、と軽く思考を放棄しかけるも。
僕はふと、あることに気づく。
「……それ、もしかしなくても、人工個性でデタラメしてるとか？」
『してるから連絡してんでしょうが!!』
「すぐ向かいます!!」
先生の怒鳴り声に、僕は慌てて通話を切り、監視カメラをジャミングする。
流石にここで正体バレは避けたい。
僕は周りを確認すると、いつものように、武装プロセスを展開する。
「Ｍｅｓｓｉａｈ！今、どんな状況!?」
『……地上での起動は久方ぶりな気がしますね、イズク様』
「ご、ごめん！これからはなるべく使うから、早く教えて！」

サポートＡＩに感情が芽生えてきてる。
拗ねた『Ｍｅｓｓｉａｈ』に叫ぶと、仕方がないと言わんばかりに音声を紡ぎ出した。
『以前、交戦した個体名「ミラー」、及び「アーミー」に類似した人工個性を持つ敵が三年会場に襲撃。
来場していたホークス等の公安組織含む、多数のプロヒーローが戦闘に当たっていますが、増える質量に押されています』
「おぅふっ…」
公安とかいうすっげぇ面倒なのいる。
大丈夫？どさくさ紛れで先生とかが殺されかたりしない？そういう警戒もしてるだろうから、そこまで心配はしないけど。
状況を整理すると、ｉ・アイランドを襲ったあの二人に似た敵が会場に襲来。
プロヒーローが対応にあたるも、質量に負けている。
一般人もヒーローも巻き込めないから、高火力の武装は使えない。
なら、求められているのは…。
「電光石火の突破力ってとこか」
セイカさんに貸し出している物に加え、飯田くんに作ったスーツが「疾風迅雷」というコンセプトなのだが…。

無い物ねだりをしていても仕方がない。
いつものようにイズク１号『シリウス』を纏い、バイク…イズク２号『ペルセウス』を顕現させる。
「わぁー…。すっごぉ」
「みんなには内緒ね。避難所まで行ってくれると助かるかな」
「ん。わかった」
少なくとも、ＩＡさんたちに構っていられる状況ではなくなった。
僕はそれだけ言うとアクセルをひねり、狂乱の会場へと駆け出した。
願わくば、彼女たちの爆弾が爆発しませんように。
…僕がこんなこと思うと、大抵最悪の結果引くんだけど。
♦？♦？♦？♦？
「おい、もう追ってきてんぞ!?」
切島の言葉に、俺たちは背後を見やる。
通路をバキバキと破壊しながら、突き進む歪なシルエット。
女の裸体に、無理矢理にラバースーツを貼り付けたような肌。剥き出しになった脳に、伸びた髪。
まさしく怪人と呼ぶべき存在が、幾重にも増殖してこちらへと向かっていた。

「おい、爆豪！お前、アレまとめて吹き飛ばせねーのか!?」
「やっとるわボケェ!!殲滅出来ねーくらいのスピードで増えてンだよちったぁ考えてからモノ言えや単細胞!!」
「こっから爆発見えねーんだもん!!」
俺たちは現在、両脇に音街と東北を抱え、出口に向けて全力疾走していた。
３年の部最終種目が開催されている最中、襲撃してきた怪人により、会場は大パニック。
最初は二体だけだった怪人も、今や会場を覆いつくさんばかりに増えている。
よくよく見ると、爆破を食らって吹っ飛ぶ中に、ぱりん、と音を立てて割れる影が確認できた。
「え…っ!?う、嘘やろ…!?」
「麗日、どォした?」
「あの怪人、もしかしたら、もしかしたら、やで?」
――――i・アイランドん時の、あの女の子二人かも知れん。
その言葉に目を見開く暇もなく、黒の手が俺たちへと迫る。
と。その瞬間だった。
『ジャスティスストライク!!』

正面から現れた影が赫の雷を纏い、集団を蹴りで殲滅したのは。
しかし、怪人は傷口から増殖しようと、不気味な音を立てて膨れ上がり、あるいは鏡のような物体を形成する。
俺はガキ二人を下ろして手汗を気化させ、周囲にばら撒いた。
『かっちゃん！監視カメラはジャミングした！
今ならスーツが着れる！』
「クソデク！テメェ仕事が遅ェんだよ!!』
ばら撒いた気体を爆破させ、爆炎に包まれながらスーツへと着替える。
ちらり、と背後を見ると、麗日たちもスーツへと着替えており、増殖した怪物どもに応戦していた。
俺たちは隣り合わせに立つと、構えを取る。
『退け、僕がヒーローだ……！』
『お天道様が赦しても、俺の正義が赦さねェ』

今、瓦解する

『「ソル・カノン 」!!』
『「ジャスティスブラスター」!!』
爆炎と光の奔流によって怪人が穿たれ、鏡と炭の雨が降る。
出来るだけまとめてぶっ飛ばしても、それを補填するかのようにあり得ない速度で増殖する怪人に、思わず舌打ちする。
流石にキリがない。ジリ貧とも呼べる状況を前に、僕は歯を強く噛み締めた。
『i・アイランドの時より増殖が早い…!』
『くっそ…!コイツら、猫の盾作戦も取りやがる…!碌に火力出せねェ…!』
『猫の盾…?』
『雄英の生徒、盾に使ってやがんだよ!!』
飯田くんの問いに、かっちゃんが叫びながら、顔が腫れ上がった男子生徒を盾に迫る怪人の側頭部を蹴り砕く。
そう。あろうことか、あの怪人たちは最終種目に参加していた生徒たちを捕らえ、盾として活用しているのだ。

その人数は、確認するだけでも１２名。ビッグ３とずん子さんは魔の手から逃れることが出来たらしい。
裏を返せば、それほどの実力がなければ、この質量に耐えきれないということだ。
かっちゃんは男子生徒の腕を引き、増殖した怪人たちを鎧袖一触に撃破していく。
「あ、う…」
『痛がってる暇あンなら退け！死ぬぞ！』
「あ、ぁ…、りが、と…」
足を引き摺り、壁にもたれかかりながら避難する男子生徒。
これで捕らえられている生徒は１１人。
レーダーで確認する限り、ずん子さんもこちらへと向かっているようだ。
…なんであの人、スーツ無しで奥さんと似たようなこと出来るの？
『…ずん子さんってもしかして、ボクたちより強いのではないか…？』
『…まぁ、あの人、範囲攻撃ないから』
地獄の『奥さんズブートキャンプ』を乗り切った猛者なのだ。
心配はそこまでしなくてもいいだろう。
そんなことを考えつつ、僕は盾にされた女子生徒二人を引っ張り出す。
彼女らが避難するのを横目で確認し、僕は右手の砲身をより大きく展開した。

『ヘーパイストスの武器庫……!
「アーレスの槍」!!』
どぅん、と、大地を揺らすかのような轟音が鳴り響く。
槍とは名ばかりの光の奔流が敵を、果ては雲をも穿ち、一瞬だけ晴天を取り戻した。
アーレスの槍。オリュンポス十二神の一柱、軍神アーレスの名前を頂いた武装。
その一撃に目をひん剥いているのか、晴れた空を見上げて切島くんが叫ぶ。
『おい、ブッパして大丈夫なのか!?』
『計算した。人質にはかすりもしてない』
『…バケモン過ぎんか、コイツの頭?』
『今更だろ』
失礼な。茜さんの方が数倍デタラメだ。
そんなことを考えながら、開けた道を潜ろうとするも、即座に増殖した怪人に囲まれる。
やはり、貫通しても即座に塞がれてしまう。
右手の砲身を分解し、背中にブースターを展開する。
『かっちゃん、僕に捕まって!』
『……墜落したら殺すからな』

『ごめん自信ない!!』
この中で怪人の本体を打倒できそうなのは、かっちゃんしかいない。
僕はかっちゃんの手を取ると、背中のブースターを点火する。
刹那。世界は線へと変化した。
♦？♦？♦？♦？
「先生、伏せて！」
ずん子の言葉に、ミッドナイトは即座に頭を下げる。
瞬間。彼女の拳が怪人の顔面を捉え、その体が鏡のように崩れ落ちた。
ずん子は続け様に構えを取り、四方八方を取り囲む怪人を撃破していく。
ずんだアローさえあれば、逃げ道の確保が出来たというのに、ずんだもんと距離があり過ぎて、呼び出すこともままならない。
この状況に思わず眉間に皺が寄るが、即座に無表情へと戻り、迫り来る怪人の頭部を踏みつけ、跳躍した。
「はぁあああっ!!」
同じく飛んだ怪人の喉元を掴み、そのまま宙で回転するずん子。
勢いをつけたことにより、肉の鎚と化した怪人を、塊となった群れへと叩き込んだ。
これが無個性の人間なのだろうか。

あまりに洗練された動きを前に、ミッドナイトの頭にそんな言葉がよぎる。
「東北さん…、あなた、強いのね…」
「そりゃ、どう…もっ！」
ミッドナイトの賞賛を流し、足払いで殺到する怪人の体勢を崩す。
バランスを崩し、ガラ空きになった顎を穿ち、ずん子は滴る汗を払う。
その時だった。
轟音と共に、光が降り立ったのは。
「な、なに…!?」
暴風と共に散乱する怪人の破片を受けながら、ミッドナイトがそちらを見やる。
立ち上る砂煙を払うように、二つのシルエットが動き出し、怪人を殴り倒した。
風で揺れる髪の間に見えたのは、星を象った装飾が散りばめられた装甲の戦士が二人。
その戦士が指を鳴らすと共に、赫の雷と白の太陽が降り注いだ。
「……そんな、デタラメな…」
「……」
あまりにも、規模が違いすぎる。
２匹の怪人によって作り出された地獄絵図は、二人の戦士によって打破された。

それでも、まだ視界の八割を埋めつくほどに膨大な怪人たちが蠢くが、二人の戦士はある一点に目を向け、駆け出した。
「速い…!!」
「なんだあれ!?プロヒーローか!?」
「いや、見たことないぞ!?」
怪物に隠れて見えないのか、さまざまな憶測があちこちから飛び交う。
そんなことも気にせず、戦士二人は二体の怪物を投げ飛ばし、空へと跳ぶ。
怪物が増殖しようと、体の一部を歪ませるものの、更に天高く蹴り飛ばされ、あっという間に見えなくなってしまった。
「な、なんだったの、今の…?」
ミッドナイトが呆然と呟く。
と、背後からセメントスや生徒たちの素っ頓狂な声が響いた。
「お、おい!増殖が止まったぞ!?」
ミッドナイトはその言葉に、慌てて怪人の様子を見やる。
目の前には、増殖しようとしたのだろう、一部が歪に膨らんだ怪人が立っている。
しかし、上手くいかなかったのか、膨らんだ箇所が徐々に引っ込んでいくではないか。
あたりを見渡すと、増殖を図っていた怪人らも、歪なシルエットから一点、すらりと

した雌型の怪人の姿へと戻っていく。
「もしかして…、さっきのが本体だったんじゃないか…？」
「あ、ああ…。誰だかわからないが、助けられてしまったな…」
生徒たちの会話を聞き流しつつ、ミッドナイトは鞭で残った怪人を殲滅して回る。
そんな中で、ずん子が祈るように、天を見つめているのが見えた。
♦？♦？♦？♦？
「思った通りだ！知性が死んだことで、人工個性がかなりデチューンされてる！
本体が居ないと、正確な行動が取れないみたいだ！」
がしゃん、と音を立てて、空中に浮かんでいた僕特製の空中牢獄が閉じる。
だだっ広く、殺風景な空間に戦慄くでもなく、狼狽えるでもなく、怪人たちは即座に増殖し、僕たちへと迫った。
容赦ない範囲攻撃で殲滅していると、かっちゃんが口を開く。
「つくづく解せねぇ…。フィクサーがこんなヘタな手を打つか…？
そもそも、コレは何を狙っての襲撃だ？
雄英潰すンなら、アイツならもっと上手くやったはずだろ。
…きなクセェとこが目立つな」
「そっちも気になるけど！気になるけども、今はあの地獄絵図をＩＡさんたちが見る前

に片付けないと!!」
「…そォだった、地球全生命の危機なんだったわ。忘れてた」
断言する。彼女らがあれを見たら、絶対に生命の統合を図る。
分かり合えないわけじゃない。理解はできないだろうけど、きっと、受け入れようとはしてくれていたんだ。
僕は焦燥を拳に込めて、取り残された本体の怪人に叩き込もうと駆け出した。
『……ぱ、ぱ。い、ち…味』
その言葉に、思わず拳が止まった。
知性は死んでいる。死んでいるのだろう。
が。その魂の残穢とも呼ぶべきモノが、そこに残っていた。
フィクサーに酷似した、悍ましい何かに触れているような、そんな感覚。
もしもだ。もしものことだが。あかりちゃんがこうなってしまったなら。
そんな悪い想像が頭を駆け巡り、僕は歯を食いしばった。
「ふざけるなよ…」
脳が剥き出しになり、瞳はどこを向いているかもわからない。
怪人と成り果てた姿に、i・アイランドで出会った少女の諦め切った笑顔が重なった。
「ふざけるなよ…!!」

レーダーからわかる。生物学的には、彼女たちはもう死んでいる。
どうやっても取り戻せない命を前に、胸の奥からふつふつと怒りが湧き上がってくるのがわかった。
と。かっちゃんが僕の頭を鎧越しに叩く。
「落ち着け。…背負うモンが増えただけだ」
「……うん」
その言葉に、熱が冷めていく。
そうだ。背負う覚悟は出来ている。その怒りを吐き出す時は、今じゃない。
僕は構えを取り、怪人に告げた。
「遅くなってごめんね。今、助ける」
♦？♦？♦？♦？
「イズクの言葉、やっぱりわかんないや」
空を見上げ、ＩＡが呟く。
目の前に広がるのは、怪人に蹂躙された人々のおびえる姿。
出久が言ったように、別々だからこそ感じることのできる素晴らしさが存在することは、なんとなく理解できる。
しかし。だからといって、そこに存在する苦しみがなくなったわけじゃない。

現に目の前にいる人たちは、失う恐怖に喘ぎ、不安を顔に出している。
いや、それだけじゃない。異常を察知し、駆け出した時の出久の表情。
彼はあの時、全くと言っていいほどに笑えていなかった。
寧ろ、これから死地に立つ戦士のように、悲痛な覚悟が透けて見えた。
ＩＡはＯＮＥに目を向け、頷く。
「…やっぱりさ、やろう？
イズクがこれ以上苦しむ必要なんて、もうないと思うの。
だってさ、あんなに頑張ったんだよ…？
数え切れないくらい頑張って、数え切れないくらい失って、数え切れないくらい狂いそうになって…。
だから…、もう救われてもいいと思うの」
「……うん。私も、そう思う」
きっと、イズクは声を大にして反対するだろうな。
そんなことを思いつつ、二人は手を取り合い、息を吸い込む。
と。それに気付いたのか、コウは慌てて二人を止めようと、口を開いた。
「待って…!!」
「「――――――」」

制止はすでに遅く。
滅亡へ向かう歌が今、紡がれた。

緑谷出久は救われなくていい

「な、なぁ…!?」
「なにが、起きてんだ…!?」
戦いの最中に轟いた二つの歌声と共に、世界が割れる。
感覚的なものかもしれない。それとも、物理的な現象なのだろうか。
しかし、僕たちの眼前に広がる光景は、まさしく崩壊としか言いようのない現象だった。
全てが溶け合うような、全てが否定されゆくような、全てが救われるような、そんな幻想的な光景。
ガラスのように世界の破片が舞い、万華鏡のように空も大地も染められる。
誰しもが安堵の表情を浮かべる中で、僕たちだけが恐怖を覚えていた。
「…っ、あかりちゃんたちは!?」
「音街たちはどうなった!?」
遥か大空にいた筈の僕たちも、いつの間にやら崩壊に巻き込まれ、宙を舞っている。
身を守るスーツはそこに無く、僕たちは非力な中学生として、そこに居た。

歌声の奔流に抗いながらも、僕たちは必死で辺りを見渡す。
「緑谷くん！」
その声が聞こえ、僕たちは咄嗟にそちらへと目を向ける。
そこには、奔流に流されながらも、必死で耐えてる先生とあかりちゃん、きりちゃんとウナちゃんがいた。
良かった。少なくとも、先生は正気を保てているようだ。
僕たちは泳ぐようにしてそちらに寄り、彼らの無事を喜ぶ。
「よかった…。他のみんなは？」
「個性持ちが精神汚染を食らってます。
残った無個性とか、特殊ケースの全員で正気に戻そうと奮闘してるのですが…。
正直、結果は芳しくありません」
「成る程な。俺たちがこうしてスーツを脱いでるっつーことは…だ。
俺たちの体から、魂が抜けてんだろ。
そこんとこどォだ、東北？」
「あ、はい。タコ姉様に確認したので、まず間違いなく体から魂が抜けてますね。
全人類規模の幽体離脱です。私たち今、幽霊なんですよね」
思わず目眩がした。

イタコさんが言うなら間違い無いんだろうけど、いざ事実として受け止めるとなると、かなりショックだ。

…しかし、魂って言うからには透けたりしてるのかと思ったけど、生身とそう変わらないんだな。

そんな月並みな感想を浮かべていると、かっちゃんに感づかれたのか、「余計なこと考えてんなアホ」と軽く叩かれた。痛い。

「つまり、魂の統合…アイツらの言う『救済』が始まっちまってるってこった。

…おいクソデク。フラグ回収早すぎんぞ」

「言われてますよ、緑谷先輩」

「……お祓い、行こうかな…」

なにかに呪われてると思うんだ、絶対。

ここ一年の受難に辟易し、ため息を吐く。

弱音を吐くのは、取り敢えずここまで。

今は、この世界に引き込まれた全人類を救うために頭を動かさないと。

「…地形的な変化はないんですね？」

「ええ。先ほど合流した小春さんが確認したところ、人工物だけが無くなったような地形と化しているそうです」

「……あの、音街家の屋敷から結構距離ありますよね？」
「まぁ、小春さんですし…」
「まぁ、小春だしな…」
どうやって電車の距離を突っ切ってきたんだ、こんな重力も定かでない空間で。
流石はメイド界の核弾頭、と言ったところだろうか。相変わらずのデタラメ具合だ。
「この地点は、雄英体育祭三年の部が行われていたあたり。二人がいる避難所は、ここから西の方角に真っ直ぐです」
「……！」
先生の言葉に、余計な思考が落ちる。
そうだ。まだ間に合う。
まだ、僕たちは統合されてない。まだ、終わってない。
すぅ、と息を吸い、両頬を叩く。覚悟はとうの昔に決まっている。
僕が成すべきことはただ一つ。
その決意を新たに、僕はいつものように笑ってみせた。
「行ってきます」
「ええ。行ってらっしゃい」
目指すものは変わらない。

未来のために、残酷な今を勝ち取るんだ。
♦？♦？♦？♦？
歌声が嵐を巻き起こす。
物理的現象なのか、それとも霊体の僕たちを統合させようとする意思なのか。
イタコさんなら兎に角、専門家でもない僕ではよくわからない。
もう救われてもいいじゃないか。もう捨ててしまってもいいじゃないか。
そんな囁きが風とともに流れてくる。
「……大丈夫。もう、救われてるよ」
何度だって救われた。
先生の言葉に、きりちゃんの照れ隠しに、かっちゃんの拳に、あかりちゃんの笑顔に。
数え切れないくらいの人たちに、数え切れないくらい救われたんだ。
苦しみに満ちていても。悲しみに溢れていても。痛みに塗れようとも。
その度に救ってくれる人たちがいる。
もう救われている僕を救う必要はない。
吠えるように、慈しむように、悲しむように歌う二人の声。
救いを求めるように歌う彼女たちへと、僕は一歩ずつ、着実に近づいていく。
「……見えた」

謝るように、祈るように歌う二人が見える。
マイクもスピーカーも、楽器だってない。
それでも、世界中に轟く救いの歌に、僕は思わず息を呑む。
歌うために生まれたのか、と思ってしまうほどに、現実離れした美しさを放つ二人。
この歌を止めてしまっていいのか。
そんな感情が湧き上がるものの、僕は雑念を振り払い、意を決して、ステージに上がる。
ステージは飛び入り参加のキャストを歓迎していないのか、体を襲う風がより強くなる。
吹き飛ばされるものか、と体に力を込め、彼女たちに歩み寄った。
と。二人の歌声が、ぴたり、と止む。
無粋な客を前に、二人は満面の笑みを浮かべる。
「イズク！もう戦わなくていいんだよ！もう抗わなくていいんだよ！」
「もう泣かなくていいんだよ。もう背負わなくていいよ。私たちが助けにきたから」
痛いほどに優しい言葉。
委ねてしまいそうなほどに超然とした笑顔を前に、僕はその手を払い除ける。
「……終わってない。終わってないんだよ。

こんな程度で終わってしまうほど、僕たちの生命は、歴史は、簡単じゃない」
ひとまとめにしてしまえば理解できる、救われるなんて、暴論でしかない。
異形となって苦しんだ少女たちが、溶けて消えた人たちの苦しみが、個性で死んだ人たちが、あかりちゃんが殺した人たちが、僕たちが殺した生命たちが、それまで取りこぼした全部が、紡いできた全てを絶ってしまう。
だから、苦しくても、泣きたくても、死んでしまいたくても、救われたくても。
僕は人類に、同じだけ苦しい道を歩くことを押し付ける。
だって、これまでに死んだ人たちが、僕たちに紡いだ希望が消えることが救いなんて、あんまりにも報われないじゃないか。
「簡単であっていいはずがないんだよ…！
背負ってきたんだ、僕たちは！悲しい歴史も、輝かしい歴史も、失った生命も、生まれる生命も、全部、全部!!
こんなそこかしこに絶望の溢れる世界を、僕たちの手で救うために!!
『全部崩すことで救いにきました』なんて、託してくれた皆への…、勝ち取るために頑張る人たちへの侮辱でしかない!!」
僕のあらん限りの声で言葉をぶつける。
しかし、一体何を言っているのか、と言わんばかりに二人は首をかしげた。

「……それって、本当に救いなの？」
「苦しみに満ちて、悲しみに溺れて、涙さえも枯れ果ててしまいそうな世界。
そんな世界を続けることが、本当に救いなの、イズク？」
「苦しみ続けることが、イズクの救いだって言うの？それでイズクは救われるの？」
二人は「ほら」と言うと、安堵した顔を浮かべる二人の少女を引き寄せる。
間違いない。僕とかっちゃんが目の前にしていた、怪人の素体とされた少女たちだ。
その体はどこかノイズがかかっており、今にも消えてしまいそうなのがわかる。
それだけじゃない。同じく、怪人として作り替えられたのだろう。背後には同じようにノイズに塗れた人たちが立っていた。
白い髪でゴーグルをかけた人、幼少期に遊んだツバサくんに似た人、チンピラのようにチャラチャラとした風貌の人と、さまざまな人たちが並んでいる。
「この人たちにも、その長い苦しみを押し付けるの？ねぇ、イズク。
それで、人って救われるのかな？」
「死んだあとでも苦しむだけの、歪んだ生涯を歩ませるの？
イズク。それは、本当に救いなの？」
「……だから、僕がいる。
僕が…。世界を変える僕が…！希望を背負う僕が…!!絶望を背負う僕が…!!

想いを受け取った僕が今、ここにいる!!
そんな人たちの命も、苦しみも、世界も背負わなくちゃならない!!
だから僕はヒーローで有り続ける!!その人たちも、救ってみせる!!」
「……殺すことで?」
「イズクが苦しむことで?」
その問いで、僕が止まると思ったか。
止まらない覚悟なんて、もうできてる。
「そうだよ。どれだけ繕おうと、僕は、僕たちは殺戮者だ。死んだ命の踏み台の上に立っている大罪人だ。
だからこそ、背負う覚悟をしたんだ」
「……わかんない。わかんないよ。悲しいんだよ?苦しいんだよ?痛いんだよ?」
「そんな人生で、そんな死で、イズクは救われるって言うの!?」
「救われてるんだよ」
吠えるように問いかける二人に、僕は言葉を続ける。
ノイズがかかった全員が、真っ直ぐに僕を見つめた。
「スーパーで豚肉が安く売ってたとか。好きな歌手のＣＤが出るとか。助けた人たちが、笑った写真でＳＮＳを更新してたとか。好きな絵師が、自分がリクエストしたイラ

ストを描いてくれたとか。好きなヒーローと握手できたとか。幼馴染と仲直りできたとか。先生に褒められたとか。大好きなあの子が笑いかけてくれたとか。

そんな、『ほんのちょっとの幸せ』だけで、僕はいっぱい救われた。

だから、もう、救われなくていいんだよ。

いっぱい救ってもらったから、今度は僕がいっぱい救いたいだけなんだ」

苦しみに満ちていても、僕はそんな、ほんのちょっとだけで頑張れる。

二人は力なく、その場に崩れ落ちる。

呆然と僕を見つめるノイズのかかった人影に、頭を下げた。

「わかってる。この救いで救われる人が、これだけいるってことは。

でも、それでも。僕のことを信じてほしい。

あなたたちがどれだけ苦しもうとも、どれだけ嘆こうとも、どれだけ怒ろうとも、僕が全部背負って歩く。

僕があなたたちが抱く怒りをもらうから。

だから、僕があなたたちを救うまでは、待っていてください」

その言葉に、集まった彼らは、さまざまな表情を浮かべる。

しかし、最後には、諦めたように、折れたように、呆れたように、笑みを浮かべ、消えて行った。

最後に残った白い髪の人が、「がんばれ」と言って僕の肩を叩き、去っていく。
残ったのは、僕とＡＲＩＡ姉妹の二人。
僕は二人に手を差し伸べて、笑みを浮かべた。
「…大きな救いじゃなくていいからさ。苦しむ僕に、そんな『ほんのちょっと』をくれないかな。
君たちの歌、好きになっちゃったんだ」
二人は、ぽかん、と目を丸くしたのち、呆れたような笑みを浮かべる。
すぅ、と息を吸う音が、崩れる世界に響いた。
歌声と共に、崩れた世界が元に戻っていく。
ほんのちょっとの幸せが、世界を包み込む。
僕はその中心で大の字に倒れ込み、彼女たちに倣って、下手くそな歌を紡ぎ出した。
その日。歌姫が二人、地球人になった。

虚が語る 忘れられた島に

激動の体育祭が終わり、夏休み。

さんさんと太陽が照りつける中、僕はアイスキャンディを噛み砕き、咀嚼する。

独特な甘味と清涼感に浸っていると、つい先日引き取ったばかりの少女二人が、じっ、とこちらを見つめているのが見えた。

「…冷蔵庫にありますよ」

「わーい！」

「ラブアンドピース！」

「その掛け声なんですか？」

この家も狭くなったなぁ。夫婦二人に居候５人って密度も比率もおかしいけど。

結局のところ、ＩＡさんとＯＮＥさんは僕が引き取ることになった。

イデアをちょっと弄り、普通の人間として認識できるようにしたとかで、二人を見た緑谷くんのお母さんに「またお子さんが増えたんですね」と揶揄われてしまった。

宇宙人二人は、著しく一般常識が欠落しているので、学校に通うことはさせていない。

「イズクと同じ学校に行きたい！」と宣ったものの、ある程度取り繕えたあかりさんとは違い、馬鹿正直に「はじめまして！宇宙人です！」なんて言うのは目に見えてる。
　この夏休みの間に、凡人のプロフェッショナルである僕が徹底的に一般常識を叩き込む、と言う条件付きで許可したはいいものの、今のところ全くと言っていいほどにその効果はない。
　文明の利器で作られた快適な空間で堕落を楽しんでいると、寛いでいたつづみさんが口を開く。
「……あなたたち、気づいてるんでしょ。
　あなたたちの手を払い除けた緑谷くんが、『あなたたちが知ってる緑谷くん』じゃなかったって」
「「うん」」
　どんがらがっしゃん。
　そんな音を立てて、夏休みの自由研究を画用紙にまとめていた緑谷くんが、マジックペンやら写真やらを巻き込んですっ転ぶ。
　どうやら気づいていなかったらしい。
「私たちの知ってるイズクは、もうちょっと心が脆かったから」
「そもそも、数億年…いや、僕たちで言えば、それこそ数値化するのも馬鹿らしくなるほ

どの年月を、人が生きられるわけがありませんしね」
少し考えればわかる話だ。
僕が唖然とする緑谷くんに呆れつつ、残ったアイスの棒をゴミ箱に投げ入れた。
と。ＩＡさんがきょとんとした顔で、小首を傾げた。
「『私たちの知ってるイズク』は、今も生きてるよ？」
「「は？？？」」
♦？♦？♦？♦？
「……と、いうわけで。
『この世界の真相』とやらを探しに、とある敵性国家に乗り込むことにしましたー」
浮遊大陸『北斗七星』にある会議室にて、奥さんから放たれたその言葉に、集まった全員がフリーズした。
ぴしり、と動きを止めたかと思うと、麗日さんが蝉のように壁に張り付き、あらん限りの大声で叫び散らす。
「いーやーじゃーっ!!!」
「麗日、諦めろよ…。奥さんは行くっつったら行くんだから…」
「いいいいいいやぁぁぁぁぁじゃぁぁぁぁぁあああああっっっっっっっっ!!!」
「…先立つ不幸をどうかお許しください…、という締めでいいだろうか？いや、それでは

兄さんたちに僕の覚悟が伝わらない気が…」
切島くんがそう宥めるも、断固として拒絶の意思を示す麗日さん。
飯田くんはというと、悲痛な覚悟を秘めた表情で、遺書をしたためていた。
混沌とした光景に、ひく、ひく、と思わず口角が吊り上がる。
そんな中、かっちゃんが手と手を合わせて爆破を発動させたことで、全員が一斉に静まった。
「どォいう経緯だ?あの宇宙人から情報を引き出すんじゃなかったのか?」
「彼女たちも、私たちが求める全てを知ってるわけじゃないそうなのよ。
『彼女らの知る緑谷出久』が、『ここにいる緑谷出久』とは別に存在する理由も、彼女たちでは言語化が難しいそうよ。
…ただ、該当する場所に心当たりがあるそうでね。それが、ここ」
とん、と指したのは、大西洋に浮かぶ孤島。
面積にして、日本の半分ほどもなさそうなくらいに小さな島。
こんな島あったっけな、と思いつつ、ドローンで撮影されたであろう写真を見やる。
苔むしたビル。水没した遊園地。岩に包み込まれた発電所。あらゆる発展が自然へと飲み込まれた別世界。
もはや国とは呼べぬ惨状を前に、僕は思わず息を呑んだ。

「…ここに、真実が？」
「ええ。『敵性国家』とは言ったけど、正確に言うと『国だった場所』よ」
「……なんて国ですか？」
「さぁね。ヒーローが台頭した時代に滅んだこの国を知る人は、今や誰もいない。記録すら世界から抹消されて、ただ『敵性国家として存在した』という情報だけが残された国。
『オブリビオン』とでも呼んでおきなさい」
オブリビオン。世界に存在すら否定された、忘れ去られた国。
例えそうだとしても、果たしてこんなにも崩壊するものなのだろうか。
ヒーローが台頭した年代に滅んだにしては、当時なら残っているはずの動乱の痕跡さえ見られない。
上手く言い表せないが、この島の存在そのものがちぐはぐな気がする。
まるで、時間から置き去りにされたような、そんな歪さだ。
「…ポストアポカリプス、だっけか。
きりたんが言ってたな」
「……そういや、東北は呼んでないのか？
こういうの、真っ先に食いついてきそうな気がすンだが」

「呼ばなかったわ。考察大会が始まって、話が進まないもの」
「言われてんぞ、考察厨」
「ごめんなさい」
考察大会の一因を担ってしまうであろう僕に向けて、皆の白い視線が飛ぶ。
そんな中、寛ぎながら「そもそも、夏休みの宿題が終わるまでご両親の監視下に置かれてるけど」と付け足し、ぢゅっ、と音を立てて紙パックのミルクコーヒーをストローで啜る奥さん。
きりちゃんは頭はいいのに、宿題となると面倒くさがってやらないもんなぁ。
奥さんは中身のなくなった紙パックを潰してゴミ袋に放り、話を続ける。
「この島はね、フィクサーが拠点にしていた場所らしいの。
それで敵性国家認定されちゃって、誰もが怖って、ヒーローですら近づかないってわけ」
「そんなとこ乗り込むんですか!?」
「「死ねと!?!?」」
下手な敵性国家よりヤバくない？
ダラダラと溢れ出る冷や汗が背中を濡らす。
戦慄する僕たちの態度に呆れたのか、奥さんはため息を吐いた。

「遠い昔の話よ。私、１０年もあそこを拠点にしたけど、一回も会わなかったわ。
それどころか無人島だったし」
「……ほっ」
「と、取り敢えず、合宿が存外平和そうなとこでよかったわぁ…」
「大丈夫よ。日程を立て直して別の敵性国家に行くことで対応するわ」
「うん知ってた！あははは…。はぁ……」
合宿にカウントされないのか。
結局のところ、覆らない地獄への招待状を前に、僕たちは力無くため息を吐いた。
「…さて。区切りもついたし、テレビでもつけましょ。
話してたら、１０年禁欲したの思い出してきちゃった」
「その見た目で年中発情期のオープンスケベだもんな」
「１０年もよく我慢できたよな。ウサギの５０倍くらい性欲強そうなのに」
「殴るわよ」
「殴ってから言っても…」
殴り倒され、犬神家のように地面に上半身が埋まった切島くんとかっちゃんを前に、
顔が引き攣るのを感じる。
今のはかっちゃんたちが悪い。

奥さんは地面から生える二人の尻を一瞥し、モニターにリモコンを向ける。
電源ボタンを押すと、オールマイトのアップが画面いっぱいに映し出された。
『では、不祥事続きの雄英高校に教師として入るのは、雄英教員、生徒共々に強い自覚を促すためなんですね？』
『それもあるけど、ほら！私もいい歳したオッサンだからね！
だから、この国の未来を背負って立ち上がる若人に、少しでも私の体験をダイレクトに伝えたい…と思ったのさ！』
オールマイトは言うと、「免許持ってないから、一年くらい勉強はするんだけどね！」と付け足し、白い歯を見せる。
生徒による猟奇的殺人事件、及び体育祭での敵の襲来という、特大級の不祥事が続いた雄英高校。
ＡＲＩＡが引き起こした魂の統合は、正気を保っていた僕たち以外は記憶がないらしく、あまり話題にならなかった。
襲来した怪人は、僕たちの体が戻った時にすでに死亡し、活動を止めていた。
魂のない肉体は、死体と変わらない。
父親へのせめてもの反抗だったのか、それとも、振り向いて欲しかったのか。
それは僕たちにはわからなかった。

しかし、そんな悲しい事情を知っているのは僕たちだけ。
世間からすれば、ＳＡＶＥＲが事件を解決に導き、雄英高校はヴィジランテに救われたと言う事実だけが見えている。
そんなこんなで、地に落ちかけた雄英のブランドは、再来年からオールマイトが教鞭を取るという情報により回復しつつある。
流石は国の信頼を繋ぎ止める象徴、と言ったところか。
…雄英限定販売のグッズとか出ないよね？
『成る程…。流石は平和の象徴。その目には、平和な未来が見えていますか？』
『もちろんだよ!!』
オールマイトが間髪入れずに答えるが、ふと、僕はある違和感を感じる。
正直なところ、僕は周囲の人間からドン引きされるレベルのオールマイトオタクである。
インタビューなんて録画ディスクが百を超えるし、なんならオールマイトの経歴やら公開されたプロフィール、皺の誤魔化し方など、細かい情報に至るまで暗唱できる。
だからこそ、オールマイトの『嘘を吐いた時の反応』も理解できた。
平和な未来が、平和を勝ち取ったオールマイトにも見えていない。
おそらくだが、オールマイトは『未来に関する何か』を知っている。

…この謎も、忘れられた島「オブリビオン」に訪れることで、判明するのだろうか。
「雄英、か。俺らは余裕だが…、切島、麗日。お前ら本気で受かれんのか？」
「が、頑張れば…、ワンチャン？」
「ワンチャンもねーわ１００位以下から脱してから言えやボケが」
「ボクも厳しいことを言いたくはないが…。
二人の成績だと、実技がよっぽど良くなければ落とされてしまうぞ？」
「……雄英って、実技重視だっけ？」
「学科が１００位以内じゃなきゃ、実技が主席でも問答無用で落とされるわよ」
「ヒーロー科厳しすぎん!?」
雄英志望の皆は大変だなぁ。
そんなことを思いつつ、僕は再び、手元にある写真に目を向けた。
「……個人的には、こういうところの散策はワクワクするんだけどなぁ」
廃墟になった校舎とか、誰もいない廃病院とか、小さい頃にかっちゃんと入って、二人ともギャンギャン泣いたっけか。
そんなことを思いつつ、僕は世界の真実が眠ると言う魔窟を、写真越しに見つめていた。

真実を知るバケモノ

「出久を止めない理由？」
「うん。イズクのお母さんが止めないっていうのが、なんだか不思議だなって」
突如訪れたＩＡとＯＮＥの問いに、緑谷引子が目を丸くする。
「いつの間にやらスケコマシになっていた息子が引っ掛けた女の子」としか捉えていなかったが、どうやら違うらしい。
引子は苦笑を浮かべながら、茶菓子をテーブルの上に置いた。
「本当は、止めたかったの。
顔中から血ィ吹き出したって聞いた時は、目の前が真っ暗になったし。知恵熱が止まらなかった時なんて、泣きながら『もうやめなさい』って何回も言った。
ＳＡＶＥＲなんて大物ヴィジランテだって、先生に聞かされた時は倒れそうになったわ」
引子が出久の活動について知らされたのは、あかりを引き取る前日。
鎌倉山を叩き割った真相とともに告げられた真実は、まさしく脳天を殴られたかのような衝撃であった。

と、同時に、納得もしていた。
自分が全てを知っていると暴露した日には、申し訳なさそうな顔で「ごめんなさい」と謝られた。
「…でも、なんでかしらね。
救われたあかりちゃんの笑顔があって、出久もすっごく笑うようになって。
『ああ、あの子はもう幸せなんだなー』って思っちゃった。
あの子に普通に暮らしてほしいとは、何回も思ったけど…。でも、それだとあかりちゃんが救われなかったのも事実なんだって、そう思うようになって。
苦しくても、いっぱい人を助けて、いっぱいの人に囲まれて、いっぱい笑える人生を送ってほしいって思うようになったの。
……子供ってね、ちょっと見ないうちに、すっごく大きくなっちゃうのよ」
引子は言うと、露が滴るグラスを二人の前に置き、向かい側に座る。
二人は注がれた麦茶を啜り、ふと、口を開いた。
「…私たちの知ってるイズクも、助けてくれるかな?」
「ええ。あの子、助けるって決めたら、死んでも助けるわよ」
♦?♦?♦?♦?
目の前に広がるディストピア。

文明が自然に飲み込まれ、人の繁栄などカケラも見当たらない大地を踏み締め、僕らはスーツ越しに見える光景に感嘆の声を漏らす。
「なんつーか…。異世界転生でもしたんかってくらいに幻想的な光景だな」
「世界樹の迷宮でこんな場所あったよな。
遺都シンジュク、だっけか」
「グラズヘイムとかの方が雰囲気的に合ってると思うなー」
「レトロゲーム談義で盛り上がるなよ。飯田、話題についていけてないだろ」
先生たちの前世だと、３ＤＳやらＳｗｉｔｃｈやらが最新ハードだったんだっけか。
僕たちからすれば、骨董品もいいところだが、リバイバル需要があるとかで小学生の頃に再生産されていた記憶がある。
轟くんも僕も、そのブームにいっそ悲しくなるくらいにハマってしまったんだけど。
話を振られた飯田くんは、「ふむ」と顎に手を当てると、苔むしたビル群を指差した。
「星のカービィディスカバリーの最初のステージも、こんな感じだったような気がするな」
「飯田もゲームとかやるのな…」
「兄さんがオフの日に『一緒にやろう』と誘ってくれるんだ。
プロヒーローって、事務所を立ち上げていたり、サイドキックが多かったりすると、な

かなかオフが取れないだろう？
　小さな頃、ボクのために休みを取ってくれた兄さんの膝に座って、一緒に古いゲームをするのが楽しみだったんだよ」
「羨ましいな。俺、赤ん坊の頃に一番上の兄貴に殺されかけたらしいから」
　轟くんのとんでもない暴露に、場が凍る。
　轟くんの家の家庭環境が地獄すぎる。そりゃあ技名に地獄の名前を付けたくなるよ。だって、地獄に生まれたんだもん。
　ヒメちゃんとミコトちゃんいなかったら、確実に変な捻くれ方してたと思う。
　当の本人はまったく気にしていないらしく、「どうした？」と不思議そうに僕たちを見やった。
「…にしても、先生ときりたんはなんでついてきたんだ？」
　と。轟くんが、最後尾にいる先生ときりちゃんへと目を向ける。
　二人は揃ってシガレットチョコを頬張りながら、胡散臭い笑みを浮かべた。
「そりゃ、気になるからですよ。
　僕たちの転生についても、なにかわかるかも知れませんし」
「気にしてたんだ…」
「してますよ、そりゃあ。何が悲しくてもう一回受験勉強と大失敗した就活をやらにゃ

あならんのですか」
「何が悲しくて、仮面ライダーもびっくりなトンデモパゥワーを持った小学生に混じっていじめられっ子やらにゃいけないんですか」
「ああ、そうだった…。あの授業、今でも続けてるんですか…？」
僕が問うと、きりちゃんは青筋を浮かべながら、先生を世界一可愛くない上目遣いで睨みつけた。
「ウナちゃんに被害はありませんでしたけど、私はバッチリ傷だらけですよええ。撮ってるんなら止めろやクソ教師」
「マシになってるかなーって期待を裏切られた僕の身にもなってください。
いつまでこの淡い期待を裏切られたらいいんですか。道徳倫理０点の連中が多過ぎますって、この世界。
Ｎｏ．２の家庭は地獄だし、無個性がクラスメイトにいるだけでクラスは地獄だし、そもそも政治関連が前世以上の地獄だし、どうなってんですかね」
どっちの気持ちもわかるのが辛い。
そんなやり取りをしながら、摩天楼が立ち並ぶ空間へと足を踏み入れる。
倒壊したビル群に、そこかしこから芽が吹き出すタイル。
あの観覧車といい、目の前にある植物が侵食した装置といい、所々折れたジェット

コースターといい、なんか見覚えがあるんだよな。
「…緑谷先輩。ここ、ｉ・アイランドそっくりじゃないですか?」
と。きりちゃんが僕の既視感をそっくりそのまま言語化したような意見を述べる。
そうだ。ｉ・アイランドに似ているんだ。
細かい部分は流石に違うが、雰囲気や立ち並ぶ建造物の並びは、去年のクリスマスに訪れた時と類似している。
こんな島が、どうして無人となって放っておかれたのだろうか。
フィクサーにとっても、少なからず利用価値はありそうなのに。
「似ているかどうかはこの際いいよ。
こんなに文明が進んでいて、なんで捨てられたんだろうって点が気になるかな。
フィクサーが拠点にしてたって言うくらいだから、彼にとってかなりの利用価値があるはずなのに」
「必要じゃなくなったからか…、それとも、ここに無くて、別の場所にある『何か』を見つけたのか…」
「ビルに入ったら、なにかしら記録が残ってないかな。バイオハザードみたくさ」
「流石に風化してるでしょうよ。これだけ植物が侵食してたら」
「それもそっか…」

さっきからゲームの話題しか出ないな。
そんなことを思いつつ、タイルに敷き詰められた草木を踏み越えていく。
足音が鳴るたびに、存在がこの異世界にほどけて溶け込んでいくような感覚が、細胞の一片に至るまで僕を包み込む。
社会から隔絶された空間に、神秘を感じているだけなのかもしれない。
と。先導していた奥さんが歩みを止め、手で僕たちを制する。
「つづみさん、どうかしたんですか?」
「…構えておきなさい」
奥さんの言葉に、僕たちは一斉に武装を展開し、臨戦体制に入る。
と。こつっ、ざっ、と、不規則な音が、こちらへと向かっているのがわかった。
僕たちが警戒を露わにしていると。
「おやおや。そうも殺気立たれては、この老骨、些か萎縮してしまいますな」
僕の頭上から、そんな声が響いた。
即座に裏拳を放つも、影は軽く飛び上がって拳を避け、距離を取る。
シルエットは人型に近い。
しかし、どこかちぐはぐでいて、歪な印象を受ける四肢が、ゆったりとした着物から覗いている。

顔は帽子とペストマスクで覆われ、その全貌はまるで見えない。
しかし、その佇まいや体のこなしから、相当の実力者であることは窺えた。
「テメェ、何者だ!!」
「ああ。恐ろしい、恐ろしい。
爆豪勝己様。あなた様はあいも変わらず恐ろしい虚勢を張り、焦り、怯えてらっしゃる」
「……っ!?」
驚愕が駆け巡る。
まずい。隙を見せてしまった。攻撃される。
僕たちは咄嗟に防御するも、予想したような衝撃は来なかった。
異形の者は、ただ真っ直ぐに僕たちに目を向けるだけで、敵意がないことが窺える。
奥さんも取り敢えず脅威はないと判断したのか、抜き身のナイフを鞘にしまった。
「あなた、何者なの？」
奥さんの問いに、異形の存在が薄く笑ったような気がした。
「あたくしの名は虚音イフ。ただの、『バケモノ』に御座いますよ」
♦？♦？♦？♦？
「ここには保存食しかありませんが、どうぞお寛ぎくだされ。

ああ、ご安心を。もともと住んでいた方の置き土産に御座います故、毒など入っておりませんとも」
「は、はぁ…。どうも…」
比較的、自然から生き残っている施設にて。
イフさんは優しい声音で言うと、テーブルを囲んで座る僕たちに、クッキーと紅茶を差し出す。
成分をスキャンしてみたところ、毒物らしい反応はない。
僕の隣では、そんな分析結果など知らないあかりちゃんが躊躇いもなく、並んだクッキーを手に取り、凄まじい勢いで食べていた。
「ふぉいひぃへふ！」
「…あかり様。もう少し、落ち着いてお食べなさい。
そんなに必死にならずとも、誰もあなた様の自由を奪うことはありません」
「……な、なんていうか、優しい爺ちゃんみたいだな」
「爺さんなどと…。人より長い時を過ごしておりますが、あたくしはまだまだ小童に御座いますよ」
確かに、好好爺という印象しか出てこない。
善性を装っているような気配もなく、本当に僕たちを歓迎してくれているのがわか

る。
　こんな人が、なんでこんな辺鄙な場所に暮らしているのだろうか。
　そんな疑問を抱いていると、イフさんは先生たちへと目を向けた。
「……なんです？」
「…失礼。『転生』という現象を、経験なさっておりますかな？」
「……やっぱり、この島に僕が２回も就活する羽目になった秘密があるんですね？」
「２回も小学生する羽目になった秘密を吐いてください」
「気にするとこそこなん？」
　二人がいると、なんか空気が締まらないな。
　そんなことを思いつつ、僕は保存されていた紅茶を啜る。
　お湯を注ぐだけのスティックタイプらしい、安っぽい味が口の中を蹂躙する。
　かっちゃんは音街家の影響か、紅茶に少しうるさくなっているらしく、少しばかり眉を顰めているのが見えた。
「ふむ、何から話しましょうな…。
　なにぶん、複雑怪奇極まりない話であります故、無駄に時間を食ってきたあたくしからすると、整理が難しいので御座います」
「あ、時間だったらあるんで、一から話してもらって結構です」

「では、そのように」
こんなお茶会みたいな空気で明かされる「世界の真実」って、一体…。
僕は引き攣った表情を浮かべ、クッキーを手に取った。

真実

「まずあたくしから言えることは一つ。
この星は、緑谷出久様。まさしく、あなたのための『舞台』なのです」
「それって、僕が漫画で言う『主人公』だから、ですか？」
「左様でございます」
イフさんの言葉に、僕は間髪入れずに問う。
かっちゃんは不満そうに「なんで俺じゃねぇんだコラ」と、僕の座る椅子の足をげしげしと蹴っている。
そういうところじゃないかなぁ…？
言ったら殴られるし、言わないけど。
イフさんは首肯すると、「わかっておられるなら話は早いですな」と付け足した。
「では、続いて。『時間は一方通行である』という事実はご存知ですかな？」
「……!?」
その情報に、がたっ、とあかりちゃんの腰が浮く。
セイカさんは今頃、スーパーでパートをしている時間帯なのだが、無理にでも連れて

きたほうがよかっただろうか。
そんなことを考えつつ、僕は飛び出した情報とこれまでの情報を擦り合わせていく。
あかりちゃんたちは第三次世界大戦の起きた一千年先のはるか未来から、この時代に逆行してきた。
イフさんから飛び出した情報を擦り合わせると、その認識の間違いの可能性が高い。
彼女たちは過去にタイムスリップしたのではなく、本当は『遥か未来に来た』のではないだろうか。
そんな想像を肯定するように、イフさんは告げた。
「…ご存知ないようで。
でしたら、こちらはご存知ですかな？」
――――『この地球』は、『７８兆６５９８億３６０８万１９３６個目の地球』であることを。
天文学的数字が合わさった情報に、全員が唖然とする。
そんな中で、想定外の情報に耐性でも出来たのか、全然動じていない先生が口を開いた。
「つまり、この星が『生誕から滅亡まで無限ループしてる』ってわけですか？」
「ええ。その通りで御座います」

スケールが大きすぎて実感はないが、不思議と納得はできる。
ＡＲＩＡ姉妹が勘違いするのも無理はなかったのかもしれない。
体験した人生は異なれど、細胞の一片に至るまで、完全に同一人物なのだから。
「では、何故『るぅぷ』しているのか。
それは…『とある方』の個性が関係しております」
イフさんは言うと立ち上がり、「こちらへ」と、僕たちに移動を促す。
彼が黒の翼で指すのは、唯一自然に侵食されていない扉。
僕たちがそちらに寄ると、扉は静かに動き出し、ゆっくりと開く。
そこにあったのは、ガラス張りのリフト。
ガラスの奥には、血脈のように光が流動する夥しい数のケーブルが、地下へと伸びている景色が広がっている。
僕たちが足を踏み入れると、がこん、と音を立てて、リフトが地下へと向かう。
「…これ、生命維持装置…、あとは、個性抑制装置、かな？結構大掛かりだけど…」
「左様に御座います」
軈て、ガラスに映る景色が、無機質な壁に遮られる。
幻想的とは言い難い、悍ましさすら感じる光景が目蓋に焼き付いているかのような、そんな錯覚さえする。

と。イフさんはあかりさんへと視線を向けた。
「ここに繋がれているのは、あかり様。
あなた様の『母』にあたるお方であります」
「……お母、さん？」
「ええ。それだけでは御座いません。
全ての人工個性生命体は、彼女を大元にしております。
無論、このあたくしも…ね」
つまりは、万年開花や永遠咲も、ここに繋がれている誰かの細胞が元なのだろうか。
あかりちゃんのお母さんって言うくらいだから、きっと優しい人なんだろうな。
そんなことを思いつつ、僕はふと呟く。
「娘さんを僕にください…なんて言うには、ちょっと早いかなぁ」
「こんな空気で惚気んなクソデク」
かっちゃんに殴られた。痛い。
そんなやり取りをよそに、音も立てずにエレベーターが止まり、扉が開く。
イフさんに促されるがままに通路に出ると、先ほどの死した文明が広がる光景から一転、研究施設のような殺風景な空間が広がる。
眼前には、厳重に閉じられた、重々しい扉が僕たちを待ち構えている。

あそこに、あかりちゃんのお母さんがいるのだろうか。
「…では、ご紹介致しましょう」
がこん、と音を立てて、幾重にも閉じられた扉が開放されていく。
真っ先に目に映るのは、巨大なビルのように聳え立つ装置。
液体で満たされたその内部には、ケーブルに繋がれた胎児のようなシルエットが浮かんでいるのが見える。
イフさんはそのシルエットを指し、口を開いた。
「彼女の名前は『結月ゆかり』。
『3個目』の地球にて、個性特異点として覚醒してしまった少女で御座います」
♦？♦？♦？♦？
遠く遠く、最早影すらも見えないほどの過去に生まれたゆかり様の人生は、悲劇に満ち溢れておりました。
ある個性により、1個目、2個目の記憶を引き継いだ悪の帝王…オール・フォー・ワンによって引き起こされた『第三次世界大戦』。
彼女が生まれた日は、まさにその戦火が世界を包み込んだ日だったのです。
友と遊ぶこともなく、誕生日を祝われることもなく、学びを得ることもなく。
ただ泥濘の底を生きるだけであった、そんな人生を10になるまで歩んでおられまし

た。
そんなある日。彼女は戦火に渦巻いていた悪意に巻き込まれ、語るも悍ましい傷を負ってしまったのです。
肉と骨の見分けすらつかないほどに損傷した傷を、元通りに治療したのは、無個性の医者でありました。
その名は『緑谷出久』。
『三人目』の彼は、悪の帝王の策謀により、オールマイトと出会わずして、ヒーローとなっていたのです。
彼女は人生ではじめて受けた愛に心を動かされ、半ば押しかけるように、世界を救う彼の旅へと同行しました。
あたくしが造られたのは『４回目』であります故、その旅路の詳細はわかりませんが、五年に渡った、とお聞きしております。
ですが。そんな日々は、長くは続きませんでした。
そう。彼女らをオール・フォー・ワンが襲撃したのです。
邪智暴虐の限りを尽くした悪の帝王。其れを前にして、彼らはあまりに弱かった。
それも無理はないでしょう。なにせ彼は、『オールマイトに力を託された緑谷出久』の活躍によって、野望を阻まれた記憶を有しております。

オールマイトに出会わなかった彼は…そうですな。『オリジナル』とも呼ぶべき緑谷出久の足元にも及びませんでした。
彼のあらゆる成長を否定し、ただ呼吸をするかのように常識を覆すその力は、最早ただの人間では足掻くことすらままならず。
結果。この緑谷出久は、四肢が爛れ、はらわたを抉られ…。世辞にも、『生きている』とは言えぬ姿と成り果てておりました。
それでもまだ微かに息のあった彼。
目の前で横たわる彼を前にして、彼女は絶叫と共に、自身ですら知らぬ個性を発動させた…。
それが悲しくも、3個目の世界の崩壊と相成ったのです。
彼女の個性は『ループ』。
直前の事情を繰り返すことを強いるだけの個性が、特異点となり暴走…。
場に居合わせたオール・フォー・ワンも、世界を救うほどの力を有したオールマイトでさえも、等しく世界を飲み込む奔流が、彼女を中心に巻き起こりました。
ですが…。奇跡的に個性の奔流から生き残った緑谷出久により、結月ゆかりの処置が施され、個性の奔流は止まりました。
ただ一つ。『個性によって滅びることが確約された地球を繰り返す』という条件と引

き換えに。

♦？♦？♦？♦？

「…とまぁ。この悲劇こそが、『るぅぷ』の始まりで御座います」

「つまり、地球はその『緑谷出久』を中心としたループによって繰り返されている、というわけですか」

「ええ。ただ、彼は『るぅぷ』の要因として存在するだけの人間となり、『緑谷出久』という主人公ではなくなりましたがね」

イフさんが言うと、皆の視線が一斉に僕へと注がれる。

この地球の主人公として生まれたのが、他でもない僕なのだろう。

彼の話を鵜呑みにするなら、僕とは別に、『ループの中心として生きている緑谷出久』が存在しているわけだ。

「…彼は彼女を救う方法を求め、足掻き続けました。

決して死ぬことの出来ぬ体を手に入れ。

自らの誇りであった善性を押し殺し。

あらゆる地球で、『緑谷出久』の壁として悪逆非道の限りを尽くしてきました。

全ては、結月ゆかりを救い、個性によって滅ぶ世界を救うことの出来る『緑谷出久』が現れることを信じて」

どくん、と心臓が跳ねた気がした。
欠けていたピースが、ピッタリとどこかにハマるような音がする。
その真実に辿り着いた僕は、わなわなと震え、その名を口にした。
――――フィクサーは、緑谷出久だった。
その言葉に、皆が目を見開く。
僕だって、にわかには信じられない。
僕たちが一斉にイフさんを見やると、彼はくっ、くっ、と喉を鳴らし、天を見上げた。
「成る程…。彼自身に聞かされたのではなく、自らここに辿り着いたのですか…。
成る程、道理で…。
今まで出会った緑谷出久よりも、はるかに年若く、大所帯であるわけですか…」
「この島のことは、先日サードインパクトみたいなことやらかしかけた宇宙人から聞いたんですよ」
イフさんの口ぶりから推測するに、ここに辿り着いた『緑谷出久』は、過去に何人か存在していたということか。
今までの情報を鑑みると、フィクサーは僕…いや。『緑谷出久』そのものに固執していることがわかる。
いくら『緑谷出久』が世界の主人公だとして、そこまで固執する理由って何だ？

考察するのに夢中な僕に変わって、先生が答える。
「…その『さぁどいんぱくと』とやらはよく分かりませぬが…。
心当たりはありますな。
彼女らをここでもてなしたのは、もうどれほど前のことで御座いましょうか…。
なにぶん、あたくしは無駄に年月を過ごしてきたもんで、時間の間隔が曖昧なのでさぁ」
「ＡＲＩＡ姉妹のことも知ってるんですか？」
「ええ。一時期、この『あい・あいらんど』に滞在しておりましたとも」
「やっぱここ、ｉ・アイランドなんですね」
「ええ。地球が崩壊した際に、星から島ごと脱出できる機能付きで御座います」
新しい情報がポンポン出るな。
どこか他人事のようにそんなことを思いながら、僕は考察を広げていく。
と。隣にいたかっちゃんの足が、僕の弁慶の泣き所を捉えた。
「あだぁっ!?」
「ブツクサうっせぇ。ちったぁ静かにしろ」
「いたた…。声に出てた？」
「無自覚かよ…。話が入ってこねーから口にガムテーム貼ってろ」

「そんなレベルで!?」
もうちょっと気をつけるべきかなぁ。
じんじんと痛みを訴える足をさすりながら、僕は広がる可能性に、開きそうになる口を無理矢理に閉じる。
そんな様子を見て頭痛がしたのか、かっちゃんがこめかみを押さえるのが見えた。
「取り敢えず、ループについては分かりました。
『転生』については…」
そうだった。まだ、先生たちの『転生』について、秘密が残っていたんだった。
僕としては、二度目の人生を送っていようがなかろうが、先生は「大事なことをたくさん教えてくれた先生」だから、どうでもいいんだけど。
こんなことを面と向かって言っても、茶化されるのがオチなんだろうけど。
「ソレも単純なことです。
結月ゆかりは、緑谷出久を永遠に生かすべく、星一つを生贄に捧げた。
では、その生贄には、『誰』が含まれていましたか?」
「……あっ!?」
きりちゃんが声を上げる。
結月ゆかりが取り込んだ星の中には、『一度目、二度目の人生の記憶を個性によって引

き継いだ悪の帝王』がいた。
「ええ。…悪の帝王が宿していた全ての個性は、彼女の個性に食い尽くされた。
しかし。たった一つだけ、食われずに共存できた個性があったのです。
その名は『引き継ぎ』。前世の記憶を引き継げる個性です。
…それが、個性特異点と混じり合ったことで変質し、不規則に発生するようになってしまった…というのが、『転生』の真相で御座います」
「…つまり、前世の僕たちが生きていた世界は、『《僕のヒーローアカデミア》が漫画だった世界』ではなく。
『個性発現の預言書として、《僕のヒーローアカデミア》という漫画が描かれた世界』…というわけですか?」
「左様で御座います」
イフさんの言葉に、先生ときりちゃんが深いため息を吐く。
成る程。先生たちが言った『決められたレール』から外れまくるわけだ。
出揃った情報は、あまりにスケールが大きく、受け入れるのに時間がかかる。
あまりの情報量を前に、脳がパンクしてしまいそうだ。
僕は頭痛から目を背けるように、母親を見上げたままのあかりちゃんへと目を向ける。

その顔は何を思っているのか、ひどくもの悲しく、淋しげだった。
「……あかりちゃん」
僕が声をかけようとした、まさにその時。
イフさんの皺がれた手が、僕の手を掴んだ。
「イフさん…？」
「この地球の緑谷出久様。
全ての真相を知ったところで、ご決断頂きましょうか」
イフさんはガラスの奥にある何処までも無機質な瞳で、僕を見つめる。
背筋が凍る、などと言う表現では表せないほどの、緊迫感が僕の体を包み込む。
ぞあっ、と冷や汗が噴き出ると共に、毛穴が一つずつ閉じていく感覚さえ伝わってくる。
動悸が早まる。彼から目を離せない。
僕がスーツを纏い構えを取ると、イフさんは告げた。
「この世界を救うお覚悟は、出来ておりますかな？」
「もう、とっくに!!」
あかりちゃんを救った時から、ずっと。
悍ましい気を発する彼に負けないように、僕は震えようとする体を無理矢理に押さえ

つける。
「……良き覚悟です。では、まずはこの方との決戦に臨んでいただきましょう！」
イフさんが翼を広げると、機械に囲まれた空間が一変、僕だけが暗闇に包み込まれる。
気が狂いそうな程に真っ黒な世界。
その中に、一人の人影が立っているのが見えた。
「……やぁ、はじめまして」
「……僕？」
緑のヒーローコスチュームに身を包んだ、僕とは似ても似つかない筋肉質な体。
しかし、僕のトレードマークであるそばかすと縮毛が、目の前の存在が『緑谷出久』であると訴える。
「彼はあたくしが取り込んだ『１０個前の主人公』…。
オールマイトから個性を受け継ぎ、悪の帝王を倒してみせた『一個目』の彼に限りなく近い『緑谷出久』で御座います。
まずは、彼を超えてもらいましょうか!!」
イフさんの言葉と共に、黒の奔流が僕へと襲いかかった。